

---

# テンプレ通りに進めたい

嘴広鴻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テンプレ通りに進めたい

### 【Nコード】

N2195R

### 【作者名】

嘴広鴻

### 【あらすじ】

欲しいもの？ 平穩です。

テンプレ？ いいじゃないですか、テンプレ通りに進めたいんですよ。

ネギに転生することになりました。

しかし、神さまにわがままを言ったためにちよつと違うこと……。

この作品は「我がスプリングフィールドの魔法はアアアアアアア

アア、世界—イイイイイイ！—」の提供でお送りします。

第一章『魔法先生ネギま？』編完結しました。

続けて第二章『魔法先生ネギま！』編に進みます。

## プロローグ1

それは剣と言つにはあまりにも大きすぎた。

大きくぶ厚く重く、そして大雑把すぎた。

それは正に鉄塊だった。

目覚めたら真っ白い空間にいて、目の前に馬鹿デカイ剣があった。  
何ですか、この状況？

「あなたには転生をしてもらいます」

ちよつ、剣が喋った？

ますます何ですか、この状況？

それなりに二次創作とか見てるけど、

この状況で出てくるなら“ゼウス”とか名乗る神様とかでしょう。

「テンプレ通りならつまらないと思って」

そんな気遣い結構です。

というか転生先はベルセルクの世界ですか？

ごろごろ死亡フラグが転がっているからすぐ死にそうなんです？

「いやいや、違うよ。

この剣は私の趣味。ベルセルク関係はもう出てこないと思うよ。

転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。

しかも主人公の“ネギ・スプリングフィールド”になってもらいます」

“ネギま”、ですか。

知っていますけどB K FFの立ち読みですし、就職してからは漫画から遠ざかっていたから、大まかな流れしか覚えてないですね。

それよりあれですか？ 転生するにあたって何か特殊能力とか貰えるんですか？

「それはもちろん。条件というか無理なこともあるけど」

条件？

「自分はあまり力がないからね。

強すぎる力を与えられないってのがまず一つ」

えーと、それはつまり“無限の魔力”とか“アカシックレコードへの接続”とかそんなのですかね？ あとは“創造の力”とか？

「そんな感じで捉えてもらえば大丈夫」

了解です。神様みたいなチートすぎる能力は無理なのか。  
まず一つってことはまだあるんですね。

「うん、もう一つが先輩方が他の人たちに与えた能力は無理ということ。」

それとあなたがこの時点で知らない能力も駄目」

……………先輩方？ 他の人たち？

なんか嫌な予感がするんですが、一体どういふものですかね？

「そのままの通りの意味だけど？

二次創作見てんならわかるでしょ？」

「すみません、思いつきり嫌な予感が増大したんですけど。具体的にいうとどうというのが駄目なんですかね？」

「あなたの知っているものだけでいいかな？」

「漫画でいうと“ドラえもん”と“ドラゴンボール”と………（省略）………ロボット系は“スパロボ”に出てくるのは全部駄目というので」

「駄目ということ、じゃないでしょうか？」

「こんな縛りでどういう能力を貰えばいいんですか？」

「他の人も使わないようなニツチな能力を知つとけば良かったのに。色んな本を読まないからだよ」

「………何で自分のせいにされるんでしょうか？  
というかこの縛りで一体自分にどうしろと？」

「テンプレ通りならつまらないと思って」

「そんな気遣い結構です。」

「どんな能力ならOKなんですか？」

「さっきから疑問符ばかりだね、あなたは。」

しょうがないあ……………。えーと、これなら先輩方も渡してないかな？」

お、能力貰えるんですか。

この際どんな能力でもいいから貰えるものは貰いましょう。

「もやしもん」

……………は？

「だから、“もやしもん”の能力。

“菌やウイルスが肉眼で見え、指で掴んだり、会話することも出来るという不思議な能力”（ウィキペディアより）」

……………もう少し考えさせてください。



## プロローグ1（後書き）

続けてプロローグ2と第一話を投稿予定です。  
能力はもやしもんでありません。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## プロローグ 2

というわけで能力は“ガンダムUC”のMSモビルスーツの再現ということ  
をお願いします。

あ、もちろんビームライフルとかの武器も使用できるようにして  
くださいな。

ニュータイプじゃないですけどファンネルも使用可能で願  
います。

「いやいや、それは駄目だよ。

ガンダム使っている人いるよ」

何を言ってるんですか。

ロボット系はスパロボに出てくるのは駄目と言われただけですよ。  
ガンダムUCはまだスパロボに参戦していません。

ルール違反してるわけじゃありません。

それにガンダム“UC”を使っている人はいないでしょう。

「えー、確かにそうみたいだけど。

あなたアニメ版でしか知らないでしょう?」

いいんですよ、それで。  
じゃあオツケイということ。  
そういうことにしてくださいよっ！

「テンプレ通りならつまらないと思わない？」

まったくもって思いません。

テンプレ通り、良いじゃないですか。

王道こそが至高の道ですよ。

というかそういう茨の道は他の人に任せてください。

「……………面白くないなあ」

あなたを楽しませるためにいるんじゃないやありません！

「……………ま、いいか。」

あとはこっちでなんとかしましょうっ

あれ？ 意外とあっさりOK貰えた。

てつきり駄目だと言われると思ったのに。

「いや、ちゃんと私は駄目だと言ったよ。  
まあ、確かに私の説明ミスもあったからさ。  
テンプレ通りならつまらないと思うけど」

ふう、何とかなったか。  
でも、よくよく考えたらもやしもんの能力でも良かったかな？  
魔法薬作るのに役立つかもしれないけど……。

いや、初志貫徹だ。ベルセルクの世界よりはマシだとはいえ、死亡フラグは主人公なら赤松ワールドでも結構あるんだ。  
戦闘に役立つ能力でなければ。

「……………確認するよ。」

転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。  
転生するのは“ネギ・スプリングフィールド”<sup>モビルスーツ</sup>。  
与える能力は“ガンダムUCのMSの再現能力”<sup>モビルスーツ</sup>でいいんだね。  
それと“完全魔法無効化能力”もあげるよ。説明ミスのお詫びだよ。

大丈夫、ちゃんとモビルスーツの再現能力と組み合わせると違和感がないようにするから」

いいんですか？ 太っ腹ですねえ、ありがたく頂戴しておきます。  
それで全部OKです。

「ガンダムUCのMSモビルスーツの再現能力”については後ほど設定でも投稿してください。

「メタな発言はやめなさい。

弐集院先生に転生先変えるよ」

「すみません、もうしません。

「なら早速転生してもらいましょうか。

それと最後に聞きたいことがあるんだけど」

「なんででしょうか？」

「テンプレ通りならつまらないと思わない？」

「……………まったくもって思いません。

「あ、何か目の前が真っ暗になってきた。

## プロローグ2（後書き）

“ガンダムUCのMSの再現能力”  
モビルスーツ

……ぶっちゃけあまり役に立ちません。

ただミネバ様がかわいかったから使いたかっただけです。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 設定

神さま？から貰った能力

“「ガンダムUC」のMSモビルスーツの再現能力”

再現といっても10m以上のMSモビルスーツを再現するものではありません。

高音・D・グッドマンの影の使い魔のように、体の周囲に魔力を纏って装甲を作って再現します。

ビームライフルなどの武器は“魔力弾”、“完全魔法無効化弾”、“武装解除弾”などを撃ち出します。

クシャトリヤのファンネル、ユニコーンのNT-Dニュータイプ・デストロイヤーなどの特殊武器・システム以外は全機共通に使用可能。

メリットとしては攻撃・防御・移動も全て無詠唱でモビルスーツでまかなえること。

デメリットとしてはモビルスーツ展開中は他の魔法が使えないこと。

再現できるMSモビルスーツは

RGZ - 95 リゼル  
NZ - 666 クシャトリア  
MSN - 06S シナンジュ  
RX - 0 ユニコーンガンダム  
MSN - 001A1 デルタプラス

再現するには始動キーのあとにMS名モビルスーツを入れる

☐ラス・テル マ・スキル マギステル

☐

Fate風ステータス（通常状態ネギをランクEとして基準）  
お遊びなので大体こんな感じとして考えてください。

リゼル  
筋力 D  
魔力 C  
耐久 D  
敏捷 C

リゼル（変形時）



ユニコーンガンダム

特徴：単純に強い

シナンジュ  
筋力 B  
魔力 B  
耐久 B  
敏捷 A

特徴：ファンネル使用可能

クシャトリヤ  
筋力 B  
魔力 A  
耐久 A  
敏捷 D

特徴：下位変形可能機

筋力 E  
魔力 C  
耐久 E  
敏捷 C + (直線運動のみ、細かい動きはランクE)

筋力 B  
魔力 B  
耐久 B  
敏捷 B

ユニコーンガンダム（ニュータイプ・デストロイヤー）（NT-D発動時）

筋力 B+  
魔力 EX  
耐久 B  
敏捷 EX

特徴：NT-Dシステム使用可能  
ニュータイプ・デストロイヤー

デルタプラス

筋力 C  
魔力 C  
耐久 C  
敏捷 B

デルタプラス（変形時）

筋力 D  
魔力 C  
耐久 D  
敏捷 B+

（直線運動のみ、細かい動きはランクE）

特徴：上位変形可能機

武器・システム性能

バルカン砲

一発が『魔法の射手』の1割弱程度の威力  
防御せずに当たると痛いのが、逆に言えば防御したら簡単に防げる  
威力

連射性は良いが威力が弱いので、牽制ぐらいにしか使えない

ビーム・ガトリングガン

一発が『魔法の射手』の5割程度の威力

「いいぞ、ベイバー！」

逃げる奴は“完全なる世界”だ！！

逃げない奴はよく訓練された“完全なる世界”だ！！

ホント魔法世界は地獄だぜ！ フウハハハハアアー！！！！」

と叫んでぶっ放すのが吉

ファンネル

一発が『魔法の射手』と同程度の威力  
クシャトリヤでのみ使用でき、視認可能範囲以内なら遠隔操作が可能

#### ビーム・ライフル

一発が『魔法の射手』の3倍程度の威力  
当たり所がよければ一撃で相手を倒すことが出来るくらい  
『魔法の射手』の威力が右ストレートなら、ビーム・ライフルは後回し蹴りくらい

#### ビーム・ランチャー

一発が『魔法の射手』の5倍程度の威力  
ロング・ビーム・サーベルとしても使用可能

#### ハイパー・バズーカ

榴弾式だと一発が『魔法の射手』の5倍程度の威力  
散弾式だと一発が『魔法の射手』の1割強程度の威力

他にも煙幕式や対エヴァ用の花粉式などもあり

#### メガ・ビーム・ランチャー

一発が『魔法の射手』の10倍程度の威力  
ただし、銃自体が大きく、扱いづらい  
ガンダムUCでは後述のビーム・マグナムと同程度の威力

ビーム・マグナム

ガンダムUCでは前述のメガ・ビーム・ランチャーと同程度の威力

この作中では、専用の“マグナム弾”に魔法を詰め、それを撃ちだす

要するに“魔弾銃”

詰められた魔法が強いほど貯めが必要で、連射性が落ちる

『魔法の射手』なら貯めは必要ないが、『雷の暴風』クラスなら1秒近く必要

だが、逆に言えば『雷の暴風』クラスの魔法を1秒で連射できる

他にも『雷の暴風』クラスの魔力を詰めた“武装解除弾”なども作成可能

ニュータイプ・デストロイヤー

NT-Dシステム

マギステル・マギ・デストロイヤー

作中ではMM-D

ガンダムUCではニュータイプを感知しないと起動できないが、作中では任意で可能

リミッターを外し、超高機動戦闘が可能

発動時には、相手の誘導弾・自動操縦式使い魔などのコントロールを奪える

自動操縦式使い魔のコントロールは高音・D・グッドマンの影の使い魔を例にとると

高音本体と接触しているタイプ

コントロール奪取NG

高音本体と接触していないタイプ

コントロール奪取OK

これらはウィキペディアと自身の妄想を参考に作りました。  
とうるかシナンジュってバルカンついていたんですね。  
クシャトリヤの出力はユニコーンやシナンジュの5倍ぐらいある  
のか……………。

そしてNT-D発動時のユニコーンの出力と推力が測定不能W  
そこにシビれる！ あこがれるウ！

# 3/20、「ガンダムUC episode3：ラプラスの  
亡霊」 観劇後に修正・追加しました。

# 5/17、よく調べたところ、スタークジェガンがガンダム  
UCの初出ではなかったので使用不可としました。

# 5/20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第一話 悪魔襲撃の日

こんばんは。

ネギ・スプリングフィールドに転生した×××××です。

前世の自分なんてもうどうでもいいですけどね。

悪魔に村を襲撃されました。

ドカンドカんと音が響き、悪魔がどんどんと消し飛ばされています。

余波の衝撃波とか飛んでくる石とか酷いです。物陰に隠れないと危険ですね。

魔法ってのは凄いですねえ。

自分もそのうち使えるようになるかもしれないと思うだけでわくわくします。

さて、簡単に悪魔襲撃までのことをご報告しますと、

原作との違いは自分がナギを強く求めていないってことぐらいでしょうが。

会ってみたいとは思いますがね。

普通に遊んで、普通に魔法の勉強して、普通に暮らしていました。池で溺れたりしてません。

スタン爺さんはいい人ですね、ぶっきらぼうだけど。悪魔に対する備えとかは特にしませんでした。

自分の力はまだ把握できていませんですし、未来がどう変わるかわかりませんでしたから。

ただ、スタン爺さん達が石にされると思うと黙っていることに罪悪感がわきましたね。

だからスタン爺さんの肩を叩いたりして祖父孝行してました。只の自己満足でしかありませんが。

そして悪魔襲撃の日。

スタン爺さんが自分を庇って石にされました。

そしてヘルマン卿が自分を石にしようとしています。

マズった。原作とは流れが違う。自分が原作のネギとは違う生活をしているせいか。

原作の細かいところなんて覚えてないですよ。



「ネギツ!!」

あ、ネカネ姉さん。

原作では助かったはずのネカネ姉さんまで石にされる。

神さま？（というか結局あの剣誰なんだ？）に原作知識もくたさ  
いと頼んどけば良かった。

そうすればこんな展開にならなかったのに。

転生だ、ヒヤッホイなんて浮かれてた自分が情けない。

「『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス  
雷の暴風』ツ!!!」

.....。

.....。

.....は？

ネカネ姉さん何してるんですか？  
無詠唱の『ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンス雷の暴風』ですか？

ヘルマン卿が吹っ飛ばされたんですが？

「大丈夫っ！？ ネギツ！？」

いえ、大丈夫です。助けられてありがとうございます。スタン爺さんは石になってますけど。

………ではなくて何でネカネ姉さんがあんな強力な魔法を？  
何ですか、この状況？

「安心して、私が守ってあげるから。  
二代目“千の呪文サウザンドマスターの女”の名は伊達じゃないわ」

………どうしてこうなった？  
待て待て待て、本当にどういふこと？

.....。

.....。

.....はっ！？

思いだせ、あの神さま？の発言を。

### プロローグ1

> 「いやいや、違うよ。

> この剣は私の趣味。ベルセルク関係はもう出てこないと思うよ。

> 転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。

> しかも主人公の“ネギ・スプリングフィールド”になっても  
らいます”

### プロローグ2

> 「.....確認するよ。

> 転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。

- > 転生するのは“ネギ・スプリングフィールド”。
- > 与える能力は“「ガンダムUC」のモビルスーツの再現”

#### プロローグ1

- > 転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。

#### プロローグ2

- > 転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。

後になって「並行」が付け足されている!?

じゃあ何か？ この世界は原作とは違うってことか？

無理矢理“ガンダムUCのMSの再現能力”なんて貰ったせいモビルスーツか？

“完全魔法無効化能力”なんてものをタダでくれることに疑問を持つべきだった。

オマケを貰った嬉しさに「並行」なんて言葉が付け足されていることに気付かなかった。

そんなつまい話があるわけないのに……。

嫌がらせのつもりか、あの神さま？は。

いや、面白くするためなんだろうなあ。

……どろどろっ

「我がスプリングフィールドの魔法はアアアアアアアアア、世界  
——イイイイイイイ——」

……ネカネ姉さんが壊れた。

いや、自分が知らなかっただけで既に壊れていたのか。

あ、音と光の発生源がもう一つ増えた。ナギが参戦したのか。  
うわあ、悪魔が可哀想になってきたよ。

飛んでくる石つぶてを避けるため、石になったスタン爺さんの陰  
に隠れ、これからどうしようかと考えます。

……どうしようもないな、うん。

後のことは流れに任せるしかない。

ガンッ！！ ドサッ！！

ん？ 一際デカイ音がして何か地面に落ちた音が。

って、ちょ、髭が折れてる！？

石になったスタン爺さんの髭が折れてる！？

もうやめて！ ナギもネカネ姉さんももうやめて！

スタン爺さんと悪魔のライフはもう0よ。もう勝負はついたのよ  
！

## 第一話 悪魔襲撃の日（後書き）

書き溜め分これにて終了です。

以後の更新は不定期です。

作者は二次創作初体験です。

御意見・御感想お待ちしております。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第二話 メルディアナ魔法学校での日々

こんにちは、ネギです。

あの後ナギは二言三言の言葉を交わし、杖を置いて何処かにいきましました。

その間自分は折れたスタン爺さんの髭とネカネ姉さんの豹変振りにガタガタと震えているだけでした。

大人達は悪魔のせいだと思ってましたが……………。

やっぱりこの世界は少しばかり違っていきます。

アーニヤのご両親は無事でした。

それでもスタン爺さんを含め結構な犠牲者が出たみたいです。

そのために避難も兼ね、早いですが魔法学校に入学しました。

原作通り2年の飛び級をし、一応主席として頑張っています。



転生前は大人でしたし、このネギ・スプリングフィールドの体がチートみたいなものですからね。

優秀な体でよかった。前世の体ならついていけなかったですよ。そして今は魔法の実技練習中、ネカネ姉さんが見本を見せてくれます。

「スプリングフィールドは！！！！ 地上最強オオ！！！！」

あ、相手役の先生吹っ飛んだ。  
いつものことですね。

何だかネカネ姉さんは戦闘関係になると性格が変わるそうです。  
悪魔襲撃の日まで自分は戦闘関係に関わっていなかったから気付  
かなかったんですね。

ネカネ姉さんはメルディアナ魔法学校の非常勤教師兼NGOをし  
て暮らしています。

聞いたところによると何でも“千の呪文の女”サウザンドマスターとして大活躍とか  
テロリスト（多分“完全なる世界”）をバツタバツタと薙ぎ倒し  
ているそうです。

………もしかして、村襲われたのネカネ姉さんのせいじゃね？

そうそう、畏にかかっていたアルベール・カモミールのカモ君なんです。原作と性格は違いますでした。

原作と変わらないのはスタン爺さんに続いて二人目？だ、と喜んでいたんですが、周りが違っていろのを失念していました。

具体的に言つとネカネ姉さん。

度重なる下着ドロにぶちぎれたネカネ姉さんは、カモ君をどこかに連れて行きました。

そして帰ってきたカモ君にはナニが無くなっていました。

……………去勢されたようです。無茶しやがって。

今度からはカモ君ではなくアルちゃんと呼びなさい、とネカネ姉さんに厳命されました。

「ネギ、今日の授業はこれで終わりよ。帰りましょう」

イエス、マムッ！！！！

お願いですから、その頬についた返り血を拭ってください。

「ネギ、今夜も石化治療薬の実験？」

あなたの気持ちもわかるけど、ほどほどにしないと駄目よ」

大丈夫、無理なんてしてません。

実験中はネカネ姉さんも控えてくれるから逆に気が楽です。

でも学校の禁書庫の本も全部読んだしなあ。正直手詰まりです。

麻帆良の図書館島に望みを託します。

あ、禁書庫は見てみたい、とネカネ姉さんに相談したらその日のうちに許可を貰ってきてくれました。

学校長が痔の手術とかの名目で一週間ほど入院しましたがね。

復帰した学校長は何故か総入れ歯になってました。痔の手術じゃなかったようです。

……ま、些細なことでしょう。

「ネギ、ネカネ姉さん」

あ、アーニヤ、…………とアルちゃん

…………えーと、そのリボンかわいいね。アルちゃん。

「はい、ありがとうございます。お兄様」

「でしょー、アルちゃんに似合うと思って買ったのよ」

この一人と一匹は仲が良いです。アルちゃんは一応自分の使い魔のはずなんです。

最初アーニヤは毛虫のごとくカモ君を嫌っていました。

しかし、カモ君がアルちゃんになって、ネカネ姉さんの調教が終わってからは急に仲が良くなりました。

何でしょう、この違和感を感じないはずの空気なのに感じてしまう違和感は。

ああ、自分が原作を知っている転生者だからですね。

スタン爺さんに逢いたいなあ。すぐ逢いたいなあ。石化治療薬早く完成しないかなあ。

アーニヤは原作よりはお淑やかに育ってます。ご両親が無事だったせいですかね。ツンデレなのは相変わらず変わりませんが。

「もうすぐ卒業ね」

そうだね、アーニヤ。  
卒業試験はどうなるんだろうね。

……やっぱり麻帆良で先生するのかなあ。原作キャラには興味があるけどキャラ崩壊がどうなっているのか不安だ。  
全員男だったらどうしよう……。

いや、そんなことはあるまい、皆少しずつ変だとはいえ、そこま  
で極端な原作との乖離はあるまい。

この前ウェールズに来たタカミチ本人に確認したところ、タカミ  
チが女子中学校の先生をしているのは確かなんだ。

タカミチはタバコを吸っていないのが原作との違いでした。他に  
もあるかもしれないけど数回会っただけじゃわかりません。

麻帆良の図書館島には行きたいけどキャラ崩壊を見るのは嫌です。  
まあ、卒業試験内容を変えるなんて無理でしょうけど。

……ネカネ姉さんに頼めば出来るかもしれませんが。

“闇の福音”<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>対策に今からマグナム弾を貯めとかなきゃ。

マギステル・マギ・デストロイヤー  
学園結界があるならMM・Dシステムで何とかなるでしょう。

## 第二話 メルディアナ魔法学校での日々（後書き）

何でカモ君は“アルベール”ってフランス風な名前なんですかね？  
イギリス風なら“アルバート”なのに。  
フランス出身？

# 3 / 2 0 修正しました

# 5 / 2 0 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第三話 卒業 これからのこと

こんにちは、ネギです。

只今メルディアナ魔法学校卒業式の真っ最中。

ちなみにちゃんと主席でした。

学校長の話が長いです。

さて、修行内容が麻帆良学園本校女子中等学校で先生になると  
いうことを前提にこれからのことを考えましようか。

これから起きる大きな事件としては、

- 1 ・期末テスト
- 2 ・桜通りの吸血鬼事件
- 3 ・京都修学旅行



4・ヘルマン卿襲撃事件  
5・麻帆良学園祭

といったところですね。

その後の“魔法世界編”は最悪の場合、そもそも魔法世界に行かない方がいいんですから、“5・麻帆良学園祭”が終了してから考えましょう。

そんな先のこと考えてもその前に躓くかもしれないし、なるべく情報を多く手に入れてから考えるべきです。

さて、“1・期末テスト”は問題ないですね。

ちゃんと勉強させておいて、最下位だったら自分がクビになって新田先生が新しい担任になるかも？とか言ついたら勝手に頑張ってくれるでしょう。

2・Aは真面目にやらないだけで潜在能力はありますからね。…

…キヤラ崩壊さえしていなければ。

日本語の勉強は終了済みなので、原作より早く行って実際に2・Aの人達を見てから細かいことを決めましょうか。

“2・桜通りの吸血鬼事件”はどうしましょうかね。

二次創作のテンプレ通りならば、事前にエヴァさんと取引するなりして身の安全を保障して貰い、尚且つエヴァさんとの繋がりを作っておく、といった所でしょうか。

もしくは学園長にチクるか。ああ、それとナギの情報をエヴァさんに売りますか。

一応戦闘になる可能性を考えて、『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ雷の暴風』クラスの魔力を込めた、ユニコーンガンダムのビーム・マグナムのマグナム弾を100個ほど、一日の最後に余った魔力を込めてシコシコと作製してきました。

この貰った能力で一番使えるのはエネルギーパックを作れることですね。

もし戦闘になったら油断している内にMM-Dマギステル・マギ・テストロイヤ発動させて、速攻で最大火力を御見舞いしましょう。

おそらく何とかなるはず。

まあ、エヴァさんの“女子供は殺さない”というポリシーからして死の危険はないですから。

タカミチ辺りからエヴァさんとナギの関係を聞いておいて、

「タカミチから聞きました。女性にそんなことするなんて最低な駄目親父です。

駄目親父がしたこと責任は僕がとります。

どうぞ僕の血を吸って呪いを解いてください」

とか土下座しながら謝れば、きっと命だけは助けられるでしょう。

むしろ庇護対象としてみてくれるかもしれません。あの人なんだ

かんだいって甘いし。

ネカネ姉さんという核地雷が近くにあるせいでフェミニストとして有名になりましたから、動機としては変に思われなんでしょう。

タカミチも知ってることですからね。

戦闘は最後の手段です。平和的な方法を考えましょう。

“3・京都修学旅行”は出来れば“2・桜通りの吸血鬼事件”の際に、エヴァさんの『登校地獄』と『インフェルナス・スコラスティックス学園結界』を解除して貸しを作っておき、その縁で手伝ってもらうのがいいんですが。

でも、この旅行は死亡フラグ満載で嫌なんですよねえ。

エヴァさんいないと原作ではネギ死んじゃってたろうし。

これは“2・桜通りの吸血鬼事件”の結果次第ですか。エヴァさんとの関係が良好なら原作通りで行きましょう。

…… エヴァさんとの関係が悪かったら、木乃香さんには申し訳ありませんが病気にでもなってもらいましょうか。

木乃香さんがいなければ危険度はガクッと下がるでしょう。

魔法薬の成績はメルディアナ魔法学校史上最高の成績です。一週間ぐらい寝込ませる薬なんて簡単ですよ。

いっそのことクラス全員を寝込ませて修学旅行を中止させますか。

テンプレ通りに進めたい、そう考えていた時期が自分にもありま

した。

木乃香さん、あなたはいい人なんでしょうが、あなたの父上と祖父上がいけないのですよ。

“4・ヘルマン卿襲撃事件”は“3・京都修学旅行”の結果次第ですね。

というか、ヘルマン卿ってネカネ姉さんに吹っ飛ばされたあとに封印されたとは聞いてないんですが、その後どうなってるんでしょうか？

魂ごと消滅させたとか言われても、ネカネ姉さんなら不思議じゃないんですが。

あとで確認しておきましょう。ついでにネカネ姉さんに注意しておいてもらいましょう。

まあ、ヘルマン卿じゃないのが襲撃してくる可能性もありますけどね。

とはいえ原作の目的はネギと明日菜さんの実力調査ですし、修学旅行のときに明日菜さんがフェイトに知られず、エヴァさん無双で自分の影が薄ければ来ない可能性のほうが高いですね。

“ 5・麻帆良学園祭 ” はどうしましょう？

学園祭中は超さんと葉加瀬さんには入院してもらいますか。何か  
それが一番手っ取り早い気がしてきたな。

というか考えがドンドン物騒になってきてませんか、自分？

オコジヨにされるのも嫌ですしねえ。

1と3と5は日付が決まっていますから、向こうで出来た生徒や先  
生達との関係を踏まえて考えましょう。

それからでも遅くないです。

まずは“ 2・桜通りの吸血鬼事件 ” 解決に全力を注ぎましょう。

あの事件が今後どうなるかの山場です。

あ、ようやく学校長の話終わった。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ ネギ・スプリングフィール

ド」

さて、卒業証書貰いに行きますか。

「卒業おめでとう、ネギ、アーニヤ」

「おめでとうございます。お兄様、アーニヤお姉様」

ありがとうございます。ネカネ姉さん、……………アルちゃん。

これからが大変ですけどね。

どういう修行なんでしょう？

えーっと、なにに？ “日本の学校で教師をやること”、だそ  
うです。

……………原作通りですか。

最悪アリアドネーとかメガロメセンブリア逝きを考えていました  
からね。

それに比べたら問題ありません。

「なんですってえー！ー！！！」

うお、ビックリした。

アーニヤ、そんな大きな声出さなくても。

確かに子供の僕が教師をするってのは変だけどね。

「なんで私の修行が“日本の学校で生徒をやること”なのよー！ー！！！！」

……え、アーニヤも来るの？

### 第三話 卒業 これからのこと（後書き）

ネギ、テンプレ通りに進めるのをあきらめる、の巻。

ネカネ姉さんのキャラ崩壊っぷりを見てからは、ネギの頭の中は  
“もうどうにでもな〜れ〜” 状態です。

アーニヤが麻帆良に来るのには意味を考えてあります。

1〜5の事件の終わり方もおおまかに考えてあります。

もう少しお付き合いください。

御意見・御感想お待ちしております。

次回の更新は2、3日はかかると思います。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました



#### 第四話 麻帆良学園

こんにちは、ネギです。

前世もあわせて初めて飛行機に乗りました。  
耳鳴りが酷いです。

あの後暴れだしたアーニヤを落ち着かせ、学校長に話を聞きにいったのですが、学校長は既に逃亡済みでした。

それを知ったネカネ姉さんの笑顔が忘れられません。

置手紙があつたので見てみると、お世話になる麻帆良学園の連絡先が書かれていました。

アーニヤは自分の影響で日本に興味はあつたものの、日本語まで話せるなんてことは当然なかったので日本語のお勉強中です。

生徒であるアーニヤとは違い、自分は教師をするということなので、アルちゃんをアーニヤに預けて日本へ先に行きます。

色々と手続きがありますし、アルちゃんを最初から連れて行くつもりなのでペット可の住居をお願いしたところ、

「なら早めにきて、自分で気に入ったところを探しなさい」

と言われました。

初っ端から原作と違ってきてます。

麻帆良学園の学園長とも電話で話したのですが、自分を早く麻帆良に来させたいそうです。より詳しく言うならアーニャより先に来させたいそうです。

……………なーんかありますねえ。

あ、そうそうヘルマン卿は封印されていませんでした。

吹っ飛ばされた際に普通に消えたそうです。魂まで消滅してるわけじゃなさそうですね。

まあ、知らない悪魔が来るよりも対策を立てやすいので悪くはありません。

そんなこんなで麻帆良学園に到着しました。  
ちなみに出迎えはタカミチでした。

まあ、平日の昼間ですからね。明日菜さんたちは普通に学校ですよ。

平日の昼間になんで担任の先生であるお前がいるんだ、このデスマガネ？

と聞きたいところですが自重します。

「どうも、ご無沙汰しています。久しぶりです、タカミチ」

「やあ、大きくなったね、ネギ君。

そんなにかしこまらなくても大丈夫だよ」

「いえ、習った日本語がこういうものなので。  
変えろと言われた方が困ってしまいます」

「H H H A、そうなのかい。それでは改めて。

ようこそ、麻帆良学園へ。ネギ・スプリングフィールド君」

などと会話しつつ、目的地に向かいます。

初めて「」で台詞を喋った気がしますが置いておきましょう。

久しぶりの日本だけど麻帆良だからですかね？ 前世の記憶にある日本とは違うなあ……………。

……うわぁ、やっぱりぬらりひょんだよ、学園長は。  
二次創作のテンプレならここで

「うわ！？　ぬらりひょん！？」

とでも叫ぶのでしょうか、やめておきましょう。

ここはもう麻帆良です。どんなキャラ崩壊が待ち受けているかわかりません。

どこに地雷が埋まっているかわからない今、穩便に済ませることが出来るならそれに越したことはありません。

そして今後の打ち合わせ。

自分は教育実習生としてタカミチが担任をしている2・Aの担任補佐をするようです。

……原作からやっぱり違ってきてます。タカミチが出張ばかりなのは変わらないようですが。

三学期開始と同時に担任補佐として赴任ですか。

それまでは日本の学校のことや書類の書き方、麻帆良のことなどを勉強すると。

アーニヤが転校生として麻帆良にやってくるのもそのぐらいになるので、同時のタイピングで就任と転校ということになりそうです。……勉強に時間かけすぎです。その間になーんかありますね。

タカミチが2 - Aのホームルームのために退席した後、茶をご馳走になりながら世間話をします。

羊羹うめえ。

「……ところでネギ君や、ちょっと会ってほしい人がいるのだけどいいかね？」

「は？ 別に僕は構いませんが………」

来ましたよ。なーんかあると思ってたら、なーんか来ましたよ。誰だ？ このタイミングで自分と会うような人なんかいるか？

「なに。君のお父さん。」

ナギ・スプリングフィールドの知り合いじゃよ……………」

ナギの知り合い？ アルビレオ・イマとか？ というかなんで声が暗いの？

いや、図書館島の奥深くにいて、出て来れないはずですよ。

あの人原作でも変態っぽいから、キャラ崩壊の倍率ドンで更なる変態化してたらどうしましょう？

やべ、カモ君のことアルちゃんって呼んでるけど、あの変態が「アルちゃん」という呼び名に反応したらどうしよう……………」。

ノックのあとにガチャ、と扉が開いて入ってきたのは……………刀子先生、とシスター・シャークテイー？ 案内役か？

その後から入ってきたのは、小柄で、金色の長い髪で、美しいというよりは愛らしい、だけど数年後には絶世の美女と呼ばれるであろう、麻帆良学園本校女子中等学校の制服に身を包んだ少女でした。

……………もしかしなくてもエヴァさんじゃね？ 闇の福音じゃね？

やけに力の籠った目で自分を睨みつけてくるこの人って、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんじゃね？

何ですか、この状況？ エヴァさんがなんでこの時点でネギと会うんですか？

「この子はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。さっきも言った通りナギの知り合いじゃよ。」

高畑先生が担任をしておる2・Aの生徒でもある」

「そ、そうですね。初めまして、ネギ・スプリングフィールドです。三学期からですが2・Aの担任補佐として赴任することになりました。これからよろしくお願いします」

.....。

.....。

.....反応がありません。

自分を睨みつけてくるだけです。

「えーっと、父の知り合いということですが、一体どういづこ関係なんですよってヒイッ！！！」

「ちょ、地雷踏んだ。なんかよくわかんないけど地雷踏んだ。

殺気混じった。自分を睨みつけてくる視線に殺気が混じってきました。

「なんか変なこと口にしましたか？ 自分？」

「そう睨みつけるのはやめなさい。ネギ君が怯えてしまっているじやろつに。」

「エヴァ、この子がナギの息子であるネギ・スプリングフィールド君じゃ」

「助けて！ ぬらりひょん！（野比の 太風に）

「って、眼鏡しか共通点無いじゃないか！？」

「いや、現実逃避はここまでにしましょう。」

「やばいぞ、これは。エヴァさんに敵としてロックオンされてそう  
だ。」

「……………これが」



イエス、ママッ！！！  
なんでございましょうか！？

「いったい！？ 誰が！？ ナギの息子だあつ！？」

ヒイツ、そんなこと仰られましてもミス・マグダウエル。子どもは親を選べませんです。

いったいナギはエヴァさんになにをやったんだあつ！？

「私にとってこのぼーやは！！！！」

どこの誰とも知らぬ泥棒猫の子どもでしかないわっ！！！！」

ワーニンッ！ ワーニンッ！ ワーニンッ！  
そっちですね！？ ナギのことじゃなくて、そのお相手のことな  
んですね！？

キャラ崩壊来ました！ よりにもよってエヴァさんですか！？

しかも“泥棒猫”発言！もしかして“ヤンデレ”ですかあっ！？

何それ！？ “ヤンデレ”な“闇の福音”ダイク・エヴァンジェルなんて最悪の組み合わせだ！

#### 第四話 麻帆良学園（後書き）

次回、「闇の福音がこんなに  
よろしく願います。

わけがない”

# 3 / 2 0 修正しました

# 5 / 2 0 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第五話 闇の福音がこんなに

わけがない

「……………一体、どういうことなのだ？」

全然自分にもわかりません。何故、ゴゴゴゴゴ、と夜叉のオーラを放っているエヴァさんが目の前にいるのかわかりません。今すぐウエルズに帰りたいなあ。

「15年前だぞ、15年前……………！」

アーニヤの買い物に付き合って荷物持ちにされたいなあ。ネカネ姉さんの魔法実技授業で校庭の隅でガタガタふるえて命乞いしたいなあ。アルちゃんの原作から思いっきり離れたしおらしさで微妙な気持ちになりたいなあ。

……………まだアルちゃんに“お兄様”って呼ばれるのは違和感があるんですよね。

「私がナギに『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』をかけられたのが15年前。そのときに3年経ったら解きに来るといわれた。そしてこのぼーやは9歳だ」

現実逃避してる場合じゃありませんね。いつでも逃げれる準備しなにと。

というか学園長たちは何を考えてるんだ？

刀子先生とシスター・シャークティ―は気の毒そうな顔してこちらを見てくるだけだし。

「私にかけた呪いを解く暇はないくせに、子どもをつくる暇はあったというのか……………！」

タカミチ！？ タカミチは何処に！？  
自分の担任している生徒なんだからなんとかしてくださいよ！

「……………待ってたのに」

はい、うちの駄目親父が申し訳ありませんでした。土下座して謝りますから許してください。

まだあの駄目親父はコッソリ生きてるんです。想いをぶつけるのはそちらにしてください。

って、アレ？ ……………エヴァさん泣いてる？

「待ってたのに、待ってたのに、待ってたのに。ずっとずっと待ってたのに。」

ちゃんとナギの言うとおりに学園の警備員としても頑張ったのに。

……………どうしてナギは私に会いに来てくれないの？」

……………きつと夏休みの宿題をしない男子中学生のごとく伸ばし伸ばしにしていて、遂にはいけなくなっただんでしょう。  
いや、というか泣かないで。そんなボロボロという形容詞が似合う涙を流さないでください。

「来れないなら一言ぐらいあってもいいのに。」

電話でも、手紙でも、人伝でも、なんでもいいから……………うぐっ、

えぐっ」

刀子先生とシスター・シャークティイーがエヴァさんを宥めはじめました。

お願いですから自分のこの混乱具合も宥めて欲しいです。そしてタカミチ、いつの間に部屋に入ってきた？

「うぐっ、料理もできるように、えぐっ、なったのに。

……洗濯も、掃除もちゃんとできるようになったのに……う、うづうづううう……！」

崩れ落ちるエヴァさんを刀子先生とシスター・シャークティイーが支えて心配しています。

お願いですから自分のこの混乱具合も心配して欲しいです。

……エヴァさんが家事一般の勉強？ キャラ崩壊しすぎじゃね？ ヤンデレっぽい感じがなくなっただのは助かりますが。

「すまんのお、ネギ君。我慢すると約束してたのじゃが……。これでは君もなんのことかわからんじやろっ。

説明するから刀子先生とシスター・シャークティ―はエヴァを別室に……………」

「い、いえ。僕が別の部屋に行きましょう。

とにかく今はマグダウエルさんを落ち着かせてください。

タカミチは事情をわかっているんですか？ わかっているんなら説明をお願いします」

とにかく今すぐ混沌としたこの部屋から脱出させてください。それだけが私の望みです。

「すまないね、ネギ君」

「いえ、とにかく説明をお願いします、タカミチ。父さんが関わっているのはなんとなくわかりましたが……………」



「ああ、実はエヴァはね……………」

タカミチから説明してもらいましたが、エヴァさんがこの学園に来るきっかけは原作と変わらないようです。

ただし、原作と違うのはこっから。

エヴァさんは見事に恋する乙女になったようです。

「ナギに頼まれたから」の理由で学園の警備員として頑張り、「ナギにおいしい料理を食べさせたいから」の理由で料理を頑張り、  
e t c e t c 。

エヴァさんは見事に恋する乙女になったようです。

……………どうしてこうなった？

そして3年経って、呪いを解きにナギが来なくても「ナギにはなにか理由があったんだ」と健気に待ち続け、更にナギ死亡の噂が流れても「ナギが死ぬはずがない」と健気に待ち続けました。

が、それもナギの息子である自分、ネギ・スプリングフィールド

の存在を知るまで。

自分の事を聞いたエヴァさんは理解するまで数分かかり、理解した瞬間気絶したそうです。

よくよく考えてみればエヴァさんに対して酷い話ですよ。

“あ……………ありのままに起こった事を話すぞ！”

「私はナギに「待っている」と言われて待っていたら、いつのまにかナギは他の女と子どもをつくっていた」

な……………何を言っているのかわからないと思うが、私もどういふことなのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうだった……………。

「男の甲斐性」だとか「裏切り」とかそんなチャチなもんじゃあ、断じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぞ……………”

といった感じでしょうか？

……………ハナっからそういう関係じゃなかったんじゃね？ というツッコミはしない方がいいですね。

あ、学園結界はちゃんとエヴァさんの能力を封じているそうですね。といっても封印したのは攻撃力だけで、不死性に関しては封じてないそうです。

え？　なんで不死性に関しては封じてないのだった？

……………自殺防止だそうです。　キャラ崩壊しすぎじゃね？

「はあ、そういう事情だったんですか……………」

麻帆良に来た初日でもうお腹一杯なんです。

「そ、それでエヴァにかかっている『登校地獄』インフェルナス・スコラスティクスを解くためにネギ君に協力して欲しいんだ」

「協力ですか？ 事情を聞いた以上それは構いません。  
というか是非とも協力させてください。血を提供すればいいんですか？」

「いいのかい？ ありがとう、助かるよ。」

さつきも言ったとおり彼女は15年もの間、ずっと中学生を繰り返していてね。

せめて『登校地獄』インフェルナス・スコラスティクスからだけでも解放してあげたいんだ。」

……………うちの駄目親父が申し訳ありません。

インフェルナス・スコラスティクス 誠心誠意『登校地獄』解呪に協力させていただきます。

「高畑先生、ネギ君。エヴァンジェリンが落ち着いたそうです」

ノックして部屋に入ってきたのは黒い肌でタラコ唇の長身男性。  
ガンドルフイーニ先生ですね。

……………この人いわゆる“正義の魔法使い”志望で頭が固いんですけどっけ？

そんな人がこの件で文句もなさそうに動いてるってことは、エヴ

アさんはこの学園に受け入れられてるっばいですね。

特に刀子先生やシスター・シャークティーみたいな女性陣は完璧  
味方になっていてるでしょう。

あ、ガンドルフィーニ先生にも幼い娘さんがいるんだっけ？  
だったら他人事じゃないですね。そんな仕打ちを自分の娘にされ  
たら怒るでしょうし。

「さっきは済まなかったな、ぼーや……………」

学園長室に戻ってきた自分たちを迎えたのは、泣き止んだエヴァ  
さんでした。

だけど目がまだ赤く、腫れぼっています。よっぽどナギのこと好  
きだったんでしょうねえ。

「……………本当はわかっていたんだ。実際ナギと私はなにもなかったんだからな。  
助けてもらったときに手を繋いだぐらいで、あとは頭を撫でてもらえるだけだった。  
でも、……………それでも、私はナギのことが……………うぐっ」

お願いですからもう泣かないでください。泣きたいのはこちらです。

だけどその泣き顔にキュンと来た駄目人間な自分でした。  
なんでこんなに原作と違って可愛くなってるんだ？ 闇の福音がこんなに可愛いわけがない。

駄目だ、この人。早くなんとかしないと……………。

待て、慌てるな。これはテンプレの通りだ。

エヴァさんの呪いを解き、15年間もこの学園に縛りつけた駄目親父の所業を謝るのはテンプレ通りだ。

そしてエヴァさんと良い関係を築き、京都修学旅行での事件を手伝ってもらおうのもテンプレ通りだ。

何も問題はありません。

自分はテンプレ通りに進めています。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんっ！……！」

キリッとした声を出し、エヴァさんの前に進んでしっかりと目と目を合わせます。

そして自分は、

「タカミチから聞きました。女性にそんなことするなんて最低な駄目親父です。」

駄目親父がしたこと責任は僕がとります。

どうぞ僕の血を吸って呪いを解いてください」

と土下座して謝りました。

.....テンプレ通り、ですかね？

.....。

.....。



第五話 闇の福音がこんなに

わけがない（後書き）

“闇の福音がこんなに可愛いわけがない”、の巻。

わいは2 - A生徒の中でエヴァが一番好きなんや!!!

# 3 / 2 0 修正しました

# 5 / 2 0 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第六話 家族

「……………う、ふあ、もつちよつと優しく……………」

こんばんは、初めて血を吸われる感覚に戸惑って、変な声を上げてるネギです。

エヴァさんの甘い声だと思いましたか？ 残念。僕ですよ、僕。

その後、自分がしばらくホテル暮らしをして住居を探すことをエヴァさんに知られたところ、エヴァさんの家に居候させてもらえることになりました。

アーニャとアルちゃん、麻帆良に来たら、彼女たちも一緒に住ん

でいいそうです。

おそらく学園長たちはこれを狙っていたんでしょうね。何も言いませんでしたし。

タカミチはすぐに出張しなければいけないらしく、自分の面倒はみてもらえないそうですから。

これから定期的にエヴァさんに血を提供しなければならないので、食生活を含めてエヴァさんが面倒見てくれることになりました。

本当にエヴァさんは料理を習っていたみたいです。茶々丸さんの手を借りずに、とても美味しい料理をご馳走してくれました。

…………… 本当にキャラ変わってるなあ。

むしろ、このエヴァさんが自分の好みに思いつきり直球でストライクだったので、一緒に生活できてラッキーなんです。

でもマズイです。エヴァさんが可愛くてクラクラしてきました。

エヴァさんはソファアに座った自分と向かい合った状態から、首筋に歯を突き立てて血を吸っています。

さっきから「エヴァさんの髪の毛サラサラしてるなあ」とか、「エヴァさんは良い匂いするなあ」とかしか考えられません。

エヴァさんの背中に手を回して抱きしめたらあつたかくて気持ちいいんだろつなあ……………。

「んひゃっ！！！」

うわ、血を吸い終わったエヴァさんに首筋舐められたら変な声出してしまいました。

邪な考えを見抜かれたのでしょうか？

「ふう、美味しかったよ、ぼーや。ありがとう。」

「だけど疲れてるんじゃないか？ ちょっと血が濁っているぞ」

確かに疲れてましたけど、この数分で更に疲れました。

子どもでよかった。大人だったら絶対エヴァさんに反応してしまいます。

「確かにちよつと疲れています。」

初めて飛行機に乗って、初めてウェールズの外に出ましたから」

「そうか、すまないな。それなのに血を吸わせてもらって。」

「ああ、血を失ったばかりなんだからあまり動くな。水分を摂ったほうがいい。」

茶々丸、ぼーやに飲み物を」

「了解しました。少々お待ちください」

……茶々丸さんは原作とは変わりがないようです。

まあ、茶々丸さんは原作中に成長して、どんどん機械っぽさがなくなっていくというか、人間になっていきますからね。

これからどんな風に変化していくかわかりません。

せっかく一緒に暮らせるんです。キャラ崩壊しないように気を付けて見守っていきましょう。

「さつきも言ったが血を提供してくれてありがとう。

さすがに中学生を15年も続けていると飽きてしまったからな。

この学園から出て行く気はないが、インフェルナス・スモラスティクス『登校地獄』は解除しておきたい」

「そんなに気にしないでください。血でよかったですらいくらでも提供しますよ。

駄目親父の仕出かしたことの償いです。マグダウエルさん」

自分の隣に腰を下ろしたエヴァさんに御礼を言われます。  
いえいえ、エヴァさんとは仲良くなりたいですからね。  
京都修学旅行のときにはよろしく願いますよ。

「顔色が悪いな。少し血を吸いすぎたかもしれん。

……ほら横になるといい」

うおっ！！！！ エヴァさんの膝枕キタコレ！！！！ しかも頭も撫でられています。

駄目だ。顔が赤くなるのが止められません。

「……………それと“マグダウエルさん”という呼び方はやめろ。  
これからは家族として一緒に生活していくんだ。  
家族を名字で呼ぶなんておかしいだろう」

「は、はい。ありがとうございます」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

エヴァさんの優しい声と太ももの感触に引き込まれそうになります。

マズイ、本気で惚れそうだ。

なんでナギはエヴァさんを振ったんだ。勿体なさすぎる。

チラとエヴァさんの顔を見上げると目が合い、ニッコリと笑いか  
けられました。

「お母さん」と呼んでくれてもいいんだぞ？」

「坊ちやま。紅茶をお持ちしました。

砂糖とミルクはどうしますか？」

「……………いえ、さすがにそれはお断りします。エヴァさん。砂糖はいりません。ミルクたっぷりをお願いします。それと“坊ちやま”は止めてください。茶々丸さん」

そういうオチだと思ったよコンチクショウ!!!  
クソッ！　なんて並行世界だ！  
ぜんぜんナギのこと諦めてないなあ、この人は!!!

「な、何故だ!?　何故“お母さん”と呼んでくれないのだ!?」

「しかし坊ちやま。  
坊ちやまはマスターの御子息とられる御方ですので、“坊ちやま”と呼ぶのは当然のことかと」

「この幼い姿がいけないのか!？」



確かに実年齢は600歳を超えているとはいえ、同じくらいの年齢に見える女性を母と呼ぶのは抵抗があるかもしれんな。

安心しろ、ぼーや。そんなもの幻術を使えば何とでもなる!!!」

「いえいえいえいえい！　そういうことじゃありません」

「ならばどういふことなのだ!?　私はぼーやの母に相応しくない  
とでもいふのか!？」

ああ、もう。どうすりゃいいんだこの人は!？」

これから世話になること考えると機嫌損ねるのは後が怖いし。  
ていうか泣きそうにならないでください。お願いします。

「ぼ、僕は3学期から教育実習生として、エヴァさんたちのクラスの担任補佐をすることになっています。

そんな僕が生徒のことを“お母さん”と呼んだり、生徒に“坊ちやま”と呼ばれるのはおかしいと思います」

「た、確かにそうだが。……く、それでも、せつかく……」

「僕はここへ修行のためにやってきました。

それなのにエヴァさんに甘えてしまったら修行になりません。僕のことを考えていただけならお願いします、エヴァさん」

「む、むづづづづ……。ぼーやがそこまでいうならしょうがない。

ちゃんと学校では“ネギ先生”と呼んでやろう。茶々丸、お前もだ」

「了解しました。学校では坊ちやまのことを“ネギ先生”とお呼びします」

「いえ……。坊ちやまと呼ぶことをやめて欲しいんですが」

2・A連中にはれたら絶対大騒ぎになってしまいます。

「さて、今日はもうお開きだ。

明日はぼーやの身の回りのものを買いにいかなければならないかな。忙しくなるぞ。

風呂に入って早めに休むとしよう」

無視ですか……。

いいですよ、もう。もう疲れました。好きにしてください。

「よし、では一緒に風呂に入ろうか？」

「お断りしますっ！！！！！」

「な、何故っ！？ くっ、これが反抗期というやつなのか！？  
私は諦めんぞ。必ずぼーやに“お母さん”と呼ばれてみせる！！  
」！

クソッ！　なんて並行世界だ！

## 第六話 家族（後書き）

とりあえずエヴァ編は終了しました。

2 - A 生徒の大幅な改変はエヴァとあと一人。  
もう影も形もないキャラを考えています。

他は変えないか、変えても良い意味で変えることになると思います。  
す。

作者はハッピーエンドが好きなので。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第七話 麻帆良での生活？

おはようございます、ネギです。

朝起きたらエヴァさんがニコニコと微笑みながら自分を見ていました。

寝顔を見られていたようです。勘弁してください。

朝食を頂いた後、身の回りのものを買に行くこととなりました。

「こんなに少なくていいのか？」

やはり私がお金を出すから、もうちょっと揃えたほうがいいのではないか？

遠慮することはない。学園の警備員として15年間働いてきたから蓄えはある」

「いえいえいえいえいえ！ 大丈夫です！

そこまではご迷惑かけられません」

……ああ、もうこの人は。

過保護ぶりはネカネ姉さん以上です。キャラ崩壊しすぎでしょう。

ちなみに今エヴァさんは幻術を使って大人の姿になっています。

平日の昼間なので子どもの姿で買い物をしていたら補導されてしまつから、と言われましたが、母親気分を味わいたいだけでしょう。自分と手を繋いでニコニコとご機嫌です。

「ふむ、そうか。」

まあ、今日全て揃えなくてもいいからな。欲しいものや必要になったものがあつたらいつでも言うがいい。

また買いに来よう、一緒にな。

茶々丸、お前は家に買ったものを置いて来い。

私たちは少し休憩したら麻帆良を散策しましょう。ぼーやの見たがっていた図書館島や世界樹でも見に行こうか」

「了解しました。マスター」

「わかりました。」

「すみません。お願いしますね、茶々丸さん」

ふう、ネカネ姉さんやアーニヤで慣れてるとはいえ、着せ替え人形にされるのは疲れます。

アルちゃんが使え魔になってからは、生贄が増えたので少しは楽になりましたが。

「……………もしかしてエヴァンジェリンか？  
何をやっているんだ、学校サボって？」

いつものまにか学校が終わる時間となっていたようです。  
オープンカフェで休憩していたら制服姿の背の高い、褐色の肌とストレートロングの黒髪と三白眼が特徴的な女子に話しかけられました。

龍宮マナさん、ですね。

おお、2・A生徒と会うことが出来ました。

「アルカナか。なに、このぼーやの買い物だよ。」

説明されただろう。このぼーやがネギ・スプリングフィールドだ。

「

……………アルカナ？ 龍宮じゃなくて？

いや、本名は“マナ・アルカナ”だったはずだからいいのか。

とはいえ原作と違いがありますね。」

「今のエヴァさんのことがわかるということは関係者の方ですか？」

今のエヴァさんは幻術使って大人になっていきますからね。

ということは原作通りに龍宮さん、じゃなかった。アルカナさんは魔法関係者ということですよ。」

「ああ、マナ・アルカナという。」

エヴァンジェリンとはクラスメイトで、警備員としても働いているから同僚でもある。」

君がネギ・スプリングフィールドか。話は聞いている。3学期からよろしく頼む。」



「はい、3学期から2・Aの担任補佐として赴任するネギ・スプリングフィールドです。」

「こちらこそよろしく願います」

「アルカナは中学生ながら傭兵紛いのことをしていてな。普通の魔法先生よりも頼りになる。覚えておくといい。」

「といっても、なにか頼むとなると依頼料が発生するから気をつけておけ」

「はは、酷い言い方だな。ま、初回は安くしておこう。何かあったら気軽に依頼をくれればいい」

「はい、そのときはお願いしますね」

ふむ、エヴァさんがここまで言うなら原作通りアルカナさんは頼りになるということですね。是非とも仲良くなりたところですよ。

……ふう、エヴァさん本気でナギのこと諦めてくれないかなあ。マジで惚れそうなんですけど、どうしましょう？

やはり新しい恋に生きるしかありませんかね？

アルカナさんみたいなクールビューティーは好みの女性ですし、頑張ってみましょうか。

「コウキと待ち合わせしててな。同席しても構わないだろうか？」

はい、新しい恋は5秒で終わりを告げました、コンチクショウ。  
………恋人さん生きてたんですか、そうですか。

「そういえばおめでとう、エヴァンジェリン。“登校地獄”が解呪  
できるんだって？」

3年になったら修学旅行があるけど、それには行けるのかい？」

「ああ、ぼーやから血を分けてもらえることになってな。  
修学旅行か。まあ、半年近くあるなら多分大丈夫だろう」

修学旅行でエヴァさんが参戦してくれる確率がアップしました。死亡確率がこれでグンツと減りましたね。久しぶりの嬉しい知らせです。

「それはよかった。私からも礼を言うよ、ネギ君」

「いえいえ、僕の駄目親父が仕出かしたことへの償いですよ。御礼を言われることはありません」

なんだかアルカナさんが原作よりも優しいというか柔らかいというか、少し感じが違うように思います。

恋人さんが生きてるからでしょうかね？　なんだか幸せそうです。

………ネカネ姉さんみたいな極端なキャラ崩壊は嫌ですが、こういう風にキャラが幸せそうになっているのなら嬉しくなりますね。

あ、そういえば住居が決まったことネカネ姉さんたちに知らせないとなあ。

一応“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルの家だし、一緒に住むアーニャへはネカネ姉さんから伝えてもらうことにしましょうか。

ネカネ姉さんならおそらくエヴァさんの事情は知っているでしょ

うから。

その後、アルカナさんと別れ、図書館島や世界樹を見に行き、麻帆良をブラブラと散策しました。

当然一日では回りきれず、回れていないところはまたエヴァさんと出かけることとなりました。

……どうせ、大人姿のエヴァさんと一緒に行くことになるんだろっなあ。

まあ、子ども姿のときに2・A生徒と会うとどうなるかわかりませんが、丁度良いといえば丁度良いんですが。

現在日本時間18:30。

イギリスとの時差は9時間ですから、ネカネ姉さんに電話しても時間的に大丈夫でしょう。

NGOとして世界中飛び回っているネカネ姉さんは携帯電話を持っているのでそれに掛けてみます。

p r r r r r .....、 p r r r r r .....、 p r r r r r .....、

prrrrr.....。

なかなか出ませんね。非常勤教師もやっているから今授業中でし  
ようか？

.....お、繋がった。

「やあ、どうしたんだい？ ネギ君？」

「.....」。

.....。

.....ネカネ姉さんの携帯に掛けたんですけど、な  
んでタカミチがでるんですか？」

昨日エヴァさんとの話し合いが終わった後、出張に出たはずの夕

カミチが何故？

しかも、なんか後がうるさいし。ガヤガヤと騒いでる音がします。

「いや、ネカネさんなら今寝ていてね。

ディスプレイ表示でネギ君からの電話とわかったけど、起きそうにないから代わりに僕がでただよ」

「寝ているってなんですか！？」

「何でネカネ姉さんが寝ているところにタカミチがいるんですか！？」

「ちょよ！？ 何があった！？」

「え？ いやいやいやいやいや！ 変な意味じゃないよ！」

「昨日大きな仕事が終わってね。それでNGOの皆で宴会を始めたらしいんだ。」

「遅れた僕は仕事が終わった後にこちらに着いたんだよ。」

「だから、せめて後始末ぐらいはしようと思って、酔っている皆の世話をしているんだよ」

「……………焦った。」

タカミチを“兄さん”と呼ばなきゃいけないかもしれないと本気で焦った。

へたしたら明日菜さんがヤンデレとなってネカネ姉さんとガチンコバトルになるかもしれないし、自分に悪感情を持たれるかもしれないから助かった。

「エヴァさんの家にお世話になることをネカネ姉さんに知らせようと思ったのですが。

それとアーニヤにそのことをネカネ姉さんから伝えてもらおうかと」

「ああ、そういうことか。

僕の方からも伝えておくけど、明日ぐらにもう一度電話するといい。そのときならネカネさんも復活しているだろう。

ネカネさんはエヴァのことを知っている。大騒ぎになることはないから安心していいよ」

やっぱり知っていましたか。

NGOとしてタカミチと一緒に働いているネカネ姉さんなら知っていると思ってましたが。

それならアーニヤのフォローは任せることが出来そうですね。

「それにしてもウエールズはもう朝の9時でしょう。まだ宴会をしているんですか？」

「ああ、ここはウエールズではなくてトルコのイスタンブールだよ。現地時間では昼の11時になるかな。」

「仕事が終わったのが夜で、その後始末が一段落着いたのが深夜だね。」

「宴会が始まったのは今日の夜明け前からなんだ。」

「そんなに朝早くから宴会って……。もう皆さんいい年した大人でしょうに。」

「ハハハ……。耳が痛いね。けど、今回だけは勘弁してくれないか。事後処理がまだ残っているけど、何年にもわたった仕事がよく片付いてね。皆ハイテンションなんだよ。」

「その事後処理というのも油断出来るわけじゃないけどね。」

「後から聞こえてくる声もなんだか弾んでますしね。………。なんだか吐いてる音も聞こえますけど。」



「オエエエエエー！！！！」「おい、こいつ吐いたぞ！」「タカミチ！ バケツ持ってきて！」「相変わらず酒に弱いなあ、ハハハハ！」「いやあ、私この仕事が終わったら恋人にプロポーズしようと思っけていますね」「おお！ おめでとう」「アーウェルンクスの首、獲ったぞー！！！！」「酒なくなっただぞ！？」「タカミチ！ 酒買ってきて！」「これで終わりましたね」「ああ、早く子どもたちに逢いたいよ」「子どもが生まれたんですっけ？」「うん、男の子と女の子の双子だよ」「イスタンブール魔法協会の人来てるんだけどどうするー？」「タカミチ！ 説明してきて！」

.....。

.....。

.....今、変なの聞こえませんでした？

「ああ、もう大変だ。  
それじゃあ、ネカネさんが起きたら伝えておくよ。エヴァと仲良くね」

「ちょ！ ちょっとタカミチ!!! 待ってくだ「ブチッ!」さい  
.....」

.....。

.....。

.....えーと？

死亡フラグを叩き潰した人がいて何よりです。うん。

第七話 麻帆良での生活？（後書き）

#	#
5 / 20	3 / 20
全話「・・・」を「…」に修正しました	修正しました

## 第八話 麻帆良での生活？

こんにちは、ネギです。

今日もエヴァさんは学校をサボって自分の面倒を見てくれようとしてましたが、

「ええ！？ エヴァさんって不良だったんですか！？」

という言葉で一人の時間をようやく手に入れました。  
現在、エヴァさんと茶々丸さんは学校に行っています。

……………あの人、悪い男に騙されるタイプの女性ですね。

その悪い男というのが、自分の実の父親であることに心が折れそうになります。

「ケケケケケ。才前ガ言エルコトカヨ」

「人聞きの悪いことを言わないでください、チャチャゼロさん。」

僕のどこがあの駄目親父と似てるんですか？  
僕はただエヴァさんに質問しただけですよ」

一人の時間は手に入れましたが、残念ながら一人と一体の時間になっ  
てしまいました。エヴァさんより護衛役を命じられたチャチャ  
ゼロさんです。

とはいえ“坊ちゃま”と呼んでくる茶々丸さんが付いてくるより  
は、チャチャゼロさんの方が気楽です。

「アノ男ヨリムシロ悪インジャーネーカ？　ゴ主人ニモ呆レタモンダ  
ゼ」

「この件については実の父よりも、育ての姉の方に責任があるかも  
しれませんがね」

「……………“破壊ノ魔女”ニ育てラレタシタカ、才前ハ」

「何でいきなりそんな憐れんだ表情になるんですか？」

ネカネ姉さんはいったい何をやっているんですか？

“破壊ノ魔女”という名前は初めて聞きました。身内に魔女が多

いですね、自分には。

「午前は図書館島探索です。人前では喋らないでくださいよ」

「ワカッテルヨ。寝テルカラ何カアツタラ起コセ」

「……………護衛の意味ないじゃないですか」

なんでこんな人形で、原作と一緒にだなあ、とホツとしなきゃいかんのでしょうか？

昨日は入り口から中を見渡したぐらいで、本格的な探索はこれからです。

といっても今日だけでは図書館島の一般人進入可能区域をぐるっと回るぐらいしか出来ないでしょうが。

昼になり、家に戻って茶々丸さんが用意しておいてくれた昼食をレンジでチンして食べます。

午後は家の裏手で魔力制御の自主訓練です。

日本に着てから訓練をサボっていましたから、基礎から訓練し直します。

くしゃみで武装解除発動なんてことはありませんが、それでも基礎は大事ですからね。

近いうちにエヴァさんに弟子入りしなきゃいけません、弟子にしてくださいませんか？

「ぼーやが戦う必要はない！ 私が守ってやろう！」と断られるかもしれない。

キャラ崩壊しすぎです、あの人は。

うまい言い訳を考えるとかないといけません。

「守りたい人がいるんです！」のようなことをヘタに言ったら、

「なんと！ ぼーやは私を守ってくれるのか！

私を母と受け入れてくれたんだな！」

とか誤変換して暴走される危険性があります。

キャラ崩壊しすぎです、あの人は。

「地味な訓練シテナダナ。ソレジャ退屈ダロウ。  
ヨシ、オレガ相手シテヤロウ、実戦形式デナ」

「お断りします。チャチャゼロさん。」

エヴァさんの『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』が解呪されるまでは血の無駄遣いはいはで  
きませんから」

2時間ほど訓練し、しばらく休憩した後は魔法の勉強ですが、ボールペンのインクがきれてしまいました。

予備のボールペンは持ち歩いていますが、散歩がてら買いに行くことにします。

ちょうど下校時刻と重なっているので2 - A生徒を見かけるかも  
しません。

……… いました。 いましたよ、多分。 2 - A生徒らしき人とすれ



違いました。

“せつちゃん”と“このちゃん”で呼びあっていましたから、近衛木乃香さんと桜咲刹那さんでしょうか？

“このちゃん”が京都弁で喋っていたし、そうだと思うんですが。

疑問系なのは日傘を差していて、顔がうまく見えなかったからです。

あの二人が近衛木乃香さんと桜咲刹那さんだったとしたら。原作との違いはまず仲の良さなんですが。

ふむ、“せつちゃん”は標準語で話してたことから、原作通りに中学からこつちに来たんですかね？

小学生で一緒に来たんなら、おそらく2人とも京都弁を話してるでしょう。

そして“せつちゃん”の髪の毛が白かったです。

確か烏族と人間のハーフでアルビノなんでしたよね。原作でも染めてるようなことってましたので。

むう、木乃香さんは刹那さん生まれのこと、ひいては魔法を知ってるんでしょうか？

それともただアルビノということバラしてるだけ？

修学旅行に関わってくるかもしれないから、注意しておきましょう。

それと“せつちゃん”はあきらかに関係者でしたね。

“せつちゃん”が差している日傘が、その、なんとというか、長かったです。1m以上ありました。

具体的にいうと野太刀ぐらいありました。

しかもなんだか日傘の柄が妙に曲線を描いていました。

……………仕込み傘？

まあ、日光に弱いアルビノだから日傘を差すのは怪しまれないし、  
護衛としては悪くないんでしょうかね？

ボールペンを買って家に帰って勉強していたところ、日が暮れた頃にエヴァさんたちが帰ってきました。

「お帰りなさい、エヴァさん」

と挨拶したところ、何故かエヴァさんが悶絶しました。その後何回か「お帰りなさい」を言わされました。何がしたいんでしょうか、この人は？

「遅くなってすまなかったな。」

ジジイに昨日学校をサボったことを注意されてな

「学校サボっちゃ駄目ですよ、エヴァさん。」

僕の面倒を見てくれるのは嬉しいですが、そのせいでエヴァさんが不良になつたら悲しいです」

「いやいやいやいやいや！ 私は不良なんかじゃないぞ！

ちゃんとこれから学校に行くさ。」

ふふっ、ぼーやに「お帰りなさい」といわれるのも悪くないから  
な」

……それでさっき悶絶してたんですか。

「そうだ、ジジイから伝言があったぞ。

タカミチが日曜日には帰ってくるらしくてな。

月曜から本格的な先生になるための準備を始めるそうだ。

それまでは麻帆良に慣れておけ、だとさ」

ようやくきましたか。

さーて、原作との剥離はどうなりますかねえ？

「ぼーやが担任補佐か。悪くないな。

しかし、3学期になったら担任補佐とはいえ、31人の生徒の面倒を見ることになるんだ。それは生徒の一生を左右することだからな。

頑張るんだぞ」

キャラ崩壊しすぎです、この人は。

## 第八話 麻帆良での生活？（後書き）

チャチャゼロの台詞が書き難すぎます。

とはいえ全部カタカナにすると読みづらいので、ひらがな部分をカタカナにしました。

もしひらがなのままの台詞があつたらご指摘お願いします。

当初の予定通りにエヴァをヤンデレにして、

「ナギの悪口を言ったから」の理由でチャチャゼロを壊しておけばよかったと後悔してます。

エヴァや茶々丸が変で、チャチャゼロが常識を持っているのが二次創作のテンプレの一つだったんで、

「いつそのことチャチャゼロ壊しておくか！」と思いました。思っつてしまいました。

「だ、だって。チャチャゼロがナギの悪口を言ったから……………」（／／）

と顔を赤らめて、チャチャゼロを焼却処分したことをデレて打ち明けるエヴァってかわいいですかね？

次回、宣言通りに影も形のない2 - Aキャラが……………。

# 3 / 2 0 修正しました

# 5 / 2 0 全話「……」を「……」に修正しました

## 第九話 2 - A生徒

こんにちは、ネギです。

先生になるための教育が始まるうとしています。  
教師役は帰ってきたタカミチです。

「すまないね。仕事が忙しくて、先週はネギ君を放っておいてしまった」

「いえ、エヴァさんには良くしてもらってましたから。  
でもなんというか、ネカネ姉さんが増えたみたいでしたけどね」

「ははは、大変だね」

「それと茶々丸さんが僕のことを“坊ちやま”って呼ぶの何とかで  
きませんか？」

「……………僕の方からもう少し自重するように言っておくよ」

切に願います。いや、本当に。

「さて、おさらいだけど、ネギ君には3学期から2・Aの担任補佐をしてもらう。」

担任は僕だから、要するに僕の補佐だね」

「はい。」

しかし、9歳の僕が先生で、14歳の生徒にものを教えるというのはおかしな話ですね。

しかも幼馴染で同級生だったアーニヤまで2・Aに生徒として転校してきますし。

麻帆良じゃなかったら、こんな修行できなかったですね」

「そ、そうだね。でも大丈夫だよネギ君。」

アーニヤ君のことは君の方がよく知っているだろうし、2・A生徒も皆良い子だから。

補佐とはいえ、君は3学期から31人もの生徒の指導をすることになる。

大変だけど、とてもやりがいのある仕事だよ」



……そのやりがいのある仕事を出張ばつかでほったらかしてたのはどこのどいつだ？ このデスメガネ。

学校のことや教師の仕事、書類の書き方などを教わり、只今休憩中です。

原作ネギはコーヒー嫌いらしいですが、自分は好きです。  
ウェールズじゃ紅茶ばかりだったから新鮮でいいですね。

「麻帆良は広いですね。先週だけじゃ半分も見て回れませんでしたよ」

「まあ、ここは広いからね。じゃあ、今度の休みにでも、僕と一緒に回ろっか。」

「それは嬉しいんですが、NGOの仕事は大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ、先週のでほとんど終わってね。」

事後処理を油断しなければ良いだけな段階まで来たんだ」

…………… 本当に首を獲ったんでしょうか？

だとしたら京都修学旅行のみならず、これ以降の死亡フラグが軒並み倒れたのですが。

でも、絶対何かあるよなあ。そんな甘い話があるわけがないはずです。

「まあ、向こうで出来ない仕事を、僕がここでするんだけどね」

向こうで出来ない仕事？ どういう意味でしょうか？

「でも正直、エヴァさんに「お母さんと呼んでくれてもいいんだぞ」と言われたときは参りましたよ。」

多分麻帆帆良を回るときに一緒についてきますね、あの人は」

「あはは、まったくエヴァは……………」

「まあ、嫌なことなら嫌と自分で言いますけどね。

駄目親父がしでかしたことの贖罪と思えば、あんな美人に面倒みてもらうことなんてむしろ幸運なことです」

「……………嫌なことじゃないということは、エヴァに“お母さん”になって欲しいのかい？」

ん？　なんか空気が変わりましたよ？

「嫌じゃないというより慣れてるだけですよ。

ネカネ姉さんと今まで一緒に暮らしてましたからね」

「ああ、そういうことか。ネギ君も大変だったねえ。

……………“本当のお母さん”には会ってみたいとは思わないのかい？  
エヴァの件があったから、ナギのことは“駄目親父”としか言うてないのしょうがないとしても」

タカミチから見捨てられたぞ、ナギ。というか同情すんな、タカミチ。

どうせタカミチも昔はナギの無茶に巻き込まれたりしたんだろうし、エヴァさんのことを知っているのだからしょうがないんですけどね。

……………しかし“本当のお母さん”か。

「まあ、興味はありますね。どんな人だったのか？」

「……………それだけなのかい？」

「今のところはそうですね。」

母親の話は聞いたことないんでどういう人かもわかりませんし。何らかの事情があつて僕には言えないってことなんでしょうけど。会えるなら会ってみたいとは思いますがけどね」

美人ですしね、あの人。

「お母さん！」と抱きついて胸に顔をうずめたいです。

「まあ、それに今は先生になることで手一杯ですから。2 - A生徒の方が興味あります」

「……………そうかい。2 - A生徒は皆良い子だから大丈夫だよ。  
……………ネギ君」

「はい？」

「楽しみにしててくれ」

？ そりゃ楽しみですけどね。

「ところで2 - A生徒といえば、マナ・アルカナさんに先日お会い  
しましたよ。  
こちら側の関係者だそうですね。エヴァさんといいアルカナさん  
といい、2 - Aには関係者が多いのですか？」

「ああ、他のクラスに比べれば多いね。  
まあ、関係者というかアクの強い娘たちが多いんだけど……………。  
そっだ、クラス名簿をしてみるかい？」

」そうですね、ぜひお願いします」

お、クラス名簿を見れるんですか。

よし、これで2 - A生徒のことが少しわかります。

……………キャラ崩壊してなきやいいなあ。

ふうむ、一目見てわかる違いはやはり桜咲刹那さんですか。  
良く見れば、他にも何人か見た目でわかる違いがありますね。

出席番号2番・明石 祐奈

巨乳。以上終わり。

もう既に巨乳になっていきますね。写真でもわかります。眼福です、はい。

出席番号8番：神楽坂 明日菜

ツインテールじゃありません。

あとなんだかキリツとします。(´・`・´)キリツと。

バカレンジャーじゃないのでしょうか？ それとも見た目だけ？

バカレンジャーじゃなかったら期末テストが楽なのですが。

出席番号15番：桜咲 刹那

やはり先日見たのは刹那さんでしたね。

写真に写っている刹那さんの髪の毛が白いです。

それに確か原作では剣道部に所属してたはずですが、図書館探検部になっていきますね。護衛優先？

出席番号19番：長瀬 楓

……書き込みの“バルタン”ってなにさ？

出席番号24番：長谷川 千雨

……その猫耳はナンデスカ？

オタク趣味丸出し！？ ちうたんがこんなになってるなんて！！！！

クソッ！ なんて並行世界だ！

出席番号29番：四葉 五月

あれ？ この人が発するオーラって、コアラのオーラじゃありませんでしたっけ？

なんか写真でもわかるぐらいに、カンガルーのオーラを発してるんですが。

まあ、どちらもオーストラリア原産の動物ですからそんな違いはないんでしょうが。

でもこのカンガルー、この前図鑑で見たプロブレオプスに似てるような気がします……。ま、気のせいでしょう。



………気のせいですよ？

なんだか出席番号29番の人でどつと疲れたんですが。

一応出席番号1から30番まで見たんですが。

でもまだなんか違和感があります。なんだろう？

タカミチの書き込みも特には変わってないようなんですが。

出席番号13番：近衛 木乃香

………確か原作では占い研究部？ 研究会？に入ってますんでしたっけ？

この世界では部活は図書館探検部だけですな。

魔法のことは知らないのでしょうか？ それとも知っているからこそ占い研究会？に入っていない？

魔法を既に知っている可能性がありますね。

出席番号18番：龍宮 マナ

あれ？ マナ・アルカナさんでは？ 書き込みが龍宮神社養子？

龍宮神社に世話になっているのは変わらないようですね。

恋人さんが龍宮コウキさんだから、その関係で身寄りのないアルカナさんが養子に入ったということでしょうか？

………というより、同棲中？

恋人さんと結婚したら龍宮と名乗るようになったりして。

むしろ結婚しないうちは龍宮と名乗らない意気込みのつもりかな？

ケッ、世の中に存在するカップルなんて滅びればいいのに。

出席番号30番：ザジ・レイニーデイ

この人は変わっていてもわからんなあ………って、あれ？  
ん？ んんん？ これはおかしいぞ。

「あの、タカミチ。

3学期になったら“31”人の生徒の指導をするんですよね？」

「うん？ そっただけ。どうかしたのかい？」

出席番号30番：ザジ・レイニーデー  
出席番号の最後が“30”番。

「……この名簿には“30”人しか載っていないのですが？」

そつだ、これがおかしいんだ。

「やだなあ、ネギ君。」

アーニヤ君を入れて“31”人じゃないか」

出席番号18番：龍宮 マナ

出席番号19番：長瀬 楓

超鈴音いねえじゃん。

## 第九話 2 - A生徒（後書き）

はい、宣言通り影も形もないキャラです。

超鈴音が文字通り、影も形もないキャラでした。

アーニヤを転校させるのも“31”人のミスリードのためでした。

……いや、すいませんでした。なぜこうなったかご説明します。

ハッピーエンドにしたいなあ。

でも、超がいると未来は不幸になってるんだよなあ。

ふむ、ならば超が過去に来る理由を変えよう。

ネカネが密かに企てていた「逆光源氏計画」が成功し、ネギはネカネと結婚してしまう羽目となった。

だが、それでもハーレムを諦めることが出来なかったネギは、子孫として生まれる超に遺言を残すのであった。

「僕をネカネ姉さんの魔の手から救え」と。

そして残酷な過去を変えるために、超は過去へと向かう……………。

(作中ネギのお姉様好きはこの名残です)

それ、なんて「ドラ もん」?

の 太<sup>ニ</sup>ネギ? ドラ もん<sup>ニ</sup>超? 却下だ却下。

実はいいんちよ以上のシヨタコンであった超は、ご先祖であるネギの写真を一目見たときに心を奪われた。

そしてネギと結婚するために、超は過去へと向かう……………。

何そのカオス? 却下だ却下。

むう、どうしよう。……………そうだ、閃いたぞ!!!

なに嘴広鴻? 「超が未来から来ると誰かが不幸になる」?  
嘴広鴻、それは無理矢理超の出番を作ろうとするからだよ。逆に考えるんだ。

「超が未来から来なくてもいいさ」  
と考えるんだ。

ふむ。これで誰も不幸にならずに済む。

こんな解決法を考えたのは自分以外に誰もいまい。H A H A H A

H A H A H A。

……………。

.....。

.....麻帆良学園祭編、完っ！！！

なお、「出番のない超が不幸なんじゃね？」という意見は却下します。

多分こんなアホなネタ書いたのは自分だけだと思いましたが、もしこのネタが被っているところをご存知でしたらご一報お願いします。直ちに修正いたします。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「...」に修正しました



## 第十話 黒執事

こんにちは、ネギです。

メガロメセンブリアで政変が起こったそうです。まほネットで大騒ぎになっていました。

学園長やタカミチは何故かニヤついていましたが。

「その魔法式は違いますな、ネギ様」

「えーと、こうですかね？ ヴィルさん」

そして自分は今、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン元伯爵に石化魔法を教わっています。

というか、ヘルマン卿が教育されすぎです。自分をネギ様と呼ぶなんて……………。

……………どうしてこうなった？

いや、自分の不用意な一言のせいなんですけどね。

「ぼーや、今日はもう休め。根を詰めすぎたら出来るものも出来ないぞ」

「はい、そうですね。もうこんな時間ですし」

それは図書館島から本を借りて、石化魔法の勉強をしていたときでした。

石化魔法を学んで、それを取っ掛かりに石化治療薬を作るつもりだったのです。

しかし、悪魔の石化魔法なんてものは禁書にも載ってなく、自分で研究するしかありませんでした。

「役に立てなくてすまないな、ぼーや。治療魔法は苦手だな」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そうか、悪魔によって石化された人間をを治すなんて一朝一夕ではいけないんだ。

あせらずじっくりやるといい。

明日はせつかくの休日なんだ。また麻帆良と一緒に見て回ろう。

……………今度はタカミチ抜きでな」

「あはは、そうですね。気分転換も必要ですし。

でも、やはり難しいですね。麻帆良の図書館島にあった本でも、

“今までの方法では出来ない”ということの証明しかできてません。

まあ、間違いを減らすという意味では成功なんですけどね。正解

があるかどうか分からないのが痛いですが」

この次の言葉がいけなかったのです。

「ごめんなさい、ヘルマン卿。」

「いっそのこと、村の皆を石にした悪魔を召喚して、そいつに石化魔法を教わりましょうか」

「……………」。

……………」。

.....その手があったか。さすがだな、ぼーや。

ふむ、せっかくの休日だが、明日の麻帆良巡りは中止することにしよう。

確か伯爵級の悪魔だったな。

私とタカミチとジジイ、あとガンドルフィーニと刀子がいれば問題ないな。

あと結界を作るために一応瀬流彦も呼んでおこうか」

.....は？ あなたは何を言ってるんですか？

いや、そんだけいればオーバーキルでしょうけど。

「よし、ではちょっと連絡してくる。

ぼーやはもう寝る。明日は忙しくなるからな」

.....どっぴりしてこっぴつなっ！？

そして、次の日。  
エヴァさんの別荘に、自分たちと5人の先生が集まってヘルマン卿を召喚しました。

「魂ごと消滅させられなくなかったら、この子に石化魔法を教える」

「何を言ってるんだ、君たちは？」

短いやり取りの後、契約という名の拷問が開始されました。  
特にガンドルフィーニ先生が凄かったです。嫌なことでもあった  
んでしょうか？

召喚 消滅 召喚 消滅 召喚 消滅 召喚 消滅 以下エンド  
レス

という拷問がその後しばらく続きました。

消滅といっても魂ごとの消滅ではないので何度でも召喚させられます。

ごめんなさい、ヘルマン卿。

このエンドレスエイトが1日続いたころ、ヘルマン卿が何も喋らなくなりました。

別荘から出れる時間にもなったのですが、

「このままじゃ埒があかないな。ぼーやは一度外へ出る。

これからは大人の時間だ」

というエヴァさんの言葉によって、自分はガンドルフィーニ先生と刀子先生、瀬流彦先生と一緒に外に出ることになりました。

……………多分自分が見ていることで少しは手加減してたんでしょ  
うね。

ごめんなさい、ヘルマン卿。

別荘の外であなたの無事を祈ってます。

エヴァさんとタカミチ、学園長という麻帆良三強をそこに残して  
いく自分を許してください。

その後自分は3人の先生と休日をごすごしてました。

そしてここで衝撃の事実が発覚。

刀子先生は離婚してないそうです。

子どもはまだいないそうですが、仲睦まじいらしいです。夜には夕飯の準備があるので帰っていきました。

原作では離婚したせいで、再婚焦っていましたからね。良いことです。

ちなみに名字は“葛葉”でした。

はて？ 原作では離婚後も名字を変えなかったのでしょうか？

刀子先生と別れた後、自分とガンドルフィーニ先生と瀬流彦先生の男3人で夕食にいきました。

ガンドルフィーニ先生は家に帰りづらいそうです。

家族仲が悪いのか？ と不安になりましたが、何でも幼稚園の娘さんに彼氏が出来たそうです。ませてますね。

家に帰って娘さんと話しても、彼の話ばかりでいたたまれなくなるそうです。



強くもないのに酒を飲み、自分たちに愚痴をこぼしてました。  
ヘルマン卿に八つ当たりした結果、少しは気が晴れたようです。  
原作と違うのですが、これは良いことなんでしょうか？ 悪いこ  
となんでしょうか？

そろそろ帰らないといけないので、と瀬流彦先生にガンドルフィ  
ーニ先生を任して帰りました。

瀬流彦先生は縋るような目で自分を見てましたが無視です。頑張  
れ、瀬流彦先生。

朝起きたら、目の前に黒い執事がいました。

「おはようございます、ネギ様」

……ごめんなさい、ヘルマン卿。

自分はあなたを助けることが出来ませんでした。

まあ、外で無事を祈っていただけなんですけど。

エヴァさんに聞いたところ、教育が終わったので執事として働く  
そうです。

ダンディーなので執事姿が似合ってます。

石化魔法も自分に教えてくれるみたいですから、一緒に住むのは  
全然構わないのですが……。

「ネギ様。私めのことは“ヴィル”とお呼びください」

「……はい、これからよろしく願います。ヴィルさん」

……。

……。

……この流れって自分が悪いんでしょうか？

「これから発言するときは、もっとしっかりと考えてからするよう  
にします。」

## 第十話 黒執事（後書き）

ネギ、迂闊な発言で悪魔を無間地獄に落とす、の巻。

今日まで様子を見ていましたが、第九話のネタが被っているところは無さそうです。

このまま超鈴音を登場させずに進めていきます。

刀子先生の名字なのですがこれは独自設定です。

旧姓がどうなのかわからないので、こういうことにしておきました。

もし、旧姓がわかる人がいらっしやったら教えてください。青山？

139

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第十一話 弟子入り

こんにちは、ネギです。

今日はエヴァさんやタカミチと休日恒例の麻帆良巡りです。

昼食のため、最近オープンした店に入ろうとしたところ、

「このスープを作ったのは誰だっ!!!」

と厨房に殴り込む、カンガルーのオーラを背負った少女に遭遇しました。

.....。

.....。

.....嘘だっ!!!

「む、四葉先生があんなに怒るとは。この店はハズレか。  
別の店に行きましょう」

「そつだね。四葉先生があんなに怒るなんて滅多にないことだよ」

「……………え！？ あの人先生なんですか！？」

2 - A生徒の名簿で見た覚えがあるんですけど！？」

どつしてこつなつた！？」

「いや、確かに四葉五月は2 - Aの生徒だが、あの方は私の料理の先生でな。」

この学園にきてから15年間料理の修行をしてきたが、14歳のあの方にまったくかなわん」

「あまり言いたくない話なんだけどね。」

学生食堂の職員が食材のコストを黙って下げ、その差額をポケッ

トに入れる事件があっただよ。

それを四葉先生が一口食べただけで見破ってね。おかげで解決できたんだよ。

それ以来、四葉先生には頭が上がりなくてね」

「私は四葉先生が部長をしている料理クラブに所属していな。試食会ともなると参加者が抽選で選ばれるほど盛況になるよ」

……もしかしそのクラブ名って、「美 倶楽部」とかいいませんかね？

いや、やっぱりなんでもないです。

しょうがないのでエヴァさん行き着けのオープンカフェで食事することになりました。

エヴァさんが気に入るだけあって美味しいです。

それにしても原作と違ってきてしまいましたね。どうでしょう？

原作の大きな事件といえば以下の5つですね。

- 1 期末テスト
- 2 桜通りの吸血鬼事件
- 3 京都修学旅行
- 4 ヘルマン卿襲撃事件
- 5 麻帆良学園祭

……………あれ？ 1と3以外終わってね？

いや、まだ“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”が壊滅したとは限りませんが、だとすると4はまだ発生する可能性がありますね。

“2 桜通りの吸血鬼事件”はエヴァさんとは仲が良好ですし、起こるとしても命の危険はない訓練のようなものでしょう。もしかしたらエヴァさんが、

「どうして“お母さん”って呼んでくれないんだあつ！！！！」

とかヤンデレになる可能性があるので、十分に気をつけておきま  
すが。



“ 3 . 京都修学旅行 ” の事件は西と東の対立が原因ですから、  
コスモ・エンテレケイア “ 完全なる世界 ” がいなくても起こる可能性が高いです。  
やはりエヴァさんの封印を解いて、修学旅行に着いて来てもらわ  
ないといけません。

あ、でもタカミチが担任のままなんだからタカミチも来ることにな  
りますね。

エヴァさんが来れない場合、タカミチを頼ることにしましょうか。  
とはいえフェイトが本当にいないなら危険度は激減しましたね。

“ 4 . ヘルマン卿襲撃事件 ” は……………。

まあ、ヴィルさんが執事になってしまいましたけどね。  
他の人が襲ってくる可能性があるから京都修学旅行の結果次第な  
のは変わらずですか。

ああ、そつだ。

ヴィルさんから教わった石化魔法を発展させた石化治療魔法は、  
年明けまでには完成しそうです。

完成したらアーニャやアルちゃんを迎えに行くのに合わせ、村の

皆を治してしまいますか。冬休みには里帰りです。

他の転生者の皆さんはヘルマン卿を監禁したり、魔法を使うのを観察したりして、石化治療法を見つけるのがテンプレなんですが。

何が悲しゅうて石化させた張本人に協力してもらってるんですよ  
うか、自分は？

自分はただテンプレ通りに進めただけなのに。

“5・麻帆良学園祭”は超さんいらないから普通に楽しめますかね？  
それとも別の人が超さんの役割を果たすんでしょうか？  
ま、それなりに気をつけておきましょう。

あ、忘れてた。原作が始まる前から武術を学ぼうと思ってたんですよ。

今の自分はいわゆる後衛の“魔法使い”型の分類になります。

ネカネ姉さんの魔法授業のおかげで、患者には事欠きませんでしたから治癒魔法も得意ですし、砲台として『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風』なんかをぶつ放すことも出来ます。

モビルスーツ

MS再現能力による戦闘機さながらの高機動戦闘も出来るんですが、屋内などの限定された空間ではその特性を生かせません。

モビルスーツ

それにMS形態になると生身より小回りが効かなくなる分、懐に入られると弱いです。

モビルスーツ

MS形態では高機動戦闘に持ち込んで、ファンネルやビーム・マグナムを乱射しまくるのが良さそうですね。

やはりそうなると接近戦の技術が欲しくなります。

ビーム・サーベルを使用した剣術でもいいかな、とも思ったんですが、神鳴流に比べたらどうしても見劣りしてしまいます。

原作と同じ中国拳法でも良いのですが、どうせなら原作オリジナルの技を学びたいと思ったのです。

「そついえばタカミチ。お願いがあるんですけど」

「ん？ 何だい？」

「待て、ぼーや。何故タカミチに頼るんだ。

何か願い事があるんなら私に言え」

いえ、ただ単に『居合い拳』を学びただけです。

『居合い拳』ってかっこよくね？

「麻帆良に着てからは、教師になるための勉強と石化治療魔法の勉強で籠りっぱなしです。

その2つも目処が付いてきたので、体力作りも兼ねて体を動かしたいんですよ。

教師をするにも体力が必要でしょうし、エヴァさんにも「根を詰めすぎたら出来るものも出来ないぞ」と怒られてしまいました」

「む、確かにそんなこと言った覚えがあるな……………」

「それに昔、タカミチがパンチで滝を割るの見せてくれたことあったじゃないですか。

実は結構あれに憧れていたんですよ。

せっかくタカミチと一緒に仕事出来ることになったんだし、タカミチの時間の都合が良ければ僕に武術を教えてくださいませんか？」

「あはは、そんなこと言われると嬉しくなっちゃっね。

うん、いいよ。出張の予定も当分無いし、ネギ君に武術を教えてあげよう」

“懂れていた”の一言で上機嫌になりましたね。ちよろいもんです。

一方エヴァさんは不機嫌になってます。ついでにエヴァさんへの弟子入りもお願いしてみますか。

タカミチが側にいるなら、エヴァさんが暴走しても何とか止めてくれるでしょう。

「それとエヴァさんには、魔法を実際に運用する技術を教えて欲しいんです。

基礎はみっちり勉強したので自信がありますが、如何せん実際に魔法を扱う経験が僕にはありません」

「！ ああ、勿論構わんぞ。

ぼーやは基礎がしっかりしてるからな。今更基礎勉強はいらんだろつ。

そーなると、ぼーやほど魔力に恵まれた者に魔法を教えることが出来るのは、学園の中では私かジジイくらいだろつ」

「ありがとうございます。

石化治療魔法の勉強がありますので、本格的な弟子入りは村の皆の治療が済んでからでいいですか？」

よし、エヴァさんへの弟子入りOKです。

これで武術はタカミチ、魔法はエヴァさんに弟子入りです。

コスモ・エンテレケイア  
“完全なる世界”相手に警戒しすぎるに越したことはないですか  
らね。

それにこの肉体は修行すれば修行するだけ強くなっていきますか  
ら、修行のし甲斐があります。

なんだか転生してから勉強や修行が楽しくなりましたよ。

## 第十一話 弟子入り（後書き）

風邪引いてこの一週間ダウンしてました。

久しぶりに書いてみましたが、なんだか微妙な出来な気がしてきます。

もしかしたらこの話は後で推敲し直すかもしれません。

とりあえずで申し訳ありませんが、待っていてくれる人のために生存報告を兼ねて更新します。

# 3 / 20 修正しました

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第十二話 アスナ

おはようございます、ネギです。

ヴィルさんの使う完全石化魔法を習得しました。

あとは、この魔法を研究して石化治療魔法を完成させるだけです。

そして、皆さん。

ランニング中に神楽坂明日菜さんが煙草を自販機で買っているところを目撃したんですが、どうしましょう？

そっか、この時代タスポなんてものはないですよね……………。

じゃなくて、どういふこと？

えーと、原作のタカミチが煙草吸う切欠は、明日菜さんが望んだからなんですよね。



ガトウさんの面影の為に。

この世界のタカミチは煙草吸ってませんでしたけど。

……………自分で吸うから別にタカミチは吸わなくてもいいや、って  
ことですか？

クラス名簿の明日菜さんの写真は（、・・・）キリッ  
てましたが、もしかして不良ですか？

「さっきから何こっち見てるのかしら？」

やば、気付かれた。

「……………あら？ あなた、もしかして“ネギ・スプリングフィール

ド”っ

「は、はい。そうです」

お？ 馬鹿っぽくないですよ。

記憶有りの状態なんでしょうか？

「そう。タカミチから聞いてるわ。」

2 - Aの神楽坂明日菜よ。3学期からはよろしくね」

「はい。これは御丁寧にありがとうございます。」

3学期から2 - Aの担任補佐として赴任することになりましたネギ・スプリングフィールドです。

どうかよろしくお願いします」

「……………ナギとは随分違うのね。」

タカミチが武術を教えることになったと張り切ってたけど、ランニング中かしら」

ナギ知ってるってことは記憶有りですね。なんというかクールな方です。

“明日菜さん”というより“アスナさん”って感じです。

やっぱり原作でバカレッドになったのって、記憶を消したからなんでしょうか？

というかタカミチを呼び捨てですか。

……………既にタカミチと恋人になってるとか言わないでしょうかね。

「はい。ランニングです。」

神楽坂さんは、その、……………何で煙草を？」

「え？ ……………ああ、そのことを見てたのね。」

先生になるんだから当たり前か。

安心していいわよ。これはお父さんに頼まれたただだから」

……………お父さん？

「そうなんですか、失礼しました。」

知らぬことはいえ変な想像して申し訳ありません」

「かまわないわ。先生になるというなら、その方が良いと思うし」

「ありがとうございます。神楽坂さんはこちら側の関係者なんですね。」

その、……………神楽坂さんは自分の父と知り合いなんですか？

タカミチのことも名前で呼んでるみたいですし」

「……………そうなんだけど、何も聞いてないのかしら？  
だとしたら私からあまり言うべきことではないのだけれど。」

タカミチとは子供のころからの付き合いね。お父さんがタカミチの師匠だから。

ちゃんと学校では“先生”と呼んでいるから安心しなさい」

……………お父さんがタカミチの師匠？

タカミチの師匠っていったら、“ガトウ・カグラ・ヴァンデンバ  
ーグ”ですか。

生きてたんですか、あの人。

そうか、だからタカミチは煙草吸っていないのか。

ガトウさんが生きてるなら、アスナさんがタカミチに煙草を吸う  
ようにお願いしませんね。

「……………そうなんですか。」

でしたら結構です。変なこと聞いて申し訳ありません。」

「そのうち全てわかるから、焦らずに待っていなさい。」

「はい、わかりました。むしろその方がありがたいです。」

正直、麻帆良に来てから色んなことがありすぎたので」

ふむ、ガトウさんが生存ですか。

イスタンブールで“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”らしきテロリストを潰したのも、ガトウさんが関係してるんですかね？

元凄腕捜査官だったらしいですし。

うむ、頼りになる人が増えたのはいいことです。

「ああ、あなたも大変みたいね。

そついえば悪かったわね。

悪魔狩るのには私も声がかかったけど、中間テスト前だから断つたわ」

「……………え？ 神楽坂さんも、ですか？」

「一応タカミチの妹弟子だからね。だからあなたは私の甥弟子になるのかしら？」

まあ、技術はタカミチのほうが上ね。

だけど気と魔力量は私のほうが圧倒的に多いから、それを差し引けば互角。

あと数年で私が上、といったところかしら」

「……………いえ。エヴァさんとタカミチと学園長でオーバーキルでし

たのでお気遣いなく」

「そう、それじゃランニング頑張りなさいね。

私はお父さんに煙草を届けに行かなきゃならないから」

……………アスナさんがタカミチと互角？

いや、ウエスペルタイア王家の血筋引いてるから才能はあるだろうし、麻帆良に来てから護身も兼ねてずっと修行してたとしたらおかしくはないですね。

うわー、「完全魔法無効化能力」持ったタカミチが殴りかかってくると考えたら最悪です。

物理攻撃しか効かないからラカンさんぐらいしか勝てないのでは？

それにしても、クールな明日菜さん、っていうのもアリですね。

## 第十二話 アスナ（後書き）

ちょっと短めです。

明日菜のことを気にしてる人が多いみたいなので、予定を変更して早めに出しました。

ガトウさん生存です。作者はハッピーエンドが好きなので。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第十三話 学園長

こんにちは、ネギです。

もうすぐ2学期も終わりというときに石化治療魔法が完成しました。

ただ、消費魔力が多いので今すぐウェールズに帰って村の皆の治療というわけにはいきません。

これから毎晩マグナム弾に石化治療魔法を詰め込む作業が始まります。

年明けには数も揃うので、アーニヤとアルちゃんを迎えに行くときに村の皆の治療も行います。

いや、良かった良かった。ヴィルさんには感謝してます。

「それは良かったのぉ。」

伯爵級悪魔による石化の治療方法の確立なんて前代未聞じゃよ

「はい、ありがとうございます。学園長。」

これも学園長がエヴァさんたちと一緒にヴィルさんと“お話し”



してくれたおかげです」

うんうん、あれはあくまで“お話し”です。  
けっして拷問とかじゃナイデスヨ。

現在学園長室で経過を報告中です。

ウェールズに一時帰省する許可も貰わないといけませんし、ちよ  
うどタカミチも緊急の出張とかで時間が空いたのでした。

さすが学園長室。いいお茶といい和菓子です。

「ほっほっほ、なあに。たやすいことじゃよ。

ところでそのヴィルさんはどうかね？ 何か悪さをしていないか

ね？」

「いえ、毎日一生懸命働いてくれてますよ。

チャチャゼロさんも遊び相手が増えたと喜んでいます」

ごめんなさい、ヴィルさん。

自分はあなたを見捨ててます。

「しかし、その若さでたいしたものじゃ。ネギ君は治療魔法に適正があるのかの？」

今回のことはネギ君にもいい経験となったじゃろう。

ナギのような英雄と憧れるのもいいが、治療魔法使いとして人々の役に立つのも“立派な魔法使い”への道じゃ。<sup>マキステル・マキ</sup>

今回のことを糧として、より自分に向いた道を探すとよからう」

「そうですね。その道もいいと思います。

ただ今はやること全てが新鮮に感じるため、色々なことを経験してみたいという気持ちがあります」

「そうじゃろうな。

まあ、若いのだから今のうちに色々なことを経験してみなさい。焦ることはないのじゃ。君はまだ10歳にもなっていないのじゃからな」

エヴァさんのことやタカミチのこと、それに2人の修行でどんなことをしてるかも話しました。

いいですね、この感じ。落ち着きます。

何で学園長やヴィルさんみたいなジジイやオッサンの側が一番落ち着くのか、という疑問は心の奥深くに閉まっておきましょう。

エヴァさんマジで“お母さん”って呼ばれること諦めてくれない

かなあ。茶々丸さんは“坊ちやま”言うの止めてくれないかなあ。

..... フウ。マズイ、疲れています。

「大丈夫かね、ネギ君？」

「何だか疲れているようじゃが」

「いえ、疲れている、..... というわけではないです。

ただ気が抜けたといいますが、正直麻帆良に来てこんなに早く石化治療魔法が完成するなんて思ってもいませんでしたから。

「現実感があまり感じられませんね」

「ふむ、そうなのかね。あまり無理はしないようにお願いするぞい。ゆっくり休むとしなさい。」

「おお、そうじゃ。このあと何か予定はあるかの？」

「いえ、特にありませんね。夕飯までに家に帰ればいいだけです。

エヴァさんは料理クラブの集まりだし、茶々丸さんは定期メンテナンス。

「ヴィルさんは留守番で、チャチャゼロさんは僕のカバンで寝てますから、久しぶりにゆっくり一人で麻帆良でも巡ろうかと思ってま

した。」

「麻帆良巡りか。良かったらワシの孫娘達と一緒にどうかね？  
今ちよつど見合い用の写真を撮っていてな。もうすぐこちらに顔  
を出すじゃろつ」

学園長の見合い好きは相変わらずですか。

孫娘達ということは刹那さんも一緒ですかね？

「学園長のお孫さんというと2・Aの近衛木乃香さんですか？

僕自身としては構わないのですが、僕は担任補佐とはいえ3学期  
から教師となります。

教師と生徒が遊びに行くというのは問題ないのですか？」

「フオフオフオ、大丈夫じゃよ。

まだ教師になったわけじゃないし、9歳の君と遊びに行っても問  
題あるまい。

まあ、さすがに赴任した後では困るがの。特定の生徒を贖した  
ように思われたら困るからの。

予行演習と思ってくればよいのじゃ。

木乃香達は騒がしい2・Aの中では比較的大人しいほうでの。

もし木乃香達だけを相手するのでも駄目だとすると、3学期に2

・A生徒全員相手するのは無理じゃろつ。

聞いたところによると、ネギ君は幼馴染の女の子ぐらいとしか女の子と過ごしたことはないそうじゃないか。

ここは一つ練習と思って木乃香達と麻帆良巡りを楽しんできなさい  
「い

「アハハ……。確かにそうかもしれませんがね。

では木乃香さん達が了承していただけたらお願いします」

「こちらからお願いするのじゃよ。

木乃香は女子校育ちでの。

男に慣れてしまっても困るが、無菌培養では将来が心配なのじゃよ。

すまないが練習相手になってくれい」

「いえいえ、構いませんよ。

僕も木乃香さん達に2・A生徒を相手取る練習台になってもらうのですから」

木乃香さん達と会うことになりました。

さて、木乃香さんと刹那さんはどう違っているのでしょうか？

刹那さんはアルビノであることを隠してないようでしたが、それ

でも木乃香さんが魔法を知っているとは限りません。

ここは慎重に行きましょう。

このちゃんLOVEな刹那さんの前で変なことしたら斬られてしまつかもしれません。

何も知らない子供を装っていきましよう。

コンコンとノックの音がしました。

木乃香さん達でしょうか？

「入りなさい」

「失礼します。学園長。」

本国でこの前の政変の続きが起こったようです。

何でも大部分の元老院議員が拘束されたそうです」

………ナンデスカ、ソレ？

明石教授らしき人が言ってることがわかりません。

「これっ！ 入ってきていきなりなんじゃ！？」  
「ここにはネギ君もおるのじゃぞ！」

「え？ ネギ君が？」  
「つて、ああ、すみません。椅子に隠れて見えませんでした」

「……………どうせ僕は小さいですよ。何も知らない子供ですから。」

## 第十三話 学園長（後書き）

今回あまり話は動いていません。

ネギはヘルマン卿をボコった学園長に怯えています。

アンチとかにならないように人生の先達として学園長を書いてみました。

でも木乃香に見合いさせるのが好きなのは変わっていません。

次回、“木乃香と刹那”。

先に最終話が出来てしまったのですがどうしたらいいのでしょうか？

御意見・御感想お待ちしております。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました



## 第十四話 木乃香と刹那

こんにちは、ネギです。

学園長室から退出して、木乃香さん達を待っています。

退出する際に学園長たちが

「……………ゲーデル議員が……………」 「……………高畑先生がうまく……………」  
「……………これで……………」

とか話し合っていました。

そういえば何でタカミチは緊急の出張なんかあったんでしょうか？  
前にNGOの仕事はほとんど終わったようなこと言ってたんですが……………。

……………まあ、気にしませんし、わかりません。  
自分は何も知らない子供ですから。アハハ……………。

「君がネギ君？」

呼ばれて振り返ってみると私服姿の木乃香さんと刹那さんが立っていました。

相変わらず刹那さんは白い髪で、やけに柄が曲線を描いている長い日傘を差しています。

木乃香さんは、………あれ？

この前はすれ違ったただけでしたからわかりませんでした。魔力が感じられません。

「はい、ネギ・スプリングフィールドです。初めまして、近衛木乃香さんですか？」

「そうやよー。日本語うまいのやね。

英語そんなにわからへんからドキドキしてたわー」

「大丈夫だと言ったでしょう、このちゃん。」

ネギ先生は教師になるために麻帆良に来られた方ですから。  
初めまして、私は桜咲刹那と申します」

「初めまして桜咲刹那さん。

2・Aの担任補佐となることはご存知のようですね。

3学期からよろしくお願いします。

とはいえまだ教師ではありませんので、“先生”とつけなくても構いませんよ。

僕の方が年下ですし」

「いえ、そういうわけには参りません」

「せつちゃんは固いんやからー。ネギ君が困っておるえ。

それにしても大変やな、ネギ君も。

そんなに小さいのに学校の先生になるなんて。

お爺ちゃんから聞いたから、今日は麻帆良を案内してあげるえ。

ネギ君はどこか行ってみたいところとかあるん？」

刹那さんが裏の関係者っぽいのは立ち居振る舞いからして確定なんです。木乃香さんのほうがわかりません。

自分のような子供が教師になることを聞いても動じてませんが、原作でも似たような感じでしたからねえ。

かといって、迂闊な発言をしたら刹那さんに斬られそうです。だって、せつちゃん常に日傘の手元を握ってるから常に臨戦態勢なんですよん。

やばい。この傘なんかやばいです。

よくよく見ると傘生地が妙に分厚いです。完璧に日光遮ってます。

……ケブラー防弾繊維？ どの戦闘メイドですか？

“お嬢様の名に誓い、すべての変態に白刃を”、ですか？

竹刀袋に真剣入れてるよりやばいです。

「はい、今日はよろしくお願ひします。近衛さん、桜咲さん。

そうですね、出来れば生徒の皆さんが普段遊ぶようなところをお願いします。

タカミチやエヴァさんと何回か麻帆良巡りしてますけど、生徒の皆さんが行くようなところは行ったことないんですよ。」

まあ、いいです。自分は何も見てないですし想像してないです。

そしてエヴァさんの名前を出しても無反応ですか。

それに女の子と麻帆良巡りするのは楽しみです。

今までエヴァさんやタカミチとしかしてませんでしたからね。

あの2人と一緒だと落ち着いたところしか回りませんから、若者が普段遊ぶようなところは全然行かないんですよ。

しかも木乃香さんや刹那さんのような美少女と麻帆良巡り出来るなんてラッキーです。

2人と一緒に色々なところに遊びにいきました。

ボウリングしたりカラオケしたり、この刹那さんは原作と違ってこういう遊びも慣れてるみたいです。

“このちゃん” “せっちゃん” と呼び合って、まるで普通の女子中学生のようでした。

2 - A生徒のことも教えてくれました。

“バカレンジャー” ならぬ“バカ四天王” がクラスにはいるそう

です。

神楽坂明日菜さんがバカ連中から外れています。

会ったときにバカっぽくないと思ってましたが、やはりそうなんですね。

ということは原作でバカレッドになったのって、無理矢理記憶を消したからですか。

確かタカミチがアスナさんの記憶を消したはずですが、魔法が使えないタカミチは魔法符が何か使ったんでしょう。

けどアスナさんが持つ“完全魔法無効化能力”が変な風に働いて、頭がパーになってしまったということですかね？

……………タカミチ。余計なことしやがって。

というかあのクールなアスナ姫がバカレッドになるのって、そりゃなんか理由ありますよね。

ちなみに刹那さんも木乃香さんに勉強を教えてもらっているのって、原作と違い中の上クラスらしいです。

とはいえクラスのテスト成績が万年最下位なのは変わらないんですけど。

まあ、ブービーとは数点の差なので、ちょっと頑張れば期末テストは最下位脱出できそうです。

3学期からアーニヤも来ますから、より平均点がアップするでしょう。

よし、期末テストはこれで勝てます。

「今日はありがとうございました。」

ウェールズではこんな風に遊んだことなかったので楽しかったです」

「それはわかります。」

私も中学になるまで京都に住んでいたのですが、麻帆良に来てからこういふ遊びをするようになりましたから」

木乃香さんが御手洗いに行っているので刹那さんと2人きりです。今のうちに木乃香さんが魔法関係者かどうか聞くことにします。

しかし、どうやって聞きましよう？ 迂闊に聞くと地雷踏みそうです。

やはり日傘にツッコミ入れて、そこから話を広げていくべきですかね。

「ところで聞いてもいいでしょうか？」

その日傘、何というか、……………変わってますね？ 柄が妙に曲が

っていますし」

「ふふふ、聞かれると思ってました。

何度かこの傘を見て、微妙な表情をしてましたものね」

バレテラ。

いや、しかしセーフです。

刹那さんの表情を見る限り、ツッコミ入れてなかったら逆に失望されてた感じです。

「多分、ネギ先生が想像されているのであっていると思います。

誤解無いように伝えておきますが、私はこのかお嬢様の護衛なのです」

「桜咲さんはこちら側の関係者なのですか？」

「はい。

警備員としては働いていませんが、魔法の関係者ではありません。

このちゃん。近衛木乃香様は、関東魔法協会の理事である学園長の孫であるだけではないのです。

関東魔法協会に並ぶ日本の魔術団体、関西呪術協会の長の御息女



でもあるのです」

「ええ、それは聞いたことがあります。

確か関西呪術協会の長は近衛詠春さんで、僕の父とも知り合いだ  
そうですね」

「そう聞いています。

私はネギ先生の父君とはお会いしたことはありませんが、長が“  
アラルプラ紅き翼”時代のことを話しているのを聞いたことがあります」

「そうですか。

是非機会があれば父の話聞かせていただきたいと思いますね。

……しかし、関西呪術協会の長の御息女というなら、何故麻帆  
良にいますのですか？

それに近衛さんから魔力とかは感じられませんが、魔法関  
係者ではないということなのでしょうか？」

「そうだ、そこが問題です。

魔力が感じられないということは、原作ではナギ以上と言われた  
才能がないということでしょうか？」

「いえ、お嬢様は魔法のご存知ですよ。

魔力が感じられないのは魔力を封印する魔法具を使っているからです。

魔法の修行をなさるときは外してます」

「……………そうなんですか。まったく気づきませんでした」

「魔力を封印しているのは、お嬢様の魔力が強大すぎるからです。話によると先生の父君である“千の呪文の男”サウザンドマスターよりも強大だとか。強すぎる力は災いを呼ぶ、とのことで一人前になるまでは必要なとき以外は魔力を封印なされているのです。

お嬢様が麻帆良にいる理由は東と西の友好のためです。

長の御息女であるお嬢様が西洋魔術を習い、将来の東と西の友好の架け橋となるようにと。

悪く言ってしまうえば人質という表現になってしまいましたが」

「そ、そうなんですか！？ ……………人質、ですか。

その、近衛さんはそのことはご存知なのですか？

それに近衛さんが西洋魔術師になったら、将来の関西呪術協会の長には誰が？」

……………驚きました。こんなはつきり言うなんて。

え？ 大丈夫なの？ 人質なんてとつちやって？

東と西の仲が悪いどころの話じゃないのでは？

「大丈夫ですよ。」

関西呪術協会の長にはお嬢様の弟君がつくことになるでしょう。  
弟君の北斗様はネギ先生と同じ年ですね」

……………弟？ 北斗？

新キャラ登場ですか！？

「それに先ほどの理由は後付けなのですよ。」

長はその、……………子煩悩といえますか、お嬢様に非常に甘いとい  
いますか」

確かに原作でもそんな感じでしたよね。

というか学園長も金槌で頭殴られても何も言わないとか、あの2  
人木乃香さんに甘すぎです。

「それを憂いた奥様が「これでは木乃香のためにならない」と仰られまして。

お嬢様を学園長がいらっしやる麻帆良に留学させることになされたのです」

奥様ってことは、木乃香さんのお母さんご存命というわけですか。弟さんが生まれているということなら、そりゃお母さんも生きてますよね！。

あれですか？

学園長と長が原作で木乃香さんに駄々甘だったのは、娘と妻の忘れ形見だったからですか。

「それでも長も落ち着かれました、今は精力的に関西呪術協会の長の勤めを果たしておられます。

といっても口が悪いものは奥様の方が長だと揶揄しますが……………」

元から婿養子でしたからね！。

弟さんが自分と同じ年ということとは9歳。

木乃香さんが小学生のときに麻帆良に来たということですから、

その頃にはもう弟さんは生まれてますね。

東のことが嫌いな西の強硬派も、男の子が西に残るならまあいいか、とでも思ってたんでしょうか。

確か原作で西と東の仲の悪さの原因の一つに、西の長の一人娘である木乃香さんが東にいる、というのがあったはずです。

でも弟さんがいて西に残っているということから、修学旅行で木乃香さんを取り戻そうとする強硬派がない可能性がありますね。

サウザンドマスター

“千の呪文の男”よりも強大な魔力というのは惜しいでしょうが、古い組織だけに長になるのは女性より男性優先なのでしょう。

そもそも男性優先じゃなかったら婿養子なんて取らず、木乃香さんの母親が長になってます。

弟さんの才能がどれほどのものなのかわかりませんが、西に木乃香さんが残っていたら、

“ 実力重視の姉派 VS 慣習重視の弟派 ”

なんて内部抗争に発展する恐れすらあります。

そう考えると、木乃香さんを麻帆良に留学させるといっなのは長の親馬鹿だけが原因とは考えられませんね。

これはあくまでも自分の想像の話ですが……………。

「お待たせー。次はどこに行く？」

まあ、京都修学旅行の安全が高まったのは良いことです。

せつかくの休日です。今は美少女2人とのデートを楽しむことに  
しましょ。

「そついえばエヴァちゃんが「ぼーやに“お母さん”と呼ばれてみ  
せるー！ー！」って張り切ってたけど、呼んであげないのかえ〜？」

「1J、1Jのちゃん……」

「……………その話題はマジで勘弁してください」

エヴァさん、もしかして2・Aで自分のこと話してるんじゃない  
でしょうね？

帰ったら問い詰めなければ。

## 第十四話 木乃香と刹那（後書き）

「木乃香と刹那」というサブタイトルなのに、せつちゃんばかりです。

せつちゃん好きということもありますが、京都弁がわからないのです。

書き辛い書き辛い思ってたなら、こんな風になってしまいました。  
看板に偽り有りです、ごめんなさい。orz

別にせつちゃんは“ヤンデレ”とか“猟犬”だったりするわけはありません。

“アルビノ” “日光に弱い” “日傘” “仕込み傘” と思いついただけです。

このちゃんのスキンシップに慣れている分、原作よりテンパったりすることが少ないぐらいでしょうか。

弟の名前は

“詠春”でググる “詠春拳 - Wikipedia” がトツ  
ブ “ブルース・リー” が使ってた “ホワター！” “ケンシ  
ロウ” “北斗神拳” “北斗”

といった感じで連想ゲームで決めました。



特に意味はなく、今後の重要キャラとなるわけではありません。  
というか今後出る予定もありませんww

なんだかハッピーエンド好きとはいえ、ガトウといい木乃香母と  
いい、生存キャラが多すぎでしょうか？

木乃香母の名前を知らないなので、作中では“奥様”で通しました。  
もしかしたらこのオチは、前話あとがき予告の「木乃香と刹那」  
から予想されてた方がいらっしやるかもしれませんね。

作者なりに木乃香が麻帆良にいても問題ない理由を作ってみまし  
たが、いかがでしょうか？

それにしても誰かのヤンデレ化を望んでる方がいるみたいだけど  
どうでしょう。

誰か考えてみますか。具体的には修学旅行での出番が限りなく低  
くなった天ヶ崎千草とかw

御意見・御感想お待ちしております。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第十五話 クリスマス

「今日は待ちに待ったクリスマスだぞっ、ぼーや!!!」

吸血鬼がクリスマス祝うなよ。

テンション高いですね、この人は。

「ちやんとご馳走も用意したぞ！」

七面鳥のローストもクリスマス・プディングも用意した。

味は四葉先生からのお墨付きだっ!!!」

ちやんとアーニヤやネカネ姉さんにクリスマスカード届いたのかなあ。

とはいえウエールズはまだ朝の8時ですから、郵便はまだ配達されていませんか？

「……………こ、このクリスマス・プディングはぼーやが家に来てすぐに作ったものだ。」

熟成されていて美味しいぞ!!!」

あとで電話しないと駄目ですね。

考えてみれば手紙ばかりで、2人の声を聞いてません。

日本とイギリスの時差が9時間と言うのが中途半端なんですよねえ。

「え、えと、…………ク、クリスマスツリーも大きいのを用意したんだが、大きすぎてしまっただ。家に入らなかつたんだよ、ハッハッハ。」

家の外に置いてあるから見に行かないか？」

そういえばアルちゃんどうしてるんでしょうか？

いくらアーニヤとの仲が良いといっても、アルちゃんは自分の使い魔ですからね。

アーニヤに任せっぱなしだと主人として駄目です。

うん、電話したときに声を聞かせてもらいましょう。

今の自分ならアルちゃんにも自然に接することが出来る気がします。

「……………タ、タカミチに採ってきてもらったんだが、タカミチは馬鹿だな。家の大きさがわかっておらん。」

どーせ、ぼーやに良いところを見せようと考えたんだろう」

「タカミチは張り切りすぎると空回りするらしいですからね。」

尤も「木乃香の弟は9歳か。そのぐらいの年頃の男の子から“お母さん”と呼ばれるにはどうしたらいいのだろう?」「なんて、

よりもよって教室で相談する人よりはマシじゃないですか?」

「……………私が悪かった」

絶望した!!!

エヴァさんが自分の母の座を狙っているということが、既に2・Aに知られていることに絶望した!!!

しかも、よりもよって朝倉和美さんババラッチに得意満面に語るとは何事ですか!?

「エヴァさん、僕は言いましたよね。  
担任補佐となる僕が生徒のことを“お母さん”と呼ぶのはおかしいって」

「……………う、うん」

「じゃあ、何でそんな相談を教室でするんですか？」

「い、いやな。」

木乃香が弟のこと話しててな。9歳という難しい年頃なんだそ  
うだ。

実家に電話をしても「恥ずかしい」といって電話に出てくれない  
とか。

その話から色々と話が弾んでいって……………、その、なんだな」

どうしたらいいんでしょうか、この状況？

木乃香さんと刹那さんと遊び終わった後、家に帰りエヴァさんを問い詰めたら目を逸らされました。

やっぱり喋ってたようです。

それからアスナさんや木乃香さん達と連絡を取って状況を調べたところ、エヴァさんは朝倉和美さんに色々パパラッチと語っていたようです。

それ以来、エヴァさんとはクリスマスまでの今日まで会話しませんでした。

「ハア、2・Aはお祭り好きと聞いてますけど、その相談の結果どうなったんですか？」

「ぼ、ぼーやの話題で持ちきりになったぞ。

きつとクラスの皆は3学期からぼーやのことを暖かく迎えてくれるはずだ、ハッハッハ。

「……………ごめんなさい」

「事態の沈静化をエヴァさんをお願いしたいのですが」

「……………わかった、なんとかやってみる」

おそらく今晚、幼女なサンタクロースが2 - A生徒に暗示というプレゼントを振りまくことになるでしょう。

それとアスナさんや木乃香さん達、アルカナさんに口止めしておかなければいけませんね。

「お願いしますね、エヴァさん。」

ではこれをどうぞ。一緒に住んでるので手渡しですがクリスマスカードです」

「！ くれるのか！？ ありがとう、ぼーや！……！」

「はい、エヴァさんにはお世話になってますからね。」

昼は簡単なものしか食べてないのでお腹がすきました。少し早いですけど夕飯にしましょうか」

何だか最近自分が“まるで駄目な男の子”、略して“マダオ”になってきたような気がしますけど、

………気のせいですよね？

「………そんな感じですか。毎日色々大変だよ」

「ふーん。まさか“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルと一緒に暮らすことになるなんて夢にも思わなかったけど、優しそうな人でよかったわ」

クリスマスパーティーを一時中座してアーニヤに電話しています。  
アーニヤの声を聞くのも久しぶりです。

「アハハ、まあエヴァさんの噂が噂だからね。  
アーニヤのことはエヴァさんに話したけど、

「ぼーやの妹のような子なら私にとって娘のようなものだ。ちゃんと面倒みてやるよ」



って言ってくれてるから大丈夫だよ」

「ちょっと！　なんで私が妹なのよ！？　あんたの方が年下でしょが！？」

「ん？　えーと、背丈からいくとそうなるかな？」

「くっ！　ネギ本当に背が伸びたんでしょうね！？  
帰ってきたとき全然変ってなかったら怒るからね！？」

「いや、本当に日本に来てから急に伸びたんだよ。  
日本のご飯が美味しいせいかな？　ウェールズにいるときよりたくさん食べるようになったし、武術も始めたからね。  
ウェールズにいたときより健康的な生活を送ってるよ」

本当に背が伸びています。この数ヶ月で5cmは伸びましたね。やはり日本のご飯が美味しいからです。  
メルディアナ魔法学院の食事は流石イギリスというか、大味でしたから。

前世が日本人の自分には合わなかったのです。

「まあいいわ。」

それより本当に村の皆を治せるようになったんでしょっかね？」

「大丈夫だよ。ヴィルさんに手伝って貰ったおかげで無事に完成した。」

ねずみ相手の動物実験でも成功したよ」

「その“ヴィルさん”ってのが信用できないんでしょーが！  
村の皆を石にした張本人なんでしょっかねっ！」

アーニヤの言うことは尤もです。  
尤もなんですが。

「……………アーニヤ。」

もし“3人のネカネ姉さんにフルボッコにされた人が「何でもしますから許してください」と言った”ら信じるだろうっ？」

「……………ごめん。それは確かに信じるわ」

「大丈夫だよ。」

生まれ変わったヴィルさんは、毎日涙を流してエヴァさんの下で働いてるから」

「それって、……………いや、なんでもないわ」

「うん。年明けにウエルズに帰るから待っててね。」

タカミチも一緒に着いてきてくれて、アーニヤが麻帆良に来る準備も手伝ってくれるってさ」

「あら、そうなの？」

そういえばそのときにネギにお客様が来るらしいわよ。おじいちゃんと言ってたわ」

……………お客様？ 誰でしょう？

まあ、向こうで会えばわかりますね

「うん？ ああ、ごめんね。  
アルちゃんもネギとお話したいわよね」

「お久しぶりです、お兄様。無理はなされていませんか？  
お兄様は自分のことを忘れるときがありますからお気を付けくだ  
さい」

「……………うん、大丈夫だよ。……………アル、ちゃん」

さっき「今の自分ならアルちゃんにも自然に接することが出来る  
気がします」とキツパリ言っただけだったのに、スミマセン。  
ありゃウソでした。

次の日の朝、外に出たらサンタクロースの格好したタカミチが氷  
漬けになっていました。

そういえば、確か24日はクラスのクリスマス・イヴ・パーティ  
ーに参加して、25日はこちらに顔を出すと言ってましたけど、結  
局顔を出しませんでしたね。

思えば昨日の夕飯のときに魔法の発動らしきものを感じました。  
どうやらエヴァさんのトラップに引っかかってしまったようです。  
エヴァさんとタカミチは仲が良いのか悪いのかわかりません。

……とりあえず家の中に運び込んでおきますか。

## 第十五話 クリスマス（後書き）

季節外れのクリスマス編終了です。

「ガトウといい木乃香母といい、生存キャラが多すぎでしょうか？」

と前回書きましたが、ツッコミが入る前にこの場で謝りたいと思います。

“龍宮コウキ”も生存させたのを素で忘れてましたwww

先日読み返していて「あ。」とと思いましたね、ハツハツハ。

# 5 / 20 全話「・・・」を「∴」に修正しました

## 第十六話 おおみそか

こんばんは、マダオです。じゃなくて、ネギです  
エヴァさんは無事に2 - A生徒に暗示をかけることが出来たそうです。

といっても、アスナさん達のような魔法関係者は無理でした。  
アルカナさんと会ったとき、ニヤニヤと笑いかけられてしまいました。

……憎しみで世界を滅ぼすことが出来たらいいのに。  
アスナさんや木乃香さん達が慰めてくれたのが唯一の救いです。

そういえば確か、春日美空さんも魔法生徒でしたか。  
3学期が始まる前に是非お話ししないと駄目ですね。あの人悪戯好きですし。フフフフフ……。。

春日美空さん、あなた覚悟してる人ですよね。

人に悪戯しようとするって事は、  
逆に悪戯されるかもしれないという危険を、  
常に覚悟している人ってわけですよ。

「フオツフオツフオ、大変じゃったのう、ネギ君」

「まったく、しょうがないなあエヴァは」

「笑い事じゃないですよ、学園長、タカミチ」

現在12月31日23時30分、学園長の家でコタツに入って又  
クヌクとしています。

考えてみると、日本に来て畳の部屋で過ごすのは初めてです。

なんで学園長の家で年越しするのかというと、エヴァさんのトラ



ツプにはまり、氷像としてクリスマスの夜を過ごすことになったタカミチのためです。

『咸卦法』全開のタカミチと、自分が渡したクリスマスカードを誇らしげに見せびらかすエヴァさんの睨み合いはガクブルものでした。

このままでは正月をどこで過ごすか決める麻帆良大戦が始まりそうだったので、

「せっかく日本に来たので、年越しは日本風に過ごしたいです」

と自分をお願いして、学園長の家にお邪魔することとなりました。

何かもう、何も知らない子供の振りをするの疲れてきました。コン君の気持ちが良いかわかりません。

エヴァさんとタカミチは喧嘩仲間というか何とか、仲悪いわけじゃないんですけどねえ。

元同級生の悪友って感じです。

まあ、それはいいんですが、

「しかし、エヴァンジェリンも本当に変わったなあ。最初会ったときの“闇の福音”<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>と呼ばれていた時代とは大違いだ。まさか彼女が作る年越しソバを食べるなんて考えたこともなかったぞ」

「ハハハ、師匠は出張ばかりで、たまにしかエヴァと会ってなかったスからね。」

「僕は同級生でしたから、毎日のように見てたらアレが普通と思うようになったスよ」

「しかし、今のキティも大変可愛らしいのですが、昔のキティが懐かしいですね。」

「ちょっとからかっただけで顔を真っ赤にして怒ったのに、今では逆に惚気てくる始末です。」

「からかいがなくなっちゃってしまいました」

「からかうのは勘弁して欲しいの、アル。」

「お主がからかった後始末に何度苦労したと思っている」

「何でガトウさんとアルさんが一緒に年越ししてるんでしょう？  
学園長の家で普通に紹介されて、普通に一緒に年越しする  
ことになりました。」

原作を知っている身としては違和感しか感じられません。

いや、自分もどういふことが聞きたかったですよ。でもね、

「始めまして、ネギ君。

神楽坂ガトウだ。昔は“ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ”って名前で君のお父さんと一緒に働いていたんだ。

娘のアスナとは会ったんだってな、よろしく頼む」

「こんばんは、ネギ君。

アルビレオ・イマといいます。私も君のお父さんの仲間ですよ」

「……………え？ はい、ネギ・スプリングフィールドです」

で会話が終わりましたよ。どう聞けっというのです？

そしてタカミチのガトウさんに対する口調にも違和感バリバリです。原作通りなんですけどね。

若い頃のタカミチならともかく、今のタカミチの老け顔で「ス」とか正直似合わないッス。

それにしてもこの部屋平均年齢高いですね。

台所でソバ茹でてるエヴァさんも加われば文字通り一桁跳ね上がりますが。

……………ミカン甘え。

「ネギ君、どうしたんだい？」

いきなり通常モード戻んな、タカミチ。

それともアツチの口調が通常モードなんですかね？

「いや、ちょっと現実逃避を少しばかり。」

そんなにエヴァさんは今と昔で違うんですか？」

「ああ、昔のエヴァンジェリンを知らない君を置いてきぼりにして  
たな、すまん」

「そうですねえ。」

違うことは違うんですが、あまり本質的には変わってないでしょ  
うね。

今まで威嚇ばかりしてきた子猫が甘えてくれるようになった、と  
いう感じでしょうか」

「そんなところじゃろうな。」

それに今年はアスナ君や木乃香達といった事情を知っている子が  
クラスメイトに多い上、ネギ君の協力のおかげで『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』が解  
呪できるからのお。

より明るくなったわい」

「そうなんですか。」

そういえばアスナさん達は一緒じゃないんですね。クラスの人達  
と年越しをするのでしょうか？」

「ん？ アスナは龍宮神社でアルバイトって言ってたぞ。」

何だ、ネギ君。アスナに興味あるのか？」

「いやいや、ネギ君が興味あるのは木乃香じゃな。大和撫子の言葉がピッタリじゃからの。この前デートもしたのじゃし。」

ちなみに木乃香もアルバイトじゃな。刹那君に巫女服を着せたいとか言っておったぞ。」

「……………大和撫子は友人に巫女服を着せたいと言わないと思いますよ、学園長」

巫女服いいですね。特にクールなアスナさんの巫女服姿は見てみたいです。

よし、初詣に龍宮神社に行くとしましょう。

「10歳にもなっていないのにそんなこと考えたことありませんよ。皆さん美人だと思いますけどね。」

僕よりもタカミチはどうなんですか？ もう30じゃないですか」

でもぼく萌えとかわかんない。9さいだもん。

……………うん、無いですね、このキャラは。

とりあえずタカミチを生贄に捧げておくことにします。

「お、そうだな。タカミチどうなんだ？」

確か同僚の女教師と茶飲んでるの見かけたこと何回があったぞ」

「ちょ、何言ってるんすか、師匠。ネギ君の前で」

「しずな先生のことじゃな。高畑君も隅に置けないのお」

「フッフ、あの小さかったタカミチ君にも春が来たのですか」

よし、このメンバーだったらタカミチも弄られる側です。

タカミチを生贄にして、自分は安全圏にいきましょう。

「おい、ソバ運ぶの手伝ってくれー」

あ、年越しソバだ。

「じゃ、僕が行ってきますのでお話しを続けていてください」

「おお、頼む。」

ホラ、キリキリ吐け。師匠命令だ」

「ちょ、ネギ君！ マジで勘弁してくださいっス、師匠！」

「フッフ、ネギ君もちゃっかりしてますねえ」

「高畑君はもうちょっと搦め手に強くなればいいのじゃがのう」

これ以上狼の群れがいる部屋にいられますか！  
自分は台所に逃げさせてもらいます！

「これを運べばいいんですか？」

「ああ、重いから気をつけてな」



そういえばソバって日本に来て初めて食べますかね？  
エヴァさんの料理は洋食が多いからしょうがないんですが。  
今度エヴァさんに頼んで日本料理も作ってもらいましょうかね。

「フフフ……………」

「エヴァさん、どうしたんですか？」

「いや何、こつやって手伝ってもらつところなんて“親子”っぽい  
など思つてな。

そう思わないか、ぼーや？」

「ア、アハハ……………、どうなんでしょうか？」

……………狼の群れから逃げれたと思つてたら、虎穴に逃げたでござる。  
コンチクシヨウ。

「明けましておめでとうございます。  
今年からよろしく願いします」

「明けましておめでとう。」

何、ぼーやならつまくやれるわ」

「明けましておめでとうございます。」

うん、大丈夫だよ。僕もフォローするからさ」

「明けましておめでとう。」

フォッフォッフォ、期待しておるぞ、ネギ君」

「明けましておめでとうございます。」

私は普段は図書館島の奥にいますので、たまに顔を出してくださいね。

まだ療養中なのであまり役に立てませんが、相談くらいには乗れますよ」

「明けておめでとう。」

アルにはあまり相談しない方がいいんじゃないのか？

ネギ君がアルの影響を受けたらどうする？」

除夜の鐘が鳴り終わり、2003年が始まりました。

原作開始の年です。冬休みが終わるまでは時間があるとはいえ、ドキドキします。いよいよです。

「ネギ君は来週にウエールズに帰るんだっ たな」

「はい、村の皆の治療のために。」

それと3学期から修行で麻帆良中に通うことになった幼馴染の迎えです」

「僕もそれに着いていくっス、師匠」

……………この口調のタカミチだと。春日美空さん出てきたときに困りますね。

いや、メタな話はやめておきましょう。

「それにしても、伯爵級悪魔による石化すら治すことが出来る石化治療魔法ですか。

興味深いですね」

「うむ、それだけのことで“マギステル・マギ偉大な魔法使い”と呼ばれても正直おかしくないぞい」

「いえいえ、ヴィルさんの手助けがあつての話ですよ。

自分一人じゃこんな早く出来ませんでした」

それと学園長達によるヴィルさんへの“お話し”ですね。  
いや、思い出しちゃ駄目だ、自分。

自分が魔法球から出た後のことは、自分は何も知らないんですから。

「ぼーやは謙虚だな。

しかし、度が過ぎれば力が無い者にとっては嫌味にしか聞こえん。確かに私達の助けがあつたとはいえ、“ヴィルから石化魔法を教わる”というそもそもの発想はぼーやのものなんだ。

それは誇るべきだろう」

いや、発想というより、ただの冗談のつもりだったんですが……  
でもそういうことにおかないと、ヴィルさんが冗談のせいで  
無間地獄に落ちてしまったことになるので黙ってますけどね。

「ネギ君は柔軟な発想が出来るんですね。それは魔法使いとして良いことです。

ナギのように何でもかんでも力技で済ませるといのは本当はいけないことですから」

「確かにそうだな。

例のプランだって、ネギ君の発想からヒントを得たんだろう」

……例のプラン？

「例のプランってなんですか？」

「そうか、ネギ君には話していなかったね。

まだ詳しくは話せないんだけど、今“魔法世界”では問題があったね。

それを解決するヒントを、昔ネギ君と話したときに貰ったんだよ。ヒントというより直球な答えだったんだけど」

“魔法世界”の問題？ それって、火星の魔力枯渇による“魔法世界の崩壊”のことですよ？

自分いったいタカミチに何言った？

“魔法世界の崩壊”を食い止めるような話なんかしてませんよ？  
火星のテラフォーミングとか、そんなチートオリじゃないですよ。世界樹の力を使う能力なんかも持ってないですよ。自分は。

「それは初耳だな。」

というよりぼーや自身もなんのことかわかっていないぞ」

「ハハハ、まあ話せるようになったら話すよ。僕よりも説明に向いている人もいるし。」

大丈夫だよ、悪いどころか良い話だし。今は村の皆のことを考えていればいいよ」

「は、はあ、そうですね。わかりました。」

その内話してくださいね」

駄目だ、さっぱりわかりません。

いいです。この並行世界は自分の知っている原作とは違うんです

から、わからないことがあって当然でしょう。うん、そうですね。  
今はタカミチの言つとおりに村の皆の治療を考えてみましょう。  
諦めても、そこで人生終了ではありません。

「ま、なんにせよ。せつかくの里帰りだ。ゆっくりとしてくるがい  
いじゃろ。」

お姉さんや幼馴染にその伸びた背を見せてきなさい」

「はい、アーニヤやアルちゃんにも久しぶりに会いますから楽しみ  
です」

「……………“アルちゃん”、ですか？」

やば、地雷踏んだ。

“アルさん”が“アルちゃん”に反応しました。

## 第十六話 おおみそか（後書き）

自分で書いといてなんですが、本当にこのタカミチの口調が違和感ありすぎです。

原作でもガトウさんと最後に話すシーンがこんな感じだったので、間違っではないはずだとは思いますが、何故か間違っていると思います。

“魔法世界”云々については、作者なりの“魔法世界の崩壊”の対処のことです。

ご都合主義な方法ですので恐縮ですが、近いうちに明かされますので楽しみにお待ちになってください。

あえて言うなら

「パンが無ければ、ケーキを食べればいいじゃない」

的な発想です。

出来れば感想でのネタバレ的な予想はお控えください。

御意見・御感想お待ちしております。



# 5 / 2 0 全話「・・・」を「・・・」に修正しました

## 第十七話 元日

「明けましておめでとございます。」

わあ、これが巫女服ですか。巫女服サイコーきれいですねー！」

「明けましておめでと。」

……何か邪念を感じたんだが？」

「？ マナちゃん、どうしたん？」

「明けましておめでとございます、ネギ先生。」

早いですね、まだ7時前ですよ」

「明けましておめでと。」

お父さん達はどうしたの？ 一緒に年越しするって聞いていたけど」

学園長から提供という名の強奪をされた秘蔵のお酒のせいで、ア  
ルさんを除いて全員夢の中です。

吸血鬼であるエヴァさんすら二日酔いで動けないとか、いったい

どんな酒を集めてたんですか、学園長？

特にタカミチは尋問のため、次から次へと飲まされてグロッキーです。

こんな有様ではおせちを食べることが出来そうにないので、台所を借りて適当に朝食を作ってアルさんと食べました。エヴァさん達用に雑炊も作っておいたので、起きたら勝手に食べてくれるでしょう。

アルさんもかなり飲んでいたんですがケロツとしていました。やはり普通の人間ではないみたいです。

ちなみにアルさんは朝食を食べ終わるとカメラを持ってニヤリと笑い、エヴァさんが二日酔いで苦しんでいる部屋に消えていきました。おそろくうんうん唸っている寝顔を撮られることとなるでしょう。

自分は朝早くから龍宮神社へと参拝です。遅くなったら混むでしょうからね。

「皆さんまだ寝てますよ。今朝までずっと飲んでたみたいです。多分昼過ぎてからでないと起きないですね。僕は途中で寝ましたから大丈夫でしたけど。」

特にタカミチは随分とガトウさんに飲まされていたみたいです。

僕は朝早くに目を覚ましたので、散歩がてら参拝です。

皆さんがここでアルバイトしてるって聞きましたので」

アルさんが写真を撮るのを止めなかったアリバイ作りじゃナイデスヨ。

「そうなの？ まったく、いい年して何してるんだか。帰ったらキツク言っておかないと。」

まあいいわ、あなた日本初めてなんでしょう。参拝の仕方とかわかるのかしら？」

そう言っつて、溜息ついたのはアスナさん。

下ろしたオレンジの髪が巫女服の白に映えて似合ってます。

原作の元気一杯な性格も良いですが、このクールな性格も良いですね。しかも微かに笑っているのが非常に、ディ・モルト非常に良いです。

表情だけで「もう、しょうがないなあ。お父さんは」と考えてるのがわかります。呆れるだけじゃない、隠しきれない親娘愛を感じます。

明石祐奈さんみたくベツタリじゃないみたいですけど、お父さん大好き人間みたいです。

「そついえばそつだな。」

神楽坂はこれから休憩だろう。案内してあげたらどうだ？

この時間帯ならまだ参拝客も少ないだろうから、少しくらい休憩を伸ばしても構わないよ。」

原作でも巫女服を着ていたアルカナさんは着慣れているようで、ビシッときまっています。まるで本当の巫女さんのようです。

あ、いえ、本当に巫女さんです。巫女さんですから、その袂に入れた手を出してください。撃鉄が鳴る音なんか聞いてませんから。エキゾチックな美しさが、合わないと思われそうな巫女服に逆に合っています。体型が目立たない和服のはずなのに、中学生と思えないグラマラスなボディを隠しきれていません。

やっぱり、年齢詐げフン、ゲフン……………。

「久しぶりやなー、ネギ君。また今度一緒に遊びにいこな。」

残念やけどさっき休憩終わったばかりやから、今は案内出来ひんわ。」

THE・正統派巫女さんの木乃香さん。やはり大和撫子はいいですね。

和服を普段から着慣れているせいか、歩き方が他のアルバイト巫女さんとは違います。“しずしず”という擬音が似合う歩き方です。

巫女服の紅白と絹のような長い黒髪のコントラストがいいです。というか関西呪術協会の長の娘が巫女やってる神社って凄くご利益ありそうです。よし、後で御神籤引きましょう。

「そういえばウェールズに一時帰郷なさるらしいですね。事情を聞きました。おめでとunggざいます、ネギ先生」

いつものサイドポニーテールじゃなく、髪を下ろしている刹那さん。何だか髪を下ろしていると幼く見えます。

アルビノなので肌も髪も雪のように白く、目がルビーのように赤いのですが、それがまた巫女服の白と赤に合っています。

原作でのキリツとした表情も良いですが、この柔らかい表情も素敵です。原作では木乃香さんぐらいにしか見せないような笑顔を振りまいてくれます。

この人も和服は剣道着などで着慣れているためか、本職の巫女さんのように見えます。

鳥族の女の子の巫女服に似た服は背中が開いているんですけどっけ？ そっちも機会があるのなら是非とも見てみたいものです。

でもアルバイトのときぐらいはその仕込み日傘は置いておきましようよ。お願いですから。

「甘酒です、どうぞアスナさん」

「悪いわね。頂くわ」

「いえいえ、案内してくれるんですからこれぐらい。エヴァさんと学園長からお年玉も頂いたことですし。」

まあ、9歳とはいえ今年から社会人になるので、お年玉貰うのも変な話ですが」

「ウフフ、貰える間は貰っておきなさい。」

大人になったら貰いたくても貰えなくなるのだから」

勿論頂戴できるものはものはありがたく頂戴しますよ。

グロッキーな状態でもお年玉をくれるためだけに起きてきたエヴァさんと学園長には感謝します。

タカミチとガトウさん？ 誰でしたっけ、その人達？

「そういえば、遅くなったけどおめでとう。故郷の人達を元に戻せるんですってね」

「はい、ありがとうございます。」

来週にもウエールズに戻って、村の皆を元に戻すことになりました」

「9歳の身空で大したものだわ。若いつて凄いわよねえ。」

うちのクラスにも凄いのがいるけど、あなたもその一人なのかしらね」

いや、あなたも若いでしょう？ って言おうと思いましたが、  
そういえばこのアスナさん記憶があるんです。

“黄昏の姫御子”として成長を阻害されていたためか、実年齢と見た目があってないんですよね。

20年前の大戦時には既に子供の姿で、“自分と同じで実際の年齢と見た目が違うかもしれない”というようなことをアルさんが言っていましたし。

むむ！ となると、エヴァさんと同じロリババアというわけです



ね、わかります。

「……………何か不愉快なこと考えなかったかしら？」

「えー!? いえいえいえいえ！ クラスの凄い人って誰かな？  
と思っただけですよ。」

今年、じゃなくて去年のウルティマホラチャンピオンの古菲さん  
とか、茶々丸さんを作った葉加瀬さんとか色々いるみたいですし」

「ああ、そうね。確かにたくさん凄いのがいるわねえ。」

「というか、あなたが世話になっているエヴァンジェリンがその筆  
頭じゃないかしら？」

……………そういえばそうでした。

「普段のエヴァさん見てると全然そう思えないんですよね。原作知  
っていると尚更です。」

「んー。家でのエヴァさん見てると全然そう思えないのが困るんで  
すよね」

「そうかもしれないわね。あなたに“お母さん”と呼ばれるために四苦八苦している姿を見ていると確かに無理だわ。

でも、ウェールズから帰ってきたら魔法使いとして弟子になるんですよ。そうなたらそんなこと言えないわよ。エヴァンジェリンは魔法に関しては厳しいからね」

頑張りなさい、と頭を撫でられました。ナデナデ、と。

.....ポツ。

ハッ！ いけないいけない。危うく惚れるところでした。

くそっ！ アスナさんがナデポのスキルを持っているなんて、さすがは“黄昏の姫御子”です。

まあ、冗談はともかく。いいなあ。こんな風に撫でられるのって。ネカネ姉さんは抱きしめながら撫でてくるし、エヴァさんは何だか目が血走ってるんですよね。

タカミチ？ 男に撫でられて喜ぶ趣味はないですよ。

こんな風に穏やかに撫でてくれるのって、アーニヤのお母さんぐらいでした。

それにしても、魔法使いとしての弟子になるのもエヴァさん言いふらしているみたいですねえ。

帰ったらエヴァさんと少しお話ししないといけないようです、フフフフ。

「？ どうしたの？ いきなり笑っちゃって」

「え、いや、ありがとうございます。教師だけでなく魔法の修行も頑張ります」

「こんな風に撫でられるのって久しぶりで。何だかアスナさんは“お姉さん”みたいだなあ、って思いました」

「……………そう。そう思ってくれるの。」

でも、教師になる人がそんなこと言っているのかしら。それにエヴァンジェリンが聞いたら怒るわよ」

確かにそうですね。

「アスナのことは“お姉さん”と思うのに、何で私のことは“お母さん”って思ってくれないんだー！ー！ー！ー！」

とか騒ぎそうです。

でも、それより何かを思い出してるようなアスナさんが気になります。ナギやアリカ姫のことを思い出しているのでしょうか？

「ハハハ、そうですね。このことは秘密にしてください」

「わかってるわよ。」

あなたもエヴァンジェリンの前でそんなこと言わないでね。あの子が暴れると大変なんだから。

……………もう少し撫でてあげるから

アスナさんに引き寄せられ、そのまま頭を撫でてもらいました。頭がちよと胸に当たる位置なのが役得です。

ネカネ姉さんやエヴァさんみたいな感じじゃなく、軽く触られるような感じが気持ちいいです。何だか“慈しむ”という言葉が浮かんできました。

眠くなってきたなあ。1時に寝て、6時前に起きましたからね。9歳の子供の体にはキツイです。

原作と違ってガトウさん達は生きてるのに、原作通りにナギやアリカ姫はいませんでした。

原作通りにメルディアナ魔法学院に入るまで自分は一人ぼっちでした。

アーニヤやアーニヤの両親、スタン爺さんもいましたけど、アーニヤに甘えるわけにはいかないし、アーニヤの両親やスタン爺さんはやはりどこか自分に遠慮していたようでした。

まあ、アーニヤの両親をとるわけにもいかないし、スタン爺さんはツンデレでしたからしょうがないですけど。

この世界が並行世界ということを知った後、キャラ崩壊していたことに気づいたネカネ姉さんにも甘えることが出来ませんでした。もちろんネカネ姉さんは自分のことを弟として愛してくれているということはわかります。

それでも何だか戻れなくなりそうで怖くて、甘えることが出来ませんでした。

それからは何が起こるかわからないこの並行世界に対処するために、勉強と修行の毎日でした。

男に甘える趣味は無いのでタカミチには甘えませんでしたし、エヴァさんに甘えたら負けかな、と思ったので甘えませんでした。

前世の最後が大人だったから甘えるのが恥ずかしいし、甘えなくても大人だから自分は大丈夫と思っていました。

でも、子供の体に引きずられて、大人るときに食べられたものが食べられなくなったみたいに、甘えなくても大丈夫だったのが本当は甘えたい、と心の底で僕は思っていたのかもしれない。

いや、思っていたのでしよう。

僕は今、アスナさんに甘えていたいです。

「アスナさん」

「なに？」

「もつちよっと、撫でてもらっていいですか？」

「……………ええ、いいわよ」

ナデナデ、と頭が撫でられます。

参拝とかはまだだけど、このまま眠っちゃってもいいかなあ？

## 第十七話 元日（後書き）

作者の好みがバレてしまうお話。

年上の綺麗なお姉さんは好きですか？

ちよつと今までと違って最後はシリアス風味でしょうか？

“優しい”と“甘い”は全然違うもので、昨今有名なモンペとかを考えると、“甘い”には良くないイメージもあるかもしれませぬ。それでも他人に迷惑をかけないことを条件とするなら、“甘える”ということは優しいことだと思えます。

次回更新は少し遅れます。

おそらく再来週までを目標に更新しますので、よろしくお願います。

御意見・御感想お待ちしております。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました



## 第十八話 石化治療

こんにちは、アスナさんによりかかって寝てたところをアルさんに激写されたネギです。コンチクショウ。

アスナさんに甘えていたらいつの間にか寝ており、アルカナさんや木乃香さん達にニヤニヤと笑われながら見つめられていました。刹那さんはニヤニヤではなく、微笑ましいものを見るような目だったのが逆に恥ずかしかったです。

アルさんにはエヴァさんに見せないようにお願いしておきましたけど、どうなるかわかりません。朝倉ババッチ和美さんでなかったことに感謝すべきでしょうか？

これではらくからかわれるんでしょう。ま、アスナさんに甘えることが出来たのは役得だったからいいですけど。

「と、いうわけでウェールズに帰ってきました」

「最近何だかネギ君性格変わってないかい？」

エヴァさんの家に住んで、2・A生徒や元“アラルブラ紅き翼”の人達と一緒に数ヶ月過ごしたら誰でもこうなりますよ、タカミチ。

あ、そういえば、図書館島に行ったときに図書館探検部の人達を見かけました。まだ関わるのは早いと思って遠目から見ただけでしたけど、あまり原作と変わっていないようでした。

のどかさんはやはり男性恐怖症みたいですが、あのどかな雰囲気は変わっていませんでした。

夕映さんはトラップはずしたり理屈っぽかったりしてました。パルさん？ やっぱりG K B Rみたいな触覚持って、時折何か叫んでいましたよ。やば、アンサイクロペディアの“G K B R”の項目思い出しちゃったよ。

のどかさんのあのどかな雰囲気はいいなあ。原作ネギが好きになる気持ちもわかります。何で自分の周りにはいるのはのどかさんの対極な雰囲気を持つ人ばかりなんでしょうか？

「そんなことはどうでもいいのですよ、タカミチ。  
アーニヤが迎えに来てくれる筈なのですが……。あ、いま  
したね。」

一般人も多くいる空港の中で、あんなトンガリ帽子を被っている

のはアーニヤ以外の何者でもないでしょう。まったく、一般人への秘匿はどうなっているんだか」

「……………やっぱり変わったよ、ネギ君。」

うん、今まで忙しすぎたんだよ。今日で石化治療も終わるんだ。麻帆良に帰ったらゆっくりと休もう。

3学期からは先生をしなきゃいけないけど、冬休みの間ぐらい休んでもバチは当たらないさ。ゆっくり麻帆良散策でもして心を休めるんだ」

何でそんな憐れんだ表情になるんですか、タカミチ？

僕は何も変わっていませんよ。今なら浮遊術を使って空を飛ぶことが出来る気分なんですから。

それに麻帆良散策しても心は休まりませんよ。エヴァさんとタカミチが何をするかわかりませんからね。

「やあ、小さくなったね、アーニヤ」

「誰が豆粒チビかあっ!？」

この怒りよう、やっぱりアーニヤです。センスの悪い小さな錬金術師の幻影が見えた気がします。が気のせいでしょう。

でも、本当に小さくなったなあ、アーニヤ。

それとも自分の背が大きくなったただけですかね？ ハッハッハ。

「そんなこと言ってないよ、アーニヤ。」

それにしても日本語がうまくなったね。それなら日本に行っても大丈夫だよ。

それから、ただいま。アーニヤ」

「久しぶりだね、アーニヤ君」

「……………お帰りなさい、ネギ。お久しぶりです、タカミチさん。」

ちゃんと日本語を勉強したんだから当たり前でしょう。

く、本当に背伸びてるわね。その靴もしかしてシークレットブーツだったりしない？

ネカネ姉さんは急な出張が入ったから来てないわよ。多分帰りは再来週になるから会えないと思うわ。だから手紙か何か残しておきなさい。

それとおじいちゃんに治療魔法かけてあげて。ネカネ姉さん出張を伝えたせいでまた酷い目にあつたみたい。

学校の保険医ですら匙を投げたわ」

……おじいちゃん、無茶しやがって。

それと、嫉妬は見苦しいよ、アーニヤ。

「ふーん、そうなんだ。

まあ、村の皆の石化治療が終わった後で余裕があったら治療魔法をかけるよ。いつものことで慣れてるから、数日ぐらい放っておいても大丈夫でしょ。

多分持ってきたマグナム弾で大丈夫だと思うけどね」

「……………二人とも。それは本当にいつものことなのかい？」

メルディアナ魔法学校では日常茶飯事だぜ！

さて、それでは早速村の皆を元に戻すとしますか。

スタン爺さん達と会うのは本当に久しぶりです。あちらからしてみたらそんなことないんでしょうが。

バキューーン！ バキューーン！

ビーム・マグナムを撃つ音がメルディアナ魔法学校の地下に響き渡る。

マグナム弾は、もとは魔法を封じ込めるためにつくられた特殊な弾丸。石化治療の魔法が放たれる。

このビーム・マグナムは味方には“治療魔法”を込めて撃ち、敵には“攻撃魔法”を込めて撃つ。撃つときの擬音は「バキューーン！」。

目標を狙い撃つように、無駄弾は撃たないように、ゆっくりと狙いをつけるのがここでのたしなみ。

もちろん、射撃が苦手なのにガンナー ウォーリアに乗るなどといった、「必中」が使えるリアル系パイロットなど存在しない。といった具合に、正に絵に描いたようなダブルオー（〇〇的）“スナイパーらしさ”が求められている。

バキューーン！ バキューーン！

「……………ねえ、ネギ。いくら治療魔法とはいえ、その銃で村の皆を撃つのやめてくれないかしら？」

「というか説明も無しでいきなりぶっ放したときは本当に驚いたんだけど」

「石化を治してくれたのはありがたいんじゃない？  
気づいたら、目の前にこちらにデカイ銃を向けた大きくなったばーずがいる、という状況は理解できんかったわい」

「はいはい、あと十数人で村の皆全員を治せるから待ってくださいね。アーニャ、スタン爺さん。」

「そんな“マムがダイに向かってキアリクを込めた魔弾銃を撃つたときのポップ”みたいな顔はやめてください、傷つきますから。」

「タカミチもそんな orz みたいな体勢とつてると服が汚れますよ。」

「なにブツブツと……………育て方間違った……………」  
「……………ネカネカさんの馬鹿野郎……………」  
「……………様に似てると思ってたのに……………」

みたいな独り言してるんですか？

あとでネカネ姉さんにチクリますよ。それに顔はともかく、性格は母親似だと思えますけど？

バキューーン！ バキューーン！

「便利なんだから良いじゃないですか。

魔法符なんかより汎用性高いですよ。魔法込めればいいだけだからタダですし、遠距離の相手にも効果あるし」

「確かに便利そうじゃが、銃で治療魔法を撃たれる相手のことも考えてくれんかのお。生きた心地がせんわ」

起きたばっかりのスタン爺さんの目が点になってましたもんね。

スタン爺さんが無事に回復したのを確認した後、続けて他の村の皆に狙いを定めたら、『アーニヤ・フレイム・ナツクル』食らったのはビックリしましたけど。

何もいきなり殴らなくてもいいでしょうに。



バキューーン！ バキューーン！

「……………はい、これで全員終わりました。  
改めて聞きますけど、村の皆は問題無いですね？」

「あ、ああ。治った人から上に待機している治療魔法使いに見てもらっているけど、特に異常は見られないそうだよ。  
ただ、悪魔との戦いで怪我をしたまま石化された人達がいるから、その人達の治療があるけどね。」

おめでとう、ネギ君。君は村の皆を無事に治せたんだよ」

「そうですね。お待たせしました、スタンお爺ちゃん。  
遅くなりましたけど、ようやく皆を治すことが出来ました」

……………あ、やば。何か涙でてきそうです。

「う、うむ。」

儂からしたら、あの日のことはつい先程のことにしか思えんのだやがの。ぼーず達がこんなに大きくなっていると月日が流れているということがわかるわい。

ありがとう、ぼーず。良く頑張ったな」

えへへ、褒められました。

スタン爺さんの顔が何故か引き攣りそうなのは気にしないことにしておきます。「やっぱりナギの子か」と小さな声で呟いているのも気にしないことにしておきます。

「それじゃ、上にいきましょうか。」

パーティーの一つもできればいいんですが、全員の怪我の治療が終わるまでお預けです」

「そうじゃの。ここにいてもしょうがない。」

腹が減ったから食事にでもしよう。そのときにばーずが今までどんな風に暮らしていたか教えておくれ」

「終わったねー、アーニヤ」

「そうね、ネギ。」

まあ、魔法使いとしての最終修行は始まってすらいないけどね」

村の皆の石化治療が遂に終わりました。

怪我してる人が完治するまで最長で2週間ということなので、冬休みが終わる前に麻帆良に帰らなければならぬから、パーティーなどはまた次の機会になりそうです。

夏休みに帰省したときでしょうか。

今は用意された部屋でダラダラとしています。

「村の皆が無事に治って良かったねー、アーニヤ」

「そうね、ネギ。」

私のお母さんは石になってた知り合いに「老けたわね」って言われたせいで怒ってたけど」

石になっているときは歳をとらないからねえ。

村に自分の他に子供がいなかったから大丈夫だったけど、ドラクエ?のように親と子供が10歳差になったりする可能性があったんだよなあ。

そういえば、この世界だったら石化魔法使えば、コールドスリープ技術なんかいらんじゃね?

「明日はどつするの、ネギ？」

「うーん？ 何だかお客様に会わなきゃ駄目らしいねえ。

アーニヤは日本に行く準備は出来てるのー？」

「大丈夫よ。というかアンタだらけ過ぎよ。

まあ、気持ちはわかるけどね」

「なーんか何にも考えられないし、動きたくないんだよねえ。燃え  
尽き症候群ってやつかなー？」

「ちょ！？ アンタこれから学校の先生になるんでしょーが！？」

だいじょーぶ、だいじょーぶ。  
明日になったら本気出すから。

眠くなってきたなあ。でも確かに、これから原作がいよいよ始まるんですよねえ。

麻帆良に帰ったら頑張らないと。

でも、今日ぐらいはゆっくりと休むことにしましょう。

あ、おじいちゃんに治療魔法かけてあげるの忘れてた。  
……………ま、いつか。

## 第十八話 石化治療（後書き）

石化治療編終了しました。

仕事が忙しくて今週一杯は無理かと思いましたが、思ったより早く仕事が一段落しました。

今週と来週が終わればゴールデンウィークなのですが、やっぱり仕事がこれから忙しくなりそうです。次回更新はゴールデンウィーク前を目指します。

# 5/20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第十九話 魔法世界

「久しぶりじゃの、ネギ。

石化治療魔法で村の皆を治すとは見事じゃ。背もこんなに大きくなつて。

日本には“男子三日会わざれば刮目して見よ”ということわざがあるが、まさしくその通りじゃ」

「久しぶりも何も、今朝治療魔法かけてあげたでしょ？」

「ちょ！ いいから話をあわせてあげなさい！

おじいちゃんもいろいろ大変なんだから」

「そ、そうですよ、お兄様。

学校長は毎日激務をこなしておられるのでお疲れなのです」

ム、確かにそうですね。おそらく校長というのは激務なのでしょう。

数ヶ月前に比べ、大分やつれているし髪の毛も薄くなっています。きつとどこかの英雄と同じ二つ名を持っている部下？との関係に悩んでいるのでしょうか。

それと昨日アルちゃんいないと思ってたら、妹さんに会いに行っていたそうです。数日後には自分と一緒に日本へ出発しますからね。家族水入らずで過ごせたそうで何よりです。

そうだ、石化治療魔法の研究も終わったし、今度毛生え薬の研究でもしてみましようか。

完成したらおじいちゃんだけでなく近衛学園長にもプレゼントしましょうかね。あの人も頭頂部にしか髪の毛無し。

……………オエ、学園長の頭が髪の毛に覆われるのを想像したら変なことになりました。

あの頭で髪の毛フサフサってどこのエイリアンだよ!?

「どうしたの？」

顔色が急に悪くなったけど、治療魔法で疲れたの？」

「いや、何でもないよ、アーニヤ。ちょっと変な想像が浮かんできただけだよ」



でも怖いもの見たさで作ってみたい自分がいます。  
くそ、静まるんだ、自分の好奇心。たかが好奇心のために麻帆良  
にエイリアンを誕生させる気かあっ!!!

「ア、アハハ……………」  
お久しぶりです、学校長」

「うむ、高畑殿か。久しぶりですな。  
ネギがお世話になっていているようでありがとうございます。コノエ  
モンにも感謝しているとお伝えください」

「はい。お伝えしておきます。  
それですが……………」

「承知しておる。  
既に隣の部屋でお待ちになっておられる」

……………いや、一応作っておくべきか。何かあったときの切り札と  
なるかもしれない。  
いざというときは「僕の要求が受け入れられない場合、学園長の  
頭を髪の毛でフサフサにする!」とでも宣言したら、おそらく学園  
関係者は僕に屈服するでしょう。

どこの誰が好き好んでエイリアンを見てみたいと思いますか。

「お、お客様？」

え、えと。私は席を外したほうがいいの？」

「ふむ、アーニヤなら構わんと思うがの」

「大丈夫ですよ。別に秘密の話をするわけではないですから」

あ、でも木乃香さんから泣いて止めさせられそうですね。

そもそもいくらぬらりひょんとはいえ、木乃香さんの実？の祖父であるのですから木乃香さんにも害が及ぶ可能性があります。

木乃香さん泣かせるのは本意じゃないし、やっぱりやめておきましよう。

「それではネギ君、君に会いたいという人がいてね」

「うむ、それでは呼んでくるとしよう。」

アーニヤ、悪いが6人分お茶を用意してきてくれるかの」

「わかったわ、おじいちゃん」

む、考え込んでいたらいつの間にか話が進んでいました。

お客様ですか。誰でしょう？ 正月にアルさんとガトウさんに会ったから、今度はラカンさんとか？

別室行きとなると思いましたが、おじいちゃんが茶を2つ持って隣の部屋に行き、入れ替わりにお客様が来ました。

コード アスのマオ！？ マズイ、心が読まれるぞおー！！！！  
！ じゃなかった。

「はじめまして。ネギ・スプリングフィールド君。

私はクルト・ゲードルといいます。メガロメセンブリアの元老院

議員をやっているものです」

「ちなみにクルトは元“アラルブラ紅き翼”でもあってね。僕達の仲間であるんだ。確か前に少し話したよね。もちろんナギとも知り合いだよ。」

「はじめまして。ネギ・スプリングフィールドです」

クルトさんでした。“アラルブラ紅き翼” 関連と予想していたのは少し当たりましたね。

ま、そもそもラカンさんがこんなところに来るわけないですか。

251

「は、はじめまして！

ネギの幼馴染のアンナ・ユーリエウナ・ココロウアです」

「はじめまして。

ネギお兄様の使い魔であるオコジヨ妖精のアルです」

「ハハハ、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ、ミス・ココロウア。

オコジヨ妖精の使い魔ですか。知り合いに同じ“アル”がいるのでアルちゃんとお呼びしましょう」

さすがのアーニヤも本国の元老院議員ともなると気後れしてる感じですね。

というか、そもそもこの人何でここに来たんだ？

「フム、ネギ君は落ち着いていますね。10歳なのに立派なことです」

顔は笑っていますが、探ってくるような感じですね。原作同様に腹黒で何か企んでいるんでしょうか？

敵対するつもりはありませんが、舐められるのも困ります。駒にされる気はありませんから。

というわけでちょっと牽制しておきましょう。

「ありがとうございます。」

ゲードル議員のことは以前タカミチから話を聞かせていただきました。<sup>アルブラ</sup>“紅き翼”の中でも年が近いから特に仲が良いそうですね。

……………それとアルビレオ・イマさんからもいろいろと聞きました」

ヒキツ！ そんな擬音がしてクルトさんの顔が引き攣りました。アルさんから、ということが嫌だったんでしよう。

フハハハハ、正月のときに魔法世界編のためにいろいろなアルさんから聞いてるんですよ。

なにせアルさんは小さいときのクルトさんを知っていますからねえ。

いくら戦争孤児で天才児とはいえ、子供らしい微笑ましい出来事や失敗談が無いわけがありません。

しかも悪戯好きなアルさんです。もちろん小さいときのクルトさんやタカミチもその悪戯の被害にあっています。

「ちなみにタカミチの小さいときの話もいろいろと聞いてます」

タカミチの顔色も変わりました。アーニヤは何のことかわかっていないようでハテナ顔ですが。

「…………ア、アハハ。どんな話を聞いたのか気になりますね。ま、それは次回の話の種にでも。

立ち話もなんですから座って話しましょう。短い話というわけじゃありませんので」

ハツハツハ、顔が引き攣ったままですよ、クルトさん。

「しかし、元老院議員ともあろう方が僕に一体何の御用でしょう？別に特別なことはしていないと思うのですが」

「何を言ってるんですか、ネギ君は。昨日、伯爵級悪魔によって石化された人達を治療したばかりですよ」

「ええ、それは確かにそうなんですが。ウェールズに帰ったら来客があるとはクリスマスのころから聞いてました。もっともお客様がゲードル議員とは知りませんでした」

「……………ま、確かに。」

私が来たのは石化治療とは別件です。別に悪い話というわけではありませんので安心してください。

それとネギ君に会ってみたいというのはありました。タカミチからは聞いていたのですが、結局今になるまで会う機会がありませんでしたからね。

ハハハ、何でも“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルから「お母さんと呼んでくれ」と言われて困っているらしいですね

タカミチ！？ 何てことを言いふらしているのですか！？

それとエヴァさんとの関係を把握することが目的ですかね？

将来、自分を英雄として祭り上げるならエヴァさんは邪魔になっ  
てしまうでしょう。

ダーク・エヴァンジェル  
ましてや“闇の福音”をお母さん呼びしてたら英雄になんかなれるわけありません。

255

「……………ええ、まあ。」

父との関係からお世話になっています

「ネギ君も大変ですねえ」

「ええ、まあ。」

でも、さすがに見た目同じ年のエヴァさんを母と呼ぶ気はないですよ。

母ではなく、恋人としてなら話は別ですけどね



あの人、自分の好みにジャストミートしてます。

今のところエヴァさんとアスナさんが好感度TOP2です。

なんかアーニヤが「ブフォッ！」と紅茶を噴き出しましたが無視です。

アーニヤの対面に座ってたタカミチが紅茶まみれになりましたが、それも無視です。

「！……………ほ、ほほう。」

ネギ君はもう人生のパートナー探しをしてるんですか。少し気が早くありませんか？」

「あら？ お姉さまが増えるのですか？」

「ハハハ、そこまで深く考えているわけじゃありませんよ。それにエヴァさんは父一筋でしょうし。」

でも、ウチの駄目親父ながら、あそこまで深く想われるのはうらやましいと思いますけどね。

自分もあんな風に女性から想われるような男になりたいと思います。

はい、タカミチ。このハンカチ使っていていいよ。

アーニヤもそんなはしたない事しないでよ」

「ア、アンタがいきなりとんでもないこと言うからでしょーがっ！  
！！

アルちゃんも変なこと言わないの！！！！」

「ハ、ハハハ……。大人びていてネギ君は10歳とは思えません  
ね。

まあ、何かあったら私にも言ってください。できる限り力になりますよ」

「はい。そのときはよろしくお願いします」

「さて、そろそろ本題に入りましょうか。

私がネギ君と会うために現実世界までやってきたのは、ネギ君に  
渡すものがあるからなのですよ」

「渡すもの……。ですか？」

何でしょう？ タカミチがニコニコ笑っているから変なものじゃないのでしょうか。

クルトさんが持ってきた鞆から一枚の紙を取り出していますが、：

……ラカンさん持ってた『マキア・エレベア闇の魔法』習得用の巻物とかじゃないですね？

「それでは改めまして。ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい」

巻物じゃない、ただの一枚の分厚い紙ですね。いったいなんなんでしょう？

「君は“魔法世界崩壊を回避するための火星・水星間魔力輸送プロジェクト”に多大な貢献をしました。

よってその栄誉をたたえ、ここに賞状を送り功績をたたえます。  
メガロメセンブリア元老院議員　クルト・ゲーデルより

はい、おめでとございます。これが表彰状です」

……………“魔法世界崩壊を回避するための火星・水星間魔力  
輸送プロジェクト” オ？

「あ、ありがとうございます。」

とりたいところなのですが、自分にはさっぱり事情がわかりません」

「そ、そうよ。」

魔法世界崩壊って何よ？ ネギがいつそんな凄いことしたのよ」

「落ち着いてください。これから説明しますので。」

というよりタカミチから説明されてないのですか？」

……………ああ、そういえば正月にそれらしきことを言われた気がし

ますね。

「しょうがないだろ。まだ一応機密だったんだ。  
公式発表されるまでネギ君に言うわけにはいかないだろう」

「いや、確かにそうだが。

どうせ今日表彰するとわかってたんだから、前もって言っておいてもいいじゃないか」

おまえたちは何言ってるんだタカミチにクルトさんーッ！！！！  
言い訳はともかく理由を言えーッ！！！！

「いや、スイマセン。

まず魔法世界崩壊についてから説明しますね。

実は魔法世界崩壊は20年前の“大分烈戦争”ベルム・スキスマティックムにも関係してくるのですよ」

クルトさんとタカミチから説明してもらいました。

魔法世界は火星にあること。その魔法世界は火星の魔力枯渇により、いずれ崩壊してしまうこと。ヘルム・スキスマティック “大分烈戦争”コスモ・エンテレケイア が起こった理由。

“完全なる世界”のことなどなど。

もうネタバレのオンパレードです。

「それで魔法世界の崩壊は避けられないため、クルトはせめて幻想ではない人間だけでも生き延びさせようと対策を練っていたんだ」

「ええ。」

しかし、平和裏に現実世界に6700万人もの人間を移り住ませるなんてのは不可能です。そんなことしたら現実世界と戦争になるでしょう。

また、いくら幻想とはいえ、他の10億以上いる人達を見捨てることもできませんでした」

「そのときだよ。5年前にネギ君が言ったことを覚えているかい？」

「いえ、そんな昔のことは良く覚えていません」

「ハハハ、まだ4歳だったから無理もないね。ネギ君はね、

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

「って言ったんだよ」

「……………ツ!? 確かにそんなこと言った覚えがあります!!!」

「え、えーと、もしかして僕が宇宙についての本を読んでいたときのですか?」

「思い出したのかい? そのときだよ。」

ネギ君が火星のことについて書かれていたページを読んでいたね。そして、“火星は地球が人でいっぱいになったときの移住先になりうる可能性を秘めている”と書かれていることから話が続いてね。僕が

「地球が人でいっぱいになって、火星も人でいっぱいになって住むところがなくなったらどうする?」

と聞いたんだよ」

「……………その答えが「水星か金星に住めばいいじゃない」？  
ネギ、アンタって大物なの？ それともただの馬鹿なの？」

「でもアーニャお姉さま。

それで魔法世界の崩壊は避けることができたのだから、凄いこと  
だと思えますけど……………」

ありがとう、アルちゃん。

でも、自分と目を合わせてその台詞を言って欲しかったな。とい  
うか馬鹿ということを否定して欲しいんだけど。

「まあ、実際に水星や金星に移り住むことはできませんけどね。で  
きるかもしれませんが時間が足りません。

しかし、私達はネギ君の言葉がキツカケで気づいたのです。

“魔法世界が火星の魔力枯渇により崩壊してしまうのなら、火星  
に魔力を足せばいいではないか”、と

凄い力技ですね。「パンが無ければ、パンを持ってくればいいじ  
やない」ぐらい力技です。

そんなんできたら誰も飢え死にしないんだよっ！！！！



「そして研究を重ね、遂に火星・水星間で魔力輸送できるゲートを開発することができました。」

今はまだ魔法世界崩壊に対処できる規模ではありませんが、数を増やすなり、もっと大型ゲートにするなり手はあります。

おそらくあと数年で魔法世界崩壊を防げるだけの魔力を確保できるでしょう。」

「まあ、あくまで延命処置にすぎないけどね。」

しかし、水星の魔力を使えば多分千年単位で延命可能だ。他に金星もあるし。」

その間に抜本的な対策を考えるさ。」

千年あれば十分すぎるでしょうねー。」

「というわけで、これがその表彰状です。」

ネギ君は歴史に残る事件を解決するキッカケを作ったんですよ。誇っていいことです。」

うわあ。魔法世界編もいつの間にか終わってたよ。

「さて、ネギ君はこれで“魔法世界崩壊の阻止”と“伯爵級悪魔による石化の治療”という2つのことを成し遂げました」

「すいません。」

“魔法世界崩壊の阻止”は何でもない雑談で、“伯爵級悪魔による石化の治療”はただの冗談だったんですが。

「片方だけでも凄いのに、一気に2つの偉業を達成するなんてなんて前例がないよ。」

おそらく10歳という最年少の“マキステル・マキ偉大な魔法使い”の誕生となるね」

まだ、“先生になる”という魔法使いとしての修行は始まってすらいらないんですけど……。

しかも“魔法世界崩壊の阻止”はアイディアだけで自分何もしてないですよ。

「……………そこで少し聞きたいのですが。」

先ほどの説明に出てきた“アリカ・アナルキア・エンテオフュシア”という女性についてどう思いますか？」

「？ どう思うか、ですか？ それは具体的にどういう意味でしょうか？」

顔はまほネットの写真見たことあるから美人だと思いますけど」

母親のことを聞く？

アリカ姫のことは確か一人前になるまで話さない約束を“アラルブラ紅き翼”の間でしていたのでは？」

「そういうことではなくて、……………そうですね。」

世界を救うために自らの国を滅ぼした、ということについてはどう思いますか？」

「いや、世界が滅びたら、自らの国も結局滅びますよね。他に手がなかったのならしょうがないのでは？」

あくまで、その空中都市オスティアの墜落の被害にあっていない

人間の考えることですけど」

「それでは“災厄の魔女”と呼ばれていることについてはどう思いますか？」

「政情不安を鎮めるためのスケープゴートという役割を受け入れて処刑されたのは駄目だと思います。」

助かったウエスペルティア王国の人達のことを考えるなら、何としても生き残るべきだったと思います。今でも難民として苦労している人達を助けるために何としても。」

メガロメセンブリア元老院に“コズモ・エンテレケイア完全なる世界”の黒幕として処刑されそうなら無実を証明し、むしろ冤罪をかけられそうになったのを逆手にとって難民の人達を保護させるよう、努力すべきだったと思います」

「……………ネギ君は結構あくどいんですね。」

要するに“冤罪かけたのをばらされなくなかったら、難民を保護しろ”と元老院を脅迫すべきだったというのですか？」

「まあ、さっきの説明を聞いただけでの感想です。」

実際にはそんなうまくいかないとは思いますが、子供の戯言と聞き逃してください」

「いえ、なかなか興味深い話でしたよ。」

ネギ君は……………、性格はあまりナギに似てないですね」

「どうなんでしょう？ 実際に出会ったことは一度しかないので自分としてはわかりません。」

まあ、周りから聞いた話からすると、確かに似てないかもしれないかもしれませんがね」

「いや、僕からすると結構ナギに似てると思うよ……………」

何でたそがれているんですか、タカミチ？

自分のどこがあの駄目親父と似てるというんですか？

「しかし、何でそんなことを聞くんですか？

もしかして「9を救うために1を切り捨てられるか？」という、  
“マギステル・マギ偉大な魔法使い”になるための心構えですか？」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど。」

クルト、もうはつきり言ってもいいだろう？」

「そうだな。ネギ君なら大丈夫だろう」

え？ えええ？ バラすの？ アリカ姫が母親ってことバラすの？  
どういうこと？ まだ一人前になってないですよ？

「……………実は、ネギ君。」

君のお母さんは、先ほどから話に出ていた“アリカ・アナルキア・  
エンテオフュシア”という人なんだよ」

バラしちゃったよ、タカミチ。

ちょっと待って。どういうこと？ 自分が一人前になるまで話さ  
ない約束でしょ？

えーっと。何て答えよう？

どういう状況か全然わからない。とりあえず茶を濁しておきます  
か。

「そ、そうなんですか？」

あの“二股眉毛”の人が僕のお母さんなのですか？」

何アホなことを言ってるんだ、自分は――！！！！！！！！！！  
駄目だ。自分でもテンパリすぎているのがわかります。

ああ！ タカミチとクルトさんが崩れ落ちた！  
アーニャとアルちゃんはわけもわからずポカンとしている！

駄目だこの混沌、早く何とかしないと！

と。その時、

「アリカ殿————!!!」

と、ガラスが「ガツシャー——」と割れる音と共に、おじいちゃんの叫び声が隣の部屋から聞こえました。

つて、ええええ————っ!?

「な、何事ですか!? いったい!?!」

「ネ、ネギ君っ!!!!」

実は隣の部屋にそのアリカ様がいたんですよっ!!!!」

「実はアリカ様は処刑されるときにナギさんに助けられて、それからナギさんと結婚して君が生まれたんだ!



さっきの話にあつた元老院と“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”のせいで君と離れ離れにならなければいけなかつただけど、その元凶を先日叩き潰し終わったから君に会いに来たんだよっ！……！」

やべえっ！！！！

母親の目の前で“二股眉毛”呼ばわりしちゃった！！！！

隣の部屋に踏み込むと割れた窓と、そこから外を見ているおじいちゃんがいました。外で土煙が舞っているのが見えます。

窓ブチ破つて外へ出たんですか！？

そうですね。

いくら一人前になるまで話さない約束してあつても、会えるようになつたらそりや会いますよね。

元老院も“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”も既に叩き潰しましたもんね。もう障害は何も無いですね。

って、そんなこと考えている暇はありません。

急いで追いかけないと！

## 第十九話 魔法世界（後書き）

前話ではアルちゃんのこと素で忘れてました。ゴメンナサイ。  
それとコー ギアスのマオとクルト（悪役モード）って顔似てません？ 性格は似てませんけど。

むしろ似てたら怖いです。

クルト「私ねえ、現実世界に家を建てたんですよ。

白くて、綺麗な、とても大きな家。

だけど、現実世界に行くにはゲートを通らなくちゃいけないんです。

でも、アリカ様をゲートに持ち込むには大きすぎます。

だから、コンパクトにしてあげます。

これなら、あっという間ですよ」

とか怖すぎるw

何てこと書いてるんだ、自分はw

最終話も連続更新します。

“二股眉毛”？ 私は謝らない。

# 5 / 2 0 全話「・・・」を「・・・」に修正しました

## 最終話 ハッピーエンド

「やあ、ネギ君久しぶりだね。」

「どうも、久しぶりですタカミチ。二月振りぐらいですか」

「そのぐらいになるね。何の本を読んでいるんだい？」

「宇宙についての本ですよ。今は火星の項目を読んでいます。  
火星は地球が人でいっぱいになったときの移住先になりうる可能性を秘めている、とか書かれていますね」

「…………… 4歳なのに難しい本読んでるんだねえ」

「いえ、それほどでも。」

でも実際どうなんですかね？

本当に火星なんか人が住めるようになるのでしょうか？」

「え？ いや、…………… ハハハ。どうなんだろうね？」

何百年後かには住めるようになってるかもしれないよ。」

それに気づかないだけで火星人がもう住んでるかもしれないさ」

「タコみみたいな火星人ですか？ 会ってみたいとは思えませんね。それに何百年後に住めるようになっても、どうせまた火星も人で一杯になっちゃうんじゃないでしょうか？」

「そうだね。人はどんどん増えていくから……………」。

そうなたらどうする？

地球が人でいっぱいになって、火星も人でいっぱいになって住むところがなくなったら？」

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

「……………その発想はなかった」

「……………我が子ながら突飛な発想をする子じゃの」

「ハハハ、確かにネギ君はときに誰も思いつかない発想をしますね。石化治療魔法の件も、石化させた当の悪魔を召喚して解呪法を教えてもらう、なんてことは他の誰も考え付きませんよ」

「なるほど、変わった発想だ、タカミチ。

しかし、その変わった発想をキツカケとして、現実世界に迷惑をかけずに魔法世界の生き物全てを生き延びさせることが出来るんだ。ネギ君には感謝すべきだよ」

「まだじゃろう、クルト。

まだ間に合うかどうかはわからぬ」

「は、確かに。

しかし、ネギ君の発想からヒントを得ることができ、研究の結果、水星の魔力を使えば火星が延命可能なことがわかりました。

ゲートを火星と水星との間で繋ぎ、魔力枯渇寸前の火星に水星の魔力を流し込む。言ってしまうればこれだけですからね。

まあ、魔力のみ輸送可能なゲートを繋ぐのには苦労しましたが、それもあと2、3年あれば完成するでしょう。

魔法使い人口6700万人のメガロメセンブリア連合は伊達じゃありませんし、アリアドネーのセラス総長の協力も確約してあります」

「そして、水星の魔力を使いきるまでに地球に魔法世界のことを知ってもらい、魔力枯渇の心配がない現実世界の移住先を見つける。

もしくは現実世界の人間と魔法世界の人間の婚姻政策をとり、純粹な魔法世界人をいなくする。片親が現実世界の人間なら、ネギ君のように現実世界の人間となりますからね。

まあ、水星の魔力を使い切るまでに千年単位の時間があるということなので大丈夫でしょう。他に金星もありますし。

その頃には人類は宇宙に進出しているでしょう」

「じゃが、のんびりすることは出来ぬ。水星をこの火星のように食い潰すことは断じてしてはならぬのじゃ。

といっても、焦って現実世界と事を構えるようなことだけは避けなければいけないがの」

「ご安心ください、アリカ様。

元老院の老害共はすべて牢に叩き込みましたし、ヘラス帝国もテオドラ皇女殿下のおかげでこのプロジェクトに賛成してくれています」

「ふむ、今度テオドラに礼を言わなければな」

「問題は魔法世界の皆がこの現実を受け入れることが出来るかどうかですか」

「焦ることはないぞ、タカミチ。そのためにも元老院を掃除したのだからな。」

もちろん“アラルブラ紅き翼”の面々にも手伝わってもらう。英雄が話せば受け入れる可能性も高まる。お前もしばらくは客寄せパンダになってもらうぞ」

「……………しかし、アリカ様の名誉挽回は本当に後回しにしてよろしいのですか？」

「くどいぞ、クルト。」

私のことなどより、今はオスティアの民を含めた魔法世界に生きるものを優先すべきだ。

そのために余計な混乱は起こすべきではない」



「そうだぞ、クルト。」

それにアリカ様の気持ちも考えて差し上げるよ。ようやくネギ君に会えるんだぞ」

「……………そうじゃな。もしかしたら私は早くネギに会いたいたいだけかもしれんの。」

名誉回復などどうでもいい。ただネギ会いたいただけなのに、魔法世界のことを言い訳にしているだけじゃ」

「それは……………、仕方がないではありませんか。」

ネギ君を危険なことから離すために、お産みになってすぐネギ君と離れなければいけなかったのです。母君として当然の気持ちでございましょう。

反アリカ様の元老院議員やコスモ・エンテレケイア“完全なる世界”がいなくなった今、もう何も憚ることはありません」

「そうです。せめてネギ君の麻帆良での修行が終わるまでは一緒にいてあげてください。」

火星・水星間ゲートが完成後、今までの真実とネギ君のおかげで魔法世界が救われることを発表すれば名誉挽回どころの騒ぎではなくなります。

それからはむしろ、急がしすぎて母子としての時間がとれなくなるかもしれませんがね。ゆっくり出来るうちにゆっくりしてください」

「……………母か。ずっと放っておいてしまった私に、ネギの母と名乗る資格はないというのに。」

麻帆良でネギの面倒を見てくれている“闇の福音”のほうぐがネギの母を名乗る資格があるじやろうな」

「アリカ様っ！」

「そんなことありません！」

大人びた子だといえ、まだネギ君は9歳です。まだまだ母親が必要です。

それに僕はネギ君の口から「母親に会ってみたい」という言葉を聞きました」

「……………それは母親が“災厄の魔女”と知らないからであろう。」

いや、わかっておる。

まず何よりも先にネギに会わなければならぬ。そしてずっと放っておいたことは謝らなければ。

もしかしたら許してくれぬかもしれぬし、“災厄の魔女”が母親だということを拒否するかもしれぬ。ネギにはその権利がある。

だが、そうだとしても私のほうからネギを避けていいわけではない」

「大丈夫ですよ、アリカ様。ネギ君はそんな子じゃありません。もうすぐです。コスモ・エンテレケイア“完全なる世界”相手の事後処理に追われていたナギももうすぐ余裕が出来るでしょう。」

そうすれば親子三人で暮らすことが出来ますよ。」

それに母親が“災厄の魔女”でも大丈夫です。従姉に“破壊の魔女”がいますから」

「……………タカミチ、それは慰めにならんぞ」

「フ、まあネギのことはともかく。」

ナギのことについては“闇の福音”と決着をつけねばならぬがの。ネギについては何か言う資格は私になくとも、ナギのことについては何か言う資格は私にあるのじゃ」

「……………タカミチ、麻帆良学園大丈夫か？」

「……………学園長に結界強化するように進言しておく」

「えーっと、それでは明日、僕とクルトが隣の部屋でネギ君に会います。」

アリカ様はこの部屋で現在のネギ君をご覧ください。それとなくアリカ様の事情を説明して、アリカ様のことをどう思つかも聞き出しますので」

「それと表彰状も渡さなければいけませんね。ネギ君まで英雄として祭り上げるようなことにするのは不本意なのですが。」

まあ、本人が知らずとも、ネギ君が魔法世界崩壊の回避に多大な貢献をしたということは事実なのですし、今回の石化治療の件も別枠で何かしないといけませんね。

正直、英雄に祭り上げるようなプロパガンダを行わなくても、事実を発表するだけで十分な気がしますよ。

ああ、それにしても楽しみです。タカミチと違って私はネギ君と直接会ったことはありませんでしたからね。

私はこのために元老院議員の特権を使って、無理矢理地球まで来たのです」

「頼むぞ。」

……………もしもネギが私に会いたくないようだったら、私のことは死んだことにしておいてくれ。

それとクルト。公私混同はやめるのじゃ」

「も、申し訳ありません」

「ハハハ、大丈夫ですって。アリカ様。

それよりネギ君と会うための心構えをお願いしますよ。ネギ君のことは写真でご覧になったでしょうが、近くにいらるとなるとまた別でしょう。

御対面のときに、感動のあまり何も話せなくなる、なんてことのないようにお願いします」

「わかっておる。覚悟も出来ている。

何で放っておいたのかと罵倒される覚悟も、“災厄の魔女”が母親ということ拒否される覚悟もな。

「……………だが、それでも許されるのなら、ネギの母としてありたいのじゃ」

逢いたい。逢って抱きしめたい。

もうあの子は10歳になるのか。手離れたときはまだ小さな赤ん

坊だったのに。

私達のせいで寂しい思いをさせてしまった。辛い目にあわせてしまった。

預けていた村が元老院の手によって襲撃され、ナギが間一髪のところまで助け出したとき、あの子はただただ震えていたという。

私のせいだ。

“災厄の魔女”である私が生きていることを望まず、あの子が私の子であることを許容できなかった元老院が村を襲わせた。

私の子であるということだけで、あの子は故郷を滅ぼされた。

もし、あの子が事実を知ったらどう思うだろうか？ 私のことを憎む？ いや、タカミチの話から聞いたあの子の性格だと、自分自身を責めるだろう。

「僕のせいで、村の皆を巻き込んでしまった」と。

そんなことはないというのに。全ては私達のせいだ。あの子に一切責任はない。

幸せだった。

ナギに救い出され、ナギと一緒にになった。

王家の人間としてではなく、一人の人間として。ナギと夫婦として穏やかというには騒がしい、それでも幸せな時を過ごすことが出

来た。

幸せだった。

あの子を産むことが出来た。

初めてあの子を抱き上げたときのことは今でも憶えてる。ナギに抱き締められながら、あの子を胸に抱いているときはもう何も他にいらなかった。

私とナギとあの子の3人で幸せになれると思っていた。だが、その幸せも長くは続かなかった。

サウザンドマスター

英雄である“千の呪文の男”と呼ばれたナギに子供が出来れば、否が応でも注目の的になる。それと同時にあの子を産んだ私にも注目が集まるだろう。

実際、あの子が生まれたのを知った、事情を知る元老院議員が不穏な動きを見せたらしい。

当然だ。

死んだはずの“災厄の魔女”がナギの子供を産んだことなど、彼奴らにとって衆目に知られてはいけないことなのだから。

また、ちょうどその頃に、生き残っていた“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”の残

党が何か企んでいることも判明した。

“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”との戦いになったとき、あの子はナギにとって効果的な人質となっただろう。

魔法世界の崩壊が迫っていることもあった。

崩壊の危機のときにはあの子は大人になっているだろう。

下手をすればあの子は英雄として元老院に祭り上げられ、魔法世界の崩壊に立ち向かうことになるかもしれない。だが、これは私達の世代で解決すべきことなのだ。

極めつけは、あの子が“完全魔法無効化能力”を持って生まれてきたことだった。

ナギがあの子をあやそうとして浮遊術をあの子に使ったとき、魔法が無効化されてしまったのだ。

あの子は私の子。つまりウエスペルタイア王家の血を引いている。王家の血筋にしばしば生じる“完全魔法無効化能力”を持つ特別な子供、“黄昏の姫御子”となる可能性はあったのだ。

だが、私は自分の子供が“黄昏の姫御子”として生まれてくるなんて考えてもいなかった。

絶望した。

アスナがどんな扱いを受けていたか知っていた私は絶望の淵に立



たされた。

アスナのことを放っておいた罰だともいうのだろうか。あの子に何の罪があるのか。私を罰せればいいのに。

ああ、これは私にとっての最大級の罰か。

自分の子が不幸になるのが、母にとっての最大の不幸だ。

このままではあの子は元老院に利用されるか、それともアスナのように“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”の目的のために魔法世界を滅ぼす礎とされるかのどちらかだった。

そんなことはさせない。あの子をそんな目にあわせてたまるものか。

アスナのことは放っておいたのに、自分の子供がそういう目にあうのは嫌なのか。自分で自分の浅ましさに吐き気を感じた。それでも私はあの子を守る。私はあの子の母親なのだから。

もう私もナギもあの子の側にはいれなかった。

私が側にいると元老院からの干渉があるかもしれない。ナギが側にいると“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”との戦いに巻き込むかもしれない。

ナギと相談した結果、ナギの故郷の村に預けるほかに手立てはなかった。

それでもあの子が隠れていられるのは10年ぐらいだろう。

ナギの息子だ。魔法に関わらせないなんてことは出来ない。そんなことを言ったらそれこそ元老院から干渉があるだろう。

あの子が一人前になる前に、あの子が世に出てくる前に、あの子の“敵”を滅ぼさなければならぬ。

私の子であるあの子を許容出来ない元老院と“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”を滅ぼさなければならぬ。

ああ、何て可哀想な子なのだろうか。

私達のせいで、私達の戦いに巻き込んでしまった。生きていくのに余計なものを背負わせてしまった。

まだ私達の顔も憶えていないだろうに、独りにしてしまった。

泣くのはまだ早い。

あの子が私達のことをどう思うかはわからない。それでも私はあの子を守る。私はあの子の母親なのだから。

恨まれるかもしれない。

憎まれるかもしれない。

それとも何とも想ってくれないのかもしれない。

私達があの子の側にいないのは事実なのだから。捨てたと思われ

ても仕方あるまい。

世界を救うために自らの国を滅ぼした私だが、今は違う。  
今の私はあの子の母親だ。

あの子を守るためなら何でもしよう。

あの子を守るためならあの子に恨まれよう。

あの子を守るためならあの子に憎まれよう。

あの子を守るためならあの子に何とも想われなくとも構わない。

あの子のためなら“本当の災厄の魔女”にさえなろう。

あの子を守るためなら世界さえ滅ぼそう

そして、遂に終わった。

クルトやガトウ達のおかげで元老院の老害共を排除できた。  
ネギの故郷を襲わせた証拠も見つけた。とりあえず牢屋にぶち込んでおいたが、そのうち魔法世界全域に発表しようと思う。

あの子に手を出すとは大それたことをしてくれたものだ。自分のしたことを思い知るがいい。

“赤き翼”も再集結したので“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”を壊滅できた。

大戦時にも戦ったらしき首領格の白髪の少年を、10年前にイスタンブールで倒した。ナギとラカンの2人でフルボッコにしたらしい。卑怯とは言えない。

あとはプチプチと残党を潰していくだけだった。

何よりもあの子のおかげで“魔法世界の崩壊”すら回避できるところになった。

これであの子に逢うことができる。親子として過ごすことができる。あの子とナギと私の3人でまた暮らすことができる。

けれど、あの子は私のことをどう思うのだろうか？

タカミチから聞いたところによると、ナギのことはだらしのない駄目親父と思っっているらしいが、別段嫌っているわけではないようだ。

従姉であるネカネの影響が女性に優しいらしく、“闇の福音”に対するナギの所業を良く思っていないが、それでもナギのことはよく周りから話を聞いていたようだった。

けれど、私のことは？

母親のことも周りに聞いていたらしいが、私が母であることをばらせないために口止めするしかなかった。

いくら聞いても言葉を濁されていたためか、そのうち聞くことをやめたらしい。

恨んでいるのだろうか？ 憎んでいるのだろうか？ 何とも想つてすらくれないのだろうか？

あの子の側にいなかったのは事実だ。あの子のためだといえ、独りぼっちにさせたのは事実なのだ。

逢いたい。逢って抱きしめたい。

でも、それ以上に拒絶されるのが怖い。

それでもあの子に逢わなければならぬ。

ナギは着いて来てくれると言ってくれたが、事後処理がまだ終わってないので断った。何より、母としての義務を放棄した私が一人で決着をつけなければならぬことなのだ。

落ち着け。

今はあの子がどういう子なのか知るのが先決だ。クルトとタカミチが隣の部屋で話す。ただし、その結果次第では、私はあの子に逢えない。

その覚悟はあるが、体の震えが止まらない。

それでも許されるならあの子の母でありたい

全てはあの子の心に任せよう。何で放っておいたのかと罵倒される覚悟も、“災厄の魔女”が母親ということを拒否される覚悟もした。

ああ、願わくば、あの子が“お母さん”と呼んでくれますように……。

「それでも“二股眉毛”などと呼ばれる覚悟はしておらなかったのじゃーーーー！！！！！！！！！！」

“あ……………ありのままに起こった事を話します！”

「僕は「もうすぐ原作が始まる」と覚悟を決めていたら、いつのまにか原作が終わっていました」

な……………何を言っているのかわからないと思いますが、僕もどういふことなのかわかりませんでした。

頭がどうにかなりそうでした……………。

「テンプレ通り」だとか「原作ブレイク」とかそんなチャチなものじゃあ、断じてありません。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わいました……………”

じゃなくて、

「待ってください!!! お母さーん!!!」

あ、「お母さん」という言葉に少し反応しました。

ってか足速すぎです。王家の魔力をフルに使って逃走されると追いつけません。

くそつ、面倒臭いな。あの二股眉毛。

「ええい！ しょうがない！

ラス・テル・マ・スキル・マギステル 『ユニコーンガンダム』！

そしてMM-Dシステム発動!!!  
マギステル・マギ・デストロイヤー

自分の体に魔力を纏って“ユニコーンガンダム”となり、一気に突撃します!!!

“ガンダムUCのMSの再現能力”  
モビルスーツ を作中で最初に使うのが母親との追いかけてことというのが情けないです。



……………原作終了ってことは、もしかして“ガンダムUCのMSのモビルスーツの再現能力”を作内で使うのはこれが最初で最後ですか!?

「くるでない! こんな二股眉毛を追いかけてくるでない!…!」

「いいから待って下さい!…!」

……………捕まえた!…!…!…!…!…!…!…!…!…!

ガシッ! ギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリギャリ  
ギャリギャリ!…!…!…!…!…!…!…!…!…!

もみじおろし!?

やば、捕まえたはいいけど止まれずに押し倒してしまいました。  
その際お母さんと地面で擦れる音が物凄い勢いで聞こえてきま  
したが、……………あ、魔力障壁で無事でした。

流石はウエスペルティア王家の魔力。

あやうくお母さんの顔が見れなくなるところでした。危ない危な  
い。

「うぐつ、見ないで、お願いだから見ないで……………。  
こんな二股眉毛なんて見ないで……………」

顔を両手で覆って、泣きながら呟きつづけています。  
手を顔から剥がそうとしても王家の魔力を使ってブーストしてい

るのか、全然剥がせません。今の自分はMM-D発動で筋力B+な  
んですけど。

……………王家の魔力マジパネエっす。

このままずっとお母さんの顔が見れないかもしれません。  
はあ、何とか捕まえることが出来ましたが、どうしましょ？

「ネギく……………ん、アリカ様……………!!」 「アリカ様……………  
……………!!」

ようやくタカミチとクルトさんが追いついてきました。  
どうすればいいんだ、この状況？ とりあえずお母さんを宥めま  
すかね。

「『解除』……………ふう。」

えーっと、はじめまして？ ネギです。  
とりあえず顔を見せてくださいよ、お母さん」

.....。

.....。

.....こっち見るや。

駄目だこの人、泣いてるばかりで全然こっち見てくれません。

原作と剥離しすぎなんですけど、これから修正効きますかね？  
無理ですね、そうですね。

これから学校戻って、アーニヤ達に事情説明して、麻帆良に帰ってエヴァさんに事情説明して.....。

忙しくなりそうです。教師もやんなくちゃいけないし。

……もう……諦めちゃってもいい……かなア  
……。

いいや、今考えるのよしましよ。

今はお母さんの胸に顔をうずめまじよ。

うん、それがいいです。

しかし、いくら並行世界とはいえ、ここまで違うとは思ってませんでしたよ。

テンプレ通りに進めるとかそんな次元の話じゃないですね。

自分なんか主役になろうと考えたのが間違いなのです。

まあ、これはこれでハッピーエンドなんでいいでしょう。

この先は原作とは全然違うストーリーが続いていきますけど、自分の話はひとまずこれにて終了。

それでは皆様、いつかまた会う日まで……。

## 最終話 ハッピーエンド（後書き）

この世界のネギにはまだ原作と違うお話が続いていきます。  
それは「小ネタ」として台本形式で少しばかり投稿しようと思  
います。

“二股眉毛”に関してはウィキにこれを書いた人を責めてくださ  
い。作者はこれを見てからアリカ姫のことを二股眉毛としか見れな  
くなったのです。

いや、キャラとしては大好きです。ネギがポヨから“幻灯のサー  
カス”で見せられたときのアリカ姫なんか滅茶苦茶萌えました。  
ただ、出番のたびに眉毛を確認してしまうようになったのです。

皆様いかがでしたでしょうか？

初投稿ゆえに至らないところが多々あったと思いますが、少しで  
も楽しんでいただけたら幸いです。

元から初作品は短めにするつもりでした。広げすぎた風呂敷を畳  
めなくなるのを防ぐためです。

プロローグや設定を抜かして全20話、長くもなく短くもなくと  
いったところだと思います。

今まで考えていたネタをツラツラと書き殴っていったため、これ  
以上続けたら收拾がつかなくなりそうでした。

この作品は最終話のアリカの独白を除き、全てネギの一人称視点で進めていきました。

次回作は主人公以外のキャラの視点も入れた、二人称、三人称視点にチャレンジしていきたいと思います。

あとバトル要素もチャレンジしたいと思います。

それとせっかく作った設定が全然使われませんでしたので、次回作でも使っていこうと思います。

というか、この世界のネギを“強くてニューゲーム”で原作世界に放り込もうかと思っています。

ここまでのお話を“魔法先生ネギま？編”として第一章にし、第二章として“魔法先生ネギま！編”を作っていきたいと思っています。

ハーレムとか書いてみたいです。この作品の記憶有り成長アスナの評判が良かったから、これもまた次章で使おうかと思っています。

……………べ、別に新たに設定を考えるのがめんどくさいとからじゃないからねっ！！！！

これからは更新速度が落ちていくと思いますが、それでも週一か週二更新は目指します。

それでは皆様、いつかまた会う日まで……………。

御意見・御感想をお待ちしております。

#### 今回の反省点

フェイト殺っちゃってからどんどんずれていきましたwww

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

作者なりに考えた斬新（笑）な方法だと思ったのですがどうでしょう？

まあ、移り住むのは難しいだろうから、魔力だけの移動となりましたが。

火星の魔力が枯渇したのなら、水星か金星の魔力を使えばいい、というエコ精神にたいして真っ向から喧嘩売ってる考えです。

# 5 / 20 全話「……」を「…」に修正しました



その後の話・小ネタ

【昼ドラ注意報？】

エヴァ「……………」。

……………」。

……………」

アリカ「……………」。

……………」。

……………」

ネギ「ネギですが家の空気が修羅場です」

アーニャ「ウエールズ帰りたい」

【その頃のナギ】

ナギ「なあ、ジャック。

“ネギが一人前になるまではアリカのことは教えない”って約束したよな」

ラカン「それがどうしたよ？」

ナギ「いや、一人前になる前にアリカと会わせてけど、

その約束どうしたらいいと思う？」

ラカン「ん？ ああ……、えーと。

んじゃ、俺たちで一人前にすりゃいいんじゃないね？」

【これからがほんとうの地獄だ……………】

ナギ「というわけで俺たちが鍛えてやるぜ。

なに、親子のスキンシップってやつだ」

アリカ「頑張るがいい、ナギ。

失った父の威厳というものを取り戻すのじゃ」

ラカン「最近退屈してたからなあ。

いい暇つぶしになりそうだぜ」

タカミチ「参ったなあ。ネギ君は僕の弟子なのに。

これは皆さんに負けられない修行をしないと」

クルト「タカミチだけにネギ君を任せていられるか。

戦闘だけでなく、立派な大人になれるように教育してあげ  
ましよう」

ガトウ「タカミチも弟子を取るようになったか。

しょうがない、俺も孫弟子の面倒を見てやるかね」

アル「おやおや、ネギ君も大変ですねえ。

ああ、私も参加しましょう。フッフッフ……………」

エヴァ「何を言ってるお前たち。ぼーやは私の弟子だ。

お前たちのような馬鹿者共に鍛えられたら、

ぼーやの命がいくつあっても足りん。

ぼーやには私のオリジナル魔法、『闇マギア・エレベアの魔法』を教えてや

ろう」

アスナ「私は『咸卦法』ぐらいしか教えられないわよ」

ネギ「＼(＾o＾)／」

【期末テスト】

ネギ「来週から期末テストかあ。

皆さん頑張ってくれるといいんですけど」

エヴァ「くくく、安心しろぼーや。手は打ってある」

ネギ「え？ クラスの皆さんで勉強会か何かするんですか？」

エヴァ「いや、さっきクラス全員に夢の中で勉強する魔法をかけてきた。

夢の中のテストで満点をとるまで決して目が覚めないやつをな」

ネギ「今すぐ解除してきてください」

エヴァ「な、何故だっ!？」

【修学旅行】

ナギ「京都も久しぶりだなあ」

アリカ「前来たのはいつだったかの？」

ネギ「……………何で一緒に来てるんですか？」

【昼ドラ注意報？】

千草「奥様がいるから長が振り向いてくれないんどすっ！！！！」

刹那「何だ！？ 貴様はっ！！！！」

木乃香「母さまになにするんやっ！！！！」

ネギ「（キヤラ崩壊しすぎじゃね？）」「

【昼ドラ注意報？】

月詠「このかお嬢様がいるから刹那先輩が振り向いてくれないんどすっ……!!」

木乃香「何や!? あんたは!!!!」

刹那「このちゃんになにするんやっ……!!」

ネギ「(あんま変わってないですね)」

### 【犬上家】

小太郎「……………」



ナギ「ハッハッハッ。まさか京都で

「千の呪文サウザンドマスターの男」、勝負や!!」と挑まれるとはなあ。  
こういう無鉄砲なガキは嫌いじゃないぜ」

アリカ「もう少し手加減してやればよかるつに」

ネギ「とりあえず地面から引っこ抜いておきますね」

### 【羽毛布団】

木乃香「新しい布団買ったらグツスリ眠れたわあ」

アスナ「へえ、そうなの」

木乃香「そういえばなあ。ウチ、天狗の逸話を聞いたとき

「天狗の羽で羽毛布団作ったらどうなるんやろ?」と思っ  
たわ」

刹那「……………くっ!」

ネギ「決意固めたような表情しないでください」

【羽毛布団の羽毛は羽根じゃない】

木乃香「まあ、羽毛布団は鳥の羽じゃなくて、鳥の胸元の毛使っ  
んやけどな」

刹那「！！！」

アスナ「羽根を使った羽根布団というのものもあるけど？」

刹那「！ それですっ！」

ネギ「それじゃないです」

【マギア・エレベア闇の魔法？】

ネギ「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

汝がためにユピテル王の恩寵あれ、『クーラ治癒』！

固定、掌握、魔力充填、術式兵装『リジエネ自動治癒』！！！！」

エヴァ「治癒魔法を体内に取り込む？」

そんなことやったことなかったな」

アル「あなたはそんなことしなくても平気ですからね」

アスナ「でもこれって“闇”の魔法と言っのかしら？」

【所詮は浅知恵】

アル「凄い回復力ですね。」

真祖の吸血鬼であるあなたとまではいきませんが」

エヴァ「……………まあ、そうなんだが」

アスナ「？ どうしたの？」

ナギ「おい、 お前殴ったら俺の方も回復するぞ」

ネギ「え？」

エヴァ「そりゃ、 そうだろうな」

【抱き枕には丁度良い】

アスナ「でもこの状態のネギを抱いて寝るのはいいわね」

アリカ「回復魔法を常時かけられているようなものじゃからのう。

アスナ、明日は私じゃぞ」

エヴァ「明後日は私だ」

ネギ「……………反応しちや駄目だ反応しちや駄目だ

反応しちや駄目だ反応しちや駄目だ反応しちや駄目だ

反応しちや駄目だ反応しちや駄目だ……………」

アル「では明々後日は私で」

【ウルティマホラ（別名：“<sup>アラルテラ</sup>紅き翼”最強決定戦）】

司会「それでは、1回戦の対戦組み合わせの発表です！

第一試合 アンナ・ユーリエウナ・ココロウア VS 神楽坂ガ

トウ

第二試合 タカミチ・T・高畑 VS ネギ・スプリングファイ

ルド

第三試合 神楽坂明日菜 VS 桜咲刹那

第四試合 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル VS ネ

カネ・スプリングフィールド

第五試合 長瀬楓 VS 近衛詠春

第六試合 アルビレオ・イマ VS クルト・ゲイデル

第七試合 ジャック・ラカン VS 犬上小太郎

第八試合 ナギ・スプリングフィールド VS 古菲

となります。第一試合開始は30分後です」

アーニヤ「＼（＾o＾）／」

ネギ「＼（＾o＾）／」

刹那「＼（＾o＾）／」

小太郎「 \ (^o^)/ 」

マナ「 ..... 私はコウキと約束あるから 」

【昼ドラ注意報?】

エヴァ「 ..... 。

..... 。

..... 「

ネカネ「 ..... 。



.....。

.....」

ネギ「ネギですが会場の空気が修羅場です」

アリカ「（いつぞやの私らを見ているようじゃ）」

【無知とは罪】

古菲「ネギ先生の父親らしいアルが、手加減しないアルヨ」

ネギ「（その人相手にするのはやばいです。古菲さん）」

楓「拙者は木乃香殿の父君が相手でございますか」

ネギ「（西の長が何で来てるんですか？）」

結局、2回戦第四試合

ジャック・ラカン VS ナギ・スプリングフィールド

で会場が崩壊して大会中止になりました。

【アラルフラ 紅き翼” 同窓会】

詠春「皆、久しぶりだな」

ナギ「詠春老けたなあ」

ラカン「久しぶりじゃねえか」

アル「今皆でネギ君鍛えてるんですけど、あなたもやりませんか？」

ネカネ「あ、私も参加します」

ネギ「……………え？」

ネギ「つ、遂に勝てた……………」

アリカ「おお、凄いぞ、ネギ。

早くも父親越えするとは。流石私の子じゃ」

ナギ「皆で色々教えすぎたぜ……………」

詠春「神鳴流の飲み込みも早かったよ」

タカミチ「やれやれ、まさか“無音拳”まで使えるようになるとはね」

アル「では次に

“ネギ君パーティー（仮）” VS “アラルブラ紅き翼”のパーティー戦ですね」

ラカン「まあ、一人じゃ出来ること少なえからな。

早くパーティー見つけてこいや」

ネギ「……………え？」

【僕と仮契約して、“魔法使いの従者”<sup>ミニステル・マギ</sup>になってよ】

ネギ「小太郎君、木乃香さん、刹那さん、楓さん、古菲さん、アー  
ニヤ。」

僕と仮契約しませんか？

今なら“紅き翼”<sup>アラルプラ</sup>に修行をつけてもらえる特典付きですよ」

小太郎「ワリイ、流石に無理や」

木乃香「ウチ、将来西に戻るから、

“魔法使いの従者”<sup>ミニストラ・マギ</sup>になるなんて無理や……！」

刹那「わ、私はこのちゃんの護衛ですので」

楓「したくないでござる……！」

絶対に仮契約したくないでござる……！」

古菲「ワタシ故郷に帰ろうと思ってるアルヨ……！」

アーニヤ「私もウェールズに帰るわっ……！」

【契約とってこいって言うてんだろ！ 出来なかつたら自腹しろや  
……！】

ネギ「……………」

ナギ「おいおい、パートナーまだ見つかってないのかよ」

ラカン「じゃあ、とりあえず一対多の戦闘方法を教えておくか」

アル「ネギ君パーティー（独り）」 VS “アラルソラ紅き翼” ですね

### 【平穩】

のどか「ネ、ネギ先生<sup>せんせい</sup>。

最近お疲れのようですけど大丈夫ですか？」

ネギ「フッフ、まだ大丈夫ですよ……………」

のどか「そ、そうなんですか。私に出来ることあったら言ってくださいね」

ネギ「……………流石に巻き込めません」

【大戦関係者同窓会】

テオドラ「アリカ、久しぶりじゃの」

リカード「まったく。大戦の後始末がこんなに長く掛かるとはなあ」

セラス「この面子が顔を合わせるのも何年振りでしょう」

ナギ「おう、あんたらか。世話を掛けたなあ」



アル「今皆でネギ君鍛えてるんですけど、あなた方もやりませんか？」

ネギ「……………え？」

【決意】

ネギ「……………一人でやるしかないっ！」

アスナ「何だか追い込まれてる目してるけど、大丈夫かしら？」

アリカ「そろそろナギとアルを×ておくか」

【色々ともう駄目かもしれない】

ネギ「！ そうだ！

『咸卦法』と『闇の魔法』マキア・エレベアと『契約執行』シム・イブセ・バルスと『戦いの歌』カントウス・ペラークス  
を同時に発動させれば！！！！」

アリカ「『契約執行』と『戦いの歌』を同時発動させても意味ない  
と思うがの」

アスナ「……………もう休みなさいな」

茶々丸「最近坊ちゃまの目が濁っているように見えます」

【仮契約】

ネギ（霊体） 「『バクティオー仮契約』 つ！！！！」

ネギ（肉体） 「……………」

エヴァ 「自分（霊体）と自分（肉体）で仮契約したと！？」

アル 「しかも『マキア・エレベア闇の魔法』でわざと肉体を魔族化させてからですか。ここまでいくと、もう霊体と肉体で別人とっていいかもしれませんから、

他人との契約扱いになるんでしょう」

アリカ 「そんなこと試した者は誰もおらんじゃろっな」

ナギ「なんでえ、あいつパートナーも見つけれないのかよ」

アスナ「……………パートナー見つけれないのはナギたちのせ  
いだと思うけど」

### 【仮契約カード】

ネギ「称号は“独りぼっちの一角獣”。

アーティファクトは“おためしけいやく白紙仮契約カード”と“サブフライトシステム空飛ぶゲタ”？

徳性は“希望”。方位は“中央”。

色調は“白”と“赤”。星辰性は“彗星”。

……“白”い“独りぼっちの一角獣”で“赤”い“彗星”？

色々混じってますね「

【“白紙おためしけごやく仮契約カード”】

契約主と従者の名前欄が空白で、他には何も書かれていない仮契約カード

“契約者と従者のどちらかに、ネギ・スプリングフィールドの名前を入れること”、

“名前欄に、自分の血で、自分の名前を、自分で書くこと”で契約成立

契約者と従者を交換して、同じ人間で相互に主従となるのは不可能  
契約者と従者を交換する場合は一度契約を破棄すること  
ただし、“本当の仮契約カード”を使用して相互に主従となるの  
は可能

何枚でも作成可能

“従者への魔力供給”、“従者の召喚”、  
“念話”、“防御力アップ”は使用可能

“潜在能力の発現”、“アーティファクトの召喚”  
“衣装の登録”は使用不可能

ネギ「……………自分一人だけじゃ意味なくね？」

【サブフライトシステム  
“空飛ぶゲタ”】

1機のみ発現可能

ジェット噴射なので後進不可能

大きさは縦長の約2？

長谷川千雨が気づけない程度の認識障害、微弱な魔法障壁が常時発動

簡単な自立行動が可能

仮契約した人間なら操縦可能

“白紙仮契約カード”おためしけいやくの仮契約者も操縦可能

アスナ「あら、サブフライトシステム“空飛ぶゲタ”は面白いわね」

アリカ「うむ、風を切って空を飛ぶのは気持ちいいの」

ネギ「対“アラルフラ紅き翼”には役に立ちませんけどね」

【卒業式】

ネギ「ふう、3・Aの皆さんとも今日でお別れですか。

魔法使いとしての修行も無事に終わりました。

今となっては良い思い出です」

エヴァ「ふむ、最後の卒業式となると感慨深いものだな」

アスナ「初めてにしては良い教師だったわよ、ネギ」

アリカ「やっとネギの晴れ舞台を見ることが出来たのじゃ」

ナギ「よし、じゃあこれからネギの卒業試験を始めるか」



ラカン「全力で来いよ、でなけりや死んじまうぜえ」

アル「準備する期間はたっぷりありましたからね。

どのような手を使ってくるのか楽しみです」

タカミチ「大丈夫。ネギ君なら僕達にだって負けないさ」

クルト「今日は何と良い日でしょうか。

ネギ君が一人前となるためのお手伝いが出るなんて……

……」

詠春「木乃香も大学までこちらにいるからね。

何かあったときのために、ネギ君には一人前になってもらわないと」

ガトウ「(……………こころ辺一带に何か仕掛けてあるな)」

ネギ「……………」

【対“紅き翼”】

アラルプラ

エヴァ「強制転移魔法で深海1000mへ全員転移させ、  
詠唱出来ない上、水圧で身動き取れないところを各個撃破  
か」

ヴィルさん「MSモビルスーツというのは厄介ですな。

水中でも息は出来るし、水圧にも耐えられる。  
魔法はマグナム弾とやらで代用可能ですか」

ネギ「それでも死人が出ない“紅き翼”アラルプラってマジパネエっす」

アリカ「（本気で殺す気だったのかの？）」

アスナ「（いや、勝つことしか考えてなかったんじゃない？）」

茶々丸「（坊ちやまのお顔が、やけに晴れ晴れとしてます）」

チャチャゼロ「ケケケ、イイ感じニ壞レテ来タナア」

【ネギから見た関係】

エヴァ「本当に初恋だったかもしれない」

アスナ「姉さん。でも、もしかしたら恋かもしれない」

アリカ「二股眉毛、じゃなかった。妹とか欲しいです」

ネカネ 「戦闘さえしなければいい人なんだけど……………」

ナギ 「駄目親父死ね」

ラカン 「筋肉達磨死ね」

アル 「変態死ね」

タカミチ 「デスメガネ死ね」

クルト 「仕事しろや、元老院議員」

詠春 「仕事しろや、西の長」

ガトウ 「煙草吸いすぎで肺ガンになりやがれ」

テオドラ 「年考えろ、じゃじゃ馬皇女」

アーニヤ 「僕と仮契約して、ミニストラ・マキ魔法使いの従者” になってよ」

小太郎 「僕と仮契約して、ミニステル・マキ魔法使いの従者” になってよ」

刹那 「僕と仮契約して、ミニストラ・マキ魔法使いの従者” になってよ」

木乃香 「僕と仮契約して、ミニストラ・マキ魔法使いの従者” になってよ」

楓 「僕と仮契約して、ミニストラ・マキ魔法使いの従者” になってよ」

古菲 「僕と仮契約して、ミニストラ・マキ魔法使いの従者” になってよ」

アルちゃん 「ノーコメントでお願いします」

ヴィルさん 「何でこの人の側が一番安心するんでしょう?」

茶々丸 「坊ちゃま言っつな」

スタン 「治ってくれて良かったです」

のどか 「のどかさん、マジ天使。」

でも、だからこそ巻き込めない orz

エヴァ 「結局“お母さん”って呼んでくれなかった orz」

アスナ 「……………弟みたいなものよ」

アリカ 「結局あんまり甘えてくれなかった orz」

ネカネ 「良い子に育ってくれて嬉しいわ」

ナギ 「俺がガキの頃はもっと元気良かったんだけどなあ」

ラカン 「面白いガキに育ったぜ」

アル 「この子は私が育てました。フッフッフ……………」

タカミチ 「この子は僕が育てた」

クルト 「この子は私が育てた」

詠春 「木乃香の婿にはまだ早いですね……………」

ガトウ 「アスナを嫁にやるにはまだ早いな……………」

テオドラ 「やけに冷めた目で見られるのお」

アーニャ 「こっち見んな」

小太郎 「こっち見んな」

木乃香 「こっち見んな」

刹那 「こつち見んな」

楓 「こつち見んな」

古菲 「こつち見んな」

アルちゃん 「何で微妙な目で見られるんでしょう?」

ヴィルさん 「ネギ様のおかげで私には被害が来ないので……………」

茶々丸 「……………私でよければ」

スタン 「会ったびに遅しくなっていくのお」 何も知らない人

のどか 「……………えへ、また逢えないかなあ。ネギ先生<sup>せんせい</sup>」

【『咸卦法』と『マギア・エレベア闇の魔法』の同時発動は出来るようになりました】

343

ネギ「遂に“マギステル・マギ偉大な魔法使い”と呼ばれることとなりました。  
悪魔による石化魔法の治療方法の確立が評価されたみたいで  
す。

それに“アラルブラ紅き翼”相手にガチンコ勝負しても、  
勝つとまではいかないでも逃げきれerようになりました。

戦闘・治癒・その他諸々全部一流です。

まさに人生勝ち組。テンプレ通りな転生人生ですねえ。ハッ  
ハッハ。



「？  
“転生チートつぜえ”とか感想で書かれたらどうでしょう」

「ヴィルさん……涙をお拭きください。ネギ様」

ネギ「……………こんな人生勝ち組なテンプレ転生人生より、

平穩が欲しかったです orz」

【それに結局パートナーになってくれる人はいませんでしたとさ】

アリカ「早く孫の顔が見たいのじゃがのお……………」

ネギ「11歳相手に無茶言わないでください。

それが自分でもう一人作ってください。

出来れば妹が欲しいです」

ナギ「パートナーになってくれるのがいないって、

お前ハブられてんじゃねーのか？」

ネギ「パートナー出来ないのあんたらのせいでしょうがっ！！！」

アスナ「……………本屋ちゃんはあるあなたに気があるみたいだったけど」

ネギ「のどかさんみたいな天使を、

こんなヤクザな世界に巻き込めるわけないじゃないですか！

！！！」

アスナ「……………」

茶々丸「……………」

ネギ「（原作ネギがうらやましいです）」

「……?」その願い、叶えてあげましょう

ネギ「……え？」

## プロローグ

おはようございます。朝起きたら赤ん坊になってたネギです。

夢の中で変な声が聞こえたんですよ。

「元気？」

この前原作ネギがうらやましいって言ってたでしょ。私は優しいからその願いを叶えてあげるよ。今度は原作世界のネギに転生だ。

あくまで今の君の魂をコピーして貼り付けるだけだから、さっきまで過ごしてた並行世界のことは気にしなくていいよ。

能力は今まで同じ。といっても赤ん坊からやり直すから肉体は鍛えなおしてね。修行で拡張した魔力とかはそのまんまだよ。

ま、わがまま言っちゃ駄目だということ。それじゃ頑張ってる

」

あれですか？

やっぱり最初にわがまま言ったのがムカついてたんですね。余計なことしゃがってコンチクショウ！

ああ、もう！

せつかく“紅き翼”<sup>アラルフラ</sup>による修行<sup>しゅもん</sup>から抜け出すことができたと思っ  
たのに！

またやり直しですか！？ 最悪だ！

しかも死亡フラグが何気にある原作世界。

これだったら“紅き翼”<sup>アラルフラ</sup>による修行<sup>しゅもん</sup>の方が………<sup>しゅもん</sup>  
行<sup>もん</sup>の方が辛いな、これだったら。

ハア、しょうがない。グダグダ言ってもしょうがないし頑張りま  
すか。

とはいえ、やってられないですよ。

「ネギ〜！ 夕御飯出来たわよ〜！」

「はい！ ネカネ姉さん！」

原作世界サイコーーツ！！！

やっぱりネカネ姉さんはこうでなきゃいけませんね。ウン。

エヴァさんとガチンコバトルするネカネ姉さんなんてどこにも存

在しないんや！

さて、序盤の山場の悪魔襲撃なのですが。原作より早くメルディアナ魔法学校に入学することで回避しました。

ネギ「僕も来年から魔法学校に通うんでしょ？」

見学に行ってみたいよ〜」

ネカネ「あら、そうなの？　じゃあ校長先生に頼んであげる」

校長「よく来たの、ネギ。

どれ、少し魔法を試してみるかね？」

ネギ「プラクテ・ビギ・ナル（全力全開の）『アールデスカット火よ灯れ』！」

ネカネ「キャンプファイヤー！？」

校長「あ〜あ〜髭があ〜髭があ〜！！」

アーニヤ「覗きこんでいたおじいちゃんが黒焦げに！」

つてなことをしたら、「このガキ、ちゃんとした魔法を早く覚えさせないとヤベエ！」となり、早い入学を認められました。

“紅き翼”<sup>アラルフラ</sup>の修行<sup>しゅうもん</sup>のおかげで、魔力量は木乃香さんを超えてましたからね。そりゃ全力全開でやれば火柱も立つというものです。

……………今思えばなんであの修行<sup>しゅうもん</sup>生き延びられたんだろ？

それとゴメンね、おじいちゃん。わざとだったんだよ。

でも、おじいちゃんの尊い犠牲のおかげで村の皆が助かったんだから、笑って許してね。

ちゃんとそのあと治療魔法もかけてあげたから大丈夫でしょ。全力全開で『治療』<sup>クイラ</sup>かけたら髭がとんでもなく伸びたけど、別に問題ないよね。

元老院もさすがに魔法学校を襲わせるのはやめたらしく、平穏な日々でした。

長期休暇で里帰りしたときに、スタン爺さんからナギの杖を“入学祝い”の名目でプレゼントされました。ナギはちゃんと来てたよっです。

自分は村にいませんでしたけどね。わざわざご苦労さんです。

この杖は魔法媒体として優秀ですから、精々使わさせてもらいま



す。

並行世界の詠春さんから習った神鳴流もこの杖で練習しましょう。神鳴流は武器を選びませんから杖で大丈夫です。ステッキ術も練習しておきますかね。

そうだ！

“紅き翼”<sup>アラルツラ</sup>に関する映像をまほネットで取り寄せましょう。きっとドキュメンタリーか何かで、実際の“紅き翼”<sup>アラルツラ</sup>が戦闘している映像があるでしょうから、神鳴流はその映像を見て見様見真似の自己流で練習したことにおきます。

それとタカミチから『咸卦法』と『居合い拳』を見せてもらっておきましょう。となると腕輪型か指輪型の魔法媒体も用意しておかないといけませんね。

あとは『闇の魔法』<sup>マキア・エレベア</sup>もエヴァさんのことをまほネットで調べておいて、そこから研究したことにおきます。

これでアリバイ作りは完璧です。

なんとか原作開始前にはある程度並行世界のときの力を取り戻せるでしょう。おそらく、並行世界のときの自分が“10”だとしたら、“6”と“7”の中間ぐらいには取り戻せます。

年齢不相应な戦闘力になりますが、バグキャラということ勘弁してください。

「ネギ、アンタまた山へ修行に行くの？」

「そうだけど。どうかしたの、アーニヤ？」

「成績が良いからって調子に乗っちゃだめよ。アンタってば頭が良い割りに、変なところで抜けてるんだから」

「ずっと学校に入ると気が滅入るよ。たまには外で思いっきり羽根を伸ばしたい時だってあるんだよ。」

それに学校の中だったら派手なことできないし」

「……………くれぐれも山火事なんかには気をつけなさいよ。」

アンタはおじいちゃんをコンガリ焼いた前科があるんだからね」

根に持ってますね、アーニヤ。

まあ、幼いアーニヤにはあの光景は酷だったかもしれない。

村を襲われないようにするためとはいえ、少しはアーニヤのことも考えてあげるべきでした。

……アレのせいで原作より火炎魔法が苦手になったせいか、  
『アーニヤ・フレイム・〜』がまだ一度もされてないことは嬉しい誤  
算でしたけどね。

自分が治癒魔法も得意なせいか、アーニヤも張り合うように治癒  
魔法の練習をしています。多分これもおじいちゃんの尊い犠牲のお  
かげでしょう。

「わかってるよ。気をつけるから大丈夫だよ。」

お土産は何が良い？ 多分ユリの花がそろそろ綺麗に咲いている  
と思うけど」

「す、好きにしてくださいよ！」

……気に入ったら貰ってあげるわ」

「そんじゃ、イノシシでも狩ってくることにするよ」

「！ こ、このバカアーニツ！！！！」

アーニヤは可愛いなあ、ハツハツハ。

「冗談だよ。

じゃ、行ってくるからネカネ姉さんと仲良くね。

それともアーニヤも一緒に行く？」

「フン！ 行かないわよ！

……………いつてらっしやい」

とりあえずヴィルさんクラスを相手に出来るような力をつけたら、山籠りを行うことにしました。

もしかしたら元老院は自分殺すの諦めていないかなあ〜と思ったので、諦めていなかったときに誘い出すためです。

こうして山籠りするようになったのなら、魔法学校にいるときよりも山籠りしているときに狙うでしょうからね。

いつ来るかわからない刺客より、いつ来るかわかる刺客の方が対処しやすいです。

それに、自分のせいで魔法学校の関係者を巻き込んだらいけませんからね。

キリアキブル・アストラペー

……………『千の雷』に巻き込んだら大多数の人が死んじゃいますし。

もちろん転移魔法は使えるし、転移魔法符も持ってきてありますので、逃げる準備も万端です。

万端だったんですが、全然来ませんね。一応優秀な成績を修めているので、始末するより“英雄の息子”として利用することにしたんでしょうか？

来ないなら来ないで全然構いませんし、来ないんだったら修行をするだけだからいいんですけどね。

あ、ユリ発見。

アーニヤとネカネ姉さんへのお土産にしましょう。

………食べ切れなかったイノシシ肉もお土産にしましょうか。

## プロローグ（後書き）

第二章スタートです。

ネギは“アラルフ紅き翼”の修行しゅぎんのせいでサバイバル知識なども豊富になりました。

G・W・中にも何回か更新したいと思います。

御意見・御感想お待ちしております。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第一話 メルディアナ魔法学校での日々

アンナ・ユーリエウナ・ココロウア

私には幼馴染がいる。

名前をネギ・スプリングフィールドといい、世界を救った英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子だ。

といっても、私はネギのお父さんであるナギさんと会ったことはないし、世界を救ったと言われてもピンと来ない。

だから私にとっては結局、“英雄の息子のネギ”ではなく、“幼馴染のネギ”。

ナギさんも“世界を救った英雄”ではなく、会ったこともない“ネギのお父さん”でしかない。

そのネギだけど、変わった男の子だった。

変わったというよりチグハグな感じな男の子というべきか。なんだかアンバランスなのだ。

興味のあることは力を尽くし、他のことはおろそかになる。学校の勉強だってそうだった。

初めて使った魔法で火柱を立て、治療魔法を使っておじいちゃん  
の焼き切れた髭を伸ばした。普通、治療魔法で髭は伸びないハズな  
のに。

まあ、治療魔法のことはともかく。

魔法学校は大騒ぎになり、急遽ネギを魔法学校に入学させること  
になった。

当然ね。

あんなのを村で野放しにしてたら、村がいつ火事になるかわから  
ない。

上級魔法を試しに唱えてみて、アッサリそれが発動して村が破壊  
されることすら有り得るわ。

……………というか学校で実際あったし。

空に向かって唱えていたから被害はなかったけどね。

そんなことがあって、ネギは学校の教師の期待を一身に背負うこ  
とになった。

背負うことになったのだけど、本人はまったく気にしていなかつ  
た。というより気づいてさえいなかったのかもしれない。

教師が難しい魔法を勉強させようとしても、



「知るかバカ！ そんなことより治療魔法だ！」

などとワケのわからないことをのたまって、治療魔法の練習ばかりしていた。

3ヶ月ほど練習したら誰も治療魔法はネギに敵わなくなっていた。

きつとネギはおじいちゃんに火傷を負わせたことを、ずっと気にしていたんだと思う。

私が風邪を引いて寝込んだときも、寝ずに看病してくれていたこともあったし。

……………お返しにネギが風邪で寝込んだとき、私も看病してあげようと思っているのは私だけの秘密だ。

といっても今だにネギは風邪を引いたことがないのだけだ。

治療魔法の勉強が終わった後、

「便利そうだから」

という理由で転移魔法の勉強を始めた。

確かに転移魔法は便利で、長期休暇で村に戻るのも楽になった。

というか長期休暇以外でもたまに村に帰っている。だって、1秒で着くんだもん。

しかし、あとになって考えたら転移魔法を覚えさせたのは失敗だった。

ネギの行動範囲がとんでもなく広くなってしまったのだ。

おかげでネギは“山籠り”なんて妙な趣味に目覚めてしまった。

そのせいでネギに会いにタカミチさんが初めて来たときは、山中を探し回った挙句に先に学校に戻ってきて来客を知らされたネギに迎えに来られる、という踏んだり蹴ったりな目にあってしまった。ネギの転移魔法と一緒に帰ってきたタカミチさんの悄気た顔はしばらく忘れることが出来なかったわよ。

ウチのネギがごめんなさい。

おじいちゃんやネカネ姉さん、それに私がいくら言っても“山籠り”をやめようとしなない。  
でも何故か、

「買い物に行くから、今度の休みは付き合って」

とか頼むと、山籠りを休んで一緒に買い物に行ってくれる。それ

もアツサリと。

でも教師なんかが適当な理由で山籠りに行かせないようにしても断ってしまふ。

山籠りをやめて付き合ってもらえるのは私とネカネ姉さん、それとたまにおじいちゃんの3人ぐらいだ。

後輩に治療魔法を教えるとかの名目なら行かないときもある。

ドネットさんが言うには、“ネギにはネギ独自の判断基準があつて、それに忠実に動いている”、ということだった。

他人が“是”とするものでもネギが“否”と思えば否定し、他人が“否”とするものでもネギが“是”と思えば肯定する。

ネギ的には「危険だからやめなさい」は“否”で、「買物に付き合つて」は“是”らしいけど、私にはネギの判断基準がわからない。というか誰にもわからないと思う。

常識をちゃんと持つていて普段は普通なのに、何故かときたまトンチンカンな答えを出すのだ。

おじいちゃんが言うには

「違うように見えて、それでも根っこはナギ似」

ネカネ姉さんが言うには  
「もうちよつと落ち着いてくれるといいんだけど」

ドネットさんが言うには  
「何考えているかわからない猫みたいな子」

スタンお爺ちゃんが言うには  
「話を通じる分、ナギよりもある意味面倒」

要するにネギはポケポケなのだ。  
やっぱりネギには私が付いていないとダメみたい。

というか山籠りのお土産がバラの花束ってなんなのよ。  
結局「綺麗に咲いていたから」という理由で、特に深い意味はな  
かったらしいけどね。

……………ふ、深い意味って、別に変な事考えたわけじゃない  
んだからねっ！！！！

しかし、来週で私達は魔法学校を卒業することになる。

私もネギも一年の飛び級、といってもネギは普通より1ヶ月早く入学して同級生だったので、同時に卒業することとなる。

これから一人前になるための修行内容がお告げによって決まる。

私は一人でも大丈夫だけど、ネギはどこか抜けているから心配だね。アイツは一人でもやっていけるのかしら？

この前なんか、『インペラトル・フェニックス皇帝たる不死鳥』とかいう、火の鳥を放つ魔法を開発して喜んでいたりするし。

新魔法を開発するなんてのは凄いことだけど、“退屈だったから”という理由で開発するのはどうかと思うわ。

ネギ・スプリングフィールド

今のは『燃える天空』ウーラニア・フロゴシスではありません。『奈落の業火』インケンディウム・ゲヘナエです。

……………さすがに『魔法の射手』サキタ・マギカで『燃える天空』ウーラニア・フロゴシス以上の威力を出すのは無理です。

だいたい戦闘の勘を取り戻せました。

麻帆良に行っても、全力状態のエヴァさんから逃げ切れるぐらいのことは出来ません。転移魔法もありますしね。

まあ、エヴァさんに対しては『登校地獄』インフェルヌス・スコラスティクスの解呪に協力すれば悪くはされないでしょう。並行世界で解呪した知識もありますし。

「ほい、チエックメイト」

「ぬお！ 待つんじゃない、ばーず！」

そんなとき、気晴らしにスタン爺さんとチエスを打っています。親衛騎団の作成は無理でしたね。

頭数少ないのを何とかしたかったんですけど。

やはり知能を持って、自律行動可能な駒なんてものは作れません。

「それにしてもぼーずもあと一週間で卒業か。月日が流れるのは早いもんじゃな。」

しかし、村にいていいのか？ てっきり魔法の研究とかずっとしてるもんだと思っておったぞ」

「あと一週間で卒業だからだよ。一週間じゃ時間足りないからね。うっかり研究始めたせいで、研究に興が乗って卒業式サボることもないかねいし」

「……………あまりネカネに心配かけさせないようにするんじゃぞ」

「わかってるよ。だからここでゆっくり休暇とってるんじゃない。僕としても今まで急ぎすぎてた感があるのは思っていたからね。卒業までの一週間ぐらい、ゆっくり休暇とってバチはあたららないでしょ」

『カイザーフェニックス』の再現は難しかったですね。威力も『ウーラニア・フログーシス燃える天空』の方が強いから完璧なネタ技になりましたが。

『天地魔闘の構え』も無理でした。

ただその過程で、魔法を術式固定状態で手に持っておいて、それ

を敵に叩きつける戦闘方法を開発しました。

フランス・バリエース・アエリアーレス

『風花・風障壁』を使えば『フェニックスウイング』もどきが使えます。

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ

悪戯心で『雷の暴風』の固定状態をイノシシに飲み込ませたら凄いスプラッタなことになりましたが。

……………ラカンさん相手でも通じるだろうなあ。確実に死ぬでしょうけど。

「イノシシとか熊を狩ってくるのは、ゆっくりしてるうちに入らないと思うんじゃが」

「だったらスタンお爺ちゃんの腰の治療もしなくていいのかな？」

「ぐぬっ！……………まったく可愛げがなくなりおつて。」

小さいときの純真なぼーずはいったいどこに行ったんじゃ？」

ハイハイ、と生返事を返しながら駒を初期状態に戻します。



もうすぐ卒業です。

麻帆良に行ったら頑張りますか。

並行世界と違って明日菜さんはバカレッドだし、刹那さんもポストバカレンジャーだから期末テストが面倒臭いですねえ。

早めにバカレンジャーの皆さんと刹那さんに勉強頑張ってもらおうようにしましょうか。

## 第一話 メルディアナ魔法学校での日々（後書き）

“インペラトル”とはラテン語で“皇帝”の意味。

……いや、この前“ダイの大冒険”全巻読み返したものでw  
自分で考えておいてなんですが、固定状態の魔法を相手に飲み込  
ませるってエグくないですか？。

ネギはアーニヤに対して意識的に優しくしておりますが、“アー  
ニヤによる看病”などの好感度を上げるイベントは素でスルーして  
います。

ここらへんが「どこか抜けている」と言われている理由です。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

## 第二話 卒業

メルディアナ魔法学校校長

我が校には一人の天才児がいる。

名前をネギ・スプリングフィールドといい、世界を救った英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子じゃ。

初めて唱えた魔法で大人すら出せそうにない火柱を立て、治療魔法を3ヶ月勉強しただけでワシを含めた教師の誰よりも上達した。

魔力量もナギ・スプリングフィールド以上のものを持ち、それに驕ることなく貪欲に勉強を欠かさない。

これだけ聞くと本当に天才児なのじゃが、同時にあの子は天災児でもあった。

初めて唱えた魔法で火柱を立てたのはいいのじゃが、そのおかげでわしはコンガリと焼かれてしまった。

いや、それはまあいい。

誰もあんなことになるなんて思ってもいなかったし、それこそ初めて魔法を試したネギでは予想することは出来なかったじやろう。

事故が起こった責任はその場にいた大人、つまりわしにある。

ナギの息子なんだから、同じようにとんでもないことを仕出かすかもしれないのを失念していたわしの責任じやろう。

英雄であるナギの息子でもあるということ、教師の期待も大きかった。

じゃが、ネギはそんなこと全然気にしないでマイペースに日々を過ごしていった。

ナギは狭苦しいのが嫌なのか魔法学校を中退して世界を巡った。それに比べたらネギはマシなのじゃが、それでも“我を貫き通す”ということについてはナギと一緒にじゃ。

やはりネギは“ナギの息子”なのだと思わされることが何度もあった。

教師が何を言おうと、まず治療魔法を勉強し始めたのが良い例じゃ。おそらくわしを焼いたことを悪いと思ったのじやろう。

必死に勉強したため、わずか3歳のうちに治療魔法は学校の誰よりも上達し、教師を唾然とさせていた。

おかげで治療魔法の教師が自信をなくし、実家へ帰ろうとしたのを説得しなければならなかった。

別にネギが悪いわけではないのじゃが。

だが、後輩へ治療魔法を実践して見せるためとはいえ、自分の腕を切り落とそうとするのはどうかと思うのじゃが。

「優れた治癒術者は千切れた腕を接合したり、欠損した部位を復活させたりすら出来るそうなんですけど、先輩は出来るんですか？」

「やってみようか？」

何でこの会話で自分の腕を切り落とそうとするんじゃ？

あれじゃな。

ネギ的には指に軽く切り傷つけるのと、腕を切り落とすのは同程度の事なんじゃろうな。「治せるから別にどっちでもいいや」ぐらいの。

実際ネギの実力なら治せるじゃろうし。

あの子は常識を持っているようなのじゃが、その尺度が違いすぎる。

“治療魔法で治せる傷を自分に付けて、治療魔法の練習をする”、  
“というのによくある治療魔法の練習での常識なのじゃが”。

ネギと他人の間では、“治療魔法で治せる傷”という尺度が違うのじゃろう。

慌てて止めたからよかったのじゃが、止めておらなかつたら後輩

がトラウマになるところじゃったぞ。

10歳にもなっていない子供の目の前で腕を切り落とそうなんて、少しは考えて事を行なって欲しいのう。

……………そういうネギもまだ10歳になっておらんのかな。

全員がネギのように肝っ玉が座っているというか、ズレているワケじゃないんじゃない。

こちら辺が理由でアーニヤに「どこか抜けてる」と言われているんじゃないかな。

魔力量の多さは……………、両親のおかげじゃろうな。

父親がただでさえ出鱈目に魔力が大きかったナギで、母君がウエスペルタティア王家の御方。

突然変異のバグキャラと脈々と魔法世界最古の血を受け継いできた血筋の御方の息子。サラブレッドと呼んでいいのかどうか……………。

そんなネギも遂に卒業することとなった。

問題となったのは卒業後の一人前となるための修行場所じゃ。

元老院は本国によこせ、と言ってくるがそんなことは出来んかった。

大方都合の良い英雄に祭り上げるつもりじゃろう。

祭り上げられるだけならまだ良い。しかし、あのネギの性格では元老院すら相手にしないじゃろうな。

元老院とは悪い関係しか築けないであろうから、元老院にとって都合の良い英雄として使い潰されるか、ブチ切れたネギが元老院を潰すか。

いくらネギとはいえ元老院には勝てないじゃろうから、使い潰されるのがオチじゃ。

……………さすがに元老院には勝てない、じゃろうな？

しかも、スタンの話では過去にネギの殺害計画があり、それを知ったナギがネギを助けるために村に来たということじゃ。

あいにく、その頃にはネギは入学しておったがの。ネギの杖はそのときにナギが置いていったものだという。

そんな企みがあったと知った以上、本国にネギはやれん。

アリアドネーという手も考えた。

「学ぶ意思があるもの」はたとえ魔物や犯罪者であつても捕らえることは禁止されている、というアリアドネーならばネギでも問題なからう。ナギと共に大戦を戦ったセラス総長がいるから安心じゃしな。

しかし、問題なさ過ぎて逆に不安になってしまつ。あの探求者の巣窟にネギを放り込んだらどうなるか？

「混ぜるな危険」。……………そんな言葉が浮かび上がってきたわい。

たとえ危険なことにならなくても、あの研究するのに環境の良いアリアドネーに行かせると研究に熱中して引き籠るのではなからうか？

となると、やはり日本の麻帆良しかなかった。

あそこはナギの知り合いでもあるコノエモンが学園長を務めておるし、“<sup>アラルツラ</sup>紅き翼”のタカミチ殿もおる。あの2人ならネギに悪いようにせんじやろう。

コノエモンの悪フザケは心配じゃがの。

ネギも麻帆良の図書館島に興味を持っていたので、ネギ自身は特に反対しないじやろう。元から果たす義務は果たす性格じゃしな。

“教師になる”というのは気になるが、後輩にモノを教えるのは上手じゃったから問題あるまい。

というか“生徒になる”というのはあの性格だと無理じやろうな。ネギの先生になる方が気の毒になるわい。

……………決してコノエモンに押し付けようとは考えておらんぞ。

他に選択肢がないだけじゃ。



もう少しネギがシッカリしてくれていれば、こんな心配しなくて済んだんじゃないのう。

思わずそんなことが心に浮かびながら、ネギに卒業証書を渡すわしじゃった。

### ネギ・スプリングフィールド

こんにちは。卒業証書を渡されたときのおじいちゃんがした憐れんだ目が気になるネギです。

アレ？　もしかして本国行き？

並行世界のとくと同じくらしいの成績におさえ、時系列を乱さない卒業時期になるようにちゃんと調節したんですけど。

まあ、卒業証書を見てみればわかりますね。

そういえば、卒業式である今日の朝まで村にいたんですが、昨日の夜にスタン爺さんから

「実はナギは生きている。その杖はナギのものなんじゃ。

ばーずが魔法学校に入学したあとにナギがこの村に来たんじゃ」

と、告白されました。

そういえばそれを知っておかないと、エヴァさんと良好な関係を築けないかもしれませんね。

原作でもナギが生きていることを知ったからこそ、ネギに協力しようと思ったかもしれないですし。

まあ、それが全てではないですけど、少しは関係あるでしょうね。

ありがとうございます、スタン爺さん。

さて、そろそろ浮かび上がってくるでしょう。  
ちゃんと原作通りでしょうか？

「ネギ何て書いてあった？」  
私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今浮かびあがると」

ハイハイ、……………えーと。お、よかったよかった。  
ちゃんと原作と一緒にです。

「日本で教師をすること」、だってさ」

「……………ハ？ な、何よソレ！？」

「校長！」

“先生”ってどーゆーことですか！？」

「ほう……………。 “先生”か……………」

「何かのマチガイではないのですか!？」  
「10歳で先生など無理です!」

「そつよ!

ネギつたらただでさえ治療魔法の実践で腕を切り落とそうとする  
ボケで……………!!!」

「しかし卒業証書にそう書いてあるなら、決まったことじゃ。  
確かにネギを外に出すのは心配じゃが、“偉大な魔法使い”<sup>マキステル・マキ</sup>にな  
るためには、頑張つて修行してくるしかないのう。

……………でも、あまり頑張りすぎるでないぞ」

あれ? 原作とセリフ違わね?  
まあ、このくらいの乖離なら問題ないでしょうけど、何か自分変  
な事やりましたっけ?

さーて、荷造りとかしないといけないし、日本語はもう話せます  
けど、出来れば原作開始時期と同じくらいに行きたいですねえ。  
ま、それは麻帆良との話し合い次第ですか。とりあえずタカミチ  
と連絡とってみましょう。

あ、しまった。

タカミチはもう自分が日本語話せるの知ってるんだった。となる

と原作より行くの早まりますかね。

## 第二話 卒業（後書き）

ネギは“アラルアラ紅き翼”の修行しゅうもんのおかげで、怪我に対する常識が失われています。

「腕がちぎれた？ くつつければいいじゃん。  
腹に穴が開いた？ 塞げばいいじゃん」

ですが本人にとっては普通のつもりです。

そんなこと“アラルアラ紅き翼”の修行しゅうもんでは日常茶飯事だぜ！

校長のネギに対する感想はぶっちゃけると

「魔法に関しては天才だけど、アホの子」

ぐらいに思われています。

# 5 / 20 全話「・・・」を「…」に修正しました

### 第三話 麻帆良学園到着

ネギ・スプリングフィールド

おはようございます。ネギです。

麻帆良に到着しました。やはり耳鳴りがするので飛行機は慣れませんが。

というか原作のネギは元気ありますよね。到着して直に授業をするって。

それにしても懐かしいなあ、麻帆良学園。  
何だかんだいって10年ぶりですか。

「高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！

高畑先生！  
高畑先生！

ワンツッ！！！」

……………それにしても懐かしいなあ、アスナさん（NOT明  
日菜さん）。

もう、あの人とは会えないんですね。  
タカミチめ、余計なことしやがって。

やはり明日菜さんは明日菜さんということなんですね。

それにしても、まさか寒波で一週間も空港が閉鎖されるとは思っ  
ていませんでした。

冬休み中に麻帆良へ移動しておいて、いろいろ準備しようと思っ  
ていたのがパアになりましたよ。

時期的に原作より早く来れはしましたけどね。

「えーと、次は逆立ちして開脚の上……………」



現実逃避してないでさっさと行きましょつか。

神楽坂明日菜

うづうづう~~~~!

木乃香「たら、騙してくれちゃって。何が「好きな人の名前を」よ。もうっ。」

おかげで注目集めちゃったじゃない。

「ところで木乃香。

今日こそは新任の先生って本当に来るんでしょうね?」

「大丈夫やよ、アスナ。

今朝、ちゃんと日本に到着したっておじいちゃんに連絡あったみたいやし。」

「しゃあないやん。ずっとイギリスの天气が悪くて飛行機が出なかつたらしいやん。」

「3学期の始業式に間に合ったのは良かったけどなあ。」

「確かに飛行機が飛ばなかったのならしょうがないけどね。」

「ま、おかげでそのことを伝えに来てくれた高畑先生と会えたから悪くなかつたけど。」

「ああ、冬休み中だったのに高畑先生に会えたのはラッキーだったわ。」

「しかも空振りになったことを謝ってくれて、「ありがとう、スマナイね」と頭も撫でてくれたし。ウフフ。」

「どうせだったら今日も来なくてもいいかしら。そしたら高畑先生がまた来てくれるかも。」

「アスナー、顔が変になっておるえ。高畑先生のこと考えるのはええけど、ほどほどになー。」

「ほら、あの子微妙な顔をしてこっち見てるえ。」

「べ、別に変な顔なんかしてないわよっ!」

何てこと言うのよ、木乃香ったら。  
ただ高畑先生のコト考えてただけなのに。

……っつて、子供？

「失礼します。」

神楽坂明日菜さんと近衛木乃香さんですか？」

「は、はいっ！　そうです」

話しかけてきたのは変な長い杖を持って、バッグを載せた大きい  
キャリーケースをゴロゴロと引き摺っていた、………子供？

子供よね？　背がクラスの鳴滝姉妹ぐらいしかないし。  
でも、子供とは思えない感じが何故かするわね。それに私達が待  
っていたのは新任の先生の筈。

「そ、そうやよ。」

えーと、ぼ、坊……アナタはどちらさん？」

「はい、ネギ・スプリングフィールドと申します。」

今日はわざわざ案内をしていただけということ、御迷惑をお

掛けします」

「あ、いえ。…………お安いご用ですえ」

木乃香も戸惑っているわね。

やっぱり、この子が新任の先生なのかしら？

それともただ背が低くて童顔なだけ？

留学生がクラスにいるといっても、あまり外国の人達の顔がわかるわけじゃないし。

「おひさしぶりでーす！！ ネギ君！」

高畑先生！ こんな朝早くから会えるなんてラッキー…じゃなかった。

丁度いいところだ。

「おひさしぶりです、タカミチ。

半年振りぐらいですね。これからよろしく願います」

「麻帆良学園にようこそ。  
いい所でしょう？ “ネギ先生”？」

「えー？」

「やっぱり新任の先生なん？」

「はい、それでは改めまして。

「この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・ス  
プリングフィールドです」

「こ、この子が新任の先生！？」

「やっぱり見た目より年食ってるのかしら？」

ビックリしたわー。あんな小さい子が先生なんて。やっぱり外見通りの年やったみたいやね。それにしても10歳で先生になるなんて凄いなあ。

「アハハ、自分が子供というのはわかっていますからね。別に“スプリングフィールド先生”なんて無理して呼ばなくても構いませんよ」

「ええの？」

「じゃあ、“ネギ君”って呼ばせてもらうなー」

「い、いいんでしょうか？」

「ネギ君がそういうなら構わないさ。確かに元から無理があることなんだし、ネギ君が先生として立派に務めていると思ったら“ネギ先生”と呼んであげてくれないかい」

「は、はいっ！ 高畑先生！！！」

アスナは相変わらずやなー。もう全然ネギ君のことは目に入っていないわ。

にしてもネギ君が担任補佐かー。  
確かに高畑先生は出張多くて、ホームルームが自習になることも多かったからなー。保護者からクレームでも来たんかも。

「最初はネギ君が担任になる話もあったんだけどね。  
流石にそれは無理があるということで僕が担任のまま、ネギ君が担任補佐となってくれることになってね」

「そ、そんな話があったんですか!？  
ハアアア、よかったです」

「話題に上っただけですよ。  
僕のような子供が担任になるのは無理がありますし。3学期からいきなり担任が変わるなんて、生徒の皆さんにとって良いこととは思えませんからね。  
学園長の冗談兼、僕が天狗になってないかを調べるための話だったみたいですよ」

「そ、そうみたいだね。  
学園長はたまにオフザケが過ぎるから困ったもんだよ。ハッハッハ……」

なーんか高畑先生の反応怪しいなあー。

もしかしておじいちゃん本気だったんやないかな？

そんでネギ君に正論言われて、「実は君を試すつもりだったんじや！」で誤魔化したんやろ。

……まーたネギ君に“ウチと見合いせんか”とか聞くやろうから、とりあえず金槌用意しておこか。

「着いたえ。あの部屋が学園長室や」

「はい、ありがとうございます」

この子緊張とかしてなさそうやね。  
大人っぽいと思ってたけど、本当に10歳なんかな？

「ネギ君、ところで気になってたんやけど？」

「？ なんですか？」

「このバッグって中に何か居るん？  
たまにゴソゴソ動いてるけど」



「そついえば鳴き声らしきのも聞こえてくるわね」

そうなんや。

ネギ君が引き摺っているキャリアケースの上に載せてあるバッグ。ゴソゴソ動いて、鳴き声も聞こえるんや。

「ああ、僕がウェールズで飼ってたペットです。ホラ」

ペラ、とネギ君がバッグをめくると、そこにはイタチみたいなおつちやくて真っ白な動物がおつた。

やーん、かわえーなあ。

指近づけるとスンスンと匂い嗅いでる。ホレホレ。

「フェレット……かしら？」

TVで見たのより丸っこいわね」

「オコジヨですよ。」

オコジヨもフェレットもイタチ科ですので仲間ですね。ちなみに

カワウソやラッコなんかと同じイタチ科の仲間です。

昔、畏にかかっていたのを助けたのがキツカケで飼うことになりました」

あ、指舐められた。大人しいなあ、この子。

確かイタチ科の動物は、かわええ顔して実は凶暴なこともあるみたいやのに。

「この子の名前はなんてーの？」

オス？ メス？」

「名前は“アルちゃん”といいます。

“元”男の子です」

あら？ 何かこの子ビクついたわ。

ネギ君もさつきまでと同じ笑顔のはずなんやけど、ちょっと怖い雰囲気になったし。

どうかしたんかな？

ま、かわえーからええか。  
よろしくなー、 “アルちゃん”。

### 第三話 麻帆良学園到着（後書き）

本来、明日菜やネギは木乃香のことは“このか”と平仮名で名前を呼んでいますが、読みやすいようにこの作品では“木乃香”とさせていただきます。

忠実に原作に沿った方が良いと思うのですが、読みやすさ優先にします。

漫画だったら吹き出しの中のセリフ数が少ないので、平仮名でも十分読みやすいと思いますが、こういう形式ですと平仮名では読みにくいと思いますので。

他にも読み方を変えることもあるかもしれませんが、なるべく変えないようにしたいと思います。

さすがに“のどか”を“長閑”には出来ませんしねw

それにしても、原作でネギはカモを逃がしたことを怒られています、オコジヨ妖精って食べたりするんでしょうか？

違いますよね？

ただネギがオコジヨ妖精だったことを伝えていないだけで、人語を話すオコジヨ妖精を食べたりしませんよね？

少なくとも、自分は食べたくないなあw

# 5/20 全話「・・・」を「∴」に修正しました

第四話 初日？ 10年前に通過済

高畑・T・タカミチ

「電話では何回か話したが、直接会うのはこれからはじめてじゃの。メルディアナの校長からよく聞いておるよ。麻帆良にようこそ、ネギ・スプリングフィールド君」

「はい、はじめまして。近衛学園長。

ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

僕の目の前に大きくなったネギ君がいる。

半年見ないうちに、また大きくなったなあ。やはりこの年頃の子供の成長は早いものだ。

それにしても、ネギ君と同僚になるとはね。

学園長とメルディアナの校長から事情を聞くまではそんなこと思いましなかつたな。

思えばネギ君と初めて会ったのは、もう6年も前になるのか。  
元老院によるネギ君の暗殺計画があったことを知った僕は、急ぎ  
ウェールズに向かった。

その前からネギ君のことは聞いていたし、“とある事情”で通常  
より早く魔法学校に入学したことも聞き及んでいた。

“とある事情”の中身を聞くまではネギ君の暗殺計画のせいだと思  
ったけど、まさかネギ君が校長を燃やしたせいだとは思わなかつ  
たな。ハハハ。

まあ、ナギの息子らしいといえば息子らしいのかな。

「ところでネギ君には彼女はおるのか？

どーじゃな？ うちの孫娘このかなぞ」

「ややわ、じいちゃん」

ガスツ！ そんな音がして学園長の頭に金槌が突き刺さる。

教師としてなら注意しなくてはいけないけど、学園長だから別に  
いいか。

ネギ君と友達になった僕は、時間があればウェールズに行ってネ  
ギ君の顔を見るようになった。

ナギとあの御方の忘れ形見が大きくなっていくのを見るのは楽し

かったし、校長の話ではナギが生きているかもしれないということも聞いた。

魔法を使えない僕には魔法を教えてあげることが出来なかったけど、少しばかり武術を教えることが出来た。

……まさか『咸卦法』を3カ月で習得するとは思っていなかったけどねえ。

ネギ君に『咸卦法』を見てみたいと言われたので見せてあげたら、3カ月後に次会ったときには既に習得してたなんて。

思わず啜えてた煙草を落として、落ち葉を延焼させるところだったよ。

僕は覚えるのに苦労したのになあ。

それからネギ君は綿が水を吸収するようにどんどん成長していった。

ネギ君もナギと同じ、バグキャラかな。

そういえば、ネギ君に麻帆良では魚釣りならともかく、狩りはしないように言っておかないといけないな。

たくましいのはいいことだけど、ナイフ一本でイノシシを解体する4歳児ってのはインパクトがありすぎて、どうかと思ったよ。美味しかったけどね。

まあ、ナギも魔法世界でトカゲ肉をサバイバルで料理していたっていうし、そんなところも似てるのかな？



「そろそろ、もう一つ」

しまった。

昔を思い返していたらいつの間にか話が終わりそうだった。

昔を懐かしむってコトは、僕もやっぱりもうトシなのかなあ。ハ  
ハハ。

「木乃香、アスナちゃん。」

ネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの」

「え！？ どの、どついつことですか、学園長先生！？」

「ウチは別にえーけど？」

「学園長。いくらなんでも女子寮に僕が入るのはマズイのでは？  
独身者用の職員寮とかはないのですか？」

「確かにタカミチ君が入っているような独身者用の職員寮はあるし、  
空き部屋もあることはあるんじゃないか。そこはペット禁止なのじ  
ゃよ。」

それにいくら先生といつても、10歳の君を独り暮らしさせるわけにはいかんじやろ。

タカミチ君は出張が多いから任せるわけにもいかんし、何より2人暮らしには狭いじやろうからな」

「う、年齢を言われると僕には何も反論できません。

僕としては家事能力はあるつもりですが、10歳の僕が独り暮らしをして火事でも起こしたら、責任問題どころの話じゃなくなりますからね」

「そういうことじゃ。フオフオフオ」

……………ネギ君なら大丈夫だろうけど、ここは黙っておいた方がいいだろうな。

というかネギ君なら野宿でも大丈夫なんだよね。

よく僕とネギ君の2人でキャンプに行ったけど、弟や息子がいればあんな感じなのかな？

「ええやろ、アスナ。

かわえーよ、この子」

「も、もう！　しょうがないわね！」

「申し訳ありません。お世話になります。  
出来るだけ家事もお手伝いしますので」

「ありがとう、スマナイね。アスナ君、木乃香君。  
僕からも礼を言うよ」

「ハ、ハイッ！」

この子のことは私にお任せください、高畑先生!!!!」

ハハハ、相変わらずアスナ君は元気がいいなあ。  
この2人に任せておけばネギ君は大丈夫かな。

「へー、ネギ君料理出来るんや。

どーゆーの作るん？ イギリス料理？ …… イギリス、料理？」

「イギリス料理といえばイギリス料理ですね。一応イギリスにも料理はありますよ。

プディングとかパイとか。スコーンとかも焼けますけど、オープンが無いと難しいですね。

あとはキャンプなんかで作るサバイバル料理とかも出来ます」

「ちっちゃいのに凄いなあ。」

「アスナより出来るんちゃうか？」

「私だって少しは出来るわよ！」

「あとはハンティングで獲った獲物の解体ですかね。  
ウサギとかイノシシとかカモとか」

「へ？ へ？？ そう……………なんや？」

…………… ウン、あとでキツク言っておかないといけないな。

まあ、日本と外国だったら文化の違いもあって狩猟の認識が違うから、しょうがないといえましょうがないのかもれないけど。

日本だったら20歳以上の狩猟免許を持った猟友会関係しか狩猟は出来ないけど、欧米だったら子供でも普通に狩猟する地域があるしね。

「魚料理はあんまり自信ないですね。」

釣った川魚を捌いて塩焼きか、フィッシュアンドチップスを作れるぐらいです」

「フィッシュアンドチップス？」

聞いたことあるえ。日本で知られてるイギリス料理の中でも一番有名やないかな」

「あと料理法知ってるのは“ウナギのゼリー寄せ”とかですかね」

「“ウナギのゼリー寄せ”？ 何よソレ？」

それはやめておくんた、ネギ君。

ネギ・スプリングフィールド

「神楽坂さん達は先に教室に戻っていなさい。」

9：30から始業式のために順次体育館に移動開始。それまでは教室待機んだけど、質問時間でほとんど潰れるでしょうね。今のうちに自己紹介を考えておきたいわ」

「僕はあるので先に体育館に行ってるよ。時間になったらしずな先生と一緒に、生徒達を体育館に連れてきてくれ」

「あ、神楽坂さん、近衛さん。

案内ありがとうございます。これからよろしくお願いしますね」

「うん、よろしくな」

「わかってるわよ。

そ、それでは高畑先生！ また後で！」

原作通り、明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候させてもらうことになりました。アルちゃんはその荷物と一緒に学園長室に置いてきたままですけど大丈夫でしょう。

「ハイ、これがクラス名簿。

早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね」

……よし！

ちゃんと超鈴音さんが存在しています！

前の世界では彼女がいなかったことが一番驚きましたからねえ。

あ、いや、一番驚いたのはさっちゃんでしたっけ。

何であるコアラの人がベータに並ぶツンデレキャラみたくなっ  
たんでしょうか？

「どうしたの？ 緊張してるのかしら？」

「ちょっとしてますけど、大丈夫です」

前の世界のトラウマが疼いてましたなんて言えませんが。

さて、それではノックして、ドアを開けましょうか。もちろん教  
室に入らず、開けるだけです。

ガラッ！ ボトッ！

目の前に黒板消しが落ちてきました。  
ドア開けただけなんで目の前に。

パスッ！ と足元に落ちた黒板消しを見つめ、

その先に仕掛けられていたロープやバケツを見つめ、

沈黙している2 - A生徒を見つめ、



最後に沈黙しているしずな先生を見つめて一言。

「引っかった方が良かったですかね？」

「……………ど、どうかしらね？」

「じゃあ、やり直しますのでテイク2お願いします」

落ちた黒板消しをドアに挟みながらドアを閉めます。  
そしてドアを閉め終わると、後ろ側のドアへ瞬動を使って移動。

「え！？ ちょっと待ってよ！！！！」

「はい、何ですか？」

話は聞かせて貰いました！  
あなた達皆図書館島送りですっ！！！！

「!? 今度は後のドアから!? ってへブツ!?」

「アララ。駄目じゃないですか、鳴滝風香さん。」

目の前で仕掛けた黒板消しトラップに引っかかるなんて」

「お、お姉ちゃん、大丈夫!? ってキヤア!?」

「ふ、ふみかー!ー!ー!」

うわぁ。

風香さんを助けようとした史伽さんがロープに引っかかり、矢の掃射を受けてバケツが顔に嵌まったみたいです。かわいそうに。

残念ですが2 - Aの皆さん。

あなたが仕掛ける悪戯など、自分が既に10年前に通過した場所なので!!!

……………そういうところは並行世界では無くなっていて欲しかったんですけど、残念ながら前の並行世界でもありましたね、コンチクショウ。

「目に、目にチヨークの粉入ったー！」 「うえー、びしょ濡れですー」 「ちよつと、二人とも大丈夫ー？」 「メデイーツク衛生兵！ メデイーツク衛生兵！！！」 「何やってんのよ、もう！」

おつと。昔を懐かしむよりも事態を収拾しなきゃいけませんね。始業式の前にある程度の質問タイムも用意しておかないと、式の最中でも私語が止まらないかもしれないですし。

まずはチヨークの粉まみれになった風香さんと、バケツの水で濡れ鼠になった史伽さんを着替えさせますか。

いやー、それにしてもアレですね。

「わあ、大惨事」

「いや、お前のせいだろう」

エヴァさんに突っ込まれた!?

第四話 初日？ 10年前に通過済（後書き）

“ウナギのゼリー寄せ”。

一度は怖いもの見たさで食べてみたいですw

# 5/20 全話「・・・を」に修正しました

第五話 初日？ なげやり

近衛木乃香

「今日からこの学校で英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。」

3学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

あのトラップ騒ぎの後、ネギ君の自己紹介になったんや。

やっぱりネギ君しつかりしてるな。テキパキとふーちゃんとふみちゃんをジャージに着替えさせてたし。

全然物怖じしてないわあ。

続いて始業式が始まるまでは質問タイムとなったんやけど。

「キヤアアツ」「か、かわいいー！」「何歳なのー！？」

「どっから来たの！」「何人！」「今どこに住んでるの！？」

「ねえ、君ってば頭いいの」「あーん、カワイー！！」

いやあ、ネギ君皆に揉みくちやにされてて、全然質問タイムにな  
ってないわあ。

ネギ君大人気やなあ。  
かわえーからわかるけど。

「大変ねえ、あの子」

「あれ？ アスナは混じらんの？」

「子供は好きじゃないの。」

それにあの中突っ込んでいくのは疲れるわよ」

まあ、そつやな。

それにウチらは夜になったらゆっくり話せるしなあ。

「ハイハイ！」

歓迎していただけるのは有り難いのですが、このままだったら始  
業式の間になってしまいます！ 一度皆さん席に戻ってください！  
質問のある人はそれからです！」

おんや？ 揉みくちゃになつてたネギ君がいつの間にか復活しておる。

慣れてんかなあ？ 揉みくちゃにされていたときもニコニコと笑つて表情崩しておらへんかったけど。

あれが英国紳士つて奴かいな？

「ハイ！

！」  
だつたらまず2 - A報道部の私、朝倉和美が進行させてもらつよ

それではネギ先生、まず簡単なプロフィールをお願いします」

「えーと、名前は先ほど言ったとおりネギ・スプリングフィールドです。

イギリスのウェールズ出身で、今年で10歳になります。去年の7月に大学を卒業しました。

特技はステツキ術です。護身を兼ねて修行してました。

趣味はトレツキングです。住んでいたのが山奥だったので、山歩きをよくしていました」

ハア、ネギ君凄いわあ。

本当に大学卒業してるんやねえ。

それにステツキ術？

そついえば長い杖持ってたなあ。アレ使つんやるか？

「ほほお、先生は杖術使いアルか。  
今度手合わせするアルよ」

「いえいえ。

それなりに自信はありますけど、あくまで護身術の一環ですよ」

「謙遜するなアル。

歩き方見ても結構な使い手とわかるアルよ」

「ハハハ、ありがとうございます。

古菲さんは中国武術研究会に所属してるんですよね？

近いうちに部活巡りをしようと思ってますので、そのときにも  
是非」

「よし、約束したアルよ。

というかよく私の名前と部活わかったアルね？」

「クラス名簿を見たので名前と顔と所属部活ぐらいはわかります」



そんな感じで質問タイムも順調に進んでった。  
えへへ、これからおもしろくなりそうやなあ。

ん？ 手紙回ってきたえ？

えーと、ナニナニ？

「始業式後、ネギ先生歓迎会するよん！

各自の分担は××××××××（以下略）」

おー、そうやね。せっかくやから歓迎会せなもつたいなあ。  
ウチは買い出しやね。

ほなら、アスナにも付き合ってもらおーか。

ハアア~~~~。皆はしゃぎすぎよ。

いくら新しい担任補佐にあんな小さい子供がきたからって。

まあ、年のせいかな、カワイイ顔してるから皆がはしゃぐのもわかるけど。

といっても、私は高畑先生みたいな大人な男性が好きだから、あそこまで騒がないけどね。

しかし、よかったあ〜。

高畑先生が担任辞めなくて。

木乃香には悪いけど、あの学園長ならあのネギって子でもアツサリ担任にしそうだから怖いわ。

この事はあの子に感謝しておこうかしら。

それにしても、たとえ10歳の子供とはいえ、男を女子寮に住まわせるって学園長は何考えてるのかしら。

まあ、子供を独り暮らしさせるわけにはいかないってのはわかるし、学費とかの件でお世話になってるからしょうがないのかしら。

これがあの子じゃなくて高畑先生と暮らせるんなら大歓迎なんだけどなあ……………。

……無理ね。

ちよっと想像しただけで顔が赤くなったのがわかるわ。

そういえば、あの子は高畑先生のコト名前で呼んでたわね。

高畑先生が独身用職員寮に住んでなければ、一緒に住まわせるよ  
うなことも言ってたし。

もしかして昔からの知り合い？

………夜にでも少しあの子、イヤ、ネギ先生にお話しを聞  
かせてもらおうかしら。

居候させてあげるんだから、宿泊代のかわりにいろいろとお話し  
は聞かせてもらわないとねえ。

具体的には高畑先生の好みなんかを。ウフフフ。

「あ

つて、あら？

ネギ先生じゃない。

始業式終わったら職員室に挨拶しに行ってたみただけど終わったのかしら。なら、ついでに歓迎会に連れて行きましょう。

でも、なにしているのかしら？ 目線の先には………、本屋ちゃん？

危ないわね。

たくさんの本持ってグラついてるのに、階段降りてるなんて。

つて、本屋ちゃんが足を捻ったのかバランス崩した！？

あの高さで落ちたらケガじゃすまないわよ！ ここからじゃ、受け止めるのは間に合わない！

「…… やっぱし！」

「きゃああああ！」

それを見たネギ先生は、今日始めて会ったときから常に持ち歩い

ていた、自分の身長よりも長い杖を本屋ちゃんに向けて構え、

「ハアッ！」

という掛け声と共に、

ブン投げた！

って、えええええっ………!?

何やってんのよっ、あの子は………!?

ビュオン！ そんな擬音が聞こえてきそうな勢いで投げられた杖は、

ガスッ！ と石垣の隙間に突き刺さった！

そして丁度その上に本屋ちゃんが落ちてきて、杖を中心にしてくルリと一回転半。

その隙に本屋ちゃんがあのかの杖を掴めたら良かったんだけど、それでも地面に落ちるまでの時間稼ぎは出来たみたい。

投げると同時に駆け出していたネギ先生が先に本屋ちゃんの下に到着していて、落ちてきた本屋ちゃんを受け止めたわ。

……ふう、間髪だったわね。

ネギ先生が杖投げたときは何かと思っただけど。

ネギ先生つたら槍投げでもやってたのかしら？

って、こっぴどいじゃないわね。受け止めたのは見たけど、一応無事を確認しなきゃ。

少なくとも本屋ちゃんは目を回してそうね。

「ちよつと。」

「2人とも大丈夫?」

「あ、神楽坂さん」

「……………う、せ、先生?」

「見てたわよ。」

「大丈夫? 2人ともケガとかしてない? 立てる?」

「僕は大丈夫です。」

「宮崎さんは大丈夫ですか?」

「ハ、ハイ。大丈夫です。ありがとうございます。」

「……………つて、はづつうう~~~~、お、降ろしてください~~~~」

「あら、テンパっちゃってるわね。」

「よくよく考えてみれば、本屋ちゃんって今ネギ先生にお姫様抱っこされてるものね。」

恥ずかしがりやの本屋ちゃんならそりゃテンパるか。

「み、宮崎さん！ 顔真つ赤ですよ！

大丈夫ですか！？ 保健室行きますか！？」

「い、いえ！ 大丈夫ですう！」

逆効果だから顔近づけるのはやめなさい。

見た感じ大丈夫そうね。安心したわ。

とりあえず2人共落ち着かせてから歓迎会に連れて行きましょ  
うか。

まったく、3学期初日だっていうのにドタバタな日になっちゃっ  
たわねえ。

本屋ちゃんにケガがなかったのは良かったけどね。

「それにしても凄いわね、ネギ先生。

杖をあんな風に投げて本屋ちゃんを助けるなんて。

槍投げでもやってたの？」



「ええ、イノシシとかウサギ狩るのにやってみましたね」

イノシシは槍ぐらいの大型のエモノじゃないと致命傷与えられないんですよー、ハツハツハ、と朗らかに笑う10歳児。

陸上競技じゃなくてハンティング？ 何か間違っていないかしら？

………変な子。

「宮崎さん立ってますか？

神楽坂さん、申し訳ありませんけど本拾うの手伝ってあげていただけますか？」

僕は杖をとってきますので、と垂直に立っている石垣をロツククライミングのように両手両足を使って登っていく10歳児（スーツ・革靴着用）。

野生的なインテリ。

……いや、インテリな野生児。  
それがネギ先生に抱いた私の感想だった。

第五話 初日？ なげやり（後書き）

ちなみにイノシシ狩りに『ティタノクトノン巨人ころし？ 暴風の螺旋槍』使った  
ら、イノシシが木っ端微塵になりました。

『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ雷の暴風』の固定状態を飲み込まれたり木っ端微塵にされたりと、ウェールズのイノシシ涙目です。

# 5/20 全話「・・・」を「…」に修正しました

第六話 初日？ 自業自得

神楽坂明日菜

「ようこそ！」

ネギ先生「……っ！」

ようやく歓迎会の始まりね。

あの後、図書館島まで本屋ちゃんの本を運ぶの手伝ったら遅くなっ  
っちゃったわ。

ネギ先生も大変ねえ。あつという間に皆に囲まれちゃったわ。

さて、お腹もすいたし。私は超包子特製肉まんでも食べてましょ  
うか。

「あの……、」

「ネギせんせい……」

「あ、宮崎さん」

「あのー、さっきはそのー、  
危ない所を助けていただいて、そのー、あのー、

これはお礼です、図書券……………」

本屋ちゃんが男性に積極的に話しかけるところなんてはじめて見たわね。

いくら助けられたからって、10歳の男の子に頼染めるなんて……………。

もしかして、もしかするのかしら？

「センセ。」

私からもコレを……………、記念です」

って、何やってんのよー！？

あのバカいんちょー！……！！

銅像をプレゼントするなんてバカじゃないの！？

「やあ、ネギ君。

教師生活初日、おつかれさまだったね」

「あ、タカミチにしずな先生まで」

た、高畑先生!?

やっぱりあの子、高畑先生のコト名前で呼んでるのね。

名前で呼ぶってことは、やっぱり昔からの知り合いで親しいのかしら!?

「え、えーと、ネギ先生?

高畑先生のコト名前で呼んでるけど、知り合いなの?」

「あ、神楽坂さん、先ほどはお疲れ様です。

ええ、タカミチとは6年前から、僕が3歳のときからの知り合いです」

「ウン、ネギ君のお父さんは僕の先輩だね。

それがキツカケでネギ君と友達になっただよ」

ろ、6年前からの知り合い！？  
しかも親が友人同士！？

「タカミチがウェールズに来たときは一緒にキャンプとかしたんですよ。」

日本のこともタカミチから聞いてて、前から興味を持ってました」

「そうだね。」

ウェールズの夜空は、麻帆良の夜空とまた違う感じがしてね。

2人で夜空を見上げながら、夜通し話し込んだりしたもんだよ。

おかげで翌朝つらくなっちゃって、ネギ君のお姉さんに「子供に徹夜させるな」って怒られたこともあったよ、ハハハ」

430

「僕にとってタカミチは“お兄さん”って感じですね。一人っ子でしたし。」

もっとも年からいくと“お兄さん”じゃなくて“おじさん”って感じですけど」

「酷いな、ネギ君。」

僕はまだまだ若いさ」

アハハ、と朗らかに笑いあう2人。

夜通し話し込む仲！

それなら、私の知らない高畑先生のコトも知ってそうね！

ウフフフフ、今晚は寝かせないわよ、ネギ先生！（尋問的な意味で）

「ちょっと、アスナさん！？ どーゆーことですか！？

ネギ先生と相部屋だなんて！？」

うげっ、いんちょにロツクオンされた。

知らないわよ、そんなこと。

学園長先生に言ってよね。



ネギ・スプリングフィールド

歓迎会終了後、今日からお世話になる明日菜さんと木乃香さんの部屋に移動しました。

エヴァさんの家とはまた違った感じですね。

「実は神楽坂さんのコト、以前にタカミチから聞いたことがあるんですよ」

「え!？」

「た、高畑先生は私のこと何て言ってたの!？  
キリキリ吐きなさい、ネギ!」

「妹みたいな子”って言ってました!」

「グハツ!

「……………い、妹みたいな子」

あ、死んだ。

明日菜さんは元気良いですねえ、何か良いことでもあったんでしようか？

タカミチについて話してたら、いつの間にか“ネギ先生”から“ネギ”にランクダウンしてたし。

まあ、親愛度でいったらランクアップですかね？

「アスナのことは放っておいてえーよ。

どーせいつものことやし」

「恋する乙女は大変ですねえ」

「ちよっ！？ 何言ってるのよネギ！

何でわかったのよ！？」

「神楽坂さん見てたらタカミチ以外の人は誰だっかわかると思います」

「まあなあ、高畑先生はアスナがずっと見てるコト気づいてる様子は全然あらへんな。

高畑先生ちよっど鈍感すぎるんやないかな？」

「あ、やっぱりそうなんですか？ 近衛さん。  
神楽坂さんには悪いですけど、鈍感というよりそういう対象で見  
ていないんでしょうね」

「“近衛”って名字じゃなくて“木乃香”って名前で呼んでく  
ネギ君」

「わかりました、木乃香さん」

「……………アンタら。」

他人事だと思って好き勝手言ってくれるわねえ。  
というか、そういう対象で見えていないってどーゆーことよっ!？」

434

いや、でもねえ。

タカミチと話してる限り、ホントに脈ないんですよ。

「うーん、タカミチは最初の印象引き摺るというか、あまりその人  
の印象を変えないトコロがあるんですよね。」

神楽坂さんは小学校の頃からタカミチと付き合いがあるんですよ  
ね？

タカミチにはいつまで経っても小さいときの神楽坂さんの印象が  
あるんだと思います」

「だったらどうすりゃいいのよー！？」

諦めたら？

諦めて恋終了しちゃいなYO！

どうせ無理なんだから。

「いや、家族の話で神楽坂さんの話に及んだんですけどね。

神楽坂さんのこと語るタカミチは父性愛みたいなものに溢れていましたよ」

「あ、“愛”！？……………エへへ、そんな高畑先生ったら。

って、“愛”ということは喜ぶべきだけど、父親としての愛だったら私の気持ちはどうすればいいのよ！？」

「……………あ、そうだ。思い出しました。

神楽坂さんの話のとき、タカミチに「学校の長期休みにも、神楽坂さんを一緒にウエールズに連れて来ればいいのに」って言ったんですよ」

「高畑先生と一緒にウエールズ旅行！？

ナイスよ、ネギ！ よくそんな提案してくれたわね！」

「でもアスナは外国なんか行ったことあらへんやん？」

「ええ、タカミチが言うには「アルバイトと補習があるから無理だね」ってことでした」

「グハアツツ！！！」

「アルバイトはともかく、補習はアスナの自業自得やん」

「タカミチは後見人としていろいろな経験を積んで欲しかったみたいですけど、学費を自分で少しでも稼ぐという神楽坂さんの意思を尊重しているみたいですよ」

「……………私のバカあ。」

もういいわ。もう寝る。明日もバイトあるし。  
いろいろ話してくれてありがとう。

それとネギ。私のことも名字じゃなくて名前で呼んでもいいわよ。  
一緒に暮らすんだから名字で呼ばれるのはわずらわしいわ」

「あ、はい。」

「おやすみなさい、明日菜さん」

「そつやねー」。

もう遅いし、ネギ君も明日から授業があるんやからもう寝よか」

「そうですね。」

「じゃ、ちよっと柔軟体操したら寝ます」

ふむ、体が鈍らないうちに修行場所見つけないといけませんね。

前の世界だったらエヴァさんの家の周りで修行できましたけど、

女子寮に住むとなると難しいです。

とりあえず、しばらくは派手な修行は中止して、体操や筋力トレ

ーニングみたいな一般人に見せても大丈夫なもので済ませるしかない

いですね。

「おお、ネギ君体柔らかかいんやなあ。

ぺったり地面にお腹くっついとるやん」

「ホントね。」

「何？ 体操でもやってるの？」

「いえ、昔からの習慣ですよ。  
体が硬かったら、運動するのに差し支えますからね」

「……………ハンティングといい、本屋ちゃん助けたときの投げ槍とい  
い。  
多芸なのね」

「アハハ。  
僕が住んでいたところは娯楽施設とかなかったですし、子供も少  
なかつたですからね。  
必然的に山で遊ぶのが多かつたんですよ。」

「そうだ、明日菜さん。  
明日の授業前にお時間いただけますか？  
宮崎さんが落ちた階段の危険性を学園長に訴えますので、目撃者  
として証言お願いします」

「あー、その話のどこから聞いたえ。  
確かにあそこの階段って手摺とかなんもないからなー」

「別にいいわよ。  
またあんなこと起きたら困るからね」

「お願いします。」

ちなみにタカミチに事情を話したんですけど、タカミチも同行してくれるそうです」

「！？ 私に任せなさい！」

シツカリ学園長に危険性を訴えるわ！」

……………扱いやすいなあ。

まあ、こういう真っ直ぐな明日菜さんも逆に新鮮ですね。前の世界だったらクールなアスナさんでしたから。

「なあ、ネギ君。」

ちよつと背中押してみてもええかな」

「え？ 別に構いませんけど」

「お？ おおおお〜〜。」

凄いなあ。ウチはそんなに体柔らないからつらやましいわあ」

「毎日やってればこんな風にできますよ。継続は力なりです。」

ただし、柔軟体操するときは強く押したり引っ張ったりして関節に負担掛けちゃ駄目です。」



アレって要するに関節技かけてるのと一緒ですから、関節壊しちゃいます」

「へへ、そうなんや」

「え？ そうだったの？」

なんかその方が良く伸びるような感じしてたんだけど」

いや、本当にそうなんですよ。

やりすぎると間接が逆に硬くなるそうです。

「……………ネギ君。

背中あつたかいなあ」

「は？

ああ、僕は基礎体温が高いみたいなんです。

だから寒い日なんかは従姉のお姉さんに、湯たんぽ代わりに抱き枕にされることが多かったですね」

あと、たまにアーニヤとも。

「さ、寒いから今日は一緒に寝るわよっ！……！  
変なコトしたら怒るからねっ！……！」

とか赤い顔して言われました。ごっちゃんです。

「あ、ええなあ、それ。  
確かにあったかそうや」

「イギリスは緯度でいうと北海道より北にありますからね。樺太ぐ  
らいです。だから寒いんですよ。」

麻帆良に来て日本はあったかいと思いましたね」

「へへ、そうなんだ。」

「……ところで“いど”ってなんだっけ？」

「……………」

「な、なによ!？」

そんな驚いた顔しないでよ!」

「ごめんなさい。バカレツド舐めてました。」

期末テストは思いっきり苦労しそうです。

ああ、アスナさんが懐かしい……………。

「……………えいやっ！」

「グエツ！」

ギユム。と木乃香さんに押し掛られました。  
木乃香さんってたまに衝動的に変なコトしますね。

「あゝ、ホントや。

ネギ君あつたかい」

「何やってんのよ、木乃香」

「……………あの、さすがに苦しいんですけど。  
いくらなんでも体操中はやめてください」

「え？ 体操中やなかったらえーの？」

「え？」

「え？」

「それじゃ、ネギ君一緒に寝よっか。  
ソファーで寝るなんてやっぱアカンわ」

「木乃香、湯たんぼ代わりが欲しいだけじゃ……………、イヤ、いいわ。  
好きにきなさいな」

「あの、僕一応先生なんですが」

「女子寮の女子生徒の部屋に泊まるんやから、今更そんなこと言つても無意味やで」

返す言葉もございません。

というか、胸当たってます。

これで木乃香さんから「当ててんやよ」とか言われたら首吊りま

すけどね。

「明日菜さんから一言」

「諦めなさい。

どうせ2、3日で木乃香も飽きるわよ」

「じゃ、布団に入ろうえ。

………つて、ネギ君結構重いんやねえ。体もガツシリしてるし」

「え？ ええ。

えーと、身長が140cmで体重が39kgです。ちなみに体脂肪率は一ケタです。

というか、引き摺らないでください、木乃香さん。わかりましたから。自分で歩きますから」

こ、之は何事ぞ!？

フラグですか？ いつの間にか木乃香さんフラグ立ててたんですか？

いや、違いますね。

木乃香さんの目はそんな恋する乙女の目じゃありません。  
どちらかというところ、ペットの犬と一緒に布団で寝ようとする女  
の子”って感じですよ。

あるエピソード？

原作のネギより子供っぽくないはずなのに木乃香さんのこの反応  
はなんなんでしょう？

第六話 初日？ 自業自得（後書き）

原作のネギより子供っぽくないネギ。

ただし大人っぽいというわけではなく、むしろ愛玩動物っぽくないです。

そりゃ合計20年もコン君みたいなエセ少年生活送っていたら、保護欲かきたてられそうな雰囲気は素で染み付いてしまいます。

ちなみに寿命を100歳としたら、10歳という年齢は体感時間で人生の50%以上を占めているそうです。

つまり10歳までを2回繰り返せば、体感時間的に100歳越しちゃってるんですね。

魔法使いつてレベルじゃねーぞっ！！！

# 5/20 全話「・・・」を「…」に修正しました

第七話 母を訪ねて2550里

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「やあ、エヴァ」

誰かと思えばタカミチか。  
手に酒瓶らしきものを数本持っているが。

「それはジジイからか？」

「そつだよ。」

「あまり学園長から巻き上げないであげてくれよ」

「知らんな。賭け囲碁に乗るジジイが悪い。」



「持ってきたはいいけど、エヴァは持ち帰れるのか？  
1升瓶が4本あるけど」

む、1升瓶が4本。  
10kg近いな。

今の封印されている私では一苦労だ。

しょうがない。

「私の家まで運べ。タカミチ」

「言っと思った」

「やかましい。」

茶々丸に言って茶の一つでもくれてやる」

……………うむ、銘柄を確認したが良い酒だ。  
さすがジジイ秘蔵の酒なだけはある。

今夜はこれで一杯。

日本酒なら夕食は和食で……といきたいところだが、残念ながらこの酒はお預けだな。

「ところでエヴァ。」

風邪の方は大丈夫かい？」

「微妙だな。」

昨日の夜から微熱が続いているが、経験的に少し酷くなりそうだが、本当なら今日だって、茶道部の学期初めのミーティングがなかったら休むつもりだったんだがな」

くそ……。

この“ダイク・エヴァンジェル闇の福音”と呼ばれた私が風邪を引くことになるとは。

毎回毎回、風邪や花粉症になる度に憂鬱になってくる。それもこれも全部ナギのせいだ。

……………そういえばナギといえば。

「おい、タカミチ。」

あのぼーやは本当にナギの息子なのか？  
顔は確かにナギそっくりだが、性格が違いすぎるだろっ？」「

3学期から2 - Aの担任補佐としてナギの息子である、ネギ・スプリングフィールドが赴任してきた。

最初はナギの息子だというからどんな破天荒な奴かと思えば、どこにでもいそうなただの子供だった。

いや、10歳で教師の真似事をしているだけで、ただの子供というのは間違いなのだな。

まだ3日しか経っていないが、落ち着いて教師の仕事もこなせているし、ウチの騒がしい連中も上手に手懐けているようだ。

「ハハハ、言われると思ったよ。

大丈夫。ネギ君は確かにナギの息子だよ。

普通より早く入学した上に飛び級しているからね。

年上に囲まれる生活には慣れていいるのさ。

実際、向こうの学校でもネギ君より年下の子は、3つ4つ下の学年にならないといなかったらしいからね」

「フン。血のせいかな才能もあるようだな。

確か『咸卦法』も既に使えると聞いたが、本当なのか？」

「……………本当だよ。

ネギ君に『咸卦法』を見せるようにせがまれたから見せたんだけど、3ヶ月後に次会ったときにはもう覚えていたよ。

………何年もかかった僕はやっぱり才能ないのかなあ」

大の大人が落ち込むな。

「だいたい『咸卦法』は究極技法と言われるだけあって習得が難しい。」

もし『咸卦法』が出来るなら、それだけで凄い話なのだぞ。

「魔力の制御も完璧だ。」

「事前にあのぼーやが関係者だと言われていなければ、おそらく普通の魔法使いでは気づけんぞ」

「ああ、ネギ君はよくハンティングするからね。」

「獲物に気づかれないようにしていたら、自然とああなったらしい。」

「本気でネギ君が気配を消すと、僕でもわからなくなる。」

「昔、ウェールズでネギ君と2人でかくれんぼで遊んだこともあるけど、結局見つけられなかったよ」

「そこら辺は実にナギの息子っぽいな。」

「というか、タカミチほどの熟練者から隠れきることの出来るなんて、あのぼーやはいったい何なんだ？」

「ま、ネギ君がナギの息子だったことはそのうちわかるよ」

「なんだ。」

あのぼーやは猫被っているのか？」

「いや、ネギ君のはただの天然。」

ナギはわざとやるけど、ネギ君は素でやる」

………やけに実感籠った声で言うのだな。なんか遠い目しているし。

そんなに『咸卦法』をアツサリ覚えられたこと気にしているのか？  
タカミチの奴、出張多くて疲れているんじゃないのか？

「そういえば、酒4本とは多くないか？  
確かジジイとの賭けでは2本の筈だったんだが？」

「ああ、2本は貢物だったさ。  
ちゃんと今夜の集まりには出てくれよ」

……………今夜の集まり？

ああ、魔法関係者の顔合わせのことか。  
そういえば今日だったな。

麻帆良にはあのぼーやのように、日本以外からも魔法関係者が先  
生や生徒としてやってくる。

日本と海外では1年のタイムスケジュールが違う。  
ぼーやのように3学期からの赴任となるようなのがいるから、こ  
んな時期にも顔合わせをすることになってしまう。

「エヴァだって面倒臭いのは嫌だろう。  
前みたいに、勘違いした人がエヴァを闇討ちしようとするみたい  
なことは」

「確かに後片付けは面倒臭かったな。  
茶々丸もまだいなかったから、私が後片付けしなければならなか  
った」

「僕も手伝っただろう」

「お前が一番私の家を壊したんだろっが。」

いくらなんでも『豪殺・居合い拳』を家の近くで撃つんじゃない」

「いやあ、あのときはついウツカリ。」

修行のおかげで、ようやくガトウさんに近づけたと実感してた日々だったから。

「フン。」

襲ってきた生徒は本国送りだったか？」

「本国送りというか、魔法世界の実家に戻ったって感じだね。」

まあ、魔法世界で育った人はエヴァの噂を聞いたせいでノイローゼになるのは仕方ないんじゃないのかな。

気の弱そうな子だったし、「麻帆良が“ダーク・エヴァンジェル闇の福音”に乗っ取られている」なんて勘違いして、“殺られる前に殺れ”って思ったらしいよ。

流石は魔法世界のナマハゲ」

「泣きながら襲ってきたのはそういう理由だったのか。」

あと次ナマハゲ言ったら殺すぞ」

むしろ、アレだぞ。

“家族か何かを人質にとられていて、私を襲うように脅迫された”とかそんな感じだったぞ。

家を壊された怒りよりも、泣きながら襲い掛かれるという困惑の方が大きかったな。

子供だったから殺すわけにもいかなかったし。

「そんなわけで学園長も、エヴァのことも少しは情報公開にする気になったらしいよ」

「確かにわずらわしいのは減ったな。

今日はあのぼーやも来るのか？」

「いや、ネギ君は来ない。

教師としての仕事に合格してから魔法関係者に引き合わせるのが学園長の考えみたいだよ」

フム、それは何よりだ。

ぼーやの血を利用して『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』の解呪を考えているが、まだ早い。

ぼーやの性格なども把握しなければならぬし、やはり麻帆良の



大停電になるまでは待つべきだな。

今の段階で私が“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルと知られると、ぼーやが何をするか  
わからん。

その意味ではまだぼーやとは裏では顔をあわせるべきではない。  
まだ大人しくしている時期だ。

……ジジイは何か企んでいるかもしれんが。

まあいい、ゆっくり計画を練ることにしよう。  
そんなこんなで家に着いたな。

「よし、地下のワインセラーに運べ。  
そしたら帰れ」

「茶の一杯ぐらい飲ませてくれよ」

「フン。」

茶々丸、今帰った。  
茶を2つ頼む」

「お帰りなさいませ。マスター。  
そして、いらっしやいませ。高畑先生」

「お帰りなさい。マグダウエルさん。お邪魔してますね。  
タカミチ？ どうしてここに？」

.....。

.....。

.....何でぼーやが家にいる？

「……………ネギ君どうしたんだい？  
あれ？ スポンは？」

む、よく見ればぼーやはズボンを穿いておらず、バスタオルを腰に巻いている。

そして茶々丸はというと、ぼーやのものらしきズボンにアイロンをかけている。

……………何があつた？

「とりあえず事情を説明しろ。」

いや、その前にタカミチは酒を地下のワインセラーに運べ。

ぼー…ネギ先生はズボンを穿け。

話しはそれからだ」

「あ、ああ。わかったよ」

「ちょうどアイロンも終了いたしました」

「ありがとうございます。絡線さん」

高畑・T・タカミチ

「つまり、

川に流されていた猫を茶々丸が助けようとしたが、それをネギ先生が代わりに川へ入って助け、そのお礼にズボンの洗濯をした。

ということか」

「そうです。

この1月の寒い中に、川の中へ生徒を入らせるわけにはいきませ  
んから」

「ネギ先生。私はガイノイドです。  
ですので、そのようなことは気になさらずとも……………」

ハハハ、ネギ君らしいや。

最初は何事かと思っただけど、聞いてみれば単純な話だった

「……………フム。

茶々丸が世話になったようだな。  
礼を言おう。ネギ先生」

「いえいえ、教師として当然のことです。  
それと申し訳ありません。家主の了解を得ずに家に入ってしまった  
ました」

「いや、構わん。

そのまま帰るわけにもいかなかっただろう。

茶々丸が世話になっておいて、その借りを返さないわけにはいく  
まい」

そこら辺の貸し借りのことはエヴァもしっかりしてるからな。

最初はナギのかけた『インフェルヌス・スコリステイクス登校地獄』の件でエヴァがネギ君にどう対  
応するか心配だったけど、これなら大丈夫そうだ。

「さて、それではお暇させて頂きます。

絡繰さん、お茶ご馳走様でした。日本に来て久々に美味しい紅茶が飲めました」

「いえ。

こちらこそお世話になりました。ネギ先生」

「タカミチ。

お前も茶を飲んだんだから、もう帰れ」

「ハイハイ。

それじゃ、ネギ君。一緒に帰ろうか」

ネギ君とエヴァがこんなに早く接触することになるとは思わなかったけど、悪い出会いではないから良かったかな。

とりあえず学園長には一言伝えておくか。

「そういえばマグダウエルさん。

その、………失礼なことかもしれませんが、一つお聞きしたいことがあるのですが？」

「……………その質問の内容次第だな」

エヴァが“闇の福音”<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>であることの確認か？

ネギ君だから、エヴァが“闇の福音”<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>だということを知っても別に何もしなさそうだけど。

エヴァも気にしていない振りをしているけど、茶を飲みながら居住まいを正して聞く体勢をとっている。

「言ってみろ。ネギ先生」

さて、何が出てくるかな？

あまり大きいことにならないといいけど。

「マグダウエルさんって、“僕のお母さん”だったりしますか？」

「ブフオツ!!!」

……………大きいことだった。

あまりの突拍子の無さにエヴァも飲んでいた茶を吹き出すほどだった。

というか、なんでそんな発想をするんだ。ネギ君？

「マ、マスター。」

大丈夫ですか？」

「ゲホッ、ゲホッ……………」。

き、気管に茶が入った……………」。

「……………あー、大丈夫ですか？」

とりあえず今の反応でわかりましたので、もう結構です。失礼なこと聞いて申しわけありませんでした」



いや、投げっぱなしにして帰ろうとするなよ、ネギ君。  
これでエヴァもネギ君の天然さがわかっただろうなあ。

「待てっ！ 変なこと口走っておいて、さっさと帰ろうとするな！  
何でそんなこと聞いたのか説明しろ！ ぼーやっ！

タカミチも呆れてないでぼーやを捕まえろっ！」

いや、僕が呆れてるのはネギ君の天然さなんだが。  
ネギ君がどうやってあんな発想に到ったか興味があるから捕まえるけどね。

第七話 母を訪ねて2550里（後書き）

もちろんネギは狙ってやっています。

狙ってやってるのもありますが、素でやってるのもあります。

むしろソツチのほうが多いかもしれせん。

エヴァに「貴女は僕のお母さんなんですか!？」と聞くようなネギは、今まであまり見てない気がします。

オマケ・没ネタ

ネギ「は、はじめまして。お母さん!

僕ネギです。

お母さんの子供のネギ・スプリングフィールドです。

ようやく会えました……………」

エヴァ「ブフォツ!!!」

な、何をほざいているんだお前は!？」

ネギ「え!?!? そんなっ!?!?」

お父さんからそうだって……………」

エヴァ「……………ナ、ナギがだと」

ネギ「はい。」

これがお父さんの（筆跡を真似て捏造した）手紙です」

エヴァ「み、見せてみろっ！」

ナギ「エヴァへ

呪いを解けに行けなくて悪い。

おそらくネギから話を聞いてワケがわからないと思う。

ネギは俺の息子ではなく、

違法研究で作り出された俺のクローンだ。

研究所を潰したときに保護し、俺の息子ということにした。

エヴァには悪いが、ネギの面倒を見てやって欲しい。

頼める相手が他にいないんだ。

ネギにはエヴァのことを母と伝えてある。

お前に会いにいけるのはいつになるかわからない。

だが、もし次会えたときは、15年前に言えなかったコトを

言うよ」

エヴァ「……………」

ネギ「……………もしかして、ぼ、僕のお母さんじゃないんですか？」

エヴァ「いや！

私がぼーやの母だ！ 遠慮なく“お母さん”と呼ぶがいい

！……」

ネギ「（ニヤツ）お母さーん……！」

しばらくは面白いことになりそうだけど、あとで構成に困ると思っただけで没にしました。

# 5/20 全話「……」を「……」に修正しました

## 第八話 その名は迷探偵ネギ

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「さて、ぼーや。

なんであんなこと聞いてきたのか答えてもらおうか？」

「いつの間にか“ネギ先生”から“ぼーや”に呼び方が変わっていますね」

そんなことはどうでもいいっ！

ええい、タカミチが言ってた「素でやる」というのはこの事か!?

「えーと、まず間違いないと思いますが、一応確認しておきます。

マクダウエルさんは僕の父に倒されたといわれている、“ダーク・エヴァン 闇の福音”のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんですよ？」

アツサリと聞いてくるな。恐れもせず震えもせずに。  
馬鹿なのか大物なのか。

「そつだ。」

私は“ダイク・エヴァンジェル闇の福音”と呼ばれたエヴァンジェリン・A・K・マクダ  
ウエルだ。

ぼーやこそよくわかつたな。

今の私は封印されていて、一般人と変わりはないはずだぞ」

「え？ 隠す気あつたんですか？」

名前も変えていないのに？ と本気で不思議がる顔をするぼーや。  
……………カワイらしい顔なのに、ムカつくのは何故だろう？

「そ、それでネギ君はどうしてエヴァがお母さんだなんて思ったん  
だい？」

「んー、というより候補が数人しかいなくて、そのうちの一人がエ  
ヴァさんだつたんですよ。

理由としましては……………」

ぼーやの理由とはこうだ。

？ぼーやの母は表に出ることの出来ない人物ではないか？

？今まで聞いたナギの性格からして、ナギはそんなこと気にしなさそう？

？ぼーやが生まれる前にナギと関わりがあつた女性で、表に出ることの出来ない人物は？

？ナギに倒されたという私がまだ生きている事実？

？は確かにそうだろうな。

ナギは良くも悪くも有名人だ。

そのナギが結婚したとなると騒ぎになって、その相手も有名になるはず。

しかし、まほネットにもそんな情報は無く、それどころか自分の情報すらあまり無かつたという。

まるで隠されているかのよう。

それと世話になっっている村人や祖父に聞いても一切教えてくれなかったらしい。

そのことから考えると、確かにぼーやの母は表に出ることの出来ないのdarouうな。

?も当たっている。

というか、ナギがそんなこと気にするような繊細な性格をしているわけではない。

じゃあ、なんで私には靡かなかった？

……くそう、どうせその頃には相手がいたんだらうな。

?と?もわかる。

私とナギが出会ったのは15年前だし、私は表に出ることが出来ない。

それに私が生きているというのも事実なのだから。

「そんなわけで、もしかしたらマグダウエルさんは父と恋仲だったんじゃないかな?」と思ったんですよ。

少なくともマグダウエルさんが封印されただけということは、そこまで悪い関係ではなかったと思うんですね」



ほ、ほほう…………。

私とナギが恋仲か。

別にほーやはそのことに嫌悪感を抱いておらんようだな。

マ、マズイ。

紅茶のカップを持つ手が震えている。

落ち着け。落ち着くんのだ私の右腕。

「悪い関係だったら封印せずに、ブン殴って消滅させていたと思いますし」

「…………ああ、ナギならそうするかもしれないね」

…………ナギなら確かにそうだろうなあ。

思えば、よく1ヶ月も付き纏えたもんだ。

「で、もし父とマグダウエルさんの間に子供でも生まれていたとしたら、きつと世間から隠されると思うんですよ。僕みたいに。」

そして、その母のことは子供にも明かすことは出来ないでしょう。

マグダウエルさんには失礼ですけど、“英雄”と“闇の福音”の  
ダイク・エヴァンジェル  
子供なんて、他の大人にとっては危険な不確定要素ですから。  
その子供は最悪、殺されることだって有り得ます。」

……確かにそうだろうな。

もし、ナギが私を受け入れてくれてたとしても、世間からの迫害は収まることは無いだろう。

突飛なぼーやの話ではあるが、ありえない話しではないと考えてもおかしくはない。

「ちなみにネカネ姉さんを母親候補と疑ったこともあります」

「ネ、ネカネさんは君の従姉！

つまり、ナギにとって姪だろうっ！？」

「だからですよ。

“英雄”が姪を孕ませたとなったら絶対に公には出来ないでしょう。  
う。

それに、ネカネ姉さんって僕に激甘というか、ベッタリじゃない  
ですか」

「た、確かにネカネさんは君に甘いが……」

「大丈夫ですよ。“ こともあります ” と言ったじゃないですか。そもそもネカネ姉さんは処女ですよ。

材料に処女の血が必要な魔法薬作るとき、自分の血を使ってしまったから。

それに僕を産むには年齢が足りないでしょうし、小さいときの馬鹿な考えですよ。

まあ、僕の父なら血が繋がっていようと犯罪者だろうと、惚れた女性ならその気持ちを貫く気がしますけどね

「……………え、えーと」

「？ どうしました、タカミチ？」

……………凄いことを考えるな、このぼーやは。

10歳の考えることじゃないぞ。

しかし、私とナギが恋仲で、ぼーやの母親だと……………？  
ぼ、ぼーやはなかなか悪くない考え方をするな。ウン。

「まあ、もしかしたらさっき言った事情なのではないかな、と1厘

ぐらい思っていました。  
やっぱり違いましたけどね」

1厘！？ 0・1%！？

「なんでそんなに低いんだっ！？  
私がナギと恋仲だったらおかしいのっ！？」

「お、落ち着くんだ、エヴァ！」

「え？ いや、マグダウエルさんが僕の母だという可能性のほうで  
す」

「何故だっ！？」

「僕を見るマグダウエルさんの目ですね。  
父のことで何か思うことがあって見られていたのでしょうか、母  
が子を見るような目ではないです」

視線に気づかれていたのか。

確かにナギの息子ということで、何かと見てしまっていたのは確かだが。

「……………よくわかったな。」

確かに私はぼーやを見ていた」

「狩りをしていると視線に敏感になるんですね。獣は人間より可視範囲が広いですし」

どうしようか？

このぼーやに搦め手は通じなさそうだな。天然さで搦め手に気づかず突っ切りそうだな。

いつそのこと、『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』のことをバラすか。

「そんなことは別に聞いておらん。」

私がぼーやを見ていたのは、15年前にナギからかけられた『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』を解呪するためにいろいろと考えていてな」

「父がかけた『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』、ですか？

……………なんかバグってそうですね？」

「な、なんでそう思うんだい？」

「え？」

いや、15年前にかけられたのなら、今でも中学生やってるのは変でしょう？

小学校1年生から始めたとしても、もう大学生になっているはずじゃないですか。

というか僕の父がかけたものなんですよね？」

お前はナギのことをどー思ってるんだ？

“ナギの仕業” “バグ” の方程式が成り立つなんて。

「アンチヨコ見ないと魔法唱えられない人です」

「人の心を読むな。」

……………間違っではないがな。

インフェルナス・スコラスティクス  
『登校地獄』の方もその通りだ。私は中学生を15年間ずっと繰り返している。

インフェルナス・スコラスティクス  
そして『登校地獄』のときも、確かにアンチヨコ見ながら呪文を詠唱していたな」

「……………ネギ君はナギのことをそんな風に思っていたのか」

「いや、祖父や父の知り合いの村の人に聞くと僕の父ってそんな感じなんですよ。」

で、父と直接会ったことのない人達に聞くと“英雄”って言うてました。

どちらを信じるかと聞かれれば、僕は前者を信じます」

……………変わったばーやだな。

少なくともただの正義バカではなさそうだ。

聞こえの良い他人の言葉ではなく、耳障りな知り合いの言葉を信じるのか。

どうしようか？

当初の予定通りこのばーやの血を頂くのはいいが、この感じなら協力してくれるかもしれんな。

ばーやを襲って敵対するよりも、素直に協力を要請するべきか？

実戦経験もないばーやと戦っても負けるとは思わん。

しかし、少し接してみてわかったが、このばーやはいろんな意味で手強そうだ。

……私のことをどう思うか、少し探りを入れてみるか。

「それにしても落ち着いているのだな。

この“闇の福音”<sup>ダイク・エヴァンジェル</sup>が怖くないのか？」

「そうですね。

敵対したら怖そうですけど、敵対しなかったら怖そうじゃないですね」

「しかし、私は過去に何人も人間を殺している。

そんな私を放っておいていいのか？」

「えー？

マグダウエルさんは少なくとも500年以上は生きてますよね？  
そんな昔の人だったら、現代の人間と倫理観が違って当然なんじゃないですか？

今は人を殺していないのなら、別にいいと思いますよ。

過去に人を食べたドラゴンがいたとしても、洞窟の中でジツとしてるなら手出ししようとは思いません」



「私をドラゴン扱いするか。間違っていそうで間違っていないな。」

だが私は賞金首だった。600万ドルという高額だな。

そしてその首を狙ってきた賞金稼ぎ達を何人も返り討ちにした」

「安いですよ。」

先進国の戦車1台の半分ぐらいしかないじゃないですか。

それに賞金稼ぎなら、返り討ちで殺される覚悟はしていたでしょう。

友人だったのならともかく、獲物に返り討ちにされた狩人の仇討ちをしようとは思いません」

………タカミチ。

このぼーやはいつたいどんな教育を受けてきたんだ？

正義の魔法使いの考え方じゃないぞ。

それこそ獲物の命を奪ってきた狩人の考え方だ。

そういえば故郷ではよく動物を狩っていたそうだな。

だからこんな考え方をするのか？

しかし、まいった。

この考え方だったら、自発的な協力を期待するというのは難しいかもしれない。

私が“悪の魔法使い”であることを気にしないのなら、私が『インフェ校地獄』の呪いに苛まれていることも気にしなさそうだ。

「父親の仕出かしたことの責任を取れ。  
ナギは3年で解くと言っていたんだ」

と迫っても、

「僕は父じゃありません」

で終わらせそうだ。

理由が有ったらどんなことでもするが、逆に理由が無かったらどんなことでもしないタイプだ。  
力尽くでいくのはタカミチが隣にいるから無理だし、対価を用意してから協力してもらおうべきか？

「……………あの、ネギ先生」

「何ですか、絡繰さん？」

「私を助けて頂いたのは、マスターと接触するためなのですか？」

「そんなことはありません。」

絡繰さんを冷たい川の中へ入らせなくなかったからです」

「……………あ、ありがとうございます。」

しかし、先ほども言った通り、私はガイノイドですので……………」

「ストップです。」

ガイノイドとか人間とか関係ありません。

僕は助けようと思ったから助けただけです」

茶々丸には優しいのだな。

なんか素直に頼めば、協力をしてくれそうな気がしてきた。

「……ところで“ガイノイド”って“ロボット”のことですか？  
絡繰さんは何処となく確かにロボットっぽいんですけど？」

「わかっていなかったのかっ!？」

駄目だ、このぼーや。

早く何とかしろ、タカミチ。

「ぼ、僕がかいっ!？」

「お前はこのぼーやの担任だろうが!

ああ、お前の言った通り、このぼーやは確かにナギの息子だよ。  
むしろナギより酷いわっ!」

「な、何てこと言うのですか、マグダウェルさん!

僕は父より酷くなんかじゃないですよ!」

「ふ、2人と落ち着いてくれ。

それにネギ君は生徒じゃなくて教師だぞ。

……それでネギ君はどうするんだい？

「どうする、とは？」

「エヴァのことだよ。」

確認するけど、エヴァが“ダーク・エヴァンジェル闇の福音”であっても問題にする気はないんだよね？」

「それは勿論です。」

マグダウエルさんは2・Aの生徒ですよ

それは正直ありがたい。

このぼーやの相手をするのは疲れる。  
どうしたらこんな子供に育つんだ？

「では『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』のことは？」

「？ 別にどうもしないですよ？」

「えー！？」

ネギ君はてっきり解呪するのに協力すると思っていたのだけど…

……」

これしきのこととで困惑するなタカミチ。  
お前はこのぼーやのことがわかっておらん。

「じゃあ、私が『インフェルナス・スコピス登校地獄』の解呪に協力してくれと頼んだら？」

「別に構いませんけど？」

ああ、解呪のために生贄が必要だとか、非人道的なことだったらお断りしますが」

……やはりな。

そうか。ぼーやはそういう人間なのか。

「君が何を言っているのか分からないよ、ネギ君」

「要するにだ、タカミチ。

このぼーやは“礼には礼を”、だということだ。

ようやくこのぼーやの分からないところが分かるようになってき

た。

天然が混じっているから、分かり難い事この上ないがな。

頼まれ事は、頼まれたら、する。

だが、頼まれなかったら、しない。

例え話になるが、

2つの村があつて、その2つとも盗賊の被害に悩まされているとする。

片方の村は助けを求めてきて、片方の村は泣き寝入りしている。

タカミチのような正義の魔法使いは両方助けるが、ぼーやは助けを求めてきている方しか助けん、ということだ」

「他にすることなかったら、ちゃんと両方助けますよ」

「だが、優先順位はつけるだろうか？

ぼーやなら先に助けを求めている方を助けるはずだ。

そもそも“他にすることなかったら”という言葉が出てくるだけでおかしい」

「……………まあ。助けを求められているんならそうですね」

助けられる側にも礼儀を求めているな。

ただの甘ちゃんではないぞ、このぼーや。

「し、しかし、初日の宮崎君を助けたのは……………」

「アホ。

階段から落ちるような咄嗟の事態で助けを求められるわけなからう。

宮崎のどかは歓迎会のおきにぼーやへお礼をちゃんと言っていたが、もし言っていなかったとしたら……………。

そうだな。

もし、同じことがあっても助けることは助けるだろうが、他に危険な目にあっているのがいたらソツチ優先して助けるだろうな。

そうだろう、ぼーや？

無礼者と礼儀者の二者択一だったら、礼儀者の方を助けるだろう？

「それは確かにそうですね」

フン、正義の魔法使いのジレンマを平気で無視するぼーやだ。

たとえば思っていたとしても、普通の正義の魔法使いでは口に出せ



んぞ。

「では私は何故助けていただけただけなのですか？

私はネギ先生に助けを求めておらず、むしろ一度は助けていただくことをお断りしたのですが」

「それはぼーやのワガママだ。

ぼーやが茶々丸を助けたかったから助けた。それだけだ。

ぼーや自身がさつき言っていただろう」

私の『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』の解呪についても同じことだ。

緊急性がなく、大事なことならば、ちゃんと礼儀を弁えて協力を願い出るべきだというわけだな。

“正義”だろうが“悪”だろうが、礼儀を持って接してくるものには礼儀を持って接し、礼儀を持たないで接してくるものには上辺だけの対応か。

そして、自分のやりたいことは、やりたいようにやる。

私とはまた違ったタイプだな。

……アルの奴に近いのか？ もう少し快樂主義者になったらそ  
うなりそうだな。

でも、とんでもないことをするのはナギやジャック・ラカン筋肉達磨みただし、

生真面目なところはタカミチや詠春に似ている。

「アラルフラ紅き翼”の集大成みたいなぼーやだな。

「なら、ぼーや。

さつきも言ったが、インフェルヌス・スコロステイクス『登校地獄』の解呪に協力してくれ。頼む」

「さつきも言いましたけど、別に構いませんよ。

ただし、非人道的なことでの解決はしませんし、担任補佐としての仕事の方を優先しますので、そこはご了承ください」

「……………エヴァが「頼む」なんて言うなんて。

2人だけで分かり合えているのが不安だなあ」

安心しろ、タカミチ。

このぼーやの根っこは正義の魔法使いと同じだ。

ただ、オムエラ正義の魔法使い以上に“厳しい”だけだ。

高畑・T・タカミチ

正義の魔法使い以上に“厳しい”だけ。

エヴァの言葉が心に残る。

確かにネギ君は“正義”とか“悪”以前に、“生きる”ということに“厳しい”のかもしれないなあ。

それと母親についての推理的外れというわけではない。

片手間程度で探しているみたいだけど、どうしたらいいかな？

「そ、それではネギ先生をエヴァンジェリンの家に置いてきたままなのですか？」

「大丈夫ですよ、ガンドルフィーニ先生。

仲良くなつたみたいですし、エヴァはネギ君を客人として扱っていました。

むしろエヴァの方がネギ君を苦手としているかもしれないね」

僕は学園長に事態の報告をするために先に帰った。

ネギ君は少し残って、『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』について調べるようだった。

「待たせたの。」

皆揃っておるかな？」

「いえ、まだエヴァは来ていませんね」

魔法関係者の集まりの時刻になったが、まだエヴァは来ていない。もしかして、『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』の解呪に熱中しているのかな？

「迎えに行ったほうがいいのではありませんか？」

ネギ先生を『ダイク・エヴァンジェル闇の福音』の家に置いていくなんて、高畑先生はいつたい何をお考えですの!？」

「まあ、待ちなさい。グッドマン君。」

タカミチ君から報告を受けた後に、メルディアナ魔法学校の校長に電話したんじゃないかな」

「そ、それはマズイのではないのですか、学園長!？」  
ネギ先生はメルディアナからの大事な預かりものですよ」

「いや、むしろ謝られてしもつたわい」

「……………は?」

向こうの校長もネギ君には苦勞していたからなあ。

というか、ネギ君の被害者第一号が向こうの校長だし。

「この件に関してはあちらとしても問題とする気はなく、麻帆良に  
一任させてもらえるそうじゃ」

「そ、それは何よりですが……………」。

よろしいのですか?」

「よろしいも何も、まずはネギ君と話してみないことには始まりん  
のお」

「ああ、それなら大丈夫です。  
今日診察して、『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』を解呪出来るかどうか調べ、出来るようだったら学園長に相談しに行くって言っていました。  
出来なかったら話はそこで終わりですからね。許可を貰う前にまず解呪出来るか調べるそうです。  
解呪出来るにせよ出来ないにせよ、明日にでも学園長に会いに行くと思います」

「フム。そうかの。」

何でもメルディアナ魔法学校の校長の話では、“納得は出来ないけど理解は出来る”ということをネギ君はよくするそうじゃ。“理解は出来るけど納得は出来ない”の方かの？

明日、ネギ君とよく話し合ってみるとするでしょう」

個人的には『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』は何とかしてあげたいんだけどね。

さすがに中学生をずっと続けているのは気の毒だしなあ。  
せめて、高校や大学に入ることが出来れば、少しはエヴァも学校に行くのに張り合いが持てるんだらうけど。

「ま、ネギ君の話を聞く前に、今夜のうちにエヴァと少し話してみるかの。」

……………ム。

話をしていたら到着したようじゃな」

「失礼します。

申し訳ありません。遅れてしまいました」

絡繰君か。

エヴァもようやく来てくれ……………は？

「ちわゝ、ネギ屋です。

エヴァさんお届けに上がりました」

……………ネ、ネギ君？

「……………や、やあ、ネギ君。」

「こんな夜中に出歩いてどうしたんじゃ？」

「あ、学園長。」

「ちょうどよかったです。明日少しお時間いただけますか？」

「それとエヴァさんお届けに上がりました」

よくよく見れば、ネギ君はエヴァをおんぶしている。

いつの間にかエヴァのこと名前で呼んでいるし。

僕が帰った後、何があっただろう？

そのおんぶされているエヴァはというと、

ネギ君のスーツをシツカリと強く握り締め、

ネギ君の肩に顎を乗せて幸せそうな顔で眠っており、

……………ネギ君のスーツの染みになるぐらい涎を垂らしている。

「……………」



誰も何も言えない。  
僕もこんなエヴァを見たのは初めてだった。

「……………あれ？」

もしかして、ここにいる皆さんって関係者の方ですか？」

「あ、ああ。」

その通りだ。ネギ先せ「コレツ！ ガンドルフィーニ先生！」

あつ！？ も、申し訳ありません！」

バラしちゃったよ、ガンドルフィーニ先生。  
無理ないけど。

「……………とりあえずエヴァを起こしてから、話を聞かせてくれんかのつ」

ネギ君。

今度はいったい何をしたんだ？

第八話 その名は迷探偵ネギ（後書き）

ちなみにこの考え方に至ったのは、並行世界では頼んでも誰も結局パートナーになってくれなかったからです。

ネギ君グレちゃいました。

ネギの考え方で敵に対する対応は、

礼儀を弁えた敵

名乗り終わるまで待つ

礼儀を弁えない敵

名乗り終わる前にフルボッコ

のような感じですよ。

5 / 2 1 修正しました

## 第九話 あなたと合体したい

ネギ・スプリングフィールド

「のわああああーっ！！！！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……………」

さすが吸血鬼。

夜になると元気になりますね。

あんなに地面をゴロゴロと転がりまわる元気がでるなんて。

「……………そろそろ説明してくれんかの」

「ジ、ジジイ!？」

違うんだ! 別に私はぼーやの背中が気持ち良くて寝てたわけじゃないんだ!

「ぼーやっ！」

「さっきのアレをコイツラに見せる！」

「え？」

「嫌ですよ。アレは未完成だからあまり見せたくないって言ったじゃないですか」

「ええい、ゴチャゴチャ言っな！」

「いいからさっさと見せ……って冷たっ!?!」

「痛いですよ。強く肩を掴まないでください。それに冷たいも何もそれは、」

「エヴァさんの涎じゃないですか」

「スーツに涎の染みが……」。

「スーツ2着しか持ってないんですけど。」

「違っっ！ 違っんだあっ！」

「ああ、マスターがあんなに元気そうに……………」

「よかったですね。茶々丸さん」

「ウツサイ！ このポケロボツ！  
巻いてやる、巻いてやるぞっ！」

「マ、マスター。」

「そんなに強く巻かれたら……………」

「ああっ！ 茶々丸さんがエヴァさんの八つ当たりにも  
わざと狙ってやってる僕ですけど、エヴァさんの茶々丸さんに対  
する処遇は酷いと思います。」

「ネギ君。」

「何があつたか話してくれないかな？」

「簡単に言いますと、エヴァさんおんぶしてたら眠っちゃっただけ  
ですよ」

「違うぞっ、タカミチ！」

ええいつ、ぼーやはスーツを脱げっ！

茶々丸はそれをクリーニングしてこい！」

はいはい。

染みになって困るのは僕ですから渡しますよ。

「それではよろしく願いします。茶々丸さん」

「お任せください。ネギ先生。

ネギ先生もマスターのことをよろしく願いします」

任せてください。茶々丸さん。

それにしても一日でスーツの上下が駄目になるとは……………。

いやあ、本当は茶々丸さんと仲良くなるだけのつもりだったのに、エヴァさんとの本格的な関係を持つのは、原作通りの3年になってからするつもりだったんですがね。

タカミチが側にいれば手荒なことにはならないと踏んで、勝負に出たのは間違いではなかったようです。

“僕のお母さんですか？”という爆弾発言で会話の主導権をとれたのが良かったですね。

あとは“父と恋仲だったのでは？”発言ですか。

あの人何だかんだいって、自分に向けられる好意に弱いですからね。

僕がエヴァさんを悪く思っていないのが分かれば、手荒なことはしてこないと見て正解でした。

仲良くなれて良かったです。

「ハアハア……………」

「大丈夫ですか、エヴァさん？」

「……………ぼーやのせいだろうかあ」

あ、いけね。

苛めすぎた？

「もういいかの?」

「僕はいつでも構いませんよ」

「……………好きにしろ」

拗ねないで下さいよ。

今度ミスド買ってきてあげますから。

え? 吸血鬼違い?

「それでは始めるとしよう。」

ガンドルフイーニ先生がバラしてしまったので、もう言ってしまうとする。

ここに居るのは魔法関係者の者達じゃ。全員ではないがの。

今日は顔合わせじゃな。

ネギ君のようにタイムスケジュールの関係で3学期から赴任や転校してくるものがあるので、こんな時期にも顔合わせをしておるん  
「じゃ」



「う、ううう……。  
申し訳ありません」

ガンドルフィーニ先生が縮こまっています。  
まあ、ほとんどの先生は呆気にとられて反応すら出来ませんでしたからねえ。

「僕は呼ばれていなかったと思うのですが……」

「その通りじゃ。  
ネギ君にはまず、魔法使いの修行である“教師の仕事”に専念して欲しかったからの。  
慣れるまでしばらくは内緒にしておくつもりだった」

ああ、成程ね。  
そういことですか。

「……多分皆が気になっておるだろうから、ネギ君達の説明を先にしてもらおうかの」

「顔合わせはよろしいのですか？」

「あれだけ騒ぎを起こしておいて何を言っておるんじや。皆気になって顔合わせどころではないぞい」

ウンウン、と皆さん頷いていますね。  
確かにあんなエヴァさん見たことないんでしょうねえ。

「あゝ、ジジイ。

インフェルナス・スコラスティクス  
『登校地獄』はとりあえず、修学旅行のような学外活動が出来るのが判明した。

ただし、ぼーやの協力があればの話だがな。

完全な解呪は出来るかどうかはまだわからん。  
もう少し時間が欲しいそうだ」

実を言うと方法は知ってるんですよ。  
前の世界の経験ありますから。

ただ方法は知っていても、あの固結びになってるスパゲッティコードを解くのがメンドイのは変わらないだけで。

「はい。4月にある修学旅行には、エヴァさんを連れて行くことが出来ると思います。

聞けば今まで15年間の間ずっと、麻帆良から出ることが出来なかったとか……………。

いくらなんでもそれは不憫なので完全解呪の研究の前に、ある程度呪いの修正をして学外活動出来るようにします」

「ほほお！

わしも解呪を試したことがあるのじゃが、修正すら出来んかったぞい。

凄いのお、ネギ君」

おお！ と周りからも歓声が。

解呪出来ることへの驚嘆、エヴァさんの呪いを解くことへの不安といったところですか。

ガンドルフィーニ先生は、……………まだ縮こまっていますね。

「そのことについては後日、ゆっくりと時間をとって聞くとするかの。

今話すには時間が足りんわい。

……で、さっきのことは聞かんほうかええのかの？  
ネギ君は“未完成”と言っておったが

「駄目だ。見せる。」

アレをコイツラに見せる」

「エヴァ……、あまり強制しない方が」

「あー、いや。」

まあ、別にいいですよ」

ちょっと苛めすぎちゃいましたし。  
少しは機嫌とっておきましょう。

「いいのかい、ネギ君？」

「未完成というか、もう少し別のものにも発展させられそうな感じ  
なだけで。」

一応それ自体は完成しています」

「言っておくが本当に凄いで。私でも出来ん」

エヴァさん必死ですね。

「む、エヴァがそこまで言うとは。では見せてもらおうかの」

「ええと、誰か怪我してる人はいらっしやいますか？直接的な治療魔法ではないんですけど」

「ふむ、誰かおらんか？」

「あ、なら私が……。今日の体育の授業で手をぶつけてしまいました。

私は聖ウルスラ女子高等学校1年の高音・D・グッドマンと申します。ネギ先生」

あ、脱げ女さんだ。

こうして見ると美人さんなんだけど、脱げちゃうのがなあ。

「それでは患部を出しておいてください。

直接グッドマンさんに魔法をかけるわけではないので、リラックスしててください」

さて、それではやりですか。

皆に見えるよう、ゆっくりやっていくよ！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル  
汝がためにユピテル王の恩寵あれ、『治癒』<sup>クーラ</sup>！ 術式固定！」

まず、左手に『治癒』<sup>クーラ</sup>を固定状態で待機させておきます。

「むおっ！？ それは『闇の魔法』<sup>マギア・エレベア</sup>！？

どういうことじゃ、エヴァンジェリン！？

何故ネギ君が『闇の魔法』<sup>マギア・エレベア</sup>を使えるのじゃ！？

「私じゃないぞ。  
ぼーやが自分で勝手に覚えてたんだ。  
それより見てろ。これからだ」

そして右手に“気”を集めて固定し、

「右手に“気”、左手に“魔法”」

最後にこの2つを合わせ、

「“気”と“魔法”の合一、『闇の咸卦法』」

「……………あれは、『咸卦法』じゃないぞ」

「そつだ。」

お前の使う『咸卦法』は“気”と“魔力”を融合させて爆発的な  
力を得る究極技法だ。

だがぼーやは『咸卦法』と『マギア・エレベア闇の魔法』を組み合わせ、  
“魔法”を融合させたんだ」

「……………これが“納得は出来ないけど理解は出来る”かの？  
それとも“理解は出来るけど納得は出来ない”じゃろつか？」

「術式兵装『マインティガード咸卦治癒』！」

はい、完成です。

名前の通り、プロテスやらシエルやらリジエネっばいのがこれ  
かかります。

相手に触れば、相手も回復します。

「お待たせしました、グッドマンさん。  
患部はどちらですか？」

「……………ハ、ハイ！  
ひ、左手首です」

それではちょっとお手を拝借。  
僕の手で脱…高音さんの少し腫れている左手首を優しく包み込み  
ます。



「どうですか、グッドマンさん？」

「あ、温かいですわ、ネギ先生。  
痛みも引いてきました」

「ほほお……………」

「こんなの初めて見たわい。  
気と魔法の両方での同時治療か」

「ああ、気と魔力は反発するから同時には使えない筈だがな。  
だがぼーやが融合させているから、反発せずに対象を回復させて  
いる。」

「単体の治療よりも掛算的に効力がアップしているな」

「ちなみに風邪とかも治せますよ。  
治すというより、自己回復力を促進させた結果で治るみたいですよ」

「だから僕はこれ覚えてから風邪引いたことないんですよね。  
あれ？　なんかフラグが倒れた気がするのはいかんな？」

「おい、高音・D・グッドマン。  
ぼーやおんぶしてもらえ」

「!? な、何を言われるんですか、貴女は!？」

「いいからやれ」

「しかし、こんな人前でなど。  
それにネギ先生の小柄の体では重いでしょくに」

「あ、僕は大丈夫ですよ。  
『咸卦法』の身体能力向上のおかげで、女性の1人や2人は楽に  
背負えます」

役得、役得

さあ、胸を背中に当てるがいい!

「10歳相手に照れるな」

「うっ!」

た、確かにネギ先生は10歳ですから……。

わかりましたわ。それでは失礼いたします。ネギ先生」

「はいはい、どうぞ」

ギムム、ポニユン！

擬音をつけるとしたらこんな感じですよ。

「どうだ、高音・D・グッドマン。

ぼーやの身体は気持ちいいだろう。クッククック」

「変な言い方はしないで下さい！

………で、ですが、確かに気持ちいいといえますか安心していいますか、小さいときに親におんぶしてもらったのを思い出しますね」

「この『マイティガード咸卦治癒』は、密着すればするほど効果が伝わりやすくなります。

『咸卦法』の利点だけではなく、怪我の治療、体力回復促進、魔力回復促進、気回復促進などがあります。

戦闘関係だけでなく、美肌、シミ、ソバカス、肌荒れ、冷え性などにも効果があるらしいです」

「そうか。」

だからエヴァはネギ君におんぶされていたのか」

「……………その通りだ。」

おかげで私の風邪もすっかり治った」

これのおかげで元々美人だったネカネ姉さんがますます綺麗になりました。

ドネットさんも20代前半に見えるようになりました。

あの人アラフォーなのに、元々20代後半くらいには見えていましたがね。

というか、葛葉先生達女性教師陣が凄い目でコツチ見てるんですけど！？  
メツチャ怖いんですけど！？

高音さんの僕にしがみつく力も増したんですけど！？  
グエエツ！

「凄いのお。」

念のために聞いておくが、副作用とかはないんじゃないかな」

「こ、この出力だったら問題ありません。

ただ、出力を上げすぎると問題があります。」

あまり水を上げすぎると草木が枯れるように、過度に出力を上げすぎると生体組織を破壊してしまうんです」

これでダメージを与えると回復不能な傷となります。  
要するに『過剰回復呪文』<sup>マホイミ</sup>です。

エヴァさんなら患部を切り落として根元から再生することも出来るのですが、普通の人間だったら無理ですね。

この術の問題点はまだあります。

出力弱いと、相手を攻撃しても相手が回復しちゃうんです。  
いくら殴っても死なないので、ハッキリ言って拷問です。

で、出力強いと『閃華裂光拳』が常時発動してしまいます。

いやあ、実を言うと、カモ君はこれのせいでアルちゃんになってしまったんですよ。

ネカネ姉さんの下着を盗んだおしおきにちょっとナニを握り潰してたら、うっかり出力間違っただけで治せなくなっちゃいました。

「あ、いけね。やっちゃった」

って思いました。アハハ。

ちなみに潰したときは「プチュギュツ！」って感じでしたね。

「この『闇の咸卦法』の利点は方向性を持って能力を強化させることが出来ることですね。

『咸卦法』は全体的に能力強化しますが、『治癒』<sup>クイラ</sup>を合成したら見ての通り回復能力に特化、『戦いの歌』<sup>カントゥス・ベライクス</sup>を合成したら運動能力に特化出来ます」

「……………それにしても『闇の魔法』<sup>マギア・エレベア</sup>と『咸卦法』を組み合わせたから『闇の咸卦法』か。

正直、安直すぎる名前だと思っぞ?」

え?

わかりやすいんだからいいじゃないですか。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

敵にしなくて良かった、と安心すればいいのだろうか？  
それとも味方となったせいで、コッチが振り回されそつなのを心配すればいいのだろうか？

「こんなの開発してみたんですけど、どう思います？」

と、いきなり『闇の咸卦法』を見せられたときは、正直心底驚いた。

『マキア・エレベア闇の魔法』は禁呪と言われるだけあって、人の身体で扱える技法ではない。

「ぼーやは私の逸話を聞いて自己流で覚えたらしいが、「反動は大丈夫なのか」と聞いてみたが、

「え？ 『マキア・エレベア闇の魔法』の反動？  
何です、それ？」

馬鹿か、ぼーやは。

気づいてないのではなく、本気で扱ひこなせているみたいだ。

『マギア・エレベア闇の魔法』を使うには、善も悪も全てを飲み込む度量が必要なのだが、きつとあのぼーやは「細かいことはいいいんですよ！」で終わらせたな。

ああ、タカミチが疲れた感じで遠い目をしていた気持ちが悪く分かる。

『咸卦法』をアツサリ覚えられたタカミチもこんな気持ちだったんだろうなあ。

平気で『マギア・エレベア闇の魔法』扱っているので、ポテンシャルはナギより上かもしれないな。

いくらナギでも10歳であそこまでは出来なかっただろう。

それとも『咸卦法』を併用していることで良い影響を及ぼしているのか？

今度ジツクリぼーやと魔法について話してみるとするか。

そのぼーやはというと、魔法関係者に囲まれて大変そうだ。

特に女の魔法先生が凄いな。『マイティガード咸卦治癒』の効能を狙ってぼーやに触りまくっている。

ぼーやが少し引いているぐらいだ。



奴らは“英雄の後継者”になれるように見えるぼーやの出現に大喜びのようだが、果たしてそう上手くいくかな？

あのぼーやは一筋縄ではいかないぞ。

現にタカミチは浮かない顔をしている。

これから大変だということに気づいているんだろう。

ま、私には麻帆良の教師共がどうなるかと関係ない。

インフェルナス・スコラスティクス

『登校地獄』が解かれるまでぼーやに何かあると大変だから、少

しは様子を見るが………ム、この反応は。

「オイ、ジジイ」

「？ なんじゃ、エヴァンジ」  
「ピリリリッ……！」

「ぬお！？ 何事じゃ！？」

感じ取った反応のことをジジイに伝えようとすると同時に、ジジイたちが持っている携帯電話が一斉に鳴った。

ちゃんと監視当番の奴らも気づいたか。

「エヴァッ！？」

「ああ、侵入者だ。

数は…2か3。

数が少ないし、反応も小さいからコソ泥だろうな」

たまにこついう奴らが沸いて出てくる。

狙いは図書館島か？

東西の対立が激しい数十年前は、直接西がちよっかいをかけてきたらしいが、科学文明が発達した現代ではそれも収まっている。

こんな街中で魔法を隠せるわけないからな。“魔法の秘匿”は東西変わらずの共通認識だ。

今の東西の対立はそれこそ冷戦さながらの静かなる戦争だ。

そして残った侵入者は、要するに泥棒。

まあ、麻帆良はいろいろと魔法関係でも貴重なものが保管されているからしょうがないのだろうが。

あとは世界樹の魔力に引かれて集まってきた、人ならぬものたち。同じクラスの桜咲刹那は神鳴流を修めているため、たまにその対応を依頼されるらしい。

魔を払うのは神鳴流の専売特許だからな。

「おかしい。重要な施設には向かっていないぞ。  
アツサリと見つかつているし、コツチは陽動か？」

「フム、陽動の可能性があるのなら、どんな事態にも対応出来るように戦力は残しつつ、尚且つ迅速に対応するために戦力がある程度ばらまく必要があるの」

矛盾した言い方だがその通りだな。

一箇所に固まっていたら咄嗟の対応が遅れるが、戦力を分散させたら戦力が足りなくなる可能性がある。

「それでは、タカミチ君はここにわしと残ってくれ。もしものときの予備戦力とする。

そうじゃな……、ガンドルフィーニ先生！

君の班が侵入者の確保に当たってくれ。

残りの者はそれぞれの担当場所で待機。周辺を監視しつつ、いつでも動けるようにの」

「私も行く」。

今日は良い気分なんだ。たまには自発的に協力してやるよ」

フッフ、インフェルナス・スコラスティクス『登校地獄』が解けると分かったら気が楽になった。それにぼーやにはみっともない姿を見せてしまったからな。少し見返してやるうではないか。

「では行くぞ。

ついてこい、ガンドルフィーニ。」

ハアツ！ って…へぶっ！？」

「！？」

エヴァさん、どうしたんですかっ！？」

くおっ！ 飛ばうと思ってても飛べなかった。

顔を思いつきり地面に打ち付けてしまった。

しまった。今夜は三日月にも満たない月齢だ。力が全然使えん。茶々丸は……………、ぼーやのスーツを洗濯に行かせてるんだった。

「だ、大丈夫か……………？」

エヴァンジェリン……………」

見るな。私をそんな憐れんだ目で見るんじゃない！

ガンドルフィーニ。お前は私を凶悪犯だと思っっているはずだろう！

高音・D・グッドマンも佐倉愛衣も信じられないようなものを見る目で私を見るな！

「エヴァさん、今治しますよ」

ぼーやの『マイティガード咸卦治癒』で痛みが引いていく。  
直接顔を触られるのが少しくすぐったいが、今はそんなこと気にしておれん。

「くそおつ、茶々丸がいれば……………」

「僕がエヴァさんを連れて行きますよ。」

僕のスーツを洗濯するために茶々丸さんはここにいないのですから、茶々丸さんの代わりぐらいは務めます。

茶々丸さんにはエヴァさんのことをよろしくお願いされましたからな  
「

「お、おい。ネギ先生。  
いくらなんでも危険だ」

「大丈夫です。

ラス・テル・マ・スキル・マギステル 『リゼル』！」

ム！？

ぼーやが魔法を唱えると、ぼーやの身体が紺青色の装甲に覆われ、茶々丸よりも更にロボットっぽい姿に変身した。

『闇の咸卦法』だけでなく、こんなオリジナル魔法を使えるのか！？

「日本に来ることになってから急遽開発したオリジナル魔法です。認識障害の魔法もかかっていますし、最悪これなら一般人に見られた場合でも魔法とは思われません！」

確かにこの姿見て“魔法使い”を思いつくのはおらんだろうな。でも、何か根本的に間違っていないか？

ガシヨンガシヨン！ とぼーやの身体が折れたため、今度は飛行機のような形に変形した。

「乗ってください。」

目的地までエスコートします」

「フン、いいだろう。ぼーやなら問題あるまい。」

さあ、私を戦場まで連れて行け！」

「待ちたまえ、ネギ先生！」

何で、こんなのを」

「日本といたらロボットアニメでしょう！」

「そういう意味じゃないっ！」

ガンドルフィーニも大変だな。

私もこのぼーやには苦勞したからよくわかる。

しかし、明らかにこのぼーやはお前達より強いぞ。

「よし、アッチの方向だ」

「はい。しっかり掴まっけてくださいよ。  
ネギ・スプリングフィールド、『リゼル』、行きまーす！」

ギユオン！

あっという間に加速して、世界樹前広場から抜け出る。

ちゃんと認識障害もかかっているし、障壁があるためか風圧がない。

相変わらず、よくわからんぼーやだ。

さて、それではこのぼーやに“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルの力を見せてやるつ。



## 第九話 あなたと合体したい（後書き）

オリジナル技法出来ました。

『闇の咸卦法』です。そのまんまですね。

作中の説明通り、『咸卦法』が“気”と“魔力”の合成なら、『闇の咸卦法』は“気”と“魔法”の合成です。

今までどこかで使われていそうな設定ですけど、多分使われていないと思います……………。

少なくとも“闇の咸卦法”でググっても出てきませんでした。もし、被っているところがありましたら教えてください。

ちなみに、第一章の“その後の話・小ネタ”の【マギア・エレベア闇の魔法？】付近や【『咸卦法』と『マギア・エレベア闇の魔法』の同時発動は出来るようになるようになりました】等が伏線でした。

出すことを予想してた人はいましたでしょうか？

それと、西の術者が麻帆良に攻めてくるような設定はこの作品ではありません。

というか、そんな事実があったらネギを西にやったりしないでしょう。

そもそもあんな広大な麻帆良を数百人程度では守りきれない上、“昼のうちに麻帆良に一般人として入り込めばいいじゃん”とかいろいろ卑怯な事が思い浮かんできたので、東西の関係は冷戦となりました。

もしかして私は腹黒いのでしょうか？

ちなみに、せつちゃんも警備員としては働かずに、このちゃん護衛優先です。

原作において、学園祭前のネギと魔法関係者との顔合わせの際に、魔法先生がたくさん居たことを「私も知りませんでした」という発言を刹那がしているの、あまり魔法関係者との接点は無いのではない？ 龍宮隊長とは仕事を何度かする仲ということらしいので、学園長からの依頼があれば神鳴流を振るう傭兵のような感じでしょうか？  
ただし、無報酬。

529

モビルスーツ紹介（Wikiから抜粋＋個人的感想）

『リゼル』

正式名称「Re”fine “Z”eta Gundam “E”scort “L”eader（リファイン・ゼータ・ガンダム・エスコート・リーダー）<sup>リゼル</sup>」  
頭文字の略称からReZELと通称される。

バックウエポンシステムによる準変形機構ではなく、メタスのよ

うな変形機構を持ち、その名が示すようにバックパックにジェガンを牽引できるグリップが設けられており、サブフライトシステムとしても運用できる。

メガ・ビーム・ランチャーとスピードを抜けば「変形しなければただのジェガン、変形してもただのメタス」でしかないらしいが、作者としては好みのモビルスーツ。

造形的にデルタプラスよりも好みです。

第十話 高畑・T・タカミチの憂鬱

高畑・T・タカミチ

「それでは昨日のことを話し合おうとするかの。  
皆忌憚のない意見を言っとくれ」

昨日の騒ぎから一晩たった。

無事に侵入者も捕まえたのだけど、ネギ君の処遇が問題になった。

ハア、ネギ君は次から次へとまったくもう…………。

「まず、昨日の侵入者騒ぎのことを改めて簡単に説明しますと、私達が駆けつけたときには既に終わっていました。

ネギ君達、侵入者双方に怪我はありませんでした」

「フム、それはなによりじゃ。

しかし、ネギ君のことは如何しようかのお……………」

「学園長！」

まさかネギ先生を警備に参加させるおつもりではないでしょうな！？

彼はまだ10歳ですよ！」

「待つてください、ガンドルフィーニ先生。

ネギ先生は裏の事情を知ってしまいました。少なくとも私達の方からも説明した方がいいのではないのでしょうか？

10歳だからといって、蚊帳の外にするわけにはいかないでしょう。

それに警備に参加させなくとも、治療チームとして働いてもらえばいいのではないですか？

おそらく彼は麻帆良でもトップクラスの治癒術士ですよ」

「……………葛葉。顔がニヤついているぞ」

いつになくご機嫌で肌が艶々としているなあ、葛葉先生。  
ネギ君の『咸卦治癒』マイティガードがそんなに気に入ったのかな？

「僕は葛葉先生に賛成ですね。

ネギ君は頭が良いし勘も鋭いですから、秘密にすべきもの以外は話した方がいいと思います。」

それに身を守るぐらいの実力はあるでしょうしね」「

「というか、事情説明しておかないと、身を守るために過剰反応し  
そうなんだよね。」

「へたしたら女子寮を気づかないうちに結界で覆っていたとかあり  
えそうだし。」

「よろしい。事情は説明することにしておこう。  
今日これからネギ君が来る予定なので、そのときに説明する。」

「しかし、警備に参加させるのは早いじゃろ。  
教師としての仕事もちゃんと出来ていると報告は受けておるが、  
まだ始まったばかりだし。」

「……………そうじゃなあ。」

「我々の手で負えない怪我人が出たときはもちろん手伝ってもらっ  
しかないが、基本的には治療チームにも不参加じゃ。」

「確かにトップクラスどころか最高の治療術士かもしれないが、昨日  
の様子では怪我人以外の患者が殺到しそうじゃからの。」

「しばらくは様子見じゃ。教師の仕事に専念してもらおう」

「そんなっ!?!?」

絶望しないでくださいよ、葛葉先生。  
しかし、様子見か……。  
なんか不安だな。

「学園長。

基本的にそれで大丈夫だと思いますが、ネギ君に首輪をつけた方がいいと思います」

「どうということじゃな、タカミチ君？」

「エヴァの手助けをしたようにネギ君の性格からして、彼の方から危険なコトに首を突っ込む可能性があると思います。  
危ない目にあっている人や困っている人がいたら、きっとネギ君はその人を助けるでしょう」

「……………フム、確かにそれはありそうじゃな」

「ですので、……………そうですね。

“女子寮の警備”を任せたらどうでしょうか？

もし侵入者が女子寮に攻撃してきたら、どちらにせよそこに住んでるネギ君は防衛のために戦わざるをえないでしょう。

それならば最初から女子寮の警備を任せて、その場から動かさなようにした方がいいと思います」

女子寮に攻めてくる敵なんかそもそもいないけどね。  
ネギ君に鎖に繋がっている首輪をつけるほうが大事だ。

「なるほど。それなら安全ではないでしょうか。

侵入者などの異常事態が発生した場合はネギ先生にも連絡が伝わるようにしておいて、本人に警戒するようにしておいてもらえばいいでしょう」

「そうですね。

それにネギ先生は木乃香お嬢さまと同室です。

今まで危険なことはありませんでしたが、木乃香お嬢さまを守る人間が多いに越したことはありません」

「私もそれでいいと思う。

何もないと思うが、警戒しているのとしていないのでは大きな差があるからな」

「女子寮の警備か。

ウチの娘も寮に住んでるし、それなら安心できるな。」



ガンドルフイーニ先生、葛葉先生、神多羅木先生、明石教授から賛成の声が上がる。

他の先生方も特に反対は無いようだ。

「フム、よからう。

ネギ君には女子寮の警備をお願いするでしょう。

ただし、あくまで異常事態が発生した場合のみであって、普段は教師の仕事のみとする。

……しかし、ネギ君は戦いの仕方を知っておるんじゃないか？  
女子寮を燃やされでもしたら大変じゃぞ」

「……確かにそうですね。

メルディアナでも今は戦闘方法なんかは教えていないようですし」

あの気配遮断からしてむしろ暗殺向き？

瞬動もおそろしく静かに出来るんだよね。

でも、昨日のモビルスーツというのは僕も初めて見たしな。  
日本に来ることになってから開発したとか言ってたな。

「昨日中断した顔合わせを今日やり直すのですよね？

でしたら、そのときに誰かと模擬戦でもしてもらえばよいのでは？」

「それもそうじゃな。

中断したとはいえ、昨日で顔合わせは大体終わつとるから問題ないじゃろ。

こういうのに顔を出さない連中も、興味を持って出てくるかもしれんしの。

よし、時間も経つたしこんなとこじゃろ。それではこれにて解散。模擬戦の話の皆に広めておいておくれ。そしたら皆興味を持って見にくるじゃろ。

タカミチ君はネギ君を呼んどくれ。彼からも事情は聞いておきたいしの」

ふう、何とか無事終わったな。

まさかネギ君が来てから4日でこんな事態になるとは思ってもいなかった。

別にネギ君自身が悪いことしたわけじゃないんだけど、ネギ君の運が悪いのかなあ。

コンコン、とドアがノックされた。  
ネギ君が来たのか。

「学園長、ネギ・スプリングフィールドです」

「おお、開いとるよ。入りたまえ。  
わざわざすまん。聞きたいことがあるのでな」

そういえば昨日は結構夜遅くまで残らせてしまったけど、大丈夫  
だったかな。

ちゃんと授業の補佐はしてくれてたけど、無理をしていないとい  
いが。

「いえ。」

僕の方からも学園長にお伝えすることがあります」

エヴァの件かな？

インフェルナス・スコリスティクス  
『登校地獄』のコトで何かあったんだろっか？

「ウチのクラスの相坂さんを成仏させようと思っただけですけどいいですか？」

「フオツ!？」

何を言っとなるんじゃ、ネギ君!？」

「いや、調べてみたら60年ぐらい幽霊やっってるみたいじゃないですか。

早く成仏させてあげないと可哀想ですよ」

……………ハア、ネギ君は次から次へとまったくもっ……………。

龍宮真名

「龍宮。」

「お前も来たのか」

「刹那か、お前もこんな集まりに出るなんて珍しい。護衛はいいのか？」

「少しぐらいなら大丈夫だ。式神も置いてきている」

麻帆良にいる限り滅多なことはないだろうがな。いつもはこういうのに顔を出さない刹那が出てくるとはね。さすがに近衛と一緒に暮らしているネギ先生のことには気になったのか。

「それにしても本当なのか？  
ネギ先生がもう裏の事情を知ってしまい、しかも女子寮の警備を  
担当するというのは」

「本当だ。」

昨日の顔合わせは私も出なかったが、大騒ぎだったらしい。

女子寮の警備というのはあくまで建前の話だな。

学園長達もネギ先生を危険な目には遭わせたくないようだ」

「確かに今まで女子寮が攻められたことなんかなかったからな。  
逆に安全といえば安全か」

それにしても、あの小さなネギ先生がね。

確かに私の魔眼でも、魔力や気のゆらぎがまったく見えないほど  
落ち着いていたが、まさかエヴァンジェリンの『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』も解呪  
することが出来るとは。

今日の模擬戦とやらで、ネギ先生の実力が少しはわかるといいが。

「聞いた話によると、ネギ先生の治療魔法は凄いらしいな。

怪我だけでなく、風邪などの病気も治癒出来るらしい」

「ああ、高畑先生の使う『咸卦法』と、エヴァンジェリンの使う『

マギア・エレベア  
闇の魔法』を組み合わせた技法らしいが、詳しいことは直接見てみないと何とも言えないな」

「問題無いならそれでいい。」

木乃香お嬢さまに何かあったときでも安心だ」

「やれやれ、相変わらず近衛命のようだな。」

近衛はお前が頑張っていることを知らないのに健気なものだ。」

「何でも、メルディアナの校長を魔法のコントロールに失敗したせいで大火傷を負わせ、それから治療魔法の勉強に力をいれていたよ  
うだ」

「ちょっと学園長と話をしてくる」

待て、落ち着け刹那。

刀を握り締めるんじゃない。覚悟を決めた顔をするんじゃない。」

「大丈夫だ。ネギ先生の魔力制御は私の眼から見ても完璧だ。それにさっきの話はネギ先生が3歳の頃の話だぞ。しかも、生まれて初めて使った魔法での話だ」

「……………3歳でか？」

「ああ、凄い魔力を秘めているらしい。それこそ近衛よりも多いらしいぞ。」

初めての魔法ということで、その魔力を力一杯振り切ったせいで事故が起こったんだ。

初級魔法の『火よ灯れ』アールテスケットがキャンプファイヤーのような火柱になったそうだ。

ちなみに魔力総量は私が魔眼で見ても分からなかった」

「その上『咸卦法』も使えるというのか……………」

「体術もそれなりに出来るみたいだな。」

ホラ、初日にステッキ術を使うと言っていただろう」

「……………それが本当なら未恐ろしいな。」

確かにネギ先生の歩き方には隙が無かった」



「ナイフ一本で熊の解体を出来るらしい。  
もちろん気も魔法も使わずにな」

「……………別の意味で木乃香お嬢さまの近くにいるのが不安になってきた」

その気持ちは良く分かる。

メルディアナ魔法学校長の言によると、

“天災を引き起こす天才児”

そんなものはただの大袈裟な噂じゃないかと、2 - A相手に教師をしているネギ先生を見てたら思っていたが、こんな騒ぎを引き起こすとなると噂ではなかったようだな。

「……………皆揃っておるようじゃの」

噂をすれば、学園長や高畑先生と一緒にネギ先生の御到着か。

相変わらずの笑顔で、教壇に立っているときとなんら変わらない。違うのはオコジョを肩に乗せているぐらいか。

これだけ見ると普通の子供なのに。

あ、コツチに気づいたネギ先生が笑いながら小さく手を振ってきた。

フッフ、ああいうところは子供らしくてカワイイな。

それにしても、私達がいることには驚いていないな。  
もしかして既に気づかれていたのか？

まあ、エヴァンジェリンのように魔法関係者がいるというのは予想していたかもしれんな。

……………それにしても、学園長と高畑先生はやけに疲れた顔  
していないか？

「……………というわけで、これからよろしく願います。  
普段の警備に参加できませんが、怪我人が出たら言ってください。  
大抵の怪我なら治療できますので。  
それと、この子は僕の使い魔でオコジヨ妖精のアルちゃんといいます。この子もよろしく願います」

パチパチ、と拍手が鳴る。

相変わらず物怖じしない子だ。

何人もの魔法先生から視線を浴びているのに、まったくそれを気にしていない。

多分ウチのクラスの大半よりは大人っぽいのではないのだろうか。

……………それにしても、こんなに魔法関係者の顔を見るのは始めてだ。

というか、瀬流彦先生も魔法先生だったんですか……………。

「ウム。

といっても、怪我以外のことではネギ先生の手を煩わせてはいかんぞい」

刀子さん達女性が数人崩れ落ちたがどうしたのだろうか？  
男性教師は微妙な顔して苦笑いしているし。

「刹那もあと10年たてばわかるさ」

「なんのことだ？」

「いや、なに。」

とにかく崩れ落ちた人たちには事情は聞いてやるな。  
大人にはいろいろあるんだよ」

547

確かに大人になればいろいろしげらみがあるのはわかるが、大人  
っぽい龍宮がそういうと説得力があるな。

やっぱりこいつは年齢詐し「何か不愉快なことを思わなかったか  
？」思っていない思っていない。

だからコメカミから銃をどけてくれ。

「さて、それではお待ちかねの模擬戦といこうかの。

ネギ先生の相手になってくれるのはいいかの」

いよいよか。

この模擬戦の結果次第なら大分安心できるようになるんだが。

一緒の部屋に暮らしているネギ先生が頼りになれば、護衛としても期待できる。

…………… 10歳の子供に期待することではないのはわかっているけど。

なににせよ、怪我のないようにだけはお願いしたいな。

怪我をしたら、お嬢さまが悲しまれる。

弟が出来たみたいで、お嬢さまもたいそう喜びのことだし。

「では私がやるう。」

昨日ばーやには情けない姿も見せてしまったからな。

ここで汚名返上しておこうか」

エヴァンジェリンさんが!?

あの人がこんなことに参加するなんて思ってもいかなかったな。

「よろしいんですか？

まだ封印は効いてますから、本来の実力を発揮できないのでは？  
しかも、今夜は三日月ですらないですよ」

「ぼーやに心配されるほど落ちぶれてはいないさ。

確かに今の私の状態は、人間と吸血鬼の悪いところが重なっているような状態だがな。

構わんだろう、ジジイ。

言うておくが、私も金の卵を産む鶏を殺すほど馬鹿ではないぞ」

「……………フム、ネギ君は構わないかね？」

「僕は問題ありません。

ただし、さすがにエヴァさん相手なら手加減抜きでいかせていただきますよ。

封印されている故の弱点を容赦なく突かせていただきます」

「構わんぞ。

むしろ手加減するような甘っちょろいことは言つな。

人生はいつも準備不足の連続だ。常に手持ちの材料で前に進む癖をつけておくがいい。

フフ…………、私は自分の力で切り抜ける男が好きだぞ？ ぼーや  
……………」

……………仲良いんだな、あの2人。

エヴァンジェリンさんがあんな風に話すのを初めて見た。

しかし、いくら封印されて本来の実力を発揮できないとはいえ、  
エヴァンジェリンさん相手ではネギ先生も辛いだろうな。  
どこまで食らいつけるのかが見所だ。

……………それにしても、

「封印されている故の弱点」か。どんなのがあるかな？」

「……………私だったら魔力不足を突くかな。  
今のエヴァンジェリンは魔法薬を補助にして魔法を使っている。  
遠距離からネチネチと攻撃をして、魔法薬の枯渇を狙うのかな」

そんなところか。  
確かに迂闊に近寄るのは危険だな。

「ああ、茶々丸も参戦させる。  
別に問題ないだろう、ほーや？」

「問題ありません。  
主人と従者でセットですからね」

「1対2かい？ それはマズインじゃないかい、エヴァ？」

いくらなんでもそれは無理なのでは？  
子供ならではの無鉄砲さが出たのか？

「そのかわり準備の時間は与えてやる。  
『闇の咸卦法』やモビルスーツとやらを展開させるなら待つぞ。」



私としても純粹にぼーやの力を知りたいと思っているしな」

「いいんですか？

それなら遠慮なく、

術式兵装『マイティガード咸卦治癒』！

並びにラス・テル・マ・スキル・マギステル 『シナンジュ』！

「ほお！？ 同時発動か！？」

あれが『闇の咸卦法』か……………。

術の展開速度がとても速いな。

無詠唱魔法も使えるみたいだし、『闇の咸卦法』発動に1秒もかかっていないぞ。

しかも、ネギ先生の後の詠唱が終わると、ネギ先生は赤い装甲に覆われてロボットっぽくなった。

ふむ、確かに魔法の発動は恐ろしく洗練されているな。

「…………ウルスラのグッドマン先輩の操影術に似ているな」

「あれは…………魔力で編んでいるのか？」

「見た感じそのようだ。装甲を結構な魔力で構成している。生半可な攻撃では効かんだろう。」

体中にスラスターがつけられている。おそらくあそこから魔力を噴射して瞬動のように移動するのではないかな？

攻撃方法は手に持っている銃を使うのだろう。」

へえ、普通の西洋魔術師とも違った戦い方をするのだな。

武装は腰の裏側と右手に大型の銃を1丁ずつ。あとは左腕の盾か。でも、おそらく他にもあるだろうな。

「……………昨日の『リゼル』とやらとは違うな。」

「ジジイ、結界を張らせろ」

「そつじゃな、瀬流彦君頼む」

「その間にルールを決めておこうか。ぼーや。制限時間は10分。結界を壊すような大技は無し。戦闘範囲は今から張られる結界の内部のみ」

そんなところだろうな。長引いてもアレだし。

しかし、それならエヴァンジェリンさんの魔法薬の枯渴を狙えなくなる。

“結界を壊すような大技は無し”というのはエヴァンジェリンさんには関係ないので、少しネギ先生の行動を狭めたのか。

このルール、エヴァンジェリンさんに少し有利だ。

「だから、ぼーや。」

“学園の外に出て、そこから対軍勢用魔法を打ち込む”とかは無しだぞ」

「……………わかりました」

「え？ そんなことしないよね、ネギ君？」

え？ 「わかってます」じゃなくて「わかりました」？  
答えるまでの沈黙が長かったのは何故？

というか、銃の弾を入れ替えないでください。  
何を考えていたんですか、ネギ先生！

あ、今度はバズーカを出現させた。

右手に持ってた銃を左手に持ち替えて、右手にバズーカを持った。

「クックック。

そういうところが好きだぞ、ぼーや」

「煽らないでくれよ、エヴァ」

「その“ぼーや”ってのをやめてくださいよー」

「フン、私に勝てたら名前で呼んでやるよ」

「あ、いいんですか？」

「構わんさ。」

むしろ私に勝てるようなやつをぼーやとは呼びたくない。

……………で？

それなら私が勝つたらぼーやは何をくれるんだ？」

「僕が負けても血ぐらいしかあげられませんけど……………」

「ほう？ いいのか？」

「コ、コラ、ネギ君。」

大丈夫かい、そんな約束して？」

「大丈夫ですよ、タカミチ。」

「ご飯をシツカリ食べて、『マイティガード咸卦治癒』が発動した状態で寝れば、  
1日1リットルぐらい吸われても平気です」

「……………」

「……………いや。さすがにそこまではいらんぞ」

.....。

.....。

..... 本当にネギ先生が木乃香お嬢さまの近くにいて大丈夫なんだろうか？

第十話 高畑・T・タカミチの憂鬱（後書き）

相坂さよを成仏させるネギって斬新じゃね！？

と、思ってしまったが、流石に可哀想なのでやめておきました  
たw

タカミチのネギに対する印象は

“ 好奇心が強い、ドーベルマン並みの能力を持ったチワワ ”

のような感じですよ。

甘噛みされただけで大惨事。

次回からバトル初挑戦です。

ちなみにマナが言及したモビルスーツの耐久は

ランクE：通常のネギの魔法抵抗力と同じくらい

ランクD：『エクサルマティオー武装解除』級の魔法を防げる

ランクC：『サキタ・マギカ魔法の射手』級の魔法を防げる

ランクB：『フルケラティオー・アルヒカンス白き雷』級の魔法を防げる

ランクA：『ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス雷の暴風』級の魔法を防げる

ランクEX：『キラアキブル・アストラペー千の雷』級の魔法を防げる

といった感じですよ。

もちろん個人の魔力によって威力の差があるので、一概には同じではありません。

また、モビルスーツの耐久力に関わらず、シールドの耐久力はランクA。

『ユニコーンガンダム』の『フィールド発生装置付シールド』はランクEXです。

ちなみに、高音の『ノクトウルナ・ニグレディニス黒衣の夜想曲』は『雷華崩拳』を防いでましたので、ランクCの上位といったところでしょうか。



第十一話 模擬戦？ 赤い彗星

桜咲刹那

模擬戦が始まる。

思えば、エヴァンジェリンさんが戦うところを見るのは初めてだ。

麻帆良に入学する際に学園長から“お嬢様の事を考えるなら絶対にエヴァンジェリンさんには手出ししないように”、と言いつけられていたので、エヴァンジェリンさんとは同じクラスでもあまり接点はなかった。

ダーク・エヴァンジェル  
“闇の福音”と呼ばれた彼女とネギ先生はどう戦うのか？

「学園長。

結界の準備が終わりました」

「ウム、それではお互い準備はいいかの？」

「いいぞ」

「よろしく申し上げます。ネギ先生」

「あ、いえいえ。

こちらこそよろしく申し上げます」

……………ネギ先生と茶々丸さんはいつでも変わりないな。  
いつでも自然体というか緊張感がないというか。

ロボットである茶々丸さんはわかるが、その茶々丸さんと同じな  
ネギ先生っていったい……………。

結界は半径50mぐらいのドーム状。

ネギ先生とエヴァンジェリンさん達は10mほど間合いを置いて  
対峙している。

「観客の皆は自己責任で怪我のないようにの。

もし、怪我が怖いなら結界の外に出るとよからう。遠くからこの  
模擬戦を見ることになってしまいが。

よし、皆準備できたようじゃの。  
それでは、……………始めいっ！！！！！」

「行きます！ エヴァさん！」

「来い！ ぼーや！！」

模擬戦が始まった。

ネギ先生は「行きます！」の言葉とは裏腹に、後退して距離をとりつつ右手のバズーカを3発発射した。

縮地法とまではいかないが、後退するスピードは速い。

対するエヴァンジェリンさんは『魔法の射手』サキタ・マキカで迎撃。  
3本の氷の矢が砲弾3発を正確に射抜いた。

やはり彼女の魔法の技量は凄いな。

あんな高速で迫る砲弾を3発とも簡単に迎撃できるなんて。

△？ 射抜かれた砲弾が爆発すると思ったら、3発とも爆発物ではなくて粉末のようなものが中に入っていたらしい。

3色の粉煙が周りに撒き散らされた。

何だアレは？ 煙幕のようだが視界はあまり悪くならない。

「魔力探知の妨害作用をするものだな。

あの粉が撒き散らされたら、魔眼にノイズが見えるようになった。きつと念話の妨害もするんじゃないかな？」

「まずはエヴァンジェリンさんと茶々丸さんの連携を断つのか。

10歳の子供らしくない戦い方だな。魔法使いより龍宮の戦い方に近いのか？」

「かもしれんな」

冷静な戦い方だ。

力押しだけではなく、搦め手も使って戦えるのか。

その方がお嬢さまのためにも安心といえれば安心だが。

「花粉症の人やニンニクの匂いが嫌いな人は結界の外に出てく  
ださいねー!」

「ちよっ!?!? ぼ、ぼーやっ!?!?」

は? ニ、ニンニク?

「逃げるぞ刹那っ!?!?!」

え!?!? ま、待ってくれ、龍宮!?!?!

近衛木乃香

「……………ハア、やっと終わったあ〜〜」

「あ、今日のノルマ終わったん？」

「じゃ、ご飯にしようか」

「お願い木乃香〜。」

「今は動きたくないの〜」

ネギ君来てからアスナは勉強頑張るようになった。  
やっぱり10歳の外国人の子供のネギ君に英語を教わるならともかく、国語すら教わるのはマズイと思たんやろな。

ネギ君ってやっぱり頭ええなあ〜。

担当の英語だけでなくて教科全部出来るって。

「今日ネギは先生方の集まりに出るんだっけ？」

「そうやよ。だから夕飯はいらないらしいわ」

「いいなあ。高畑先生もいるんだろっなあ。」

「私も高畑先生と食事したいなあ。」

「しかし、周り大人ばっかで大丈夫やるか？」

「お酒とかも出るやろっし、酔っ払いに絡まれないといいけど」

「大丈夫でしょ。」

「ネギはシツカリしているし」

「そうやな。」

「ネギ君はシツカリしてるよなあ。」

「アスナに勉強頑張らせたのも良い例や。」

「アスナの成績や新聞配達のアルバイトのことを知ったネギ君は、一言こう言った。」

「高校には留年というものがありますよ」

聞いたアスナは石になってたわ。

確かになあ。

エスカレーター式で高校には上がれるとはいえ、そこで留年したらどうしようもないわ。

留年したら学費や生活費が余計にかかってまうしな。

他にも日本の中学卒業、高校卒業、大学卒業で就職した場合のそれぞれ生涯賃金なんか挙げていって、このままではアカンということのアスナに教えていった。

「日本には“急がば回れ”という言葉があります。

目先のことに囚われず、将来のことを見据えて考えてください」

そないなことを言われたアスナは珍しく一晩中考え込んでたわ。

結局、新聞配達のアルバイトは続けるけど、次の期末テストで最低でも500位以内に入らなかつたら、アルバイトは考え直すということになってもった。

あのアスナの様子やつたら、多分アルバイト辞めることにするんやろな。

他のバカレンジャーの皆にも話をしたみたいやな。



まきちゃんバカピンクは高校では赤点とつたら部活の大会に出れんこと知つたら愕然としてたわ。新体操頑張ってるからなあ。  
ゆえは図書館探検部、くーへも中国武術研究会って部活してるから他人事やないしな。赤点で部活出席停止にされたら困るやろうし。楓バカブルーはさんぽ部だから堪えてなかったみたいやけど、「保護者に連絡行くかも？」とネギ君がボソリと言つたら焦ってたわ。

「修行のために麻帆良に来ているので、そんなこと知られたら困るでござる」

「じゃあ、修行頑張ってください」

で撃沈されたけど。

ま、皆が勉強頑張ってくれるならえーけどな。

高校に入ったはいいけど、留年して違う学年になるのはさすがに嫌やわ。

……………ネギ君はせっちゃんも問題あるよつなことも言つてたなあ。

せっちゃん大丈夫なんやろか？

剣道部とかで忙しいんやろうけど、せっちゃんが留年して後輩になつたらもつと会えなくなつてまう。

ウチになんか出来ることないんやろか？

それにしても、ネギ君は10歳とは思えんわ。  
あんな風に年上相手にも真正面から向かい合って、自分の意見を  
言えるなんて凄いなあ。

ネギ君のおかげでアスナも勉強頑張るようになったし、ウチもネ  
ギ君を見習って真正面からせつちゃんに立ち向かってみよかなあ。

高畑・T・タカミチ

ネギ君は相変わらず卑怯だなあ。

……………卑怯というか手段を選ばないというか。

「エヴァンジェリンの負けですね」

「そつだね。」

龍宮君と刹那君もコツチに逃げてきたのかい」

「さすがにニンニク臭くなるのはちょっと……………。」  
「というか、ネギ先生のあの動きは何なんですか？」

あの3発の砲弾はそれぞれ魔力探知・念話妨害煙幕、ニンニク粉末、花粉の3つだったらしい。

おかげでエヴァはニンニクの匂いと再発した花粉症に悩まされた上、絡繰君への指示を口で叫んでしなければならなかったために、ネギ君に先手を取られ続けている。

絡繰君は逃げるネギ君を追って接近戦に持ち込もうとしているが、まったくネギ君を捕まえられない。

エヴァはたまに絡繰君の援護射撃を試みているが、花粉とニンニク粉末でそれどころではないようだ。

ネギ君は絡繰君を軽くあしらいながら、左手の銃でエヴァの魔法障壁を何度も撃ち抜いている。

エヴァの魔法障壁をあんなに簡単に撃ち抜くなんて……………。

魔法障壁を撃ち抜かれる度に、エヴァは花粉とニンニク粉末の被害を受ける。

『氷盾』ならネギ君の銃を防げるんだろうけど、『氷盾』を唱える暇をネギ君は与えない。

確かに真正面からエヴァと戦っても勝機は薄いからしょうがないんだろうけど、ここまでくるとエヴァが可哀想だ。

「くそっ！ ぼーやつ！」

いつの間にこんなモノを用意したっ!？」

「この魔法を開発したときにですっ！」

ちなみにこれは本物じゃなくて、こういう匂いにする物質化した魔素です。あとには残らないから大丈夫ですよ！

他にもワサビや唐辛子等の用意もしてますけど!？」

「ゲホッ、ゴホッ、いらんわっ！」

さっさと捕まえる！ 茶々丸!?!！」

「は、はい！」

マスター!?!?!?!?!」

絡繰君では無理だろう。2人には機動力に差がありすぎる。

絡繰君は背中と足裏のスラスターでネギ君を追っているが、ネギ

君は背中や脛、肩などの全身についているスラスタで逃げ回っている。

ネギ君は物理法則をまるで無視したような動きをしているな。

「あんな動き、普通出来るわけじゃないですよ。

目に見える分、縮地法よりは遅いんですが、動きが自由すぎます」

「ああ。というか、よくネギ先生はあんな動きをして平気だな。

自由機動というより変態機動の域に達しているぞ。あんな機動をしては身体が持たないだろうに」

「多分、『咸卦治癒』マイティガードの効果だろうね。

『咸卦治癒』マイティガードを発動していると、儀式魔法に匹敵するほどの回復魔法を常にかけている状態になるらしいんだ。

多少手荒な動きをしても大丈夫らしい」

ダメージを受けても、片っ端からどんどん自動で治していくみたいだからね。

お？ エヴァが虎の子の魔法薬を取り出した。

大技で勝負に出るつもりか？ 確かにこのままではジリ貧だしね。

「マズイぞ、エヴァンジェリン。  
それは誘いだ」

「どういふことだ、龍宮？」

「ああ、さつきからネギ君は絡繰君をあしらっているだけで、彼女には攻撃していない。

おそらく怪我をさせないように手加減しているな。

エヴァは花粉やニンニクのせいで冷静になれていない」

「いや、あんなことされたら誰だって冷静になれないと思いますよ」

573

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！

来たれ氷精 闇の精！

闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪！」

『闇の吹雪』か！

今のエヴァの状態なら、ありったけの魔法薬を使ってあの魔法一発が精一杯だな。

エヴァの詠唱に気づいたネギ君が、バズーカをエヴァに向かって

連射するが間に合わない。

「二ウイス・テンベスターズ・オブスクランス  
闇の吹雪』ツ！！！！」

エヴァの魔法が放たれた。

ネギ君が撃ったバズーカの弾を飲み込んで、真っ直ぐネギ君に迫る。

飲み込まれた弾は爆発し、煙を撒き散らして視界を悪くする。

煙幕かつ！？

直進した『闇の吹雪』を食らったネギ君は爆発した。………つて、えええええつ！？

「ちょ！？ ネギ先生つ！？」

「大丈夫だ2人とも。あの爆発はネギ先生のものじゃない。  
腰の裏に付いていた白い円柱を切り離して、先に二ウイス・テンベスターズ・オブスクランス『闇の吹雪』にぶつけて爆発させたんだ。

おそらく魔力タンクじゃないかな？」

さすがは龍宮君。狙撃手だけあって目がいいな。  
少し焦っちゃったよ。

戦況はわからない。

バズーカの煙幕とその魔力タンクらしきものの爆発で視界が悪い。  
聞こえてくる音も絡繰君のスラスタ―音のみだ。

あ、それが狙いか！？

「茶々丸っ！ 下だっ！！！」

エヴァの叫びと同時に、絡繰君が身体を中心に撃ち抜かれた。  
と思ったら、あれは『魔法の射手』の『戒めの風矢』か。  
絡繰君が捕まったな。

煙の中から出てきたネギ君は既にバズーカを捨てていて、腰につけていた銃を持っていた。



あれで『戒めの風矢』を撃つたのか？

そのまま落ちてくる絡繰君を受け止め、もう一度零距离で射撃したけど空砲だったみたいだ。

弾丸が撃発されたけど、何も起こらなかった。

「ハイ、これで茶々丸さん撃破です」

「……………くうっっ！」

「も、申し訳ありません。マスター」

「あと4分ありますけど、茶々丸さんはこれで退場でもいいですね。結界の外に運びますので、ちょっと待っていてください」

「ちゅちゅとしろっ！」

……………「コイツラは父子揃ってニンニクを……………っ！」

絡繰君がコツチに運ばれてくる。  
怪我はないようで何よりだ。

「大丈夫ですか、茶々丸さん？  
タカミチ、茶々丸さんのことお願いしますね」

「ああ、わかったよ。ネギ君」

「ありがとうございます。ネギ先生。  
お、重くないでしょうか、私……………」

「？ 大丈夫ですけど？」

絡繰君がやけに動揺しているな。こんな絡繰君は初めて見た。  
ネギ君にお姫様抱っこされているからかな？

「それじゃ、いってきますね」

「い、いつてらっしゃいませ」

「頑張るんだよ、もう少しだ」

「頑張ってください。ネギ先生」

「いやあ、凄いね。ネギ先生」

でも、あんまり頑張り過ぎないようにね。  
あとが大変だから。

「……………あ？」

「べじじした、龍崎」

「エヴァンジェリンの背後から、  
………サングラスとガスマスクして手榴弾を持ったオコジ  
ヨが接近している」

「君（お前）は何を言っているんだ!?!」

「ほ、本当だつ!?!」

つて、よく見ると本当だつた?!?  
エヴァー、後ろ後ろ!?!?!

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

………油断した。

あのぼーやを相手にするのだから油断するつもりはなかったが、それでもまだあのぼーやを甘く見てた。

ええいつ！ 父子揃ってニンニクを使ってくるとはっ！

花粉症で悩まされていることは昨日、『マイティガード咸卦治癒』の治療中にウツカリ言った覚えがあるが、ニンニクのことは一言も喋ってないぞ。

やっぱり、あのぼーやはナギの息子だ。

発想が同じじゃないかっ！

クソッ！

あの『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』をかけられたときの思い出がフラッシュバックしたせいで冷静になれず、茶々丸を撃破されてしまった。

『ニウイス・テンベスタース・オブスクランズ闇の吹雪』が防がれた以上、魔法はもう通じん。

となると、人形使いの技法である糸を使って何とかするしかない。まい。

ぼーやがもう少し近づいてきて、隙が出来れば……………。

「お待たせしました、エヴァさん」

「なに、大丈夫だ。

今来たところだよ」

「そうですか。お待たせしたようで申し訳ありません。  
デートの続きといきましょうか。美術館と遊園地のどちらが好  
きですか？」

「さてな？」

「麻帆良内にある美術館には行ったことがあるが、遊園地には行っ  
たことはないのにな」

「奇遇ですね。」

「僕も遊園地に行ったことないです。」

「一度ジェットコースターとやらに乗ってみたいものです」

「ジェットコースターよりもお前のあの動きの方が面白いだろうよ。  
何なんだ！？ あの変態機動は！？」

「……………あれ？」

「そういえば僕って美術館にも行ったことないぞ。」

「というか、イギリス出身なのに大英博物館にすら行ったことない  
……………」

それは勿体無い。って、そうじゃないっ！  
駄目だ、あのぼーやはやっぱり天然だ…………。

「そうか。」

それなら私に勝てたら、私がぼーやに美術館へエスコートされてやるっ」

「あ、是非お願いします」

「フン、正直驚いたぞ。」

私の封印があるとはいえ、まさか2対1でここまでやられるとは。ぼーやを甘く見ていたつもりはなかったが、それでも警戒が足りなかったらしいな」

……………あと、2m。

「いえいえ。僕が不利なわけじゃないですよ。  
主人と従者がセットなのが当然なら、

もちろん主人と使い魔だってセットですから」

ピンツ！ と、安全ピンを抜くような音が背後から聞こえた。  
それと同時にぼーやが突っ込んできたから、振り向こうにも振り  
向けないっ！

魔力探知妨害煙幕で気づけなかった。  
ぼーやの使い魔のオコジヨ妖精か！？

自分の背後から頭の上を通り越して投げられた、手榴弾らしきも  
のが落ちてくる。

マズイっ！！！ と思った瞬間には目の前が真っ白になった。

閃光弾かつ！？

「クツ！ レフレクシオー 『氷盾』！！！！」

目を閉じながら張っていた糸の罫を発動させ、同時に レフレクシオー 『氷盾』を  
目の前に発現させる。

しかし、糸の罫にぼーやが引っかかった感触はない。



視力の戻った私の目に見えたのは、真つ二つに切り裂かれた『氷<sup>レフ</sup>盾<sup>クシ</sup>』と、私の腹に銃口を押し付けているぼーやだった。  
次の瞬間、腹に魔法が当たる感触があり、『<sup>アエール・カプトウーラエ</sup>戒めの風矢』で私は捕縛されてしまった。

くそっ、やられた。

ハハッ、やっぱり、このぼーやはお前の息子だよ。

なあ、ナギ……………。

第十一話 模擬戦？ 赤い彗星（後書き）

初バトルでした。

擬音とか苦手なのであまり臨場感はない感じでしたが、いかがでしたでしょうか？

なるべく戦闘状況がわかるように書いたつもりだったのですが…

……。

もう少しバトルが続いていきますので、もう少しお付き合いください。

え？ 相変わらず、ここのネギは腹黒い？

ハハハ、何を仰るウサギさん。

ここのネギはアルちゃん用にちゃんとガスマスクとサングラスを用意しておくような、使い魔想いの主人でございますことよ？

それにしても、原作もいよいよ終盤ですね。

まあ、第一章は別に修正とかはするつもりはありません。“並行世界だからいいんだよっ！”の精神でお許しください。

それと魔法世界人は地球に来れないことが判明してしまいました。

ネギ「つまり、前世でのラカンさんの修行はなかったことになるん

ですね！」

ラカン「ああ？ んなモン気合でなんとかしたぜ、バカヤロウ」

ネギ「……………悪魔が減ると思ったのに orz」

並行世界だからいいんだよつ！！！！

そして設定するのを忘れていましたが、ネギの原作知識は“単行本32巻まで”とさせて頂きます。最終決戦直前までですね。

でも、大分うる覚えの部分もあり、完璧ではありません。

モビルスーツ紹介（Wikiから抜粋+個人的感想）

『シナンジュ』

パイロットの脳波に反応する特殊構造材「サイコフレーム」を採用したニュータイプ専用機。

ただし、ファンネルなどのサイコミュ兵器は搭載しておらず、それを代価にパイロットの操縦イメージをMSへダイレクトに反映出来る様、MS単体としての基本性能、機体制動を極限にまで突き詰めて設計されている。

背面と脹脛側面の推力偏向スラスタの他、全身に多数のスラスタを装備し、いかなる姿勢においても高い機動性を発揮する。

作者的にサザビーよりシナンジュのほうが好きです。  
特殊能力無しで機体性能に特化させるとかに燃えます。

今回の戦闘は、ガンダムUC第二話の影響というかアイデアを頂  
いたところがあります。ガンダムUCを見たことがある人は簡単に  
分かるでしょうw

気になった人は、レンタルビデオ屋にGO!!!

第十二話 模擬戦？ 一角獣

ガンドルフィーニ

「先程の戦い方はいつたいなんですの！？  
もう少し正々堂々と真正面から戦うことは出来ないのですか、ネ  
ギ先生！？」

「そ、そんなっ！？ エヴァさん相手に真正面から戦って勝てるわけがないじゃないですか。  
それにグッドマンさんは、こんな小さなアルちゃんに茶々丸さんとガチンコ勝負させると言っんですか！？  
いくらなんでも酷いですっ！！」

「えっ！？」

「そ、そういう意味ではありませんわ」

「お姉様。

それは無理だと思いますけど………」

「お兄様……………」  
わ、私頑張ります！」

「大丈夫だよ、アルちゃん！ そんなことさせないからねっ！  
アルちゃんは、アルちゃんが出来ること僕を助けてくれればい  
いんだよ」

「違いますっ！

愛衣もそんな目で私を見ないでっ……………」

高音君がネギ先生に突っかかっているが、ネギ先生の純真な瞳に  
見つめられて困っている。

確かに高音君からすると、ネギ先生の戦い方は魔法使いらしくな  
くて邪道に見えているんだろう。

私はCQCで戦うからネギ先生と同じで正道的な魔法使いの戦い  
方とは言えないし、CQCの技術を磨くために警察の訓練などに参  
加したこともあるから、閃光弾などの利点を良く知っている。

だから、あまりネギ先生を非難するようなことは言えないなあ。

「それにしても、あんな負け方したのによく彼女は怒らないですね」  
エヴァンジェリン

「そつだな、瀬流彦君

でも、黙ってネギ先生におんぶされたままってのも怖いぞ」

「大丈夫ですよ、ガンドルフィーニ先生。

エヴァはプライド高いですから、負けた後でどうこう言ったりしません。

それにネギ君の「真正面から戦って勝てるわけない」って言葉に反応してましたしね。

それと、昔のことを思い出してるんじゃないですか？」

昔？ ネギ先生の父親の“千の呪文の男”サウザンドマスターのことか？

それこそ父子2代に渡って負け越したのに平気なのか？

顔を赤く染めてネギ先生の服を握り締めているが、本当に大丈夫なのだろうか？

それにしてもネギ先生には驚いた。

まさか封印されている状態とはいえ、“闇の福音”ダーク・エヴァンジェルに勝ってしまったとは。

魔力がないために彼女の使った魔法はほとんどが初級魔法だけだったが、それでもその錬度は恐るべきものだった。

昨日の『闇の咸卦法』も凄いものだったが、あのモビルスーツとやらも凄いな。

さすがは“千の呪文の男”サウザンドマスターの息子。  
彼はおそらく将来、優秀な“偉大な魔法使い”マギステル・マギになるだろう。

「ネギ先生。すみません、ちょっと失礼します。  
エヴァンジェリンさんの最後の氷の盾を、いったい何で斬ったんですか？」

「……………ム、桜咲刹那、いきなりなんだ？」

「そういえば私は目を閉じていたから見てないな。」

「ぼー…、ネギ。お前どうやって『氷盾』レフレクシオーを真つ二つに斬り裂いた？」

「残った魔法薬全部使って作ったから、けっこう堅いはずだったんだが」

「ああ、あれはこの剣で斬ったんですよ」

「ネギ先生がそういうと、手のひらに乗るぐらいの小さな棒が現れた。」

「そしてそれを掴むと、ブオンという音と共に棒の先から光が伸び、光の剣となった。」

「ふうむ、銃だけでなく、接近戦用の武器もあるのか……………」



「……………これは、『魔法の射手』か？」

「さすがはエヴァさん。

そうですね。これは『魔法の射手』を利用して剣にしています。

今のこれは光属性ですけど、火、水、氷、雷、その他様々な属性で剣を作れます。

“ビームサーベル”って呼んでますけどね」

「銃も同じだったね、ネギ先生」

「その通りですよ、龍宮さん。

あの銃も『魔法の射手』を利用して弾を撃ちだしてます。いろいろと応用が利きますよ。

最後に止めを刺すときに使った銃は、特殊な弾丸を使って魔法を撃ちだすことが出来るんです。

威力を強めた『戒めの風矢』や『雷の暴風』とか、いろいろな魔法を詰め込むことが出来ます」

「それは便利そうだね」

「あ、あのっ！

確かにその剣も凄いのですが……………」

「落ち着きなさい、刹那。」

ネギ先生。先程エヴァンジェリンの氷の盾を斬ったのは、京都神鳴流の『斬岩剣』ではありませんか？」

「あ、やっぱり京都神鳴流の方から見たらわかってしまいますか？桜咲さんはタカミチから京都神鳴流と伺っていましたが、葛葉先生もそうなんですな」

「やっぱり!？」

ネギ先生はどうして神鳴流を使えるのですか!？」

京都神鳴流!？」

何故そんなものをネギ先生が使える？

振り向いて高畑先生を見るが、彼も困惑している様子だった。

葛葉先生や桜咲君のように学園にも京都神鳴流を使えるものがあるから、必ずしも門外不出というわけではないだろうが。

「ビデオで見ました」

「「八？」」

「いや、だから。」

「ビデオで見ました」

「何を言っているんだお前は？」

「いや、ホントですよ。エヴァさん。」

父が所属していた“アラルプラ紅き翼”の映像を見たことがあるのですが、その中に京都神鳴流を使う方がいたんですよ。

青山詠春さんという方で、葛葉先生や桜咲さんの方が詳しいと思いますけど」

「え、ええ」「それは、確かに……………」

「で、その映像の中に戦闘のダイジェストシーン特集がありました。それを見て自己流で練習しました」

「……………それで？」

「？ それだけですけど？」

「ビデオ見ただけで覚えたんですかっ!？」

……………ネギ先生は優秀なんだが、ちょっとなんかズレてるな。

自分のことを大したことないとも思っているのかもしれない。  
まあ、今までメルディアナ魔法学校から出てきたことがないらしいから、世間知らずなのはしょうがないのかもしれないな。

「人の話を聞いてくださいっ!!!！」

あ、高音君がキレてしまった。

「ネギ先生！」

どうしてあんな戦い方をなさるのですかっ!？」

「“あんな”と言われましても……………。

僕は今のが初めての戦いだっただんですけど」

「ほお、ネギの初めての相手は私だったのか」

「初めてだったのに、あんなに強かったんですか!？」

「今まで修行は自己流でしてましたけどね」

「だったら何故もう少しマシな戦い方をなさらないんですか!？  
それこそ貴方の父上であるナギ・スプリングフィールドが所属した“アラルツラ紅き翼”の戦い方を見習うとか」

「いやいや、出来ませんよ。そんなこと。」

まあ、今だったらそれに近いことは出来るでしょうけど、修行を始めた3歳のときでは“アラルツラ紅き翼”みたいなバグキャラ連中の戦い方を見習ってもどうしようもないです。

ちゃんと現実的な修行をしないと……………」

「うっ……………、確かにそれはそうなのですが」

「まあ、そうだろうな。」

というか、3歳児があんなこと出来たら一般の魔法使いの出る幕がないな」

「そもそもメルディアナには魔法戦闘の授業とかはありませんし、図書館にも戦闘教本とかはあまり無かったですからねえ。」

しょうがないから、警察や軍隊で使用する教育資料を参考にして

修行しました」

なるほど、だからあんな戦い方をするのか。

道理で閃光弾とか催涙弾とかの利点を知ってるわけだ。

でもどうやって手に入れたんだ、そんなもの？

「ネギ。それならあのモビルスーツはなんだ？

あんなもの、どこの警察も軍隊も使ってないぞ」

「昨日言ったとおり、アレは日本に来ることになってから急遽開発というか完成させたものです。それ以前から考えてはいたんですけどね。」

コンセプトとしては「魔法使いは最強になるのではなく、最強のものを生み出せばいい」ってところですよ。

魔法って便利ですけど、詠唱時間とか弱点があるじゃないですか」

「確かにそうですね。」

無詠唱魔法もありますけど、詠唱魔法に比べたら随分と落ちてしまします。

でも、そのためにお姉様にとっての私みたいな、“魔法使いの従者”というものがいるんですけど………」

「つまり、ネギ先生は。」

一人で戦い抜くためにモビルスーツを開発したのですか？」

「いえ、そんなことはありませんよ、桜咲さん。」

ただ単に、「攻撃も防御も移動も魔法一つで出来たら便利だなあ」と思ったんです」

「……………メルディアナの校長先生が仰っていたことがよくわかりました」

「私としては“納得は出来ないけど理解は出来る”だな」

「龍宮、これは“理解は出来るけど納得は出来ない”の方じゃないのか？」

「理解は出来ないし、納得も出来ません”っ！

次は私達がお相手しますわっ！ 魔法使いの戦い方というものを  
見せてご覧にいれましょう！」

「お、お姉様！？」

私“達”って、私も入っているんですかあっ！？」

おいおい、高音君。  
それはいくらなんでも無理だろう……。

### 龍宮真名

結局、次はネギ先生とグッドマン先輩主従の模擬戦となった。  
従者の佐倉は最後まで渋っていたが、ネギ先生が

「怪我したらちゃんと治しますよ。」

むしろ明日に残らないよう『咸卦治癒』マイティガードで治します」

と言ったら、アツサリOKした。

ちなみに、その次は葛葉先生が相手をする事になった。

ネギ先生の「『咸卦治癒』マイティガードで治します」発言で凄いヤル気が出たらしい。



大人の女性は大変だな。私にはその苦勞はまだわからないが。

…………… 本当だぞ。

「お姉様、いつたいどうするんですか？」

さっきの戦いみたいな、ネギ先生のモビルスーツの動きは捕らえることはできませんよ」

「わかってます。

私が『ノクトウルナ・ニグレイディニス黒衣の夜想曲』で仕掛け、『ケントウム・ランケアエ・ウンブラエ百の影槍』でネギ先生を追い込みます。

愛衣は無詠唱の『サギタ・マギカ魔法の射手』を数を撃って牽制しつつ、タイミングを見計らって『フラゲランティア・ルビカンス紅き焰』を撃ちなさい」

「え？ それは危険なのでは？」

『カフトゥス・フランメウス紫炎の捕らえ手』の方が……………」

「大丈夫よ。ネギ先生がわざと爆発を起こして身を隠したときのこ

とを思い出しなさい。

ネギ先生はあんな爆発の至近距離にいたのに、傷一つなく無事だったわ。それに先程のネギ先生のお話では、モビルスーツは“防御”も出来るということですよ。

だから、『魔法の射手』や『紫炎の捕らえ手』カブトウス・フランメウス程度では効かないと思っただろうがいいわ」

フム、妥当な判断だ。

確かにあの爆発で平気なら、『魔法の射手』サキタ・マキカで勝負をつけるのは無理だろう。

さて、ネギ先生はどう戦うのかな？

「打ち合わせは終わりましたか？

それとルールは先程と同じでいいですか？」

「ええ、構いませんわ。

どうぞ、モビルスーツを展開なさってください」

「それではお言葉に甘えます。

グッドマンさんも『黒衣の夜想曲』ノクトウルナ・ニグレイディニスとやらを展開してください。どうせ展開前に勝負を決めるなんてことはしないつもりですから。

ラス・テル・マ・スキル・マギステル 『ユニコーンガンダム』

「！」

へえ、先程の『シナンジュ』とは違うモビルスーツだ。  
所々灰色部分があるが、全身真っ白な装甲。そして“ユニコーン”の名前の通り、額に一本角が生えている。  
武器は腰の銃が1丁、あとは左手のシールドか。  
それとビームサーベルも持つてるだろうな。

「……………ネギ先生は何種類のモビルスーツを使えるのですか？」

「5種類ですね。」

昨日の『リゼル』とさっきの『シナンジュ』、そしてこの『ユニコーンガンダム』。

あとの2つはまた別の機会にでも。

用途ごとによって使い分けます。

そうですねえ、あえて言うなら“輸送機”と“巡航機”と“戦闘機”と“戦闘爆撃機”、あとは……………“特殊機”といった感じでしょうか

「ちなみにそれはなんですか？」

「“特殊機”ですよ。」

「どこが“特殊”なのかはまだ秘密です」

「……………“特殊機”というのがまた不安になってくる。

どうせネギ先生のことだろうから、とんでもなく“特殊”なのだろうな。」

グッドマン先輩も嫌そうな顔をしているし。

「それではタカミチ、開始の合図をお願いします」

「わかったよ。お互いに怪我のないようにね。」

……………ネギ君はちゃんと手加減すること。

それでは、……………始めっ！」

「行きますわよっ！」

ノクトウルナ・ニグレーディニス  
『黒衣の夜想曲』ッ！」

開始の合図と共に、使い魔を背後に展開したグッドマン先輩がネ

ギ先生に突っ込んでいった。

対するネギ先生は右手にビームサーベルを装備しつつ、突っ込んでくるグッドマン先輩ではなくその背後の佐倉さんに向けて、頭部から機関砲のように魔力弾を連続して撃った。

あんなところにも武装があったのか。

「きゃあ！」

撃った弾はあくまで牽制だったらしく、佐倉さんの魔法障壁にアツサリと弾かれていた。

だが、無詠唱の『魔法の射手』サキタ・マギカを撃とうしていた佐倉さんには奇襲で、ネギ先生に突っ込むグッドマン先輩の援護を出来ないでいる。

604

「愛衣っ！」

……………くっ、ハアッ！」

ネギ先生に接近したグッドマン先輩が攻撃を仕掛けたために佐倉さんへの攻撃が止んだが、ネギ先生はその攻撃をヒョイツとかわす。さっきの『シナンジュ』よりは遅いが、それでもなかなか早い。

グッドマン先輩が身体に纏っている使い魔のパンチなどは回避し、時折放たれる『影の槍』をビームサーベルで切り払っている。

やはり体術もできるようで、手加減しているのにグッドマン先輩を軽くあしらっている。

生まれつき持っていた魔力量やモビルスーツにおんぶに抱っこされているわけではないようだ。

「お、お姉様！」

その位置だったら援護できません！」

そして佐倉さんは、ずっとグッドマン先輩の援護を出来ないままになっている。

ネギ先生が佐倉さんの射線上に、常にグッドマン先輩を置くように戦っているからだ。

あの位置関係だったらネギ先生へ魔法を撃つても、グッドマン先輩に当たる恐れがある。

それに気づいたグッドマン先輩がネギ先生から距離をとろうとしても、自らグッドマン先輩に接近するか、グッドマン先輩を佐倉さんへの盾に出来るような位置に移動する。

「……………戦い慣れているように見えるな。」

本当にこの模擬戦が初めてなのか？」

「本当ですよ。」

お兄様の対人戦はコレが初めてです」

「おや、アルちゃん。ネギ先生の手伝いはいいのかな？」

それと“対人戦が初めて”ということは、“人以外”となら戦ったことがあるのかい？」

「ええ。今回は私がいなくとも平気だそうです。」

それと“対人戦”以外では、ウェールズで熊やイノシシなどと少々

「そういえばそんなこと言ってましたっけ。」

……………木乃香お嬢さまに変な影響与えなければいいのだが」

「それだけではあるまい。」

ネギは獣相手だけではなく、ちゃんと対人戦の修行もちゃんとしていたんだろう。

魔法使いとしてではなく、現代の人間としてな。

そうだろうっ？ ……………えーと、アル……………ちゃん？」

「はい。先程も言ったように、お兄様は軍隊や警察の資料で対人戦

の勉強をいたしました。

現代のそれらの戦い方は魔法戦にも役に立つようで、お兄様は「基本は皆同じなんだ」と言っていましたね」

まあ、そうだな。

となると、ネギ先生は魔法を絶対のものとして思っておらず、むしろ道具の一つとして思ってそうだな。

「……………」

「？　どうかなさいましたか？

エヴァンジェリン様？」

「……………　イヤ、なんでもない。

（どうしよう？

ネギの使い魔だし、躰もちゃんとされていて礼儀正しいから、  
“小動物”とか“オコジヨ”とかで呼ぶのは可哀想だ。

でも“アル”と呼び捨てにすると、あの変態と被<sup>アル</sup>ってしまう。その方がもつと可哀想だ。

となると、やはり“ちゃん”付け？　しかし、それは私のキャラではないぞ？」



？なに考えてるんだ、エヴァンジェリンは？

高音・D・グッドマン

……………強い。

かれこれ5分以上攻撃を仕掛けていますが、まったく当たりませ  
ん。

ネギ先生は防御と回避するだけで攻撃してきません。明らかに手  
加減されていますわ。

「……………グッドマンさんって、体術に関しては素人ですか？」

「な、なんですか。いきなりっ!？」

確かに専門的に習ったことはありませんが

「ああ、やっぱり。」

その背後にいる使い魔がパンチをするとき、同時にグッドマンさんもパンチする動作なされていますけど。正直、素人のパンチでどこ狙っているか丸分かりなんですよ。

だから簡単に避けることができます」

くっ、そうということですか。

これは今後改善すべきですわねっ！

「サ、『魔法の射手・炎の三矢』ッ！」

なんとか援護できる位置に移動した愛衣の攻撃も、ビームサーベルで切り払われるか、頭から発射される魔力弾で迎撃されてしまいます。

このまま時間切れを狙うつもりかしら？

そうはいきません。

例え敵わなくとも、せめて一矢報います！

「愛衣つ、仕掛けます。準備なさい！」

『影』  
『…』

「はいっ！」

ネイプル・メイプル・アラモード！」

「お？ 複数の使い魔の使役ですか？」

影の使い魔を5体召喚します。

あまり多かつたら攻撃するのにお互い邪魔になるので、このぐらいでいいでしょう。

「ケントウム・ランケアエ・ウンブラエ『百の影槍』！」

「ものみな焼き尽くす浄北の炎 破壊の王にして再生の徴よ 我が手に宿りて敵を喰らえ！」

5体の使い魔と共に、ケントウム・ランケアエ・ウンブラエ『百の影槍』で仕掛けます。

ネギ先生は左手にもビームサーベルを持って二刀流で迎撃するようです、それだけでは防げません！

「ハアッ！」

クツ、しかし、さすがはネギ先生。

こちらの攻撃は一撃も当たることなく、ケントウム・ランケアH・ウツリH『百の影槍』のほとんどが切り払われ、使い魔も2体倒されました。

しかし、残りは迎撃できないらしく、わざと空けておいた隙間から強引に突破するようです。

「愛衣っ！」

「ハイツ、お姉様！」フラグランティア・ルビカンス『紅き焰』ツ！」

待ち構えていた愛衣が、ネギ先生に向かってフラグランティア・ルビカンス『紅き焰』を放ちました。

直撃コース！ これなら回避できない！

ネギ先生は盾を構えますが、これでダメージを与えられるでしょう！

バシユウウウツ!!!

.....  
八？

「ま、魔法がつ!？」

「かき消された!？」

そんなっ!？

盾に当たった『フラグランティア・ルビカンス紅き焰』がかき消された!？

『サギタ・マキカ魔法の射手』ならともかく、フラグランティア・ルビカンス中級魔法の『紅き焰』まで効かないのですかっ!？

詠唱魔法での防御ならともかく、あらかじめ持っていた盾で防がれるとは思いませんでした。

これでは愛衣の攻撃が何も通じないということに.....。

「『ウインブラエ影よ』！」

愛衣と合流して出せるだけの使い魔を壁役として出しますが、正直打つ手がありません。

愛衣の魔法は効かないし、私の『ノクトウルナ・ニグレーディニス黒衣の夜想曲』ではネギ先生を捕らえられません。

…………… いったいどうすれば？

「今のは良かったですよ。」

でも、『フラグランティア・ルビカンス紅き焰』を撃つて気を抜いたのは駄目ですね。

グッドマンさんもそういうときは追撃してこないと。せっかくの遠隔操作式の使い魔なんですし」

「クッ……………」。

何故攻撃してこないのですか、ネギ先生!?

私達には攻撃する価値すらないということですか!?

「そういうわけじゃありません。」

ただ、ちよっと気になることが……………」

「なんですか、いったい!?

「グッドマンさんは影で衣服を編んで防御力を上げていると思うんですが、気絶とかしたらどうなるんですか？」

「……………それは、編んでいる服は……………なくなっ……てしま……いますわ」

「そうですね。」

僕のモバイルスーツもそういうのですし。

で、服変わったら、肩とか露出するようになりましたが、その下って何か着てますか？

というか、なんで制服のときより露出が多く？ 防御服なんだから全身を覆えばいいのに……………」

……………う。

私のこの魔法は通常で防御力3倍、肌に密着させれば7倍になりますので、最大の防御力を得るために今は肌に密着させています。

つまり、この下は何も着けていません。

気絶してしまったら、この模擬戦を見ている周りの大勢の魔法先生達に肌を見られることに……………。

！！ そのことに気づいた愛衣がカクカクと震えだしてしまいました。

「まあ、女の人と戦うのはイヤだと言うつもりはありませんが、女の人を裸に剥くのはさすがに勘弁して欲しいんですけど……」

「あ、ありがとうございます。ネギ先生……」

め、愛衣が幼児退行してますわ！？  
ネギ先生が本気を出さなかったのは私のせいですか!？

………私の負けですわね。  
自分のことだけではなく、戦う相手のことすら考えることが出来るなんて。

思えば、私は“頭が固い”と注意されたことがありますわ。  
もっと視野を広く持つべきですわね。  
自らの視点に凝り固まってしまつのは、確かに“マジステル・マジ偉大な魔法使い”  
”としてふさわしくありません。”

これからは自分のことだけでなく、相手のことも考えて行動することにしめよう。

フフ、まさか10歳のネギ先生に教わることになるとは。  
感謝しますわ、ネギ先生。



「とうとうわけで、グッドマンさんを気絶させずに取り押さえよう  
と思います」

……………え？ 続けるのですか？

瀬流彦

ネギ先生はやはり紳士だなあ。コレが英国紳士って奴かな？

高音君にはこの模擬戦が良い経験になったろうね。  
頭の固い方のガンドルフィーニ先生でさえも、たまに高音君に頭  
が固いことを注意するぐらいだったんだから。

「やっぱりネギ先生はズレているな」

「ああ、さっきのグッドマン先輩の顔からすると、もう少し待てば  
負けを認めていただろうな。  
なんか感動していたみたいだし」

「そうだな。」

ガキだからしょうがないが、ネギは女心がわからないタイプだろ  
う」

「しょ、しょうがないんじゃないかな。」

ネギ君はまだ10歳なんだし……………、ハハハ……………」

……………まあ、10歳だからねえ。

10歳であんなに戦闘能力があるのは驚きだけど。  
僕じゃ絶対勝てそうにないな。

「さて、それではいきますよ。怪我はさせませんから、安心してください。」

“MM-D”システム発動」

“MM-D”システム？

ネギ先生がそう言った瞬間、モビルスーツが変形、イヤ、変身した。

全身の装甲が展開し、顔を覆っていた白いのっぺらぼうなフェイスガードが上がり、その下から人の顔のように見えるフェイスガードがまた現れた。

そして、ユニコーンの名の通り額に生えていた一本角がV字に割れて金色に、展開した装甲の露出部分が赤く光りだした。

……………カッコ良いじゃないか！

昨日もそれらしきこと言ってたけど、ネギ先生ってロボットアニメとか好きなのかな？

10歳らしいところもあるね。ウン。

「この魔力は……………」

「ネギ先生が“特殊機”と言ったのはこのことか」

「イヤ、どうせネギのことだ。

絶対まだ何か他にあるぞ」

「ネギ君だからねえ……………」

最近、高畑先生つていろいろと諦めかけてない？

ゾワッ！

フェイスガードの人の目に見える部分が光ったと思ったら、急に違和感というか悪寒が体中に走った。

なんだ今の？ 感じたのは僕だけじゃないらしく、周りの皆もキョロキョロと辺りを見回している。

そうこうしている間に、ネギ先生が動いた。

高音君達を右手で指差した後、掌を上に向けて力強く握り締める。

その瞬間、ネギ先生と対峙していた筈の15体の高音君の使い魔が、ゆっくり高音君達の方へと振り返り始めた。

「!？」 『ウソブラエ影よ』 ツ!？」

「お、お姉しゃま……………!？  
なんでしゅか、いつたい!？」

どつやら高音君が動かしているわけではないようだ。

まさか、ネギ先生が!？  
他人の使い魔を操ることが出来るとでもいうのか!？

「 『ウソブラエ影よ』 ツ!  
……………そ、そんな」

「お姉しゃま……………キャアッ!」

影の使い魔が高音君達を襲い始めた。  
佐倉君は3体の使い魔に襲われた。1体に筈を奪われ、もう2体

で身体を拘束された。

「め、愛衣っ！

クッ、私かわからないのですかあっ！！！」

身に纏っている使い魔本体は高音君のコントロール下にあるらしく、高音君は使い魔本体で襲い掛かってきた残り12体の使い魔へ応戦しているが、あまり持たないだろう。

なによりネギ先生がそんな隙を見逃すはずがない。

左腕に装備していた盾を捨て、両手でビームサーベルを構えたネギ先生がその場から忽然と姿を消したと思うと、赤い光が走って高音君の横を通り過ぎた。

通り過ぎた後に残ったのは、上半身と下半身の2つに断たれた使い魔本体だった。

……………瞬動、なのかな？

高音君は使い魔本体を失ったので使い魔に取り押さえられている。佐倉君も既に取り押さえられているし、コレで勝負ありだろう。

と、思ったら、10体の使い魔でグッドマン君達をグルリと囲んで壁を作った。これでグッドマン君達の様子が見えなくなってしまう。

「……………僕の勝ちです。  
大丈夫ですよ？ グッドマンさん意識ありますよね？ 服脱げ  
たりしてないですよ？」

「……………だ、大丈夫ですわ。  
ですから早く使い魔を退けてくださいまし」

「わかりました。  
とりあえず使い魔がお二人の周りに壁になってますので、落ち着  
いたら教えてください」

「あ、ありがとうございますゆ。ネギ先生……………」  
しえんしえい

これが“特殊機”の力か……………。  
他人の使い魔のコントロールを奪ったり、凄いことを出来るんだ  
なあ。ネギ先生は。

……………それにしても、幼児退行気味の佐倉君は大丈夫かな？

## 第十二話 模擬戦？ 一角獣（後書き）

エヴァンジェリンが“逆光源氏計画”を企み始めたようです。

ちなみに、ナギが生きているだろうということをエヴァに話していません。

それどころか“学園結界”で力を封印されていることも話していませんw

モビルスーツ紹介（Wikiから抜粋+個人的感想）

『ユニコーンガンダム』

パイロットの精神波に反応する構造材「サイコフレーム」で機体の駆動式内骨格「ムーバブルフレーム」全てを構築した史上初のフルサイコフレーム機であり、極めて高い機体追従性を発揮する。

通常は、一角獣ユニコーンの名の由来である額のブレードアンテナである一本角とフェイスガードに覆われたゴーグル状のカメラアイが特徴の「ユニコーンモード」で運用される。

限界稼動状態では、全身の装甲が展開し体格も一回り拡張、ブレードアンテナがV字型に割れガンダムタイプの顔が現れ、「デストロイモード」に変身する。

この際、露出したサイコフレームが眩く発光するのが特徴である。

インテンション・オートマッチク・システムというパイロットの



感応波を拾い上げ、行動に直結することができるシステムを搭載している。

連動する機体のフル・サイコフレームに直接思考を反映させることで、実際に操縦するよりも速く機体を動かすことができ、パイロットは操縦をすることなく考えるだけで、その動作がダイレクトに機体に反応される。

最初、雑誌で「ユニコーンモード」の画像を見たときは正直微妙な感じでしたけど、「DESTROYモード」は格好良いのではないのでしょうか。

シナンジュのほうが好きですがねw

この作品での「DESTROYモード」は、常に“瞬動”クラスの速さで自由自在に動けるが、同時に『マイティガード咸卦治癒』を発動してないと3分でボタンキョー、といった感じですよ。

詳しくはガンダムUCの第三話をご覧ください。

8 / 7 “MM-D”システム発動時の表現を修正しました。

第十三話 模擬戦？ 四枚羽根

近衛近右衛門

「……………皆、どう思うね？」

今は模擬戦を小休止し、魔法先生を集めてネギ先生のことについての話し合いじゃ。

さすがはナギの息子というか、まさか封印されているとはいえエヴァンジェリンにすら勝ってしまうとはのう。

しかし、あまりにも我々とは違う戦い方をするのが困ってしまうわい。

「……………まあ、しょうがないのではないのでしょうか。ネギ君は自己流で修行したらしいですし」

……………タカミチ君や。

君は以前からネギ先生と付き合いあったのじゃから、先にネギ先

生の性格に気づいておいて欲しかったの。

「そうですね。結果的に模擬戦の相手は誰も怪我をしていません。言い方は悪いですが、ネギ先生は“目的のためには手段を選ばない”タイプのようです。

その“手段”は我々とは随分と違いますが、“目的”は我々と同じだと思います」

「その“手段”もおそらく、ネギ先生は卑怯などとは意識していないでしょう。ネギ先生が修行の参考にしたという警察や軍隊での常識なら、別に非難される戦い方ではありません。

それに“目的”の方だって、むしろ我々より優しいのではないですか？

敵味方両方を怪我させずに模擬戦を終わらせたのですから」

「ウチの娘がネギ先生のことを“素直な子”と言ってたのがわかる気がしますね。

良い意味でも悪い意味でも純真なんだと思います」

ふうむ、特にネギ先生を非難する意見はないようじゃな。

アチラで佐倉君をおんぶしているネギ先生を見ると、性根はとても優しい子だとわかるしのう。

「ただ、ちょっとズレてますよね……………」

「悪い子なワケではなく、むしろ良い子なんですよ………」

「とっている行動も間違っているわけではないのですが……………」

「魔力探知・念話妨害煙幕ならともかく、ニンニク粉末と花粉はねえ……………」

「でも警察では催涙弾なんかを実際に使ったりします。それを参考にしたと言われると、否定しにくいですなあ……………」

「ですよねえ。」

まさか、「警察の方が間違っているんだ」なんて言えるワケないです……………」

「なんか違うんですよ……………」

「それに使い魔のオコジョ妖精を奇襲に使うのは……………」

「いや、ネギ先生が言った通り、主人と従者がセットなら主人と使

い魔もセットでしょう。

あの使い魔のことを隠していたならともかく、ネギ先生が自己紹介のときに一緒に紹介してありましたし………」

「確かに。

エヴァンジェリンが従者と一緒に戦うのなら、自分も使い魔と一緒に戦っていいと思うのでは………」

困ったのう。

皆もどう言えば良いかわからんようじゃ。

才能がありすぎるといふの困りものじゃの。

この場にいる全員が、ネギ先生以上の結果で模擬戦を終わらすことは無理じゃろう。

グッドマン君達ならともかく、エヴァンジェリンをお互いに無傷で取り押さえることなぞワシでも出来ん。

だからネギ先生を非難できるというわけじゃないのじゃが……。

それでもなんか違うんじゃよなあ。

こんなことならメルディアナでちゃんと戦闘方法を教えておいて欲しかったわい。

「学園長。とりあえず話はここまでで良いのではないですか？

ネギ君の性格のことは皆これで分かりました。ネギ君が麻帆良に来てまだ4日目ですので、時間はたっぷりあります。

今急いで結論を出さなくてもいいでしょう」

「それもそうじゃの。」

次は葛葉先生がネギ君の相手をするんじゃないか。

……………すまんが、神多羅木先生も一緒に相手してくれんかの？」

「魔法先生2人がかりですか！？」

「3戦目ですよ、次は。」

いくらなんでも無理なのでは？」

「問題なかるう。『マイティガード咸卦治癒』のおかげで元気一杯のようじゃし。」

今までの模擬戦はエヴァンジェリンやグッドマン君といった女性だけじゃった。じゃから、男性相手にはどう戦うか見ておきたいのじゃよ。」

タカミチ君の話では、ネギ先生はフェミニストらしいということじゃが？」

「そうですね。家族と呼べる人は従姉であるネカネさんぐらいで、他に親しくしていたのは幼馴染の女の子のアーニャ君だけみたいでした。」

そのせいか、女性には優しく接していたと思います」

「まさか、“男性相手だったら手加減せずに戦う”なんてことはないじゃろつが、一応の」

「……………ネギ君ですもんねえ」

### ネギ・スプリングフィールド

葛葉先生がアップを始めたようです。

……………『マイティガード咸卦治癒』はやっぱり秘密にしておいたほうが良かったかな？

その他の先生方は僕の戦い方についてまだ話し合い中。

自己流ならしょうがないよ派 VS そうだとしても外道すぎるよ派

の2つに別れてヒソヒソと議論中です。

「そんなに僕の戦い方って変わってるんですかね？」

「……………まあ、ネギの戦い方は“普通の魔法使いの戦い方”ではないのは確かだな」

「私はネギ先生のような戦い方をする人のデータを持っていません」

631

「自己流で修行して、そこまで戦えるのならいいんじゃないかな。これから“普通の魔法使いの戦い方”も教わっていけばいいんだし。なあ？」

「えー！？」

わ、私は神鳴流の剣士であって、西洋魔術師ではないのでなんとも……………。ねえ？」

「……………」、今回のコトは良い勉強とさせていただきますわ」



「……………」

「こっちみるや。」

まあ、ワザとそういう戦い方してますけどね。

これで「ネギ君だからしょうがない」という認識が、魔法関係者に出来てくれると後で楽になるんですが。

“普段から挙動不審だったら、怪しいことしても誰も怪しまない”って水着で白衣のお医者さんも言っていました。

「難しいですねえ。」

魔法バレのことを考えたら、サギタ・マギカ『魔法の射手』とかは見られたらアウトです。

カントウス・ベラークス『戦いの歌』使つて肉弾戦すればいいですけど、僕みたいな子供が肉弾戦で凄すぎたら変です」

「一応いろいろと考えてはいるんだね。」

それでロボットみたくなつたのかい？」

「茶々丸よりロボットらしいからなあ」

「マスター。私は正確にはガイノイドです」

「ええ。モビルスーツを見て、“魔法”を思いつく人はいないでしょう。」

それに盾とか背中に“麻帆良大工学部”とか書いておけば、麻帆良のノリならモビルスーツすら見られても平気な気がします」

「……………否定できないのが怖いですね」

「私も去年の学園祭の際に使い魔を巡回に使いましたが、仮装と思われて大丈夫でしたわ」

「モビルスーツを展開するにも、魔法と思われない動作があった方がいいですかね？」

ベルトにカード挿し込んで、「変身！」と叫ぶとか」

「……………」

それはそれで面白そうだな。

でも、仮面ライダーはあまり知らないですよねえ。

小太郎君と被る気がしますし。

「……ところで、もしかして佐倉さん寝てませんか？」

「もしかしなくとも寝ているね」

「……すー……すー……」

「め、愛衣っ！ 起きなさいー！」

「！ ひゃ、ひゃい！」

「……そんなにネギ先生の背中では気持ち良いんですか？」

「なんだ、興味あるのか？」

「だったらおんぶしてもらえ」

「え？」

「……それはさすがに恥ずかしいです」

「エヴァンジェリンも寝てしまったらしいね。道連れが欲しいのかい？」

「…………ぐぬ」

「あ、ありがとうございます！  
もう平気ですっ！」

「いえいえ、どういたしまして。」

皆さんは気持ち良くなるみたいですけど、自分ではわからないですよ。『マイティガード咸卦治癒』発動中は、眠らなくても平気になるくらい身体の調子が良くなるだけなので」

そのおかげで、前世では都合の良い抱き枕にされていたよ。役得だったから別にいいですけどね。

「そっいえばネギ先生。」

さっきの“MM・D”システムとはどういう意味なんだい？」

「……………“マギステル・マギ・ドライブ”システムという意味ですよ。」

ぶっちゃけて言えば“リミッター外し”ですね。あのシステムが発動すると肉体のことを考えずに行動できます。

『マイティガード咸卦治癒』を併用して使えば大丈夫ですけど、『マイティガード咸卦治癒』無

しで発動したら3分が限界です」

言えない……………。

本当は“マギステル・マギ・デストロイヤー”だなんて、高音さん達の目の前ではさすがに言えません……………。

桜咲刹那

また模擬戦が始まる。

これで三戦目だ。よくネギ先生は体力が持つものだ。

…………… そんなに『マイティガード咸卦治癒』とは凄いのだろうか？

そういえば佐倉さんの肌ツヤが良くなった気が……………。

しかし、次の相手は刀子さんと神多羅木先生の魔法先生のコンビ

だ。

刀子さんは神鳴流の剣士。ネギ先生は接近戦はどこまで戦えるの  
だろう？

それにいくら神鳴流の技を使えるからと言っても、映像を見ただ  
けではそうそううまくはいかないだろうな。

茶々丸さんのときもグッドマン先輩のときもうまく具合に攻撃を  
避けていたが、さすがに神鳴流剣士相手では逃げ切るのは無理だと  
思うが……………。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 『クシャトリヤ』」

今度はなんだ？

ネギ先生が、また違うモバイルスーツを展開した。

緑と濃緑色で、両肩からそれぞれ前後に大きな羽根が生えている  
ようなモバイルスーツだ。

今までのよりも大型だな。銃を今度は持っていないが、神鳴流相  
手に剣で戦うのだろうか？

盾も持っていない。あの羽根が盾代わりなのかな？

「戦闘爆撃機」かな？

さきほどの『シナンジュ』や『ユニコーンガンダム』よりは動き  
は鈍そうだが、その分火力はありそうだ」

「……………スマン、龍宮。“巡航機”と“戦闘機”と“戦闘爆撃機”って、なにが違うんだ？」

“輸送機”は言葉通りだろうし、“特殊機”は戦いを見たからその特殊さがわかったんだが……………」

「ん？ そうだな。」

わかりやすくいうと、“巡航機”は長時間・長距離・好燃費で飛べる航空機といったところかな。“コンコルド”とかいう旅客機を聞いたことないか？ アレは音速で飛ぶためにあまり燃費は良くないがな。

“戦闘機”は軍用機と言う意味もあるが、この場合だと対航空機用の航空機だ。おそらくエヴァンジェリンと戦ったときに使用した『シナンジュ』がそうだろう。

“爆撃機”は対地・対艦攻撃を行なう航空機だ。敵の基地や軍艦、戦車などを攻撃目標とする航空機だ。

で、“戦闘爆撃機”は“戦闘機”と“爆撃機”の中間、というか“爆撃も出来る戦闘機”だな」

「それなら昨日の『リゼル』が“輸送機”か。

確かに誰かが上に載れるように背中にグリップが付いていたな。もちろんそれなりに戦闘能力もあったが、『シナンジュ』には遠く及ばなかった」

「へえ、飛行機にもいろいろあるんだな」

「私もそうというのは初めて聞きましたわ」

「私はアメリカにいたときによくＴＶのＣＭで飛行機とかは見ましたけど、そこまでは詳しくないです」

ネギ先生とまではいかなくとも、少しはソツチ側の勉強もすべきかな？

閃光弾とかは確かに便利そうだし……。。  
しかし、私はあくまで神鳴流の剣士なのだから、あまりそういうのに触れたくないというのが本音だ。

「それでは参ります。ネギ先生」

「フ……………、よろしく頼む」

「はい、よろしく願います。」

アルちゃんは今回も下がっていてね」

「はい。お兄様」



「よし、準備は出来たようじゃの。  
それでは、……………始めいっ！！！」

学園長の始めの合図と共に、刀子さんは刀を抜きつつネギ先生に接近。神多羅木先生は刀子さんの少し後ろについて注意深く接近している。

流石に今までの戦いを見ていただけに、警戒しているようだった。

対するネギ先生は右に移動しつつ、右手に持ったビームサーベルを大きく振りかぶったが、そこは間合いの外……………って、ビームサーベルが伸びた！？

伸びたビームサーベルは刀子さんと神多羅木先生の間勢い良く振り下ろされた。

この攻撃は2人とも予想外だったらしく、互いに大きく距離をとって回避したみたいだ。

これで2人は分断されてしまったな。

「ファンネルッ！」

ネギ先生がそう叫んだ瞬間、背中側の2枚の羽根から12個の小さなナニカが飛び出した。

なんだアレは？

「凄いですね。」

「ビームサーベルが一瞬で13mぐらいに伸びました」

「ビームサーベルは『魔法の射手』サキタ・マキカを利用したと仰っていましたわ。だったら伸ばすのは容易なことでしょう」

「それにしても“ファンネル”ね。」

「まあ、確かにあれはファンネルだ」

「そうだな。」

「安直な名前すぎるがな」

「はい、アレはデータによると、ファンネルに形状が似ております」

「み、皆はアレがなにかわかるのか！？」

「今まであんなものは見たことはないが、龍宮が知っているという」

ことは近代兵器か？

それとも西洋魔術師の武器だろうか？ エヴァンジェリンさんやグッドマンさんが知っているということはソッチかもしれないな。

「……………桜咲刹那。」

“漏斗”のことを英語で“ファンネル”と言っただよ

「スペルは“funnel”です」

「ホラ、この前の理科の実験授業で使っただろ」

「そうですね。」

ろ過の実験とかで使うと思いますわよ

「あと、お料理でも使うことがありますね」

「ごめんなさい、しりませんでした。」

だからみんなしていわないでください……………。

……………そんなの日常で使いませんよう。

まあ、そう言われると確かに形は漏斗に似ているな。

△、12個のファンネルは刀子さんの周りに集まりだした。何を  
する気だ？

そしてネギ先生は神多羅木先生に突進。せつかく分断させたのだ  
から、まずは後衛を潰す気だろう。

もちろん刀子さんがそんなことをみすみす見逃すはずはなく、神  
多羅木先生と合流しようとしたのだが、周りのファンネルから光線  
が発射されて足止めされてしまった。

……あれはまた厄介な。

威力は『魔法サキタ・マジカの射手』とあまり変わらないぐらいだが、ああまで  
自由自在に動く12個のファンネルから発射されるとなると対処が  
難しい。

現に刀子さんは気を込めた刀で光線を弾くなどして対処している  
が、神多羅木先生の援護に行けないでいる。行こうとしても出足を  
潰されてしまうのだ。

あ、ファンネルを『斬空閃』で1個落とした。

でもなかなか次に続けることが出来ない。

まだ残っている11個が攻撃してくるし、なにより小さな的高  
速で動くので当て難いのだ。

ネギ先生に接近されている神多羅木先生は、フィンガースナップで多数のカマイタチを発生させて迎撃しようとしているが、盾代わりの羽根に全て弾かれている。

無詠唱魔法ではあの防御力を突破できそうにない。

「神鳴流奥義！ 『斬岩剣』！」

「『フランス・パリエース・アエリアーレス』  
『風花・風障壁』！」

ネギ先生の『斬岩剣』と神多羅木先生の『風障壁』がぶつかりあった。

やはりネギ先生の『斬岩剣』は完璧だ。映像を見ただけであそこまで再現できるとは……………。

しかし、さすがに『風障壁』は突破できないようだ。  
刀子さんもファンネルをもう6つまで落としている。  
刀子さんの援護が間に合うか？

「駄目だな。」

『フランス・パリエース・アエリアーレス』  
『風花・風障壁』は10トトラックの衝撃すら防ぎきる優れた

対物理防御魔法だ。

しかし、効果は一瞬しかなく、連続使用も不可能と言う弱点がある」

「ですが、マスター。」

あの魔法でなければネギ先生の攻撃は防ぎきれなかったでしょう」

「ああ、そうだろうな。」

だがネギにはまだ左手が残っている」

そうなのだ。

右手で放った『斬岩剣』は『風障壁』に相殺されてしまったが、ネギ先生は左手に新たなビームサーベルを装備している。

645

「ハッ！」

「グウッ！」

ネギ先生の左手の剣が神多羅木先生に当たった瞬間、「パチイッ！」と電気が放電して見えた。おそらく『魔法の射手』の『雷の矢』を利用したスタンガンのようなものだ。

電気ショックで神多羅木先生の動きが止まった。

そしてネギ先生は動きの止まった神多羅木先生の腕を掴んだ。  
……………あ、魔法発動媒体に使っている指輪を無理矢理外そうとしている。

神多羅木先生は電気ショックのせいで強く抵抗できない。

あーあー、指輪取られてしまったぞ。

神多羅木先生はこれで脱落だな。魔法発動媒体がないと西洋魔術師は戦えないからなあ。

取った指輪をあさつての方向に投げたと思ったら、投げた先には結界の外のアルちゃんが待っていた。

そしてアルちゃんは指輪を見事にキャッチ。

……………相変わらず多芸なおコジヨだな。

刀子さんは今ファンネルを全て落とし終わったみたいだが、間に合わなかったみたいだ。

「神多羅木先生っ！」

「スマン、やられた……………」

「映像以外の神鳴流剣士は初めてです！」

神多羅木先生は多少痺れが残っているようだが、特に怪我らしい怪我はしていないようだ。刀子さんに片手を上げて謝っている。ネギ先生は両手に再びビームサーベルを持ち、刀子さんに突進した。

神鳴流剣士と剣で競い合う気だ。

「神鳴流奥義！ 『斬岩剣』 つ！！！」

ネギ先生と刀子さんの『斬岩剣』がぶつかり合う。

両者ほぼ互角の威力だが、ネギ先生が片手持ちであるのに対し、刀子さんは両手持ちで『斬岩剣』を放っていた。

それを考えるとネギ先生の方が威力は上のような。

おそらく『咸卦法』の効果とモビルスーツで腕力を底上げしているのだろう。

「くうっ！」

やりますね、ネギ先生！」

「ありがとうございます！」

もう少しお付き合いしてくださいー！」



「刀子さんも負けておらず、1本の刀でネギ先生の2本のブームサベルをしのいでいる。」

「力はネギ先生が上だが、さすがに速さは刀子さんが上のようだ。」

「2人の剣戟は互角。これは長引きそうだな。」

### 龍宮真名

「いやはや、まさか剣で神鳴流剣士と互角に戦うとは……………」。

「二刀流に慣れてきた葛葉先生が少し優勢になってきたが、それでも6対4ぐらいだ。なにかあればすぐにひっくり返るだろう。」

「ネギ先生はいろいろと規格外だな。」

「刹那、お前だったらネギ先生に勝てるか？」

「……………難しいな。  
剣だけだったらまだ勝負になるかもしれないが、あのファンネルを援護に使われたら無理だろう」

「なにを言っている。剣だけでもお前では勝てんさ。  
茶々丸、ネギのビームサーベルの長さは如何ほどだ？」

「両手の2本とも、刀身が70cmですと固定されています」

「あ、ネギ先生は剣を伸縮させていらっしやらないということですね」

そうか。それがあつたな。

しかし、刀身が伸縮自在とはまた厄介な。

戦闘中に剣の長さが変わったら、間合いが全然わからないじゃないか。

自己流の修行というのは面倒だな。何も知らない分、誰も考え付かないようなことを仕掛けてくる。

ガキイン！ と大きく剣が合わさる音がしたと思ったら、葛葉先生が大きく後退していた。

息も少し上がっている。やはりあのレベルの立会いは消耗が激しいのだろう。

しかし、ネギ先生は息切れ一つしていない。  
『マイティガード咸卦治癒』のおかげなのだろうが、持久戦では勝ち目がなさそう  
うだ。

「お美事です、ネギ先生。10歳でその腕とは……………」  
本格的に神鳴流を習ってみませんか？ ネギ先生なら当代随一の  
使い手になれるでしょう」

「……………はあ、ありがとうございます」

？ ネギ先生の様子がおかしい？ なにかあったのだろうか？  
困惑しているような感じだな。

「……………あの、葛葉先生。  
ミニスカートで激しい動きはしないほうがいいと思います」

「!? い、いきなりなにを言うのですか!？」

……ハア。また始まったよ。  
今度の被害者は葛葉先生か。

「だって、そうじゃないですか！  
とても言いにくいですけど、下着が何度か目に入りましたよ！」

「大声で言わないでください！」

「見られるのが嫌ならズボンにすればいいじゃないですか。それが  
桜咲さんのように下にスパッツを穿くとか。  
というか、神多羅木先生！ 相棒なんだから気づいていたんじゃない  
んですか？ だったら言っておけばよかったのに……」

「ム？ ……葛葉は組んだときからこの格好だったからな。  
そういうのは気にしないのだと思っていた」

「ちょ！？ どういうことですか、神多羅木先生！？  
人をそんな風に思っていたのですか！？」

「グッドマンさんといい葛葉先生といい、なんで皆さん気にしない  
んでしょう？」

2-Aの皆さんも結構そういうの気にしないし……。

あれ？　もしかして日本の常識がこうなのか？　下着を男性に見られても平気なのか？」

「ち、違います！」

見られて平気なんて思っていない！」

違うぞ、ネギ先生。あくまで麻帆良の中だけだ。

2・A連中は女子中だからだよ。

それとネギ先生は子供だから気にされていないだけだ。

「良かった。」

私は変だと思われていない……………」

「私は違いますよっ！」

「愛衣！　裏切るのですか!？」

「やはりカオスになったな。」

……………私の服装は大丈夫だよな？」

「幻術を使用した大人のマスターの服装は、ネギ先生に拒否されるかと思えます」

エヴァンジェリンの大人の姿はどういう格好をしているのかは気になるが、……私は大丈夫だよな？

それにしても「子供は残酷」という言葉をよく聞くが、その意味がようやくわかった気がする。

ネギ先生に悪気はないんだろうけどなあ……。

「と、とにかく！」

制限時間も残り少ないので、さっさと終わらせさせていただきます」

「あ、もう残り1分強しかないですね。

それでは再開しましょうか。そろそろ剣だけではなく、モビルスーツの能力も使わさせて頂きます。

ファンネル」

正面側の羽根から12個のファンネルが飛び出してきた。

背中側の羽根に12個あったんだから、正面側の羽根にもあって当然だな。

両手のビームサーベルも2m近くまで伸び、心なしか太くなくなって見える。勝負に出るつもりだろう。

対する葛葉先生はファンネルに囲まれる前にネギ先生に瞬動で接近した。

悠長に構えていたらギリ貧だからな。

これでファンネルは使えまい、ネギ先生。

「神鳴流奥義！ 『雷鳴剣』っ！！！」

「くうっ！」

この技は初めて見ましたよ！」

葛葉先生の『雷鳴剣』をネギ先生が受け止める。  
電気として放電された気が辺りに撒き散らされるが、ネギ先生はモビルスーツのおかげで平気のようだ。

『雷鳴剣』を知らなかったということは、ビデオで見ただけの神鳴流しか使えないということか。

まあ、それはしょうがないな。

！？ 放電が終わった葛葉先生の刀が、ビキビキと音を立てて凍っていく！？

いつの間にかビームサーベルを氷属性にしていたらしい。実際に

見てみると厄介すぎる武器だな。

ちよ！？ しかも羽根の先から腕が出てきたぞ！？ あんなところに隠し腕があったのか！？

2枚の羽根からそれぞれ出てきた2本の腕が凍った刀と葛葉先生の左腕を、ネギ先生の左腕が葛葉先生の右腕を掴んで動きを封じ、残ったネギ先生の右腕が刀身を消したビームサーベルの柄を葛葉先生の腹に押し当てた。

しかも、戻ってきたファンネルが動きを封じられた葛葉先生に照準を当てるのオマケつきだ。

勝負アリだな。

……………それにしてもネギ先生はシビアだな。

ファンネルの半分は脱落した筈の神多羅木先生に向いている。

不意打ち防止なんだろうが、10歳の子供がすることではないぞ。

「チエックメイトです」

「……………参りました」

「ウム、其処までじゃ」



終わってみれば、模擬戦はネギ先生の全勝だ。  
やれやれ、未恐ろしい子供だな。  
これからどうなってくることやら………。

## 第十三話 模擬戦？ 四枚羽根（後書き）

模擬戦編はこれにて終了です。  
いやあ、長かった気がします。

全3話を全6話にしておけばよかつたかなw

ところで神多羅木先生って魔法発動体って何使っているんでしょうか？

この作品では指輪にしておきましたが、単行本16巻の刹那+楓VS刀子+神多羅木の戦いの際には、指輪はしていないようにしか見えないんですね……………。

アレですか？ サングラスか啞えてる煙草が発動体なんですか？

『魔法の射手』<sup>サキタ・マキカ</sup>とかはサングラスから発射されるんですか？

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう?」という困惑

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

モビルスーツ紹介（Wikiから抜粋+個人的感想）

『クシャトリヤ』

ネオ・ジオンが開発した20m級のサイコミュ搭載型MS。

NZ-000 クイン・マンサをもとに設計された機体だが、サイコフレームの使用と複数の機能を集約したバインダーの増設により、クイン・マンサの圧倒的火力と性能をほぼ維持したまま、小型化に成功している。

本機の特徴は、「四枚羽根」というコードネームの由縁となる四枚の大型バインダーにある。

それ自体がフィールドジェネレーター内蔵のシールドやAMBAC可動肢として機能するほか、内部にファンネル、メガ粒子砲といった武装を搭載している。

スラスターとしての役割も備えており、ここに複数の機能を集中させることで機体本体の小型化に貢献している。

また、「隠し腕」と呼ばれるサブアームを収納しており、それぞれがビームサーベルを装備している。そのため、背後から斬撃を受けた場合でも、機体を旋回させることなく、後方2枚のバインダー内に収納されたビームサーベルを用いての応戦が可能となっている。

ガンダムUC第一話のスタークジェガンとの戦いが格好良かったです。

というか重武装しすぎw 例えは“戦闘爆撃機”じゃなくて、“

爆撃機” でよかったですかもしれません。

第十四話 途中加入

ネギ・スプリングフィールド

「それっ！！」

女子高生アタッカー！！！！」

「蹴り足ハサミ殺し！！」

パアッーーン！！！！

あ、いけね。

バレーボール破裂させちゃった。

「ア、アレは“蹴り足ハサミ殺し”！？」

「知ってるの!? ゆーな!？」

「“蹴り足ハサミ殺し”とは、敵の打突を肘打ちと膝蹴りで挟み潰す高等技術よっ!!!」

「私も弟の漫画で見たことあるわ!」

高畑・T・タカミチ

「本当にごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

「このボールも古くなってたみたいですからね」

昼休みも終わる頃、職員室に戻って次の授業の準備をしていたら、ネギ君が体育の先生に謝っていた。  
何かあったのかな？

「やあ、ネギ君。  
何かあったのかい？」

「あ、タカミチ。  
昼休みに2 - Aの皆さんとバレーボールしてたんですけど、僕がボールを受けとめたときに破裂しちゃいました。  
体育の先生が言うにはもう古くなってたみたいですけど」

「そうかい。  
怪我はないみたいだね。それなら何よりだ」

ネギ君が担任補佐として赴任して、今日でもう2週間が経った。  
2 - Aの皆にも受け入れられているようで何よりだ。

女の子の扱いも、ネカネさんやアーニヤ君と過ごしていたから落

ち着いて対応している。

メルディアナでも年上の後輩に魔法を教えたというから、年上相手にも授業もちゃんと出来ている。

まるで教師の経験があるみたいだったな。

」ところでタカミチ。

今日の居残り授業のことですけど」

「うん。前から言っていたように、僕は今日の授業が終わったらしばらく出張に行かなくちゃいけないからね。

ネギ君には悪いけど、居残り授業と明日からのホームルームをよろしく頼むよ」

「居残り授業は別に構いませんよ。明日菜さんの勉強を夜に少し見えますけど、それでは他の人に不公平でしたからね。

明日からも、何かあったらしずな先生に相談しますから大丈夫です」

「はい。ネギ先生のごことは任せてくださいな、高畑先生」

「ハハハ、よろしく願います」



アスナ君か。

今日の英語の小テストで良い点数を取ったのには正直驚いちゃったな。

やっぱりアスナ君はやれば出来る子なんだよ。ウン。

ネギ君とも良い関係が築けているようで何よりだ。

「そういえば、タカミチって明日菜さんとデートとかしてるんですか？」

「ブフオツ!!!」

…………… コーヒー吹いた。

まさか僕もエヴァと同じ目に遭うとは……………。

というか職員室で何を言い出すんだ、ネギ君。周りの先生が見ているじゃないか……………。

僕はアスナ君の後見人とはいえ、一応教師なんだから。

「アラアラ、ネギ先生。」

いったいどこからそのようなお話が出てきたのですか？」

しずな先生が何か怖い……………。

よくネギ君は正面からあのプレッシャーを受け止められるな。

よくわからないような顔をしてるけど、本当に気づいていないのか？

「？　ウチのクラスの明石さんが「日本人の女の子の初恋はお父さんなんだよ！」って言ってましたよ？」

明石さんは休日に明石教授の部屋の掃除をしたり、デートをしたりして過ごしているそうです。

タカミチは明日菜さんの後見人ですよ。

だったらタカミチは、明日菜さんのお父さんみたいなものじゃないんですか？」

……………ああ、なるほど。そういうことか。

よかった。周りの先生からの視線も減って、しずな先生のプレッシャーも小さくなった。

「オホホホホ、そういうことでしたか。」

確かに明石さんは明石教授のことが大好きですからねえ」

「そうですね。」

明石教授からも娘自慢を聞かされることもありますし、あの親娘は仲が良いですよね。

ああ、でもそうだなあ。

アスナ君が小学生の頃はいろいろと遊びに連れて行ったけど、中学生になってからはほとんどないなあ。

………もしかして、アスナ君に何かあったのかい？」

「特に何かあったというわけじゃないんですけどね。まだ明日菜さんとも2週間しか付き合いがないですし。

でも、学費を早く返すために新聞配達のアルバイトを頑張っているのを見ると、明日菜さんって責任感が強いというか、一人で頑張ろうとしているように見えてしまってますよね。

タカミチは明日菜さんから弱音とか聞いたことありますか？ 勉強関連以外で」

ム、最初は何なのかと思ったけど、真面目な話らしい。

………アスナ君の弱音が。

小学生の頃は雪広君のことをよく愚痴っていたけど、そういえば最近是个人的なそういうのは無かったな。

僕はアスナ君の保護者なのに………。

確かにアスナ君は頑張り屋さんだから、最近はそれに甘えてアスナ君に気を払っていなかっただかもしれない。

アスナ君が普通の女の子として暮らしていることに喜んでいただけ、少し平和ボケし過ぎていたな。

何をやっているんだ、僕は。

彼女はガトウさんから託された大事な女の子なんだぞ。

「……………ありがとう、ネギ君。」

確かにアスナ君が何も言っただけに甘えていたかもしれない。これから注意してアスナ君を見てみるよ。

といっても、しばらく出張に行かなきゃいけないから、悪いけどネギ君もアスナ君を見ていてくれないかい？」

「わかってます。明日菜さんにはお世話になってますからね。」

まあ、男性には言えない悩みなんかを持ってた場合だと、しずな先生に力を借りることになると思いますが。」

例えば、恋の悩みとか……………」

「ハハハ、その場合は僕でも一緒さ。」

しずな先生、そのときはよろしくお願いしますよ。」

「フフフ、そのときはお任せくださいな。」

「そつえば明日菜さんに彼氏でも出来たら、タカミチはどうします？」

やっぱり「ウチの娘が欲しかったら僕を倒してからにしろ！」とか言つんですか？」

「おいおい、僕はそんなステレオタイプな厳格な父親じゃないよ。アスナ君が選んだ男ならグダグダ言ったりしないさ」

「アラ？ 高畑先生は案外子煩悩なタイプだと思いますわよ？」

……………まあ、あんまり酷いようなら、僕の『居合い拳』が唸ることになるかもしれないけどね。

きつとアスナ君が選んだ男ならおそらく大丈夫さ、……………多分。

しかし、アスナ君に彼氏かあ……………。

中学生なんだから当たり前の話なのかな。

「明日菜さんは「大人の男性」がタイプって言ってましたけどねえ。明石さんが言っていたことを置いといても、案外タカミチのことが好きなんじゃないですか？」

というか、明日菜さんと接する機会がある男性ってタカミチの他

にいます?」

え?

えーっと、同僚の瀬流彦君みたいな男性教師と、……………部活は麻帆<sup>ウチ</sup>良女子中の学内の部活だから男性はいないな。それに顧問は僕だし。

あ! アルバイト先の新聞販売店のお父さん……………、って駄目じゃないか!

僕より年上だし、何より既婚者だろ!

……………アレ? そう考えると、アスナ君は男性と接する機会って少ないな。

女子中に通って女子寮暮らし、しかもアルバイトで忙しいとなるとしょうがないのかもしれないけど。

「アラ、ネギ先生の話が現実味を帯びてきましたわね」

「ちょ、からかわないでくださいよ、しずな先生。そんなことあるわけじゃないじゃないですか。

アスナ君は僕にとって、妹というか娘みたいな女の子ですよ」

「……………ハア、駄目ですよ高畑先生。中学生を子供扱いしては。」

今のあの子たちは丁度大人と子供の中間で、とても不安定な年頃なのですから。

それに大事なのは高畑先生の気持ちではなく、神楽坂さんの気持ちですわ」

「……………う、すみません」

「ア、アハハ……………」

「ごめんなさい。変な話題振っちゃったみたいですね。

明日菜さんがタカミチのことを男性として好きなのかどうかはわからないのですから、そこまで気にしなくていいのでは？」

「確かにそうですわね。

でも、もし告白されてしまった場合は、子ども扱いをしないで一人の女性として相手を見て、お茶を濁さずにちゃんと返事をなされた方が良くと思いますよ」

「……………そうですね。そんなことがあるかどうかわかりませんが……………」

もしその時が来たら、真剣に返事をしますよ」

「アラ？ 受け入れるのですか？」

「いえいえ。さっきも言ったようにアスナ君は僕にとって、妹とい

うか娘みたいな女の子です。

アスナ君の気持ちは嬉しいですけど、受け入れることは出来ませんよ」

「イヤ、まだ告白されてもいないんだから、別に断ることに決めなくても良いんじゃないかなあ……………なあんて……………、アハハ……………」

そうだなあ。

アスナ君ももう中学生なんだ。そういうのに興味が出てきても当たり前なんだよなあ。

……………おっと、いけない。もうこんな時間か。  
早く準備しないと次の授業に間に合わなくなるな。

それと今回の出張から戻ったら、アスナ君と少しゆっくり話してみようかな。

最近はあまり話し合いとかはしてなかったから、丁度良いだろう。

ところで、何でネギ君は「やっちゃったよ……………」みたいな顔をしてるんだろう？



桜咲刹那

今日の英語の小テストでバカレンジャー全員に負けちゃった……。

最近あの5人は勉強を頑張っていたみたいだけど、負けたのは正直に言っただけだった。

……ああ、この前のネギ先生の言葉が胸に突き刺さる。

模擬戦からしばらく経った日、朝に夕凧で素振りをしていたらネギ先生がいきなりやってきた。

……一応夕凧を扱っていたので、護符で人払いはしておいたはずだったんだがな。

それにネギ先生が近づいてきたのに全然気がつかなかった。

「おはようございます、桜咲さん。  
朝の鍛錬中に申しわけありません。少しお話がしたかったもので  
すから」

「お、おはようございます、ネギ先生」

「学園長から木乃香さんの護衛をしていることは聞きました。僕に  
手伝えることがあったら遠慮なく相談してくださいね。」

「いやあ、木乃香さんのお父さんが“青山詠春”さんだったとは思  
ってもいませんでしたよ。ああ、木乃香さんに魔法を秘密にしてお  
きたいというのも聞いてますので大丈夫です。」

「それでなんですが、桜咲さんの成績のことで少々お話が……………」

「ハ、ハア。」

「……………私の成績、ですか？」

「……………その、成績落ちきてますよね。」

「麻帆良に入学当初は“中の上”ぐらいだったんですが、最近は  
“下の上”と“下の中”の間ぐらいですよね」

「う！ た、確かに私は勉強があまり得意ではないですが……………」。  
木乃香お嬢さまの護衛と腕を磨くための鍛錬もありまして、なかなか勉強する時間が取れないのです……………」

「ええ、それはわかります。」

僕も担任補佐の仕事だけで一杯だから、他の人たちみたく“魔法先生”として働いていません。だから二束の草鞋が大変なのはわかります。

しかしですね、エスカレーター式で高校に入学出来ても、高校には“留年”というものがあるんですよ。

桜咲さんは徐々に勉強に慣れていけなくなったのかもしれないけど、どんどん成績が下がっていつてます。

この調子で高校に入っても成績が下がるようなら、おそらく留年しちゃいますよ。」

「……………りゅ、留年ですか？」

「ええ、そうです。」

実際問題、留年しちゃったらどうします？ 木乃香さんの護衛のために同じクラスにいるんですよ？ 留年して学年違うようになつたら、護衛に支障が出るんじゃないですか？

まさか学園長に、「このままでは留年してしまいます。木乃香お嬢さまの護衛のために、成績に下駄を履かしてください！」とでもお願いするわけにはいかないでしょう？」

「ま、まさか!？」

そのようなこと学園長に頼めるはずありません!?!」

「ですからね、授業はちゃんと受けましようよ。あとで困るのは桜咲さんですよ。」

それに2・Aにはエヴァさんとか龍宮さんがいるじゃないですか。女子寮にいるときとかならともかく、授業中に何かあったらあの二人も対処してくれるから大丈夫ですよ。」

龍宮さんはあとで料金を請求されるかもしれませんが、きっと力を貸してくれます」

「ええ、まあ。確かに龍宮なら報酬を用意すれば力になってくれるでしょう。」

しかし、エヴァンジェリンさんが力を貸してくれるとは思えないのです……」

「何を言っているんですか？」

もし教室にいるときに、エヴァさんの目の前で木乃香さんに危害が加わるようなことがあったら、犯人は「ターク・エヴァンジェル闇の福音」なんぞ恐れるに足らず」と言っているのと同じです。

そんなこと、あのプライドの高いエヴァさんが許すわけないですよ。」

まあ、その場合は木乃香さんを守るためではなく、自分をコケにした奴をペるといふ感じになるでしょうけどね」

「た、確かに……………」

「だから授業時間ぐらいいは授業に集中してください。今でも木乃香さんのこと気にしてて、勉強に手が付いていないじゃないですか。今から勉強を頑張れば、高校に入ってからでも安心できますよ。それに今はまだ赤点とって補習を受けることはないみたいですけど、もし補習を受けるようなことになったら護衛のほうも大変ですよね」

「それはそうです。」

正直な話、今でも完璧に木乃香お嬢さまの安全を確保できているというわけではありません。

補習なんかを受けるようになった場合は、もっと護衛できなくなってしまう」

「僕のお世話になっている木乃香さんの部屋には入りにくいでしょうから、まずは放課後に行なわれる居残り授業に参加してみてください。他のバカレンジャーの皆さんも参加予定です。」

剣道部に参加する時間を削れば大丈夫でしょう。

きっと「勉強会に参加したい」と言えば、顧問の先生だって許してくれる筈です。むしろ喜んで送り出してくれる筈です」

「え？ 何でそう思うんですか？」

「え？ ……べ、別に顧問の先生に話を聞きに行ったわけじゃないですよ。」

そ、そうだ！ 英語だけでなく他の4教科も僕は出来ますので、わからないところがあつたら遠慮なく質問してくださいね。

それでは朝の鍛錬中にお邪魔しました！」

……………ネギ先生の逃げ足は速かったなあ。

というか、“他のバカレンジャー”ってことは、私もバカレンジャーと思われているのか？

アハハ。バカレンジャーじゃないな。

英語の小テストで負けたんだから、私が下だよなあ。

悪の組織の下っ端戦闘員だな。

それともアレか？ 途中加入の6人目か？

私は何色だ？ 緑か？ 白か？ 銀色か？

フフフフ、きつと白やな。

どーせウチは禁忌の忌み子なんや……………。

結局、私は居残り授業に参加することにした。

さすがに学園長に、「このままでは留年してしまいます。木乃香お嬢さまの護衛のために、成績に下駄を履かしてください！」なかなか言えない。

それにもし留年してしまったら、私を信じて木乃香お嬢さまの護衛にしてくれた長に何てお詫び申し上げればいいのかだろうか？

……………何だろう。木乃香お嬢さまが私を見つめていらっしやる。そんなとき、以前だったら申し訳なさで心が張り裂けそうになったのに、今は申し訳なさで心が萎みそうになる。

私はどうしてしまったのだろうか？　ハハハ、これじゃ護衛失格だな。

イヤ。まずは勉強を頑張らなければ。

もし本当に護衛をクビになってしまったら、私は何をしたいかわからなくなる。

ネギ先生には感謝しなければ。

確かにこのまま高校に進んでいたら、確実に不味いことになっただろう。

最悪なことになる前に解決出来るチャンスを手に入れることが出

来た、と前向きに考えよう。

神楽坂さん達だって勉強を頑張っているんだ。  
私だって頑張らなければ。

アレ？　そういえば何で神楽坂さんは落ち込んでいるんだろう？  
せっかくの居残り授業なのに。

イヤホンで何かを聞くまでは元気だったのになあ……………。

神楽坂明日菜

ああ、協力ありがとうね、ネギ。  
大丈夫よ、まだ生きているわ。

テープレコーダー返すわね。



こんなことに貸してくれてありがとう。

ううん。別にネギが悪いわけじゃないわ。

何となくわかっていたことなんだから……………。

うん、大丈夫よ、木乃香。

コレぐらいへっちらだって……………。

……………ゴメン、木乃香。今日はネギ貸して頂戴。

え？ 抱いて寝たら、暖かくて気持ち良いんでしょ？

大丈夫大丈夫。

明日も新聞配達のアルバイトあるから早めに寝なきゃね。

……………。

……………。

.....  
終わった。  
私の恋。

## 第十四話 途中加入（後書き）

ちょっと短めですね。

とりあえず単行本第1巻分は終了です。

他にもいろいろと進んだり、終わってしまったこともあるようにですが…………。

細げえことはいいんだよっ！

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という困惑

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた  
new!

タカミチ：コーヒー吹かされた  
new!

刹那：勉強地獄+バカホワイト就任  
new!

明日菜・失恋

n e w !

## 第十五話 部活巡り

ネギ・スプリングフィールド

「ただいまー。」

うー、寒い寒い」

「お帰りなさい、明日菜さん。」

休日の朝から新聞配達お疲れ様です」

「お帰り、アスナ。」

「昨日今日と一段と冷えるなあ。何でもこの冬一番の寒さらしいやえ」

「どーりで寒いわけね。この寒さでミニスカートは辛かったわ。着替えるのが面倒とはいえ、ズボン穿いていけばよかったわね」

明日菜さんが元気になってよかったなあ。

この前まで死人みたいになってたし。

いくら頼まれたとはいえ、タカミチに明日菜さんのコトをどう思っているのか聞き出すなんて、やっぱり断ればよかった……………。

原作知識で無理ってわかってたんだしなあ。

あの結果はさすがに罪悪感が沸きましたよ。

……………ハア。

面と向かって振られた原作はこれよか数段マシですね。

告白する前に断られるのがわかってしまった方がダメージは大きいです。

とりあえず“大切な女の子”みたいな言葉をタカミチから引き出すうと思つてたのに、しずな先生の参加で変な方向に持っていかれてしまいました。

しずな先生に悪気は無かつたんでしょうけどねえ……………。

? あれ?

どこからか「お前が言うな」という声が……………?」

……………えいつ!」

「うわひゃっ！！！！」

「あ、コラ。湯たんぽは大人しくしてなさい。

こっちはこの寒い中で新聞配達してきて、すっごい体が冷えてるんだから」

そして失恋した明日菜さんはやけにくっつくようになってきました。

人肌が恋しいんですかね？

僕だけじゃなく、木乃香さんも何かあれば抱きつかれたりしてるので、まだ失恋のショックが尾を引いているようです。

最近寝るときは明日菜さんの抱き枕にされています。

まあ、しばらくは明日菜さんの好きにさせましょう。

あの明日菜さん見てたら反抗する気が失せました。

「ねー、今日はどつするの？」

先週の休みは授業の準備で忙しかったみたいだし、私の勉強も昼は休むんでしょ」

「そうですよ。」

最近明日菜さん頑張ってますからね。息抜きも必要です。夜の勉強はいつも通りしますけど、それまではゆっくりしてください。

他の皆さんも頑張ってますからね。多分、2・Aは今度の期末テストで最下位脱出できますよ」

「よかったなー、アスナ。」

やっぱりアスナはやれば出来るんやよ」

「アハハ、私も最近ようやく勉強の仕方がわかってきた気がするのよね。」

ネギがこの部屋に住んでくれてありがたいわ。家庭教師をタダで雇っているみたいなんだもの」

誉めてくれてありがとうございます。

僕も明日菜さんの役に立てて嬉しいですよ。

だからシャツの中に手を入れて、サワサワとお腹を触るのやめてください。

明日菜さんは暖かくて気持ちいいかもしれませんが、僕は普通に冷たくて何よりくすぐりたいです。

というか、完璧無意識でやっていますよね。



それと勉強頑張るのはいいですけど、失恋のショックで勉強にのめり込むのはマズイと思います。

「最近勉強ばっかりしてた気がするわね。

今日はどうしようかしら？」

「そうやね。ネギ君は何か予定あるん？」

「今日は皆さんの部活を見て回ろうかと思ってます。

担任補佐の仕事にも余裕が出来てきましたので、そろそろ麻帆良巡りをしてみようかなあ、と。

クラスの皆にも見学に来るよう誘われていますし」

「そついえばくーへとかとそついう約束してたもんなあ。

あー、今日は図書館探検部の活動はないから、見学して貰えなくて残念やなあ」

「ええ、中武研は午前に集まりがあるらしいですから、それを覗いて他にも回ってみようと思います」

今の古菲さん相手なら、素の僕でも負けはしないでしょう。

古菲さんが意識的に気の扱いをするようになったら、さすがに口ツチも魔力が気を使わないと勝てませんがね。

あー、バイアスロン部って今日やってたかな？  
やってたらライフル撃たせて欲しいんだけど……………。

剣道部……………はやめておきますか。  
木乃香さんと一緒に行ったら、刹那さんに何言われるかわかりませんし。

「じゃあ、私が案内してあげるわ。  
ネギには勉強を覚えてもらっているし、そのお礼に少しは面倒見てあげないとね」

「あ、ならウチも着いてくわ。  
たまにはそういうのも面白そうやし」

「ありがとうございます。  
地図片手に見学しようと思っていたので、案内していただけるのは助かります」

「あー、じゃお弁当作るのかな。  
何かピクニックみたいで楽しいやん」

お弁当か！。

そういえばそういつのはまだ食べてなかったな。  
でもなあ……………。

「それは別の機会でもいいですか？

お昼には食べてみたい所があるんですけど」

長谷川千雨

……………ダリイ、腹減った。

昨日は休みの前日だからってうっかり夜更かししすぎた。寝たのが朝方だったからなあ。

腹が減って目が覚めたのに、買い置きのカロリーメイトとか切ら

しちまってたし…………。

それにしても、麻帆良の変なことは遂に極まりだな。

何なんだよ、10歳の教師ってのは…………。  
労働基準法ってのは何処行っただよ。

まあ、わざわざイギリスから麻帆良に教師になりに来たっていうぐらいだから、優秀なことは優秀なんだよなあ。教え方もうまいし。へたしたら高畑より優秀なんじゃねーか？

少なくともあのガキが来たおかげで、高畑が出張ばかりなせいでホームルームが自習になりまくってた頃よりはマシにはなったんだよなあ。

あのいつもお祭り騒ぎ状態のクラスを纏め上げているし、バカレオンジャーの連中が勉強を頑張るようになったのも凄い。

身体が空いているときは、担当の教科以外のときでも授業補佐としてクラスにいる。

おかげで英語だけでなく、他の教科の成績も上がってるらしいな。

というか、あのガキの担当は英語なのに、何で国語の成績が一番上がるんだよ？

あのガキが言うには、

「僕が難しいと感じたところを重点的に教えているだけですよ。」

あと日本人の国語の先生は日頃から日本語に慣れ親しんでいる分、感覚的になってしまふところがありますからね。

僕は逆に理論的に日本語を学んで、その通りに教えているのでわかりやすいんじゃないでしょうか」

ってことらしいがな。

……まあ、理屈はわからなくてもない。クラスの中でも留学生である古の国語の成績が一番上がってるらしいし。

それといくらなんでも10歳の外国人のガキに国語を教わるのはマズイ、とクラスの連中が思ったのが国語の成績が特に上がった要因だろうーな。

くそっ！

あのガキの中身はマトモそうなのに、あのガキの存在自体がマトモじゃないってのが余計に悔しい！

と、思っていた時期が私にもあったよ。

何であのガキが近衛をお姫様抱っこして、神楽坂と一緒にコツチに向かってダッシュしてくんだよ？

愛の逃避行かあ？

というか、よく近衛を抱っこしてあんな風に走れんな。

「こんにちは、長谷川さん！ 丁度いいところに！」

古菲さんが来たら僕達はアツチに逃げたと言ってください！」

「こんにちは、ネギ先生……って、ちょっと!？」

私の返事も聞かずに近くの茂みに隠れる3人。

くそっ！ やっぱりあのガキの中身もマトモじゃなかったんだ！

それに古だと？

いったい何なんだよ………って。

………おお………？ 古の奴が凄い勢いでコツチに向かってくるぞ？

ああ、厄介ごとに巻き込まれちゃった。

早く飯食ってブログの更新しなきゃいけねーのに………。

「長谷川ーーーー！！！！」

「今ココをネギ坊主達が通っていかなかったアルか!？」

「……………あ、ああ。

「近衛をお姫様抱っこしてたのに、神楽坂と一緒に凄い速さでアツチに走ってっただぞ。」

「教えてくれてありがとうアル！」

「ネギ坊主！ 勝ち逃げは許さないアルよ！！！！」

ドドドドド、とすげえ勢いで走っていく古。

「だから何で生身の人間があんなに早く走れるんだよ!？」

「それに“勝ち逃げ”？ あのガキが中武研部長のデタラメな古に勝ったってのか？」

「すみません、長谷川さん。」

「ご協力感謝します」

「……………あー、いえ。別に……………」

古が立ち去ってからヒョッコリ出てくるこのガキ。

いや、そのために隠れていたんだからしょうがないんだが、それでも何故かむかついてくる。

相変わらずニコニコと、いつも変わらない表情しやがって。

「しかし、ええんかな？

くーへ怒ってたで？」

「ネギの言ったことはわかるけど、はつきり言ってトンチの類よ」

「ま、大丈夫ですよ。」

古菲さんは勝ち逃げと認識されてるみたいですから、予定通りに次の目的地へ行けば古菲さんは怖くないです」

トンチ？ ああ、それならわかる。

どーせこのガキが赴任初日に鳴滝姉妹を嵌めたように、単純な古を嵌めたんだろ。」



「……………あー、もう行っていいですかね？」

「あ、ありがとうございます、長谷川さん。」

「……………僕達これから昼食なんですけど、もしよろしかったら一緒にどうぞですか？」

「いえ、結構です」

お前達なんかにつき合っていていられるかよ！

私はさっさと飯食って帰ってブログ更新すんだ。この理不尽さを社会に、大衆に訴えるんだよ！

「ちょうど臨時収入があったので奢りますよ。まだあまり長谷川さんとはお話出来てませんでしたし。」

どうせ明日菜さんと木乃香さんには案内のお礼にご馳走させていただきます。ただこうと思っていましたので、助けていただいた長谷川さんもよろしかったら是非どうぞ」

「うお！？ 食券200枚ぐらい持ってやがる、このガキ！？  
どうやってそんなに手に入れた！？」

「うっわー、ネギ太っ腹あ。  
何でも頼んでいいの？」

「ありがとなー、ネギ君」

「こつこつあぶく銭はパーツと使った方がいいですからね。食べられるんなら構いませんよ。」

食べてみたいところがあるので先ずはそこへ行きますが、そのあとは甘味処巡りでも何でもお付き合いします。

あ、ただし、食べきれない分まで頼むのはナシです。もったいないですからね」

……………ぐ。

普段はカロリーメイトなんかで過ごしているが、旨いものが嫌いなわけではない。

しかもこの前買ったコスプレ材料を奮発したせいで、最近はお口くなもの食ってなかったしなあ……………。

てゆうか、本気で腹減った。

飯食いに外に出てきたのに……………。

「グウウ~~~~」

「「「あ」「」」

屈辱だ！

こんな状況で腹を鳴かすなんて、どこの腹ペコキヤラだよ！？

くっ、消すしかない。

もはやこいつらを殺るしか……………。

「どうですか、長谷川さん？

古菲さんもまだ辺りを探し回っているでしょうから、一緒に安全な所に行きましょうよ」

……………そうだな、まだ古の奴がうろついているかもしれんな。

しかも私がこいつらの手助けをしたとバレたら、面倒なことになりそうだ。

だったらしょうがない、よな。

「……………で、超包子ですか？」

「ええ。」

茶々丸さんや四葉さん達に誘われていたので

「いらっしやいませ、ネギ先生」

「……………よりもよって超包子かよ!？」

確かに旨いものは食べるが、超包子なのかよ!？」

そもそも中学生が何で屋台を経営出来るんだよ!？」

「……………しかも、だ。」

「……………あの、ネギ先生。  
古がずつとコツチを睨んでいるんですが？」

「大丈夫ですよ。」

元々古菲さんはここでウェイトレス兼用心棒としてアルバイトして  
る上、四葉さんがいるのなら滅多なことになりません」

なんでこのガキはこんなに平然としているんだよ！？

古のあの目は明らかに殺る目してるだろ！？

てゆーか、古に手招きすんな！ 「一緒に昼食どうですか？」と  
か聞いてんじゃねえっ！

「……………これがネギ坊主の護身術アルか？」

「そうですね。」

護身術の基本は“危険なところに近寄らない”、“安全な場所に  
いる”ですからね」

「アハハ、そうネ。」

そういう意味では確かに超包子<sup>コ</sup>は最高に安全な場所アルよ」

ハッハッハ、と笑いあう2人。  
……やっぱり飯に釣られるんじゃないやなかつた。

「ま、とりあえず注文しちゃいましょう。  
長谷川さんが「ワケがわからないよ」みたいな顔をしていますので、  
その間に説明しましょうか。」

古菲さんもお好きなものをどうぞ。たまにはアルバイト先の客になるのもいいのではないですか？」

「……わかつたアルよ。負けは負けネ。今更どうこう言ったりしないアル。」

でも、さすがにこれはどうかと思うアル」

古が一枚の紙を差し出したが、そこに書かれていたのは

「護身術真髓“逃げるが勝ち”」

だつた。

……このガキ、逃げたんか。

「ネギ坊主は酷いアル。」

最初の試合は良かったけど、その次のは戦いとは呼べないアルよ」

「私から見たら、最初の試合もよくわかんなかったんだけどね。」

「10分の間あんまり動きはなかったし、結局ほとんどが睨み合いだったでしょ？」

「しかもネギは杖を使ってたけど、くーふえは素手だったじゃない」

「確かにそうアル。しかし、ネギ坊主の修めている技はあくまで“護身術”。」

「私が仕掛けようとしても全て出足を潰されてしまっていたアル。」

「あのまま続けていてもネギ坊主を捕まえられなかったアルね。」

「一方のネギ坊主はこれが“試合”じゃなかったら、大声で助けを呼ぶだけで良いアルね」

「ふーん、くーへから見たらネギ君って強いんかな？」

「うーん、10歳ということを考えたら凄いなと思うアル。」

「でも、あくまで10歳の男の子だから、女でも14歳の私の方が身体能力は上アルね。私が負けたのは相性の問題と武器の有無、あとは私がネギ坊主を甘く見てたことアルよ。」

「私としてもあの戦いは良い勉強になったアルよ」

なんだよ、このガキ結局は古に勝ってたのかよ!？  
まあ、ガチンコ勝負で勝ったのとは違うし、武器有りて古も甘く  
見てたらしいからありえなくはないのか。

「おかげで食券儲けさせて頂きました。

古菲さんに賭けてた中武研の人達にもお礼を言っておいてくださ  
い」

「それで食券をそんなに持ってたんですか。自分が勝つ方に賭ける  
なんて……………」

それに教師が賭け事していいんですか？」

「アハハ、自分が負けるのに賭けて、わざと負けるとかじゃないか  
らしいんですよ。

というか、僕に賭ける人はいなかったなので、賭けが不成立になる  
ところでしたし。」

教師が賭け事云々は耳が痛いですが、期末テストで2 - Aが1位  
をとることに一点買いますので多めに見てください。

それに僕はイギリス人ですし」

ああ？ 日本人だろーがイギリス人だろーが関係無……………  
そっか。



このガキってイギリス人か。

イギリス人だったら“クリスマスに雪が降るかどうか？”すら賭けにするぐらいの賭け好きなんだった。ブックメーカーってやつだったな。

賭け事に嫌悪感抱かないのは国民性の違いかね？

「最初の試合は私の負けで納得済みアルよ。  
けど次のコレはどういうことアルか？」

「まあなあ。いきなりネギ君が「わかりました。そこまで言うなら護身術の真髓をお見せしましょう。準備があるので更衣室をお借りします。明日菜さんと木乃香さんは手伝ってください」なんて言うたのに。

更衣室に行って置手紙用意したと思ったら、いきなり窓開けてそこから逃げだすんやもん。

アレにはビックリしたわ」

「いやあ、身を守るための護身術ですからね。そもそも戦う必要がなかったのなら戦いませんよ。

僕も身体を動かすのは好きですし、誰かと競い合うのは嫌いというわけじゃありませんけどね。

でも、あそこで逃げておかないと、何試合もやる羽目になりそうでしたし」

「……………」

「あー、確かにそうだったわね。」

「くーふえの目がキラッキラに輝いていたもん」

「むうーっ！ わかったアルよ。」

「ネギ坊主、また日を改めてなら戦ってくれるアルか？」

「程々にお願ひしますよ。」

「僕も仕事があるので」

「……………」  
「やっぱり変なガキだ。」

「こいつ年齢詐称してんじゃねーのか？」

「……………」  
「あの、ネギ先生。」

「前から聞きたかったんですけど、何で10歳なのに麻帆良で教師をやってるんですか？」

「ん？ んー、複雑なようで単純な話なんですがね。」

「大人達の事情に巻き込まれたんですよ。」

僕の父も業界では結構な有名人でして、僕はその後継者と期待されているといいますか、無理矢理にでも後継者にして自分達に都合のいい客寄せパンダにしそうな大人達がいるんですよ。

で、その自分を引き込みたい大人とか、そういうことに巻き込またくない僕の祖父でもある学校長とか、そもそも常識を勉強させなきゃマズイと思った大人とかの、いろんな大人達の事情と思惑が絡み合った結果ですね。

まあ、引き受けたからには精一杯務めるつもりですけど」

いきなりヘビーな話になりやがった。

このガキはこのガキで結構苦労してんだな。

「元々僕も日本に興味があったから、特に文句もつけませんでしたけどね。」

父が京都に住んでいたことがあったらしいですし、タカミチからも日本の話を聞いて興味を持ってましたし、ジャパニメーションも見てましたからね。

でも、麻帆良のようなアニメみたいな町に住むことになるとは思っていませんでしたよ」

.....アニメみたいな？

「ネ、ネギ先生が予想してたような日本とは違ってたんですね？」

「予想していたといいますか、少なくとも茶々丸さんみたいな口ポツトと会えるなんて思いませんでしたねー。」

さすが日本です。僕の住んでいた田舎とは違いますね。

麻帆良はまるでジャパニメーションに出てくる町のようです。まさかこんな町が現実にあるなんて思いませんでした」

このガキ、アニメと現実がゴツチャになってやがる！？

あ、このガキにしたらゴツチャじゃなくて、アニメみたいな現実が実際にあつたということなのか！？

「そ、そうなんですか。」

「……………でも、日本の中では麻帆良も結構変わってる方ですよ。ア

ハハ……………」

「まあ、日本も広いですからね。ところ変われば学校も変わってくるでしょうね。」

けど僕の住んでいたところに比べれば、麻帆良でも麻帆良以外でも大きく違っているということには変わりないですし」

「ネギ君住んでたトコってどんななの？」

「自然に囲まれたところ、と言えば聞こえはいいですが、実際は自然しかない田舎ですね。

どのくらい田舎というと、そうですねえ……………。

あ、僕が日本に来るためにロンドンのヒースロー空港から飛行機に乗ったんですけどね。

そのとき初めて“エレベーター”に乗りました！」

田舎モンだ！

間違いなくこのガキは田舎モンだ！！！

ま、まさかこのガキ。

元々はマトモで麻帆良に違和感を感じていたのに、「日本って凄いなあ」で終わらしてたのか！？ 「都会って凄いなあ」で納得してたのか！？

……………有り得る。

このシツカリしていそうだけど、根っこは素直すぎるこのガキなら有り得る。

「それとまさか、本当に忍者がいるなんて思ってもいませんでしたね。」

頼んだら“分身の術”とか教えてくれませんかねえ？」

「あー、本人は否定しとるけどなあ」

「え？ 楓ってば本気で隠している気なの？」

畜生！ そうだよな！

忍者がまだいるって本気で信じている外国人もいるらしいからな！

実際にそういうの見たら信じちまうよな！

“分身の術”なんか出来るわけねーだろーがっ！！！！

マ、マズイ……………。

このままじゃ、このガキの中では麻帆良が普通に分類されちまうぞ。

へビーな事情で日本に来た上、こんな異常な所を普通と思い込  
じまうなんて、いくらなんでも不憫すぎる！

将来、このガキどうなっちまうんだよ！？

だ、駄目だ、このガキ。  
早く何とかしてやらないと……………。

「ネギ先生、お待たせしました。杏仁豆腐です」

「ありがとうございます、茶々丸さん」

平然とロボットから杏仁豆腐を受け取ってるんじゃないか！  
あんなロボットがいるなんておかしいと思わねえのかよ！？

……………無理だよなあ。まだガキだもんなあ。

小さなガキに当たり前のように麻帆良を見せ続けていたら、麻帆良を普通と思いつまじまうよなあ。

ムキ……………ッ！

私の普通の学園生活を返せっ！！！！

これ以上、このガキを理不尽に汚染するなあっ！！！！

第十五話 部活巡り（後書き）

やっべえ、ちうたん書いてて楽しいw

何だかんだ言ってるちうたんは面倒見がいいので、理不尽なことに巻き込まれている純真な子供がいたら見て見ぬ振りは出来ないですよw

しかし実際のところ、その純真な子供は理不尽に巻き込まれているどころか、逆に理不尽な権化とも言うべき存在なのが残念なのですが。

ちうたんをどうしようかと迷ったのですが、放っておくことも、裏のことを教えるのもこのネギらしくありません。

ということ、裏のことを教えないまま味方になってもらうことにしましたw



## 第十六話 恋する乙女

綾瀬夕映

「のどかには積極性が足りないのよっ！」

「え？ ええ〜？

そ、そんなあ〜」

「ハルナ。

のどかにはのどかのペースがあるのです」

「甘い、甘いよユエっ！」

ネギ君みたいな優良物件。そんじょそこらにいるわけないわ！

気を抜いてると、他にとられちゃうわよー！」

ハルナには困ったものです。

どう考えてものどかの性格では、積極的にネギ先生にアタックするなんて無理ではないですか。

「いや、でもね。本当にネギ君は人気あるよ。  
シヨタコンのいいんちよはともかく、一緒の部屋に住んでる木乃香とアスナはもう家族とっていいぐらいの仲になってるしねえ。  
他にも武道四天王であるクーちゃんや刹那さん、龍宮さんもネギ君には一目置いているし、あまり他のクラスメイトと関わらないエヴァちゃんや茶々ちんでさえネギ君とは話すんだよ」

「そつえば、ネギ先生はクーえさんに試合で勝つたらしいですね。」

次に戦つたらわからないとは言つてましたが……………」

「ネ、ネギ先生せんせいって強いんだあ。

私を助けてくれたときも凄かつたし……………」

確かにネギ先生は人気ありますね。

木乃香さんはネギ先生を弟みたいに可愛がっていますし、アスナさんは凄く落ち込んだときにネギ先生に励ましてもらったらしく、元気になってからはネギ先生とはとても親密になっています。

私は恋愛はまだよくわかりません。

私にとってネギ先生は、妙にこましゃくれた子供という感じなの

ですけどね…………。

確かにネギ先生が担任補佐となつてから、私を含めて皆の成績が順調に上がっていつてます。

ネギ先生に勉強をすることとしないことについてのメリットとデメリットを一つずつ述べられ、それで最終的に勉強することを私は選びました。

確かに補習や居残り授業で読書の時間や図書館探検部の時間を削られるぐらいなら、最初から勉強して補習や居残りを避けるようにしますよ。

しかし、逃げ場を塞がれた後で各々の自主判断に任された、というような手法をとられた感じがするのです。

もともと選択肢が一つしかなかった。でも、自分の判断でそれを選んだことにされた。

そんな気分なのです。

「だから！

のどかにはもつとネギ君に積極的にアタックしないと、担任補佐しているクラスの生徒の一人としか見てくれないわよ！」

「い、いいよ。」

私はネギ先生せんせいとお話出来る今のままで十分だよ」



「委員長さんもですか……………」。  
となると、ウチのクラスのことですから、きっと他にもネギ先生とお風呂に一緒に入ろうとするのはいるでしょうね」

「で、でも、混浴だなんて……………」

「私達も一緒に行つてあげるからさ」。

じゃあ、とりあえず水着持つて大浴場行つてさ、他にもお風呂入ろうとしてた人がいたら、のどかも入るってのはどう？」

……………フム、そこら辺が落とし所ですかね。

はしたないことをすればネギ先生に引かれる恐れがありますが、のどかの性格を知っているネギ先生なら、周りで騒いでいるクラスメートに引つ張つてこられたと思つてくれるでしょう。

それにこの一件を見逃して、ネギ先生と他の人の親密さが更に上がってしまうと、のどかが入り込む隙間がなくなってしまう。

「それなら大丈夫ではないですか？」

最悪の場合はハルナにせいによければいいだけです」

「ちよつ！？ ヌエ酷いつ！？」

「( )で？ やっぱいいんちょも来たんだ？」

「な、何のことですか!？」

私はただお風呂の時間がいつもより遅くなってしまっただけですわよ!」

「( )大声出すとネギ坊主に気づかれるでござるよ)」

やっぱり多いですね。

委員長さんを始めとして、長谷川さん、鳴滝姉妹の2人、楓さんに千鶴さんとナツミさんがいました。

私達3人を含めて10人ですか。クラスの三分の一がここにいますね。

「( )それにしても、千雨さんがこんなことに参加するとは思ってい

ませんでした)」

「……………いや、いいんちよ見てたらネギ先生が心配になってな。

鳴滝姉妹は長瀬が手綱を取ってくれそうだが、いいんちよが暴走しそうで……………」

「(そのときは千鶴さんをお願いするしかないです)」

「(てゆーか、早乙女の面倒はお前がみとけよ!)」

……………きっと大丈夫だと思います。

ハルナはきつとのどかのために頑張ってくれているのだと思うのです。

「何をやっているんだ貴様ら？」

風呂で水着なんか着て？」

エヴァンジェリンさん！？ また増えたのですか！？

これ以上増えないように“ネギ・スプリングフィールド入浴中”という張り紙を、“立ち入り禁止”と改竄しておいたのに……………。

「(え? なになに?)」

エヴァちゃんもネギ君とお風呂入りに来たの!?)」

「? 何のことだ?

ネギがここの風呂を使っているのか?」

「(と、とりあえず声を小さくしてください!)」

知らないのに“立ち入り禁止”を無視して入ってきたのですか。水着を持ってきていないようですし、本当にただの偶然みたいですね。

エヴァンジェリンさんは寮外に住んでいるのに、たまにこの大浴場を使いに来るんですね。

「(あ、ネギ先生の服を発見したよ!

丁寧に折り畳まれてるのがネギ先生らしいよね。

……………ネギ先生ってトランクス派なんだ)」

「(お姉ちゃん! 駄目だよジロジロ見たら……………)」



「(ネ、ネギ先生の下着……………」

「(ちょ！ コラ、いいんちょ！

鼻を押さえながらネギ先生の脱衣カゴに近づくんじゃねえ！

さすがにそれはヤバイぞ！ 那波と村上もいいんちょ押さえろの手伝え！

長瀬は鳴滝姉妹を押さえとけ！」

「(あいあい。

ホラ、少し落ち着くでござるよ)」

「(アラアラ、あやかったら)」

「(ち、ちづ姉、いいんちょの目がヤバイよ)」

何ですか、この混沌は……………。

こんな面子ではのどかがネギ先生にアピール出来るのでしょうか？

というか、委員長さんと楓さんと千鶴さんのビキニ姿がマズイです。

あの3人はスタイルも良く、かなり露出が多いビキニを着ていま

す。

ネギ先生もやはり男の子なので、ああいう格好が好きかもしれません。

というか、ハルナ！

あなたも大胆なビキニ姿になってるんじゃないありません！

あなたはのどかの応援のほうでしょう！

「（や、やっぱり私なんかじゃ……………」

「（大丈夫です、のどか！

のどかの水着は委員長さん達とは違う魅力があります！）」

のどかの水着はセパレーツタイプの水着です。

露出が多いわけではありませんが、清纯そうなのどかに似合う可愛らしい水着でしょう。

さあ、勇気を出してネギ先生にアピールするのです！

「フン、まあいい。私は風呂に入りに来ただけなんだ。

先に入らせて貰うぞ」

「って、少しお待ちを！」

エヴァンジェリンさん水着はどうなされたんですか!？」

「風呂に水着なんか持ってきてるわけなからう。」

「10歳のガキに裸を見られても、別に何とも思わんしな」

「全裸!? 更なる勇者が!？」

風呂に水着を着ないで入るなんて、どんだけ凄い勇気をお持ちなんですか!？」

「さすがにそれはマズイです！」

「(べ、別にお風呂に水着を着ないで入るのは普通じゃないかな?」

「(そういう問題じゃないよ、のどか！」

「(ここはのどかもエヴァちゃんに負けないために全裸で………)」

「(のどかに何を言ってるですが、ハルナ~~~~!)」

「……………騒いでないで、入るならさっさと入ってきなさいよ。  
あんたら」

「あー、やっぱりネギ君の言うとおりに皆入ってきたな」

アスナさんに木乃香さん……………。  
まあ、あんなだけ騒げば気づかれますか。  
というか、何で風呂場のほうから出てくるのですか!?

「ど、どういうことですか、お二人とも!?  
まさか既にネギ先生と入浴なされていたなんて……………。  
抜け駆けですか!？」

「抜け駆けも何も、ネギに頼まれたのよ。「おそらくクラスの人達  
が大浴場に乱入してくるでしょうから、抑えのために一緒に大浴場  
に来てくれませんか?」ってね。

「10人も入ってくるとは思ってたみたいけど」

「ちなみにネギ君も水着をちゃんと着てるで」

……………う。

さすがはネギ先生。私達のことをよくわかっているのです。

ちなみに明日菜さんと木乃香さんは私と同じ、学校指定のスクール水着でした。

他にも千雨さんとナツミさんと鳴滝姉妹もスクール水着です。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

……………おんぶされたときに身体を触ってわかっていたが、改めて見るとネギの身体はなかなかガツシリとしているな。

もちろん子供特有の柔らかかそうな身体も同時に持っており、大人

と子供の身体両方の良い所を合わせたような身体だ。

やれやれ。

本当に広い風呂に入りに来ただけで他意はなかったが、良いものを見ることが出来た。

くっくっく、数年後が楽しみだな。

「エヴァさんて、髪の毛本当に長いですね。

そんなに長いと洗うのも大変ですね」

「まあな。

いつものことだから慣れているが、それでも時間はかかるな」

結局、茶々丸に水着を持ってこさせたが、それでよかったな。  
ネギは何だかんだで紳士だから、水着を着ていないとコツチを見ようとしてもしなかっただろうから。

「……………よし。髪を洗うのを手伝え、ネギ」

今日はせっかくだから、ネギに髪を洗わせてみよう。

先日、インフェルナス・スコロステイクス『登校地獄』解呪の研究のために家に来たネギに、「体育の時間に捻った」と言って足をさすらせたのは良かった。

もちろん私は椅子に座って足を組んでネギに足を差し出し、ネギは私の前に跪いて足をさする体勢だ。

他に足をさすらせるための良い体勢がなかったから仕方あるまい。

正直、興奮した。

『マイティガード咸卦治癒』を発動させ、跪いて私に奉仕するネギ。

久々に至福な一時を過ごせた。思い返すだけで顔がニヤついてしまった。

膝を擦りむいていたとしたら、「舐めて治せ」と言えたのに残念だ。

何も知らない純真な子供にああいうことをさせるのは、背徳感で背筋がゾクゾクするな。

そういえば、茶々丸はあの子供の映像を録画してたかな？  
してたら映像を後で見せてもらおうとするか。

ああ、ネギを早く私のモノにしたい。  
といっても、ナギのときみたいに焦ったら駄目だ。

今の時点でネギに「私のモノになれ」と言っても、おそろく反発するだけだろう。

ネギは天邪鬼っぽいところがあるからな。

だから、ネギの方から告白させる。

ネギの性格だと、コレと決めた女には一途な想いを貫く。  
例え私のような忌避される存在だとしてもな。

我儂な性格ゆえに、惚れた女を我儂に愛するだろう。

ああいう我儂な猫みたいな子供を私好みの男に育て上げ、ネギの方から「貴女のモノにしてください」と言わせる。

何ともやりがいのあるゲームではないか。

しかもいろいろとやりすぎてしまったら、ナギのときは封印されるだけで済んだが、ネギの場合だと私の命が危なさそうだ。

だが、それがいい。

このゲーム、ナギを私のモノにするよりも難しそうだ。くっくっく。



「どうした、ネギ？」

特別に私の髪に触らせてやるっ」

「オホホホホ、何を仰るのですかエヴァンジェリンさん。

髪が洗うのが大変だと仰るのなら、私が手伝って差し上げますわ。  
風香さんと史伽さんも手伝ってくださいな」

「はい、いんちよ」

「手伝ってあげるね、エヴァちゃん」

「ちよ！？ 待て！？」

貴様らには頼んでおらん。

というか、お前の顔に夜叉が見えるぞ、雪広あやか！

「殺してでも かみをあらっ」

「なにをする きとまらー！」

……フウ、広い風呂は良い。

家の風呂はここまで大きくないし、広い風呂のために別荘へわざわざ行くのも億劫だ。

だからたまに、この女子寮の大浴場を利用している。

「それにしても、ネギって風呂好きよね。

ちゃんと朝晩2回シャワー浴びてるし」

「いや、実のところあそこまでしなくても平気なんですけどね。

前はキャンプで2、3日お風呂に入らないとかよくありましたし」

「あー、外国人はそうだっていうやね」

「え？　じゃあ、何であんなに頻繁にシャワー浴びるの？」

「日本人は清潔好きと伺っていたからですよ。しかも女子中学生の相手をするんですからね。そりゃあ清潔さには気をつけますよ。」

皆さんから「臭い」とか言われたらショックですし」

そういうところは紳士なんだよなあ。

足をさすらせたときも私がミニスカートだったから、すぐさま着ていた上着を膝に掛けられたし。」

「いやあ！ それにしてもネギ君は幸運だね！

こんな美少女達とお風呂に入れるんだから！」

「ハハハ、そうですね。」

水着も似合っていて、皆さん綺麗です」

「それじゃあさ！

この中で一緒に海とかプールに行くとしたら、誰が良い？

あーっと、スクール水着の人は除いてね。誰の水着姿とデートしたい？」

「ハ、ハルナだったら、いきなりネギ先生せんせいに何言ってるの……………」

「あや？ やつたらちゃんとした水着を着てくればよかったわあ」

ム？ となると、候補は私と宮崎のどか、雪広あやか、長瀬楓、  
那波千鶴、早乙女ハルナの6人か。

……………私の勝ちだな！

宮崎のどかはともかく、後ろの4人のような露出が多い水着をネ  
ギは好まんはずだ。

「え？ えーっと、そうですねえ。

皆さんお綺麗ですけど、エヴァさんか宮崎さんですかね」

「そ、そんな!？」

「アラアラ、残念ね。あやか」

「振られてしまったでござるよ」

「よかったですね、のどか」

「はわわわ……………、ネギ先生<sup>せんせい</sup>……………」

フハハハハ、そうだろうそうだろう。

宮崎のどかも選ばれたのは気になるが、先に名前を呼ばれたのは私の方だ！

「ありやー、残念。

でも、どうして？ ネギ君てこついうビキニは嫌いななの？」

「いえ、別に嫌いというワケじゃないですよ。皆さん良くお似合いですし、他にどんな水着が良いかと聞かれれば困ってしまいます。でも、海やプールでデートってことは、他の男性にも見られてしまうことになってしまっじゃないですか。

僕だったらデートする相手がいやらしい目で見られるのは嫌ですね。僕って結構独占欲強いので」

「まあ！ 嫌ですわ！

ネギ先生つたら、オホホホ……………」

「お！ 言っねえ、ネギ君！  
やっぱりネギ君も男の子だね」

……。

……。

…… 肉体年齢は10歳のままなんだよっ！

おのれっ！

幻術さえ使えばこのようなことには……！！！！

「……つまり私のことは見られても構わないということか、ネギ  
」？」

「そ、そんなんですか……、ネギ先生<sup>せんせい</sup>……？」

「いえ、そういうことではないですよ。エヴァさんも宮崎さんとも  
ても可愛らしいです。」

むしろ一緒に歩いて周りの人達に自慢したいですね。「僕はこんな可愛い女の子とデートしているんだぞ」って」

「え？ えへへ……………」。  
「そんなあ、ネギ先生せんせいつたら……………」

なるほど、そういうことか。  
それなら許してやらんでもない。

「いい女を侍らすのはいい男の証だからな。  
ネギがそういう思いを抱いても仕方あるまい。  
そしていい女の全てを知っているのは自分だけでいいということか。」

くっくっく、やはりネギは将来、悪い男に育つだろうな。

「……………素でこれなのかよ。  
このガキは天然ジゴロか……………？」

何をブツブツと言っている、長谷川千雨。

さて、これからどうやってネギを私好みの男に育てていこうかな？

とりあえず『インフェルナス・スコラスティックス登校地獄』呪いの研究のために家に定期的にやってくるから、仕掛けるとしたらそのときだな。

あとは私の別荘に招待しておいて、いつでも好きなように使ってもらっていいと言っておくか。名目は研究のためとしてな……。

そうすれば煮るなり焼くなり私の好きなように出来る。

くっくくく、感謝するぞ、ナギよ。

『インフェルナス・スコラスティックス登校地獄』を解かずに死んだと聞いたときは恨んだが、最高の置き土産を残していつてくれた。

お前がしてくれなかったことは、お前の息子にしてもらうことにしよう。

恨むのならネギを置いて死んだ自分を恨むがいいさ。  
ハアアアハアハアハアハアハアハアハアハアハ!



## 第十六話 恋する乙女（後書き）

ちなみにエヴァの水着は単行本11巻のワンピースの水着です。

そしてナギが生きているということはまだエヴァには言っていない。  
ん。

今でも十分良い関係を築けているし、そもそも原作のように直接会ったわけではないので説得力に欠けると思っているからです。

作者的に、エヴァならこういうこと考えそうだなあ、と思ったんですが、いかがでしたでしょうか？

そして作者はトランクス派です。  
え？ そんなことはどうでもいい？

第十七話 バレンタイン？ 乙女達の想い

神楽坂明日菜

……………目が覚めた。

ハア、今日は新聞配達が休みの日だっていうのに、いつもの時間に起きちゃったわ。習慣って怖いよね。

どつせなら、バイトの日にこうやって自然に起きられればいいのに。

「……………」

そして目の前には、ネギの頭がある。

私の腕はネギを抱き枕のようにガツチリと抱きしめている。

……………あの日から、ずっとネギを抱き枕にしてるわね。

いい加減にやめようと思っただけど、ネギの温もりが気持ち良くてやめることが出来ない。

ネギには迷惑かけちゃったわねえ。

最初の日なんて、私が寝付くまでずっと背中をポンポンと優しく叩き続けてくれちゃってたさ。

10歳児に甘えるなんて、やっぱりかなり参っちゃってたのよねえ。

ネギがいてくれて助かったわ。

さすがに木乃香と一緒に寝てくれるように頼むなんて出来ないからな。

そういえばネギのことなんだけど、少しわかったことがある。

夜寝るときは私の方へ顔を向けている状態だったとしても、朝になると私に背中を向けている状態になっているのよね。

コッチ向いて寝るのは恥ずかしいのかしら？ 寝る場所を左右入れ替えても、いつの間にか背中を向けてるし。

そしてこの状態でギュッと抱きしめると、寝苦しいのか腕の中から逃げ出そうとする。

ここで抱きしめるのをやめると逃げ出そうするのもやめるのだが、このまま抱きしめ続ける。

「……………ん、ん……………」

しばらくすると諦めたのか、逃げ出そうとするのをやめる。

そしてネギを抱きしめている私の腕に手を重ねてきて、逆に私の方へ頭を擦りつけてくる。

「……………ん……………」

そしてまだギュッと抱きしめ続けていると今度は私の方へ振り向いて、甘えるように抱きついてくる。

実を言うと、この甘えてくるような感じのネギの顔が可愛くて好きだ。

いつもは教師をしているためかニコニコと変わらなく笑っているような表情をしているけど、この甘え顔を見ていると作っているような笑顔だったと感じちゃった。

まあ、10歳で教師をするんだから、多少は表情を作るだろうけどね。

だけど、このときばかりは本当に年相応のあどけない顔をして甘えてくるのだ。

エへへ、可愛いなあ……………。

…………… いんちよみたく、シヨタコンじゃないんだけどなあ。

私が好きなのは高畑先生みたく、大人の男性な筈なんだけど……………。

…………… ハア、高畑先生。

私って、“大人の男性が好きだから高畑先生を好きになった”んじゃないくて、“高畑先生が好きだから大人の男性が好きだった”みたいね。

渋いオジサマを見ても近頃は全然ドキドキしないし。

きっと渋いオジサマに高畑先生を重ねて見ていたからドキドキしていたのね。

ああ、もう！ どうしたらいいのかしら！？

「……………ん、ん……………」

あら、いけない。

ちょっと強く抱きしめすぎたかしら？

ごめんね。よしよし……………。

「……………ん……………」

……………うう、もうシヨタコンでもいいかなあ。

高畑先生はどうせもう無理なんだし。

あんだけ喧嘩してたいんちょには激怒されるかもしれないけどね。

いつまでもこのままじゃいけないのよねえ。ずっとネギに甘えてるわけにはいかないし。

それでも、もう少しばかりこの温もりを感じていたいわ。

さすがにあの恋の終わり方はシヨックだったし……………。

………三年生、三年生になったら本気を出すわ。  
だから、もう少このままで………。

近衛木乃香

「それでは、これより臨時2 - Aクラス会議を行ないますわ！」

「いきなりクラス会議って何なのよいいんちよ？」

「しかも高畑先生もネギ先生もいないじゃん」

「高畑先生にお願いして、2時間ほどネギ先生を教室に近づけないようにしていただいています。」

今日の会議の議題は、間近に迫った“バレンタインデー”についてです！」

確かにバレンタインデー近いなあ。

でも、いきなり放課後に残るように言われたけど、そのバレンタインがどうしたんやる？

それと毎年高畑先生に渡すアスナのチョコ作りの手伝いしてただけど、今年はどないする気なんやるか？

「はーいつ！ 私はお父さんとネギ君に渡しまーす！」

「あーっ！ ゆーなズルーイ！」

私もネギ先生に渡すーっ！」

「のどか、チャンス到来です。  
バレンタインで勝負に出るのです」

「は、はわわわわ……………」

「静粛に！ 静粛に！」

そのバレンタインデーに対しての会議ですわ……！  
長谷川さん！ 説明をお願いしますわ……！！」

「わ、私かよ！？」



いいんちよからしろよ……………」

「発案者は長谷川さんでございましょう」

？ なんなんやろ？

ウチもネギ君と一応おじいちゃんに渡して、他の皆にも配ろうかな。

そ、そしたらせつちゃんにもチョコを自然にあげれるし……………。

「あゝ、わかったわかった。

発端はいいんちよがバレンタインに企んだ企画だ。

いいんちよはネギ先生のために麻帆良で一番有名な洋菓子店を貸切にして、ネギ先生をそこに招こうとしてたんだよ……………」

「え〜〜！

いいんちよズルイよ。バレンタインデーにネギ先生を独り占めしようなんて……………」

「てゆーか、一番有名な洋菓子店ってどこの？

私達も招待してよ〜」

「わ、わかっておりますわ！  
ですからこの場で皆さんと会議をしているのでしょー！」

「……………話し続けていいか？」

いいんちよがそういうことを企んでいたとすると、クラス全員が何かしら企んでいるんじゃないかと思つてな。そうじゃなくてもネギ先生にチヨコ渡すような奴が大半だろう。

それでだ、例えば日持ちしないチヨコケーキなんかをクラスの皆からたくさん渡されたとしたら、その場合ネギ先生ならどうすると思つ？」

あゝ、なるほどなあ。

そういうことかいな。

「きつとネギ君なら、無理してでも皆の分食べるやろうなあ」

「だろうな。ネギ先生は生徒から貰ったモン捨てるようなことは出来ないだろうし。

まあ、貰う量にもよるだろうが、ヘタしたら食いすぎで腹壊すだろうな」

「そんなことあつてはなりませんわ！」

ですのぞ！ バレンタインデーは2・A全員で抜け駆け無しの子

ヨコレートパーティーを開くことにいたします!」

「落ち着け、いいんちよ。」

バレンタインデー当日はきつとこないいいんちよみたく、騒ぎが大きくなって収拾が収まらないようになるだろうな。

しかもコトが大きくなればなるほど、ネギ先生のホワイトデーの負担がでかくなってくる」

「そうねえ。」

ネギはそういうところは生真面目だから、へたしたら“3倍返し”をマトモに信じるかもしれないわね」

「さすがにそれは可哀想……………」

「そういつことならチヨコレートパーティーに賛成〜!」

「ムウ、せつかくのどかのアピールチャンスだったので、そういう事情ならば致し方ないと思うのです」

「そ、そうだね。」

ネギ先生がお腹壊したりしたら嫌だもん……………」

そういうことならウチも賛成やわ。  
ネギ君の歓迎パーティー以来、特にそういうのやっておらんかったから丁度ええなあ。

「というわけで、役割分担を決めるぞ。

まあ、“当日のパーティーの準備をするグループ”、“2、3日は持つチョコを作るグループ”、“長期保管出来て、仕事中にもつまむことの出来るチョコを作るグループ”ぐらいでいいと思うが」

「そうですね。

せつかくのバレンタインですので、パーティーの他にもチョコレートを渡すべきでしょう」

「とりあえず、四葉とか超みたいに料理上手なのと、私みたいに料理に自信無いのに別れてくれ。

それからくじ引きで料理上手がそれぞれにちゃんと入るようにしよう。全員が飯マズだったら悲劇だからな」

「人数はどうするの?」

「バレンタインデー当日のパーティー担当グループが20人、残りから人ずつでいいと思う。

パーティーは飾り付けとかもいるだろうし、パーティーでチョコだけってのも淋しいので、他にもクラス全員分の料理を作ったりす

るだろうから20人。

送るチョコを作るグループはたくさん作りすぎて迷惑だろうか  
らそれぞれ5人ずつ」

「そんなところでしょうね。

それにしても長谷川さんには感謝いたしますわ！

こう言っではなんですが、長谷川さんはどこかクラスメイトから  
一歩引いたところがありましたから、積極的にクラスのことを考え  
ていただけるようになって何よりですわ！

ネギ先生がいらしてからバカレンジャーの皆様の成績も上がって  
いますし、本当にネギ先生は2・Aの救世主で……………ま、まさか、  
長谷川さん！ あなたもネギ先生のことを！？」

「ちげーよっ！

ネギ先生のことになるといいんちよが暴走するからだろうが！！！！

(……………クツ、落ち着け。これでいいんだ。

どうせクラスの奴らに自重しろといっても聞くわけがない。

だったらコントロール可能な範囲になるように誘導するまでだ。

いくらなんでも、あのガキが腹壊して寝込んだら可哀想だしな)」

くじ引きの結果、ウチは“長期保管出来て、仕事中にもつまむこ

との出来るチヨコを作るグループ”やったわ。

えーっと、他のグループメンバーは、超りんとエヴァちゃんと千雨ちゃんと、……………せつちゃん。

！！！ せつちゃん！？

……………せつちゃんと同じグループになってもうた。

チャンスや！ ウチもネギ君見習って、せつちゃんに真正面から立ち向かうんや！

「よかつたじゃないか。居残り授業で面倒かけている礼が出来るぞ。  
な、バカホワイあ、桜咲刹那？」

「グハアツ！！！」

「オヤ、死んだネ」

「生真面目な奴ってメンドイな」

せつちやーんっ!?

死んだらアカンーっ!!!

「さて、打ち合わせを始めるネ。

最初に改めて確認しておくけど、料理に自信があるのは私と木乃香サンでいいカナ？」

「私は調理実習レベルだな。

寮でも自炊はしていないし」

「出来んわけではないが、菓子作りは自信があるわけではないな」

「ウチはいつも寮でアスナとネギ君のご飯作っておるえ。ネギ君も手伝ってくれるから、最近は楽になったわあ。」

「チョコ作りも去年まで毎年アスナに付き合っていたから、そこそこは出来るえ」

「……………」

「返事がないヨ。」

「ただのしかばねバカホワイトのようネ」

……………「せつちゃんが落ちこんどる。」

「こんなとき何て言えばいいんやろ？」

「ま、イイネ。」

「なら私と木乃香サンが中心になって作るとして、どっいつの作るのかダヨ」

「やっぱり“仕事中にもつまむことの出来るチョコ”なら、食っても手が汚れたりしないほうがいいな」

「あー、そういうことやな。」

「じゃあ、仕上げにココアパウダー振り掛けたりするのはアカ」



「んなあ」

「となると、銀紙とかで包んだボンボン・シヨコラとかだな。ウイスキーボンボンとかでいいんじゃないのか？」

「……………ネギ先生は未成年ですよ」

あ、生き返ってくれたわ。

よかったあ。あのままだと話しかけることも出来ひんかったからなあ。

「そういえば確認し忘れていたが、ネギ先生って好き嫌いあるのか？ 超包子では出されたモン全部食ってたけどよ。」

他にもアレルギーとか大丈夫か？」

「好き嫌いはウチが知る限りあらへんわ。納豆とかもちゃんと食べるし、生卵も平気みたいやえ。」

アレルギーは……………どうやる？ そういえば確認し忘れてたわ。でも、ネギ君の性格なら最初に言っといってくれるちやうんかな？ 少なくともチヨコレートは平気やで」

「確かにネギは几帳面というか、生真面目な性格をしているからな。」

あつたら事前に言っているだろう。

まあ、一応念のために確認しておいた方がいいな」

「そうやね。ウチが聞き出しておくわ。

そしたら他のグループにも伝えなあかな」

「今や、勇気を出すんや！」

ウチから動かなきゃ一生せつちゃんとはこのままになってまう。

「どんなのがええかな〜。

……………せ、せつちゃんはどんなのがええと思っ!?!?」

「え!?!? ……………わ、私にはわかりません」

「そ、そんな風に言わんと……………」

ウチはただせつちゃんと仲良くしたいだけなのに……………。

いや、諦めたら駄目や。

せつちゃんがウチを避けても、もっと根気よくアタックするんや!

「あ、あー……………」。

ウイスキーボンボンとはもかく、ボンボン・シヨコラというのはいいんじゃないか。まあ、手が汚れるトリュフは駄目だけど、ガナツシュとかプラリネとかならさ。

なあ、桜咲？」

「……………え？ ト、トリュフ？ ガナツシュ？ プ、プラ……………ナリア？」

トリュフというのはキノコなのでは？」

「…………………………」

「……………違っていましたか？」

「……………せつちゃん」

「……………違ってはいないけどネ」

「…………お前、本当にわからないのか」

「…………トリュフは知っているんだな」

「そ、それぐらい知ってます！ 世界三大珍味のキノコでしょう！  
？」

「ちなみに中華三大珍味は“アワビ”、“フカヒレ”、“ツバメの  
巣”ヨ。」

超包子のような普段向けの屋台では出せないけどネ

…………。

…………。

…………ゴメン、バカホワイト舐めてたヨ」

「まあ、チョコレートトリュフは、キノコのトリュフに形が似せているからトリュフと呼ばれているのは事実だがな」

「いや、それでも話の流れ的にわかって欲しかったぞ」

アカン！

「うちの話の振り方がおかしかったせいで、変なことになってもった！」

「まあ、まだ時間もあるし、各々で少し考えてくれればいいヨ。明日また集まって考えよう。」

「私はこれから当日パーティー担当の五月とかと一緒に、チョコとパーティーに必要な材料費についても調べてみるネ。超包子のツテを使えば畑違いの分野の食材でも安くなる手に入るヨ。」

「木乃香サン達はお菓子作りの本で難易度を調べて欲しいネ。チョコ作りはさすがの私でも専門外ネ。」

「それとバカせつな君は少しチョコレート専門店で買い食いしてくとヨロシ。」

「今日はコレにて解散ヨ」

「な……………バ……………？」

「ち、違うんや、超りん！」

「えと、……………せつちゃんは和菓子派なんや……………！」

「……………」

「おい。桜咲が死にそうだからそこからやめとけ。」

「私はとりあえずネットで適当なチョコ作りの仕方を調べておく」

「せ、せつちゃん！

ならウチと一緒に行くろう！ 美味しいチョコ売ってる店知ってるえ！」

「け、結構ですっ！

私に構わないでくださー！っ！っ！っ！」

「せ、せつちゃんっ！っ！？」

……………あ、行ってもうた。

諦めへん！ ウチはまだこんなんじゃ諦めへん！

小さかったときみたいに、せつちゃんとまた仲良くなるんや！！！！

「フン。私は帰るぞ。

何だかチョコの話題をしていたらチョコを食べたくなってきたな」

「……………あー、大丈夫か、近衛？」

「う、うん。ありがとう、千雨ちゃん。」

ウチは諦めへんわ。ネギ君見習ってせっちゃんに真正面からぶつかってみるって決めたんや。

今までみたいに避けられ続けても諦めへん！」

「詳しい事情はわからんから私からは何も言えないが………………。少なくとも今回は、“今までみたいな避けられ方”じゃないことは確かだと思っぞ」

「じゃあ、今日みたいの続けていたらせっちゃんと仲良くなれるのかな!？」

「それはやめておいた方がいいヨ」

「お前、本当は桜咲を虐めたいのか？」

え？……………やっぱりアカンのかなあ？

桜咲刹那

……最近調子がおかしい。

ネギ先生に高校での留年の可能性を言われてからだ。

あれから自分でも周りの環境を気にするようになったと思う。

勉強にも力を入れるようになったし、居残り授業に出ているおかげで授業もより良く理解できるようになった。

759

護衛に力を入れるのは当たり前だが、他のことをおろそかにする言い訳にはならない。

よくよく思えば、護衛を言い訳にして周りを拒絶していたところがあったんじゃないだろうか。

しかし、それではいけないことにネギ先生のおかげで気づけた。留年みたく、護衛をしていく為の前提が根元から崩れるような事だつてあるのだから。

そして周りを気にするようになった分、自分と周りの違いがわかるようになってきた。



それでわかったことが一つある。

私は世間知らずだったのだ。

クラスの皆が休み時間に話していることに聞き耳をコッソリ立てたとしても、半分も理解できない。

今日のチョコレートについてだってそうだ。

確かに和菓子の方が好きだからあまりチョコは食べたことはないが、お嬢さま達の反応を見る限りでは知らないほうがおかしいみたいだ。

……………以前だったらこんなこと気にしなかったのに。

「……………ハア、ネギ先生」

ネギ先生が来てからこういうことを考えるようになった。  
それにしてもあの人は本当に10歳なんだろうか？

模擬戦とはいえ、一人で魔法先生二人に勝てるほどの戦闘力。

私達に勉強を教えられるほどの学力・知識も豊富に持っている。しかも、私と違ってクラスの皆から好かれ、良い関係を築けている。

特にエヴァンジェリンさんでさえもネギ先生を対等な存在と見なしている。学園長でさえも下に見ているであろうエヴァンジェリンさんでさえも、だ。

今までのエヴァンジェリンさんなら、こんなバレンタインの企画なんて参加しなかっただろうに。

ネギ先生を見ていると、私なんかちっぽけな存在に思えてくる。何で10歳という年齢であんなに強くなれたんだろう。

私にネギ先生ぐらいの才能があれば、今よりも木乃香お嬢さまをお守り出来るのに。

.....何を情けないことを考えているんだ、私は？

それもこれも私の努力が足りないせいだろう。

それを才能のせいにしてネギ先生を羨むとは.....、我ながら恥知らずにも程がある！

きつとネギ先生だつて努力してあんなに強くなつたんだ。  
私だつてこれからもつと努力して、いつそう修行を励めばきつと  
.....きつと、そしたら留年しちゃうな。

えー!? ウ、ウチはどないしたらええんや!?

“木乃香お嬢さまの護衛は遂行する”、“護衛に必要な修行もする”。

“両方”やらなアカンのが“護衛”の辛いところや。  
でも、その二つをこなす覚悟ならあつたんや。

せやけど、“勉強”もせなアカンのはいくらなんでも無理やわ。  
今の“護衛”と“修行”だけでも大変やのに、“勉強”もやなん  
て.....。

アカン。やっぱりネギ先生の才能が欲しいわ。  
“強さ”の才能はええから、せめて“勉強”の才能だけでも欲しい。  
い。

.....ああ、ウチはどないしたらええんや?

た、助けて。ネギ先生……………。

「……………ハア、ネギ先生」

「はい、何ですか？」

「ヒヤアアツ!？」

ビ、ビツクリしたあ。

な、何でネギ先生がここに……………って、そうか。もう高畑先生の引止めが終わる時間なのか。

「悩み事ですか、桜咲さん？」

僕がここまで接近しても気づかれないということは、余程深い悩みのようなですね。

よかつたら相談に乗りますよ?」

「そんなことは……………いえ、お願いしていいですか？」

正直、私一人ではどうしていいかわからなかったので……………」

一度ネギ先生と話をしてみよう。  
何か良い助言を頂けるかもしれないし、ネギ先生という変わった人の視点から見た意見も今後の参考になるだろう。

「構いませんよ。」

実を言うと、今日は何故か追い出されるように仕事が早く終わったので時間がとれるんですよ。

前々から桜咲さんは悩みをお持ちのようでしたので、この機会に是非と思ひましてね。

まあ、立ち話もなんですから、どこか店に入りましょう。やっぱり和菓子のお店の方がいいですか？」

「……………」

「？……………桜咲さん？」

「……………チョコレート」

「ハ？」

チョコレートが食べたいです。ネギ先生。

第十七話 バレンタイン？ 乙女達の想い（後書き）

せつちゃんがちびせつな君より先に、バカせつなの二つ名を獲得しました。

せつちゃんはチョコレートのことか全然知らないと思います。というか、自分も今回の話を書くためにチョコレートについて調べるまで、ガナツシュとトリユフの違いがわかりませんでした。プラリネは存在は知っていましたが、名前は知りませんでした。

外国土産のチョコレートを食べたら、甘すぎて歯が痛くなります。やっぱり日本製のお菓子の甘さが丁度いいです。

明日菜はまだ恋愛感情を持っているわけではありません。失恋のショックで弱気になっていますし、気持的に木乃香と一緒に、まだペットを抱いて寝るような感じでしょうか。

ちなみに寝ているときのネギは素です。

大人ぶっていても、結局20年の子供生活で子供っぽさが身体に染み込んでいます。

第十八話 バレンタイン？ そうだ 京都、行く。

ネギ・スプリングフィールド

タカミチに最近明日菜さんに避けられていることを相談されたんですけど、コレっていったいどうしましょう？

正直に言うべきなのでしょう？

というか、進路相談室でそんなこと相談しないでくださいよ。

「チョコレートならコーヒーの方がいいですね」

「……………あ、お任せいたします」

そんでトボトボと力なく歩いていたら刹那さんを拾っちゃったんですけど、コレもいったいどうしましょう？

とりあえず相談を兼ねてお茶に誘ってみたら、チョコレートを食べてみたいとのことでした。

中武研から巻き上げた食券残ってますから構いませんけどね。



「え？ この小さいチョコ一粒で百円？」

「和菓子だって似たようなものでしょう。」

「老舗だと饅頭一個数百円とかするのありますし」

「あ、確かにそう言われると……………」

まあ、一口で終わること考えたら高いですけどね。

でも、学生も来ることを踏まえた値段設定をしているこの店は、  
こういう専門店にしてはかなり安い方ですよ。

768

そういえば、僕もこっちの世界ではこういう専門店は始めてだ  
なあ。

前の世界ではエヴァさんに連れていってもらったことありますけ  
ど。

「それで、いったい何があったんです？」

刹那さんがそこまで落ち込んでいるなんて？」

「……………」

「……………木乃香さんのことですか？」

「周りに聞こえないように結界張りますね」

「あ、すみません……………」

「こりゃ、本気で落ち込んでいますね。  
何があったんでしょう？」

「とりあえず、結界結界。」

「……………前の世界のどこでも騒ぐ駄目親父共のせい、結界の熟練度がこんなに上がるとは。  
再転生して鍛え直したときも、アツサリと勘を取り戻せましたし……………」

「で？ 何か悩み事でも？」

「……………その、ネギ先生はどうやってそこまで強くなれたんでしょう？」

うか？」

「？ んー、僕って強いんですかね？」

「……………嫌味ですか？」

「あ、いえ。真面目に聞いてるんですよ。」

模擬戦のときも話しましたけど、戦闘と呼べるものはあの日が最初でした。ですから自分がどの位置にいるかわからないんですよ。

あれ以来、模擬戦とかしていませんし。

それにいくらエヴァさん達に勝ったとはいえ、あくまでアレは模擬戦ですからね。本当の殺し合いになったらまた違うでしょう。

まあ、この前の模擬戦の結果から、少なくとも“中の上”か“上の下”ぐらいはあると思ってますけど」

「ああ、そういうことでしたか。」

……………申しわけありません。ヒネた言い方をしてしまいました」

「別に構いません。」

桜咲さんは“強さ”について悩んでいるんですか？

僕が言うのも何ですが、14歳なら仕方が無いところもありますよ。僕達では身体がまだ成長しきっていないのですから」

「それは、まあ……………、私がまだまだ修行中の身であることは承知しています。そちらの“戦いにおける強さ”ではないのです。……………ネギ先生は何でも出来るじゃないですか。戦いでも教師の仕事でも。」

それに比べて私は護衛を満足にこなせていないだけでなく、勉強は出来ない上に一般常識まで欠けている始末です」

一般常識に欠けているのは護衛ばかりしているからじゃないですかね？

あと、麻帆良にいれば自然にそうなっちゃうのでは？

「何でネギ先生は何でそんなに“強い”んですか？ 何でそんなに何でも出来るんですか？」

強くならないと駄目親父達の修行しゆもんで死んでたからです。

何でも出来るようになったのは駄目親父達のせいでパートナーになつてくれる人がおらず、自分独りで全てやらなければいけなかったからです。

って答えられたら楽なんですけど、駄目ですよねえ。

クソッ、あの駄目親父共めが。今度会ったらブン殴る。

……そういえば学園祭のときのまほら武道会って、合法的に駄目親父ボコれるチャンスじゃね？

参加するつもりなかったですけど、それ考えたら美味しいですね。優勝賞金一千万円も美味しいし。

エヴァさんの別荘借りて修行を本格的にしたおかげで、前の世界の強さをだいたい取り戻せました。

肉体的にまだ完璧ではないですが、技術的な向上を含めたらむしろ強くなってますね。“紅き翼”<sup>アラルプラ</sup>メンバーを一人相手にするぐらいなら余裕です。

まあ、それはあとでゆっくり考えますか。

何て答えましょうかね？

刹那さんも本気で迷っているみたいだから、真剣に答えますか。

「一言で言えば、“楽しいから”ですね」

「“楽しいから”、ですか？」

「ええ、桜咲さんは勉強が楽しいと思つたことはありませんか？修行が楽しいと思つたことはありませんか？」

難しい問題を解いたとき達成感を感じることはありませんか？  
練習を重ねて遂に技を習得できたときは嬉しくありませんでしたか？  
？」

「……………ええ、そういうのはわかります」

「娯楽がなかった田舎で育ったせいもありますけどね。」

僕にとって修行や勉強は遊びと同じなんです。“好きなものこそ上手なれ”って奴ですよ。」

……………僕が思いますに、桜咲さんには今まで他の事を考える余裕が無かったんじゃないでしょうか？

そして高校という先のことを考え始めたせいで、これまでの生活に発生していたけど気づかなかった綻びに気づいてしまい、こうして悩んでいる」

「……………そうかもしれません。」

今までは護衛ばかりに集中していたので考えもしませんでした。私は周りを見ていなかったような気がします。

ネギ先生と高校のことについての話をしてから、いろいろ物事を考えるようになりました」

カラオケやボーリングもしたことないですもんねえ。

前の世界のこのちゃんせつちゃん知っている分、この世界の木乃香さんと刹那さんのすれ違いにはちよつと心が痛みます。」

「そのことに気づいたのなら大丈夫ですよ。

人間とは“人の間”と書きます。独りでやれることは少ないです。他の人達との触れ合いは護衛には無意味かもしれないですけど、いつかは役に立つときが来ます。

今は少し歩みを緩めて、辺りを見渡すといいですよ」

「……………はい。

しかし、今のままでは“護衛”、“修行”、“勉強”の3つをこなすには時間が足りません」

「確かにそれはキツイですねえ」

しかし、何でこんなこと思い始めたんでしょう？

何だか普通の女子中学生みたいに弱々しいです。てっきり原作みたいに京都編が終わるまでは、仕事モードのせつちゃんしか見れないと思っていたんですが。

今の刹那さんはまほら武道会でエヴァさんに虐められたときのような顔しています。

エヴァさんの評した“触れれば切れる、抜き身の刀の様な佇まい”がないんですねえ。

僕が高校の留年を注意したために周りのことを気にするようになり、エヴァさんの言う“小さな幸せ”に気づいてしまったんですね？

あとは10歳の僕があそこまで戦えたことによる自信喪失ですか。

アレ？ どっちにしる僕のせい？

まあ、独りぼっちで頑張ることに疑問を持ったのはいいことです。独りでやるしかなかったら、そのうち僕みたいになってしまいますからね。

時間に関してはエヴァさんの別荘を借りればいいんですが、エヴァさんが刹那さんに別荘を貸す理由がないで……あ、もしかしたら、うまくいくかな？

それにしても、自信を失って不安そうなせつちゃんが可愛いです。

でも、とりあえず原作終わるまでは恋愛関係は自重しようと思っ  
ているんですね。

そもそも僕は誰のことが好きなのかもよくわかっていませんし、  
のどかさんみたいな一般人を原作同様に危険なことに巻き込むのは  
気が引けます。

ハーレムというものにも憧れますが、前の世界と合わせて彼女い  
ない暦20年以上の僕が言っても妄想でしかありません。



だから、僕は考えました。

さつさと原作終わらそう、さつさとコスモ・エンテレケイア“完全なる世界”ぶつつぶそ  
う、と。

原作的にだいたい夏休み終了ぐらいには終わるみたいですからね。  
だったら焦る必要はありません。夏休みが終わってから、本当に  
好きな人を探せばいいのです。

何で二次創作の主人公は、わざわざ大変なイベントがある原作時  
期に恋愛に頑張るんですかね？

さつさとメンドイこと終わらせてから青春送った方が楽しめるで  
しょうに。

「そういえば、ネギ先生から見て木乃香お嬢さまの護衛については  
どう思います？

ネギ先生が修行の参考にしたという、警察や軍隊の視点から見て  
です」

「……………桜咲さんには申し訳ないですけど、護衛対象を避ける護衛

つてのはマズイと思いますね。  
それと、木乃香さんに護衛されている意識がないってのも危ないでしょう。

護衛にとって一番厄介なことは、護衛対象の予期せぬ行動です。護衛されている人間の一番大切なことは“護衛されていることを意識して、普段通りの生活を送る”ことです。

護衛対象が護衛されていることを知らない場合、護衛対象の好き勝手に動かれることになりますからね」

「……………わかって、おります。」

しかし、木乃香お嬢さまにはこちらのことは関わって頂きたくないというのが、学園長と西の長のお考えです。

ですので木乃香お嬢さまに私が護衛しているのを知られるわけにはいけません」

「別に裏の事情まで教えなくてもいいじゃないですか。」

雪広さんはコチラの関係者じゃないですけど、護衛がコッソリついていますよ。雪広財閥の次女なら当然ですけどね。本人も承知済みでしょう。

雪広さんみたいに、表の世界の護衛をつけるだけでかなり違うと思いますよ。

しかも木乃香さんは元華族である近衛家のお嬢さまです。護衛がついていても誰も不思議には思いません」

「な、なるほど……………」

「まあ、今から護衛をつけるとなると不自然になりますけどね。」  
「何で今更？」という話になりますから。

それと木乃香さんに発信機とかつけてるんですか？  
誘拐されたときにそういうのがあると、探し出すのが楽になるんですけど」

「は、発信機？

……いえ、そのようなものは持ち歩いておられないと思います」

「……うーん。何と言いますか。

正直に感想を言ってしまうば、“桜咲さんが満足するための護衛”のように思えてくるんですね。

桜咲さんは見守っているだけで満足なんでしょうけど、もうちょっとやりようがあると思いますし、やるべきこともあると思います。本人の安全の事を考えるなら、木乃香さんに秘密でもそういう準備といた方がいいですよ。携帯電話とかベルトとか靴とかに仕込んでおくとか。

僕でさえいつもつけてるネックレスに発信機仕込んでます。僕に何かあったらアルちゃんやさんが周りの人に事情を説明してくれることになっていきます。

しかも、この腕時計は実を言うと発信機付きの魔法発動体です。普段はこれ見よがしに父の形見の杖を持ち歩いている上に折りたたみ式の杖も携帯しておいて、更に腕輪型と指輪型の魔法発動体もしていますけどね。

あ、他にこのこと知ってるのアルちゃんだけですから、他の人に言わないでくださいよ」

「……………ネギ先生はいったい何と戦っているのですか？」

「あくまで“念のため”ですよ」

「……………ハア」

麻帆良に来てからの自分を知ってる刹那さんだから、こんな理由でも納得してくれませぬ。  
っていつか溜息つくなや。

さすがに元老院対策とは言えませんので、仕方がないんですがね。

「まあ、木乃香さんのような場合は良い護衛方法を検討するより、元となる原因を解決した方がいいと思います。  
原因がはっきりしているのですからね」

「……………原因ですか？」

「はい。木乃香さんが狙われる理由は“西の長の娘である木乃香さんが東にいる”ということなのでしょう。」

だったら“西に帰ればいい”のです」

「ハ？ し、しかし、お嬢さまには麻帆良に友人もたくさんいます。いきなり帰れというのは酷なのでは？」

「いや、ずっと西にいるわけじゃないですよ。」

正月とか夏休みとかに実家に帰省すればいいんですよ。それこそ三連休ぐらいでも京都に帰ってゆっくり出来ますよね。麻帆良から京都の実家までなら数時間で到着できるでしょう。」

“いつでも自由に西に帰ってこれる”なら、わざわざ麻帆良に来てまで誘拐企む阿呆はいないです」

「……………ど、どうでしょうか？」

「木乃香さんに聞きましたけど、木乃香さんは麻帆良に来てからはあまり京都の実家に帰省はされていませんですね？」

だったら西の人達はやきもきもするでしょうよ。これでは東が木乃香さんを掴んで離さないように思われるのは仕方がないのでは？」

とりあえず今度の春休みにでも帰省してみたらどうですか？

不安でしたら僕も着いていきますよ。父が京都で住んでいた家とか、父の盟友である近衛詠春さんとか、僕が京都に行ってもおかしくない名目はたくさんあることですし」

そしたら修学旅行でわざわざ京都に行かなくてすみませうしね。  
例え襲われたとしても、クラスのことを考えなくていいから気が  
楽になります。修学旅行はハワイが良いなあ。  
というか、フェイトってもう西にいるのかな？

「わ、私の一存ではそこまでは何とも……………」

「譲れるところは譲っていかない駄目ですよ。」

“お前が譲れば私も譲る”という姿勢ではいつまで経っても仲良  
くなれません。せめて“私が譲るからお前も譲ってくれ”でなけれ  
ばね。

そもそも木乃香さんが実家に帰省することに、何か表向きに問題  
がありますか？」

「いえ、それはないと思います」

「むしろ西も巻き込んだんじゃえばいいんですよ。」

“木乃香お嬢さまが帰省するので護衛よろしくしてください”とか、  
ね。

そこまで露骨に言わなくとも、木乃香さんが「京都駅まで迎えを  
よこして」と言えば自然に西も護衛出来るでしょう」「

「し、しかしお嬢さまに危険なことがあつては……………」

「ですが、ずっとこのままというワケにはいかないでしょう。

木乃香さんが大人になつたらどうします？ 木乃香さんが大人になつてもずっと麻帆良に留めておくことなんて出来ないでしょう。

今のままだつたら木乃香さんに関してのことは西と東の仲が悪くなることはあつても、良くなることはないと思いますよ。

学園長は木乃香さんを早めに結婚させて西との関係を無くそうとしているのですが、なし崩しに終わらされる西としては納得できなと思います。

言い方が適切かわかりませんが、僕は“臭い物に蓋”ってあまり好きじゃないんですよ。発酵して可燃物質が出来たとしたら始末が大変ですから。

僕としては“臭い物は分解して肥料にして畑に撒く”方がいいと思つてます。

……………別に木乃香さんを“臭い物”とおもっているわけじゃないですからね。言葉の綾です」

「え、ええ。わかつております……………」

「相変わらず“正義の魔法使い”とは程遠い考えをするんだな。なあ、ネギ？」

あれ？ エヴァさん？  
何でこんなところに？

「担任補佐ともあるつものが、こんなところで生徒とデートか？  
いつになったら私を美術館にエスコートしてくれるんだ？」

そういえば模擬戦のときにそんなこと言ってましたね。アレって本気だったんですか？  
てつきり、僕の気を引いて糸の罫にかけるための駆け引きだと思っ  
っていたんですが。

そういうことなら喜んでお誘いするんですが、「本気だったんですか？」って言ったら怒られそうですねえ。

「修学旅行に行かなくてもいいのなら、今週の休みにでもどうですか？」



「……………イヤ。やっぱりゆっくり待つことにする。  
お前もいろいろと大変そうだからな」

「多分、春休みには呪いの修正が終わると思うので、春休みにお誘いします。

それに今の時期はあまり面白い展示をしてないようですからね。きっと春休みには大きい展示をするんじゃないですか？」

「ム、それもそうだな。今の時期は客が入らんからな。わかった。春休みのデートを楽しみに待つとするよ」

説得終了。

インフェルナス・スコラスティクス  
『登校地獄』は便利です。

まあ、今やってる展示も春休みにやる展示も知りませんが。

「チョコレートが食べたくなってるな。  
相席しても構わんだろう?。」

「僕は構いませんが、桜咲さんは?。」

「あ、大丈夫です」

「僕達と同じメニューでいいですか？」

「いいのか？」

「なら馳走になるう」

「同じテーブルに座って、桜咲さんには奢るのにエヴァさんに奢らないっていうのはないですよ」

「え？ わ、私は自分の分は自分で払います」

「僕教師。あなた達生徒。」

「ついでにおかわりも注文してきます」

「そういうことなら麻帆良内の美術館とかのサーチしとかないと。」

「エヴァさん遊園地に行ったことないって言ってたから、ソチラも一応調べておきましょうか。」

「きっと童心に戻って、外見相応にはしゃいで遊ぶエヴァさんが見れそうです。」

「あ、でもさすがに美術館とか遊園地を教師と生徒の二人っきりで行くのはマズイですかね？」

年齢詐称薬をまほネットで注文しておきますか。  
アしあつたら学園祭のときとかも使えそうですし、買ったって損  
はなさそうですね。

桜咲刹那

「え？ 刹那さんは『斬魔剣』を使えるんですか？」

「え？ ネギ先生は『斬魔剣・弐の太刀』を使えるのに、『斬魔剣』  
は使えないんですか？」

というか、宗家である青山家ゆかりの者にしか伝承されないはず  
の『斬魔剣・弐の太刀』を何故使えるのですか！？

「いや、ビデオに『斬魔剣・弐の太刀』は映っていたんですけど、普通の『斬魔剣』は映ってなかったんですね。『弐の太刀』があるのだから『壹の太刀』もあるとは思っていましたが。」

「この前の葛葉先生が使ってきた『雷鳴剣』も知りませんでしたし」

「……………そういうことですか」

「……………やっぱりネギはネギだな」

「そうですね、エヴァンジェリンさん。」

「ネギ先生はネギ先生だから仕方がないんですね。」

「是非とも『斬魔剣』と『雷鳴剣』を教えてくださいませんか？  
それに神鳴流は他にも技があるでしょうから、それも是非」

「え？ それはお世話になってますので構わないのですが、時間が取れなくて……………」

「あー、そうですね。」

“護衛”、“修行”、“勉強”としなきゃいけませんからねえ。

……“修行”と“勉強”はエヴァさんの別荘を使えば問題ないんですけどねえ」

「？ ……別荘、ですか？」

「私が持っている魔法の別荘だよ。現実の1時間が別荘の中では24時間になる。」

まあ、その分老化が進むということでもあるから若い女にはすずめんがな。一度入ったら中で24時間過ごさないと外に出られんし」

「僕は背が急に伸びても、多少なら成長期ということで誤魔化せますからね。週に2、3回ですけど使用させて頂いてます。」

そこなら時間を気にしなくてもいいんですが桜咲さんはお嫌いですよね。木乃香さんの護衛もあるでしょうし……。」

24時間ずっと修行しっぱなしというのもアレですから、お礼に勉強を教えることも出来るんですが」

「そういうことなら構いません！」

週に2、3回の1時間程度なら、お嬢さまの護衛は龍宮に依頼すれば問題ありません！」

「げ、元気良いですね？」

……構いませんか、エヴァさん？ 桜咲さんも一緒に別荘へ来ても。

僕としては神鳴流の技に興味がありますし、剣の組み手を桜咲さ

んにお願いしたいのですが。もちろん『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』解呪は遅れたり  
しませんから」

「……………ムウ。魔法ならともかく、私では神鳴流なんぞ教えること  
は出来んからな。」

まあ、そういつことなら構わんぞ」

「ありがとうございます！ エヴァさん！」

「な、何……………。このぐらいたやすいことだ」

「私からもお礼を申し上げます。エヴァンジェリンさん」

やった！ さっき相談したことを忘れられたのかと一瞬思っ  
てしまったが、ネギ先生の狙いはこれだったんだ。

ありがとうございます、ネギ先生！

これで“修行”と“勉強”の目処が着いた。

老化が早まるとか、修行中の身で神鳴流を教えるとかは少し気  
になるが、そんなことは大事の前の小事だ。

ネギ先生の剣のお相手をするのは私にとっても修行となる。

ずっと私に掛かりきりというのは無理だろうから自主練の時間も多いだろうが、それでも修行の時間が増える。

そして何よりネギ先生につきつきりで勉強を教えてもらえる。

他のバカレンジャーの皆には申しわけないが、私が最初のバカレンジャー脱退者にならせてもらおう。

負担は龍宮に対する報酬だが、週に2、3時間ならそう高くないだろう。あとで相談しなければな。

これで当面の目処は着いた。

あとはネギ先生の言ったとおり木乃香お嬢さまに対する危険を根本的に取り除くことだが、それはまず学園長に相談してみよう。

一介の護衛風情が口に出していいことではないが、他ならぬ木乃香お嬢さまのためだ。学園長だってその気があるのなら協力してくださるだろうし、ネギ先生のお力添えも期待できる。

「そういえばさっき面白そうな話をしていたな。

春休みに京都へ行くのか？」

「あくまで僕の勝手な考えですよ。」

木乃香さんのことは今の状態で良いとは思えませんからね。最終的な判断は学園長がするでしょうが」

「フン。どうせジジイが否と答えても、それとなく近衛木乃香を誘導させて京都に帰省させるんだろう?」

「そんなことはしませんよ。」

まあ、僕自身京都に行ってみたいので、居候させてもらっている部屋で京都旅行のパンフレットを見るかもしれないがね。

……………エヴァさんも行きますか?」

「……………なん、だと?」

「もちろん木乃香さんのこととは関係無しにです。」

さつきも言ったとおり、春休みには呪いの修正は終わると思いません」

「……………行く。絶対行く。」

だから春休みまでには絶対呪いの修正を終わらせる」

「はいはい。努力いたしますよ。」

でも、もし木乃香さんの帰省があつてそれと被る場合は、何あつたらご助力お願いしますよ」



「そのぐらい構わん。」

……………京都か。

……………15年振りの麻帆良の外か」

嬉しそつだなー、エヴァンジェリンさん。

そしてさすがネギ先生。着々と戦力を増やしていく。

私も念のために龍宮へ話を通しておくかな。

「ああ、そういえばエヴァさん。

ウチのクラスの相坂さんのコトですが」

「お？ 材料揃ったのか？

しかし、よくアイツのことがわかったな。多分、龍宮マナですら  
気づいていなかったぞ」

「いや、クラス名簿に名前が書いてある人がずっと来なかったら、  
そりゃ気になって調べますよ」

「……………何のお話ですか？」

「ウチのクラスの幽霊さんのコトです。そつだ。よかつたら桜咲さんも念のために手伝つてくれますか？」

「え？ ウチのクラスの幽霊？」

「……………事情がわからないで何ともいえませんが」

「おいおい。私が言うのもなんだが、アイツは人畜無害な奴だぞ。それなのに退魔の神鳴流を連れていくのか？」

「あくまで“念のため”ですよ」

ウチのクラスに地縛霊でもいるのか？ 全然気づかなかつたが…

……………  
エヴァンジェリンさんが人畜無害というのなら安全なのだろうが、お嬢さまの安全のために私の目でも確認しておくべきだな。

近衛木乃香

……せつちゃん、楽しそうや。

ウチのことは避けるのに、ネギ君とはあんな風に笑えるんか……  
…。

考えてみればウチは焦りすぎてたわ。

せつちゃんがウチを避けるようになったのは、きっと何か理由があるはずなんや。その理由も知らずにせつちゃんに立ち向かって、逆にせつちゃんを困らせるだけやった。

まずはせつちゃんがウチを避けるようになった理由を調べんと。それと何でネギ君ならあんなにせつちゃんと仲良くなれるかも調べなアカンな。

となると、和美ちゃんは……、大事になりそうやからアカンな。内密に調べてもらわなアカンから、楓に協力を頼もうか。忍者やからきつとこついうのに適任や。  
プリンで協力頼めへんかな？

そのあいだにウチはネギ君と話して、どうやったらせつちゃんと仲良くなれるかアドバイスを貰おう。

ネギ君は担任補佐でウチは生徒なんやから、そういう相談にも乗ってくれるやろ。

………そういえば、最近ずっと夜はアスナにネギ君貸して  
たなあ。

失恋のショックが大きかったことはわかるけど、ずっとネギ君独  
り占めというのはずるいわあ。

しかも、ネギ君が甘えてくる方法見つけたとか言つて、そのとき  
のことを惚気てくるし。ウチもネギ君に甘えられたい。

よし、今日はネギ君と一緒に寝よう。

それで朝はネギ君より早く起きて、ギューっと抱き締めるんや。

第十八話 バレンタイン？ そうだ 京都、行こう。(後書き)

「さっさと原作を終了させてから青春を謳歌する」

そんな二次創作の根幹を引っ繰り返す発想をする、それがこのネギクオリティ。

ま、そんなこと許すわけありませんがね。

せつちゃんの強化フラグが立ちました。

しかしせつちゃんは、24時間ずっとネギと二人っきりで修行と勉強になることの意味にまだ気づいていませんw

そして忍びという気配遮断のプロがせつちゃんをロックオンしました。

せつちゃんの運命や如何に？

第十九話 バレンタイン？ 浮気？調査

長瀬楓

……………プリンに釣られて変なことに巻き込まれてしまった  
じゃない。

それにコレって本当に木乃香殿にお伝えしていいのでござろうか？

「お待たせー、楓。これウチが作ったプリンや。あとで食べてなー。  
で、どうやったん？」

「食べながら話をしましょうよ。  
お昼休み終わっちゃうわよ」

おや、アスナ殿まで。  
そんなにプリンを見つめても、食後のプリンは渡さないでしょ。  
よ。

「それにしてもありがとなー、楓。  
せっちゃんの後をつけるなんて大変やったろ」

「刹那に気づかれないように監視するのは確かに大変でござったが、拙者の良い修行にもなったでござるよ。」

昨日刹那に動きがあったので報告するでござる」

いいんちよがネギ先生を招こうとした洋菓子店のプリン詰め合わせを頂いたからには、その分シツカリと働かせて頂くでござるよ。  
木乃香殿の手作りプリンも美味しいでござるし。」

「さて、依頼された当日であるクラス会議の日、つまりおとといは特に何もなかったでござる。」

しかし、刹那は昨日の早朝の5時前にエヴァ殿の家を訪れたでござる」

「エヴァちゃんの家？」

桜咲さんとエヴァちゃんって付き合いあったっけ？」

「そんな朝早くから悪いなあ。」

またプリン作ってくるわ」

「お願いするでござる。実を言うと、頂いたプリンのお詰め合わせは風香と史伽に半分取られてしまったので。」

「……ここからは少し言いにくいのでござるが、数分後にネギ坊主がエヴァ殿の家に入っていったのでござるよ」

「ネギ君があ？」

「ちよ！？ 何でよ！？」

「昨日は確か、ネギは朝早くからランニングに……」

「そんなこと拙者に言われても困るでござる。」

「ただ拙者は見たままのことを報告している故に……」。

「そつえばネギ君。」

「紅茶を飲みたからエヴァちゃんの家に行つたなあ」

「そんなこと言つてたわね。さすがの木乃香も紅茶には詳しくなかったから。」

「でも、そんな朝早くから紅茶を飲みに行くわけないし、そもそもランニングと言つてネギは部屋を出つたのよ」



「それで？ 2人はエヴァちゃんの家で何してたん？」

「さすがに家の中までは探れなかったでござる。」

「ここからは更に言いにくいのでござるが、約一時間後に刹那がエヴァ殿の家から出てきたとき、耳まで真っ赤になるくらい赤面していたでござる。」

「しかも、そのときは遠目故にはっきりとは見えなかったが、学校で確認したら肌が物凄くツヤツヤになっていたでござる。」

「……………」

「沈黙が怖いでござるよ。」

「というか無表情のアスナ殿が物凄く怖いでござる。」

「拙者、こんなアスナ殿の顔は見たことござらん。」

「……………」  
「ネギったら、エヴァちゃんの家で何をやってたのかしらねえ」

「……………」  
「エヴァちゃんて、この前のお風呂でネギ君に髪を洗うのを手伝っよつに言ってたなあ」

「エ、エヴァ殿はそのときは起きていなかったようでご覧よ！  
刹那が凄い勢いで走り去った後にネギ坊主が出てきたのでござる  
が、見送りの茶々丸殿にエヴァ殿が寝坊しないようにと言っていた  
でござるよ！

ネギ坊主はいつもと変わらない様子だったでござる」

「……………ふーん。

そう言われれば、確かに昨日のせつちゃんは様子が確かに違っていたなあ」

「……………ネギはあまり変わっていないかったわねえ。

変わったと言えば、おとこの夜は木乃香がネギと一緒に寝たくらいかしら？」

「ええやん。

アスナばかりネギ君独り占めしてズルイわあ。最初にネギ君と寝てたのはウチなんやで」

怖いでござる。

今からでもこの依頼を取り消してもらうことは出来ないでござるか？

「そんで？ その後はどうなったん？」

無理でござるな。

せめて依頼はちゃんと果たすから、拙者に何かしよつとは思わな  
いで欲しいでござる。

「そのあと刹那の後を追ったが、それから普通でござる。

寮に帰って時間になったら学校へ行き、放課後は拙者やアスナ殿  
と一緒に居残り授業を出たでござる。

居残り授業終了後は剣道部。その後は寮に戻って食事、自主トレ  
の素振り、入浴、勉強、就寝といった感じでござる。

これが昨日の刹那の一日でござるな」

「最後は普通やなあ」

「というか、楓ちゃんってば大丈夫なの？

桜咲さんをずっと監視しているなんて」

「いやいや、これも修行の一つでござる。

ただ、拙者はバレンタイン当日パーティー担当グループなので、  
パーティーが近くなるとソチラを優先させて頂くでござるよ」

「それはわかつとるわ。  
改めてありがとうな、楓」

「それにしてもランニングに行くなんて嘘ついてまで、朝早くからエヴァちゃんの家に行くなんて。  
ネギったらいったいどうしたのかしらねえ？」

拙者は何も知らないでござる。  
だからその滲み出る殺気はネギ坊主にぶつけて欲しいのでござるが……………。

「その話、詳しく聞かせて欲しいのです」

「うっ、うっ……？」

夕映殿！？ 千雨殿にのどか殿に古まで！？

う、迂闊でござった。

アスナ殿の殺気に気を取られて、接近する気配に気づかなかった

でいじめる。

「あー、わりい。

立ち聞きするつもりはなかったんだが、偶然飯食いに屋上まで来ててな。

綾瀬達を押し留めることが出来なかった」

「ネ、ネギ先生せんせいがエヴァンジェリンさんと桜咲さんと……………」

「シツカリするですよ、のどか。まだそうだと決まったわけじゃありません。

錯乱しないでください。英語のノートを見ても解決策が載っているわけじゃありません」

「アイヤー、何だかとんでもないことを聞いてしまったみたいアル」

の、のどか殿、目が……………。

これ以上、コトが大きくなるのは勘弁して欲しいのござるが……

…。

桜咲刹那

「ふ、ふつつかものですが、………よろしく願いします」

「刹那さんが嫌ならおんぶにしましょうよ」

「………別に嫌という訳ではないのですが。  
その、恥ずかしくて………」

私はどうしたらいいんだ？

今、私はエヴァンジェリンさんの別荘にいる。

現実の1時間がこの中では24時間となり、その分修行出来るの  
はありがたい。

初めてここを使わせてもらった日は、修行、勉強、ネギ先生との手合わせを行なったのだが、最後のネギ先生との手合わせで力尽きて気絶してしまった。

ネギ先生は本当に強い。

身体能力は私のほうが上だが、剣の腕は私以上。

それに身体能力も『咸卦法』を使われてしまったら、私が気を使った状態よりも上になる。そうでなくとも数年後にはネギ先生の素の状態で上になるだろう。

しかし、まだまだ私も負けてはられないし、中々良い手合わせが出来たと思う。少なくとも私は得るものがたくさんあった。

そして、気づいたらネギ先生におんぶされていた。

『マイティガード咸卦治癒』を使用して、私の疲労をとってくれていたらしい。それはいい。

それはいいのだが、10歳の男の子におんぶされて涎を垂らして寝ていた、というのはさすがに恥ずかしすぎる。

ネギ先生が前もって私の顎の下、つまりネギ先生の肩にタオルを置いていなかったら、ネギ先生のシャツがグツシヨリとなるぐらいの量の涎をだ。

ネギ先生は気にしないと行ってくれたが、その日一日は恥ずかしくてネギ先生の顔をまともに見れなかった。

確かに『マイティガード咸卦治癒』というものは凄い。

あれだけの疲労を、たった2時間ほどの休憩で全快できるとは。

しかし、あの気持ち良さは何とかならないだろうか？  
あんな気持ち良さだと、疲れた身体だったら絶対に寝てしまう。  
それに肌も何だかツヤツヤになるし。

そして今日が2回目の別荘での修行の日で、別荘を出たこの後に  
学校があるので『咸卦治癒』マイテイガードで回復させてもらうのだが、『咸卦治癒』マイテイガードは接触しないと回復しない。

その接触方法でネギ先生と言いつ争っているのだ。

「僕は別におんぶでも大丈夫ですよ。」

『咸卦治癒』マイテイガード発動中なら寝なくても平気ですから」

「いえ！ さすがにそこまでして頂いては申しわけありません！  
私の勉強と修行に付き合ってください、その上私の体力回復のために  
ネギ先生が寝ないなんて……」

「でも、僕と一緒に寝るのは嫌なんじゃない？」

「で、ですから！ 嫌という訳ではありません。  
ネギ先生に抱きつくというのが恥ずかしいのです。  
……その、ネギ先生から私に抱きついてきてくれませんか？」



「え？ “抱きつく”より“抱きつかれる”方が恥ずかしくないんですか？」

どっちも恥ずかしいんです！！

10歳の男の子に“おんぶされる”、“抱きつく”、“抱きつかれる”なんて、どれを選べばいいんですか！？

『マイティガード威卦治癒』を使わないというのは出来ない。

このまま学校へ行っても途中で力尽きて授業中に寝るだろうし、護衛に差支えがある。

“おんぶされる”は却下！

ネギ先生が休まずに私をおんぶするなんて、そこまで迷惑は掛けられない。

そして残りは“抱きつく”と“抱きつかれる”なんだが、こんなものどっちを選べばいいんだ！？

「というか、さすがの僕でも刹那さんに抱きつくのは恥ずかしいんですけど……………」

「ネ、ネギ先生だって“抱きつかれる”より“抱きつく”方が恥ずかしいのではないですか!？」

「いえいえ、僕は10歳の男の子。刹那さんは14歳の女の子という違いがあるじゃないですか。」

そもそも「体力を回復させてやるから抱きつかせる」なんてセクハラじゃないですか!？」

「わ、私は別にセクハラだと思いません!」

た、確かに10歳の男の子には恥ずかしいでしょうけど、14歳の女の子だって恥ずかしいんです!

「……………このままだったら休む時間がなくなります。」

ジャンケンで決めましょう。最初はグーの一回こっきり勝負」

「いいでしょう。」

負けた方が勝った方に抱きついて寝る。……………あいこは?」

「あいこはおんぶです」

「ちょ！？ それズルイです！

あいこだったらやり直しです！」

「僕達だつたらずつとあいこになる可能性もあります！」

「く、私達の身体能力なら確かに……」。

なら、あいこだったらお互いに抱きつくのです！ それだつたら公平でしょう！？」

「……………いいでしょう。」

それでは、右手に“気”、左手に『カントゥス・ペラー』戦いの「ちょっと待ったあつ！ それズル過ぎますよつ！！！」……………「チエツ」

ええい、ネギ先生にこんな子供っぽいところがあるとは……………。  
年相応のところがあるんだな。

まあ、素のネギ先生を曝け出してくれるのは悪い気はしない。  
教師としてのネギ先生とは違った魅力があるし。

「……………わかりました。」

刹那さんも気で強化はなしですよ」

「そのつもりです」

何で来る？

とりあえず私はグーを作っておいて、ネギ先生が手を変化させてきたらチヨキに変えよう。

ゴクリ、と唾を飲み込む。緊張するな。

それでは、いざ尋常に……！

「「最初はグー！ ジャンケンッ……！！」」

「ズルイです。刹那さん後出し狙ってたでしょ？」

「ネギ先生だってそうじゃないですか……………」

お互いグーでした。  
きっとネギ先生も同じことを考えていたんでしょうね。

「術式兵装『マイティガード咸卦治癒』……………」。  
えーっと、それじゃあ……………お休みなさい？」

「何で疑問系なんですか？」

ネギ先生と一緒にベッドに入る……………。

……………ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳  
歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は

10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳ネギ先生は10歳  
生は10歳………………。だから何ともない！

「し、失礼します。

……………嫌だったら言うてくださいよ。僕はおんぶでも構わないの  
ですから」

「……………大丈夫ですよ」

……………本当にネギ先生は10歳なんだなあ。  
私の顔も赤いのだろうが、ネギ先生の顔はそれ以上に真っ赤だ。  
このネギ先生見たら、何か逆に落ち着いてきた。

ネギ先生には苦手なものとかはないのかと思っていたが、こつこ  
つことは苦手なのか？  
でも、木乃香お嬢さまやアスナさんと一緒に布団で寝ているらし  
いの。

ギョ、とネギ先生が私の胸に顔をうずめる形で抱きついてくる。  
それと同時に『マイティガード咸卦治癒』の効果で身体がポカポカとしてくる。

さすがに胸に抱きつかれるのは少し恥ずかしいけど、  
……別に嫌じゃない。

それでは私もネギ先生を抱きしめないといけないな。

………「こつこつ場合だと、頭と背中に腕を回せばいいのかな？  
こ、こつこつかな？」

「ヒヤッ！……！」

………ビックリした。

ネギ先生の頭の裏に腕を回したら、ビックリ！ とネギ先生が跳ね  
た。

「抱きつかれるのは慣れていないはずなのでは？」

「………抱きつかれるのは慣れていても、抱きつきながら抱  
きしめられるのは慣れていません」

その2つに何か違いがあるのだろうか？

胸の中で喋られるのはこそばゆいな。

しかも私に顔を見せたくないのか、ギュウっと抱きついてくる。この状態だと肌は耳しか見えないが、凄く真っ赤だ。

……………カワイイ。

少し私が動く、小動物みたいにビクつく。

ネギ先生の髪の毛はサラサラしているな。良い匂いもする。

手合わせ後にお互いにシャワーを浴びたが、私は大丈夫かな？

随分と汗をかいてしまったが、ちゃんと匂いが取れているだろうか？

いや、そもそもこの寝巻きに使っているジャージはちゃんと洗濯できていたのだろうか？

いつも洗濯機に放り込んで自動で洗濯していて、素材にあわせた洗濯などはしたことがない。

それに結構長い間使っているから、私の匂いが染み込んでいるかも……………。

……………マズイ、気になってきた。

「……………あの、私の体は変な匂いとかしていませんか？」



「え？ こ、答えなきゃいけませんか？

………変な匂いとかは別にしません。良い匂いです。  
あつたかくて柔らかくて、………気持ち良いです」

「え？ あ、ありがとうございます………」

そ、そういう意味で聞いたワケじゃないのだけれど、………  
………気持ち良いんだ。

………エへへ。

ふあ………、眠くなってきた。  
エヴァンジェリンさんすら寝てしまったというのは本当だなあ。  
これは誰だって寝てしまう。

ネギ先生との手合わせは疲れた。  
起きたら学校なんだし、さっさと眠るか。

これならアッサリと眠れそうだ。

このちゃんがネギ先生を抱き枕にしている気持ちがわかる気がする。

……………このちゃん、ウチ頑張るからね。

修行も勉強も頑張つて、絶対このちゃんを守るから。

だから、いつまでもこのちゃんは笑っていてね。

このちゃんの笑顔は、絶対にウチが守るから……………。

長瀬楓

ネ、ネギ坊主と刹那は拙者に恨みでもあるのでござるか？

今日はネギ坊主が顔を赤くし、刹那はニコニコと笑って、二人で手を繋いでエヴァ殿の家から出てくるなんて……………。

こんなこと、アスナ殿や木乃香殿にどのように報告すればいいの  
でござる？

しかも今度からのどか殿たちにまで報告しなければいかぬとは…  
……。

無表情のアスナ殿も怖いでござるが、笑っているだけのはずの木  
乃香殿も怖いのでござる。

プリンに釣られて変なことに巻き込まれてしまったでござる。  
依頼の危険度を見誤るとは、拙者もまだまだ未熟でござる。

……………こつなったら腹をくくって、最後まで付き合っし  
かないでござるな。何とかして木乃香殿達の狙いをネギ坊主達のまま  
にしておかなければ。

ネギ坊主と刹那には悪いが、拙者の身の安全を優先させてもらっ  
てござるよ。

第十九話 バレンタイン？ 浮気？調査（後書き）

ピコーーン！ 無表情明日菜というクールアスナ誕生フラグが立ちました。

ただし、選択肢を間違えると明日菜ヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーン！ 「いつまでもこのちゃんは笑っていてね」という刹那の願いが（別の意味で）叶うフラグが立ちました。

ただし、選択肢を間違えると木乃香ヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーン！ “空鍋をかき回す”ならぬ“白紙を読書”フラグが立ちました。

ただし、選択肢を間違えるとのどかヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーン！ ネギのヘタレフラグが立ちました。

今までこんな機会がなかったので気づきませんでした。子供と意識された上で攻めるのや攻められるのは平気でも、お互いに男女と意識した上で攻めるのや攻められるのは苦手なようです。

体感時間年齢100歳の魔法使いは伊達じゃありません。

今までは平気だったとしても、相手に意識された途端に恥ずかし

くならじしあまのな。

第二十話 バレンタイン？ 贈り物

長谷川千雨

ちう > おハローー（・・）p みんな元気ー！？

ちう > ちうは今日も元気だピョーーン！！！！

ちう > 今日も大変だったんだよー（<>）i

ちうファンHIRO > また忍者信じてる外国人の子供？w

通りすがりB > 10歳じゃしょうがないんじゃないw

ちう > その子自身は悪い子じゃないんだけどね

ちう > ただ周りの子達が常識知らずだから

ちう > その子に悪い影響与えないか、ちう心配なんだー

アイスワールド > さっすがちうタン

ちうファンHIRO > まるで天使のように優しいな

ちづ > え〜〜？ そんなことないよ〜〜

ちづ > でもありがとみんなー（< >）／

ちづ > 今日はお礼にニューコスチュームをお披露目するよ

ああ、至福の時。

何て気持ちいいの……………。

あのガキのせいできさくれ立った心が癒される……………。

何であのガキはホイホイと女に着いていくんだよ！？

警戒心てモノがねえのかっ！？

風呂場のときのマグダウエル見てたら、あのガキ狙いつてのが  
目でわかるだろうがっ！！！！

コンコン

しかも今度は桜咲までもかよ。長瀬からの報告では、週3の割合  
でのガキと一緒にマグダウエルの家に通い詰めてるみたいだし…

……。あいつはこういうのに興味ないと思っていたんだがなあ。

ああ、やっぱりクラスにマトモな奴はいないんだ。

シヨタコンがあんなに多いなんて……………。

コンコン！

捻くれたガキは嫌いだが、ああまで人を疑うことを知らないよう  
な純真すぎるガキも苦手だ。

田舎暮らしとはいえ、何であそこまで世間知らずに育ったのかね？

ドンドン！

いや、世間知らずじゃないな。一応物事は知っている。

ただ疑うことを知らないのと、物分りが良過ぎるだけなんだ……

…。



「長谷川さん？　　いませんか？？」

諦めちゃ駄目だ。

あのガキをマトモな道にさせることが出来るのは私だけなんだ。  
クラスの連中が暴れるにしても、何とか日本の普通がああじゃな  
いことを認識させなければ。

「長谷川千雨さん！？」

って、さっきからうるせえな？

何であのガキが私を呼んでるんだよ？

「ちっさくさん？　　いませんか？？」

.....。

.....。

.....何でちっ!？

「あれえ？ さっき中から」ちっは今日も元気だピョーーン!!  
!」って聞こえたのに.....」

げえっ!？ 口に出してたっ!？  
キーボード打つときに同時に口に出す癖がっ!？

「んー？ 寮長さんに聞いてみるかな？」

ちよ!？ おま!？  
待て、このガキヤ!!!

「ちょ、ちょっと待てっ!」

「何だ、居たんじゃない……………ですか。長谷川さん」

「うお!？」

首が180度ぐらい回って後ろ向きやった!？ 気持ちワリイ

ッ!…!!

何だよ？ 何かおかしなモンでも……………って、ヤベエツ！ コス  
プレ衣装のままだった!？

「と、とりあえず中へ入れっ!…!!」

「え!？ ちょ、ちょっと待ってください!？」

ええい！ 抵抗すんな!…!!

こんな姿誰かに見られたら、今後外に出られない。  
何とかこのガキを口止めしなきゃ……………。

「な、何で鍵をかけるんですかぁっ!？」

「いいから! い、今廊下に他に誰かいたのか!？」

「ヒイツ!？ い、いませんでした、けど………」

よし、それならコイツの口止めをすれば大丈夫だ。

「鍵をかけて監禁なんて……」。

長谷川さんなら雪広さんみたいなことはしないとってたのに……」

グハアッ!!!

わ、私があの変人共同レベル!？

ていうか、いいんちょはこのガキを監禁したことあるのかよ!？

「い、いったい何の用なんだ……………」  
何の用で私の部屋に来たんだ？」

「プ、プリントを届けに来ました。  
印刷機の調子がおかしくて、帰りのHRに少し間に合わなかった  
んです。」

長谷川さん以外はまだ教室に残っていたから渡せましたけど、長  
谷川さんは早めにお帰りになられていたので僕が届けに来ました。  
別に急ぎのプリントというわけじゃありませんけど、一人だけ渡  
していないというのはどうかと思って……………」

「ああ、そういえば帰りのHRにお前はいなかったな。」

別にそんな風に怯えんな。取って食うわけじゃないんだから。  
…………… ちょっとお願いしたいことがあってな」

「そ、そうなんですか！？  
本当に酷いこととかしないんですか！？」

ああ、もう！ めんどくさいなあ。  
ちょっとコスプレのことを秘密にしてもらいたいだけなのに。

このガキから見たら確かにコスプレは変かもしれないけど、ここ  
まで怯えることは……………アレ？

プリントを届けに部屋に来る

ノックしても返事がない

「ちうは今日も元気だピョーーン!!!」と奇声が聞こえる

更に呼びかけても返事がない

戻ろうとしたらコスプレ女が出てくる

目をそらした瞬間、部屋に連れ込まれる

ドアに鍵をかけられて監禁される

「ちょっとお願いしたいことがあってな」

今ココ

「アッーーーーー!？」

次ココ?

！！！  
どう見ても不審者です！ 本当にありがとございましたあつ！

「……………ま、待つてください、ネギ先生。  
落ち着いて話を聞いてください」

「だ、大丈夫です。僕は落ち着いています。  
ですから、長谷川さんも落ち着いてください」

怯えんな。ジリジリと後ずさんな。  
わかったから。私が悪かったのはわかったから。

よし、良い子だからお姉さんの言うことは聞きなさい。  
大丈夫。別に酷いことしないから。……………ね？  
ほーら、ネットアイドル女王のちうタンの笑顔だよ

だからそんなに怯えんな。コラ。

「……………つまり、長谷川さんの趣味はコスプレで、“ちう”というハンドルネームでネットアイドルしてることは秘密にしろ、と？」

「い、いや、そんな命令形じゃなくてですね。

恥ずかしいから秘密にして欲しいな、なんて……………」

「別に……………構いませんけど」

……………完璧に怯えられてる。

ああ、これで私もあの変人集団の仲間入りしちゃった。

小さい子供に怯えられるというのはさすがに精神的にキツイ……………。

「……………フウ。もう大丈夫です。本当に落ち着きました。

誰だって人に秘密にしておきたいこともありますからね。コスプレ趣味を秘密にするのは了解しました。

それと、別に無理して丁寧語を使わなくてもいいですよ」



「あ、別に無理してるわけじゃないんですけど……」

「あと伊達メガネは視力が悪くなるかもしれませんが、あまりしないほうがいいと思います」

「う、……私はメガネつけずに人と会ったりするのは駄目なんです」

「綺麗な顔立ちなのにもったいないです。

そのコスプレも最初見たときはビックリしましたが、よくよく見れば可愛いらしい衣装ですね。

似合っていて可愛いですよ、長谷川さん。その……バニースーツ？」

いや、確かにウサギをモチーフにした衣装だけど、バニースーツとは違うんじゃないか。

というか、言いよどむってことは、このガキはバニースーツ知ってるのか！？ とんだエロガキだな！？

というか真顔で褒めんなっ！

クソツ、外国人は日本人と違って、オブラートに包まないで直接的に女を褒めるってのは本当らしいな。

「いや、ウサギをモチーフにしたレオタードなどの身体の線が出る衣装がバニースーツの定義らしいので、長谷川さんのその服は定義からするとバニースーツです」

「細けえんだよっ！　っていうか、ガキがそんな知識持つてる必要はねえ！

「どこのどいつだ！？　お前にそんな知識植え付けたのは！？」

「ゲームとかアニメのキャラによくいるじゃないですか」

「子供がそんな不健全なもの見んなっ！

「……………おい？　何で目エそらすんだ？」

「え？　だって不健全なもの見ちゃ駄目だって長谷川さんが……………」

「私が不健全だってか！？」

あ、いや。

確かに10歳の子供にこんな格好は目に毒だが、それに自分で自分の趣味全否定だよ、おい。

「冗談です。

このぐらいは許してくださいよ。連れ込まれてドアに鍵をかけたときは本当に怖かったですから。

……雪広さんのときはお茶に付き合っただけで済みましたけど。」

「か、からかったのかよ、てめえ……。」

……あー、いや。私が悪かったです。この格好見られて慌ててしまいました。

それといいんちよのことは諦めてください。アレはもう病気の類です」

「はい、わかりました。

この話はこれでお終いにしましょう。僕はわざわざ他の誰かに言い触らしたりしないので安心してください。

それと長谷川さんはさっきの口調の方が、生き生きしていて魅力的ですよ。

猫被りたいのはわかりますけど、事情を知った僕の前ぐらいでは素の長谷川さんを見せていただけると嬉しいです」

「ばっ!? 馬鹿かてめえ!？」  
教師が生徒を口説いて良いと思ってんのか!？」

「え? そういつつもりじゃありませんけど?  
ずつと猫被っているのはストレス溜まるでしょう。それに他人が  
いるならともかく、僕と二人っきりのときはもう取り繕っても無駄  
なんですから、無理しないで普段の口調を使ってもいいじゃないで  
すか」

「べ、別にお前と二人っきりになんかならないよ……………」

「いや、今二人つきりじゃないですか。というか既に普段の口調じ  
ゃないですか。」

あとは何か相談とかあるときも、その口調で結構ですよ」

「……………わかったよ。考えとく。  
お前に相談することがあるかどうかはわからないけど……………」

……………とんだ醜態晒しちゃった。  
確かにこれ以上取り繕っても、もう無駄以外の何物でもねーんだ  
が……………。

「授業に関係ないことでも大丈夫ですよ。部活や家庭、趣味のことでも何でも。」

まあ、僕みたいな子供に相談しようと思っていただけかもしれませんが、そのときは精一杯親身になって対応しますので。」

「そんな機会があつたらな」

「あ、それと長谷川さんはもうちょっと自信を持ってもいいと思いますよ。」

せつかく可愛いんですから」

「う、うるさいな。」

真顔で褒めるなよ……………」

外国人で感性が違うから仕方がないとはいえ、このガキは……………。そもそもハイスペックなウチのクラスの中でも、群を抜いてハイスペックなんだよな、このガキ。

10才なのに教師として優秀だし、女に囲まれてても紳士だし、風呂場でもいやらしい目で見てこなかったし、ガキの癖に結構いい肉体していたし……………。

宮崎やマグダウエルが惚れるのもわかる気がする……………って、そうじゃねえだろ！ 何考えてんだ、私は！？

……………う、マズイ。

何だか急に恥ずかしくなってきた。私は何でこんな格好を二人つきりでガキに見せてんだ。

「どうしました？」

急に顔が赤く……………」

「べ、別に何でもねえよ……………」

「？ あ、もしかしてジロジロと見るの失礼でしたか？」

「た、確かに恥ずかしいことは恥ずかしいが……………」

「？ ん……………」

ああ、“綺麗な顔立ち”とか“生き生きして魅力的”とかは本心ですからね。

別にお世辞とかで言ったつもりじゃないですよ

「だ、だから真顔で褒めんなっつーの！」

……外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない……。

駄目だ。考えれば考えるほど意識しちまう……。じゅ、10歳のガキ相手に何でこんなに照れてんだよ、私は？

「さて、名残惜しいですが、そろそろ僕はお暇しなきゃいけないです。」

「このあと学園長と会わなきゃいけない……。」

な、“名残惜しい”って何だよ!?

もうちよっここにいたってのか!?

そ、そうじゃない! これは世間知らずなガキの戯言だ! だから私が意識することじゃない!!!

「というわけで、ドアの鍵を開けてもいいでしょうか？　そしてお暇させてもらってもいいでしょうか？

いやあ、ずっと長谷川さんの姿を拝見していたいのですが、学園長に用事があります。残念ですねえ。名残惜しいですねえ。

……………コスプレのことは誰にも言いませんので」

……………え？　あれ？　まだ怯えてる？

そつえばドアに鍵かけて監禁中だったな。

もしかして、今までの私の機嫌をとるための褒め殺し？

……………べ、別に変な勘違いなんかしてねえからなっ！……！



エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「どうしたんじゃね、ネギ君？  
何だか疲れてる顔をしとるが……………」

「あ、いえ……………」  
ちよつと面白半分で首を突っ込んだら、思ったよりも大事になっ  
てしまった。

まあ、無事に解決できたので問題はありませんが」

「ふうむ。それならよいがの」

「それと金曜日のバレンタインですね。

日本のイベントはある程度勉強してきたので、バレンタインは2  
・Aの皆さんで大騒ぎになると思っていたんですが、何故かまった  
くと言っていいほどバレンタインの話題が出てこないんですよ。  
静かなのは結構なんですけど、何だか嵐の前の静けさのような気が  
して、それが逆に恐ろしいというか……………」

明日菜さんと木乃香さんが何だかやけにご機嫌なのが唯一の救い  
です」

「……………強く生きるんじゃないぞ」

「アツサリと見捨てないくださいよ。」

タカミチも出張から戻るのは14日の夕方、それまで僕一人で2・Aの相手しなきゃいけないのに……………」

ハッハッハ。

バレンタインはカオスになるだろうから諦める。  
諦めたらいろいろと楽になるぞ。

「だから相坂さよのことはバレンタイン後に行なうのか？」

「そうですね、エヴァさん。」

それに相坂さんが乗り移る用の人形は出来てますけど、まほネツトに注文した年齢詐称薬がまだ届いていないですしね。

相坂さんには人形に乗り移ってもらって、年齢詐称薬で見た目を誤魔化してもらえれば授業に出ることも出来ます。年齢詐称薬は結局のところ幻術ですからね。

しばらくの間はそれで過ごしてもらい、生活に問題なかったら常時幻術がかかる魔法具でもつけてもらいましょう。

当日は桜咲さんに立会いをしてもらおう予定ですが、念のために龍宮さんにも声をかけておきたいです」

「ウム。書類関係の準備は出来ておるよ。」

「……………しかし、龍宮君はどうじゃる？　そこまで必要かの？　ワシも立ち会うつつもりじゃし、戦力が多すぎないかの？　そもそも危険なコトはないと思うのじゃが……………」

「龍宮さんには護衛の他に、人形に乗り移った相坂さんを魔眼で見てもらって、問題がないかどうかを確認していただきたいんですよ。」

それといくら学園長の同級生だったからって、警戒しないでいいわけじゃありません。」

確かに60年地縛霊やって問題を起こしていないので、危険はないと思いますけどね。あくまで“念のため”です」

「まあ、龍宮マナの魔眼で見て、問題なければ安心は出来るな。さすがの私も人形に幽霊を乗り移らせたことはないから、どうなるかはわからん。」

あ、私も立ち会っぞ」

「そういうことなら構わんぞい。  
ワシの方から依頼しておこう」

「予定としてはバレンタインの夜を考えています。」

バレンタインは皆さん祭りのように騒ぐことになるでしょうから、夜になったらわざわざ学校に来るような人はいないでしょう。」

しかも、金曜日の放課後なら尚更です」

「わかったぞい。

ワシの方も予定を空けておこつ」

うむ。これで相坂さよの話はお終いだ。

これからが本題だな。

「茶々丸さんも入れた僕達6人なら、大抵のことは大丈夫でしょうね。

学園長も何かあったらお手伝いをお願いします」

「ウム。わかっておるわい」

「それとは別に学園長にお聞きしたいことがあるんですけど」

「何かね？ 何でも聞いてみなさい、フォッフォッフォ………」

「ご機嫌だな、ジジイ。

昔の同級生が救われるとあってはご機嫌にもなるか。」

「エヴァさんの力を封印している“学園結界”のことなんですけど？」

「フオッフオッフオ………フオッフオ！」

「どういふことなんだ、ジジイ？」

返答次第ではタダでは済まさんぞ………」

くそっ！ 変だと思っていたが、電力を利用した“学園結界”で私の力を封じていたとは。

てつきりナギの奴が強引に『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』をかけたせいで、私の力も封印されたのだと最近まで思っていた。

ネギが解呪の研究の途中に気づいてくれなくても、茶々丸の調べでだいたい予想は出来ていたがな。

しかし、改めて事実を確認すると腹が立ってくる………。

「エヴァさん、気持ちはわかりますけど、そう怒らないでくださいよ。」

まず僕に任せていただける約束でしょう」

「わかってるよ、ネギ。」

ジジイ、キリキリと話せ。ネギのおかげでだいたい予想はついてるんだ」

「……あー、やっぱり気づいてしまったかの。」

ネギ君がエヴァの解呪に取り組んだときから予想はしておったが………」

「エヴァさんは父のかけた『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』のせいだと思っていました。いいですけどね。」

僕もそう説明されたために気づくのに遅れてしまいました。僕もまだまだ未熟です。」

それで学園長に聞きたいことなんですが、「“学園結界”は15年以上前からあったんですか?」、そして「“学園結界”は目標とした対象のみを封印できますか?」の2点です」

「ム………。それを聞くということは本当に事情が予想できているようじゃの。」

答えは「15年以上前からあった」、そして「そんな器用なことは出来ん」、じゃよ」

なるほどな。ネギの予想通りというわけか。  
だからといって、ムカつくことには変わらないのだが。

「でしょうねえ。」

エヴァさんが麻帆良に来てから“学園結界”を張ったとしたら、  
エヴァさんはそのときから力を封じられることになります。

そんなこと、エヴァさんが気づかないわけじゃないです」

「その通りじゃ。」

言い訳になってしまいが、エヴァに“学園結界”が効いてるとわ  
かったのは12年前のことなんじゃよ。

ナギが約束通りに3年経っても呪いを解きに来なかつたので、ワ  
シの方でも解呪の研究をしたのじゃが、そのときによやく気づい  
ての。

エヴァがナギに麻帆良にいきなり連れて来られたときには既にこ  
うじゃったので、てっきりナギが封印したのだと思ひ込んでおつた  
んじゃ」

「学園長もエヴァさんと同じ勘違いしてたんですね。」

というか、『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』かけただけなのに、そんな勘違いされる  
僕の父っていったい………?」

「い、いや、ナギのことだしなあ……………」  
なあ、ジジイ?」

「ま、まあ、そうじゃの。

ナギだからしょうがないというか……………」

「……………ハア、やっぱりデタラメな人なんですね、父は。  
僕とは随分違う人のようです」

「……………」

「え? 何です、この沈黙は?」

突っ込まん。私は絶対突っ込まんぞ。  
ジジイ、お前が突っ込め!

あ、目を逸らすな。上司たるお前の役目だろう!

「そ、それでじゃな!

エヴァにそのことを言おうとも思ったのじゃが、その頃のエヴァ



はナギが約束通りに来なかったから荒れておつての。つい言い出せなかったのじゃよ。

エヴァ自身だって、そんなこと言われたら当時の自分がどうしていたか予想つくじやる?」

話も逸らすな。

……まあ、言っていることはわかるがな。

あの頃は確かにナギに裏切られたと思って荒れていたからな。

「それでズルズルと今の今まで言わなかったと?」

「言にくいのが、そういうことじゃのお。」

ま、勘弁しておくね。コッチにも事情があったんじゃ」

「フン! まあいい……………」。

どちらにしる、今まで15年間気づけなかった私も間抜けだったんだからな。

それよりも、やはり私を“学園結界”の対象外にすることは出来んのか?」

「無理じゃ。さつきも言ったが、そんな器用なことは出来ん。

“学園結界”は結界内の高位の魔物・妖怪を動けなくするものじや。例えば学園地下に石化封印している無名の鬼神なんかのためにの。

そもそも力が封印されているとはいえ、結界内でエヴァが五体満足に動いている方が不思議なんじやよ。ましてや満月の日では吸血鬼の力を取り戻すなんてことは。

そのことが原因で、“学園結界”がエヴァに効いているということに気づくのが遅れてしまったのじゃが」

「やっぱりそういうことでしたか。

ホラ、昨日僕が言った通りじゃないですか。エヴァさんが“強すぎる”のが駄目なんですよー」

ハッハッハ。

それは事実なのだが、そこまでハッキリと言つな、ネギ。

しかし、“強すぎる”のがいけないとはな。

フ、参ったな。まさか“強すぎる”せいで、こんな不利益があるとは。

“強すぎる”というのも困ったものだ。

最初にこの事実を知ったときは学園関係者を全員血祭りに上げようかと思つたが、そういう事情なら許してやろう。

「学園長としては、エヴァさんの力を取り戻すのに何か問題はありますか？」

「……………個人的にはない。この15年間でエヴァのことも信用しておるからの。」

しかし、この学園の責任者としては無理じゃ。

エヴァ一人のために“学園結界”をやめるわけにはいかんし、エヴァのみを対象外とするような“学園結界”の改変には、エヴァの懸賞金が数十人分はおそらく必要じゃ。さすがにそんな大金は出せん」

「そこまで大事にはしないです。試してみたいことがあります」

「何じゃね？」

「エヴァさんを封印具で“学園結界”に反応しなくなるぐらいにわざと力を封印します。」

それならきつと、今より結果的には力を取り戻せるはずですよ」

「……………フム。実を言うと、そのことはワシも考えついていた。プライドの高いエヴァがそんなこと了承しないじゃろうと見送ったが、エヴァが構わないのならよいが、いいのかな？」

「構わん。力を1割でも取り戻せば、花粉症とかに悩まされなくとも済むからな。」

「ただしネギに封印具を用意させるのが条件だ。ネギなら信頼できるからな」

「既にまほネットで注文済です。年齢詐称薬と一緒に届きます。」

「エヴァさんには僕の私用や相坂さんのことでも別荘を使わせていただいでるので、それのお礼も兼ねて僕から贈らせて頂きます。」

「形状はエヴァさんのご希望で指輪型ですが」

「指輪？ ネギ君からの贈り物？」

「……………エヴァ、どの指に嵌めるつもりじゃ？」

「べ、別に左手の薬指に嵌めようとなんか思っておらんぞっ！」

「アハハ、やだなあ。結婚指輪じゃあるまいし。」

「左手の小指のサイズで注文しました。僕は知りませんでした。左手の小指の指輪には“変化の象徴”という意味があるらしいですね」

「……………“願いの成就”や“自分の魅力をアピールする”、“チャンスに恵まれる”などの意味もあるが黙っておこう。」

クソツ、桜咲刹那に別荘の使用を許可するんじゃないぞ。  
最近奴のネギを見る目が怪しいぞ。

あのネギが頼みごとをしてきたことに浮かれて、別荘内でネギと二人きりになることを忘れてた。

とりあえず世話役の名目で茶々丸の姉を置いておいたが、いくら治療とはいえ、まさかネギと桜咲刹那が抱きしめあいながら寝ているとは。

まだ変なコトはしていないらしいが、油断は出来ん。

だから桜咲刹那には、ネギから贈られる指輪をジツクリと見せてやることにしよう。くっくっく。

ネギを狙ったのは私の方が先なんだからなあ……………。

## 第二十話 バレンタイン？ 贈り物（後書き）

千雨ってムツツリスケベなタイプだと思います。

学園祭のときにネギと仮契約するシーンなんか特にw

何で千雨ってコスプレ趣味ばれてなかったんですかね？

キーボード打つときにあんなに大声で騒ぐのに。

それとバレンタインが金曜日ってのはあっていると思います。

修学旅行のときの『いどのえ日記』に“4月24日木曜日”と書かれていましたので、逆算的に2月14日は金曜日です。

おしいなあ。2月14日が土曜日だったら、“13日の金曜日”に早めのバレンタインパーティーをするのにw  
そしたらパーティーをカオスにするのですが……。

“学園結界”についてはオリジナル設定です。  
一応不自然ではないように出来たと思います。

しかし、ヘルマンが麻帆良内で戦えた理由に困ってしまいます。  
高位の魔物・妖怪はNGだけど、高位の悪魔ならOK？ んなわけないか。

フェイトのツテでMM元老院から手に入れた、学園長さえ知らな

い“学園結界”をすり抜けれる裏コード的な護符でも持っていたことにはしますか……………。

そしてもちろん、せつちゃんに立ち会ってもらおう＝楓の監視付きです。

ネギ達の運命は如何に!?

第二十一話 バレンタイン？ 女子中学生は見た

宮崎のどか

『こちら楓、刹那と真名がエヴァ殿、茶々丸殿と正門玄関前で合流したのでござる。』

拙者は約1km先から望遠鏡で監視しているでござるが、もう少し近寄ったら真名に気づかれるでござるよ。』

「こちら木乃香、ウチラも学校に行くわ。20分ぐらいで着くから、それにあわせて合流してな。」

ありがとな楓。あとでウチの部屋に来てプリン食べてええで。」

「……………何で1km離れてるのに気づかれるんだよ？」

「龍宮さんも、というのはあまり考えられないですね。」

冷静になって考えれば、何か事情があるのでしょいか？」

「そ、そうだよね。」

ネギ先生せんせいが変なことするわけないもんね。」



「…………甘いわよ、本屋ちゃん。  
ネギが変なこと考えてなくても、相手がそうじゃないとは限らな  
いんだから」

そ、そんなあ？

は、はわわわわ……………、だとすればいったいどうしたら？

せっかく今日のバレンタインパーティーを楽しく終わることが出  
来たのに…………。

私は“2、3日は持つチョコを作るグループ”だったんだけど、  
他のメンバーの好意でネギ先生せんせいにチョコを渡す役を譲ってもらえた。  
皆で作ったチョコだけど、渡すときにネギ先生せんせいに「ありがとう」  
ございます、宮崎さん」ってお礼を言われちゃった。エへへ。

「しかし7時過ぎなのに、ネギ坊主は学校に何の用アルネ？」

「さあ？ 本人達に聞いてみないとわからないです。

……………ところで何でくーふえさんもいるのですか？」

「ネギ坊主はあれから全然手合わせしてくれないアル。

ここは一つ弱みを握て、それをネタに手合わせをお願いしよう」と

「思たアルよ」

「くーへ、それ“お願い”やない。“脅迫”や」

「まあ、ネギなら大丈夫でしょ。

それに弱みになるようなことをネギがしていなければいいんだし  
ねえ……………」

今私と一緒に居るのはユエ、アスナさん、木乃香さん、くーふえ、  
千雨さんの5人。ハルナはあのとときいなかったし、原稿が忙しいみ  
たいだからハルナには秘密。

あとは刹那さんを監視していた楓さん。……………本当にクラ  
スメイトを監視なんてしていいのかな？

木乃香さんの話では、今日のパーティーが終わったあとにネギ先<sup>せん</sup>  
生は用事があるので夕飯はいららない、と言ったみたい。しかも帰り  
は遅くなって、泊まりになるかもしれないなんて……………。  
それにあわせて楓さんから刹那さんが外出するという報告があっ  
たことで、木乃香さんから全員集合がかかったの。

「で、でもいいのかな？ こんなことして……………」

「大丈夫ですよ、のどか。」

こんなこともあるうかと、学校の机の中に英語の教科書を忘れておきました。何かあっても言い訳は出来ます」

「奇遇やね、ゆえ。」

「ウチも実を言うと筆記用具忘れたんよ」

「……………怖いよ、お前ら」

「そもそも何で千雨ちゃんまでいるのよ？」

「確かに事情は知っているけどさ……………」

「あのおきのお前等の顔見たら放っておけるわけないだろうが。」

「……………おい、誰も刃物なんか持ってきてねえだろうな？」

「え？ 鞆の中にカッターは入ってますけど」

「それがどうかしたのかな？」

「……………宮崎か。まあ、お前ならきつと大丈夫だな。」

「他の奴は危険物持ってるんなら置いてけよ。殺人事件なんか起こ」

されちゃたまんねえ」

「殺人事件て何よ？」

「そもそも危険物なんか持ち歩いてないわよ。楓なら手裏剣とか持つてそうだけど」

「いや、アイツはいい。」

「非常識な存在だが、ストッパー役が私一人なんて無理ゲーすぎる」

「？ どういうことだろ？」

「皆さんそろそろお静かに。」

「騒ぐと校舎内にいる人に気づかれる可能性があるです」

「……………学校に着いたはえーけど、夜の学校って不気味やわ。楓もまだ来ておらんようやな」

「学校に着いた。……………着いたんだけど、何か怖い。」

夜の無人の学校がこんなに怖いなんて思わなかった。  
まだ校舎の中に入ったわけでもないのに。

「な、何アルか？ 身体が震えてくるアルよ」

「べべべ別に怖くないですよ。  
足が震えるのは武者震いというやつなのです……………」

「ゆ、ゆえ〜、何か変だよ〜」

「た、確かにいつもと学校の雰囲気違つとるなあ……………」

「何か寒気も感じるわね……………」

「おかしいだろ、コレ。  
何で玄関にお札なんか貼ってるんだよ……………」

皆もおかしく感じてるみたい。  
怖く感じるのは私だけじゃないんだ。あんなに強いくーふえまで

怖くなってるみたい。

それに玄関にお札まで……………お札？

「……………えっ？」「……………」

「？ な、何だよ？」

「お札って……………どこにあんの？」

「私には見えないアル」

「すすすすすいません、私にも見えません。  
……………ここまで暗いと……………」

「千雨ちゃん、眼鏡の度あってないんじゃないの？」

「視力は1・2だよ。これは伊達眼鏡だ。  
どこも何も、目の前に貼られてんじゃないかよ」

千雨さんが目の前にあるガラス扉の真ん中を指差すけど……………見

えない。

他の皆も見えてないみたい。

お知らせのプリントか何か貼ってあるのかとも思ったけど…………。

「遅くなったでござる。」

…………おや？ 全員どうしたでござるか？」

「……………何で皆こんな怪しげなお札見えてねーんだよ。

おい、長瀬。ここにお札貼られてるの見えるか？」

「そこにお札？ 何のこ……………ム？ ………………あるでござるな。確かに千雨殿の言われる通りにお札が貼られているでござる。しかしこれは……………」

「そうだよな、見えるよな。私だけじゃねーよな。

私は変じゃねーよな？ ………………って、忍者と同じモン見えてる私の方が明らかに変じゃねーかっ!？」

「落ち着くでござるよ、千雨殿。そんなに騒ぐと誰かに気づかれてしまつでござる。」

それに拙者は忍者ではござらん」

「えっ？ 楓まで何言ってるのよ？」

「いったいどこにお札なんて………あつた」

ええ？ アスナさんがペタペタと千雨さんが指差したところを触っていたら、急にお札が見えるようになった。  
「いったいどうということなの？」

「震えが止またアル………」

「あ、本当だ。」

「怖い感じがなくなったね、ゆえ？」

「ほ、本当ですね。」

「危つく漏ら………何でもないです」

「何なんだよ、コレは？」

「オカルトの類か………？」

「あー………、オカルトというか何というか」

「何なんだろう、いったい？」



ただネギ先生せんせいに会いにきただけなのに、変なコトになっちゃった。

いつもと違って、とても怖い感じがする学校。

見えないお札が玄関に貼ってあって、それをアスナさんが剥がすと怖い感じがなくなった。

そのお札が人払いをしていたみたいに……。

まるでこの前読んだライトノベルみたい。

「……………あれえ？」

このお札の字、おじいちゃんの筆跡と似とるなあ」

え？ おじいちゃん？

木乃香さんのおじいちゃんといったら……………。

「学園長先生？」

「ウン。おじいちゃんの書を見たことあるけど、それに似とるんよ……………」。

そういえばチョコ渡したとき、おじいちゃんは今日遅くまで仕事

でチョコを夜食に食べる言つてたなあ」

「ということは、学園長も校舎内にいますよね……………」

「おいおい、学園長まで絡んでるのかよ?」

「どーするアル? 何かヤバイ感じアルよ」

「……………いや、ウチはいくで!」

こ、木乃香さんの目が燃えちゃってる……………。

大丈夫なのかな?

こんなもの貼ってあったということは、学校の中に誰も入れたく  
なかったということだから、もしかしたら危険なことがあるんじゃない  
……………。

あ、でもネギ先生せんせいがまだ校舎内にいるってことは、もしかしたら  
ネギ先生せんせいが危険なことに巻き込まれているかも。

は、はわわわわ……………、そうだったらどうしよう?..

「あくまでウチラは忘れ物を取りに来ただけや。別に疚しいことな  
んかあらへん。」

もしかしたら、忘れ物を取りに行く途中で変なもの見るかもしれ  
へんけど、あくまでそれは偶然な不幸な事故や」

「おいおい、近衛。」

世の中には相手の事情なんか知ったこっちゃない人間なんか、お  
前が知らないだけでたくさんいてな……………」

「……………確かにそういう人達はいるかもしれませんが、そんな人達  
はわざわざ女子中学校を根城にするようなことはしないと思うです」

「それはそうね。」

というか、女子中学校を根城にするマフィアなんかいたら、逆に  
お笑いなんだけど」

「そう言われると、確かに怖がる必要はないかもしれないアル」

「あー、確かにそうでござるが……………」

そ、そうだよね。そんな人達がわざわざ麻帆良の女子中なんかに  
来ないよね。

でも、それだったらこのお札はいつたいなんなんだろう？

「ここまで付き合ってくれてありがとな、千雨ちゃん。とりあえず  
教室まで行ってみることにするわ。

実を言つと、筆記用具忘れたのはわざとやないんよ」

「私も行きます。

ここまで来たなら英語の教科書を取りに行きたいですし」

「ま、学校なら危険なことはないでしょ。

このお札は気になるけどさ……………」

「あ……………、わかつたよ。私も行くよ。

どうせオカルトみたいなものなんて現実にはないはずなんだ。別  
に怖がる必要なんかねーかな」

確かに私達が通っている学校に危険なんてないよね。ちょっとぐ  
らいなら大丈夫だよな。

幽霊とかいるわけないし、それに幽霊なんかより新田先生とかの  
ほうが怖いし……………。

ネギ・スプリングフィールド

『どういうことでしょうかね、いったい？』

『な、何故木乃香お嬢さまが夜の学校なんか………』

『忘れ物、でしょうか………？』

『おい、マズイぞ。楓がコツチを気にしてる。』

ネギ先生の認識障害は大したものだが、即興のものじゃ楓に違和感をもたれるぞ』

『しかし、ネギ先生は現在認識障害の魔法と私達の念話中継で精一

杯です。

今は息を殺して近衛さんたちが立ち去るのを待つしかないかと…

……」

『あ、あの人達と本当に友達になれるんですね!？』

もうペンスピニングやコンビニの立ち読みで時間潰したりしないでいいんですね!？』

上から僕、剎那さん、アルちゃん、龍宮さん、茶々丸さん、相坂さん。

ちなみにアルちゃんと相坂さん（人形ver：身長約20cm）は僕の肩に乗り、他三人は僕の左右と後ろにいて僕の肩に手を乗せて、接触式念話で会話しています。

接触式だと盗聴されなくていいんですけど、相坂さんのはしゃぎっぷりがうるさいです。

「………パーティーのチョコの匂いがまだ染み付いてるね」

「あれ〜？ 何で教室の明かりついてたのに誰もいないんやろ？」

「この教室だけ消し忘れ、ということはないでしょう。誰かさっきまでこの教室にいたのは間違いないです」

「別に誰か隠れているわけじゃなさそうねえ」

「（……………教室の隅に違和感を感じるでござる）」

「とりあえず近衛、綾瀬。

筆記用具と英語の教科書を取ってこいよ。自分の机に忘れたんだ  
ろ」

何だ、忘れ物ですか。焦った。

てつきりエヴァさんとか学園長かと思って、気づくのに遅れちゃ  
ったし。

相坂さんの人形への憑依などの作業がアツサリ終わったあと、エ  
ヴァさんは学園長と一緒に学園長室に行きました。

僕が贈った指輪のおかげで少しは力を取り戻すことが出来たので、  
それを他の魔法先生に説明しに行っただけです。

僕や茶々丸さんもついていこうかと提案しましたが、上機嫌なエ  
ヴァさんにそれには及ばないと断られました。

きっと今日僕が贈った指輪を見せびらかしにいったんでしようね。  
指輪を贈ってからエヴァさん凄いいご機嫌でしたし。

あとは相坂さんに細かい諸注意や魔法の隠匿のことなどを教えれ  
ばミッシェンコンプリートだったんですが……………。

『つて、あれ？』

刹那さん？ 確か学園長から貰った魔法符で人払いしてたんじゃない？

『は、はい！ 確かに正面玄関に貼りました。正面玄関に近寄った一般人は学校に入りたくなくなるようになります。夜はそれ以外の出入り口は封鎖されているはずですが……』

『でも現にここにいるじゃないか。不良品か？ ケチって学園長手製の魔法符で済ますからだ』

『あれじゃないですか？ アスナ様が持っているのが、学園長から頂いた人払いの魔法符では？』

あ、本当だ。……ということは『マジックキャンセル完全魔法無効化』のせいですか？

いや、『マジックキャンセル完全魔法無効化』は空間系とかの魔法は無効化できないので、魔法符自体に備わっている“一般人から見えなくなる”という認識障害は効くから、明日菜さんには魔法符自体が見えないはず。ということは、適当にドアを触ってたら偶然触った？



……………いや、そうか、長谷川さんか。

長谷川さんの認識障害が効きにくい体質がここに出たのか。  
長谷川さんが見つつけて、アスナさんが剥がしちゃったのか。

『しかし、式神から何の連絡もなかったのは何故だ？

何かあったら念話してくる手筈になってたのに……………』

『……………式神？ 念話？

あ、ごめんなさい。きつと僕のせいです。

相坂さんが人形に憑依する前に張った結界のせいです。憑依する  
ときに他の浮遊霊とか思念波が偶然悪さしないように、教室の外か  
らの人間外の干渉妨げてました』

『おいおい、ネギ先生。

“過ぎたるは及ばざるが如し”って言葉知ってるかい？』

いやいや、ちゃんと結界張る前に説明しましたよね!?

式神で木乃香さんの護衛してるって聞いてませんよね!?

……………まあ、ちょっと“念のため”にしてはやりすぎかな、と  
思っていましたけど。

それとちびせつなの存在忘れてました…………。

「それにしても、せつちゃんはどこにいるんやろなあ？  
学校に入ったのは見たんやろ？」

「あい、それは確かに見たでござるよ。  
刹那が真名、エヴァ殿、茶々丸殿と一緒に校舎内に入っていくの  
を確認したでござる」

「気づかれた、ってことはねーな…………。  
1km以上離れた監視だったんだろ。それで気づかれたら怖えー  
」

「そもそもこの2週間、木乃香さんの依頼でずっと監視していたの  
ですよね。」

今日に限って気づかれるということはないと思います」

『……………刹那さん？』

『も、申しわけありません！』

最近見られているような気がしてましたが、てっきり木乃香お嬢

さまの視線かと思って……………」

『さすがにこれは仕方がないよ、ネギ先生。

私でも1km以上離れたところからの、殺気のない視線は感じ取れない』

「玄関前で私達騒いじやったから、それで気づかれちゃったのは…

……………」

「それだったら教室の明かりもちゃんと消すアルよ」

「そうよね。だったら職員室かしら？」

「確か職員室も明かりついてたわよね」

きつと、はしゃいでた相坂さんを落ち着かせていたときですね。人形状態で走り回る相坂さんを落ち着かせるのは大変でしたよ。

「というか、ずっと刹那さんは楓さんに監視されていたんですか。となると、朝エヴァさんの家に通っていたことも知られちゃってますかね？」



『ええ！？ ネギ先生と刹那さんって良い仲なんですか！？』

『ち、違う！』

ネギ先生に抱きつかれて寝るのが恥ずかしいだけだっ！』

『ちよ！？ 僕は別におんぶでもいいって言ったじゃないですか！』  
『？』

『……………』

『お兄様も恥ずかしがられていましたよね』

いや、あんだだけ意識されたら、コツチも意識しちゃうんだよ、アルちゃん。

明日菜さんや木乃香さんは弟とかペットみたいな感じで接してくるから平気だけど、あそこまで恥ずかしがられたらコツチも恥ずかしいんだよ。

『じゃあ、職員室に行ってみようか』

『そうやね。それとおじいちゃんのところにも行ってみよ』

「結局何もなかったな。  
そうだよな。オカルトなんて実在しているわけねーよな」

さっさと職員室に向かってください。

当直の瀬流彦先生が居るはずですので、あの人ならうまく誤魔化してくれるでしょう。

その際に僕達は「ネギ先生、話が終わったのでマスターがコチラに戻られるそうです」って何ですと!?

エヴァさんが教室に戻ってくる？

明日菜さん達と鉢合わせしたらまずいじゃないですか。

「そのまま学園長室にいるように言ってください。

それと学園長に木乃香さん達が学校に来てること、ネ、ネギ先生、影の転移魔法が目の前で開きそうなんだが」………はい？」

聞きたくなかったですよ、龍宮さん。

エヴァさんですか。エヴァさんですよ。

力を少し取り戻してから空を飛んだり幻術で大人の姿になったり、いろいろ魔法を使ってみましたよね。力を少し取り戻せたのが嬉しくて、はしゃいじゃってるんですよ。

学園長室から2 - Aまで影の転移魔法<sup>ゲート</sup>で戻るなんて、何てモノグサな人なんですか。

ああ、転移魔法<sup>ゲート</sup>が開いちゃった……………。

「待たせたな、ネギ！」

やれやれジジイの話は長くて敵わん。まあ、お前から贈られた指輪のおかげで最高に良い気分だ。そのぐらいは我慢してやるう！

くつくつく、最盛期に比べるとわずかなものだが、魔法を使えるというのはいいものだな。

改めて礼を言っておこう、ネギ！

？ そんな教室の隅で何やっている？ 龍宮マナや桜咲刹那まで？

さあ、私の家で宴会だ！ 今日のチョコレートパーティーも旨い菓子が食べたのでよかったが、やはりこういう日は旨い酒を飲みたい気分だ。茶々丸、この前ジジイからかった日本酒を用意しろ！

今日は無礼講だ。相坂さよも龍宮マナも桜咲刹那もよかつたら来るが……………どうしたんだ？ そんな変な顔して？」





ネギ！？ ネギはどこにいるの、エヴァちゃん！？」

「なあっ！？ き、貴様ら何故ここにっ！？」

「うわぁ、どうしよう？ 收拾が全然つきません。

今僕達が認識障害解いても火に油注ぐようなもんですし、静観するしかないんでしょうか？」

「……………き……………」

「ちよ！？ エヴァさん！？」

「何魔法を唱えようとしてるんですか！？」

「そもそも目の前にいるのは明日菜さんだから魔法は……………」。

「記憶を失えーっ！っ！！！！」



「何でそんなに落ち着いているのですか、楓さん!？」

「え? “ やつぱり ” って……………?」

「アスナ! とりあえずこれ着るアルよ!」

わあ、大惨事。

今度ばかりはエヴァさんのせいですけどね。

『姿見せましょう、皆さん。』

エヴァさんに任してたら收拾がつかいません』

『こ、このちゃんに魔法がばれてもった……………』

『いいんですか、ネギ先生?』

さっきのお話だとオコジヨになっちゃうんじゃ……………?』

『いや、もう無理でしょう。』

エヴァンジェリン様がすっかりネギお兄様の名前を呼んでました

『し

『というか紳士だね、ネギ先生。  
こういう事態でもちゃんと目を瞑っているなんて……』

『……………ウチのマスターが申しわけありません』

『いいんですよ、茶々丸さん。』

とりあえず明日菜さんに服をお願いします。僕はそれまで目をつぶっていますので。

刹那さんは携帯で学園長と連絡をつけてください』

まさか、こんな形で魔法バレするとはなあ……………。

原作では魔法バレしても多めにみてもらえてたけど、この僕ネギだつたらどうなるんだろう？

あれ？

僕が魔法をばらしたら故郷クニへ強制送還だけど、麻帆良の関係者に僕が魔法使いつてことをばらされた場合ってどうなるんだ？

その場合も強制送還？

第二十一話 バレンタイン？ 女子中学生は見た（後書き）

原作通り、明日菜の脱がされる運命は変わりませんでした。脱がせた犯人は違いますけど。

そして魔法バレです。  
考えてみれば、誰かのせいで魔法バレするのはあまりないのではないのでしょうか？

真面目な話、麻帆良の関係者のせいで魔法使いつてことをばらされた場合ってどうなるんでしょうかね？

ハーレム要員は基本的にこの話に出てくる女の子達です。  
もしかしたら2、3人ほど後で増えるかもしれません。

というか魔法バレに20話以上かけるなんて……。  
長かったですねw

もちろん魔法バレしてもウェールズに強制送還するなんてことはないので、ご安心ください。

最近思い始めてきたのですが、ここのネギは“勘違い系”の分類に入るのでしょうか？

まあ、“勘違い系”は“勘違い系”でも、“勘違いされ系”では

なくて“勘違いさせ系”ですが。

それと根っこが一番似てるキャラは、“めだかボックス”の“球磨川禊”？

“過負荷”<sup>マイナス</sup>じゃなくて、“異常”<sup>アブノーマル</sup>の球磨川ですかね。

## 第二十二話 魔法バレ？ クビ

近衛木乃香

「エヴァさん、正座」

「……………」

学園長室に入るなりネギ君がエヴァちゃんに正座をするように言っただけ、教室での出来事といいエヴァちゃんの印象変わったわ。何だか学園長室には女子中では見たこともない先生方がたくさんおって、ウチラが入るなり注目されてもうた。おかげでのどかなんか涙目になってしもうてる。

確かにちよつと怖いけど、ここはビクビクしたらアカン。強気で攻めな！

「おじいちゃん！ これはいったいどういふことなのー!？」

「お、落ち着いてくれんかの、木乃香。

こうなってしまったからにはちゃんと言明する」

「せつちゃんやネギ君達はいったい何なんや!？」

「……………というか、ネギ君の肩に乗ってる自分で動くお人形さんはホンマに何?」

「は、はい! 私は相坂さよといます!!!」

「えええええつ!?!」

「人形が喋ったアル!?!」

「ネギ先生の腹話術ですか!?!」

「いえいえ。違いますよ、綾瀬様。

相坂様は人形に乗り移った幽霊です」

「ア、アルちゃんまで言葉をつ!?!」



「おいおい、勘弁してくれよ。  
マジモンのオカルトかよ……………」

うわぁ、お人形さんに元気一杯に手を挙げて自己紹介されてもう  
た。しかもアルちゃんも人の言葉喋ってるし。

こんなときに何やけど、カワイイなあ……………。

「だから落ち着いてくれというに……………。  
どこから話そうかのお……………」

「……………僕達から説明しましょうか、学園長？」

「スマンの、お願いできるかの？  
ネギ君とアルちゃんからの方がわかってくれるじゃろ」

「かしこまりました、学園長先生」

「わかりました。僕は木乃香さん達の担任補佐ですからね。  
さて、それでは皆さん。単刀直入に言いますと、僕達は“魔法使  
い”です」

ま、魔法……………。

確かにあのエヴァちゃんが急に教室に現れたのや、アスナの服を吹き飛ばしたのは魔法みたいやった。

…………… あ、アスナがプルプルと震えとる。

エヴァちゃんに裸にされたことを思い出してもたんやろか？

「ほ、本当にネギ先生せんせいは魔法使いさんなんですか？」

「…………… 周りの大人の方々が口を挟まないということは、事実みたいですね」

「魔法使いでござるかー。」

「やっぱりいたんでござるな」

「楓は気づいていたアルか!？」

「ハハハ……………、もう笑うっきゃねーよ。」

「何なんだよ、この三文小説みたいなストーリーは……………」

「……………つまりエヴァちゃんは、その魔法で私の服を吹き飛ばしたのね」

マズイわ。アスナが殺意の波動に目覚めかけとる。

男の人が教室にいたら血の雨が降ってたんやろなあ。

あ、ネギ君は除外やで。

ちゃんと目つぶってたみたいやし、そもそも一緒に寝てるくらいやからな。

「百聞は一見に如かずです。

ネギ先生、よろしければ目の前で魔法を見せてくれませんか？」

「別に構いませんが、どっこの方がいいですか？」

初級魔法の火を灯す魔法とかありますけど、手品みたいに見えま  
すからね」

「な、何でもいいです。現代の科学じゃ出来ないことを見せてくだ  
さい」

「うーん、じゃあ、僕の得意な回復魔法をお見せしますか。

術式兵装『マイティガード咸卦治癒』」

ネギ君が両手に光の球みたいのを出して、それを一つにあわせる  
とネギ君の様子が変わってもうた。

別に怖いというわけやないんやけど……………。

アレ？ 女性の先生達が何かうらやましそうな顔でコツチみてく  
るんやけど、どうしたんやろ？

「怪我してる人はいませんから……………長谷川さん？」

「な、何ですか？」

「額に治りかけのニキビありますよね。治してみせましょうか？  
ちよつと額に触れさせてください」

「え？ 回復魔法ってそんなことも出来るのですか？  
想像していたのと大分違います」

「そうだね。てっきり怪我とかそういうのしか治せないと思ったけ  
ど……………」

「ああ、基本的にゲームやアニメに出てくる魔法を想像してもらっ

ても構わんよ。

ネギ君のアレはネギ君オリジナルでの。普通の回復魔法ではニキ  
ビとかは治せないんじやが、ネギ君なら治せてしまっくんじや。

はつきり言つて、回復魔法でネギ君に敵うものは麻帆良に一人も  
おらんよ  
「

「へえ、ネギ君凄いいんやなあ」

「魔法使いにも向き不向きがありまして。

僕みたいに回復魔法が得意なのもいれば、ゲームやアニメに出て  
くるような攻撃魔法が得意な人もいます。

それでは失礼しますね、長谷川さん」

「ちょ、ちよつと……………あ」

何やの!?

その最後の「あ」って!?

……………千雨ちゃんめっちゃ気持ち良さそうな顔してる。

「……………凄い。」

よくわかんないけど凄い」

「これは怪我の治療、体力回復促進等の他に、美肌、シミ、ソバカス、肌荒れ、冷え性などにも効果があります。

欠点としては直接触れないと効果がないのと、どうも患者の方がリラククスしすぎるみたいです。エヴァさんや刹那さんも寝てしまっくらいなんですよ」

「女性教師陣がコチラをうらやましそうに見ているのはそういうことですか」

「せつちゃんも寝てもうたの？」

「……………もしかして、せつちゃんが顔を赤くしてエヴァちゃんの家から出てきて、お肌がツヤツヤになってたのって……………」

「そ、そんなことまでご存知なのですか！？」

その……………正直に話しますと、ネギ先生の治療は気持ちよくてです。気づいたらネギ先生におんぶされていて……………涎を垂らして寝ていました。

その日は恥ずかしくてネギ先生の顔が見れませんでした」

「だからあんなに慌てていたでござるな」

「そりゃあ確かに恥ずかしいアルな」

「なるほどねえ、そういうことだったの。ネギと変なこととしてなくてよかったわ」

「……………はい、終わりました。」

誰か鏡持ってますか」

「あ、ネギ先生<sup>せんせい</sup>、私持ってます」

「すまん、宮崎。貸してくれ。」

……………本当に治ってる」

凄いわあ。

魔法って本当にあるんやな。

「治りかけだったからこんなに早く治せたんですけどね。」

もうちょっと酷かったらそれなりに時間はかかります。」

とまあ、こんな感じで魔法が存在することは信じていただけましたか？」

「……………信じます。こんなこと現代科学じゃ出来ないですよ。」

うわあ、何か肌の感じも違ってる……………」

「いいなー、千雨ちゃん。  
ネギ、私にも後でお願い」

「ウチも信じるで。こんなもの見せられたら信じるしかあらへん。  
ネギ君、ウチもお願いな」

「ホ、ホラ、のどか！  
チャンスですよ！！！！」

「え！？ えええええっ！？」

「（……………女性教師陣の視線が怖いでござる）」

「はいはい、それはまた後で。  
それでは僕達が“魔法使い”ということをお納得していただけたものとして話を続けますよ」



それからのネギ君の説明は、ウチにとって衝撃的なものやった。  
まさか、麻帆良が魔法使いの町とはなあ……………。

それに、せつちゃんがウチを影から守っていてくれたことなんか  
思いもせんかった。

やっぱりせつちゃんはウチを嫌いになったわけやないんやね。よ  
かった。

……………でも、

「何で？ 何で言ってくれへんかったの？」

ウチを危ない目にあわせとうない気持ちは嬉しいけど、せつちゃ  
んと離ればなれになってまでそんなことして欲しくあらへん……………」

「こ、木乃香お嬢さま……………」

「木乃香さん、学園長や木乃香さんのお父さんの気持ちもわかって  
あげてください。」

……………明石教授、構いませんか？」

「いや、僕から話そう。」

「やあ、皆。ゆーながお世話になってるね」

「……………誰ですか？」

「あ、裕奈さんのお父さん……………」

「ああ、明石のか。」

「ってことは、明石も魔法使い！？」

「ああ、違うよ。ゆーなは魔法関係者じゃない。」

「妻が死ぬまでは魔法を教えたりしてたけど、今はまったく魔法とは関係していないさ」

「……………奥方殿が亡くなられるまで、ということとは、もしかして魔法関係でお亡くなりになったでござるか？」

「あ、そういえば、裕奈のお父さん好きは知ってたけど、お母さんのことは裕奈の小さい頃に亡くなったたしか聞いたことあらへんかった。」

「そっか、そういうことなんやな……………」

「うん。僕達の仕事は危ないこともあるからね。  
だから、ゆーなには魔法とは関わって欲しくないと思っているん  
だ。ゆーなには魔法のことを秘密にしてくれるかい？」

「……………約束するアル」

「はい、絶対言いません」

「ありがとう。僕も木乃香さんのお父さんの気持ちが良くわかるん  
だ。」

黙っていられたことに怒るのはわかるけど、お父さんの気持ちも  
わかってあげて欲しい」

「……………はい」

「そのことについては、今度婿殿とゆっくり話し合ってみるとええ」

「うん、そうするわ」

そうだな。まずはお父様と話し合ってみよう。

電話じゃ何やし、久しぶりに里帰りでもしよかな？

麻帆良に来てからあんまり帰ってへんから、丁度ええかもしれん

な。

「それでは次に、長谷川さん辺りが特に気になっているかもしれないが、皆さんの今後についてです」

「やっぱりネギ先生はオコジヨになって、皆さんは記憶を消されちゃうんですか？」

「ちょっと!?! どーゆーことなの、それは!?!」

オコジヨ!?! 記憶を消す!?!  
どづいづいとやの!?!?

「ちょ、ちょっと待っておくれ、さよちゃん。そんなことせんよ。君らが魔法を知ってしまったのは、ワシらのミスじゃ。………  
………ワシらというか、エヴァのじゃがの」

「……………づうう……………」

「マスター、その気を落とさずに……………」

「……………」  
「コチラとしては何も見なかったことにしてくれればよいの  
じやがな」

「え？　それでいいんですか？」

「魔法をばらそうとしたりしなければ構わんよ。

いや、魔法をばらそうとしてもワシらにはその専門の対策機関が  
あるし、そもそも信じてくれないじゃろうしの。

ちよつとはしやぎたい年頃の女の子と思われるのがオチじゃろう  
て」

「あー、確かにそうアルな。

魔法は実在しているなんて叫んでも、誰も相手にしてくれないア  
ルよ」

「あ、あの、ネギ先生せんせいがオコジヨになつちやうつてのは……………」

「あー、どうなんですかね、学園長？  
こついつ場合ケヒって、僕はやっぱり故郷へ強制送還+オコジヨです  
か？」

「安心しなさい、ネギ君は大丈夫じゃよ。さっきも言ったとおり、今回の件は麻帆<sup>マホ</sup>良側のミスじゃ。」

……………ぶっちゃけた話になるが、さっきの説明にあったようにネギ君はメルディアナ魔法学校という他校からの大切な預かり物での。

不用意に魔法をばらしたのがネギ君なら話は別じゃが、ネギ君がばらしたんじゃなくてエヴァがばらしてしまったからのう。

麻帆良関係者のせいでネギ君をオコジヨになるうものなら、メルディアナ魔法学校と喧嘩になってしまいうわい。

……………というか、魔法のことは本当に秘密にしといておくれ。真面目にワシらがピンチなんじゃ」

「だ、大丈夫なん？」

「君達が秘密にしとくれたら大丈夫じゃ。」

……………あー、もし逆に「こんなこと忘れてしまいたい」という子がおったら記憶を消すぞい」

「結構でござる」

「ちゃんと秘密にするから、大丈夫アルよ」

「私も結構です」

「わ、私もです」

「私もいいです。」

木乃香が覚えているのに、私だけ忘れらってわけにもいかないしね」

「……………私もいいです。」

忘れてしまい気持ちはありますが、記憶を弄られる方が嫌ですの  
で」

よかつたあゝ。

記憶消されたりしなくていいんや。ネギ君もいなくなったりしな  
いみたいやし。

それにせつちゃんのこともわかることが出来たし、お父様やおじ  
いちゃんには悪いけど魔法のこと知れてよかつたわあ。

「じゃあ、ウチラは無罪放免ってことでいいんやね？

ネギ君達も何か罰を受けたりしないんやね？」

「大丈夫だよ、木乃香君。」

ネギ君には引き続き2・Aの担任補佐を受け持ってもらおうし、剎那君や龍宮君だって同じだ。

「……………エヴァはどうだろ？」

「……………」

「マスター、そう落ち込まずに……………」

「……………ぎゃ、逆に2・A生徒の面倒をみなければならんのが、ネギ君にとって罰かもしれんのお、フオッフオッフオ」

「ハッハッハ、否定できないのがつらいでござるな」

「居残り授業とかで迷惑かけてるからそう思われてもしょうがないアル」

「わ、私は最近ちゃんと勉強してるわよ！」

「アハハ、確かにアスナ君は最近頑張ってるみたいだね。僕も安心したよ」



「あ……………はい、ありがとうございます。……………高畑先生」

アカン、アスナまだ失恋のショックが響いてるみたいや。

もう大丈夫かと思ってたけど、さすがに面と向かって高畑先生と話すのはまだつらいみたいや。

「……………えっと。ハハハハハ、駄目ですよ、学園長先生。」

そんなこと言ったら、3年になってネギ君が担任になったらどうするんですか？」

「フオツ!？」

「え？ 高畑先生が担任辞めて、ネギ先生せんせいが担任になるんですか？」

「うん。僕の出張がかなり溜まっていてね。」

僕はNGOの団体にも所属していて、それで今までよく出張に行っていたのさ。ネギ君が来てからは本当に楽になったよ。

ネギ君も立派に教師として頑張っているからね。正直、僕も教師とNGOの二重生活は大変だから、教師としての仕事はネギ君に頑

張ってもらつことになつたんだ。

もちろんネギ君一人に任せるようなことはしないよ。僕もこれからは非常勤として皆に関わつていくから、担任と担任補佐が入れ替わると考えてくれたらいいよ」

「そ、そういうことなんじゃよ。

といつてもネギ君には修行としての最終課題があるのが。それが無事にすめば3年からはネギ君が担任となるのじゃ」

「……………要するに、今とあんまり変わらないのですね」

「でござるな。今でも結局ネギ坊主が担任みたいなもんでござるし」

「そうアルね。高畑先生とは2週間振りくらいアルか」

「……………いや、古菲さん。

確か月曜日に会つた覚えがあります」

「あー、そうだったな。

月曜の帰りのHRは高畑先生一人だったな」

「……………」

……………アスナ、言いたいことあったら言った方がええよ。

「……………え？ 皆やけにアツサリしすぎてないかい？  
本当に出張しすぎたかな」

「……………フォッフオッフオ。  
出張行かせてばかりですまんかったの、タカミチ君」

……………怪しい。  
何かおじいちゃん隠しとる。  
ウチラに秘密にしておきたいことあるんやろか？

「……………おじいちゃん？」

「な、何かの、木乃香？」

「何隠しとるん？」

「べ、別に何も隠してなんかおらんぞい！」

「アハハ、何を言ってるんだい、木乃香君。

別に隠してなんかいないよ。ねえ、学園………学園長、何をそんなに冷や汗をダラダラ流しているんですか？」

「き、気のせいじゃ！」

「おじいちゃん!？」

何やる？ 高畑先生や他の先生方も不思議そうにしてる。どうやら他の人は知らなかったみたいやな。

おじいちゃんが一人で何か企んでいたんやろか？

「学園長、その態度では何かあるとっているも同然ですよ。

この際だから、言えないことがあるなら言っただほうがいいんじゃないですか？ それとも、やっぱり僕は故郷<sup>クニ</sup>へ強制送還+オコジヨですか？」

「ち、違うぞい!！」

「だったらおっしゃってください、学園長。

他の先生方も不思議に思っているじゃないですか」

「……………まいったのお。あまりこの場で言いたくないんじゃない  
が」

「どづいつことですか、学園長？」

もしかしてネギ君について何かあるんですか？」

「まあ、確かにネギ君についてなんじゃがの。

……………他の生徒や保護者からクレームがきておるんじゃないよ」

なるほどなあ。やっぱり10歳のネギ君が教師をすることに気分  
悪くする人もおるんやろな。

あれ？ でも、「他の生徒」ってどづいつことや？

「おじいちゃん、保護者からクレームが来るのはわかるんやけど、  
“他の生徒”からのクレームって何やの？」

ネギ君は他のクラスでも人気者で、他のクラスの子から悪い噂聞いたことないで?」

「私もないですね。」

最初の頃はその奇特さからよく質問されましたが、今では逆に羨ましがられるぐらいです」

「そ、そうですね!」

ネギ先生せんせいを悪く言う子なんかいません! 「2・Aが独り占めしてズルイ」と言われるぐらいです!」

「うん。それじゃよ、まさにそれ。」

他の生徒からは宮崎君が言った通りに、「2・Aが独り占めしてズルイ」とクレームが来ておる。

木乃香達だって、違うクラスでネギ君が担任補佐しとったらズルイと思うじゃろ?」

え? ソッチ方向のクレームやの?

まあ、麻帆良のノリだったらしゃあないかなあ。

「……………でも、保護者の人はそう思わないと思いますけど。」

正直に言いまして、10歳の子供が教師をするなんておかしいです」

「長谷川君の言う通りじゃ。

保護者からのクレームは、あくまで“2・Aだけ”に担任補佐がいることについてじゃな。ネギ君を寄越せとは言ってきたおらんよ。

ホラ、昨今は少子高齢化で、生徒集めがどこも大変じゃろ？

麻帆良でも生徒集めのためにいろいろと手を打っておるんじやが、その中の一つが“教師の数を増やし、よりキメ細かい教育を行なう”という試みじゃよ。

現在は1クラス30〜40人を教師1人で担任しておるが、それだとしても教師の手の届かない生徒が出てきてしまふ。それなら教師の数を増やせば生徒をもっと面倒みやすくなるからの」

「ネギ君が担任補佐をしているのは、そのテストケースとしてなんだ。

ちなみに、女子<sup>ウチ</sup>中では“生徒31人を教師2人で担当する”というテストをしていて、男子中では“生徒15人を教師1人で担当する”というテストをしているよ。

“生徒31人を教師2人で担当する”と“生徒15人を教師1人で担当する”は生徒と教師の比率は一緒でも、実際の指導方法は違うからね」

「そうじゃの。学園としては“生徒31人を教師2人で担当する”の方がありがたいわい。

“生徒15人を教師で1人で担当する”だと、教室や備品が一時

に2倍の量が必要になってしまっからの」

「学園の裏事情はわかったでござるよ。

しかし、保護者からのクレームがわからないでござる。あくまでこれはテストケースなのでござろう?」

「……………自分達の成績の上がり方ぐらい考えてから言ってくれんかの。」

成績が万年最下位だった2・Aが、担任補佐を置いただけで成績があつという間に上位クラス並みになったんじゃぞ。

その噂を聞いた保護者から、「2・Aだけ担任補佐がついてるのは他のクラスに不公平だ」とか、「むしろウチの娘のクラスにも担任補佐をおけ」とかクレームがうるさくての。

教師の数を一気に2倍近くに増やすことなんか出来るわけないのに……………」

「そ、そんなに酷いことになってたんですか?

出張ばかり行つてて気づきませんでした」

「僕も聞いてませんでしたけど?」

「ああ、ネギ君は別に悪いことはしておらんわい。教師としての仕事に励んだだけじゃから、気にすることはないよ。」

ただ、3年になつてもこのまま担任補佐でいるというのは無理じゃ。これ以上は他の子達と保護者の不公平感が抑えきれん。」



かといつて、3年になつて「ネギ君今までありがとう。テストは終了したからもついいよ」とネギ君を放り出すことは出来んしの。そんなことしたら2 - A生徒が暴動を起こすわい」

「だから高畑先生を非常勤にして出張に行きやすくし、担任をネギ先生にお任せするということですか」

「ネ、ネギ先生せんせいが担任に……………エへへ……………」

ネギ君は人気者やなあ。

そういうクレームが来るなんて。

アレ？ でも何でおじいちゃんはコレを秘密にしておきたかったんやろ？

「……………もしかして、高畑先生は担任クビなのアルか？」

「え！？ な、何を言ってるんだい、古菲君」

「……………あー、ドッチが先なのかって話か？」

“高畑先生の出張が忙しいから、ネギ先生を担任にする”んじやなくて、“ネギ先生を担任にしなきゃいけないから、高畑先生を非常勤にする”ってことか？」

「アハハ、そんなことあるわけじゃないか。

あくまで僕の教師とNGOの二重生活は大変だから……………。

ねえ、学園長？ ………………学園長？」

「……………これは“適材適所”というものなんじゃ！ タカミ子君……………」

「学園長っ！？」

ゴメン、おじいちゃん。これは確かに秘密にしておきたいわ。

高畑先生の前で言いたくあらへんやったるうな。

「そ、そもそもネギ君が麻帆良に来る際に、ネギ君を2・Aの担任にしようとしたことに異論はなかった筈じゃろっ！？」

「それとこれとは話が違つてしょう!？」  
ネギ君に担任を譲るならともかく、これでは本当に僕が担任クビみたいじゃないですか!？」

「じゃ、じゃつたら2・Aの生徒に、どっちが担任になって欲しいか投票でもしてもらうかの!？」  
それで多く投票された方が担任をするということだ……。

こ、木乃香はネギ君よりタカミチ君のほうがいいかのっ!？」

ウ、ウチに振らんといえな!？」  
アカン。高畑先生が継るような目で見てくるけど、………こ、答  
えられへん。

他の皆も目え逸らしとる。  
アスナもどう反応してええかわからんみたいや。

「………えーつと？」  
タカミチ、何というか………、ゴメン?」

「………いや、ネギ君が悪いわけじゃないよ。  
僕は出張が多くて皆の面倒を見れなかったのは事実だからね。ネ  
ギ君なら僕よりもうまくやれるさ。

ウン、ネギ君に2・Aの皆のことをお願いするよ。僕もネギ君を手伝うからさ。

…………… 八八八」

た、高畑先生が真っ白に燃えつきとる。

ネギ君がいなくならないのは嬉しいけど、この結果は胸が痛むわあ。

## 第二十二話 魔法バレ？ クビ（後書き）

ネギはそのまま担任補佐をすることになりました。3年からは担任です。

この状況なら、別に甘いわけじゃないと思います。

「コノエモン、ネギは元気にやっとなるかね？」

「あ、ごめん。麻帆<sup>コヰチ</sup>良の関係者のせいで一般人に魔法バレしちゃった。

ウェールズに送り返すからオコジヨ刑よろしく」

とかなったら、マジで戦争もんですからね。大人の事情により無罪放免です。

明日菜達も記憶消去とかはされませんが、その理由も次話以降で詳しくするので少々お待ちください。

そしてタカミチが2・A担任をクビとなることになりました。他の生徒と保護者からのクレーム処理が大変だったようです。

ネギを担任補佐のままにしておく

クレームがもつと酷くなる。却下

ネギをクビにする

2 - A生徒に殺される。却下

タカミチを非常勤にして出張に行かせ、ネギを担任にする

みんなで幸せになろうよ。採用

学園長はどこまでも本気です。タカミチに合掌。

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」「という困惑

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた + “担任クビ”

new!

刹那：勉強地獄 + バカホワイト就任

明日菜：失恋

そしてこんな話を書いた直後に、勤めている会社で<sup>リストラ</sup>粛清が行なわれるかもしれないと発表されちゃいました。何てタイムリーw  
そんなわけで、今月は週一更新が精一杯っぽいです。ご了承ください。

……………多分大丈夫だと思っんですけどね。  
作者としては、ハッピーエンドが好きなんですがね……………。

第二十三話 魔法バレ？ 斜め下

長谷川千雨

「さて、まだ他に細かいこともあるが、だいたいは終わりじやの。先程も言ったとおり、魔法のことは言わないでもらいたい。例えば、家族や友人でもじゃ。

もし、不特定多数の人間にばらされてしまうなら、ワシらとしても対処せざるを得ん。ワシらだって生徒に記憶操作なんかしたくないからの。くれぐれも言わないでくれ」

「言わねーよ、こんなこと。」

「言ったって頭がおかしい女子中学生と思われるだけだ。」

「やれやれ、最初はどうなることかと思ったが、何とか終わったな。まさかこんなコトになるとは思わなかったが……………」

「今日はもう遅いですからね。」

「まず一晩寝て、ゆっくり個人で考えてください。もし考えた結果、黙ってることに自信がなくて記憶を消したいなら言ってください。」



他に何か質問はありますか？」

「……………明石教授の話聞いた後でこんなこと聞くのは、とても不謹慎だとわかつているのですが……………」。  
「私達も魔法を使うことが出来ますか？」

「ゆ、ゆえ？」

「フオツフオツフオ、やはり聞かれてしもつたか。  
気にすることは無い。年頃の女の子なら仕方があるまい。  
それに、内に疑問を秘めたまま帰られても困るからの」

「そうですね。」

「一応ほとんどの人は魔法を使うことが出来ます。もちろん個人差はありますが。」

「たまにタカミチのように体質的に魔法を使えない人もいますが、  
そういう人はあまりいませんね」

「？ 高畑先生は魔法を使えないアルか？」

「そうだよ、僕は魔法使いとしては落ちこぼれなんだ。教師みたく  
ね。」

……………  
「ハハハッ」

もうやめてやれ、古。  
高畑のライフは0だぞ。

それにしても魔法ねえ……………。  
あのニキビを治してくれるような回復魔法には興味あるが、それでもこれ以上は関わりたくねえなあ。  
それよりも早く帰って寝たいよ。今日はもう疲れた……………。

「ちなみに魔法だけじゃなくて、“気”を使う人達もいます。  
刹那さんや楓さん、それに古菲さんも無意識に気を扱っています  
ね」

「へえ、そういうのもあるんやなあ」

「僕としては今から習うなら、魔法よりも気の方が良いと思います  
けどね。  
気を扱えるようになると、老化が遅くなって体の調子も良くなり、  
いつまでも若々しくいられますよ。」

座学も多い魔法と違って、身体を動かすのが中心なので運動にも  
なりますからね」

「ぬぬ、それはまた魅力的な……………」

「むう、是非とも気について詳しく知りたいアルな。

そうだ、ネギ坊主！ 私魔法のこと黙てるから、また手合わせお願いするアルよ」

「だからクーへ、それ“お願い”やない。“脅迫”や」

「クーふえ、先生方の目の前で脅迫しないでよ……………」

「……………どうします、学園長？」

巻き込んだのはコチラですから、口止め料として何か1人につきお願いを1個聞くことにでもしますか？

皆さんの心情的にもその方がいいと思います。

魔法について黙っているだけだったらストレスが溜まりますけど、「お願いを聞いてもらったから黙ってる」の方が自分を納得させることが出来ると思いますよ。もちろんあまりに大きいことだったら駄目ですが。

それに古菲さんだったら今日のことになくても、いずれ自分でコッチ側に辿り着いていたかもしれないですからね。いっそのこと共犯にした方がいいかもしれません」

「そういうことなら拙者も是非お願いするでござるよ。

刹那がその“別荘”とやらで修行を積んでいるのなら、拙者も参加させて欲しいでござる。競い合える相手がいるなら、より良い修

行が出来そうじゃないわ」

「ム、そうじゃの。」

麻帆良武道四天王のことはよく聞いておる。というか、この場に全員おるんじゃないわ。

……確かに彼女達なら放っておくよりも、身内に取り込んだ方が面倒がないかもしれんの。巻き込んだのはコチラのミスじゃし……。

しかし、“別荘”についてなら所有者のエヴァに許可をもらわんといかんが？」

「……勝手にしろ」

あー……、あいつ等は元々半分以上アツチ側みたいなもんだしなあ。

私もお願い1個聞いてもらえんのか？

でも、アツチ側に関わる気はねえから、古や長瀬みたいに頼むことないや。

……新型PCとか現金はさすがに駄目かなあ？

「ネギ君は構わんかね？」

古菲君は君との手合わせを望んでおるようじゃが」

「まあ、そんなに頻繁に挑まれても困りますが、たまになら構いません。」

中国拳法の使い手と手合わせするのは僕としても修行となりますし、刹那さんとしてゐる修行も長瀬さんや古菲さんが参加するなら良い刺激になります。」

……ああ、ただし今度の期末テストで合計点が平均を下回った場合は、勉強の方を優先してもらいます。魔法を習いたいという人も同じです。」

学生の本業はあくまで勉強ですので」

「そのくらい構わないアル。」

よし、約束アルよ！」

「わ、私達もいいのですか!？」

「まあ、少し落ち着いてください、古菲さん、綾瀬さん。」

ゆっくり考えたほうがいいですよ。1人につき1個限りですから。何も今日決めなきゃいけない訳ではありません。

それと木乃香さんは魔法を習いたいとしても、一度お父さんと話し合ってからの方がいいと思います」

「え？ 何でやの？」

「ええと、先程も説明したように、木乃香さんのお父さんは“関西呪術協会”というところの長でして、麻帆良が所属している関東魔法協会とその関西呪術協会は昔から仲が悪いんですよ。

簡単に説明しますと……………」

ふーん、オカルト側はオカルト側で大変なんだな。  
古くからの西と、新たに住み着いた東。仲が悪くなるのは当然だな。

しかし近衛がお嬢さまだとはねえ。

アレ？ でも、今の説明おかしくねえか？

「すみません。

ちよっとわからないことがあるんですが」

「何ですか、長谷川さん？」

「東と西の仲が悪いのなら、何故学園長は東にいるんですか？ 学園長だって“近衛”じゃないですか。」

「そもそも東と西両方の偉い人の子供である近衛がいること自体変じゃないですか？」

「ああ、そういうことか。」

「ワシは確かに西の出身なのじゃが、若い頃に先々代の長であるワシの父から西洋魔法を学ぶようにと言われたのじゃよ。これからは否が応にも日本の中だけに閉じこもっていることは出来ん、と父が考えての。」

「東としても、昔から日本に住んでいた西と誼を持ちたかったから受け入れられたんじゃ。」

「まあ、要するにお互いのパイプ役じゃな。そのおかげで関東魔法協会の理事にまでなれたのかもしれんが。」

「関西呪術協会の方はワシの兄が継いだんじゃが、子供が出来ないまま亡くなってしまうての。」

「近衛の家の分家もあるが、その当時は長になれる適当な年齢の人物がいなかったのな。亡くなった長の姪であるワシの娘が西に嫁ぎ、その相手が新たな長になるということになったのじゃよ。」

「……………政略結婚つてやつですか？」

「現代でもあるんですね。」

「勘違いしないでくれ。娘と婿殿は確かに見合いから始まったが、ちゃんと2人は愛し合っていたよ。」

結婚するにあたって娘が出した条件は、“結婚相手は自分が決める”という条件じゃったからの。長になれるような家柄と実力を兼ね備えた若者20人以上と見合いして、最後に婿殿を選んだのじゃ。何でも「浮気しそうにないから良い」と言っておったがの……………」

「贅沢な話だな。選ばれる側じゃなくて、選ぶ側に回ったのかよ。」

「20人以上の中から選ぶなんて選り取り見取りじゃねーか。」

「っていつか、そんな理由でいいのかよ？」

「あー……………、神鳴流である青山詠春さんが長になったのって、そういう理由だったんですか？」

「まあ、あくまで中継ぎの長という感じじゃからの」

「……………もしかして、お父様の一人娘のウチが次の長にならんとかん、というわけなの？」

「そんなことはないぞい。」

先代の長が亡くなった頃ならともかく、今なら近衛の分家の人材



も育つておる。次代の長はその者達が継ぐことが出来るからの。

じゃから、木乃香が無理して継がないといけないというわけではない……………はずじゃったのじゃがなあ。

……………問題となったのは、木乃香の才能なんじゃよ。

祖父であるワシが言うのはなんじゃが、木乃香の才能は飛び抜けていての。

“ 関西呪術協会を建て直すためには先々代の長の曾孫であり、才能豊かな木乃香が次の長となるべきだ ”、と考える輩もおつての。

そんな輩が木乃香が西洋魔術師となると聞いたら、何を仕出かすかわからんのじゃ。

木乃香が婿殿から離れて麻帆良に来たのは、そういう政争に巻き込まれないためなんじゃよ。婿殿は木乃香をそういうことに巻き込みたくはないのじゃよ

「……………何なの、それ？」

木乃香のことを勝手に決めちゃって。そいつらは何様のつもりなのよ……………」

「怒らんでくれ、アスナちゃん。西でもそういう考えをしているのは少数じゃ。」

しかし、そういう考えを持つ人間が出てくるほど、木乃香は凄まじい魔力を秘めているんじゃないよ

「……………そんな、ウチ……………」

「うわあ、 “ 事實は小説よりも奇なり ” だな。  
まさかそんなお話が現実にあるとは思ってなかった。

「……………ところで、何でネギ先生は不思議そうな顔をしているんだ？」

「どうしたんですか、ネギ先生？  
そんな不思議そうな顔をして？」

「えー！？  
……………いや、何でもないですよ、長谷川さん」

「フオ？ 何か不思議なことでもあったのかね、ネギ君？  
聞きたいことがあるならこの際じゃ。何でも聞いてみるとええ」

「……………えーっと、木乃香さんって魔力の制御とか学んでないんですよね？  
魔力を封じる魔法具なんかつけてないですよね？」

「え？ ウチそーいうのした覚えないで？  
魔法具ってゆーもんは知らへんけど」

「そーじゃよ。木乃香は魔法関係の修行なんかしたことはないぞい。」

魔力封じの魔法具も持たしておらん。

……それがどうかしたのかね？」

「ですよね。」

「だったら木乃香さんの魔力は、今の状態で感じ取れる魔力で全部なんですよね？」

“感じ取れる魔力”かあ。

本当にゲームやアニメの世界の言葉だなあ。

全然私には理解出来ねーや。

「そうじゃよ。ネギ君だって感じ取れるじやろ。」

木乃香の内に秘められた凄まじい魔力を」

「……………木乃香さんから感じ取れる魔力って、“僕の半分ちよつと”ぐらいしか感じ取れないんですけど？」

僕を“10”とすると、木乃香さんは“5強”ですか」

「……………。」

……………。

.....フォッ!？」

「え？」

「なにそれこわい」

「えっ!？」

えっ？ 何なの、この流れ？

高畑・T・タカミチ

一難去つてまた一難。

さて、ネギ君はいつたい何を言い出すのかな？

……………慣れてきてしまった自分が悲しいよ。

「……………スマン、ちょっと待っておくれ、ネギ君。

木乃香の魔力が君の半分ちょっとしかないとは、どういふことかね？」

「え？ そのままの意味ですが……………」

「素人が口を挟んで申しわけありません。

それはただ、ネギ先生の魔力が更に大きいだけなのではないのですか？」

「いや、綾瀬君。確かにネギ君の魔力は木乃香より大きいが、タカミチ君の見立てでは木乃香よりほんの少し上ぐらいと聞いておったんじゃないよ。

……………ネギ君。君の魔力を“10”とすると、他の人はどの位なのかね？」

「えーっと、僕を“10”としますと感じ取れる魔力量は、木乃香さんが“5強”、学園長が“3強”、タカミチが“2弱”、今のエヴァさんが“1弱”ってところですかね？」

「ネ、ネギ？ それは……………」

「ああ、わかってますよ。

今のエヴァさんは封印されている状態ですからね。きっと元の状態の数%しか発揮できないんでしょう？」

「えっ！？ すっ、数%っ!？」

「いや、それは……………その……………」

さすがにそれはない。

いくら元のエヴァの魔力量が大きくても、今の10倍以上なんてのはさすがにありえない。

今の数値からいくと、ナギの魔力量は“5”ぐらいになるな。きつと全力のエヴァが“5弱”ぐらいだと思う。いくら何でもネギ君はナギの2倍も魔力はないだろう。

ネギ君の魔力の制御が完璧になったら魔力がまったく感じ取れなくなっただけ、初めて会ったときは“5・5”ってところだったはずだ。

「それがいったい何なのよ？  
ネギの魔力が凄く大きいってことでしょうか？」

「いやいや、違いますよ、明日菜さん。

今言ったのは、あくまで僕が感じ取れる魔力量です。

熟練の魔法使いは、僕のような見習い魔法使いが感じ取れる魔力の数倍の魔力を実は隠しているんです」

「フオツ！？」

ネギ君つてば、何だか凄い勘違いをしていないかいっ！？

「えっ？ 僕、何か変なこと言いました？ 魔法学校でそう習いましたよ？」

“魔力の制御を学んでいくと、相手に己の実力を悟らせないことが出来るようになる。熟練の魔法使いになると、見習い魔法使いが感じ取れる数倍の魔力を隠している” って」

「魔法使いの世界でもやはりそういうものなのアルか。

私が故郷で拳法を覚えてくれた老師も、見た目はただの優しそうなお爺ちゃんだったアルよ」

「そつでござるな。熟練者ほど己の実力を相手に悟らせないものでござるよ。どこの世界でも一緒でござるな。」

となると数倍というくらいだから、学園長の魔力は最低でも3倍の“10”以上はあるということではござるな？」

「……………あー、漫画やアニメでそういうのよくあるよな。」

筋骨隆々の若者を、小柄で今にも折れてしまいそうな老人が倒すとかつて」

「へえ〜、おじいちゃんって凄いいんやねえ」

「……………あの、ネギ先生。」

さっき言った魔力量が全てだということはないのですか？」

「やだなあ、綾瀬さん。」

僕はまだ10歳の見習い魔法使いで、学園長は麻帆良最強の魔法使いですよ。」

学園長の魔力量が僕の半分以下しかないなんてありえないじゃないですか。常識的に考えて」

お、お願いだから、ネギ君が常識を語らないでくれっ！……！



「そうよねえ。大人っぽいって言っても、ネギはまだ10歳だもんね」

「しかし、変な勘違いせず真面目に修行に勤しむ、というのは良いことアルよ」

「ネギ坊主は真面目でござるからなあ」

「す、凄いです。ネギ先生せんせい！」

「ええ〜？」

おじいちゃんって麻帆良で一番強いんか。凄いなあ」

「……………おい、何だか先生方が死にそうな目をしているぞ？」

「……………ネギ先生、もしかして……………？」

多分、僕も死にそうな目をしてると思う。

ガンドルフィーニ先生なんか頭を抱えて蹲っちゃってるし……………。

「…………ネギ君、スマンがちょっと席を…………ああ、いや。  
ちよっと自動販売機で適当にこの子達の飲み物を買ってきてくれないかの。」

考えてみれば、休憩なしの飲み物なしは辛かるうて……………」

「え？ もうだいたい話は終わりなんじゃ？」

「いや、もうちよっと話すことがあったの。」

年のせいかな言い忘れていたことがあったんじゃよ……………」

「……………？」

よくわかりませんが、とりあえずいつてきます。

どうせなら他の先生方の分も適当に買ってきますよ」

「ウン、頼んだぞい。フォッフオッフオ……………」

……………」

……………」

……………全員集合っ！！！！

あ、悪いのじゃが、木乃香達はソッチのソファーにでも座って少し待ってておくれ。ちよっと関係者で話し合いたいことがあったの」

「わ、わかったえ」

どうしてこうなったんだろう？

ネギ君は真面目な良い子だったはずなのになあ……………。

「……………タカミチ君？」

「……………ネギ君の目は本気マジでした。

確かにネギ君は自分の魔力量を鼻にかけることはないと思っていましたが、本気でああいう考えをしているみたいです」

「……………エヴァ？」

「あつてる。ネギの言う通りだ。

近衛木乃香を“5強”で今の私を“1弱”とすると、ジジイが“3強”、タカミチが“2弱”であつてる。

ただし、ジジイとタカミチは力を隠してなんかいないかな……………。ちなみに魔法先生の平均は“1.5”ぐらいで、魔法生徒の平均が“1”ぐらいだ。

あくまで魔力量だから、実際の戦闘力とは違うんだが……………」

「……………刹那君？」

「ネ、ネギ先生と行なっている修行はほとんどが基礎と剣の組み手でしたので、ネギ先生の魔力量が如何ほどなのかはちょっと……………」

「……………龍宮君？」

「……………刹那に以前言った覚えがあるが、魔力総量は私が魔眼で見ても分からなかった」

「……………アルちゃん？」

「も、申しわけありません。私もネギお兄様の全力を見たことはないのです。」

『キラアキプル・アストラペー千の雷』を平気で唱えていたので、てっきりそれぐらいかと……………」

「……………一度まとめてみるぞい。」

- 1 .ネギ君の魔力は木乃香の約2倍
- 2 .ネギ君はその自分の魔力量がすごいとは思っておらん
- 3 .ネギ君は他の魔法使いの隠している実力も見抜ける
- 4 .ネギ君はその実力を“見せるための魔力”と思っている

5・他の魔法使いはその数倍の魔力を隠していると勘違いしている

.....。

.....。

.....何でじゃ？」

「「「「「.....」」」」」

誰も何も言えない。

当然だ、僕も何を言っていないかわからない。

何でだ？

何でネギ君はそんな考えをしているんだ？

「隠している実力を見抜けるのはまだいい。ソツチ方面の感覚がかなり鋭い奴なら、実在していてもおかしくはない。

あの年齢でそこまで出来るのは珍しいだろうが、珍しいだけではないわけではない。

しかし、魔力量について何故あんな勘違い.....あっ!？

おい、タカミチ。ネギの魔力は近衛木乃香よりほんの少し上ぐらいと感じたのはいつの話だ!？」

「何か思いついたのかね、エヴァ？」

「……………確かタカミチ君がネギ君と初めて会ったときじゃったな。帰ってきたときにそう報告された覚えがあるぞい」

「ええ、そうです。初めて会ったときのネギ君は、確かにその位の魔力量でした。

さきほどの数値でいくと、“5・5”ぐらいだったはずですよ」

「以前、ウェールズでネギと2人でかくれんぼで遊んで、結局見つけることが出来なかったと言っていたな。

それはいつの話だ？」

「え？ 確か初めて会ってから半年後ぐらいだったと思う。

ネギ君は会うたびに魔力の制御が上達していったって、半年経った頃には魔法とは関係ない普通の子供のように思えるまで制御出来ていたよ」

「向こうの校長の話では、ネギ君は魔力の制御に失敗したせいで向こうの校長に大火傷を負わせてから、治癒魔法に力を入れて勉強していたと聞いた。

当然、基礎である魔力の制御にも力をいれて勉強もしておったじやろつな」

「つまりネギは、タカミチが感知可能な魔力を半年で“5.5”から“0”にしたんだな？」

……………もう一度聞く。

ネギの魔力は近衛木乃香よりほんの少し上ぐらいと感じたのはいつの話だ？

ネギが魔法学校に入学してからどれくらい後の話だ！？」

「え？ 確かネギ君がメルディア魔法学校に入学してから半年ぐら……………い？」

「……………まさか、タカミチ君に出会う前の半年で、感知可能な魔力を既に“10”から“5.5”にしていたということかの？ 更にそれからの半年で“5.5”から“0”にしたと……………？」

「そして魔力の感知も他人の実力を見抜けるぐらい優れていたけど、魔法学校で習ったことを鵜呑みにして“見せるための魔力”と勘違いしていたのか？」

ネギ君の魔力が“10”とすると、他の大人は“1〜2”ぐらい。その数値を数倍にしてもネギ君より下だけど、ネギ君自身の魔力が大きいことは校長から聞いていたはずだから、今まで違和感を感じずに過ごしていた……………？」

「……………」。

……………」。

……………」ネギだったらありえそう、と思うのは私だけか？  
「

「「「「「……………」「「「「「

ネギ君ホントにどうしよう？

……………」一度、ネギ君にシツカリと現実を教えた方がいいようだね。何だか“現実を教える”という言葉の使い方を間違っている気がするけど、気のせいということにしておこう……………」。

「お待たせしました、皆さん。」



「ハイ、好きなのをどうぞ」

「うわあゝ、缶ジュースが宙に浮いとる。  
ホンマに魔法って凄いなあ……………」

「さすがに20人以上の缶ジュースを手で持ってくるのは大変です  
からね」

「ウム。ありがとう、ネギ君。」

さて、ネギ君がジュースを買いに行っている間に話し合っ  
て決ま  
ったんじやが、今回魔法を知ってしまった生徒達へのお願いは、基  
本的にエヴァが責任を持って叶えることとなった。

一番ドジ踏んだのはエヴァじやからの。妥当なところじやろうて、  
それに古菲君や長瀬君のお願いはどちらにするエヴァの協力が必要  
じやからの。

もちろんワシらにしか叶えられないお願いの場合はワシらが聞く  
から、ネギ君もそのつもりでいておくれ」

「わかりました。それがエヴァさんへのペナルティということす  
ね」

「ウム、この後エヴァの別荘に赴いて詳しい説明をするそうじや。」

あの中でなら時間がかかってもせつかくの明日の休日に響かんし、  
何より目で見て納得しやすいじやろ」

「そうですね、皆さん驚きますよ。映画に出てくるようなお城ですから。」

よし、それなら行きましょうか。僕も一緒に行きます」

「ま、待っておくれ、ネギ君。」

ちよっと君に話したいことがあったの……………」

「え？ でも僕も行った方がいいのでは？」

僕へのお話は後日では駄目なのですか？」

「いや、話を聞いておけ、ネギ。」

魔法についての説明だが、女の私から説明した方がいいこともあってな。いくら子供とはいえ、男であるネギは遠慮しておけ。

(……………まったくの嘘だがな)「

「そ、そういうのがあるんですか!？」

そういうことならわかりました……………」

「よし、良い子だ。では全員行くぞ」

そういえば、アスナ君にこんな形で魔法がばれてしまうとはなあ。

何だか最近避けられていて話し合うことが出来ていないけど、本気で話し合いの機会を持った方がいいな。

『頼むぞ、タカミチ。ネギに現実というものを教えてやってくれ。封印されている私が言っても、おそらく信じてくれないだろうからな』

『わかってるよ、エヴァ。エヴァもアスナ君たちのことを頼むよ。正直、ソッチまでフォロー出来るかわからないから……………』

『大丈夫だ。自分の仕出かした不始末は自分で始末するさ。気をつける、ネギは手強いぞ……………』

『……………わかってるよ』

ネギ君の説得か……………。うまく出来るかな？

何でネギ君は、考え方と実力がアンバランスなんだろう？

自分の実力を過大評価するのも困りものだけど、過小評価しすぎるといいうのも困りものだよ……………。

第二十三話 魔法バレ？ 斜め下（後書き）

「（「紅き翼」<sup>アラルプラ</sup>の修行で）魔力容量が増えたよー！」

「やったねネギ君！」

さて、今回もオリジナル設定がかなり入りました。

“近右衛門が“近衛”なのに関東魔法協会の理事であること”

“刹那が裏切り者とされるのに、近右衛門にはそういう描写がない”

“東に敵対する行動まで起こす人間は、あくまで少数であること”

“関東魔法協会の理事の娘が西の長の妻だったこと”

“神鳴流の青山詠春が西の長であること”

“木乃香が麻帆良に行くことが出来たこと”

“木乃香が将来の西の長にならなくてもよさそうなこと”

“むしろ木乃香が西洋魔術師になってもよさそうなこと”

という疑問がたくさんあったのですが、これなら不自然ではない  
と思います。

“近衛”みたいな古い家なら、分家とかたくさんありそうですし  
ね。

他の方のお話では、「近右衛門が西を裏切って東についた」とい  
うことでよく描写されます。

しかし、この作品では、

「逆に考えるんだ。

“近右衛門が西を裏切って東についた”ではなく、“西の人間で  
ある近右衛門が東の要職についた”と考えるんだ」

という発想ですね。

まあ、近右衛門も大人ですから、公私混同はあまりせず東の人  
間として生きていますが。

まとめますと、

“近右衛門が東にいるのは西も納得済み、むしろ偉くなって便宜  
図れ”

“詠春は中継ぎの長、そのために近右衛門の娘と結婚”

“近衛の分家としては、自分の家から長を輩出するチャンス！”

“一番楽なのは、木乃香と結婚して近衛本家に婿入り”

“でも、それだと神鳴流えいしゅんとか東このえもんとのしがらみも一緒についてきそ  
う”

“だから木乃香を西に戻したいのは少数派、むしろ木乃香は東に  
いる”

という、感じず。

これだったら近右衛門は西に対して貸しはあっても借りはなく、詠春に対して手厳しいことを言ってもおかしくはないのかなあ、と。

例えるなら、

「父である社長の命令で、冷戦している相手とのパイプ役になるために相手の会社に入社したのに、父の跡を継いだ兄は後継者いない状況で死んじゃって、実家でお家騒動起きそうだったから娘を差し出したんだだけさあ。」

実家の下っ端は孫娘に対して良からぬ企みするわ、兄の跡を継いだ婿殿はその下っ端押さえつけられないわで最悪なんだけど。

文句言ってもバチ当たらんよね？」

って感じでしょうか？

ちなみに右大臣と左大臣だったら、左大臣の方が地位的には上です。

“近右衛門”<sup>このえもん</sup>に対して、“近左衛門”<sup>このみえもん</sup>って名前は変でしょうか？

ネギは近右衛門のことを“東の長”と言ってましたが、あくまで近右衛門は関東魔法協会の“理事”であって、“理事長”ではないんですよえ。

同格の理事が他にも数人いておかしくはないと思うのですが………

“理事”というのは普通の会社だったら“取締役”のようなもので、社長である“代表取締役”に相当するのは“理事長”です。

まあ、クライマックスな原作次第ではどうなるかわかりませんがね。

最近ではマガジンの最新号をリアルで読んでないですし。

それと魔力量の数値もオリジナルです。

だいたいこんな感じということにしておいてください。

もし、新たな事実が判明したら、その度に修正していきます。

とりあえず、ネギの魔力は木乃香の魔力の2倍弱、としておいてください。

魔力容量は“トレーニングなどで強化しにくい天賦の才”ということですので、あくまで“しにくい”だけみたいで増やせないわけじゃないみたいです。

“アラルツラ紅き翼”の修行で元の倍以上に増えてたみたいです。

やったねネギ君！

そして遂にネギは、これから麻帆良関係者の前でも本当の実力を  
出してもよくなりました。

今まで打っていた数々の布石が見事に効果を発揮したようです。

麻帆良関係者はネギの実力を見たとしても、変に思わずに納得し  
てくれ……………納得？ 変に思わず？

……………。

……………。

……………。「ネギ君だからしょうがないんだよっ！！！！」  
と、無理矢理にでも納得してくれるでしょう。

エヴァも魔法バレ連中の面倒を見なければいけません、基本的  
に無罪放免です。

学園長達からすると、

「エヴァの責任どころの話じゃねえ！！！！」

って状況です。

タイトルの“斜め下”は、皆様もご存知の“斜め上”とは少し違  
うものという感じでつけました。



“斜め上”が予想を裏切り全く予期できない、ありえない方向への発想ならば、

“斜め下”は予想を裏切り全く予期できない、だけどありえてもおかしくない方向への発想、という感じでしょうか。

何となくニュアンスはわかっていただけだと思います。

予想よりは下回ったけど、それでも斜めな発想です。

言葉の上だけを考えるなら、別にネギは変なことを言っているわけじゃないんですがね……………。

第二十四話 好感度ランキング ネギ 乙女達

ガンドルフイーニ

「……………というわけでネギ君の魔力量は、ワシらの数倍もあるんじゃないよ」

「またまたご冗談を」

……………おかしい、何だかさつきからネギ先生の後ろに猫の幻影が見えてきた。

それにしても、何で猫先……………じゃなかった、ネギ先生は全然信じてくれないのだろうか？

「君は10歳の見習い魔法使いだけど、熟練の魔法使いの数倍の魔力を持っていて、尚且つ魔力の制御や効率化も完璧で、身体能力も神鳴流とガチでやりあえる位優れていて、ぶっちゃけこの学園のトップクラスに強いんだよ」

と言っているだけなのに。

……。

……。

……すまない、普通は信じれないな。

「冗談はやめてくださいよ、学園長。  
さっきから何度も言ってますけど、僕はまだ10歳の見習い魔法  
使いですよ」

「だ、だからじゃなあ、ネギ君は……ぬ……?」

「ど、どうしました、学園長？」

急にお腹を押さえたりして……」

「何だか急に胃が痛くなってきおった。

せ、瀬流彦君。ワシの机に胃薬があるの……ぬうう……

……」

「が、学園長、大丈夫ですか！？  
治癒魔法いらいますか！？」

「そ、そんなことよりネギ君は現実を知っておく……………ガハ  
アツ……………」

「学園長っ！？」

「救急車だ！ 救急車を早く……………」

「学園長……………」

「吐血した！？ マズイぞ。ストレスで急性胃潰瘍にでもなったの  
か！？」

「……………って感じになっていることに餡蜜10杯」

「賭けにならん。

そうなると思ったから龍宮まで来たのか」

「誰が好き好んであそこにいたいと思うんだ？

お前こそ、ちゃんと近衛と話は出来たんだろっな？ 何せ同じ部屋で寝たんだからな」

「ま、まあな……………」

そんなに頬を赤く染めるな。  
変な方向に勘違いされるぞ。

エヴァンジェリンの別荘に移動したあと、エヴァンジェリンの人の従者から夕食が振る舞われ、部屋を与えられて各自就寝となった。

もう別荘の外の時間では夜だったから、体内時計を合わせるためだ。

……………というのは口実で、おそらくエヴァンジェリンが精神的に疲れ果てていたからだろうな。

まあ、無理もあるまい。

刹那は近衛と一緒に部屋の泊まり、夜通し話していたそうだ。

朝食のときに見た近衛は嬉しそうだったし、刹那もスツカリと晴れ晴れとした顔をしている。もう2人のわだかまりは解けたのだらう。

「それで？ 近衛はどうするつもりなんだ？」

「まずは長と話し合ってみるらしい。魔法を学ぶのも学ばないのもそれから決めると。」

「……………ただ、魔法を使ってみたいという気持ちは少なからずお持ちのようだな」

「ふむ、そうか。」

つまり、古と楓はネギ先生やお前との修行。綾瀬と宮崎は魔法を習うこと。神楽坂、長谷川はまだ未定ということか。

そういえば、エヴァンジェリンが叶えてくれるお願いってのは私もアリなのかな？」

「エヴァンジェリンさんに言えるものなら言えばいいさ。」

……………長谷川さんはさつき、「新しいノートパソコンが欲しいんだけど、それはやっぱり駄目かなあ？」って言っていたな」

「堅実な考えだな。」

魔法を習おうとするよりはマトモだろう」

「中学生の女の子なら仕方があるまい。」

「……………しかし、本当にいいのだろうか？ 一般人に魔法を教えた  
りして……………」

「今回のことは明らかに学園のミスだからな。しかも近衛も一緒に  
目撃してしまった。」

近衛がいなかったら記憶消去という手もあっただろうが、そんなこ  
とだと知られたら近衛が許すとは思えん。」

学園長も孫の記憶を消したり、嫌われたりするのとは避けたいのだ  
ろっ」

「まあ、そっだろうな」

「それとネギ先生のことと精一杯ということもあって、彼女達には  
手が回らないんだろうっな」

「……………ネギ先生かぁ」

……あの子は何であんなにアホの子なんだろうか？

模擬戦の頃からどこかズれているとは思っていたが、あそこまでズれているとは思わなかった。

教師やっているのを見てみると普通に見えていたんだがなあ………

文武両道、成績優秀、品行方正など、修飾語をいくら付け足しても足りないぐらいの天才なんだが、それでもあのアホさ加減で台無しになっている。

それともあのアホさ加減のおかげで、嫌みったらしく見えないというのもあるのだろうか？

嫌みったらしい天才とアホな天才。

これはどっちが良いのだろうか？

「そうそう、昼食のあとに皆で集まって話し合いをするそうだ。いつまでも水着姿で日光浴していないで、龍宮も来てくれ」

「わかったよ。」

それにしても外の季節は冬なのに、日光浴というのは悪くないな」

「だったら夏になったら雪山に行ってみればいいさ。」

撰氏マイナス40　だそうだがな」



さすがにそれは御免だよ。

もう40 ほど気温を上げてくれれば考えるがな。

「……………というわけで、来週から相坂さよが2 - A に入ることになった。病気でずっと入院していたという筋書きらしい。各自覚えて置くように。」

わかっていると思うが、見ての通り相坂さよは人形の身体に入っている。何か不都合があったりした場合は私かネギに言え」

「よ、よろしくお願いします。皆さん！」

「よろしくね、さよちゃん」

「よろしくなー、何かあったら遠慮なく言ってな」

「よろしく願います」

「（……………冷静になって考えてみると、幽霊がクラスメイトって……………。まあ、担任と担任補佐が魔法使いで、吸血鬼やロボットもいるんだから今さらか）」

それにしても、相坂のことは全然気づかなかったな。私の魔眼でも見えないとは、まったく影の薄い幽霊だ。

ネギ先生はクラス名簿に載っている生徒が、いつまでも経っても登校しないことを気にしたのがキツカケとして気づいたらしいが……………。

「それと改めて紹介しておくが、この子はネギの使い魔であるオコジヨ妖精のアルちゃんだ。

この子に言えばネギにも伝わるから、緊急時にはそうするといい」

「よろしく願います、皆様。

それと今まで黙っていて申しわけありません、アスナ様、木乃香様」

「本当にアルちゃん喋ってるわねえ。

さよちゃんにはビックリしたけど、アルちゃんにもビックリした

わ

「気にせんでええよ。魔法のことは秘密にしとかなアカンかったんやろ。」

それにしても凄いなあ。まるでディニーみたいや」

「オコジヨ妖精ですか。失礼ですが、あまり聞いたことはありませんね。」

アルちゃんも魔法を使えるのですか？」

「はい、人間の魔法使いが使う魔法とは違いますが、オコジヨ妖精も魔法を使えますね」

「へえ、アルちゃんも凄いんだねえ」

「（こいつの声帯どうなってるんだろ？ってツッコミしちゃ、いくら何でも空気読めてねえよなあ……………」

「ねえねえ、人間とは違う魔法ってどんな魔法が使えるの？」

「そうですねえ。」

変わったところでは『バックティオー仮契約』の儀式、人間関係の感知などが出来ます」

「『はくてあー仮契約』？ …… って、人間関係の感知ってどういうのなん！？」

「そのままの意味だぞ。人が他人に抱いてる好意を測る超能力があるんだ。

オコジヨ “妖精” と名乗るだけあって、特殊なことが出来るんだよ。

……… そういえば、ネギが私のことをどう思っているのかも出来るんだよな？」

「え？ 出来ることは出来ますけど………」

……… 空気が変わった。

神楽坂や近衛、宮崎、エヴァンジェリンの目が輝きだした。

それにしても、あの“ダーク・エヴァンジェル闇の福音”がここまで熱を上げるとはなあ。

「…………… へ、へえ〜？」

「うわー、ウチってネギ君にどう思われてるんやろ？」

「は、はわわわわ……………」

「……………アルちゃん。」

「ちょっと見せてくれてもいいか？」

「み、皆様の目が怖いです。」

ネギお兄様はまだ10歳の子供ですので、おそらく皆様が期待するようなものは出てこないかと思いますが……………。

「ち、ちなみにこれが参考例の好感度ランキングですね！」

	友	親	恋	愛	色	計
ネカネ	1	1	0	1	0	2
アーニヤ	7	9	1	9	0	26
ドネット	3	3	2	3	0	11

「各10点満点のパラメータ5種類に分かれています、それぞれが“友愛”、“親愛”、“恋愛”、“愛情”、……………“色欲”を表しています。」

数値はニュアンス的に……………そうですね、0〃無関心、1〃3〃嫌いじゃない、4〃6〃普通に好き、7〃9〃かなり好き、10〃

大好き、といった感じですよ。

“友愛”は友人として、“親愛”は親兄弟……要するに家族として、“恋愛”は恋人として、“愛情”はどのぐらい愛しているか、“性欲”……は0だから関係ありませんね。

合計値も表していますが、ネカネお姉様とアーニヤお姉様を見ていただければわかるように、一番合計値が高ければ一番愛されているというわけではありませんね」

おいおい、勝手に見せていいのかい？ と思ったが、これなら問題ないか。

この表を見る限り、やっぱりネギ先生は10歳の子供だなあ。

「えーっと、確かネカネさんってネギの従姉のお姉さんで、アーニヤちゃんも幼馴染の妹みたいな女の子だったわね。

……ネカネさんへの“親愛”と“愛情”が10点ってのは凄いわねえ」

「え？ アーニヤお姉様の方がネギお兄様より年上ですけど……」

「やっぱり家族で母親代わりってのは強いんやなあ……」。

でも“友愛”と“恋愛”が1点ってことは、完璧に家族としか見ておらんなあ」

「全体的に“恋愛”と“色欲”の数値が低いですね。

……“色欲”って要するに、……いやらしいことですよね。」

「その“色欲”が見事に0点でござるなあ」

「“恋愛”の1点と2点も似たようなものアルよ」

「10歳じゃ仕方がないだろ。」

むしろ私はこの表見て安心したけどな」

「そうか？」

10歳にもなってそういうことに全く興味がないというのは、逆にネギの将来が不安だな」

「ムウ。ネギ先生が紳士ということはいいのですが、恋愛に興味を持たれていないというのは困りものですね」

「ド、ドネットさんって誰なんだろう？」

この人は“恋愛”が2点あるけど………」

「ドネット様はメルディアナ魔法学校の職員でして、ネギお兄様の祖父である校長の秘書のような方です。」

校長を通じて少し付き合いがあります、ネギお兄様が言うには

“年上の綺麗なお姉さん”だそうです。

そして現在の皆様への想いはというと……………あ、あら？

な、何があった!？

おそらくネギ先生が私達をどう思っているか書かれているであろう巻物を見たアルちゃんが、慌てて巻物を閉じたぞ？

「ア、アルちゃん、どうしたの？」

「い、いえ、ちょっとこれは予想外というか……………」

「……………予想外？　もしかして、ウチラのこと何とも思っへんのかなあ？」

「そ、そんなことはあるまい。

……………アルちゃん、見せてくれ！」

「ちょっと待ってください。

これはさすがに「茶々丸っ！」って駄目です！　離して下さい！」



「失礼します、アルちゃん」

おいおい、いいのかこれは？ といつても止める奴がないな。  
誰もがバツが悪そうな顔をしている中に、隠し切れない興味が混  
じっている。

まあ、私もあのネギ先生が他人をどう想っているかということな  
ら、少しは興味あるのだから。

ゴクリ、と生唾を飲み込む音が複数聞こえた。  
というか全員目がマジだな。

「……………よ、よし、開くぞ」

「待ってください、エヴァンジェリン様！ 見ないでください！！！！  
アスナ様達もその巻物を見ないでください！」

「いいや！ 限界だ、見るねっ！！！！」

止める間もなく、バツ、っと開かれた巻物に書かれている内容へ釘付けになる私達。  
 そこに書かれていたのは……………。

	友	親	恋	愛	色	計	
明日菜	4	7	6	7	0	24	
木乃香	3	8	5	7	0	23	
エヴァ	6	3	3	7	6	0	22
刹那	6	3	4	5	1	19	
茶々丸	5	4	3	6	0	18	
のどか	5	4	4	4	5	0	18
千雨	4	4	4	4	0	16	
マナ	4	2	2	3	0	12	
古菲	4	2	2	3	0	11	
夕映	3	2	2	3	0	10	
楓	3	2	1	2	0	8	
さよ	1	1	1	1	0	4	

「……………フツ、フハハハハハハハハツ……………」  
 私が“恋愛”においてトップだ！ やはりネギも私のことをそう  
 いう目で見えていたんだな！！  
 “色欲”こそ0点だが、それでも私が……………あ？」

「ちよ、ちよっと待ってよ、エヴァちゃん！ 合計点は私の方が上でしょ!？」

それに“愛情”が高い私の方がネギに愛されているんじゃない?.....  
「い?」

「あや、 “親愛” が8点でこの中では一番高いわあ。

ネギ君はウチのことを一番家族と想ってくれているんやなあ、エ  
/>>.....え?」

「.....違うんです。

これは違うんです。誤解なんです.....」

「（マスターと同じくらい私に“愛情”を感じてくださっているの  
ですか.....）」

「は、はわわわ.....、い、意外と高い?」

同じ魔法使いのエヴァンジェリンさん達や、一緒に暮らしている  
アスナさん達を除いたら私がトップ.....そ、そんな、ネギ  
先生.....」

「た、高くはないが低くもないな。全体的に“普通に好き”なのか。  
まあ、別に嫌ってわけでも嬉しいってわけでもねえけど.....  
.....って、おい?」

「“親愛”と“恋愛”が2点アルかあ。  
居残り授業で迷惑かけてばかりだったからアルかね？」

「の、のどか……………」。

嬉しがるのはいいのですが、衝撃的なことが書かれていますよ……………」

「……………拙者は“恋愛”が1点でござるな。

さよ殿は会ったばかりらしいから仕方がないとはいえ、拙者は恋愛対象外なのでござるうか？」

「はづつうう……………。最低点です。

でも、月曜日からは生徒としてネギ先生と過ごせるので、これから仲良くなっていけるんです！」

私は……………こんなものだろうな。

魔法関係で話をしたことは何度かあるが、特別に何かあったわけじゃない。それに別に成績のことで迷惑掛けているわけじゃないからな。

“年上の綺麗なお姉さん”であるドネットという人より“恋愛”が1高いのか。

フッフ、悪い気分ではないな……………まあ、エヴァンジェリンの半分以下だな。

それにしても、ネギ先生は見事に“色欲”が……………“色欲”が？

「……………せ、刹那、10歳児に手を出すのはさすがにマズイと思うぞ？」

刹那への“色欲”が1点あるよ、おい？

「……………おい、桜咲刹那？」

「……………桜咲さん？」

「ち、違います！ エヴァンジェリンさん、神楽坂さん！  
私は何もしていないんですっ……！……！」

いや、その言い訳は通らないだろう。  
他の人は見事に“色欲”が0なのに、刹那だけが1点ある。

……………アレか？ 刹那がネギ先生をソツチ方面に目覚めさせちゃったのか？

刹那はネギ先生にいったい何をしたんだ？

「……………せつちゃん？」

「嘘ではありません、木乃香お嬢さま！

わ、私は……………」

「ほ、本当です。ネギお兄様と刹那様が修行するときには私も一緒にいましたから証言できます。」

おそらくネギお兄様が刹那様を意識してしまっただけで、2人は別に変なことしたりしていないですよ！」

「……………そうかえ。」

何にせよとりあえず、ちょっと“OHANASHI”しようか、せつちゃん？

「……………は、はい……………」

……………笑顔のはずの近衛が怖い。

というか、無表情の神楽坂が特に怖い。いつもバカっぽく朗らかな神楽坂があんな無表情になるとは……………。

ああ、コッチにも来ないでさっさと帰ればよかった。

第二十四話 好感度ランキング ネギ 乙女達（後書き）

好感度ランキングはズレていないでしょうか？

自分のPCではちゃんと見れるのですが、もしかしたら見にくい方もいらっしゃるかもしれませんが、何卒御容赦ください。

そしてこの好感度ランキングは実際の数値です。

アルちゃんにお願いして、数値を捏造したりはしていません。

原作では“親”のパラメータは「ネギに対して“親心”を感じているか？」という項目ですが、この作品では「“家族”として愛しているか？」という設定ですので、ネカネのことを娘と思っているわけではありません。

点数の目安は、0＝無関心、1～3＝嫌いじゃない、4～6＝普通が好き、7～9＝かなり好き、10＝大好き、です。

やはり前世のエヴァへの初恋が残っているためか、“恋愛”はエヴァが多めです。

せつちゃんへの“色欲”については、せつちゃんに思いつきり恥ずかしがられたせいでネギも意識しちゃっただけです。

ちなみにこのネギの根っこは、仙人と幼児を足して2で割ったよ  
うな感じですよ。



せつちゃんはまだ自分が半妖であることは言えてません。  
というか、ネギの起こしたことのショックが大きすぎて、自分が  
半妖であること自体忘れてます。

そして参った。

アルちゃん視点が全然かけません。何書いても違和感しか感じら  
れない…………。

魔改造しすぎちゃいましたよ。

それと、とりあえずセーフでした。

来週からは週2更新に戻れそうです。…………戻れたら良いなあ。

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

p r a n k u

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう?」という困惑

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

木乃香の魔力が“5強”で魔法先生の魔力が“1.5”について

前回の内容から、「木乃香の魔力はもっと高いのではないか？」  
という感想を頂きました。……………やっぱりそうですよねえ。

確かにもっと多くても良さそうかな、とは思ったのですが、それ  
ですと青天井になりそうだったので止めておきました。

魔法を使うことについて“魔力容量”の他に、“精神力の強化”、  
“術の効率化”など様々な要因がありますし、量だけではなく質も  
重要だと思ひまして……………。

それと詠春は木乃香の力について「魔力を操る力が眠っています」  
と表現しました。「魔力が眠っています」ではなくです。

ですので木乃香は魔力も多いのでしょうか、むしろ“精神力”の  
方が大きいのではないのでしょうか？

車で例えるなら、

“魔力容量” 〓 ガソリタンク容量

“精神力” 〓 馬力

“術の効率” 〓 燃費

といった感じですよ。

“術の難易度”を坂道とすると、難易度が高くなるほど傾斜が上  
がっていきます。

それですとガソリントANKの容量がどんなに大きくても、馬力が  
ないと坂道を登ることは出来ません。

そしてスクナの召喚ですが、例えますと、

“100kgのバーベル”を持ち上げれる人が“5人”いても、

“500kgのバーベル”を持ち上げられるかはわかりません。

何故なら、“500kgのバーベル”を持ち上げるには5人全員  
がバランス良く、全力を發揮しなければなりませんからです。

バーベルが小さくて3人しか持てなかったら？ 5人の息が合っ  
てなくてバラバラに力を入れたら？ 持つところがバラバラで、バ  
ランスがとれなかったら？

きっとバーベルを持ち上げることは出来ないでしょう。

それと、“100m10秒”で走れる人が“5人”集まったとし  
ても、“100m9秒”で走れる人“1人”相手では、どう頑張っ  
ても100m走で勝つことは出来ない、という感じです。

リレー式にして専用の訓練をしたら、もしかしたら勝てるかもし  
れませんが、それでも5人の息を合わせるための訓練が物凄く必要  
になるはずです。

千草はスクナのことについて、「お嬢さまの力で制御可能」と言  
っていました。

“召喚”に必要なのは“魔力”なのですが、“制御”につい  
て必要なのは“精神力”ではないでしょうか？

自分としましては6作目以降のドラクエの賢者みたく、LVが上がる“魔力効率”が上がり、魔法発動に必要な消費魔力もドンドン減っていくと考えています。

そうでなければ、ネギは修学旅行からラカン戦までの間で、魔力が最低でも10倍以上に増えてなきや駄目なように思います。

魔力容量は“トレーニングなどで強化しにくい天賦の才”ということなので、いくら何でもそこまで魔力が急激に増えることはないでしょう。

以上の理由から、木乃香の魔力が“5強”、魔法先生の魔力が“1.5”としました。

第二十五話 弟子入れられ（強制）

ガンドルフイーニ

「……………本当、なんですか？」

「そうなんだよ、ネギ君。

だけど、たとえ君より魔力を持っていない魔法先生だとしても、その魔法先生の今まで培ってきた経験は見習うべきだと思うよ」

「……………え、ええ。それは承知しています」

……………よかった、やっとネギ先生が信じてくれた。

危なかった。

他の先生は既に力尽きてしまい、もう私と高畑先生しか残っていなかった。

残った私達も疲労困憊していて、これ以上の抗戦は不可能だったろう。

「……………タカミチの言うことはわかりました。  
もう少し時間を貰ってもいいですか？ ちょっと今までのことを  
思い出しながら考えたいので……………」

「ああ、それは構わないよ。  
今まで思っていたことが間違っていたんだから、少し昔のことを  
思い出すのもいいさ」

「そうだな。今日はネギ先生の生徒に魔法がばれてしまうなど色々  
あったからな。

明日明後日の休日を使ってゆっくり考えてみるといい」

「わかりました、そうします。

……………そういえばエヴァさんはもう説明し終わった頃ですかね？」

「まだじゃないかな？」

「電車も動いてないから、エヴァの家に行くのも時間がかかるだろ  
うからね」

……………冷静になって考えてみれば、  
「闇の福音」に生徒を  
任せてよかったのだろうか？

まあ、学園長が復帰してから相談しよう。

ターク・エヴァンジェル

ネギ先生がついていけば差し迫った危険はないだろうし、それに生徒には悪いけど今日はもう疲れた……………。

「……………ところで話は変わりますが、人払いをしていたはずの校舎に明日菜さん達が入ってきたのはいったい？」

「ああ、それはね。

秘密にしておいて欲しいんだけど、実を言うとアスナ君には特別な力があつてね。

おそらくそれが作用してしまったと思うんだけど……………」

……………ふう、これでようやく家に帰れる。

娘はもう寝てしまっただろうか？ でも、寝ててもいいから顔を一目見たいな……………。

「……………というわけで、ネギお兄様は刹那様を意識してしまったのです」

「そうなのです。」

私がネギ先生のことをとても恥ずかしかってしまい、ネギ先生もそれに影響されただけなんですよ」

「アスナ様や木乃香様だって、寝ているときにネギお兄様が身体を触ってきたら意識してしまいますでしょう?」

「ネ、ネギはそんなことしないわよ!」

「そっやなあ。」

ネギ君って、自分からはくっついてこないんよ」

そっなのよね。

私が落ち込んでいた最初の頃は背中を優しくポンポン叩いて慰めてくれたけど、最近は全然そっいことないのよねえ。

恥ずかしがりやというか何というか……………、無意識状態でないと



甘えてくれないし。

紳士なのは良いことなんだけども。

本音を言つと、もうちょっと甘えてきてほしかったりして……………。

「“色欲”の1という数値は、相手に異性を感じてしまったらそれだけで出てしまう数値です。

ですので、あまり気になされる必要はないかと」

「……………ちょっと待って、アルちゃん。

それって要するに、ネギって桜咲さん以外は女の子と意識していないってこと？」

「……………なん、やて？」

「ち、違つのです、お嬢さま……………」

「意識していないというより、まだそういうことがわからないのだと思います。

アスナ様や木乃香様のことは、家族で“姉”のように認識していても、“女性”とは認識出来ていないのかもしれない。

私もネギお兄様の“色欲”が0点以外の数値が出たのは初めて見

ましたし」

「あー、10歳ならしょうがないアルよ」

「そついで」ぢるな」

「……………しかし逆に言えば、ネギはそついうことに興味が出てきたということか？」

「それこそ10歳なら仕方がないな」

「ネ、ネギが!？」

「そ、そつなん!？」

「え!?! ……………私は今後ネギ先生とどうやって接すれば?もしかしてネギ先生は私のことを……………」

「や、やだ。そんなこと言われたらコツチも意識しちゃうじゃない。桜咲さんと寝たときのネギもこついう気持ちだったのかしら?」

……………う、私の顔赤くなってるわね。

「こ、今度から一緒に寝るときどうしましょうか？」

「というか、私的にはアスナさん達がネギ先生と一緒に寝てることのほうが驚きなんですけど」

「ネ、ネギ先生せんせいと一緒に布団で……………」

「べ、別にいいじゃない！ 一緒に部屋で暮らしている家族みたいなものなんだし。」

「ネギは弟みたいなものよ。だったら一緒に寝てもいいじゃない！」

「そうやで〜。」

「ネギ君抱きしめて寝ると、あつたかくて気持ちええんよな〜」

「そうなのよねえ。」

「子供の体温は高いって言うけど、ネギってかなり高いのよね。だから寒い日でも、ネギと一緒に寝るだけで全然平気だし。」

「……………ああ、そうだ。」

「今度からは刹那さんみたく、あの『まいていがど咸卦治癒』を使ってもらってからネギと一緒に寝ようかしら。

私はエヴァちゃんへのお願い決まっていなかったのよねえ。魔法とか習いたいたいと思わないし、学費とか生活費を払ってもらおうというのはいくらなんでも悪いしね。

ネギしか叶えられないお願いは、ネギが叶えてくれるらしいし」

「あ！ それええなあ！

ウチは魔法習うのをエヴァちゃんへのお願いじゃなくて、おじいちゃんに別口で頼めばええし」

「な、何だと貴様ら！？

それはずるいぞ！」

「そ、そうですね！

ただでさえネギ先生と一緒に寝ているというのに、更にこれ以上ネギ先生へお願いするのはずるいのです！」

「そ、それだったら魔法を習うのはやめて、私もネギ先生せんせいと一緒に………で、でもそれはいくらなんでも無理だよ………」

へっへーん！

これはネギと一緒に暮らしてる人だけの特権だもんねえ。

「ま、待て！ 綾瀬夕映、宮崎のどか！  
貴様達の“魔法を習いたい”という願いはもう決定済みだ！ 今  
変更するなど許さん！！！」

我が弟子として、貴様達2人は私が直々に鍛え上げてやろう！  
我が配下に連なる化け物モンスターにふさわしい魔法使い……………悪の  
小ボスにな！！！」

「えええっ!？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいエヴァンジェリンさん!?  
そんなの聞いてませんです! 弟子って!？」

「もう遅い! 中途半端は認めん!!!  
やるならとことんまでだ!!!」

ついでにネギと一緒に寝るなんかも認めん! 私だってそんなこ  
としていないんだぞ!!!」

「私情入りまくりじゃないですか!？」

「あ、悪の小ボスなんて嫌ですよ〜」

「尚、修行中貴様らの服は常に黒！」

「ゴスロリ服とす……いや、やっぱりいい。ネギは私のゴスロリ姿を可愛いと言っていたからな」

「ネ、ネギ先生せんせいはゴスロリ服がお好きなんですか!？」

「フン! 違うな、ゴスロリ服を着ていた私にそう言ったんだ。」

「私の金髪が黒のゴスロリ服で映えて、それがとても可愛いそうだ」

「な、ならのは白系のゴスロリで攻めるのです。」

「のどかの黒い髪が白いゴスロリに映えて、きつと可愛いと言ってくれるはずです!」

「誰がそんなこと許すかあっ!」

「貴様らはジャージで修行しろ!」

「そ、そんなあっ!？」

「……私はいつも寝巻きにジャージを使っていて、ネギ先生と寝るときもジャージなんです。」

そんなにジャージは駄目なんでしょうか？」

「駄目やよ、せつちゃん。女の子なんだからちゃんとお洒落せんと  
な。」

「そうや！ 今度一緒に服を買いに行こうえ！！！」

「え！？ ……………は、はい、木乃香お嬢さま！」

「（PCとかは無理そうだし、私はどうしようかな？ ……………あの  
ガキと一緒に寝るのは恥ずかしいけど、あの回復魔法は惜しい。ア  
レさえあれば、もうフォトショップを使わなくてよくなるかも……  
……）」

考えてみれば別にお願いを使わなくても、ネギだったら普通に頼  
めばやってくれそうよねえ。

「やっぱりお願いはとっておいて、何かあったときのための保険に  
しておこうかしら？」

「それにしても、ネギがあんなに私のことを……………その……………す、  
好きなんてね！」

「やっぱりまだまだ10歳っていう誰かと一緒にいたい年頃なんだ  
から、一緒に住んでる私のことを好きになるのはしょうがないわよ  
ね。ウン。」

まあ、木乃香のことも同じくらい好きみたいだし、ネカネさんやアーニヤちゃん達には“親愛”と“愛情”は負けてるけど、“恋愛”は私の方が勝ってるもんね。

……………エヴァちゃんには“恋愛”が1負けてるけどね。ムウ。それでも“愛情”は勝ってるし、“親愛”は私が4も上だから良いけど。

それにしてもネギったら、他にもたくさん女の子のこと好きになっちゃって。まったくもう。帰ったらネギとお話しなきゃ。

「フン！ この指輪をしてみる！  
これはネギが私に贈った指輪だ！！！」

「ネギ先生せんせいからの贈り物！？」

「そういえば教室でそんなこと言ってましたね！？」

「な、何やて！？」

「2人はそこまで進んどったんかい！？」



「いや、エヴァンジェリンさん。その指輪は……………」

……………それにしてもネギったら、エヴァちゃんに指輪のプレゼントなんかしちゃって。まったくもう。

帰ったらネギと“O H A N A S H I”しなき  
や。

ふう、落ち着いたわ。

茶々丸さんの紅茶は美味しいわね。お菓子も美味しいし。……………  
ここにいたら太っちゃいそいで怖いわね。

とりあえず、ネギとはどうせ寮に帰ったら一緒に寝るんだから、  
そのときにいろいろとお話することにしましょう。

「ところで話は変わるのでござるが、ネギ坊主はどの位強いのでござるか？」

「うん？」

「……そうだな、とりあえず剣の腕や体術は私以上だ。10歳と  
いうこともあつて身体能力ではさすがにまだ私達の方が上だが、『  
咸卦法』などの技法を使われれば私達を上回るだろう。」

魔法については本気で使っているのを見たことないからわからないな」

「ええ〜？ ネギ君で、せつちゃんより強いんか？」

桜咲さんは剣道部でも強い方だったはずなのに……。

そういえばネギはく〜ふえにも勝ったわよね。

ネギったら、強いのねえ。

「私との試合は本気でなかつたということアルか？」

「あー……………、ネギ先生の实力は本当にわからん。アルちゃんが言  
うには雷系最強呪文の『千の雷』キラキラル・アストラペーを使えるらしいな。」

それと古、ネギ先生の本気と戦おうとするのはやめておけ。ネギ  
先生は武人というより軍人の類だ」

「……………何でネギはあんな子供に育ったんだろつか？  
やはりネギはナギより酷いぞ」

「ネ、ネギお兄様は素直で純真なんです」

まあ、確かにネギは素直で純真よねえ。  
いつもニコニコ笑ってて、何か面白いことあるとコロコロ笑って、  
無意識に甘えてくるときは本当に幸せそうな顔をするし。

「おい、綾瀬夕映、宮崎のどか。

魔法を教える前に予め言うておくが、ネギのような魔法使いにな  
れるとは絶対に思うな。

アレはバグキャラの類だ」

「そ、そんなにネギ先生は凄いですか？

確かに学園長室での一件から魔力はたくさん持っておられるのは  
わかったのですが、600年も生きておられるエヴァンジェリンさ  
んにそこまで言われるとは……………」

「へえ〜、ネギ先生せんせいって凄いですねえ」

「いくら模擬戦に負けたとはいえ、封印さえ解ければネギに負けはしないと思っていたがなあ……………」。

何だかネギと戦うこと真面目に考えたら嫌になってきた。アイツ絶対、モビルスーツや『闇の咸卦法』以外にも隠し玉持っているぞ。ネギとは戦いたくないな。何を仕掛けてくるか全然わからん。まあ、どういうことを仕掛けてくるかには興味はあるんだが……………」

「そうだろうな。」

ルール無しなら武道四天王と呼ばれている私達全員が相手をしても負けるだろう。ルール有りの試合形式ならもしかしたら何とか、といったところか。

ちなみに古。お前が本気のネギ先生と戦おうと思つたら、空を飛ぶことが出来るか射程数kmの飛び道具がないと絶対勝てないからな。

きつと始まると同時に空に逃げて、遠距離からプチプチと攻撃してくるぞ」

「それだたら私絶対に勝てないアルよ!？」

「そうになったら真名頼みでござるなあ」

「“プチプチ”イ？　ありえんな。」

ネギだったら、それこそマグナム弾を使って『千の雷』を<sup>キラアキブル・アストラペー</sup>“プチプチ”と虫を踏み潰すように連射してくるだろうよ」

「ネギ先生だったらそうでしょうねえ……………」

み、皆ネギに対してに言いたい放題言っているわね。普段見ているネギとはギャップがありすぎて違和感を感じちゃうわ。

ネギったら、エヴァちゃん達にいったい何をしたのかしら？

「ところでマグダウエルがさっき言ってた、『闇の咸卦法』って何なんだ？

何だか名前からして物騒な感じがするんだけど……………」

「ん？ ネギ先生が開発したオリジナル技法だよ。

オリジナルといっても既存の技法を2つ組み合わせたものなんだが、その2つの技法は『マキア・エレベア闇の魔法』と『アルテマアート咸卦法』という究極技法と呼ばれるほど難易度の高い技法でな。

その2つを組み合わせるなんて、おそらくネギ先生にしか出来ないだろう」

「さつき学園長室で長谷川さんのニキビを治したのがそれですよ。

『咸卦法』は私達のような武人が使う“気”と、魔法使いが使う“魔力”という2つの相反する力を融合させ、爆発的な力を得ることが出来るものです」

「『マキア・エレベア闇の魔法』は私が600年前に編み出したものだ。ネギは言い伝えに残っている私の逸話から自己流で再現したらしい。」

簡単に言えば、攻撃魔法を自らの肉体に取り込むことによつてのブーストといったところだ。ネギは主に回復魔法を肉体に取り込んでいるがな。

その2つを組み合わせた『闇の咸卦法』は、“気”と“魔法”を融合させて、自らの肉体に取り込むものだ」

「“気”と“魔力”ではなく、“気”と“魔法”ですか……………？  
いろんなものがあるのですね」

「それは追々教えてやる。」

ただ、確かに長谷川千雨の言うように、“闇”と名がつくだけあつて扱いが難しい。

私のような人外の闇の眷属でないと闇に飲まれてしまい、私と同じ人外の闇の眷属になってしまう可能性もあるな」

「ちよつと！？ そんなの使つてネギは大丈夫なの！？」

その“闇の眷属”っていうのがどういうものかはわからないけど、人間じゃなくなつちやうつて……………。  
ネギつたら大丈夫なのかしら？

「安心しろ。取り込むのが回復魔法なためか、『咸卦法』を併用しているためかもしれないが、ネギ本人は至って健康だ。侵食されたような気配は欠片もない。」

『マギア・エレベア闇の魔法』を扱うためには善も悪も全てを飲み込む度量が必要なのだが、ネギにはそういう度量はあるみたいだしな」

「ふーん、確かにネギ先生は度量というか度胸というか、悠然としている感じはあるな。」

「というか、ネギ先生は本当に10歳なのか？ 年齢詐称してるんじゃないかと思うときがあるんだが……………」

「私もそれは不思議に思ったことがあるが、正真正銘の10歳だよ。しかも数えでな。」

「要するに、実年齢は今のところまだ9歳だ」

「アヤ？ それ本当アルか？」

「9歳でそこまでとは……………。  
ネギ坊主は凄いでござるな」

「おいおい、前から思っていたけど、ネギ先生ってマジでチートだなあ。」

「何か欠点はないのかよ？」

大丈夫ならそれでいいけどさ……。でもやっぱり心配ねえ。ネギに確認しておきましょうか。

……………それにしても、ネギの欠点ねえ。

そういえば思いつかないわね。

私達に勉強教えられる位頭が良くて、桜咲さん達に勝てるぐらい運動神経が良くて、2・Aの皆に好かれる位人当たりが良くて、料理も出来るし、裁縫も洗濯も……………。

アレ？ 私って、ネギに勝つてるところくない？

「ネギ先生の欠点は、魔法関係者なのに魔法関係の常識を持っていないことだな」

「いや、一応常識は持っているだろう。」

勘違いしていることが多そうだが……………」

「やはり一度、ネギとは常識というものについて話し合った方が良  
いみたいだな」



「なら、そのときは拙者も同席させて欲しいでござるよ。  
拙者は山奥で育った故に、裏の世界の常識には疎いのでござる。」

「ん、そうだな。今度ネギを含めて、全員まとめて魔法の世界についての講義をするか。」

記憶を消さないというのなら、関わる気がなくても知っておいたほうがいいこともあるからな」

「……………私もかよ。」

裏の世界について聞いたなら、もう戻れなくなるなんてことはないだろうな？」

「そんなことはない。騒ぎ立てずに知らん振りしていれば平気だ。」

裏の世界といってもピンキリでな。タカミチのようにNGOに所属して軍人紛いのことをやっているのもいれば、魔法薬の原料に使う薬草栽培なんかで表の世界の農家とほとんど同じ生活をしているのもいる。

確か、ガンドルフィーニ……………学園長室にいた背の高い黒人の男のことだが、奴の妻は一般人のはずだ。結婚するときに事情は話しているだろうがな」

「魔法使いの人でも一般人と結婚することがあるのですか？」

「そ、それだったら、ネギ先生も一般人と結婚する可能性も……………」

「？」

「……………あるにはある。」

まあ、どうしても最初は事情が話せないから、隠し事しているのと同じだからな。そのせいで浮気とか、変な風に勘繰られて喧嘩になりやすいらしい。黙っているのも罪悪感が沸くだろうし。

そのために、なかなか結婚まで辿り着けないらしいな」

「……………刀子さんは今のところうまくいってるみたいだけどなあ」

「

「それと、拒絶されるとというのが怖いのかもしれないな。

もし、結婚するに当たって事情を話し、その結果拒絶されたり魔法使いの存在をばらされそうになったら、相手の記憶を処置しなければならん。

誰だつて惚れた相手の記憶を弄りたくはないだろう？ 結婚とい

う最後の一步を踏み出せずに別れることも多いらしい」

「……………それは、悲しいです」

「そつやねえ。

ウチだつたら耐えられないわ」

「……………あとは、そつだな。」

葛葉刀子が西の出身だから、西洋魔術師とは違った視点から……

…いや、近衛木乃香。

「お前は春休みに里帰りするな？」

「うん、そうやで。お父様とこれからのことについて直接会って話してみたいと思うんや。」

せつちゃんと言うには、ネギ君とエヴァちゃんも着いて来てくれるらしいけど、本当なん？」

「まあ、私は観光目的でお前の護衛はついでだがな。」

それならコイツラ全員も連れていくか。西洋魔術師の視点だけではなく、日本古来からの呪術師の視点からの意見も聞いたほうがいいだろう」

「大丈夫なのですか？」

東西の仲は悪いのでは？」

「お前達は西洋魔術師からの被害者だからな。」

「ひょんなことから裏の世界の事情を知ってしまったのですが、記憶を消されるのは嫌ですし、関東魔法協会の説明だけではそれが本当かどうかわかりません。」

もしかしたら関東魔法協会にとって都合の悪いことは隠されて説明され、私達は騙されているかもしれませぬ。

そこで関東魔法協会と仲の悪い関西呪術協会からも話を聞いて、本当かどうか確認したいと思います」

とでも言えば、むしろ嬉々として教えてくれるだろうよ。  
へたしたら、逆に勧誘されるんじゃないか？」

主な加害者はエヴァちゃんだけどねえ。  
服を弁償してもらわなきゃいけないわね。

それに京都かあ。

この前、ネギが京都旅行のパンフレット見てたっけ。

「……………それは、確かにそうだな。」

別にネギ先生を疑うわけじゃないけど、ネギ先生はまだ子供だからな。もしかしたらネギ先生も騙されているかもしれないし。

学園長達だけでなく、中立……………というには敵対的だが、外部からの話も聞いておきたいな」

「ウム。冷静な考えだ、長谷川千雨。

旅費についてはジジイに頼めばいいだろう。嫌とは言えないよ。

難しいことは考えずに、ただの京都旅行と割り切って楽しむのもいいな」

「むしろその話を学園長にして、駄目だと言われたら学園長達は何か隠していると思ってもいいな。」

何にせよ、学園長達が私達をどう思っているのか測る試金石になりそうだ。

……タダで京都旅行出来るのも美味しいし」

「よし、そのときは私も護衛として着いて行ってやるう。  
なあと、依頼料は学園長に請求するから安心しろ」

「龍宮、便乗しようとするな。

(……元から、里帰りのときのお嬢さまの護衛の手伝いを頼むつもりだったから丁度いいけど)」

「京都ですか。

神社仏閣巡りとか出来ますかね？」

「ゆえはそういうの好きだもんね」

「日本人なんだから、西洋魔術ではなくて日本の呪術を学びたいと思っても構わん。

どうせ春休みまでは基礎中の基礎だけで精一杯だからな。取り返しがつかなくなるといふことはないだろう。

神楽坂明日菜や長谷川千雨も、願い事はそれまで待ってからの方がいいかもしれんな」

「じゃあ、春休みはここにいて皆とネギ君で京都旅行やな！？」  
「うわ、何か今から楽しみや」

「ネ、ネギ先生せんせいと旅行！？」

「（……………これは、のどかとネギ先生の仲を進展させるチャンスです）ね」

京都旅行かあ。うん、いいわねえ。

新聞配達しんぶんぱいの当番を休めるようにお願いしておかないと。

……………それと、いいんちよ達にはれないようにしないといけないわね。

ネギも一緒に行くなんて聞いたら、絶対着いてくるだろうし。

第二十五話 弟子入れられ（強制）（後書き）

テレレレッレッテッテ！（ドラクエ風に）  
ネギは現実を知ることが出来た（フリをした）。

もちろん、今までのことはわざとで、最初から知ってましたけどね。

本屋とゆえつちの強化フラグが立ちました。

明日菜よりは才能はないと思われるので、あくまでも小ボスクラスです。

京都旅行フラグが立ちました。

フェイトが西に来る前に終わらせる、というわけではありませんのでご安心を。

そしてハーレム要員が多すぎたかもしれません。会話文が多すぎますね。

今回、茶々丸とかさよとかセリフないですよ。さよはモブに脱落するかも。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう?」「という“諦観”

rank up!

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた+担任クビ

刹那：勉強地獄+バカホワイト就任

明日菜：失恋



第二十六話 好感度ランキング 乙女達 ネギ

ガンドルフィーニ

「……………なるほど、『マジックキャンセル完全魔法無効化』とはこういうものですか」

「何でネギ君が『マジックキャンセル完全魔法無効化』を使えるのさっ!？」

「……………えーっと、『何となく?」

でも、僕の『マジックキャンセル完全魔法無効化』は、昔に本で読んだ『マジックキャンセル完全魔法無効化』とは何だか違いますね。効果が薄いみたいですし、意識しないと魔法を無効化出来ません。

もうちよっつと練習すればうまくいくかもしれません。

……………モビルスーツの装甲や盾は、無意識に『マジックキャンセル完全魔法無効化』を応用していたのかな？」

「“何となく”で魔法世界でも数少ないレアスキルを使わないでくれっ!

(あれ!?! でも血筋的にはおかしくないのか!?)」

すまない、娘よ。お父さんはここまでのようだ。

小学校にも上がっていないお前を残して逝ってしまったのを許して欲しい。

妻よ、私達の娘のことを頼んだぞ。

私は君達のことを愛していたよ。

「……………グハアッ！！！」

「ガ、ガンドルフィーニ先生まで!？」

僕を残して逝かないでください！ ネギ君の相手は僕一人じゃ無理ですよ！！！」

高畑先生、君も疲れたろう？ 私も疲れたんだ。

何だかとても眠いんだ、高畑先生……………。

「ガンドルフィーニ先生、こんなところで寝ると風邪引いちゃいま

すよ。

他の皆さんも床に突っ伏して寝てますけど、お疲れなんですかね？」

「……………ネギ君。お願いだから君はもう黙っていてくれ……………」

ゴメン、もう無理。

綾瀬夕映

「ぶつちやけた話、ネギ先生はどう凄いのですか？  
素人の私達にはよくわからないのですが……………」

「んー、あれだ。  
“片足が沈む前に片足を出すの繰り返ししてたら水の上歩きました”  
ぐらい凄いな」

その例えではよくわかりませんです。

「あー、そんな感じだな」

「ネギ先生は三段論法で物事を考えるところがありますからね。  
『闇の咸卦法』を開発した時だって、

『咸卦法』は“気”と“魔力”の合成

『マギア・エレベア闇の魔法』は“魔法”を体内に取り込む

じゃあ、その二つを組み合わせたらどうなるんだろう？

という感じで開発したらいいですか」

「何でそれで「じゃあ〜」という発想が生まれるんだ、ネギは？  
というか、何でそれで『闇の咸卦法』を開発出来たんだ？」

「ネギ先生だからだろう。」

私は理解するのは諦めた」

「……………まあ、柔軟な発想が出来るという点は、間違いなくネギの長所なのだな。

『闇の咸卦法』は私にも出来ないし、特に『咸卦治癒』マイティガードは直接触れなければならぬという制限があるとはいえ、治癒魔法としては最上級だろう。

お前達がどんな魔法使いになりたいのかは知らんが、治癒魔法だったらネギに習った方がいいな。私は不死身なせいで治癒魔法使わないから得意じゃないんだ。

適性もあるから、好みの魔法を使えるようになるかはわからんが」

フム、治癒魔法ですか。

ファンタジーのような魔法も使ってみたいとは思いますが、実生活に役立つのは明らかに治癒魔法の方ですね。

それにのどかの性格なら、誰かを傷付ける攻撃魔法というものは使いたがらないはずです。

治癒魔法を勉強するということは、ネギ先生から魔法を教えるもらえて、のどかの性格にあった魔法を学べる。まさに一石二鳥。

ハッ！？ 治癒魔法を自らにかければ、睡眠時間を減らして読書の時間を増やせるのでは！？

「不死身、ねえ。」

それにしても、エヴァちゃんが吸血鬼ってどういうことなん？  
何で吸血鬼が麻帆良におるんや？」

「そついえばそつだな。」

何だかネギ先生のせいで忘れてたけど、マグダウエルは吸血鬼な  
んだつたか。

さっきの話で“封印”とか何とか言つてた気がするが……………」

エヴァンジェリンさん。

ネギ先生の説明では600年を生きた吸血鬼の魔法使いで、ネギ  
先生が足元にも及ばない凄腕らしいのですが……………」。

あくまでネギ先生の説明なのですよねえ。

「まあ、いろいろあつてな。」

簡単に言えば、15年前にネギの父親にこの麻帆良に封印された  
んだよ。

インフェルナス・スコリアステイクス  
『登校地獄』という、学校に強制的に登校させられる呪いをかけ  
られてな。

3年経つたら解きに来る、とは言われていたが、結局解きに来な  
いで奴は死んだ。

それ以来ずっと中学生を繰り返している……………」

「うわあ、15年前ってことはウチらが生まれる前から。それは辛いなあ……………」

「……………エヴァちゃんも苦労しているのねえ。私だったら耐えられないわ」

「ネギ先生せんせいのお父さんに？」

でも、エヴァンジェリンさんはネギ先生せんせいと仲が良いみたいですけど……………」

「まあな。

ネギの父親、ナギがかけた呪いは誰も解くことが出来ず、ずっとこのまま中学生をしていなきゃならんのかと思っていたんだが、ネギが私の呪いを解いてくれることになってるんだよ。

さっきまでネギのことを悪く言ったかもしれないが、ネギには感謝しているよ。

麻帆良の外には出られず、警備員として飼育殺しになっていた私を助けてくれるんだからな。

完全解呪にはまだ時間がかかるみたいだが、春休みには京都旅行に行けるぐらいには改善できるみたいだし」

……………なるほど、それをきっかけにネギ先生を狙うようになっていたのですか。

大浴場のときといい指輪のことといい、アスナさんに匹敵するの

どかの障害になる人です。

く、ネギ先生は本当に人気がありますね。

確かにのどか達の気持ちはわかるのですが、ネギ先生はまだ10歳なのですよ。

というか、アスナさんは高畑先生のことが好きだったのでは………  
…？

「それからはネギにこの別荘を貸してやったり、茶を飲みながら魔法について話し合ったりするような友人付き合いをしている。

………もっともネギは友人だけとは思っていないようだがな、フフフ………」

「………どういう意味かしら、エヴァちゃん？」

「さっきアルちゃんが見せてくれた、ネギが私に抱いてる想いを思い出せばいいわ」

「………ネギ坊主はもてるでござるなあ」



「お前らなあ……………、ネギ先生は10歳にもなっていないんだろ？  
まあ、宮崎みたいな奥手には丁度いいのかもしれないけどさ……………」

「え！？ わ、私はその……………」

「そんなこと言われてもな、長谷川千雨。

私にとっては学園長のジジイでさえ、500歳以上下なんだぞ」

「それでも10歳相手にマジになるのはおかしいだろ。

40歳と25歳のカップルならおかしくなくても、25歳と10歳のカップルなら犯罪なのと一緒にだろ」

「別に今のネギをどうしようとは思っておらん。

ネギが食べ頃に熟すまで、最低でもあと5年は……………」

「食べ頃言つな！ 生々しすぎて笑えねーよ！

逆光源氏計画立ててんじゃねーよ！！！！」

た、食べ頃！？

確かに5年もすれば、ネギ先生は今よりも格好良くなっているの  
でしようが！？？

「まあ、その前にネギが私を求めてきたら、答えてやるのもやぶさかではないかな」

「アハハ、ややわあ、エヴァちゃん。

コッチにはネギ君から女の子と意識されてるせつちゃんがおるんやで？」

「お、お嬢さまっ!?!?」

木乃香さんまで参戦するのですか!?!?

しかも桜咲さんと共同戦線!?!?

の、のどかはどうすれば……………。

いくらのどかが可愛い女の子でも、木乃香さん&桜咲さんのタッグに勝てる確率は低いと言わざるをえないです。

こ、こうなったら私がのどかと組んで……………って、何を考えているのですか、私はっ!?!?

「おいおい、近衛も本気なのかよ?

というか桜咲を巻き込んでやるな」

「こ、木乃香お嬢さまがお望みならば、私は……………」

「え？ いやいや、冗談やって、せつちゃん。

そんな本気にせんでもええよ。

でもそうやなあ、……………ネギ君はやっぱりまだ弟って感じやわ。

優しいしカツコええからネギ君のことは好きやけど、ウチもまだ恋愛についてはようわかっくらんからなあ。近くにいる男の子がネギ君だけやから、ネギ君に対する気持ちに恋愛感情かと聞かれても比べる人がおらへんし。

……………でも、ネギ君を誰かにとられちゃうのは嫌ってところやな。

……………せつちゃんはネギ君どう思ってるん？

何か満更でもなさそうやけど？」

「ええ！？ わ、私ですか……………？」

しよ、正直に申し上げますと、ネギ先生のことには嫌いではありません。一緒に寝ることが出来るぐらいには……………す、好きです。

しかし、恋愛感情かと聞かれると、それはわかりません。

私もお嬢さまと同じく、他の男性との付き合いはあまりないですから……………」

「……………あー、そうだったな。

ネギ先生は10歳の子供だけど、考えてみれば私達も14歳の子供なんだよな。しかも女子中育ち」

「ま、お前らぐらいの年頃ならそうだろう。

お前ら全員ネギに対して多かれ少なかれ好意を抱いているのだから、それを“恋愛感情ではない”とハッキリと断言できるのは龍宮マナと長瀬楓ぐらいじゃないか？

大浴場でネギと風呂に入ったとき、お前らネギの裸を見てドキッとしただろ？」

「……………えーっと……………」

「それは、まあ……………凄かったやね。

ネギ君の裸見たの初めてやったし……………」

「ネ、ネギ先生せんせいの裸……………」

「……………ネギって顔は本当に子供っぽいのに、身体は筋肉質で大人っぽくてギャップが凄いのよねえ」

「な、何アルか！？ ネギ坊主と一緒に風呂！？」

「水着着用で、でいじわるよ、古。

確かにネギ坊主の肉体は、磨き上げられたガツシリとした筋肉を  
していたでござるなあ」

……い、いや、私も正直ドキツとしてみましたが……。

あくまで水着着用でしたので、海に行ったのと同じようなものな  
のです。

それに裸といっても上半身だけでしたので、その………う、  
ううう……。

「ネギもそうだが、お前らの年頃では“友愛”と“親愛”と“恋愛”  
の区別は厳格には出来んだろう。」

………フム、アルちゃんの出番だな」

「え？ 今度は皆様からネギお兄様への好感度ランキングですか？」

「そつだ。今のお前達は自分の気持ちかわからない状態だ。」

アルちゃんの好感度ランキングは、あくまで無理矢理に数値化し  
たものだからそれで全てというわけではないが、それでも自分の気  
持ちを理解するキツカケにはなるだろう」

「そついつことでしたら構いませんが……………」

「面白そうアルな」

「まあ、ネギ坊主の拙者達への想いを一方的に知るだけではなんでも  
「じぢるからな」

「うむ。今のお前達は丁度、大人と子供の間ぐらいの年齢だ。  
そんなお前達が自分の気持ちを知るのは良い経験になるだろう」

「……………良いこと言ってるみたいやけど、ライバル見極めるためと  
はちやうよね？」

「……………そんなことはない」

「こつち見てください。」

「し、しかし、私もなのですか!？」

別に私はネギ先生のことを恋愛対象とは思っていないので、わざ  
わざそんな……………。

	マナ	楓	さよ	古菲	夕映	千雨	刹那	のどか	木乃香	エヴァ	茶々丸	明日菜	友親 恋愛色 計
	5	5	4	6	5	4	8	7	8	7	8	6	
	3	4	4	3	3	7	4	6	8	4	6	9	
	2	1	3	3	5	4	5	3	5	4	7	7	
	1	3	4	3	4	6	4	8	8	8	8	9	
	1	2	1	2	5	5	8	8	5	6	7	6	
	1	1	1	1	2	2	2	6	3	9	3	3	
	2	5	6	7	2	6	9	3	3	3	6	7	
								1		4			

「……………見たらわかります、どうぞ」

「……………えっ!?!? 今度は私なのか!?!?」

「……………はい、出ました。  
えーっと、皆様のネギお兄様への好感度は……………ハア、エ  
ヴァンジエリン様?」

「こ、これは……………皆さんやけに“色欲”が高くないですか？ エヴァンジェリンさんの9点って!？」

「というか、私も“色欲”が5点!？ しかも、“恋愛”も5点!？」

「ち、違うのです、のどか。」

「私は別にネギ先生のごことは恋愛対象とは思っていないのです！」

「やったー！ 私いつちばーん！」

「この中だったらネギは私のことを一番好きで、私がネギのことを一番好きなのよ!!!！」

「グ、グヌヌヌ……………」

「“親愛”が低いの仇となったか。まあ、私はネギのことを弟として想いたいわけじゃないしな。」

「……………おい、茶々丸？ お前やけにネギへの好感度高くないか？」

「……………いえ、大丈夫です。」

「マスターは“色欲”では一位となっております！」



「とうか、10歳のネギお兄様に“色欲”が9点って……………」

「あー、ウチは確かにこんなもんかなあ。友達みたいに料理について話し合ったりするし、ネギ君のこと弟みたいに想ってるし……………」

ウ、ウチもやけど、確かにネギ君に比べて皆やけに“色欲”が高いんやな。やっぱり一緒に風呂に入ってドキツとしたせいなんかな。エヴァちゃんの9点とか……………せつちゃんの8点とか……………せつちゃんお風呂一緒に入ってへんかったよね？」

「5位だけど……………“親愛”を抜かしたら、家族として一緒に暮らしているアスナさんと合計点は同点。」

私、負けてないよね……………」

「……………違ってます。」

これは違ってます。誤解なんです……………」

「いや、桜咲。その言い訳は通らないだろう。」

ネギ先生みたいな子供に対して“色欲”8点て……………、本気でマズくねえか、お前？

(……………う、私が意外と高い。)

別にあのガキのことは嫌いってワケじゃねえし、2-Aの連中に滅茶苦茶にされるのは見てられなかったから、いろいろ手助けしてたのが数値に出たのか。

……………確かに風呂で見たあの裸にはドキツとしちゃったけどさ(……………)

「そ、そうですね！」

“恋愛”と“色欲”に5点もあるのは、大浴場でネギ先生の裸を見てしまって意識してしまっただけなのです！

他の皆さんも“色欲”が高いから、私が高くてもしょうがないのです……！」

「楓も一緒に風呂に入ったのではないアルか？」

私は……まあ、こんなものアルかね。ネギ坊主のことは普通に好きアルし」

「確かに拙者も一緒に風呂に入ったでござるが、故郷の里には筋肉質の子供はたくさんいて慣れていたので平気でござったよ」

「私にとってネギ先生は恩人ですからー」

「……まあ、妥当なところだろう」

……それにしてもアスナさんが本当に高いですね。

ネギ先生からの好感度も一番高かったですし、やはり一番の障害はアスナさんですか……。

しかし、何故アスナさんはここまでネギ先生のことを？

アスナさんの好みは“渋いダンディーなオジサマ”で、高畑先生  
のことが好きだったはずでは？

何故あそこまでネギ先生への好意を隠さないのでしょうか？

いくら一緒に暮らしていて、アスナさんが落ち込んだときにネギ  
先生が慰めてくれて仲良くなったとはいえ、今までの意地っ張りな  
アスナさんだったら、

「わ、私がこんなにネギのこと好きなのじゃないじゃない!!!」

とか言いそうなのに……。

それとも委員長さんのように、シヨタコンに宗旨替えしたのでし  
ょうか？

「……………アスナさん、何があったのですか？

アスナさんは高畑先生のような大人の男性が好きだったはずでは  
ないのですか？」

「え!?! べ、別に何も無いわよ!」

「そういえばそうだよな。神楽坂は子供が好きじゃないとか言っ  
てなかったか？」

ネギ先生と一緒に暮らして情が移ったか？ それとも高畑先生に  
振られてネギ先生に走ったのか？」

「フン！ ありそうな話だな！

大方あの朴念仁に相手にもされずに振ら……………れ……………て……………  
？」

……………ア、アスナさん？

急に動きを止められてどうしたのですか？

な、何故だか寒気もしてきたのですが……………。

「ア、アスナさん……………？」

顔が……………能面みたく……………」

「（だからその無表情はやめてほしいでいじめる…）」

……………」

「ア、アカンよ！ 皆！！！！」

……………え？ マジですか？

高畑先生に振られてしまったのですか？

そういえばアスナさんが一時落ち込んでいたのは知っていましたが、どうして落ち込んだかは知りませんでしたね。

ネ、ネギ先生の性格なら、落ち込んだアスナさんを一生懸命励ますはずですよ。

もしかしてそれがキツカケで、シヨタの道に走ったのですか！？

「ア、アスナ？ 大丈夫……………アルか？」

「ワ、ワリイ。冗談のつもりだったんだが……………」

「し、知らなかったんだ！  
そんなことになっていたとは……………」

「アスナ！ 気にしたらアカンよ！……！  
皆悪気はなかったんやし……！」

「……………」。

……………」。

……………」う、うわああああ……んっ！……！」

ア、アスナさ……んっ！？

どこに行くのですか……！？

マズイです。

アスナさんが泣いて明後日の方向に走り去っていきました！？  
ってか足早っ！？

さすがは春日さんと毎回短距離走で1、2位を争っているだけありますね！

「ア、アスナあ……！？

せっちゃん！ 楓！ アスナを捕まえて……っ！……！」

「わ、わかりました！」

「あいあい、承知したでござるよ」

「足止めはまかせろー」 パアッーーーン！

何故に発砲音！？

龍宮さんはライフル銃を構えて何をしているのですかっ！？

「安心しろ、ただのエアガンだ」

「あ、アスナさんが転んだ」

何だか発砲音がエアガンらしくなかったと思うのですがっ！？  
いや、別にエアガンとかの音を良く知ってるわけじゃないのです  
が……………。

というか、転んだアスナさんが動かないんですけど！？

「ん！？ (弾種を) まちがったかな……………」

そんな冷静に!?

と、とりあえず急いでアスナさんを助けないと……………。

転んだままのアスナさんに近寄ってみると、ちゃんとアスナさんの泣き声がします。

……………よかった。(精神的にはともかく身体的には)無事だったんですね。

まあ、ふくらはぎに弾が当たったような赤い跡がありますけど……………。

「……………ヒック……………ヒック……………」

……………いいもん。私にはネギがいるもん。ネギは私に優しくしてくれたもん……………」



……うわあ。アスナさんマジ泣きです。  
どっだけ高畑先生からこっ酷い振られ方をされたんですか？

「……こうなったらネギのお嫁さんにしてもらうもん。ネギは私  
のこと魅力的って言うてくれたもん……。  
だから……だから、高畑先生なんて……高畑先生なんて……  
……ヒック……う、うわあああーっ！……！」

「はいはい、辛かったやねえ。  
大丈夫だよ。ネギ君ならきつとアスナをお嫁さんにしてくれるで  
だから、ホラ。もう泣かんとき……！」

「こ、木乃香あ~~~~！！！」

「アスナさん！ 大丈夫です！！  
アスナさんは魅力的な女の子です！！！」

「……うん。やっぱり今は思いっきり泣いてええよ。  
考えてみたら、この失恋でアスナが泣くの初めてやね」

「……変な話題振って申しわけありませんです」

「マジで悪かった。……………本当にごめん」

「あ、あ……………泣きたくなったらこの別荘を使ってもいいぞ。いつでも遊びに来い。だから元気出せ、な？」

堰き止めていた想いが溢れ出したのか、アスナさんは全然泣き止む様子はなく、むしろどんどん酷くなっていきます。

いや、本当にごめんなさいです。

……………こ、こんなアスナさんを見ていたら、のどかの応援をしづらくなりますね。

のどかもアスナさんを見て思うところがあるのか、涙ぐんで木乃香さんと一緒に慰めていますし……………。

ああ、恨みますよ高畑先生。こんなのだうしろというのですか？ネギ先生に担任の座を奪われるぐらい出張行ってたり、魔法使いなのに魔法を使えなかったり、アスナさんをここまで泣かせたり……………もう高畑先生はまるで駄目なオッサンでしかありませんね！

略して“マダオ”ですよ！

高畑・T・タカミチ

「それじゃあ、僕はエヴァさんの家に行ってみますね」

「……………うん。アスナ君たちによろしく言っておいてね。」

土日は忙しいから、何か質問があったら月曜日に聞いてくれ、と伝えておいてくれ。

それと『マジックキャンセル完全魔法無効化』のことは他の人には秘密にしておいてほしい。魔法世界でも確認されているのが少ないレアスキルだからね。よからぬことを考える人がいるかもしれない」

「わかりました。まずは僕が自分で一通り調べてみてから、『マジックキャンセル完全魔法無効化』の詳細を明日菜さんに教えますね。」

それじゃあ、おやすみなさい。タカミチ」

「……………うん、おやすみ。ネギ君……………」

……ようやく終わった。

家に帰ろう。そして土日は寝て過ごそう。

出張明けで土日は休みを貰っているから、ゆっくりと過ごせるはずだ。

僕だって、たまには自堕落な時間を過ごしてもいいはずだ。うん、そうしよう。

………これからは、胃薬を家と学校の机に常備しておこうかな。

とりあえず今は学園長の胃薬を貰ったところか。

えーっと、………あつたあつた。これが“徳用胃薬”。  
大容量な入れ物だな。学園長も苦労しているんだなあ………。

第二十六話 好感度ランキング 乙女達 ネギ（後書き）

何か勘違いしていた人もいらっしやるかもしれませんが、まだネギのバトルフェイズは終了していませんでした！

そして誰も覚えていられないかもしれないかもしれませんが、一応ネギも『マジックキャンセル全魔法無効化能力』を神様？から貰っています。

タカミチは自分が知らないところでマダオとなりました。

タカミチの株価は現在、ロープレスバンジージャンプ中です。

ちなみにアスナは失恋していなければ、“友愛”以外の点数はそれぞれ2〜4点は低かったです。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という“絶望”

rank up!

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた + 担任クビ + “マダオ就任”  
new!

刹那：勉強地獄 + バカホワイト就任

明日菜：失恋

## 第二十七話 一段落

ネギ・スプリングフィールド

「ネギ。早く寝ましょう」

「むう。明日はうちの番やからな、アスナ。

……ウチもせっちゃん呼んで一緒に寝ようかなあ」

はいはい、わかりましたよ。大人しくベッドの中で待っていてくださいね、明日菜さん。

あの後エヴァさんの家に向かったら、明日菜さん達が寮に戻るところに出くわしました。

別荘の中で2日ほど過ごしていたそうです。

何を話していたかまでは。女の子同士の秘密らしいですが。

そして口止め料のお願いは、やはり宮崎さんと綾瀬さんは魔法を習うこと。長瀬さんと古菲さんは僕達との修行。

明日菜さん、木乃香さん、長谷川さんはまだ保留。春休みに僕達と一緒に京都に行き、関西呪術協会からも話を聞いた後で決めるそうです。

「術式兵装『マイティガード咸卦治癒』」

「へえ、この前も見ただけど、やっぱり凄いわねえ」

「この前言うても、実際には4時間ぐらい前なのがおかしいやね。魔法って本当に凄いなあ」

「……………わかっていると思いますけど、他の人には言わないでくださいよ」

「わかってるわかってる。」

「ホラ、おいで。ネギ」

「大丈夫や、エヴァちゃんにもキツク言われたしなあ」

明日菜さんやけに嬉しそうですねえ。何か良いことでもあったんでしょっか？



それとも『マイティガード咸卦治癒』の効能が目的？

「それじゃ、電気消すで。」

おやすみ、アスナ、ネギ君」

「おやすみ、木乃香」

「おやすみなさい、木乃香さん」

今日はいろいろなことがあって、僕も精神的に疲れましたね。まさか、こんな風に魔法バレするとは……………。

宮崎さんみたいな人には、あまり危ないことに関わって欲しくないのですけどねえ。

まあ、これでもう猫被る必要なくなっただから、これからは楽っちゃ楽なんですよ。

学園長達も僕のことを受け入れてくれましたし、京都編に向けて修行を頑張りますか。

今から鍛えれば、古菲さんも十分すぎるほど戦力になりますしね。

「エへへへへ」

そして明日菜さんがご機嫌良すぎです。  
抱きしめられて頬ずりされてます。

本気でどういうこと？

「アスナ。ご機嫌なのはええけど、騒がれるとウチ眠れんよ」

「……………ちょっとぐらいいいじゃない」

「明日菜さん、どうしたんですか？  
何かいつもと違うんですけど……………」

「あ、エヴァちゃんの別荘でいろいろあつてなあ……………。  
(アルちゃんから好感度ランキング見せてもらったのは、絶対に秘  
密にしとかなアカンなあ)」

「うん、『まいていがーど咸卦治癒』って本当に気持ち良いわねえ。

桜咲さんやエヴァちゃんが寝ちゃっていつのもわかる気がするわ」

「……………そうですね」

「アスナあ」

「……………とりあえず、木乃香さんに迷惑でしょうから、音が漏れないようにベッドに結界張りますよ。」

それだったら木乃香さんも眠れるでしょう」

「え？ それだとアスナがネギ君に何するかわから

内外の音を遮断する結界を展開。

これで木乃香さんはゆっくり出来るでしょう。」

「……………あれ？ 本当に木乃香の声が聞こえなくなっただわね」

「振動は伝わりますから、暴れたりすると迷惑になりますけどね。ところで明日菜さん、何かあったんですか？」

「別にいい。ただ『まいていがーど威卦治癒』ってのが気持ち良いだけよ。  
ホラ、『まいていがーど威卦治癒』は、くっつけばくっつくほど効果が上がるん  
でしょ？ ネギも私に抱きついてきなさいよ」

「え？ でもさすがに女性に抱きつくのは……………」

「……………桜咲さんには抱きつけるのに、私には抱きつけないのかし  
ら？」

「喜んで抱きつかさせて頂きます」

殺気感しました。

アレ？ 何で刹那さんと抱きしめあって寝てるの知ってるの？  
刹那さん話しちゃったんですか？

というか、何で明日菜さんがそれで怒るの？

「ねえ、ネギ？」

「何ですか？」

「私のこと好き？」

「……………は？」

「だから……………私のこと好き？」

「……………えっと、明日菜さんのことは好きです。」

「というか、嫌いな人と一緒に寝れるほど人間出来てませんし……………」

「……………」

「これは本当。」

「アスナさんのことが好きでしたが、明日菜さんのことも好きです。」

「クールで知的なアスナさんと、明るくて生き生きとしている明日菜さん。」

「2人ともそれぞれ違った魅力があって、どちらかなんて選べないぐらいに好きです。」

アスナさんの微笑も明日菜さんのカラツとした笑いも、頭を優しく撫でてくれるアスナさんも頭を強く撫でてくれる明日菜さんも。僕は2人の明日菜さんアスナのことが大好きです。

「そっ？」

ありがとうございます、私もネギのこと好きよ

「……はあ、ありがとうございます」

タカミチとの一件から弟のように可愛がってくれるのはいいですが、明日菜さん最近ブラコンの境地に達してきていますね。かいぐりかいぐり、と頭を撫でられて抱きしめられて頬ずりされて、何とか揉みくちゃです。

「……明日菜さん、ちょっと苦しいです」

「あ、ゴメンね。」

でもネギの方からもちゃんと抱きついてきてよ。恥ずかしがらないでいいからな

「わかりました」

「……恥ずかしくなくてもいいけど、別に恥ずかしくなくてもいいのよ?」

「明日菜さんが何を言ってるのか本気でわからないんですけど?」

「別にいい。」

桜咲さんに抱きつくときは顔が真っ赤になるぐらい恥ずかしがるのに、私に抱きつくときはそうじゃないんだなあ、と思っただけよ」

「……初めて明日菜さんと一緒に寝たときって、そういつことを気に出る状況じゃなかったと思いますけど。それから最近までずっと一緒に寝てましたからね。もう慣れちゃいましたよ」

「うっ……。それはそうなんだけどさあ」

やっぱり刹那さん話しちゃったみたいですね。

これが女の子同士の秘密の話って奴ですか……………。

怖いなあ。女の子同士の秘密の話って。  
女子中の教師やるときから覚悟は決めてましたけどねえ。

「刹那さんが僕と寝ることまで真っ赤になっちゃって、それにつられて僕も意識しちゃっただけですよ。」

故郷の従姉とか明日菜さんとか木乃香さんはそういうのなかったですからね。あそこまで恥ずかしがられるなんて慣れていませんでしたから」

「ふ〜ん。」

そんなこと言っつてことは、ネギにとって桜咲さんは特別なのかしらっ？」

「特別、ですか？　そういうつもりはありませんけど？」

むしろ2 - Aの皆さんは僕にとって全員特別です」

「……………そういう意味じゃなくて、桜咲さんに意識されちゃったからネギも意識しちゃったんでしょう？」

やっぱりネギも男の子なんだから、桜咲さんのことを……………えっちな目で見たりしたんじゃないの？」

「そんなことはないですよ。」



抱きしめられるのは慣れていても、抱きつくのには慣れていませんでしたからね。正直、刹那さんに恥ずかしいと言う気持ちを抱いたのは確かですし、抱きついたときに“気持ち良いなあ”、ぐらいは思いましたけど。

でも最近はまだ慣れてきました」

「ふうん。

だったら、私に抱きついたら気持ち良い？」

「え？ それはまあ……………そうですね」

「ちゃんとハッキリ言いなさい」

「……………えと、明日菜さんに抱きついたら気持ち良いです。明日菜さんに抱きついたら柔らかくてあったかいです。良い匂いもします」

「そ、そう…？」

……………じゃあ、もっと強く抱きついてきてもいいわよ」

はあ……………。

本当に明日菜さんに何があったんでしょう？

とりあえず、言われた通りに強く抱きつきますか。  
……………そういえば、抱き枕には良くされていたけど、僕から明日菜さんには抱きついたことなかったなあ。

### 神楽坂明日菜

……………嘘ついでる様子はないわね。  
もしかして、元々は桜咲さんに対する“色欲”は1以上あったのに、慣れてきたせいで1まで下がっていたのかしら？  
それなら少し安心できるんだけど……………。

私に抱きついてきても顔を赤くしたりしないし、やっぱりアルちゃんと言うようにそういうことにまだ興味がないのかしら？

「……………エヴァさんの指輪ですか？」

確かにアレは僕が贈ったものですね。エヴァさんには別荘の件でお世話になってますし、春になったら花粉で悩まされるみたいですからね。

あの指輪で魔力を少しでも出せるようになれば、花粉症とかに悩まされなくても済むはずですよ」

「でも何でわざわざ指輪なのよ？」

魔法具って指輪しかないの？」

「いえ、腕輪型とかイヤリング型とかもありますよ。

でもそれらだと校則違反になるかもしれないし、そもそも選んだのはエヴァさんですよ」

「……………桜咲さんの言ったことは本当だったのね」

「？」

「何でもないわよ」

エヴァちゃんたら自分からリクエストしたもののなのに、あたかもネギが自分から選んでプレゼントしたような言い方しちゃって。

それに比べて私は毎日のように勉強見てもらってるし、こんな風に一緒に寝れるもんね。

「そういえばネギ。ドネットさんでどういう人なの？  
アルちゃんに聞いたらネギのお祖父さんの秘書みたいな人で、  
年上の綺麗なお姉さん”らしいけど？」

「ドネットさんですか？ そうですね、そんな感じの人です。  
ドネットさんは出張で麻帆良に何回か来たことがあって、僕が麻  
帆良に来ることになったときに麻帆良のことを聞かせてもらったり  
しました。」

明石教授の亡くなられた奥様とは友人だったらしく、裕奈さんが  
小さい頃に会ったこともあるらしいですね。裕奈さんが憶えている  
かどうかは知りませんが」

「え？ ゆーなのお母さんの友達？  
ドネットさんっていくつなの？」

「……………直接聞いたことはないから正確な年齢はわかりませんが、  
40前後だったと思います。」

僕の『マイティガード咸卦治癒』でアンチエイジングしたこともあって、20代  
前半と言っても信じれますけどね」

「40歳なのに“年上の綺麗なお姉さん”なの？」

「……………明日菜さんは僕に死ぬというのですか？  
よくしてもらっていて若く見える女性に向かって、“おばさん”  
なんて言えるわけじゃないですよ……………」

なーんだ、ただのお世辞なのね。よかったよかった。  
ネギってフェミニストだから、女性に悪い言葉は使わないからね  
え。

っていうか、『まいていがーど咸卦治癒』って本当に凄いのね。  
40歳の女性を20代前半に見せれるなんて……………。

それに気持ち良いし。  
いいなあ、これ。あつたかーい。

ギュウーっと、ネギを抱きしめれば抱きしめるほどネギの心地良  
さが伝わってくる。  
それにネギも私に抱きついてくるから、もっともっと心地良い。  
ネギが自分で抱きついてくるのって、これが初めてよねえ。

無意識に抱きついてくるときもあるけど、擦り寄ってくる感じで  
あまり強く抱きついてこないし……………。

皆も言っただけど、ネギの身体ってガツシリしてるわよねえ。

プニプニと柔らかくて頼りない感じじゃなくて、弾力があるけど固くなくて感触がシツカリとわかる身体。

しかも、肌も荒れてなくて触ると気持ち良いのよね。ツルツルの卵肌というわけじゃないんだけど、シツトリしてるというか。うらやましいなー。

特にこの脇腹辺りの感触が良いのよねえ。筋肉の弾力と肌のシツトリさとか一辺に味わえて。何気にお腹が割れているのもわかるし。いいないないなー。

……あつ、コラ。身体を擦らないの。

身体の方は筋肉質でガツシリしてるけど、顔はプニプニして柔らかいのよねえ。

頬ずりしたら気持ち良いし、シャンプーの良い匂いもする。

ああ、もう絶対に手放さない。ネギはずっと私の抱き枕にする。

……でも、明日は木乃香に貸さなきゃいけないのよね。

まあ、エヴァちゃんの別荘では木乃香に迷惑掛けちゃったし、しようがないか。むう。

だから、今日の内にネギの感触を精一杯感じておきましょう。  
あつたかいなー。良い匂いするなー。気持ち良いなー。  
ああ、もう大好き！

……いいもん。もうシヨタコンでいいもん。  
ああ、いんちよの気持ちが今ならわかるわ。  
私はあそこまで見境無しじゃなくて、ネギ一筋だけど。

ネギも私のこと好きって言うてくれたしね。  
まあ、“姉”とかそういう感じでしか見てくれないのかもしれないけど、一緒にいれるならそれでいいもん。

p r r r r r .....、 p r r r r r .....、 p r r r r r .....、  
p r r r r r .....。

なかなか繋がらんな。何をしているのだ、タカミチは。

.....お、繋がった。

「.....何だい、エヴァ。こんな朝っぱらから」

「朝っぱらって、もう10時だぞ。吸血鬼わたしより遅く起きてどうする。昨日のネギの説得がうまくいったかどうか学園長室までジジイに聞きに来たんだが、ジジイがいなくなってるな。どこにいるか知ってるか？」

「出張明けであんなことがあったんだ。寝坊ぐらい勘弁してくれ。ネギ君の説得なら成功したよ。学園長は途中で血を吐いてリタイヤしたけどね。」

学園長は今頃病院じゃないかな？」

.....カーペットの血を拭いた跡はそれのせいかな。  
ストレスで胃に穴でも開いたのか？」



「そうか、結局あの後ネギとは会わなかったからな。どうなったのか心配だったんだ。」

説得が成功したのなら何よりだ」

「……………そうかい。ネギ君はエヴァの家まで行くようなこと言っていたけど。途中でアスナ君たちに会ったのかな？」

何にせよ疲れてるんだ。今日ぐらいは休ませてくれ……………」

本当に死にそうな声しているな。説得に苦労したんだろう。

月曜の放課後から出張して、戻ってきた直後にアレだからな。無理もあるまい。」

「わかった。説得に成功したなら良いさ。」

ただ、もう一つ聞きたいことがあるんだが……………」

「手短かに頼むよ、……………ファ……………」

「電話の最中に欠伸をするな。」

……………聞きたいことは、学園長室に倒れ伏している魔法先生のことなんだが？」

ガンドルフィーニとか葛葉刀子とか……………あのとき揃っていた魔法先生が学園長室で倒れこんで寝ている。  
いったい何があった？

「魔法先生？

……………あー、いけない。忘れてた。

皆、説得の途中でバタバタと力尽きていったんだよ」

「忘れてた”、っってお前……………」

説得終わったら、途中で力尽きたコイツラを放って帰ったのか？」

「ゴメン、あのときはもう意識朦朧としていたから。

悪いけど、エヴァ。皆を起こしてやってくれ、頼むよ。それじゃ」

「お、おい！ ちょっと待「ブチッ！」て……………」

……………タカミチの奴、電話を切りおった。

あのタカミチがあんなに疲労するなんて、どれだけ説得が大変だったんだ？

それにしても今の頼み方はないだろう、マダオ風情が……………。

「如何しますか？ マスター？」

「……………茶々丸はお茶かコーヒーでも淹れて来い。  
私はその間にコイツラを起こしておく」

「わかりました」

さすがにこのまま放っておくのは目覚めが悪いしな。  
まったく、何で私がこんなことを……………。

ホラ、起きろ。ガンドルフィーニ。  
起きて他の起こすの手伝え。

「立った。娘が立った。

……………まだ1歳なのに、もう立ち上がれるなんて凄いなあ……………  
フフフフ……………」

………気色悪い。寝ながらニヤニヤと笑ってるぞ、コイツ。  
昔の夢でも見てるのか？

何か触るのは嫌だから、水でもぶっ掛けるか。

## 第二十七話 一段落（後書き）

……明日菜が壊れた？

（・3・）アルイー？ 何でこうなったんだろ？  
何か止まりませんでした。

まあ、いいや。

安西先生、イチヤイチャ甘い話を書きたいです。

アニメ版の化物語第12話“つばさキャット 其ノ貳”とか大好物です。

ヤツベエ。モノスゴク甘い話書キタイ。

洒落二成ラナイグラサノ話ヲ。

そしてタカミチがマダオ道爆走中。<sup>ロード</sup>

これにて一連の魔法バレについてのお話は終了です。

まだちょこつと期末テストとがありますけど、それが終わり次第に京都編に突入します。あと数話です。

それとエヴァとのデートは京都旅行後の予定です。

前回のネギに対しての好感度ランキングの“色欲”は、

“短パン、ランニングシャツ（裾捲くれてへソ見え状態）のネギと昼寝させたら、いったいどういう行動をとるか？”

というシミュレートしたところこうなりましたw

“色欲” 5点の人達：興味深々にネギが起きない程度に身体を触る

“色欲” 6点の人達：興味深々にネギが起きない程度に身体をまさぐる

“色欲” 7点の茶々丸：“ネギと触れ合いたい”、“ネギを感じたい”という気持ちが強い

“色欲” 8点のせつちゃん：鼻血でネギを赤く染める

“色欲” 9点のエヴァ：“エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル、呐喊します！！！”

こんな感じですよw

せつちゃんもムツツリスケベタイプだと思います。

明日菜は“色欲”よりも人肌恋しの気持ちの方が強いですから、まだ暴走はしませんね。

ちなみにネギが逆の立場だったとしたら、

「何やってんだか、この女子中学生は？」

と呆れる気持ちの方が強いですね。

## 第二十八話 立入禁止

近衛近右衛門

久しぶりにネギ君の顔を見る気がするの。

まあ、半月ぐらい入院していたから当たり前じゃが。

もうワシも年かのお……………。

「お久しぶりです、学園長。

お体の具合はよくなったのですか？ 何でしたら『マイティガード咸卦治療』で治療しますけど？」

「フオツフオツフオ、もう平気じゃよ。

先日はスマンかったの。みっともない姿を見せてしもつて」

「いえいえ、ご迷惑掛けたのは僕の方みたいですし、お気になされることはありません。

むしろ今までずっと勘違いしていた僕の方が謝らなければ……………」



「構わん構わん。」

10歳の君が思い違いしたとしても誰も責められんよ。今の時点で思い違いを正せたことを喜ぶべきじゃろ」

…………… 本当におお。

いやあ、あのときは本気で死ぬかと思ったぞい。目の前が真っ暗になって、気づいたら病院のベッドの上じゃったからな。

曾孫の顔を見るまでは死ねんというのに。

「エヴァさんが裏の世界についての常識を木乃香さん達に講義するのにも参加して、現実というものをようやく理解できたと思います。ファンタズマゴリア “幻想空間”での全力のエヴァさんと手合わせで、僕の強さというのも理解できましたし。」

…………… 僕って強かったんですね」

「ああ、ファンタズマゴリア “幻想空間”なら、今の封印されているエヴァでも全力を發揮できるからの。」

…………… そして現実を理解してくれて何よりじゃ。いや、ホント  
「ファンタズマゴリア」

……先日エヴァから愚痴られたアレか。モビルスーツ禁止での戦い。

まあ、愚痴3：惚気7といった感じじゃったがの。

接近戦に持ち込んだら神鳴流の技で互角以上に戦われるわ、  
中距離で落ち着いて戦おうとしたら『居合い拳』飛んでくるわ、  
遠距離で魔法合戦したら『千の雷』キラキブル・アストラペーを釣瓶打ちされるわ、  
障壁張っても『斬魔剣・式の太刀』で障壁無視されるわ、  
糸を使っても重力魔法で妨害されるわ、  
苦勞して良い一撃入れても『咸卦治癒』マイティガードで数秒で回復されるわ、

等々、踏んだり蹴ったりな目に遭ったというアレか。

結局、決着がつかずに引き分けに終わったというが、エヴァの話ではネギ君は全力を出していなかったらしいの。

無意識なのかエヴァの顔を狙わなかったらしいし、何よりもずっとカウンターを狙われている感じがして勝負に出られず、数十時間戦った拳句に最後にはエヴァの方から引き分けを提案したらしい。

豊富な魔力量と『咸卦治癒』マイティガードのおかげで、そのまま消耗戦を続けていたとしてもエヴァは負けるところだったらしいの。

やはりあの『咸卦治癒』マイティガードは反則じゃ。

というか、全体的に反則。  
何で映像見ただけで、『神鳴流』とか『居合い拳』とか『重力魔法』とか出来るんじゃない？  
真似  
婚殿の真似  
タカミチの真似  
アルの

というか“闇の福音”と互角以上に戦う？  
ダーク・エヴァンジェル  
何なの、この“一人紅き翼”？  
アラルブラ  
何なの、この10歳児？

まあ、初見だったからネギ君にいいようにやられてしもつたが、次の機会までにはエヴァも何かしらの対策をしておるじゃろうな。エヴァは負けず嫌いじゃし。

「綾瀬君達はどうかね？」

「今はまだまだ基礎の基礎ですよ。魔力を感じることから始めなきゃいけないですからね。  
来週に迫った期末テストの準備もありますし、初歩魔法をちゃんと使えるようになるのは春休みぐらい、という感じらしいです。」

古菲さんと長瀬さんの修行は進み方が早いです。  
長瀬さんは元から知っているみたいでしたし、古菲さんは無意識といえど以前から気を扱えてましたからね。少し教えたならドンドン上達していきました。瞬動も使えるようになりましたし。」

刹那さんも入れた3人でかかってこられたら、僕でもちよつとヒヤツとするときが何度かありますね」

「(え? あの3人がかりを“ヒヤツと”で終わらすの?)  
そうかそうか。

まあ、魔法の練習や修行に熱中するのは構わんが、学生の本分である勉強もちゃんとするように監督をお願いするぞい。

そうそう、婿殿と話したのが。春休みの京都旅行は歓迎してくれるそうじゃ。

費用はワシが出すから、ネギ君も木乃香達と一緒に京都を楽しんできなさい。

婿殿もネギ君と会えるのを楽しみにしておるよ」

「いいんですか? 考えてみたら僕は西洋魔術師だから、僕が一緒に行くとも木乃香さん達が危険なのでは?

“巨 VS 阪 の直接対決で 神が3連敗してるときに、人のユニフォーム着た人と一緒に道頓堀歩く”ぐらいに危険だと思うんですが?」

「……………ネギ君も随分と日本に馴染んできたの。

麻帆良来てから、まだ2ヶ月ぐらいしか経っておらんよね?」

イギリスって野球はメジャーじゃなかったと思うんじゃないが?

それにその比喩はいくら何でも違うん……………いや、そんな

に的外れじゃないかもしれん。

アレ？ むしろソッチの方が危険度は高いんじゃない？

というかネギ君大阪行ったことないよね？ 京都と大阪はかなり違うけど。

「まあ、大丈夫じゃろ。

今回はちゃんと理由があって行くのじゃし、西だって西洋魔術師全てを嫌っているわけじゃない。

アッチが気に食わないのは“関東が伝統を忘れて西洋魔術に染まった”ということが原因でもあって、そもそも最初から西洋魔術師である外国人までにはそんなに敵愾心は抱いておらんよ。

……まあ、“巨”が優勝して阪がびりつけつになったシーズンの、人の助っ人外国人選手に対する 神ファンぐらいの敵愾心”は抱いておるかもしれんがの”

「え？ それどう考えてもアウトでは？」

「大丈夫大丈夫。

確か西では今月から、イスタンプールの魔法協会から研修生を受け入れることになっておったからの。西洋魔術師と敵対する気があつたらそんなことはせんよ。

内心では気に食わんのもおるのじゃろうが、それでも実際に行動に移すようなのはおらんじゃろ”

「……………だったらいいのですが。  
木乃香さんが麻帆良にいることを良く思っていない人もいるらしいですし」

「まあのお、確かにそれは心配じゃが、今回の旅行の結果次第では木乃香が西に戻る可能性があるからの。

婿殿もワシと同意見なのじゃが、もうこうなったからには木乃香が魔法に携わりたいと言えば止める気はないし、それこそ西洋魔術ではなく日本の呪術を学びたいと言ったらそれでもよい。  
それだと必然的に西に戻ることになるからの。

まさか、木乃香が自発的に西に戻りそうな状況で、無理矢理にでも西に戻そうとする馬鹿はおらんで。

そんなことしたら木乃香の西に対する心象は最悪になるからの」

「そう言われればそうですね。

まさかそんなお馬鹿さんはいないですよー」

フオッフオッフオ、と笑うワシ。  
アッハツハ、と笑うネギ君。

……………大丈夫じゃよね？

いくら何でも、実家がそんなお馬鹿さんの巣窟になっているのは勘弁してほしいのじゃが。

「それと、何か近衛詠春さんに伝えることはありますか？

今回の旅行はあくまで、“魔法を知ってしまった麻帆良の生徒を関西呪術協会に案内する”という形になるので、公式に「生徒達のことをよろしく願います」「ぐらいのことは言っておいた方が良いでしょう？」

それでも他の内容は私信という形なら大丈夫ではないでしょうか？」

「そうじゃの。」

旅行の日までに手紙を用意しておくことにしよう」

フム、親書とかは無理じゃの。

今回は麻帆良のミスに西を巻き込んでしまう形になるし。

それでもこういう貸し借りを頻繁にしていけば、きっと東西の仲は進展していくじゃろ。

今度は向こうのミスをコチラが助ければよいのじゃからの。

今のような冷戦状態よりも、どんなことでも東西のやり取りがある状態の方がよからう。

「そうそう、それともう一つ。」

「実を言うと図書館島のことなんじゃが……………」

「図書館島、ですか？」

「ホラ、木乃香達は図書館探検部じゃる。」

「もし木乃香達に中学生が行くのが禁止されているような地下階層に行きたいと言われても、行かせないでほしいんじゃ」

「それはもちろんです。」

「魔法のことがばれてなくても、ルールを破ったりなんてさせませんよ」

「ウン、それならばよい。」

「それと図書館島の管理人がドラゴンを門番に飼っておるのじゃがな。」

「そのドラゴンと出会ったとしても、退治しないでほしいんじゃよ」

「……………ドラゴン、ですか？ 物騒な門番ですねえ。」

「もちろん正当防衛と緊急避難は除いてもいいですよ？ それならば承りますが……………」



「それはもちろんじゃよ。生徒があので下まで迷い込むなんてないと思うがの……………」。

ああ、許可証がないとネギ君も入れない場所におるから、ネギ君も駄目じゃぞ」

「はい、わかりました」

……………とりあえずは成功。

ネギ君の実力ならアツサリとアルのところまで行きそうじゃからな。

先に行つちや駄目なこと言つとかんと。

ネギ君は交わした約束はシツカリと守るから、一度約束したら安心じゃしの。

予め立入禁止のことを伝えておけばアルのところまで行つたりせんじゃろ。

……………約束を守るところは信頼できるんじゃが、それでも何かウツカリやらかしそうで怖いんじゃよなあ。

そういえば“アラルブラ紅き翼”では、母君のことはネギ君が一人前になるまでは言わない約束をしておるが、この子明らかにタカミチ君より強いよね？

この場合どうすんじゃろ？

「ああ、忘れてました。」

僕達が京都に行ってる間の相坂さんのことなんですが……………」

ム、確かに今のさよちゃんでは、遠出はまだ不安じゃの。

ネギ君達が京都に行っている間は、葛葉先生あたりにでも頼んで  
おこっか……………。

桜咲刹那

「おやすみー。せつちゃん、ネギ君」

「はい、おやすみなさい。  
木乃香さん、刹那さん」

「はい、おやすみなさいませ  
木乃香お嬢さま、ネギ先生」

「現在、私は木乃香お嬢さまたちの部屋にいる。  
そして、ネギ先生を挟んで川の字になって就寝。

最初の頃は木乃香お嬢さまを挟んで川の字になっていたが、それでは私が『咸卦治癒』マイティガードの恩恵に与れないのでネギ先生を真ん中に挟むようになった。

ベッドはあくまで1人用のシングルタイプだから、もうほとんど3人ともくっついている状態だ。  
むしろ朝起きたら、ネギ先生が私と木乃香お嬢さまに潰されていたことが何度か。

.....まあ、ネギ先生も木乃香お嬢さまの身体に潰されるのなら本望でしょう。

ネギ先生に変わった様子はない。

私に対して“色欲”が1点あったのは気になっていたけど、特に今まで変なことはない。

……………わ、私の“色欲” 8点は何かの間違いだ！  
確かにネギ先生の身体にドキッとしたことはあるけど……………。

「ギリギリギリギリ……………」

「アスナあー、齒軋りうるさいで。

ネギ君、結界で遮音してーな」

「……………わかりました」

「え！？ それだと木乃香がネギに何するかわから

ネギ先生の結界術は相変わらず見事だな。

結界が今張られたのだから、全然気づけない。

遮音結界という難易度がそれほど高くはない結界とはいえ、これ  
ほどとは……………。

というか、神楽坂さんはキャラ変わりすぎじゃないか？

「……………最近、明日菜さんが精神的に不安定みたいなんです  
が、木乃香さんは心当たりありますか？  
タカミチの一件からようやく立ち直ってきたと思っていたんです  
が……………」

「う、うーん。アスナはちょっといろいろあつてなあ。  
ネギ君には悪いけど、アスナのことは邪険にしないで受け入れて  
ほしいんやけど……………」

「それはもちろんです。でも、明日菜さんが心配で……………。  
明日菜さんは本当に大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫大丈夫。  
明日菜はネギ君のことは信頼しとるから、ネギ君が明日菜に  
応えてくれれば大丈夫なんや」

「そうですよ。神楽坂さんは今でも勉強を頑張っているじゃない  
ですか。  
きつと神楽坂さんなら立ち直れますよ」

「それならいいんですけど……」

魔法バレした後、よくこの部屋を訪れてネギ先生に勉強を教えてもらっているけど、一緒に教えてもらっている神楽坂さんの勉強の進み具合が凄い。

来週の期末テストではバカレンジャーの称号を返上しそうな勢いだ。

私も負けていられないな。何としてもバカレンジャーから脱退しなければ。

それに何だか最近勉強自体が楽しくなってきた。

以前、ネギ先生の言っていたことがよくわかった気がする。確かに難しい問題を解いたときに達成感を感じることが出来た。

このまま勉強を続けていれば高校は大丈夫だろうし、もしかしたら大学も木乃香お嬢さまと同じところに行けるかもしれない。

……でも、本当に今の幸せな生活を続けることが出来るのだろうか？

エヴァンジェリンさんの別荘で木乃香お嬢さまと話し合った夜、私が半妖であり、禁忌の忌み子であることは言えなかった。

木乃香お嬢さまから「全部話して」と言われたのに！

……………というか、ネギ先生のことや魔法のことを説明する  
ので精一杯で、私が半妖であること自体忘れてた。

魔法がバレたときはもう全てをお話し、木乃香お嬢さまの目の前  
から消える覚悟もしていたのだが、ネギ先生の“魔力云々”の話の  
衝撃が大きすぎて忘れてしまっていた。

なんかそれ以来、言い出すタイミングがなくてズルズルと言えな  
いでいる。

本当にどうしよう？

「ええなあ。こつやって皆でくつついて寝るんわ。

京都に帰ったときも、皆で一緒に寝よな」

「はい、木乃香お嬢さまがお望みでしたら」

「せつちゃん。またお嬢さまって言ってる」

「……………あ、申しわけありません」

……幸せすぎる。

こんな日が来るなんて思っていなかった。

長の木乃香お嬢さまを裏の世界に関わらせたくない気持ちは承知していたし、私も木乃香お嬢さまのような優しい人は危険なことには関わってほしくないと思う。

だけど、今のこの幸せは否定できない……。

……あぁ、こんな日が来るなんて。

木乃香お嬢さま、刹那はどうかなってしまいそうです。

「ネギ君はもちろん京都初めてやよね」

「はい。何でも死んだ父が京都に住んでいたことがあるらしいのですが、僕が生まれる前のことでしたからね。

刹那さんが修行したという、本場の神鳴流の道場も気になります

し」



……いくら何でも、看板持ってかれたりしないよな？  
私ではネギ先生に敵わないけど、道場の師範代級ならネギ先生にも勝てるよな？

「ふーん、そっかあ。」

……ネギ君が最近ずっと浮かない顔してるんは、ウチのことを狙ってる人がいるからなん？」

「……う。まあ、少し不安ですね」

「それは大丈夫なのではないですか？  
学園長からお話を伺いましたが、長との話し合い次第では木乃香お嬢さまが西に戻る可能性もあるので」

「ウチは麻帆良から離れたくないけどなあ。  
でも、一度まっさらな状態でお父様と話して、今後のことを決めようとは思ってるんよ」

「はい。それは確かにそうなのですが。  
しかしそれでは逆に、木乃香さんに西に戻ってきてほしくない人達が動く可能性があります。  
具体的に言えば、関西呪術協会の次代の長候補として修行を積んでる人達ですね」

…………… ああ、なるほど。

確かに次代の長候補として修行を積んでる人からすると、木乃香お嬢さまが戻ってくるというのは面白くない話になるな。

今まで散々厳しい修行をしてきたのに、ロクに修行もしていない木乃香お嬢さまが戻ってきただけで次代の長となられたりしたら、彼らにとっては面白くないだろう。

「もしかしたら、そういう人達から妨害を受ける可能性もありますね。むしろソツチの方が厄介ですよ。」

木乃香さんを次代の長にしたい人達は木乃香さんを誘拐とかしてそれを成功させる必要がありますが、木乃香さんを戻したくない人達は僕達を襲撃すればそれだけで成功ですからね」

「……………うー。」

それだったらウチは無理して西に戻らんでも……………」

「それでは木乃香さんを西に戻したい人たちが収まりません。」

何にせよ、準備だけはシツカリとしていった方が良さそうです。

期末テストが終わったら京都旅行についての話し合いをしましょう。僕も装備とか道具を整えておきます」

……………程々にしてくださいよ。

何かネギ先生だったら、洒落にならないものを用意してくる気が……。

しかし、ネギ先生の考えは的外れというわけではないだろう。

私や学園長も、木乃香お嬢さまを西に戻したい者のことは考えていても、西に戻したくない者のことは考えていなかった。

この幸せに浸っているだけでは駄目だ。

京都に赴く際は、ネギ先生のように常在戦場の心構えで行かなければ。

それとネギ先生が10歳ということとは、もう考えないことにしよう。

「何でこんな考え方するんだ、この10歳児は？」何て考えない。

うん、私の精神安定上その方が良いや。

## 第二十八話 立入禁止（後書き）

明日菜がまだ壊れてる。

（・3・）アルエー？

まあ、京都旅行編が終わる頃には落ち着きますので、もうしばらくお待ちください。

そしてもちろん、“そんなお馬鹿さん”はいます。4人ほど。

学園長の出番は本来ありませんでしたが、それだと京都旅行終了まで出番無しとなる事に気づきました。

へたしたら“学園長死亡済み！？”と皆様から思われそうでしたので、急遽出番と相成りました。

……………別にそれでも良かったかな？

## 第二十九話 惚れ薬

ネギ・スプリングフィールド

期末テストは無事2-Aがトップをとって無事終了。  
食券大量ゲットでウハウハです。

終了式の日にも、僕の奢りでパーティーと打ち上げでもしましよ  
うかね。

あ、その前にホワイトデーがあるな。それだったらホワイトデー  
にパーティーですかね。

それとバレンタインにはせっかく手作りの物を貰ったんだから、  
僕もジンジャークッキーでも作って皆さんに配るとしますか。

「ネギ先生、ちょっといいですか？」

「はい？ 何でしょうか、長谷川さん？」

？ どうしたんでしょう？

何だか妙に神妙そうな顔してますね？

「……………私も神楽坂達にやってる勉強会に参加させてほしいんですけど……………いいですか？」

「それは構いませんけど。」

……………もしかして後ろに隠れている龍宮さんも一緒にですか？」

「え？ 龍宮？」

「……………相変わらず鋭いね、ネギ先生は。」

私も同じ用件だったんだが、構わないだろうか？」

「げ……………いつの間に？ というか何故気づけるんですか？  
……………これだから非常識人間共は」

まあ、気配の察知には自信ありますからね。

しかし、何でまた長谷川さんと龍宮さんが？

あまり勉強に興味がないタイプの二人だったのに、何でこんなことを言い出すんですかね？

別に期末テストが悪かったわけではなかったのに……………。

「ご存知の通り、放課後の居残り以外にもエヴァさんの別荘でやるときもありますので、事情を知っている長谷川さん達でしたらソチラの参加も歓迎します。

年をとってもいいというならですけどね。

……………そんなに明日菜さん達に負けたのが悔しかったんですか？」  
バカレンジャー

特に明日菜さんは200前半の順位でしたね。バカレンジャーの平均は300後半でした。

佐々木さんは別荘での授業に参加していなかったのでもそこまで上がってはいませんが、それでも500前半に上がってましたしね。

エヴァさんも茶々丸さんも今回の期末テストは本気を出したのか、順位を大きく上げていました。

皆さん頑張っていましたからねえ。

「……………アイツラを馬鹿にするわけじゃないですし、アイツラが頑張っていたことも知ってはいたんですが……………」  
さすがに私も少し勉強頑張らなきゃって思いました……………」

「……………刹那のあの勝ち誇った顔が……………」  
あやうくあの広いデコにエアガンをブチ込むところだった……………」

オーケー、そういうことなら歓迎しましょう。  
これで正式に教師にもなれましたし、最近が良いことが続きます。  
バカレンジャーに負けた釘宮さんや柿崎さんなんかは絶望して  
ましたけどね。ハッハッハ。

あとは京都旅行の準備しないとなあ。  
フェイトはもういるだろうし、シツカリと準備しないといけません  
ね。

そうそう。そういえば“頭の良くなる魔法の本”の噂は流れませ  
んでした。



おかしいなー。なにかげんさくとはちがうことしちゃったかなー？  
がくえんちようのごーれむとかついすたーげーむたのしみだった  
のになー。

そしてエヴァさんと今後についての打ち合わせ、という各目で放  
課後ティータイム。

うん。コーヒーも好きだけど、紅茶の方がやっぱり好きです。

「宮崎さんと綾瀬さんの修行の調子はどうですか？」

「まあまあだな。やはり基礎から始めるので時間がかかる。  
熱意はあるが、それでもやはりな……………」

「それは仕方ありませんよ。焦らずにジックリと教えてあげてくだ  
さい。」

僕も手伝えることがあったら手伝いますので、遠慮なく言ってくださいね」

僕が教えることは何故か学園長には止められましたけどね。土下座までされて。

僕が見習い魔法使いだということが理由でしたが、宮崎さん達が僕の影響を受けないようにでしょう。

……やりすぎたかな？

「何かあったらそのときは頼む。

まあ、今は基礎の段階だからあまりないし、お前を参考に修行されても困るしな。

……いや、一つあったな。

綾瀬と宮崎だけでなく魔法バレした連中全員になんだが、少し魔法の怖さを教えてやろうと考えていてな」

「魔法の怖さ、ですか？

ああ、特に綾瀬さんなんかはファンタジーの魔法に憧れているみたたく、あまり魔法の怖さを理解できていないみたいですからね。確かにそういうのも必要かもしれません。

しかし、具体的にはどうするのですか？

魔法バレ全員ということは明日菜さんや木乃香さん達もなんでしょうが、まさか模擬戦というわけにもいかないでしょう」

「そんなことはわかってる。

私が考えているのは、アイツ等が14歳の年頃の少女だということだ。

現に神楽坂明日菜なんかは、錬金術や惚れ薬が実在するのかどうか聞いてきたしな」

「錬金術と惚れ薬ですか。

錬金術は一応出来ないことはないんですけどね。ただ、例えば1万円分の金を作るのに、費用が数百倍かかってしまうだけで。

惚れ薬は効果が高すぎるのは違法ですけど、確かに14歳の女の子は興味を持ちそうですね」

「だろう？

だから、先手を打って人の心を操るといっのはどれほど恐ろしいものかをわかってもらうことにする。

具体的には、惚れ薬を実際に飲ませてジジイに惚れさせる」

鬼ですか、あなたは？

「私は吸血鬼だ。」

安心しろ。実際に惚れさせるのは、幻術をかけてジジイの真似をさせた相坂さよだ。

いくら私でも、実際にジジイに惚れさせるほど酷くはないぞ」

「相坂さんですか。そういうことなら安心ですね。」

相坂さんも2-Aに馴染んできたみたいですし、いろんなことを始めてもいい頃ですね」

「人の心を操ることがどれだけ酷いことなのかを知れば、惚れ薬を作ってみようとは思わなくなるだろうからな。」

そこでネギに頼みたいのは惚れ薬の効果の確認だ。一応作ってみたのはいいが、何分初めて作ったからな。実際の効果はわからん。多分、大丈夫だと思うんだが……………」

つまり僕に惚れ薬を飲めと？

そこはかとなく不安になるのですが……………。まあ、エヴァさんのお手製なら大丈夫かな？

それに、今まで惚れ薬って飲んだことないんですよねえ。惚れ薬飲んだ自分がどうなるのか、ということには少し興味あります。

何か問題あったら『マイティガード咸卦治癒』で治療すればいいですね。

「そういうことなら構いませんよ。」

エヴァさんの腕を疑うわけではありませんが、安全を期するのに越したことはないですからね」

「そ、そうか!？」

…………… なら、これを飲んでもらおうか。

効果は約30分。惚れ薬を飲んだあとに初めて見た異性を好きになっってしまうタイプだ。

あ、だから当日は来ない方がいいぞ。アイツ等全員に惚れられたら大変だろうからな。

それに生徒に惚れ薬で惚れられるというのは嫌だろう?。」

「それは勘弁して欲しいですね。」

今ですと、僕が惚れてしまうのはエヴァさんしかいないですけど良いんですか?。」

「別に構わんよ。若さが暴走して襲われそうになったら反撃するかな。それに効果の程をこの目で見ないと落ち着かん。」

まあ、無理を言っているのはコチラなのだから、多少のことなら許すかな。

それと、お前はアイツ等と違って魔法抵抗力が高いんだからあまり我慢するなよ。効果が見れないとアイツ等に飲ませていいのかわからんからな」

「わかりました。それでは頂きます。

……………甘。かなり甘いですね、コレ？」

「子供に飲ませるものだからなあ」

カキ氷のシロップを薄めたような味です。  
うわ、口の中に残る。紅茶飲んで口直し。

……………駄目だ、舌に残った甘ったるさが全然取れません。

「……………で、どうなんだ？」

「もうちょっと待ってくださいよ。

こういう薬系は、体内に吸収されるまでどうしてもタイムラグが生じますからね」

フム、まだあまり実感はありませんねえ。

エヴァさん見てもドキドキしませんし。

いや、実を言つとやっぱリドキドキはするんですよね。前世の關係上。

正直な話、前世ではエヴァさんに惚れられてた駄目親父に嫉妬したこともあります。

もちろん前世のエヴァさんも好きでしたが、今僕の目の前にいるエヴァさんのことも好きです。

何だか獲物を狙う獣の目で見られること以外は関係は良好ですし、何よりエヴァさんは可愛らしい人ですからね。

以前、エヴァさんが体育の時間に足を捻つたらしいので、『<sup>マイテ</sup>咸卦<sup>イガード</sup>治療』で足をさすって治療しましたが、そのとき心臓ドキドキしましたもん。

気の応用で血流を操作して、すぐに落ち着きましたけどね。

気とかマジ便利です。

普段から心拍数とか血流とか交感神経とか諸々を一定に保っているおかげで、2・Aの突飛な行動にも冷静に対処することが出来ます。

さすがに限度はあって、動悸が少し落ち着かなくなったり、顔が赤くなったりするぐらいはありますけどね。

エヴァさんの綺麗なおみ足を前にしたときなんかも。

エヴァさんの足ってスベスベしてるんですね。  
余分な贅肉がなくてスラっとしていて、雪のように白い肌で、触るとヒンヤリと少し気持ち良い冷たさを感じられるような足でした……  
……って、何を考えているんだ、自分は？

……マズイ、惚れ薬が効いてる。  
エヴァさんを見るとドキドキする。

顔が赤い。僕自身でも顔が真っ赤になっているのがわかります。  
顔が熱い。まるで熱中症にかかっているみたいです。体が溶けてるみてー……ではないですけどね。

「ど、どうした、ネギ？ 顔が赤いぞ？  
そろそろ惚れ薬が効いてきたのか」

「……はい。効いています。エヴァさんを見るとドキドキします。  
僕は今、エヴァさんのことが好きになっています」

「そ、そうなのか？  
私は、惚れ薬を飲んだことないからわからないが……、ど、ど



ういう風に私のことが好きなんだ？

正直に答えるよ。……………「コ、コレはあくまで実験なんだからな」

「全部好きです。」

好きじゃないところはないです」

「……………え？……………あ、あう……………」

エヴァさんも混乱してるな。

安心してください。僕も内心では混乱中です。

「マズイ、本気でエヴァさんのことが好きだ。」

惚れ薬がこんなに凄いとは思わなかった。これは惚れ薬が違法になるわけだ。

落ち着け。落ち着くんだ私。

これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ。  
とりあえず、今のところ計画通りだ。

惚れ薬を飲ませて私のことを意識させる。

もちろん、これで既成事実を作ったりはしない。あくまでも私を意識させるだけだ。

アルちゃんが見せてくれた好感度ランキングから考えるに、ネギは色恋方面のことは興味が無いわけではなく、ただ単にまだ知らないか理解出来てないだけのようだ。

だったらまずはソチラ側のことを理解させなければなるまい。

飲ませた惚れ薬は効果が切れても、効いていた間のこととは覚えて  
いるタイプのものだから、ネギの記憶には私に惚れたということが  
残る。

どうせ直ぐに消えてしまうものだが、ネギが“恋愛”というものを  
理解できる切欠にはなるだろう。

それを突破口にして、今度からは薬無しで私に惚れさせなければ  
ならない。

「もう一度言います。

全部好きです。

好きじゃないところはないです。

……………エヴァさんに触れてもいいですか？」

「……………あ、あうううう……………」

だから落ち着け！ 落ち着くんだ私！！！！

これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ！！！！

これは予想外だった。

真っ直ぐに攻めてくるネギがこんなに厄介だったとは。

しかし、ここで許すわけにはいかない。

惚れ薬で既成事実を作ったなどと思われるのは、私としても納得  
がいかん！

「……………ふ、触れるだけなら……………」

って、そうじゃないだろ、私！？  
何を口走っているんだ！？

「……………それじゃ、失礼しますね」

「……………あ……………」

ネギの手が私の髪の毛を撫でる。  
優しく、壊れ物を扱うかのように。

「好きです。このサラサラと流れるような金髪も」

ネギの手が私の手を握り締める。  
相変わらずネギの手は温かい。厳しい修行をしているはずなのに、  
柔らかさを失わない掌。  
足をさすられたときも、温かく気持ち良かった。

「この白く細い、たやすく手折れそうな手足も」

ネギに抱きしめられる。

おんぶなんかで私から抱きつくことはあっても、ネギに抱きしめられるのは初めてだ。

ネギに抱きついてネギの温かさを感じるのとは、また違う気がする。

「強く抱きしめたら、壊れてしまいそうな身体も全部です」

やめろ、これ以上はやめてくれ。

戻れなくなる。このままでも良いかと思ってしまう。

これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ。こんなので愛されるのは嫌だ。人形みたいなネギは嫌だ。

私はあるのままの私を見てくれる人が欲しいんだ。

薬でおかしくなったネギでは嫌なんだよ……………。

「ネ、ネギ、これ以上は……………」

「大丈夫です。これ以上はしません。  
したいという気持ちはありますけど、十分抑えられます」

「そ、そうか……………」

「明日菜さん達に使う場合は、少し薄めるなどして効果を落とす  
ほうがいいかもしれませんね。」

魔法使いの僕でも結構我慢してますから、明日菜さん達には辛い  
かもしれません」

「……………そうだな、そうしようか」

「効果が切れるまで、あと20分以上ありますね。  
それまでずっと立ってるといっわけにもいきませんから、一度座  
りませんか？」

「う、うん……………」

よかった。

あのまま進んでいたら、キスぐらいは許しそうになるところだっ  
た。

さすがに初めてのキスが惚れ薬のせいなんてのは嫌すぎる。

「それじゃ、コツチに……………」

「……………」

そう言っつて、私が座らせられたのはネギの膝の上だった。  
ソファアの上にネギが座り。そして私が横座りでネギの膝の上に  
座る。

しかも、ネギが抱きしめてくる。

……………許すのはここまでだ。絶対にこれ以上は許さん……………と、  
思う。

「……………<sup>た</sup>つてはいないんだな」

「え？ 座ってますけど？」

「な、何でもない。忘れる」

「？……………まあ、いいですけど。」

もうちよっと強く抱きしめてもいいですか？」

「……………や、優しくなら」

やはりまだソツチ側は目覚めていないのか。

10歳だから仕方がないかもしれないが。

でも、もし既に目覚められていたら、私はどうすればよかったの  
だろう？

「……………あ……………」

ギユツ、と先程より強く抱きしめられる。

私がネギの膝の上に乗っているために、私の顔の近くにネギの頭  
が、ネギの顔が私の首の辺りに当たる。



「ネ、ネギ。一度腕を解いてくれ。」

「……………私もネギを抱きしめる……………から……………」

「ここまでしておいて言うのもなんですが、惚れ薬飲んではいいいいんですか？」

「べ、別にこのぐらいなら構わない。あくまでコレは実験なんだからな。」

「……………どうだ？ 何かおかしいところはないか？」

「エヴァさんを好きになったこと以外はありませぬね。お腹が痛くなるなんてこともないですし。」

「ああ、これが“惚れる”ということなんですね。惚れ薬が違法になる理由がわかります」

「そ、そうか……………」

「好きです、エヴァさん。愛しています、エヴァさん  
エヴァさんの事をもっと知りたいです。エヴァさんの事はみんな全部知っておきたいです。」

「もっと力強く、潰しちゃうくらい抱きしめたいです。出来るならキスもしたいです」

「キ、キスは許さんぞ!」

「わかってます。そんなことはしません。

エヴァさんをもつと感じたいですけど、それ以上にエヴァさんのことが愛おしいです。エヴァさんを傷付けたくないです。

エヴァさんには僕だけを見て欲しいし、僕だけのものになって欲しいですけど、それ以上に今の気高いエヴァさんのことが好きです。エヴァさんにならなくて欲しくないです。

ああ、いろんな感情がごちゃ混ぜになってます」

「わ、我侭なんだな……………」

「大浴場でも言ったじゃないですか。僕は独占欲が強いんですよ。

でも、エヴァさんを独り占めしたい気持ちも、今のエヴァさんから変わって欲しくない気持ちも全部本当です」

…………… 本当にちょっと効果が強すぎたかな？

本の通りに作ったし、わざと効果を強めたりは別にしていないんだが。

まあ、地下室にあった昔の本だったからなあ。

「エヴァさんが麻帆良の外に素っ裸で出るというのなら、やってみせます!」

「それはやめてくれ」

……うん。アイツラに飲ませるときは、半分ぐらいの薄さに調整してから飲ませよう。

当日はネギは来ないから、アイツ等の面倒を私一人で見なきゃならん。

説明も無しでさよに惚れさせようと思っていたが、ちゃんと説明してからにしよう。

そうじゃなきゃ後始末が大変そうだ。

「エヴァさんって、良い匂いしますね……」

く、首に鼻を擦り付けて匂いを嗅ぐな。

ちゃんと事前にシャワーを浴びたから大丈夫だけど。

……惚れ薬の効果が切れるまで、まだ時間はあるな。

惚れ薬は金輪際作らん。

本気で抜け出せなくなりそうだ。こんなことはこれっきりにしよう。

私が欲しいのは自らの意思で抱きしめてくれるネギなんだ。多分、今でも惚れ薬を使わなくても頼めば抱きしめてくれるんだろうがな。しかし、ネギに頼んで抱きしめてもらうなんて、まるで私の方がネギに惚れているみたいではないか？

……まあ、惚れ薬を使うのはこれっきりなんだから、今はこの時間を有効に使おう。少しでもネギを感じておきたい。

正面からネギを抱きしめるのは初めてだな。

ギユツ、と私からネギを抱きしめる。

ネギの温もりを感じる。『マイティガード 咸卦治癒』を使った状態でくつつくのと違う。ネギだけの温もりを感じることが出来る。

神楽坂明日菜や近衛木乃香は毎晩このようなことをしていると  
うのか？ オノレ。

ギユツ、とネギからも抱きしめられる。

トクトクトク、とネギの心臓の鼓動が伝わってくる。

トクトクトクトクトク、と私の心臓の鼓動がネギに伝わっている。

心臓の鼓動が心地良くて落ち着くけど、心臓の鼓動を意識しすぎて落ち着けない。

ネギの温もりが気持ち良くて眠たくなるけど、ネギの温もりを感じるせいで目が冴えて眠れない。

…… ナギとは助けてもらったときに手を握られたのと、最後に頭を撫でて貰っただけだったな。

こんなことは結局したことなかった。

失いたくない。今度はもう失いたくない。

もう一人になるのは嫌だ。この温もりと光は失いたくない。

一度知ってしまったら、これはもう手放せなくなる。

ナギの馬鹿者め。

「光に生きてみる」なんて言うっておき…… ああ、そういえばナギが最後に言っただのは「光に生きてみる。そしたらその時お前の呪いも解いてやる」だったか。

ネギという光を手に入れると同時に、ネギが私の呪いをもつすぐ解いてくれるとはな。

まったく、どういふ因果なんだか？

…… フン、ナギはこうなることなんか、予想してなんかいないか

つたろうがな。

ありがとう、ナギ。

インフェルナス・スコラスティクス

『登校地獄』を解かずに死んだと聞いたときは恨んだけど、最高の置き土産を残していつてくれて。

お前がしてくれなかったことは、お前の息子にしてもらうことにするよ。

その代わりネギは私が守ってやるし、ネギは私が最高の男に育てやるよ。

天国か地獄のドツチにいるが知らんが、安心して寝ているといいさ。

## 第二十九話 惚れ薬（後書き）

「（惚れ薬を飲ませるなんて）大人の………やることかあッ!？」

「大人だからやれるんだよッ!!!」

やっぱりネギはナギの生存をエヴァに言ってます。つていうか、もう既にナギが生存すること自体忘れてるかも？

ちなみに期末テストの成績はマナは400前半、ちうたんや釘みー達は400後半です。

そしてネギの“色欲”が低い、最大の要因が明らかとなりました。気の応用で心拍数とか血流とか交感神経とか諸々を一定に保っているため、“色欲”がわきません。

心拍数とか諸々を一定に保つキャラは結構いそうですけど、小さい頃からやっていたらこうなっちゃうのではないのでしょうか？

そして、本人は全然このことに気づいてません。普通に気の扱い方の訓練したら、副作用でこうなっただけです。たつみーですら完璧と言わしめた、気の制御技術が仇となりました。

気の扱い方のカンを取り戻せた7歳ぐらいの身体が標準となりますので、<sup>た</sup>たせようとしても無理です。

このことに気づかない限り、ネギは魔法使いをマジで卒業できません。

気による身体制御の他、20年にわたる子供生活、“紅き翼”<sup>アラルケラ</sup>の修行で恋愛する暇がなかったこと……などの様々な要因から、“色欲”がほぼなくなりました。

もう数年程このままの状態で過ごすとおそらく“植物のような心”を手に入れることとなるでしょう。

そうすれば、激しい“喜び”も、深い“絶望”もない、“平穏な生活”を送れます。

……………独りでしたらね。

将来的に苦勞することになりそうです。

バレンタインデーの出来事から約3週間。

ちなみに刹那への“色欲”はもう0点に戻ってます。

それと明日菜の質問はあくまで興味本位ですヨ。イヤ、ホントホント。

原作デモ聞イテマシタシネ。



第三十話 QB3分コントラクティンゲ

近衛近右衛門

………最近、木乃香達から冷たい目で見られるんじゃけど、  
ワシ何かしたっけ？

お見合いも今後はしたくないって言われたし………。

………やっぱり、魔法のことを黙っとったのが悪かったのかのお。  
特にアスナちゃんからは虫ケラを見るような目つきで見られるし、  
ワシ泣いちゃいそう………。

近衛木乃香

「さて、来週には終了式。そして春休みには待ちに待った京都旅行です。皆さん、準備は出来ましたか？

あ、そういえば一昨日のジンジャークッキーどうでした？ 味見もちゃんとしたから大丈夫だと思うのですが」

美味しかったで〜。

クッキーに生姜つてのもオツなもんやな。ココアとかバナラとか色んな種類あつて楽しめたし。

それにしても、31人分のクッキーを用意したのは大変と思ったけど、やっぱりエヴァちゃんの別荘って便利やなあ。

ネギ君からホワイトデー当日朝のエヴァちゃん別荘使用禁止言われたときは意味わからへんかったけど。

「それではその京都旅行について、二つほどお願いがあります。

別にこのお願いを聞いてくれなくても問題はないと思いますが、念のために安全のために危険を避けるために出来れば承知してほしいです。デメリットも心情上以外はありませんし。

危険というのは、以前説明した関西呪術協会と木乃香さんの関係

上の話ですので省きますね」

「……………何か皆を危険な目に遭わせてしまいそうなのは悪いなあ。  
ウチとしても、そんなこと起きてほしくないんやけど、コレば  
っかりは相手さん次第やからな。」

「まず一つは今から皆さんに渡す、このボールペンとシャープペンを  
肌身離さず持つていてほしいということですよ。」

ボールペンには科学的な発信機がついており、シャープペンには魔  
法的にマーキングしてまして、これを持ってさえいれば誘拐された  
ときでも居場所がわかります。」

あ、二つのお願いとは別に、携帯電話持つてる人達はそれぞれ電  
話番号とか交換しておいてくださいね」

「……………発信機なんてどこで手に入れたんですか、ネギ先生？」

「……………秋葉原って凄いですよね」

「（イギリスにいるときから持つてたはずでしょう、ネギ先生）」

……せつちゃんから聞いたけど、ネギ君はやっぱり用心深いんやなあ。

ウチを脅迫する目的で誰かを誘拐なんてされとうないから、ウチからは何も言えないんやけど……。

「監視されているみたいで嫌だ、って人は持たなくても結構ですが、念のために持っていてほしいです。迷子のときでも大丈夫ですしね。」

なお、京都は僕達が旅行に行く3月から観光客が増え始め、3、5月の間は一ヶ月につき400万人の観光客が訪れるそうです。

真面目な話、関西呪術協会の件がなくても持っていてほしいのですけど……。」

はええ、それは知らなかったなあ。400万人も来るんか。確かに観光には丁度いい季節やもんな。

そういえば旅行のときって、桜は咲いとるかなあ。

「それは凄いです。」

観光するのにも一苦労になりそうです」

「一日当たり10万人以上かあ。」

ゆえは神社仏閣に熱中して、周りのこと忘れないようにね」

「まあ、そういうことなら拒否する理由はないわね」

「迷子防止のためにGPS持っていると思えばいいか。」

「……………それはそれで逆に嫌だな」

「ネギ、私は携帯電話を持っていないんだが……………」

「え？……………えーっと、それじゃあこの携帯を使ってください。」

僕はプライベート用と仕事用の二つ持ってますので、一つお貸ししますよ。」

使い方はわかりますか、エヴァさん？」

「ム、馬鹿にする……………いや、わからん。」

だから後で教えてくれ」

「わかりました。」

これが終わった後にでも」

「グギギギギ……………」

「……………はっ!？」

ネ、ネギ先生せんせい！ 私と携帯電話の番号交換してください！」

アスナあー、そう睨むのはやめとき。

それにしてもエヴァちゃんは細かいところから攻めていくんやなあ。

ムウ、アスナやないけど、ウチもあんまりええ気分せんなあ……。

「……………皆さんに行き渡りましたね。これで一つのお願いは終了です。旅行のときに忘れないで持ってきてくださいね。」

そしてもう一つのお願いなんですけど、もう一度言いますが、これは断っていたいただいても全然構いませんのであしからず。

そのお願いとは、僕と“お試し契約”をして、一時的に“魔法使マジックの従者”というものになってほしいんです」

“魔法使マジックの従者”？

それってエヴァちゃんとアルちゃんから聞いたことあるなあ。  
確か、魔法使いの戦闘のパートナーのことやけど、現在では戦っ  
たりすることはないから恋人がなるのが一般的なんやってね。

“ミニストラ・マギ魔法使いの従者” になるためには『バクティオー仮契約』という儀式をする  
んやったつけ。

で、その儀式つちゅうのが、魔法陣上で魔法使いの人と……そ  
の、キスをするんやよねえ。

……。

……。

……って、えええええっ!?

「な、何言ってるのよ、ネギ!?  
そういうのはちゃんとお互いを知ってからじゃないと……。」

「でもネギがどうしても言うならしょうがないわねっ!……!」

「ちよ！？ 待てえっ！ そんなことは許さんぞ……！  
それだったら私がネギのパートナーになる……！」

「ネ、ネギ先生せんせいのパートナーに……。……。  
よ、喜んでパートナーになりましたっ……！！ …… 噛ん  
じやった」

うわあ。

アスナとエヴァちゃんとのどかが凄い剣幕や。

「え？ 皆さん“魔法使いの従者”ミニストラ・マギについては知ってるんですか？  
あゝ、だったら説明の仕方間違いましたねえ。ごめんなさい。

落ち着いてください。別に僕と『仮契約』バクティオーをして貰おうというわけではないですから。  
説明しますので落ち着いてください、というかギリギリと寄って来ないでください。いや、ホントにマジで………」

ん？ そんならどういふことなんかな？

ホラ、落ち着き、アスナ。



ウチもビックリしたけど、そこまで興奮することないやろ。

「えーっと、どこまで皆さんご存知かわかりませんので、最初から説明することにしますか。」

まず、“ミニストラ・マギ”とは日本語で“魔法使いの従者”という意味です。ちなみに“ミニストラ”は女性の場合の呼び方で、男性の場合は“ミニステル”となります。

元来、魔法使いは呪文詠唱中は全くの無防備でして、その間に攻撃されてしまうと魔法は完成出来ません。魔法詠唱中の魔法使いを守る従者が“魔法使いの従者”です。

今では戦うことはほとんど無いので、恋愛対象がそのパートナーという感じですけどね。

“魔法使いの従者”は魔法使いの魔力により身体能力を強化出来たり、に対して念話、召喚などをすることが出来ます。

それと魔法使いの能力によっては、各従者毎に潜在能力をさらに引き出すことができる固有のアーティファクトが発現出来る事もあります。

「ここまででは良いですか？」

「ここまでではだいたいエヴァちゃんとアルちゃんの説明通りやな。」

「仮契約を行うと、契約者が描かれた“バクティオー仮契約カード”が出現し、そのカードに従者の“称号”、“徳性”などが書かれています。えーっと、ちなみにこれが僕の“バクティオー仮契約カード”ですね」

ゴソゴソとネギ君がポケットから取り出したのは1枚のカード。白と赤の2色のカードで、中心にネギ君の姿が描かれとる。

ええなあ、これ。カッコエエわ。

『バクティオー仮契約』したらこのカードが手に入るんか。

なーんかこのカード欲しさで『バクティオー仮契約』しちゃいそうやわ。アッ  
ハッハ…………。

…………。

…………。

…………。何、やて？

「ネ、まずは裏に書かれている契約主の名前をを見てくださいっ！  
！！」……………わ、わかつたえ」

「……………ネ、ネギ先生せんせいには既にパートナーが……………？」

「そ、そんな。ネギったら、私という者がありながら……………。  
ギリギリギリギリ……………」

「だ、誰なんだ！？ ネギと仮契約してい……………って、おい、  
ネギ？」

何で契約主と従者の名前が両方とも“ネギ・スプリングフィール  
ド”なんだ？」

……………あ、ホンマや。

裏面に書かれてる名前と表面に書かれてる名前が一緒やん。

これが契約主と従者の名前のとこなんよね？  
あれ？ 何でその二つが一緒なん？

「というか本気で何なんだ、この仮契約カード!?  
契約主と従者が同一人物なんて聞いたことないぞっ!?!?」

「は？ エヴァンジェリン、ちょっと見せてくれ？」

「……………本当だ。」

ネギ先生、これはどうということだい？

私もこの業界に長くいて『バックタイオー仮契約』も過去にしたこともあるが、  
こんなこと出来るなんて聞いたことないぞ」

「裏技使いました」

「……………ハア?」

「裏技？」

魔法にもそういうのもあるんだな」

ほえ〜。

ゲームとかにもそういう裏技とか隠し技あるもんなあ。

でもエヴァちゃんが知らないってことは、よっぽど隠れてたやり  
方なんやろうな。

「……………まあ、裏技というか力技というか、技ですらないというか……………」  
「やった当時は大丈夫と思ったからやったんですけど、多分その内容をタカミチとかに話したら怒られると思います」

「またか？」

「また何かやったのか、ネギ？」

「聞かない方がいい、エヴァンジェリン。  
どうせまた微妙な気分になるぞ」

「……………ム。それはそうなんだが……………」

「こういっては何ですが、僕以外には出来ないと思いますね。  
もし出来るとしたら、エヴァさんぐらいですか。『マキア・エレベア闇の魔法』マキア・エレベア的  
に」

「何だそれは！？ 何で『マキア・エレベア闇の魔法』が『バクティオー仮契約』と関係が……………  
……………やっぱいいい。

「確かに微妙な気分になりそうだ。というか、もう既に微妙な気分だ」

「キーワードとしては“『マキア・エレベア闇の魔法』”、“ワザと肉体を魔族化して別人判定”、“霊体と変化した肉体間で無理矢「言うなっ！それ以上言うんじゃない！！」……………まあ、そんなわけです」

「……………何か今物騒な発言があつたような」

「やめろ、刹那。

これ以上掘り返すんじゃない。

忘れるんだ。

大事なのはネギ先生が『バクティオー仮契約』を自分と自分の間でしてることだけだ。

それ以外のことは考えるな」

「ちなみにこのカードを見るのは、アルちゃん以外では皆さんが初めてです」

……………え、ええんかな？

本当に突っ込まないで……………。

というか、アルちゃんが何かを思い出したのか、神さまにお祈りしながら部屋の隅でガタガタ震えて命乞いしとるんやけど？

「……………儀式を手伝ってくれたアルちゃんには、ちょっと刺激が強すぎたみたいでしたので……………」。

まあ、この『バクティオー仮契約』によって、僕もアーティファクトを持つことが出来ました。

『アテアット来れ』、『サブフライトシステム空飛ぶゲタ』、『おためしけいやく白紙仮契約カード』」

ポン！ と出てきたのは、仮契約カードと同じ大きさの真っ白な紙、それと人が数人乗れそうなくらい大きくて平べったいフヨフヨ浮いとる板。

何やのコレ？ UFO？

「サブフライトシステムコッチの“空飛ぶゲタ”は名前の通りというか見ての通りというか、簡単に言つと乗って空を飛べます。

簡易的な認識障害、微弱な魔法障壁も常時発動しています」

「……………これはモビルスーツと同じ飛び方なのかい？」

「そうですね。魔力をジェット噴射のように噴出しています。出力上げれば瞬動のように移動出来ますし、出力弱めれば柔らかい機動が

可能です。

モビルスーツのスラスタはこの“サブフライトシステム空飛ぶゲタ”を参考にしてますね」

「面白そうね」

「話が終わったら乗ってみますか？」

風を切って空を飛ぶのは気持ちいいですよ」

あ、ええなあ。

ウチも空飛んでみたいわ。

飛行機とかも乗ったことあらへんし、空飛ぶなんて初めてやわ。

「で、コッチが本命なのですが、僕のもう一つのアーティファクト、おためしけいやく“白紙仮契約カード”です。

見ての通り、契約主と従者の名前欄が空白である以外は、真っ白で何も書かれていない仮契約カードです。

“契約者と従者のどちらかに、ネギ・スプリングフィールドの名



前を入れること”、

“名前欄に、自分の血で、自分の名前を、自分で書くこと”で契約成立です。

なお、“契約者と従者を交換して、同じ人間で相互に主従となるのは不可能”、“契約者と従者を交換する場合は一度契約を破棄すること”、等の制約があります。

ただし、“この“白紙仮契約カード”と“本当の仮契約”を使用して相互に主従となるのは可能”で、しかも“何枚でも作成可能”という利点があります。

詳しい効果としましては、

“従者への魔力供給”、“従者の召喚”、“念話”、“防御力アップ”は使用可能。

“潜在能力の発現”、“アーティファクトの召喚”“衣装の登録”は使用不可能です。

アーティファクトの召喚こそ出来ませんが、それでも十分使える能力です」

「……………何ともまあ、変則的なアーティファクトだな。

つまりネギの狙いは“従者の召喚”“念話”機能か」

「確かにその二つがあったら、何か事態が起きても楽になるな」

「それもありますけど、一番の狙いは“防御力アップ”ですね。“従者への魔力供給”による身体強化も大きいですが。

本来の仮契約なら、アテアット『来れ』でアーティファクトを出すことまでしなければ“防御力アップ”は出来ないんですが、これならカードを手に持つだけでOKです。

僕の魔力容量なら長時間、ここにいる全員に魔力供給して身体強化しても支障はないですし。

まあ、実際にどれだけ魔力供給で身体能力が上がるのかを見てもらいましょうか。

行くよ、アルちゃん。

シム・イブセ・ハルス 『契約執行 60秒 ミニストラ・ネギイ ネギの従者 アルベール・カモミール』

あや？ アルちゃんもネギ君と“お試し契約”しとるんやな。

何かアルちゃんがうっすら光って見えとる。これが魔力なんやるか？

そんでネギ君は空手の試し割りで使われそうな木の板取り出して、アルちゃんの前に差し出した。

木の板を前にしたアルちゃんは後ろの2本足で立って、ボクシングのファイティングポーズをとった。

…………… やっぱ、カワエエなあ。

「ハアッ！！！！」

バキイツ！！！！

おお！ アルちゃんの掛け声と共に繰り出した拳が、木の板を真っ二つに割りよった。

アルちゃん凄いなあ。

これが魔力供給による身体強化なんか。

「と、このように非力なアルちゃんでも、こんな木の板を割るぐらいに身体能力を強化できます。防御力も車に撥ねられたとしても、悪くて骨折で済むようになるぐらいに上がりますね。

契約を破棄する際はカードを破くだけでいいですし、破棄しても再び契約することはもちろん可能です。

それと“空飛ぶゲタ”サブフライトシステムも“白紙仮契約カード”おためしけいやくで契約したら操縦可能になります」

便利そうやねえ。

でも、これがあったら確かに皆安全やなあ。

「……………危険はなさそうだし、いつでも辞めれるなら京都旅行の間

「だけなら問題ないかな。」

「血文字を書くつてのオカルトっぽくて嫌だけど、傷は先生が治してくれるんだろ？」

「それはもちろんです。」

「指先にちよつと切り傷つけるぐらいでいいですし、傷跡が残るよ  
うなことはないように念入りに治癒魔法をかけます。」

「安心してくださつて結構ですよ、長谷川さん」

「本当に“お試し”契約なんだなあ。」

「『本契約』の劣化版である『仮契約』とは、本当に違う意味での  
“お試し”だ」

「……………スマナイが、私は断らせてもらつよ、ネギ先生。」

「確かに私は護衛だが、例え“お試し”といえどネギ先生と契約す  
るのは依頼のうちには入つていない」

「わかりました。龍宮さんの実力ならお試し契約をしなくても問題  
ないでしょう。」

「あ、それと木乃香さんは立場上、僕の“魔法使いミニストラ・マギの従者”になる  
のは止めておいた方がいいと思います」

「え？　ウチだけネギ君と契約出来ひんの？」

「同感です、ネギ先生。」

木乃香お嬢さま、お嬢さまが東西どちらの道を歩まれるかわからない現時点で、“お試し”とはいえ西洋魔術師の従者になるのはマズイかと……………」

うう、確かにそうやけど……………」。

ウチだけ仲間ハズレみたいで嫌やなあ。

……………そっや！

逆に考えるんや。

ウチは立場的な問題で、ネギ君の“魔法使いミニストラ・マギの従者”になるのが駄目なんなら……………」

「ネギ君がウチの“魔法使いミニステル・マギの従者”になればいいんや！！！！……………っ！？ ウチがネギ君のご主人様っ！？」

「え？ ソッチですか、お嬢さま？」

「……………それなら問題ない……………んですかねえ？  
黙ってればいいのかな？」

「問題ありまくりだ、近衛木乃香」

「そうよ、そんなの駄目に決まってるじゃない、木乃香ったら」

「だ、駄目ですよ！ 木乃香さん！」

ええ、ええやん。

それやったらウチがネギ君呼べるからなあ。

それに皆だけネギ君と契約するのはズルイわあ。

### 第三十話 QB3分コントラクティング（後書き）

さて、次話から京都編に突入します。  
長かった……………。

今回もほとんど説明だった感じがします。

なお、フェイトは修学旅行の前の月に研修で来たらしいので、今回の旅行のときにはちゃんと京都にいます。

もちろん、『<sup>マキア・エレベア</sup>闇の魔法』を利用して自分と自分の間で『<sup>バクティオー</sup>仮契約』  
するのはオリジナルです。

それと茶々丸が『<sup>バクティオー</sup>仮契約』出来るのなら、アルちゃんも出来ますよね。アーティファクトは選ばれた者にしか与えられないらしいので、アーティファクトまでは無理でしょうが。

そして学園長は出番無かったほうが幸せだったかもしれませんね。  
まあ、これはネギの被害者というわけではないので……………。

#### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された+『<sup>バクティオー</sup>仮契約』儀式の手伝い”

new!

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」「という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋



第三十一話 京都編？ 新幹線

絡繰茶々丸

「おはようございます、エヴァさん、茶々丸さん。  
2人とも早いですね」

「おはよう、ネギ」

「おはようございます、ネギ先生」

はい。マスターのご意向で、新幹線発車2時間前には到着して  
ましたので。

駅を発着する新幹線を、ワクワクした顔で眺められるマスターは  
とても可愛らしいお姿でした。

ネギ先生のご尽力もあり、無事にマスターが麻帆良の外に出るこ  
とが出来て何よりです。

ただ、指輪による魔力封印が効いており、マスターは全力が出せ

ない状態です。もしも何かコトが起こった場合には、ネギ先生の魔力をお借りする予定になっています。

マスターの2倍以上の魔力を持たれるネギ先生なら平気でしょう。

「他の皆さんはまだ来ていないですよね」

「仕方ないだろ。」

事情を知らない他の奴らについて来られないように、時間差をつけてバラバラに来るのだからな」

「新幹線発車まで後一時間。」

皆さんの位置関係は発信機で把握しております。あと30分以内には皆さん到着されるでしょう」

「そうですね。」

それにしても、今日が晴れで何よりです。

天気予報見ましたけど、京都も今日は晴れみたいですよ。昨日は雨が降ったみたいですけど、雨雲はもう過ぎ去ったようですよし」

危険なことがある可能性もあり、他の2・Aの方々について来れるのは好ましくないなので、大宮駅に現地集合といたしました。

名目も、長瀬さんや古菲さんは泊りがけの修行、木乃香さんは里帰りでアスナさんと桜咲さんはその付き合い等々、他の方々に感づ

かれないようにバラバラです。

ネギ先生も学園長の依頼でお使いという名目を、2・Aの皆さんに予め説明しております。

……………目的地はデタラメなことを言っていました。

ある程度情報を開示しておき、自分達の意味でついて来られないようにしてもらおうのがネギ先生のやり方だそうです。

「コントロール出来ない平和よりも、

コントロール出来る騒乱の方が好みです」

とはネギ先生のお言葉。

この言葉を聞いた桜咲さんや龍宮さんは顔が引き攣っておられ、マスターは「もう何も言うまい」と黄昏ていました。

……………ちなみに私達は特に名目などは作っておりません。

元から他の方々とはそんなにお付き合いがありませんでしたので

……………。

超鈴音や葉加瀬の他は、超包子のシフトを変更するぐらいでしょうか。

猫さん達のことは八カセ達にお願いしておきましたので、きっと大丈夫でしょう。

「茶々丸さん、認識障害の方は問題ありませんか？」

「はい、問題ありません。」

一般人から奇異の視線で見られることもありませんし」

「スマンな、ネギ。」

茶々丸に認識障害の魔法具をくれて」

「問題ないなら何よりです。」

茶々丸さんには美味しい紅茶をいつも御馳走していただいていますので、そのお礼ですよ」

認識障害の魔法具である髪留め。

ガイノイドである私が目立たないようにするために、ネギ先生から頂きました。

麻帆良以外の場所では私のようなガイノイドは存在しておりませんので、京都に行ったら私は目立ってしまうでしょう。

そのためには認識障害が必要です。

アスナさんの反応からすると、ネギ先生からアクセサリーのよう  
なプレゼントを頂いたのは、マスターと私だけのようです。  
さよさんに贈られる予定の幻術がかかる魔法具は、春休みの終わ  
り頃に届くそうですし。

……………ネギ先生からの、プレゼント……………。

「……………あ。」

木乃香さん、アスナさん、桜咲さんが駅構内に入られました。  
尾行護衛をされている龍宮さんもその100m後方に、長瀬さん  
は違う入り口から3人より先回りして入り、前方の安全を確保する  
ようです」

「了解です。今のところは予定通りですね。」

このまま問題なく進めばいいのですが……………。

(やはり見られています。)

木乃香さんが西に戻るのに賛成な方が反対な方かまではわかりま  
せんが、少なくとも殺気は感じませんね」

「……………やはりネギは何か起こると考えているのか？」

正直、考えすぎだと思っただがな……………。  
（そうだな。）

……………近衛詠春からの派遣された護衛ということはないよな？」

「考えるだけならタダなのでいいんですよ。

対抗手段は最悪の2、3歩手前までしか用意してませんし。

（学園長からはそんな話は伺っていません）」

「……………ちなみにその“最悪”とは？

（どうする？ 始末するのか？）」

「東西全面抗争で「やっぱりもういい」……………そうですか？

ちなみに最悪の2、3歩手前は、木乃香さんを長にしたいくない人達による“木乃香さん暗殺計画”です。

西だつて組織的に最悪なことはしないでしょうけど、個人的にはどうかまではわかりませんからね。個人がどう考えるのかまでは、その個人を知らない限り予想が付きません。

（まだ放置しておきましょう。）

もし駅構内で仕掛けられても、エヴァさんの家に準備させてもらった転移陣へ瞬時に転移できます。新幹線での移動中ではさすがに無理ですが）」

「……………まあ、確かにそれはそうだな。

（仕掛けてくるなら観光が終わった後にして欲しいものだ。）

……………というか、始末する可能性は否定せんのか）」

人の心とは難しいです。

クラスメイトとして少しは知っていたアスナさんが、何故あのようにならなくなったかすら理由がわからない私なら尚更です。

ネギ先生はまるで私のことをニンゲンのように扱ってくださいますが、それでも私は魂を持っていないただの機械です。

……だから、私はネギ先生と“お試し契約”を結ぶことが出来なかったのでしょうかね。

天ヶ崎千草

あれが木乃香お嬢様、どすか。

確かに極東一と噂されるだけのことはありますなあ。  
こうやって見るだけでお嬢様の凄さがわかりますえ。

……お嬢様が西に戻ってきてくれさえすれば、東にいる裏切り者達にデカイ面させないですむというのに……。

そりゃあウチかて明治、大正、昭和という、激動の時代を甘く見るつもりはあらへん。

一歩間違えば日本の呪術どころか、日本という国そのものが亡くなっていたかもしれんということは重々承知しております。

それにこの国際化の時代、一般人が西洋の生活習慣に変わったように、ウチら日本の呪術集団もある程度は西洋との妥協をせなアカンのもわかつとります。

こないだ研修で来た新入りも西洋魔術師やしな。

しかしそれでも、伝統を忘れて西洋魔術に染まり、外国人を日本に呼び込み、我が物顔で関東で好き勝手するのは気に食わんなあ。

それにしても、まだ修行をしとらんというのに木乃香お嬢様のあの力。

今回の旅行は麻帆良で裏のことを知ってしまい、今後のことについて父親である長と話し合うために里帰りなさるということやけど、是非とも西で日本呪術を学んで頂きたいものどすえ。



それにしても話では、木乃香お嬢様と一緒に裏のことを知ってしまっただご学友も来はるといふことやっただけど……………。

アレで全部かいな？ 随分と外国人が多くありまへんか？

赤毛でスーツを着た大人びた坊やと西洋人形みたいな金髪のお嬢ちゃん。中華服来た子は…………… 中国人どすか？ それともファツシヨン？

そして背の高い褐色の肌の女。…………… 引率の麻帆良の魔法先生やるか？

魔法先生が1人来ることになつとるらしいし。

加えて気をつけておくのは木乃香お嬢さまの護衛の神鳴流剣士と、あの背の高い目の細い女やな。

アレも魔法先生かいな？

…………… アレ？ 魔法先生は1人のはず？  
どちらかがお嬢様のご学友？

…………… んなわけありまへんな。  
あの背といいスタイルといい、どう考えても大人の女や。

………というか、あのロボットみたいな女の子は何なんや？  
麻帆良では魔法と科学の融合ということをしているらしいから、  
それ関係かいな？

それにそもそもあの坊やは何なんやろ？

木乃香お嬢様は女子中に通っておられるから、男の同級生はいる  
はずがないし、何よりどう見たって小学生くらいやる。ウチの小太  
郎や新入りと同じくらいやし。

でもそんなこと言ったら、金髪のお嬢ちゃんもどう見たって小学  
生やなあ………。

………あ！もしかして赤毛の坊やと金髪のお嬢ちゃんは、引率  
の魔法先生が担当している魔法生徒かいな？

観光も兼ねてるという話やし、京都を観光するために連れて来た  
のかもしれないな。

今の時期の京都は観光の外国人で一杯やし、まだ小さい子供で学  
校は春休み。それなら連れて来てもおかしくないかも。

というか、金髪のお嬢ちゃんは新幹線をキラッキラした目で見て  
ったからなあ。

アレはどう見ても完璧に観光に来た外国人の子供やった。

やっぱり外国人の目から見ても、新幹線は凄いものに写るんやろ  
うなあ。

他の子達は木乃香お嬢様のご学友やろ。  
お嬢様と楽しそうにお喋りしとるし。

そろそろ発車時刻やな。

お嬢様達は乗車位置からして……………グリーン車か。

……………ウチは普通席なのに。

まあええ。さっさと乗りましょか。

さて、これからどないしようかなあ？

木乃香お嬢様を西に戻すためにいろいろ企んでいたけど、この旅行で自発的に戻ってこられるかもしれないというのなら、ウチがここでチョツカイかけるのは逆効果やしなあ……………。

とりあえず、式神を使って情報収集といきましょか。

魔法先生らしき人も2人いるみたいやし、新幹線の中での会話から、お嬢様が今後どのような道を選ばれるおつもりなのかわかるかもしれないへん。

魔法先生が良からぬことを企んでいるとすれば当初の予定通り、無理矢理にでも木乃香お嬢様は西に戻ってきてもらうことにしましょ。

『……………おおおおー！』

凄いで、ネギ！ 外の景色をしてみる！！！』

『はいはい、落ち着いてください、エヴァさん。

周りのお客様のご迷惑になりますから、少し静かに……………』

感度良好や。小ザル式神がうまく潜り込めたようやな。

西洋魔術師なんていうても大したことあらへん。

それにしても、子供は元気あつてうらやましいどすなあ。

『それにしても、京都に帰るんは久しぶりやなあ。

中学生になってからは帰っとらんかったし』

『木乃香と刹那さん以外は京都初めてなんじゃない？  
楽しみね〜』

『今日は真つ直ぐ木乃香さんの実家に向かう予定でしたね。  
アチラから話を伺うこともあって、観光に出られるのは最低でも  
明後日以降となりそうですね』

『何だと！？ せっかくの京都なのに、明後日まで観光はお預けだ  
というのか！？』

話を聞くのはお前達だけでいいだろう！？ 私は明日から神社仏  
閣巡りをするぞ！！！！』

『だからエヴァさん落ち着いて……………』

ああ、もう……………』

……………ザァッ！……………ザァッ！……………

結界を張られた！？

式神に気づかれたんか！？

……………んなわけあらへんな。

あのお嬢ちゃんがつるさかったから、周りの客に迷惑掛けないよ

うに結界張ったんやろ。

えーっと、もうちょい出力上げて…………。

『……………りましたから。』

皆さんには僕がついていますから、エヴァさんはどうぞ明日から  
観光してください』

『ム、ネギは来ないのか？』

だったら……………でも、せっかくの京都……………』

繋がった繋がった。

さて、せっかく結界を張って秘密の話を出来るようになったんや  
から、いろんな話をしてもらいたいどすなあ。

木乃香お嬢様が今後どうするのかとか。

あ、販売員のおねーさん。

お茶……………えーっと、そのペットボトルのやつおくれやす。

『それにしても関西呪術協会ですか。いったいどんなところなんですか、桜咲さん？』

『そうですね、？ 毘神社という古い神社が関西呪術協会の本拠地です。』

京都だから大きい神社は観光地にされてしまいそうですけど、さすがにそこは観光地にはなっていないですね』

『神社アルかあ。』

まさしく日本の呪術集団の本拠地、って感じるな』

『ところで本屋ちゃん達は結局魔法を習うみたいだけど、西洋魔法が東洋呪術にするか決めたの？』

『いえ、まだです。』

ネギ先生せんせいの言う通り、やはり関西呪術協会の方からもお話を伺ってからと思って……………』

『私ものどかと同じです。』

でも、東洋呪術を習うとすると、麻帆良から引つ越さなきゃいけないかもしれないのがネックなのです。

麻帆良から離れたくないというのが正直な気持ちですね』

あら、残念どすえ。  
若い子が入ってくるなら大歓迎やったのに……………。

ウチらは先祖代々続いての呪術集団な分、新規の若手がぜんぜん入って来まへんからなあ。

『それに私は使うとするなら攻撃魔法とかじゃなく、治癒魔法の方がいいですし……………』

『そうですね。』

一通りのことは勉強するつもりですが、今の時代では攻撃魔法を使う機会があるとは思えません。

日常生活でも使える治癒魔法の方が私達にあっていと思うので  
『す』

『そつやなあ。』

ウチも魔法を習うことにするんなら、危ないのよりはネギ君みたいな治癒魔法とかの方がええわ』

『僕の使うような治癒魔法とは違いますけど、ちゃんと東洋の呪術にも回復系の術がありますよ。』

まあ、僕が少し調べた感じでは、西洋の“外科”に対して、東洋



は“内科”という印象を受けました。えーっと、日本に漢方とかありますけど、それに近いニュアンスを感じましたね。身体の芯から治すような感じですよ。

僕の『マイティガード咸卦治癒』でも似たようなことは出来ますけど、東洋呪術の方が専門的だと思いますよ。

いつまでも健康に長生きしたいと思うなら、東洋呪術の方がいいかもしれませんね』

『ふーん、そういうのもあるんやなあ。

……でも、ゆえの言う通り、西を選ぶことになったら皆と離れ離れになってまうのが嫌やなあ。

せめて中学は麻帆良で卒業したいわあ』

へえ、あの坊やは治癒術師ですか。

なかなか勉強しとるみたいやし、坊やは木乃香お嬢様を西洋魔術に引ッ張り込もうとは思っておらんようやな。

素直そうな坊やみたいやし、幸せに育った甘ちゃんかな？

そして木乃香お嬢様は治癒術師志望ですか。

まあ、今まで裏のことを知らなかった女の子ならしゃーないな。

おっとりしてそうな御方やし。

『そついつのも含めて、今回の旅行でお父さんと話し合ってみればいいですよ。』

ぼくはちよっとトイレに行ってきます。ついでに新幹線の中を見回りにてきますね』

『うん、気をつけてね』

『迷子にならんようにな〜』

『アハハ、新幹線の中でどう迷子になれと?』

『いってらっしゃい、ネギ先生』  
せんせい

『お土産よろしくお願いアル』

『ああ、悪いけど、ネギ先生。』

帰りでいいから缶コーヒーお願いしていいかな、無糖の奴』

『わかりました。』

他に何か買ってくるようなものはありますか?』

……ないなら行ってきます。』

10〜20分で戻ってきますので』

.....。

.....。

.....あの坊やが“先生”？

え？ どういうことなんや？

どー見たって10歳くらいの子供やないかい！？

というか、あの背の高い女達はホンマに中学生なんか！？

『.....そういえばくーふえと楓って、ネギ君と修行してるんやよ  
ね。』

『どんな感じなん？』

『どんな感じといわれても.....自らの力不足を恥じるばかりで  
ないよ』

『……まだ一本も取れたことないアル。  
というか、ネギ坊主は酷いアルよ。』

「椅子に座ったままでも古菲さんに勝てますよ」

なんて言われて試合してみたら、ネギ坊主は椅子に座ったまま空に飛んで逃げたアル。

それからは手の届かない空から魔法で滅多打ちだたアルよ………』

『……嘘は別についてねーな』

……それはまた、けつたいな戦い方する坊ややなあ。

『だから前に言っただろう、古。  
ネギ先生に勝とうとするなら、空を飛ぶことが出来るか射程数k  
mの飛び道具がないと絶対勝てないとな。』

こんなジョークがある。

「イギリスでは“法で禁止されてなければやっててもよい”  
ドイツでは“法で許可されていないければやってはいけない”  
フランスでは“法で禁止されていてもやってよい”  
ソビエトでは“法で許可されていてもやってはいけない”」

……とな。

まあ、古のときは狙ってやったんだろうが、このジョークはイギリス人のネギ先生らしく感じないか？」

『……………わかる、龍宮。何かわかるぞ、それ。』

そうか。国民性の違いというものもあるのかなあ……………」

『……………話の流れ的に魔法無しと思っていたアルよ。』

まあ、そのあとに虚空瞬動とか実演して見せてもらったので、今はそれを練習中アル。

瞬動はなかなかうまくいくようになってきたけど、虚空瞬動の方はまだまだアルね』

『ネギ坊主は瞬動とか、そういう力の制御が凄くうまいでござるよ。ずっと1人で修行していたせいで、基礎訓練ばかりやっていたらしいでござるから。』

何でもない、普通のはずの動作がコチラに対して必殺の一撃になるでござるし』

『さすがは“スプリングフィールド”ということか。』

“蛙の子は蛙”とはよく言ったものだ』

『……………いや、ナギもあそこまで出鱈目じゃなかったと思うぞ……………』

……………』

！？ “スプリングフィールド”！？ “ナギ”！？  
大戦の英雄！？

あの坊やは“千の呪文の男”サウザンドマスターとやらの息子かいな！？

“先生”やってるのも、それと何か関係あるかもしれへんな。

『しかし、改めてアスナ殿や木乃香殿たちを見ると、やはりネギ坊主の本領は癒しだと思っでござる。』

最近ますます肌ツヤが良くなったでござるなあ』

『あ、やっぱりわかつちやうわよねえ。』

クラスでも他の皆に聞かれちやうしさ』

『アレやなあ。若さにかまけて、お肌のお手入れとかは特別な事とかはしておらへんかったからなあ。』

そりゃ洗顔とかはちゃんとしたけど、まさかネギ君のおかげでここまでお肌が綺麗になると思ったらんかったわあ』

『それについては同感だな。』

口止め料の代わりというわけじゃないが、私も何度かやってもらったけどさ。本当に肌の感じが違ってくるんだよ。

魔法とかには関わりたくないと思っっていたけど、アレをしてもら

うためなら関わってもいいような気になってきた。

（おかげで最近はおトシヨップ使わないで済むようになったしな）

』

……………何か、随分とつまやましい話をしとりますなあ。

あの坊やの治癒魔法はそんなに凄いなどすか？

それにしても治癒魔法が得意つてのは英雄らしくないなあ。

まあ、英雄の息子といつても親と子は別モンどすから、坊やが英雄らしくなくてもしやーないか。

『あれ？ でも楓達はネギにしてもらってないの？』

『普通の治癒魔法はしてもらったことはあるでござるが、マイテイガ咸卦治癒』での治癒はないでござるな。

ネギ坊主はそこら辺のところ、シツカリしてるでござるし』

『？ そこら辺って？』

『アスナ殿や木乃香殿は普段から世話になってるから、刹那は神鳴

流の手ほどき等、ネギ坊主はお礼として3人に『マイテイガード咸卦治癒』をしているでござる。

千雨殿は……おそらく関西呪術協会から話を聞くまで何も無しというのは不公平だからでござろう。

この旅行が終わってお願いを聞いてもらったら、多分もうしてくれないと思うでござるよ。

拙者達は既に、魔法を黙っている代わりに一緒に修行してもらおうというお願いを決めたでござる。要するに、もう貸し借りはない状態でござるよ。

まあ、頼めばしてくれると思うが、頼まなかったらしてくれないでござろう。

もちろん、『マイテイガード咸卦治癒』でしか治癒出来ない傷などは別でござるが………』

『く……、アレをしてもらえなくなるのは辛いな。

こっとなったらお願いを使ってもやってもらおうかな………』

『……で、では私達も駄目だということに………』

『うっ、でも元々ネギ先生せんせいと一緒に寝ることなんか出来そうにないから………』

『別にウチはネギ君と寝るぐらいは気にせんけどなあ。

湯たんぼ代わりに丁度ええし。なあ、せつちゃん？』



は？

あの坊やは木乃香お嬢様と一緒に寝てるんかい？

……まさか東の連中、坊やを餌に木乃香お嬢様を東に留めて置くつもりやないやろうな？

それに長と“千の呪文の男”サウザンドマスターは盟友だったはずや。

だったら坊やと木乃香お嬢様が許婚だとかの話があってもおかしくあらへん。

『え、ええ……、最初は意識してしまいましたけど、今はもう平気になりました。』

でも、たまにネギ先生が木乃香お嬢さまと私に潰されていることとかありますし、やはりあのベッドに3人はキツイのでは？』

『そつやなあ。』

でも新しいベッドを部屋に入れるわけにもいかんしなあ』

『……言っておくが、私はネギ先生と一緒に寝てないぞ。前のと  
きみたく、手でしてもらってるからな。』

というか、昨日もしてもらったんだけどネギ先生が愚痴ってたぞ。

「何かたまに明日菜さん達の目が怖いときがあるんですよ」

「……お前ら少しは自重しろよ」

「……別に変なことしてないわよ」

「目え逸らすな、神楽坂」

「え？ “達” ってことはウチも？」

「………きっと旅行の準備の買い物ときに、ネギ先生を着せ替え人形にして遊んだのがマズかったのでは？」

「な、何だそれは！？ ネギを着せ替え人形にだど！？  
何故私を呼ばなかった！？」

「………やっぱりスカートはマズかったんかなあ」

「ネギ先生せんせいにスカート！？」

「何ですか、ソレはっ！！？」

……あの坊やは坊やで大変みたいやなあ。

話みたいなの治療魔法が使えるなら、引っ張りだこになってもそりゃしゃーないわ。

しかも女子中の教師みたいやし、きつと学校でもオモチャにされとるんやろ。

……不憫な。

しかし、木乃香お嬢様はどうやら、西洋魔術の方に心が傾いておられるようやなあ。

正確には、魔術についてはこだわりは持っておられへんようやけど、ご友人達や今までの生活が気に入っておられるみたいや。

これだと自発的に西に戻ってもらうのは厳しいかもしれまへんなあ。  
あ。

やはり強硬手段に出るしかないですか。

元からそのつもりやったから、計画を変更しなくてもいいんやし。

……さっきまでの会話を聞いたつたら、お嬢様とご友人の仲を裂くのは悪い気がしますけど、生まれのせいだと思って諦めてもらうしかありまへんな。

……あ、販売員のおねーさん。  
駅弁一つおくれやす。

まあ、ええわ。どーせウチはもう止まれんのや。  
京都駅では人目があつて無理やし、本山に入られたら手が出せん。  
となると、本山に着く前に仕掛けるしかありまへんな。

腹ごしらえしたら、小太郎達に予定通りに決行することを連絡せ  
んとな。

……あ、しもた。お茶全部飲んでしもたんや。  
さっきの販売員のおねーさんに一緒に頼めばよかつたわ。  
このミルクティーじゃ駅弁とあわへんし、ウチはやっぱり緑茶の  
方が好………ミルクティー？

………ウチ、ミルクティーなんか買った覚えあらへんけど？  
？ ミルクティーの缶にメモ紙が貼り付けられとる？

「お勤めご苦労様です。」

ペットボトルは空ですので捨てておきますね。  
このミルクティーはプレゼントです。

ネギ・スプリングフィールド」

……。

……。

……いつの間にか？

第三十一話 京都編？ 新幹線（後書き）

原作でも茶々丸との「バクテイオー仮契約」は力技で無理矢理成功させていたので、力技が無理な「おためしけいやく白紙仮契約カード」による契約は不可能です。さすがにレンズ洗浄液で“お試し契約”を結ぶのは無理でした。

そしてネギはもちろんわざとです。ネギとしては

「コントロール出来ない平和よりも、  
コントロール出来る騒乱の方が好みです」

ので、京都で一連の事件は旅行中に全部終わらせます。放っておくと、麻帆良に来られるかもしれないかもしれませんからね。

ネギは夏休みの宿題はさっさと終わらせるタイプです。

第三十二話 京都編？ 賭け

犬上小太郎

「……………というわけで、当初の予定通りに仕掛けるで！」

「？ 何怒つとんのや、千草姉ちゃん？」

「何でもあらへんわ！！！」

おー、怖。

そんなにコケにされたのが気に食わんのか？

それに、知らないうちにミルクティーをプレゼントされて、お茶のペットボトルを捨ててもらってたっちゅーことは、おそらく千草姉ちゃんの顔は見られてるやろうからな。

それやったら今更引けんのやる。上からの命令無視して監視してたなんてこと知られたら、後でどんな罰食らうかわからへんしな。

ま、俺としては戦えりゃそれでいーんやけどな。  
でも話からすると、半分は素人で男は1人だけかいな。

しかもその男は俺と同じくらいの年らしいけど、治療術師らしいやん。

千草姉ちゃんを出し抜けるぐらいやし、瞬動とか使えるらしいからそれなりに出来るかもしれんけどなあ……………。

「……………で？」

「どこで仕掛けるんだい？」

「街中で仕掛けたら邪魔が入るかもしれへんし、本山の麓で仕掛けるわ。本山の侵入者防止の仕掛けを利用させてもらうで。」

本山の中には手出せんけど、外側の仕掛けならウチでもいじれるやさかい。

『無間方処の呪法』で閉じ込めて、そこで木乃香お嬢様を頂戴するんや」

「本山の間近で仕掛けて大丈夫なん？」

「危険なのはわかつとるけど、そこでしか勝負するところがあらへん。」



本山の術者相手でも、20〜30分ぐらいなら入れないようにしてみせるわ」

「千草さんの見立てで邪魔になりそうなのは、背の高い女性2人とウチと同じ神鳴流剣士がお1人。それと“大戦の英雄”の息子さんと魔法生徒のお嬢ちゃんがお1人。あとは中華服の拳法使いらしきお嬢さん、どすか〜。

「それで残りは皆素人さん。……………ロボットの女の子はどうなんやる？」

「……………まあ、ウチとしては是非とも神鳴流の剣士さんとやりあいいたいどすえ〜」

「あー、それだったら俺は英雄の息子つちゅーのをやるわ。

「女殴るは趣味やないからな」

「だったら、僕と千草さんで残りかい？」

「……………うーん、それはちとキツイかもしれまへんなあ。

「相手にするのは出来ても、木乃香お嬢様を攫うには人が足りません。かといって、式神に命令させて木乃香お嬢様を攫うのは危ないし……………」

「……………なら、最初に千草さん達3人に出て彼らの目を引き付けてもらって、隙を突いて僕がお姫様を攫おうか？」

千草さんの負担が大きけれど、式神を大量に使えば何とかなるだろっ?」

「……………それしかあらへんかなあ。」

小太郎は女殴れへんから、女の護衛のついとるお嬢様を攫わせるのは無理やろっし……………」

ほっといてくれんか。

嫌なモンは嫌やっちゅーねん。

「かといって、月詠はんにお嬢様を任せるのは危ないしなあ」

「えゝ、ウチは斬りたいどすえゝ」

「わかつとるわ。」

「しゃーない。それでいきましょか。」

……………新入り、わかつとると思うけど、木乃香お嬢様に怪我させたらあきまへんで」

「……………わかつてるよ」

……コイツもわからん奴やなあ。

何でもイスタンブールつちゅーところから研修に来た西洋魔術師らしいけど、何でこんなのに参加してんだか？

いつも無表情で人形みたいやし。

ま、ええ。

頭脳労働は千草姉ちゃんの仕事や。

何か妙な真似したらブン殴ればいいやろ。

さーて、英雄の息子つちゅーのに、少しは骨があればいいんやけどなあ。

「あ、小太郎。

あの坊やには、“空を飛ぶことが出来るか射程数  $k$   $m$  の飛び道具がないと勝てない”らしいで」

……。

.....。

.....何、やて？

「距離を置いての魔法戦が得意みたいやな。空飛びながら、魔法をバンバン撃ってくるらしいわ。

西洋魔術師の定石やな。

今回は『無間方処の呪法』で閉じ込めるし、木乃香お嬢様を置いて逃げたりはしなさそうな子やったから、そんなに気にしなくてもいいかもしれへんけどな。

いつも通りに距離を詰めて、魔法を詠唱する暇をあたえんようにな。

体術もそれなり.....というか、ウチに感づかれずに近寄れるぐらいのことは出来るみたいや。アンタは油断する癖あるから気いつけなアカンよ」

「お、おう！

任せてや！..！」

あ、あれ？

確か本山の仕掛けの『無間方処の呪法』って、半径500mぐらい範囲あらへんかったっけ？

あんまり空中戦はやったことないんやけど、大丈夫やるか？

古菲

……………これが京都アルかあ。

京都駅は麻帆良みたいに都会だたのに、電車とバスでちよつと移動しただけでこんな山になるとは……………。

私の故郷をどこか思い出すアルね。

あそこも古さだけだったら京都にも負けないアルし。

「ここが？ 毘神社ですか。」

伏見稻荷大社に似てるですね」

「千本鳥居だね」

「ここから境内まで少し歩きます。  
上り坂ですが一応舗装されていますし、途中で休憩所もあります  
ので大丈夫ですよ」

「……………そりゃありがたい。

今日は新幹線に電車にバスと、乗り物に乗りっぱなしで疲れてる  
からな」

「長谷川は運動不足アルね」

「お前らと一緒にすんな」

いや、確かに私達は鍛えてるし、本屋達も図書館探検部の活動で  
平気みただけど、長谷川の運動不足は致命的アルよ。  
というか運動不足よりも、座りっぱなしによる腰痛の方が辛そうア  
ルね？

「大丈夫ですか、長谷川さん？

何でしたらおんぶしましょうか？」

「……………いくら魔法使いといっても、さすがに10歳の子供におん

ぶしてもらつような真似は出来ません」

「ネ、ネギ！」

私は疲れてしまったぞ……！」

「ちょっと、エヴァちゃん抜け駆け！？  
ネギ！ 私も……！」

「え！？ えええっ！？」

ネギ先生、私も……その……」

「え？ ……この状況で僕にどうしろと？」

………ネギ坊主も大変アルねえ。

アスナとエヴァにゃんも変わったし、本屋も好感度ランキング見  
てから積極的になってきた気がするアルよ。

おそらくネギ坊主からは嫌われていないことがわかつたし、むしろ  
好かれている方だとわかつたから積極的になつたアルね。

「というか、エヴァさんは戦力の1人なんですから、僕がおんぶするのはちょっと……」

「……………そういえば、そんな話もあつたな」

「……………忘れてたんですか？」

エヴァンジェリンさんも一応、木乃香お嬢さまの護衛ということで学園長から旅費が出ていますので、仕事はしていただかないと困るんですが……………」

「でも、ここまで安全に来れたんやから、もう平気とちゃうのかな？」

「そうですね？ 僕的にここら辺が一番危険な場所だと思うんですけど？」

人目につかず、派手なことをしても関西呪術協会が揉み消してくれる。

確かに関西呪術協会本山の近くですから、何かあっても本山から5分もあれば駆けつけてくれるでしょうが、逆に言えば5分で終わらせれば問題ありません。

本来、誘拐などは時間をかけずにサツと終わらせるものです。それこそ車で擦れ違いざまに誘拐すれば一瞬で終わりますから」

「……………相変わらず子供らしくない考え方をするね、ネギ先



生は。

私達の横を通り過ぎる車を警戒していたのはそのためか」

「だから、何でネギ坊主はそんな考え方をするアルね？  
というか、何で誘拐の手口について知ってるネ？」

「ええ。しかも見た感じここからは脇道等は無い狭い一本道。これだと前後で挟まれたら逃げられません。  
僕だったらココで仕掛けますね。」

それと誘拐の手口については、ボディガード派遣会社の教育資料です」

「……………ふむ。確かにそう言われればそうでござるな。  
少しは用心した方がいいみたいでござる。せつかくここまで何も無しで来たんだから、最後まで気を抜かない方がいいでござるよ。」

そして古。もういろいろと諦めた方がいいでござるよ……………」

「フォーメーションを決めましょう。」

まず非戦闘員の明日菜さん、木乃香さん、宮崎さん、綾瀬さん、長谷川さんの5人を中心とします。

もちろん刹那さんは木乃香さんの護衛を最優先。古菲さん、茶々丸さんは非戦闘員の皆さんの守りを優先して離れないように。

そして僕が前衛、龍宮さんが中衛、エヴァさんは後衛で前を進みます。長瀬さんは最後尾について、後方を警戒してください。

もし敵らしき人が来たら、明日菜さん達を囲んで障壁を張りますので、明日菜さん達はその場から動かないようにお願いします。

それと神鳴流が敵にまわっている可能性があります。『斬魔剣・弑の太刀』使ってくる人の場合、龍宮さんは最優先でその人を妨害してください。その隙を突いて僕が速攻で潰します。

あ、それと明日菜さん達は『シム・イブセ・バルス契約執行』は相手が手を出してくるまでしないでくださいね。手は相手側から出させますので」

「……………そこまで警戒する必要ないんじゃないかな、と思うんだけどさ、ネギ？」

「念のためです」

やはりネギ坊主はどこかおかしいアルよ！？  
言てることは決して間違っていないはずのに、違和感しか感じないのはどういうことネ！？

「それに新幹線の中でも関西呪術協会らしき人がコチラの様子を伺っていたみたいですし……………」

……………新幹線でのアレか。

いきなりネギ坊主が中空に魔法で文字書いたから何かと思えば、  
どうやら監視がついているということだたネ。

そういうことなら用心するのはわかるケド、それなら何故その人  
にミルクティーをプレゼントしたアルか？

というより、その場で何とかした方が良かったのではないアルか？

……………ああ、どうせ正当防衛ということにしときたいアル  
ね。

「……………あ、アレが休憩所ですね。

いったんここで休憩しましょう。自動販売機とかお手洗いもある  
みたいですし。

休憩所周辺に結界張りますけど、目の届かないところには行かな  
いでくださいね。

龍宮さん、長瀬さん、2人でまずお手洗いの中を調べてください。  
他の皆さんは安全を確認したあとにお願いします」

「了解」

「承知したのでござる」

「……………ようやく休憩所か。助かった……………」

「……………木乃香が小さい頃、山奥で育つて刹那さん以外の友達がいなかったということがよくわかるわ」

「……………実を言うと、木乃香さんのお父さんが木乃香さんの面倒を学園長に丸投げしていたことをあまり良く思っていなかったのですが、これで納得出来たです。」

私が木乃香さんのお父さんの立場なら、次代の長云々という事情がなくても麻帆良に送るですよ」

30分ぐらい歩いたけど、休憩所があることからこれで半分ぐらいアルかね？ となると全部で5〜6kmぐらい？

確かにこんな山奥で子供独りは寂しいアルね。

自動車は狭い石畳の上に鳥居が邪魔するから通れないし、そもそも入り口の階段で駄目ネ。

自転車で坂道降りたら面白そうアルけど、登りが地獄ヨ。そもそも石畳のせいで上手く走れないだろうし、結局歩きしかないアル。

「到着予定時刻を遅めに関西呪術協会に伝えておいて正解でした。えーっと、それでは15分後に出発としましょうか。それでもさつきよりペースを少し落としても間に合いますから、ゆっくり休んでください。……あ、もしかして自動販売機の缶にも何か仕込んでたり……。飲む前にちよつと僕に貸してください。魔法で毒とか入っていないか調べます」

「……あの、ネギ先生。いくら何でも「刹那、もう気にするな」……そうだな。

「やっぱりいいです。それでネギ先生の気が済むのなら……」

「……自販機は120円か。」

「……ついでところなら、ぼったくり価格があると思ってたのに……」

「あ、富士山の自動販売機とか有名やね」

「あれは違うだろ。」

「山に登って自販機の中身補充するための人件費が高いから、ああ」

やって値段に反映にされるんだろ。

ぼったくる気持ちも少なからずあるんだろっけどさ」

「……………この自動販売機の中身の補充って、誰やってるんだろ？」

「業者の人……………はここまで来たりしませんよね。

……………もしかして関西呪術協会の人か？」

「……………イメージと大分かけ離れてるでござるなあ」

トイレも綺麗だし、人の手がちゃんと定期的に入ってるそうネ。

巫女さんが自動販売機の中身を補充する絵を想像したら変アルけど。

しかしこの調子だったら、どうやって食料とか必要なものを本山に運び入れているアルかね？

「……しかし、ここまで過剰に警戒しておいて、結局「何もありませんでした」となったら、とんだ骨折り損のくたびれ儲けだな。左右は竹林で見るところがないから別に構わんが……」

「警戒するのは悪いことじゃないと思いますけど」

「それはそうなんだがなあ。せつかくの京都旅行なのに……」

「明日から京都観光出来るんだからいいじゃないですか」

「だけど、明日はネギは木乃香達についてるんだろ？」

「……そうだ、ネギ。あとで血を吸わせてくれ。」

明日の観光中に襲われたら困るからな。一応このネギがくれた指輪で力は少し取り戻してるが、それでも万全ではないからな」

「……僕としては、少なくとも初日の今日だけは万全の状態でいたいんですけどね。夜襲でもされたりしたらコトですし。いくら『マイティガード咸卦治癒』で回復するといっても、一時的に弱体化するのは間違いないですから」

「うーん、ネギが言ってることはわかるんだが……っ！？  
……な、なら賭けをしないか？」

「？ 賭けですか？」

「そうだ。私は“これから本山に着くまでに敵が襲ってこない”方に賭ける。

つまり“これから本山に着くまでに敵が襲ってこなかったら”、血を吸わせろ。

明日はどうせ本山に詰めっぱなしなんだろ。それなら本山の連中がいることだし、多少ネギの力が弱まっても平気なはずだ。

それよりも私が観光に出たときに、魔力不足のせいで捕まって人質にでもされたら大変じゃないか？」

……………観光に出なきゃいいのでは？ と思うのは気のせいアルか？  
それに、“ファンタズマゴリア幻想空間”とやらでエヴァにゃんがネギ坊主と戦うのを観戦したガ、いくらそれより弱体化してるとはいえエヴァにゃんを人質にするのは無理だと思うアルよ。

というか、ネギ坊主はホントに何なのネ？

あの戦い見たら、私が1000人いても勝てないアルよ。

「ハア……………」。

それですと、“これから本山に着くまでに敵が襲ってきたとした



ら”どうするんですか？」「

「フム、何が欲しい？」

「いや、特にはないですけど」

「そうか。ならどーしよーかなー」。

……………うん、そうだ。

それなら“これからほんざんにつくまでにてきがおそってきたら”、きすしてやるづ。

……………正確には、“これから本山に着くまでに敵が襲ってきてそれを撃退したら”、キスしてやる」

ガタタツ！！！！

ヒッ！？ ビックリしたヨ！？

アスナとコノカと本屋が急に立ち上がったネ！？

「……………エヴァちゃん、ちょっとトイレまで来てくれない？」

だから、アスナのその無表情は怖いアルよ！！！！

「フン！ これは私とネギとの賭けだ。関係ない奴は黙ってる」

「……………そもそも僕とエヴァさんがその賭けをする意味がないんですけど？」

「いやいや、違うぞ。

“これから本山に着くまでに敵が襲ってこなかったら”、さっき言った通り私に危険がある。だが血を吸えば対抗策になる上に、私の食欲も満足出来る。

そして“これから本山に着くまでに敵が襲ってきてそれを撃退したら”、初めての実戦を潜り抜けたネギへの褒美だ。お前はまだ模擬戦以外したことないだろう？

お前の実力なら襲われてもやすやすと退けられるだろうが、褒美があった方が気合が出るだろう。

私が賭けに勝ったら私が嬉しい。ネギが賭けに勝ったらネギが嬉しい。

実に公平な賭けではないか。

……………それとも何か？

私からの褒美のキスは嬉しくないとも言つうのか？」

「いえ、それは嬉しいですけど……………」。

何か根本的に間違っていますか？」

「べつにまちがっていないぞ。

よし、これで賭けは成立だな！」

「……………そうなのかなあ？」

ソレってドツチに転んでも、結局はエヴァにやんの勝ちアルよ。

やはりネギ坊主はまだまだ子供アル。全然エヴァにやんの思惑に  
気づいてなさそうヨ。

……………しかし、エヴァにやんの印象がこの1カ月でとても変わった  
アル。

以前までは人間嫌いの気難しい女の子と思っていたが、今のエヴァ  
にゃんは同性の私から見ても、ただの可愛い恋する乙女アルよ。

「ちょ………ちょっと待ったあつ！！！」

「そ、そつですよ！」

ネギ先生は教師せんせいなんだから、生徒とキスなんて駄目ですよあつ！」

「ムウ、エヴァちゃんそれはずるっこやで。

………ネ、ネギ君でキスしたことあるん？」

「え？」

まあ、従姉に頬とか額にされたことならありますけど………」

「ネ、ネギはファーストキスはまだなのか………」。

いやあ、私も最初は頬とか額にしてやるうかと思っただが、そういうことなら口にしてやるうかなあ？」

………恋か。どういふものなのアルかね？

私はまだ経験してないからわからないアル。

結婚するなら私より強い男と決めていたから、考えてみればネギ坊主はその候補に相応しいアル。

ネギ坊主のように強い男は初めてだし、その強さも腕力などの身体能力ではなく、技術で裏打ちされた強さアル。

将来的に筋力で男には負けてしまつてであろう、女の私が目指すに相応しい強さネ。

精神的に年上のはずの私達より落ち着いているし、“心技体”のうち“心”と“技”の2つは、既に完成されていると言っても過言ではないアルよ。

それに“体”の方は10歳だから仕方ないアル。おそらくもう数年もすれば素晴らしい身体になるアルよ。

「だ、駄目っ！ だつたら私も賭ける！」

……… 本屋ちゃんは、教師と生徒だからしないのよね？」

「えええっ！？ そんなあ！？」

「負けちゃ駄目です、のどか！」

「あゝ、やったらウチも賭けに参加するわ」

「……………あの、僕の意見は？」

コノカまでも参加するアルか。

コノカはいつもはネギ坊主に普通に接してるけど、誰かが抜け駆けしようとするに参加するアルな。

前に言てた“誰かにとられちゃうのは嫌”という気持ちからアルかね？

……………最近では中武研なんかで組み手しても、組み手相手をネギ坊主と比較してしまうようになったし、正直ネギ坊主のことは嫌いじゃないアル。

でも、あの中に入るのは大変そうだし、そもそも古家の婿には来てくれなさそうネ。

それにアルちゃんの好感度ランキングじゃないけど、ネギ坊主への私の想いは“恋愛”という感じじゃないアルよ。

……………真名や楓達もそうだろうが、“諦め”とか“呆れ”とかの項目が好感度ランキングにあたら、多分8点以上はいくアルね。

恋とはどういうものなのアルかねえ……………？  
そして私はネギ坊主のことをどう思ってるネ？

「んじゃ、ウチが勝ったら“ネギ君に和食の作り方を教えてあげる”え。」

あくまで家事の手伝いをしてもらうためやからな。ウチにメリツトはちゃんとあるで」

「わ、私は“ネギ先生せんせいのオススメの恋愛小説のベスト10”を教えてください！」

「うーん、私はそうねえ……………こ、今度“2人っきりの付きっ切りで勉強教えて”！  
負けの場合は、全員エヴァちゃんと一緒の奴ね！！！」

「そっちなあ。  
ウチを襲ってきた人たちから守ってくれるんやから、お礼するんは当然やね」

「は、はい！  
ネギ先生せんせいが頼りです！」

「……………僕の、意見……………」

……………やはり、ネギ坊主は何だかんだ言っても子供アルね。

あんな風に皆にオモチャにされるネギ坊主も新鮮アル。いつもは手玉に取っている方だから、あんなネギ坊主は初めて見たヨ。

ネギ坊主も年相応に子供っぽいところもあるネ。

「……………しかし、ネギ坊主があんなにタジタジになるのは初めて見たでござるな」

「初めて私と一緒に寝たときはあれより混乱してたけどなあ」

「あー……………私の感じた印象だと、ネギ先生はちゃんと理性で計算して物事を進めるタイプだからな。あんな風にわけがわからないまま力押しされると弱いんじゃないか？

理解出来ることには滅法強いけど、理解出来ないことにはとことん弱いタイプだと思う」

「……………随分とネギ先生のことをわかってるですね、長谷川さん」



そう言われれば、確かにネギ坊主はそんな感じアルね。やはりネギ坊主も“心”の修行はまだまだアルか。

それといつも手合わせでは“技”で挑んどいたガ、今度は力押しも試してみるアルかね？

『咸卦法』とか使われたら駄目アルけど。

### 天ヶ崎千草

……………何とか間に合った。

本山の侵入者防止の仕掛けをいじって、展開しても本山に様子が伝わるのも遅くしたで。

小太郎や月詠はんはこういう作業に向いとらんから、ウチ独りでやらかなアカンかったわ。

「で、木乃香お嬢様達はどうか？」

「まだ休憩所で休憩中や。」

結界張られたから何喋ってるかまではわからなかったけど、今荷物まとめてるとこやから、もうすぐ出発するんじゃないかな」

「そか。『無間方処の呪法』は休憩所から300mほど進んだところの広場を中心に仕掛けたわ。」

「……………新入りは？」

「フェイトはんなら木乃香お嬢様達の後ろ側に移動しましたえ〜。計画通りに行動するらしいです〜」

「……………あ、動いたで」

「よし、ならウチらも行きますえ。『無間方処の呪法』を仕掛けた広場で勝負や。」

それと最初は攻撃したりしたらアカンよ。新入りが木乃香お嬢様を攫うチャンスを作るんどすえ」

小太郎がああ坊や、月詠はんが木乃香お嬢様の護衛の相手をする。つまりウチが残りや相手するんやけど、背の高い女2人と金髪のお嬢ちゃんやとロボットの女の子と中華服の女の子の5人も相手にせなアカン。

熊鬼と猿鬼を手強そうな背の高い女2人にあてて、残りを子ザル式神使つて数で攻めるしかあらへんな。

さすがにキツイと思っんで、新入りには早めに勝負してほしいわ。

木乃香お嬢様達がコッチに近づいてくる。

もうすぐや。もうすぐ東の裏切り者共に一泡吹かせてやれるで。

……先頭を歩いてる坊やと目あつとるの気のせいかな？  
もしかして気づかれとる？ 隠れてるのに？

……あ！ よ、よし、『無間方処の咒法』の範囲内には入ったわ。これでいつでも木乃香お嬢様達を閉じ込めれる。  
いくら気づかれないように術式をいじったとはいえ、展開した瞬間に本山の連中に気づかれる可能性はあるから、『無間方処の咒法』を展開するのは戦闘になる直前やな。

……それと、やっぱり坊やと目あつとるんやけど？

ええい！ 構わへん！！！！

今更こんなところで引けるかいな！！！！

「行くで」

「おつよー！！」

「了解ですえ〜」

隠れていた崖の上から3人で飛び降りる！

新入りに気づかれないよう、ウチらは派手にいかんとな！！！！

「おおーっと、ちょっと待」「」「キターーッ！！」「」「……  
……な！？何なんやっ！？」

「……皆さん、何で賭けに負けて喜ぶんですか？」

え！？何でこの子達、襲われて喜んどのの！？

### 第三十二話 京都編？ 賭け（後書き）

原作でもネギ達が30分ぐらい走ってから、ようやくちびせつな  
が罾にかかったことを確信してましたので、実際に入り口から境内  
までは結構距離があると思います。

関西呪術協会の本山というからには侵入者防止の仕掛けなどは当  
然あると思いますので、それを利用したことにします。

そして『無間方処の呪法』は、原作では出ることは無理でも入る  
ことは可能みたいですが、ココでは千草がいじったために入りの  
両方とも不可能という術式にしています。

ここら辺はオリジナル設定ですのであしからず。

さて、ついに千草達がネギあぐまと対峙します。

千草達の運命は如何に！？

そしてネギは前世も含めて20年間、ファーストキスはまだでし  
た。

第三十三話 京都編？ 直訴

龍宮ノ十

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」  
「お、おおーっと、ちょっと待っていただけませんか？  
木乃香お嬢様にお目通りお願いしたいと思ひまして……………」

「何者だ、貴様らっ!？」

「いや、もう無理だから」

「うぐっ!？」

冷静なツツコミだ、長谷川。そして恥ずかしがるな、刹那。  
まあ、相手の氣勢を削げたのは悪くないんだがな。

敵は3人。

変わった着物を着てる女が1人。中心に立っていることから彼女がリーダーだろう。

そしてネギ先生ぐらいの男の子と私達ぐらいの女の子が1人。女の子は刀を持っていることから神鳴流か？

数ではコチラが有利だが、コチラには守らなきゃいけないのがあるからな。

……………アレ？ いつの間に近衛達の周りに障壁が？



『コチラからは手を出さないでくださいね。戦闘になるにしてもアチラから出させます。それと真ん中の人は新幹線で僕達の様子を探っていた人です。』

敵対意思はありそうですが、殺気までは感じません。あくまで予想ですが、無理矢理にでも木乃香さんを西に連れ戻したい人でしよう。残りの2人は傭兵みたいな感じですね。

茶々丸さん、録画の方は大丈夫ですか？』

『問題ありません。』

ハイクオリティな映像をお約束します』

『数がコチラよりも少ないのに仕掛けてきたということは、腕に自信があるか彼女達は陽動の可能性があります。というか、僕達の後ろにもう1人隠れてますね。』

エヴァさんは障壁の周囲で警戒を、茶々丸さんは障壁内部で映像を撮りつつ木乃香さん達の護衛。無茶はしないでくださいね。この映像は重要な証拠になるのですから。』

他の人はまだ動かないでください』

ネギ先生か。……………障壁が張られたことに気づけなかった。

しかも魔力の系を使った有線念話？

相変わらずネギ先生は多芸だな。どうせ“便利そうだから”とい

うことで開発したんだろうが……。

それに私達の後ろにもう一人？ 私にも全然わからないんだが…

……？

そして、汚いなさすがネギ先生きたない。

映像という証拠をバツチリ残しておいて、関西呪術協会との交渉材料にするつもりか？

『ええ、その通りです。』

これで木乃香さんは東西どちらでも選べることになるでしょうね。

東を選びたいときは「こんな人達がいる西になんか行きたくあらへん！」って言えばいいですし、西を選びたいときは「直訴してもウチを西に戻したい人達の心意気に打たれたわ！」って言えばいいですから。

ドツチにしても関西呪術協会の弱みをゲットです』

………人の心を読まないでくれ。

そしてモノは言いようだな。

「……………」

「……………」

「……………つ、続けてええどすか？」

「……………どろどろどろどろ……………」

「コホンッ！」

では改めまして、関西呪術協会の天ヶ崎千草と申します。この度は木乃香お嬢様にお願いがありまして、お目通りを願ったのどすえ。危害を加えるつもりはありませんので、どうぞその障壁を解いていただけないどすか？」

「……………木乃香さん。残りの2人も名乗るようには言っていただけませんか。そうすれば障壁を解くと。」

解いたとしても、コンマ秒で再び張れますので安心してください」

『了解や』

ああ、着々と証拠が集まっていく……。  
どうしてこう腹黒いんだ、ネギ先生は？

「……………天ヶ崎千草さん、どすか。変わった着物やなあ……………」。

それで他の2人はドチラさん？ 名前も知らない人とは仲良くは出来ないえ」

「これは失礼しました。ホラ、2人も名乗りいな」

「……………犬上小太郎や」

「ウチは神鳴流の月詠います。よろしゅうに」

残り2人の名前もゲット。  
偽名の可能性もあるが、私達を侮っているようだし、おそらく本名なんだろうなあ。

『 REC 』

『 ……あの着物って、京都では普通なんですかね？

露出も多いし、何だか日本の女性のイメージが崩れていきます…

……』

『 ち、違いますよ、ネギ先生！

勘違いしちゃ駄目です！！！！』

『 そつやで、ネギ君！

天ヶ崎って人が変わった趣味を持つてるだけなんや！！！！』

『 ……もしかして、アレが関西呪術協会の正式な制服だったり？

『 えええっ！？ それやったらウチ絶対西に戻らんわ！！！！』

刹那と近衛も大変だな。

生まれ故郷が変な風に思われるのは嫌なんだろうが……。

それにネギ先生のせいで、近衛の中では関西呪術協会が変態集団になっていくぞ。

天ヶ崎千草

やばいわ。お嬢様達の反応に呆気にとられてしもうたわ。障壁も張られてしもうたし、これだとアッチのペースやんか。何とかして新入りが木乃香お嬢様を攫う隙を作らな……。

「（何か変な感じになってしもたな。………やっぱ千草姉ちゃんを着物って変だよな？）」

「（実を言うとウチもずっと変だと思ってましたわ。…………雇い主さんの趣味やから言わへんかったけど）」

………アンタラは黙ったとき。

特に月詠はん！ アンタのゴスロリだって変やる！？

「……………年の問題じゃないのかなあ？

それで木乃香さん、障壁どうします？」

「？ 年がどうしたん、ネギ君？

……………まあ、ちゃんと名乗ってくれたんだし、一度解いてええよ。

それで？ 天ヶ崎さんはウチに何の用？」

「お目通りを許していただきまして、おおきに。まずはお礼を言わせていただきます。

聞くところによると、木乃香お嬢様は関西呪術協会や関東魔法協会など裏のことを知ってしまい、この旅行で東西ドチラを選ぶかをお決めになるとか……………。

そこでウチは、是非とも関西呪術協会を選んでいただきたいと思つて参上したんどすえ」

「……………アンタと一緒にのトコは選びたくないわ」

えっ！？ 思いつきり木乃香お嬢様の目が冷たいんやけど！？

ウチ何かした!?

それにあの坊や。ウチの心読んだ!?  
っていうか、誰が年やつ!?

「な、何か失礼をしましたでしょうか？」

「いや、失礼も何も……………何なん？ 何なん、その着物？  
思いつきりネギ君に日本のこと勘違いされるやる。日本の伝統壊  
してるのアンタやる。」

それとも何？ 関西呪術協会の人皆、アンタと同じ格好してる  
ん？」

「やっぱりあの着物って何か違いますよねー？  
それと表情と目線を見てたら、考えてることはだいたい予想はつ  
きますよ」

「ネギ君は見たらアカン！  
勘違いしたらアカンで。普通の着物は前にウチが着てたような服  
で、あの変なお姉さんが着てるのは着物やないで!!!」

「そもそも木乃香お嬢様の前に出てくるのに、その露出は何なんだ、



貴様！？

肩や胸元をそんなに曝け出して恥ずかしくないのか！？

おい！ 犬上小太郎といったな！ スマンが学ランの上着を天ヶ崎千草に貸してやってくれ。

その女は木乃香お嬢様やネギ先生の目に毒だ！！！」

「うえっ！？ わ、わかったで。

……………ホレ、千草姉ちゃん」

「お、おおきに……………」

……………アカン。何か泣きそうになってきてしもた。小太郎達にもボロクソに言われるし、坊やには簡単に考えてること予想されるし……………。  
ウチのファッションセンスってそんなに変なんか？

完璧に木乃香お嬢様に嫌われてしもうたみたいやし、ホントどないしよ？

「……………まあ、落ち着いてください、木乃香さん。  
天ヶ崎さんがせっかく直訴に来たのだから、話ぐらいいは聞いてあげていいんじゃないですか？」

……………アレ？ でも竹の棒とか持ってらっしゃいませんね？」

ハ？ 竹の棒？

「？ 日本の直訴ってそうなんじゃないですか？」

「直訴でござる！ 直訴でござる！」

つて、竹の棒の先に直訴状を挟みこんでお殿様に差し出すのでは？  
いやあ、天ヶ崎さんは凄いですねえ。死を覚悟してまで直訴するなんて……………」

「はあっ！？ “死”！？」

千草姉ちゃん死ぬんか！？」

「え？ 違うんですか？ 直訴する人は死罪を覚悟して行なうようなことTVの時代劇でやってましたけど？」

だから天ヶ崎さんは、この直訴に勝っても負けても死ぬしかないんじゃない……………」

「そ、そういえばそんな話聞いた覚えあるわ。

……千草姉ちゃん、そこまで覚悟を決めてたんか」

「……………そうなんか。」

だったらウチも話ぐらいは聞いてあげなアカンな。

死を覚悟してまで直訴するなんて、生半可な覚悟やないわ」

何かどんどん大げさになっていったら？

いや、確かに長の娘を誘拐なんかしたら死罪になってもおかしくはあらへんけど、この子達が言うてるのは絶対どこか間違ってるわ  
！……！

っていつか、小太郎も信じてるんじゃないわ……！

「……………でもなあ、そもそもウチに関西呪術協会を選んでほしいと本当に思ってるかどうかわからんしなあ。

もしかしたら実は西に戻ってほしくない人で、ウチに危害を加える来たのかもしれないし」

「そ、そんなことあらしまへん！

ウチは木乃香お嬢様に、是非とも次代の長になってほしいと思っております！」

「……………修行も何もしてないウチが次代の長て……………」。

他の次代の長候補の人達って、修行も何もしていないウチよりも駄目なんか？」

「え！？……………駄目、というワケやありませんが、力不足は否めません。」

正直な話、最近の関西呪術協会は東に比べて落ち目です。関西呪術協会を立て直すためには、やはり木乃香お嬢様のお力が必要なんです」

「……………ウチのような素人が長になっただけで、関西呪術協会を立て直せるとは思えへん。」

それこそ長となるための修行を積んできた人達の方が立派に組織をまとめれるんじゃないの？

ウチは今まで普通の女子中学生やったから、帝王学なんか学んだことないで」

「いえいえ、細かいコトはウチら下々の者にお任せくださいませ。」

木乃香お嬢様は今も眠っているそのお力をウチらに貸していただければ、それだけで結構ですえ」

「……………黙って聞いていれば、天ヶ崎千草！」

どう考えても木乃香お嬢様を操り人形にする気ではないか!？」

ちっ！　うるさい小娘やな。

………まあ、ウチもどう考えても、今の理由は苦しかったからしやあないか。

しかし、木乃香お嬢様はおっとりしてそんな方と思ってたのに、実際に話してみると頭が回りますな。

残念や。自発的に西に戻ってきてくれたら、素晴らしい長になれたやろうに………。

「あの、天ヶ崎千草さん。

危害を加えるつもりは無いと言つのなら、僕達の後ろに隠れている人は誰ですか？

伏兵を置くんなんて、どう考えても危害を加えるつもり満々だと思つのですが？」

「な、何のことですか!？」

新入りのことがバレとる!？」

新入りが隠れていることを知っているウチでさえも、新入りがど

ここに隠れているかわからへんのに!?

「だから表情と目線でわかりますって……………」。

僕達の後ろを探るように見たことが何度かありましたし、そもそも今の焦り方は自白しているのと同じです。

というわけで、障壁を再び張らせていただきます。そんな人の前に木乃香さんを無防備で立たせて置くわけにはいきません。そして茶々丸さん、学園長を通じて関西呪術協会に連絡を」

「うぐっ!?!」

「へえ〜、お前、ネギって言ったな。やるやんか! 治療術師と聞いてたから期待してへんかったけど、結構楽しめそうじゃ!」

「千草はんは駄目どすなあ〜」

……………もう、ウチ泣いてもええよね?  
どうせウチなんか……………。

くそっ!

もうこうなったら力づくでいくしかあらへん。本山に連絡をされ  
たらマズイ。

……よし！

『無間方処の咒法』発動や。これでもう逃げられへんで、坊や達  
！！！！

「ええいっ！

こうなったら力づくで木乃香お嬢様を頂戴いたします！」

「大丈夫かい、千草さん？」

……僕にはファッションセンスというものはわからないから、  
何とも言えないけど……」

「気にせんといて……って、何でコッチに来るんや、新入り!？」

水たまりを媒体にした転移術で、コッチに新入りが来よつた!？  
『無間方処の咒法』で閉じ込めてるし、素人が5人もいるから後

るに逃げられる心配はあらへんけど、ここはどう考えても挟み撃ちにするとこるやる!？」

「……………無理だよ。」

彼は僕のこと気づいていたから不意打ちは無理だし、お姫様達を守っている障壁は後方がとても厚くなっている。前方部は薄いからワザとだろうね。

千草さんと話している間にも、彼らの影で千草さん達から死角になっっている障壁後方にトラップがどんどん仕掛けられていったし……………。

「あそこまでやられると面倒だ。それならコッチから攻めた方がいい」

「……………気づかれちゃったか。魔法の隠蔽には自信があっただけどなあ。」

……………? ……………ツ!？」

可愛い顔してホンマにけったいなことしまんなあ、あの坊や。

アレ? 新入りの顔みて驚いてるけど、何かあったんやるか?

もしかして知り合いか?



「……………ちょっと聞いていいかな？  
何で君がここにいる？」

「……………何で、とはどういうことだい、ネギ・スプリングフィール  
ド君？」

僕は今まで君と会った覚えはないけど」

「ああ、僕も君と会ったことはないね。

しかし、多分君は僕が知っている人……………イヤ、違うな。年齢が  
あわない。少なくとも子供ではなかったから、弟とか息子？

……………君は“アーウェルンクス”だろう？」

た、確かに新入りの名前は“フェイト・アーウェルンクス”のは  
ずや。

何でこの坊やが新入りの名字を知ってるんや？

「天ヶ崎さんの表情を見る限り、当たりのようだね。  
もう一度聞く。何で君がここにいる？」

「……………君が僕の何を知っているか知らないけど、まあ教え  
てあげよう。僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。」

ここにいる理由は研修だよ。イスタンブールの魔法協会から日本の関西呪術協会へ、日本の呪術を学びにね」

「……………戯言をよくも。」

……………天ヶ崎さん！ あなたは彼が何者か知っているんですか！？」

「な、何のことや！？」

「彼は……………アーウェルリンクスは、

“見た目5〜6歳の女の子”を“誘拐”して、  
その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、

“世界を滅ぼそう”とした、

“魔法世界全土に指名手配”されている

“秘密結社”の一員ですよ……！！

今度は木乃香さんを何かの儀式の生贄にする気かっ!?!?  
そんなことはさせない! 木乃香さんは僕が守るっ!?!?!」

.....。

.....。

.....な、

「.....何だゃってーっ!?!?」

「.....人聞きの悪い言い方をしないでくれないかい」

女の子を生贄に!?!? 新入りも否定せんし!?!?  
何で新入りがこんなことに参加したのか不思議やったけど、木乃

香お嬢様を生贄として狙っていたんか!?

第三十三話 京都編？ 直訴（後書き）

別ニ嘘ツイテナイデスヨ。

チャント本当ノコトダケ言ツテマスヨ。

部活巡りでのちうたんとおきを思い出していただければわかりますけど、ネギはなるべく嘘つかないようにしてますし、嘘をつくにしても必要なこと以外は嘘つかない、キルアみたいな嘘のつき方しますよ。

………<sup>ネギ</sup>僕は悪くない。

だって、<sup>ネギ</sup>僕は悪くないんだからっ！

木乃香の長い沈黙部分では、ネギからの念話を聞いています。これで行くると関西呪術協会にチクることを確保しました。

それと“直訴”についてですが、実際は“直訴したから死刑”、ということとは少なかったそうです。

ちゃんと正当な理由があったら、もしくはその直訴に勝訴したら無罪放免だったらしいですね。詳しくはWikiで。

……もちろんネギは知っててやってますがね。  
ネギ君絶好調。

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された + 『バクテイオ仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた + 担任クビ + マダオ就任

刹那：勉強地獄 + バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑      new!

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？      new!

“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”：“コスモ・エンテレケイアよう” “コスモ・エンテレケイアよ誘拐犯”      new!

第三十四話 京都編？ 正正堂堂！

近衛近右衛門

ついさつきネギ君達から連絡があった。  
茶々丸君経由であらかじめ決めておいた暗号が送られてきたのじや。

“ 敵襲アリ ”

“ 敵は4名 ”

“ 関西呪術協会に連絡求む ”

“ 場所は本山麓 ”

“ 待ち伏せされた ”

“ 結界で隔離される可能性アリ ”

“ 今のところ怪我人ナシ ”

“ 戦闘の可能性大 ”

“ 犯人はおそらく木乃香を無理矢理にでも西へ連れ戻したい一派 ”

“ 殺気までは感じず ”

暗号を解読するとこんなところじゃ。

解読といっても、数字とアルファベットの羅列を旅行前に渡された暗号表で照らし合わせるだけじゃったがの。

……………ネギ君から念話傍受などの可能性があるからと暗号表を渡されたときは大袈裟と思ったが、実際に必要になるとはの。ワシの見通しが甘かったということがある。まさかこんな馬鹿なことを仕出かす奴らが実際におるとは……………。

「ガンドルフィーニ君、君は用意しておいた長距離通信の魔法符でネギ君との連絡を試み続けてくれ。ただし、戦闘中の可能性があるるので邪魔にならないような出力で頼む。

ワシは関西呪術協会にこのことを伝える」

「ハッ！」

どうやらネギ君達は結界に閉じ込められたらしく、連絡がとれなくなってしまう。

やれやれ。ガンドルフィーニ君に無理言って学園長室に詰めてもらって助かったわい。ワシ一人じゃ手が足りんからの。





「……………フォ、フォッフオッフオ、安心せい。ネギ君ならきつとつまくやってくれる。」

あの子なら、むしろつまくやりすぎるこの方が心配じゃな。フオッフオッフ……………アレ？

これってマジでやばいんじゃないの!？」

「……………っ!？ ソッチの方が心配ですねっ!？」

マズイ！ ネギ君が何を仕出かすか全然わからんぞ!？」

“正当防衛”という名目が十分すぎるほどにある！

ネギ君なら木乃香達の安全を最優先として、尚且つ関西呪術協会に怒られないぐらいで事態を収めてくれるじゃろつが、ネギ君はその収め方の判断基準がギリギリすぎる！

きつとネギ君のことだから、関西呪術協会にとって“文句を言いたいけど、理由があるから文句は言えない”ギリギリレベルまでのことを仕出かすぞい!!!

婿殿！ 詠春！ 早く電話に出ておくれ!!!

本山が！ 京都がピンチなんじゃ!!!

お！？ 繋がった！？

「お待たせしました、お義父さん」

「おお、詠春か！？」

ソチラでは事情を把握しとるかの！？ 木乃香達が本山の麓付近で襲われているらしいのじゃ！」

「…………やはりそうでしたか。」

先ほど侵入者防止用の『無間方処の呪法』が勝手に発動したらしいです。おそらく邪魔が入らぬように犯人が利用したのでしょう」

「うむ！ 実は少し前にネギ君達から連絡があつての。

敵は4名。待ち伏せされていたらしく、連絡が来たときは怪我人はいないらしいが、今ではどうなのかわかん。おそらく『無間方処の呪法』のせいなのじゃろうが、ネギ君達と連絡がとれなくなっているのじゃ！」

そして犯人はおそらく木乃香を無理矢理にでも西へ連れ戻したい一派らしいが、殺気までは感じなかったらしいぞい！」

「詳細な情報をいただき、感謝します。

今部下がありつたけの結界破りの装備を用意しているところだす」

「悠長にしている時間はないぞい！

ネギ君が、ナギの息子が『無間方処の呪法』に閉じ込められておるのじゃ！……！」

「落ち着いてください、お義父さんっ！

確かにネギ君のことは心配ですが、話に聞いているネギ君なら私達が到着するまでは持ちこたえてくれるでしょう。

他に刹那君もいますし、お義父さんが依頼してくれた護衛がいるのでしょう？ 逸る気持ちはわかりますが、こんなときだからこそ落ち着いて行動しないと……！」

「これが落ち着いていられるか！

考えてもみい！ ナギが『無間方処の呪法』に閉じ込められたとしたらどうする！？」

「は？ ナギがですか？

……………そうですね。あの単純馬鹿のことですから、力づくで無理矢理破る……………お義父さん？」

そうじゃろつなあ。

ナギなら力づくで無理矢理破ろうとするじゃろつなあ……………。

そしてネギ君は、そのナギの……

「……………ネギ君はやっぱりナギの息子なんじゃよ」

「……………いやいや、仮にも関西呪術協会本山の侵入者防止用の『無間方処の呪法』ですよ？」

そんな簡単に、10歳の子供が力づくで破るなん「ドオー——  
ーンツ——!!」……………え？」

……………何、今の音？

電話の向こうから爆発音が聞こえたんじゃないけど？

「……………が、学園長、今ネギ先生と一瞬だけ連絡が取れました。

“ 全員無事、ただし犯人除く、まだ手が離せない、コチラから連

絡し直す”、……………だそうです「

……………間に、合わなかった？

え？ 犯人生きてるよね？ いくら何でも木乃香達の前では殺人は犯さないよね？

「……………詠春？」

「すみません。今すぐ私も現場に向かいます。

ネギ君達の無事を確認し次第、コチラからあらためてかけ直「ピーポー！ピーポー！ピーポー！」……………何で本山でパトカーのサイレン音が！？」

「……………明らかにネギ君じゃなあ」

「はあっ！？」

と、とりあえず現場に向かいます！ それでは失礼！！！！」

……………どーせ、アレじゃろ？

一般人に聞かれたとしても、問題ない警戒音だからじゃろ？

あんなもん本山の麓で鳴り響かせたら、本山から術者がすっ飛んでくるじゃろっからな。

……………う、また胃が痛くなってきた。胃薬を飲まんと。

「学園長、水を持ってきます。

……………それと私にも胃薬をください」

「……………すまんの。好きなだけ飲むとええ」

……………明日はガンドルフィーニ君を休ませんといかんな。代わりに他の先生を呼ばんと。

念のため、明日は2〜3人来てもらおうか。  
……………道連れは多い方がええしのお。フォッフォッフォ。

桜咲刹那

「生きている人、いますかー？」

「ピーポー！ピーポー！ピーポー！」

……………さ、参道が……………鳥居が……………。  
ネギ先生、いくら何でも今のはオーバーキルでしょう？



ネギ先生がとった行動はこうだ。

まず、アーウェルンクスという白髪の少年に敵味方全員の注目が集まった瞬間、ネギ先生を含めた私達全員を障壁で防御する。

そして次に鳥居もスツポリ覆うぐらいの回廊状の結界で、『無間方処の咒法』範囲内の参道を全て覆う。これは敵を逃がさないためだ。

ここで奴らもネギ先生のしていることに気づいた。

しかし、障壁があつた上、ネギ先生得意の高速詠唱による魔法の前に妨害が間に合うはずもなく、私達を防御している障壁の外、つまり奴らを閉じ込めている結界内でネギ先生の攻撃魔法が放たれた。

奴らに向かつて放たれた『雷の暴風』は『無間方処の咒法』のせいで、威力がなくなるまでに10周はループしてたぞ……………。

しかもネギ先生が張った障壁と『雷の暴風』はおそらく特殊な術式にしていたんだろうなあ。私達を守っていた障壁にぶつかって『雷の暴風』の威力が減衰するようなこともなかったし。

……………あ、向こうの空間に光の亀裂が見えてる。

『無間方処の咒法』の術の基点は、壊れた鳥居のどれかにあったのかな？

っ！？ じゃあ、威力がなくなって攻撃魔法が消滅したんじゃないか？ 『無間方処の咒法』の外に飛んでいったのか！？

…………… 八八八。長になんて言おう、この惨状。

っっていうか、何？ このパトカーのサイレン音？

「ふむ、さすがはアーウェルンクス。こんなんじゃ倒せないか。

犬上小太郎君も無事か。けど、これで残り2人だ」

「…………… やってくれたね、ネギ・スプリングフィールド君。  
有無を言わずに先制攻撃か。そんなところは君の父親に似てるね」

「ムッ、取り消してくれ。

僕はあるな出鱈目でバグキャラな父親と似てるわけないじゃない  
か」

「ないない。それはない。

っっていうか、ナギよりお前の方が酷いわっ！！！！」

生きてる！？ 良かった、無事だったんだな！

敵の心配をしなきゃならないのが意味不明だが、木乃香お嬢様の前で死人を出すわけにはいかないからな！！！！

しかし、アーウエルクスという少年は無傷か。障壁で防御したらしいが……何だ？ あの曼荼羅のような障壁は？ あれでネギ先生の攻撃を防いだのか？

犬上小太郎はとどころ焦げているが、そこまで大きなダメージはないようだ。でも、もう疲れ果ててへろへろになってる。気を使い果たしたようだ。……あ、ポロポロになった護符を捨ててる。

……天ヶ崎千草と月詠は……焦げてる。真っ黒に。

何か痙攣もしているぞ？ 大丈夫か、アレ！？

天ヶ崎千草は後衛の術者だし、月詠は速度重視の剣士で防御力が低そうだったからああなっただみいだな。

天ヶ崎千草は咄嗟に式神で防御したようだったが、3週目ぐらのループで式神が全部やられてた。

何と見えて切なかった。前にテレビで見た、雪崩に飲み込まれる瞬間の人を見てる気分だった……。

月詠はいくら速度重視でも、閉じ込められて逃げ場がどこにもない状態だったらどうしようもなかったみたいだ。

天ヶ崎千草の後ろに隠れたみたいだったが、天ヶ崎千草が倒れ

たあとは為す術もなく攻撃魔法に飲み込まれた。

「ガンドルフィーニ先生と連絡がとれたことから、『無間方処の呪法』もちゃんと破れた。これで本山からの応援も直ぐに到着する。鳥居も随分壊したけど………ま、しょうがなかったということだ。」

「明らかに駄目じゃねーかつ！？  
どーすんだよ、この惨状！？」

「お、落ち着いてください、長谷川さん！」

それは私が一番突っ込みたかったですから………。

「正当防衛、正当防衛。」

『無間方処の呪法』を破るにはこれが効果的だったんですよ。どうやら『無間方処の呪法』の術式の基点を鳥居に仕掛けていたみたいですから。

それにあのアーウェルンクスは危険です。最低でも全力のエヴァさんと同等クラスと思って相手してください。」

やめて！ そんな人達が本山の近くで戦わないで！！！！  
本山が消滅しちゃうでしょう！！！！

「……………まあ、犯人をちゃんと確保して、言い訳出来るようにしときましようか。」

「僕1人でいいです。皆さんは防衛に専念してく……………早いな、もう応援が来た」

「……………逃げるよ、小太郎君」

「ま、待てや！

「ここまでコケにされておいて、このまま帰れっちゅーのか!？」

「無理だよ。君も限界だし、このままだと本山の応援と挟み撃ちにされる。」

「僕が千草さんと月詠さんを「させないよ」……………転移魔法？」

「あ、天ヶ崎千草と月詠の下に魔法陣が現れたと思ったら、2人の姿が消えた。」

「ネギ先生の転移魔法か。」

それに本山の方向からこちらに向かってくる人影が見える。  
……さすがにあんなことしたら本山の術者も気づくか。

「ネ、ネギっ！？ 2人をどこやったんや！？」

「ランダム転送だから知らない。転移先とかの指定すると時間かかるからね。」

この場から半径5 km以内にはいるだろうから、運が良ければ逃げるときに会えるんじゃない？

彼女達は、君達が逃げたあとにゆっくりと回収させてもらっよ

「……………ということは、逃げてもいいということかな？」

「うん。いいよ」

「ちよっ！？ ネギ先生！？」

「言いたいことはわかってます、刹那さん。」

しかし、さつきも言った通りアーウエルンクスは危険です。これ以上、木乃香さん達非戦闘員がいる状況で戦うのは避けたいです。追撃は関西呪術協会の人達にお任せしましょう。

…………… “ よう ” よ誘拐犯 ” を野に放すのは心苦しいですが、こ  
こは安全策をとるべきです」

「…………… お言葉に甘えさせてもらうよ。行こう、小太郎君。  
それとその “ 幼女誘拐犯 ” というのはやめてくれないかい」

「チイツ！ ……………… ネギっ！ ……！  
この借りは絶対返すからなっ！ ……！」

…………… とりあえず、危険は去った、のか？

あの2人（しかも1人は “ 幼女誘拐犯 ” らしい）を逃がすのは不安だが、確かにこれ以上木乃香お嬢様を危険な目に晒すのは避けたい。

しかもネギ先生が言った通り、あのアーウエルンクスとやらがエヴァンジェリンさんと同等クラスの力を持っていたとしたら、これ以上ここで戦うのはマズイ。

いくらネギ先生でも木乃香お嬢様達を守りつつ戦うというのは難

しいだろうし、引いてもらえるのなら引いてもらった方が良かっただろう。

でもこの惨状、本当に長に何て言おうか……。

……まあ、過ぎ去ったことは仕方がない。

とにかく今は木乃香お嬢様達を安全な本山にお連れするのを優先しよう。そのためにはまずこちらに向かってきてる本山からの応援と合流して……。

「……まあ、追撃ついきは関西呪術協会にお任せしますが、追おい撃ちぐらいはしておきますか。

ラス・テル・マ・スキル・マジステル……」



っ!?! やめてえーっ! 本当にもうやめてください!?!  
これ以上、本山を滅茶苦茶にしないでえーっ!?!!

「……走れよ 稲あつ!?! ……チツ!  
水たまりから転移された。昨日降った雨が仇となつたか」

……よかつた。  
あやうく『千の雷』が本山間近で放たれるところだつた。さすがにあんな魔法撃たれたら、隠蔽工作が更に大変になつたらうし……。

ああ、もう! 少しは自重してください、ネギ先生!?!

フェイト・アーウェルンクス

いや、困ったね。

まさかこんなことになるとは……………。

僕が関西呪術協会に潜り込んだ目的は2つ。

“麻帆良に封じられているであろう、彼の詳細な情報の入手”

“東西の対立激化による、麻帆良のダメージ”

…………… だっただけで、まさか“サウザンドマスター千の呪文の男”の息子が邪魔するとは。

千草さんからネギ君の名前を聞いたときはそれほど重要視していなかったけど、こうなったからにはネギ君に対する認識を改める必要があるみたいだ。

彼が麻帆良に封印されていることは確実。

それでも詳細な情報が手に入れられるなら手に入れたいから、近衛詠春あたりから情報を手に入れたかったのに……………。

近衛詠春が彼のことを知らないということはないだろう。

近衛詠春は“千の呪文サウザンドマスターの男”の盟友で、麻帆良のトップである近衛近右衛門の娘婿であり、関西呪術協会の長。

何かあったときのために、少なからず事情は聞いているはずだ。

それと麻帆良に封印されている彼を復活させるとき、麻帆良の力が強いとイレギュラーが発生するかもしれない。そのためにも出来る限り、麻帆良の力は今のうちに削いでおきたかった。

だから日本の東西の組織を争わせてみようかと思つて、千草さんに協力をしたんだけど……。

……いや、困つたね。

まさかネギ君が“完全なる世界ほくたち”のことを知っていたなんて……。

さて、これからどうしようか？

このまま尻尾を巻いて逃げる、というわけにもいかないね。

これで“完全なる世界ほくたち”がこの件に関わっていたことが知られたから、東西の対立激化は無理だ。もしかしたら逆に東西が融和して、麻帆良の力が増すかもしれない。

そうならわざわざ僕が来た意味がなくなる。

ここは一つ、もう少しばかり引っ掻き回すべきだね。

最低でも西にダメージを与えて、麻帆良に味方出来る余裕をなくすぐらいは必要だ。

となると、やはり千草さん達を助け、内紛扱いで西にダメージを与えた方がいいか。

それとネギ・スプリングフィールド君についても、少し調べる必要があるそうだ。

少し対峙したぐらいだけど、もしかしたら彼はイレギュラーになるかもしれない。

せめてネギ君の実力がどのようなものかぐらいは調べよう。

……………それにしても、

“見た目5〜6歳の女の子”を“誘拐”して、

その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、

“世界を滅ぼそう”とした、

“魔法世界全土に指名手配”されている

“秘密結社”の一員、か。

.....別に鹽は言わねえなこけぢやね。

第三十四話 京都編？ 正正堂堂！（後書き）

フン！ くだらんなあ〜。一対一の決闘なんてなあ〜。つ。  
このネギの目的はあくまでも“平穩”！ あくまでも“平穩”に  
生きること……！！

小太郎君のような戦士になるつもりもなければ、ロマンストで  
もない……。

どんな手をつかおうが……最終的に……、

勝てばよかるうなのだアアアツ！！！！

よう、よ誘拐についての反論？ させるわけないじゃないです  
か。

こつこつのはレットルを貼ったモン勝ちなんですよ。

前哨戦はネギの勝ち。

もちろんまだまだ終わりじゃないです。

もう一波乱か二波乱はあります。

というか、戦闘にすらなっていないですね。

そしてフェイトが関西呪術協会に潜り込んだ理由はこのように致しました。

他に理由が思いつきません……………。

それと今回のことでの被害者リスト入りはありません。

一応は戦闘という状況でしたので、被害者加害者の関係ではないからです。……………ないですよ？

それと次の木曜更新は仕事が忙しいため無理そうです。

もちろん木曜日に更新出来たら更新しますが、おそらく次の更新は日曜日になりそうです。ご了承ください。

……………多分、日曜日なら大丈夫？ のハズです。

第三十五話 京都編？ はじめてのチュウ

ネギ・スプリングフィールド

「アーウェルンクスじゃと!？」

「はい、ネギ君からいただいた映像を確認したところと、私達が20年前に戦った本人ではないようですが……確かに似ています。本人も否定していませんでしたし、おそらく間違いないかと……」

現在、詠春さんと一緒に学園長に報告中です。  
何とか一段落つきました。

無事に本山に到着出来ましたし、天ヶ崎千草と月詠もちゃんと回収出来ました。まだ座敷牢で寝てますけどね。

え？ 2人はランダム転送だから場所わからないはずなんじゃ？



別に嘘ついてませんよ。

転移させる前に、彼女達の衣服に発信機を先に転移させておいたんです。そうすれば茶々丸さんが居場所を特定出来ますからね。

まあ、衣服も大部分焼け焦げて、ちよつとあられもない姿になってましたけど。

「……………ムウ、しかし何故に奴が関西呪術協会に……………」

「そこまではまだ……………」。

主犯である天ヶ崎千草の目が覚めたら事情を聞くつもりなのですが……………」

「えーっと、僕の見立てでは明日までは起きれないでしょうねえ。

怪我は治しておきましたけど……………」

「ごめんなさい、ちよつとやりすぎました。

『無間方処の呪法』で『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風』があそこまでループしたのは予想外でした。

小太郎君たちのことを考えて威力を弱めにしたのが逆に仇となったようです。

それにフェイトも悪いんですよ。  
フェイトの曼荼羅障壁で『ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス雷の暴風』が減衰してましたし、もし  
かしたらそのフェイトの後ろに『無間方処の呪法』の基点があった  
のかもしれないのです。

だいたい、あの『無間方処の呪法』を準備したのアッチですから  
ね。

僕はただ『ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス雷の暴風』を放っただけです。ループについては僕の  
責任じゃありません。

だから、僕は悪くない。

「だ、大丈夫なのかね？」

スマンの、ネギ君が迷惑掛けたんじゃない………？」

「ハハハ、確かに物損被害はかなりありましたし、ネギ君から先制  
攻撃を仕掛けたみたいですが、アーウエルクス相手では仕方がな  
いでしょう。」

しかも『無間方処の呪法』で閉じ込められ、戦闘が避けられない  
状況でしたから尚更です。

何より木乃香を守るための行動でしたしね。犯人が力づくで木乃  
香を攫おうとしていたのも確認出来てますし」

「そ、それなら良いのじゃが……」。  
本当に何か問題はないのかね？」

「……まあ、あると言えばあるのですが……」

「な、何がじゃ!？」

「いえ、映像で天ヶ崎千草が、

“次代の長候補は修行も何もしていない木乃香よりも駄目”とか

“次代の長候補は力不足”とか

“最近の関西呪術協会は落ち目”とか、

散々言いたいこと言ってまして。しかも“木乃香を次代の長にする目的”で行動していたことまでシツカリ言っていました。

おかげで一緒に映像を見てた次代の長候補の身内達が激怒しちゃって、彼女が起きたら大変だなあ……、と」

「ああ、確かにビキビキと青筋立ててらっしゃいましたよねえ」

「……うわぁ……」

「逆に木乃香の株は上がりましたね。

天ヶ崎千草とのやり取りも冷静にこなし、現在の自らの立場をち

やんと理解していることなど、それこそ一緒に見てた次代の長候補の身内達からも称賛の声が上がりましたよ」

「すみません。裏で糸引いてたの自分です。」

木乃香さんは腹黒くなってないですから安心してください。

「フオッフオッフオ、それは不幸中の幸いじゃの」

「ええ。これで木乃香が東西どちらを選んでも、特に問題は起きなさそうです。」

西を選んでも家督争いが起きなさそうなことを理解してくれまして、東を選んでもこの件のおかげで文句は言われないうでしょう。

さすがにこんなことがあって、“それでも西に來い”なんて言える人はいないはずですよ」

「おお！ それは何よりじゃー！」

「今のところはこれぐらいですね。」

何かわかり次第、あらためて連絡します」

「ウム。それではネギ君やウチの生徒のことをよろしく頼むぞい。ネギ君もシツカリとな」

「はい、学園長」

「お任せください。それでは……………」。

……………うん、改めてありがとうございます、ネギ君。木乃香を守ってくれて」

「いえいえ、コチラこそやむを得なかったとはいえ、参道とか鳥居とか壊してしまいましたして申しわけありません」

原作でも小太郎君とか結構壊してましたし、別に問題にされないと思いますかね。

まあ、社交辞令ということでも謝っておきましょう。

「ハハハ、気にしないでいいですよ。君達に怪我がなくて何よりです」

「ありがとうございます。」

それではこれからしばらくの間、生徒と一緒にお世話になります」

「歓迎させていただきますよ。」

予定では、今日1日はゆっくりする予定でしたね。

関西呪術協会の視点から見た裏についての説明は明日に。説明が長引かなければ明後日以降は京都観光と聞いていましたが……………」

「ええ。……………しかし、アーウエルンクスが捕まっていない以上、迂闊にここから出るのは危険だと思います。」

かといって、これから麻帆良に戻ろうとしたら途中で襲撃されるかもしれないし、何より皆さん移動で疲れています。せめて今日1日は休ませてあげたいですね」

「その方が良いでしょう。」

その間に何としてもアーウエルンクスを捕まえます、……………と言いたいところなのですが、奴は強敵です。生半可な追っ手では返り討ちにあってしまうでしょう。」

奴に対抗出来そうな使い手は、関西呪術協会にも数えるぐらいしか……………」

そうですねえ。

僕は前世で結局会わなかったから今日で初めて会ったんですけど、

確かに強いですね。今の僕ほどじゃありませんが、駄目親父クラスの力は確かに持ってます。

それに僕なら勝てるとはいえ、それはあくまでタイマンでの話であって、素人5人を守りながらというのはつらいです。

前世で僕がした修行は1対1か1対多ばかりで、多対多は修行しませんでしたしねえ。

..... “ぼっち”とか言うなっ！.....！

あれ？ 何か変な電波が.....？

まあ、最悪の場合は転移魔法で帰ればいいだけです。

京都・麻帆良間を10人ぐらいで転移するのは疲れますが、出来ないわけじゃありません。

エヴァさんの家に転移先となる魔法陣も用意してますしね。

「今日は休んで、明日は予定通り説明をしていたきながら様子を伺い、アーウエルンクスの出方を待つのがいいですかね。

諦めて京都から逃げてくれれば、それに越したことはないですし」

「そうですね。まずは身体を休めることでしょう。

……………生徒の皆さんは大丈夫ですか？」

「今のところは特に問題はなさそうです。

心配ちゅうたんしてた人は戦闘が怖かったというより、僕への突っ込みに疲れてたみたいですし。

……………というか、全員が僕のとった行動に疲れてたみたいです。特に刹那さん」

「ハ、ハハハ……………、彼女にもお礼を言わなければなりませんね。よくぞ今まで木乃香を守り続けていてくれました。

それでは私はこれから部下から現在までの状況の報告を受け、新たな指示を出さなければいけません。それが済み次第、皆さんに改めて挨拶に行きますので、もうしばらく休憩しててください。

ネギ君は木乃香達のことをよろしくお願いします」



「はい、わかりました。  
確か木乃香さんが昔使っていた部屋でしたね。僕もそこに行きま  
す」

「ええ、場所は部屋の外に待機している者に聞いてください。  
……………それにしても、ネギ君を見ているとナギを思い出し  
ますね」

「そうなんですか？  
確かに顔は父親似と言われますが……………」

「フッフ、顔は似ているけど、性格はナギと正反対……………のように  
感じますが、やはり根っこはナギと同じですよ」

「ゲエツ!？」

「あの駄目親父と同じ!？」

「勘弁してくださいよ、詠春さん……………」。

「（え？ 何で微妙そうな顔？）  
それにしても、よくアーウェルンクスのこと知っていましたね。  
魔法世界の雑誌なんかはコチラに持ち込めぬはずになってますが  
……………」

「ま、そこは蛇の道は蛇、と言いますか。祖父にいろいろお願いし  
まして……………」。

「アラルフラ“紅き翼”の資料を手に入れたとき、コスモ・エンテレケイア“よう、よ誘拐犯”につ  
いてのことも載ってましたから」

「……………何か変な感じが？」

ああ、確かにそうですね。

「アラルフラ“紅き翼”とコスモ・エンテレケイア“完全なる世界”は切っても切れない関係ですから、  
アラルフラ“紅き翼”について調べると自然に彼らにも辿り着きますか。」

「そういえばネギ君は、私の映っている映像を見て神鳴流を習得し  
たと聞きましたが……………」

「え？ ……………えーっと、何と言いますか。」

「技を盗むような形になってしまいました……………」

「ハハハ、まあ、そういう形でなら仕方がないでしょう。こう言っ  
ては何ですが、盗まれた私の方が悪いわけですから。」

「しかし、いったい誰がそんな映像を？」

「アラルフラ“紅き翼”の映画や映像が魔法世界で出回っているのは知ってま

すが、技を盗めるほどの詳細な映像を誰が？」

「え？ 誰も何も、“アラルブラ紅き翼”のジャック・ラカンさんですよ？」

「！？ あの筋肉馬鹿ですかっ！？」

「え？」

「あっ！？ いや、ゴホン！ 失礼しました。」

……………そうか、あの馬鹿かあ。あいつだったらあり得るな。

それに“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”を

“見た目5〜6歳の女の子”を“誘拐”して、  
その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、  
“世界を滅ぼそう”とした、  
“魔法世界全土に指名手配”されている“秘密結社”

なんて言うのはあの馬鹿ぐらいだな……………」

ゴメン、ラカンさん筋肉達磨。

あなたのこと言い訳に利用させもらいました。

……まあ、納得されるのも、自らの日頃の行いが悪かったとい  
うことだ。

それと技の映像を撮ったのがラカンさんとは言いましたが、“幼  
女誘拐犯”云々についてはラカンさんの映像とは言ってませんけど  
ね。

別に勘違いされても構わないことですから放置しますけど。

「……………えーっと、それでは、僕は木乃香さん達のところに行きま  
すので」

「え？ ええ、お願いします。後で顔を出しますし、夕食は皆さん  
とご一緒しましょう。」

それでは君、ネギ君を木乃香達のところへ……………」

「かしこまりました」

さーで、本当にこれからどうしましょうねえ。？

これでフェイトがこれで諦めて帰ってくれるならそれで良いですし、本山を攻めてきたとしても関西呪術協会の人達に任せれば良いですよ。

僕が動くのは関西呪術協会の人達が全滅した後。それまでは木乃香さん達の護衛を最優先です。

“コスモ・エンテレクイア完全なる世界”は人死にをなるべく出さないようにしていますから、気休め程度には安心できますしね。

……………原作で、エヴァさんには平気で殺す攻撃してたようですが、ま、腹を貫かれるぐらいなら僕でも平気です。頭と心臓さえ無事なら『マイティガード咸卦治癒』で大丈夫ですし。

……………というか、『マイティガード咸卦治癒』発動中なら心臓潰されても平気かな？ さすがに試したことないけど？

というか、今回の転生ではまだ大怪我したことないですからね。せいぜいが腕を切り落とすぐらいで……………。  
腹を貫かれるまではしたことありませんから、どうなるかわかりませんね。

……………それになーんかまだ忘れてることがあるような気がします。

何だったかなあ……………？

「ネギ先生、こちらが木乃香お嬢様のお部屋です」

「あ、ありがとうございます」

「はい。」

それではネギ先生の分のお茶をお持ちいたします」

「お願いします」

……………改めて見ると、ここにいる人達って本当に巫女さんなんだよなあ。

前世のアスナさん、木乃香さん、刹那さん、マナさんの巫女服姿を思い出します。

あれは眼福でした……………。

まあ、いいや。

過去を思い出すには、僕はまだ若いでしょう。

「失礼します。お待たせしました、皆さん。

学園長への報告は無事に終わ……………おや、長谷川さん？」

「お帰り、ネギ君。

そうなんや、千雨ちゃん寝てもうてな。疲れてたみたいやから、そっとしてあげて」

あらあら、長谷川さん横になって寝ちゃってます。

まあ、移動の疲れがあるでしょうし、魔法の戦闘なんか見てしまつたら精神的にも疲れるでしょうね。

ファンタジーが嫌いな長谷川さんなら尚更です。

……………でも、思ったより僕に対しては忌避感とか抱かれてないようなんですよねえ。何ででしょ？

魔法バレの仕方が仕方でしたから、原作と違って嫌われると思つてましたのに、意外と普通に付き合ってくれています。

仲良くしてくるには越したことはないんですがね。

「お父様やおじいちゃんとの話し合いはどうやったの？」

「とりあえずは予定通りに日程を進めることにしますが、皆さんの意見を聞いてから最終的に判断します。」

逃げた“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”の足取りがわからない以上、麻帆良に帰るために今から本山の外へ出るのは危険です。

関西呪術協会の人達が“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”を捕まえてくれるのを期待しましょう」

「確かにそうでしょうね。」

この関西呪術協会の本山なら安全でしょう」

「そっかあ。」

せつかく里帰りしたのに、とんぼ返りになるんわ嫌やからそれがええわ。」

……………それじゃあ、ネギ君。

一段楽したところで、約束守るーか」



ハ？ 約束？

僕、何か木乃香さんと約束してましたっけ？

あれ？ 何で明日菜さんと宮崎さんとエヴァさんが僕にジリジリ寄ってくるんですか？

あれ？ 何で綾瀬さんが襖を閉めて、茶々丸さんと刹那さんが僕の肩を押さえて、僕が逃げられないようにしてるんですか？

## 近衛詠春

ジャック  
筋肉馬鹿の馬鹿野郎。

ネギ君がどこかズれていることはお義父さんから聞いてましたが、まさかジャックの映像が原因じゃないだろうな？

しかし、木乃香が魔法を知ってしまったと言われたときには、こんなことになるとは思いませんでした。

木乃香が襲われたことはよくありませんが、これで木乃香の自由にさせられることが出来る。瓢箪から駒です。

それにしてもネギ君とはまだ少し話しただけですけど、本当に顔はナギの面影が強いですね。まあ、性格はナギに似ずに礼儀正しくて真面目みたいです。

でも、根っこはナギに似ている。やはり親子なんですね。

……………根っこもあまり似ててほしくなかったなあ。

……………さて、あの子達に改めて挨拶をしておきましょうか。夕食の時間にはまだ少し早いから、顔を出すぐらいですが。

先ほどは事後処理があったので、ほとんど事務的なことしかネギ君とは話せませんでしたし、何より木乃香ともあまり話せてません。それと木乃香がお世話になっていることに対して、木乃香のお友達にお礼を言わねば。

うん、父親らしいこともようやく出来ますね。

それにしてもあの年頃の子供の成長は早い。小さかった木乃香があんなに大きくなって…………。

お友達もたくさん出来ているようですし、やはり木乃香を麻帆良に送って正解でした。

魔法バレたせいで刹那君とも再び仲良くなれたらしいですし、良いタイミングで魔法のことを知ってもらえたようです。

……………考えてみれば、木乃香のお友達に挨拶するなんて初めてですね。

刹那君のことは木乃香の友達になってくれる前から知っていましたし。

参りました。何だか緊張してきましたね。

木乃香に恥をかかせないようにビシツと。だけとお友達を怖がらせてもいけない。これは匙加減が難しい。

世の中のお父さんは娘のお友達にどんな風に接しているのでしょうか？

しかし、木乃香の面倒を今まであまり見れなかったとはいえ、これでも私は木乃香の父。挨拶もしないままではいきません。

さて、木乃香の部屋はここですね。久しぶりにこの部屋から人の気配が感じられます。

木乃香が麻帆良に行ってからこの部屋はちゃんといつでも使えるようにしておきましたが、ようやくそのことが実りましたね。



ます。

そこに痺れませんか、憧れませんか」

「……………何事？」

今の叫びには木乃香の声も混じっていましたね？

「……………ロマンチックとはかけ離れたファーストキスでした。というか、エヴァさんいきなり何するんですか？」

「……………エ、エヴァちゃん、何してくれやがるのかしら？」

「ウチは頬にだったのに……………」

「ネ、ネギ先生せんせいの初めてが……………」

「……………フアア……………うるさいなあ。  
いったい何なんだよ？」

「……………い、いやあ。

エヴァにゃんが“ズキュウウンー！！”という感じで、ネギ坊  
主の唇を奪たアルよ」

「順番を最後にしたのはこういう狙いがあったんでござるなあ……………  
……………」

「ネ、ネギ先生！ この墨汁で口をすすぐです！！！」

「あ、ソレ木乃香お嬢様が習字の練習に使ってた8年ぐらい前の墨  
汁ですけど……………」

「もう固形化してるんじゃないのか？」

え？ 本当に何ですか、この状況？

第三十五話 京都編？ はじめてのチュウ（後書き）

この嘴広鴻が、甘酸っぱくて思い出に残るようなはじめてのチュウなんぞネギにさせると思っていたのかアーーーーッ！！！！

私は『読者を笑わせるため』にこの話を書いている！

『読者に笑わせるため』、ただそれだけのためだ！  
単純なただひとつの理由だが、それ以外はどうでもいいのだ！！！！

……まあ、このネタを予想してた人いたでしょうねえ。  
特にDIO＝エヴァは。

ネギは参道とか鳥居とか壊しましたが、別に文句は言われませ  
ん。

「関西呪術協会の人が襲ってこなかったら、僕もモノ壊したりしな  
くてすんだんですけどねえ」

って言われたら反論できませんからね。

まあ、心の中では言われているかもしれないませんが、これぐらいな

ら“文句を言いたいけど、理由があるから文句は言えない”レベル  
でしょう。

そしてネギの中では、“腕を切り落とす”“大怪我じゃない”  
となっているようです。

やっぱりネギはどこかズレています。

あと木乃香みたいなお嬢様だったら、習字の練習は墨から磨りま  
すかね？

小学校の頃、一度墨から磨って墨汁作ったことありますけど、あ  
あいうのって何故か磨っただけで何かもう満足しちゃうんですよねw  
良い墨と良い硯を使えば違ったらしいですが、もう10年以上書道  
なんてやってないなあ……………。

それと現実での仕事が忙しくなりそうなので、しばらく週一更新  
が限度です。

仕事が片付き次第、週2更新へと出来るだけ早く戻したいと思っ  
ますが、9月いっぱいには週一更新となると思います。ご了承くださ  
い。



第三十六話 京都編？ 地獄への扉

犬上小太郎

くそっ！ まんまとやられてもった！  
何とか俺らは逃げる事が出来たけど、千草姉ちゃんと月詠は捕まってもうてるやろな。

今は隠れ家の一つで潜伏中や。  
どうせ追っ手が出るやろっし、このまま計画を続けるか京都の外に逃げるか決めなアカンけど……………。

「これでしばらくは大丈夫だろう。周りを確認してきたけど追っ手の気配はないよ。

……………これからどうする、犬上小太郎君？」

「決まってるやろ！ 千草姉ちゃん達を助けてネギに一泡吹かせるんや！ あそこまでコケにされて、このまま引き下がれるかい！  
それに千草姉ちゃん処刑されるのを黙ってみているわけにはい

かんやる！！！

……………新入り、お前はどうすんや？

というか、ネギの言ってたことはホンマなんか？ お前が日本に  
来た理由は、あの木乃香って姉ちゃんを手に入れるためなんか？」

「……………まあ、嘘はついてないね、彼は。

とはいえ、詳しくは話せないけど僕達にも言い分があるし、何よ  
り意味もなくそんなことを企んだわけじゃない。

そして日本にきた理由は探し物があつたからだよ。今回のことに  
乗ったのは麻帆良に対してダメージを与えるため。西洋魔術師側も  
一枚岩じゃないってことさ。

別に僕達は女の子の誘拐を目的としているわけじゃない。別にあ  
のお姫様が目的じゃないさ。

……………いや、もちろん誘拐する必要があるなら誘拐するけ  
ど、それはあくまで手段であって目的じゃない。

というわけで、もう少しの間協力させてもらつよ。

僕は僕の目的のために君を利用する。君は君の目的のために僕を  
利用すればいいさ」

敵の敵は味方っちゅーわけか。

個人的にはコイツのことは気に食わんけど、俺1人で千草姉ちゃ  
ん達を助けれるとは思えへん。

今は猫の手でも借りたい状況や。コイツが何企んでるかはわから  
へんけど、贅沢いつてる場合やあらへん！

「ところで君は動けるのかい？  
ネギ君の攻撃から身を守るために、かなり力を消耗したようだけ  
ど……………」

「こんななん何ともあらへん……………って言いたいところやが、正直へ  
トヘトヤ。

治療術師って聞いたつたから油断したわ」

「そうかい。……………なら、千草さんの奪還は明日以降にしよ  
う。今日はもう休むんだ

京都中に網を張られているだろうし、本山も警戒しているだろう  
から今動くのはマズイ。

それに明日以降なら、逃げた僕達を探すために人手を使うために  
逆に本山の守りは薄くなるかもしれない。いくら何でも僕達が本山  
に攻め入るなんか考えてないだろうからね。その隙をつかせてもら  
おう。

それに千草さん達は重傷だった。今助けたとしても、逃げる途中  
で怪我が悪化して死んでしまったりしたら本末転倒だ。

取調べのためにもある程度治療はされるだろうから、本山の人達  
に治療を任せよう」

「……………まあ、確かに今すぐ動くつちゅーのは無理やな。  
しかし、本山に攻め入るなんか出来るんか？」

「大丈夫。僕に任せてくれ」

……………コイツ、無表情やけど何か怒ってへんか？

“ 幼女誘拐犯 ” 呼ばわりされたらしゃーないかもしれないけど、そ  
んなん自業自得やない……………あ、そういえばネギが「弟とか  
息子？」つちゅーてたな。

もしかしてコイツ自身が誘拐犯やなくて、親兄弟が誘拐犯やった  
んかな？

親兄弟がそんなこと仕出かしたもんやから、結局コイツ自身もそ  
の一味と思われてしもつて迫害されてきたんやろか？

迫害されたことから世の中全てを恨んでもうて、そして遂にはテ  
ロリストになつたんか？

……………そう考えれば、西洋魔術師に敵対しとる理由がわか  
るな。

何せ自分を迫害してきた連中や。麻帆良にダメージを与えたいっ  
てのは復讐のためかい……………。

くうっ！ きつとコイツも苦労してきたんやな！

「よし！ わかったで！

一緒に千草姉ちゃん達を助けて、西洋魔術師に一泡吹かせてやる  
うやないかい！！！！

…………… あ、でも千草姉ちゃん達は大丈夫やるか？

直訴に失敗してもうたし、もしかしたら即刻処刑なんてことにな  
らへんかな？」

「僕が事前に勉強してきた日本の歴…………… いや、何でもない。  
まあ、即刻処刑ということはないだろう。少なくとも背後関係を  
確認するために取り調べは行なうはずさ。

千草さん達の怪我もあるし、治療や取調べで2〜3日は大丈夫じ  
やないかな。

(そして無性に君を殴りたくなっただのは何故だろう?) 「

「…………… そっか。そうやな。

なら、今は身体を休めなアカンな」

「そうした方がいい。

……………そういえば周囲を見てきたときに飲み物を買ったんだけど、君もいるかい？」

「おお、スマンな」

結構気が利くやないか。

無表情で何考えてるかわからんから不気味に思ってたけど、考えを改めなアカンな。

え〜と、これはコーヒー（無糖）でこれはコーヒー（微糖）、これもコーヒー（加糖）でこれがコーヒー（低糖）……………。

って、全部コーヒーやないかいっ!？

神楽坂明日菜

「ハハハ、しかし木乃香も本当に大きくなりましたね。  
どうです？ 今日私の部屋で一緒に寝て、麻帆良での暮らしの  
ことを聞かせてくれないですか？」

「ゴメン、お父様。」

皆と一緒に部屋で寝るわ。エヴァちゃんがネギ君に何仕出かすか  
わからんから見張っとかんと」

「……………そうですね」

「こ、木乃香お嬢様……………」

ちっ、競争相手が減ると思ったのに……………。  
大きな部屋を一つ借りることが出来たから、皆で一緒に寝ようっ

てことになったけど、ネギの隣に誰が寝るかはまだ決まってい  
ない。木乃香がお父さんと一緒に寝てくれれば、その分ネギの横で寝  
る確立が上がるのに……。せつかく里帰りしたんだから、今日ぐらいお父さんと寝ればい  
じやない。

え？ 私はいつもネギと一緒に寝てるじゃないかって？

細かいことはいいのよ！

とりあえず、エヴァちゃんだけは絶対ネギの隣で寝させられない  
わ。何仕出かすかわかったもんじやないもの！

……っていうか、ああ、もう！

ネギのファーストキッスがあ~~~~っ！！！！

こんなことだったら寮のベッドと一緒に寝てる間にコッソリして  
おけばよかった……。

うっ、せつかくじゃんけんて勝って、おでこにだけど一番手で  
ネギにキスしたのに、最後の最後でエヴァちゃんに引っ繰り返され  
たわ。

ああ、もう！

飲まなきゃやってられないわよ……！！

……っていうか、これ本当にお酒？



「話には聞いていましたが、本当に日本の関東と関西では味付けが違いますね。

特にこの野菜の炊き合わせなんかは麻帆良で食べれそうにない味です」

「はっはっは、そうかそうか。ネギはこういう味付けが好きなのか。なら今度ウチに来たときに作ってやろう、茶々丸がな。」

「……………しかし、なんだな。無理矢理キスした私が言うのもアレだが、随分と平然としているな。」

「ネギはファーストキスだったんじゃないのか？」

「いやあ、確かに唇にキスされたときは驚きましたけどね。」

「今は何だか自分でも不思議なくらいに落ち着いています。突飛過ぎで現実感がない、というわけなんでしょうか？ 自分でもよくわかりません。」

「(何だか最近心が乱れることが本気でなくなってきたなあ)」

「……………そ、そうなのか。」

「(くっ、失敗した！)」

「惚れ薬の件でそろそろ目覚める頃合だと思っていたのだが、ネギはまだ色恋についてわかっていなかったみたいだな……………」

やはり焦らずにもう少し待てばよかったか……………」

むう、ネギはネギでキスされたことに全然動じていないみたいだし……………。

10歳の子供ならそういうことがわからなくても仕方がないのかもしれないけど、キスしたんだから少しは私達のことを意識してくれてもいいのに。

はあ……………、それにしてもネギの言った通りに本当に襲われるなんて思わなかったわ。やっぱりコッチの世界には危険なことがたくさんあるのね。

ネギが大袈裟すぎるだけと思ってたけど、アレがコッチの世界で普通なのかしら？

でも龍宮さん達も大袈裟に思ってたみたいだし、やっぱりネギが変わってるっぽいわね。

……………そういえば、木乃香のお父さんの詠春さん。

どこかで会ったことある気がするのは気のせいかしら？

前に皆と一緒に魔法の世界についての説明をしてもらってから変なのよねえ……………。

ネギのお父さん達のことを書かれてる雑誌をネギに貸してもらったけど、写真で見たネギのお父さん達ともどこかで会った気がしたし、今日詠春さんの顔を実際に見たらますます会った気がしてきたのよね。

夢で麻帆良じゃない風景を見たこともあるし……………。  
なーんか最近変なのよねえ。

あゝ、美味しかった。

ネギも言ってたけど、確かに関西の味付けは関東の味付けとは違ってたわね。

関東の味付けもそれはそれで好きだけど、関西の味付けもいいわね。

「さて、皆ねん。

とりあえず今日はもう寝るだけなのですが、寝る前にこれからのことを話しあっておきましょうか」

「これからのこと？」

ネギ君の隣で寝るのは、ウチとのかの2人やで？」

「ふ、ふつつかものですが、よろしくお願いします。ネギ先生……  
せんせい

……」

「頑張るですよ、のどか……」

「……いえ、そういうことではなくてですね……」

くっ、あのときチョコキを出しておけば……。

でもいいわ。まだ明日があるもの。

「お前ら、少しは真面目にやれ。」

ネギ先生が言っていることは昼間に私達を……というより、近衛を襲ってきた連中についてだろ？」

「その通りです、長谷川さん。」

襲ってきた4名のうち2名は既に捕縛済み。残りの2名も関西呪術協会の人達が追っているはずですが、正直捕まるとは思えません。犬上小太郎君の方は問題ないのですが、もう1人の白髪の少年。アーウェルンクスが強敵です。

以前の魔法関係についての講義のときに話したと思いますが、僕の父であるナギ・スプリングフィールドは世界を救った英雄といわれています。

で、何故世界を救ったと言われているかというと、アーウェルンクスが所属している“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”の企てを阻止したからなのです」

そういえば、そんな話も聞いたわね。

まさかそんな相手が木乃香を狙っているなんて……………。

「し、しかしネギ先生。何故その“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”とやらが関西呪術協会に？」

長である詠春様はネギ先生のお父上の盟友であり、“アラルツフ紅き翼”として“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”と戦った関係です。そんな詠春様がおられる関西呪術協会に、何故奴らは潜り込んできたのでしょうか？」

「さあ？ それは本人に聞いてみないとわからないです。」

………龍宮さん、長瀬さん。外からこの部屋の様子を伺っている人はいませんかよね？」

「？ 何だい急に？」

………特に怪しい気配はしないが」

「そつでござるな。」

この部屋は別に監視とかはされていないでござる。」

「わかりました。ちょっと結界張って内緒話にしましょう。」

ああ、詠春さんから魔法の使用許可をいただいていますので問題はあります。………アーウェルクス対策の名目ですけど」

………ネギってそついうところちゃっかりしてるのよねえ。“バシなきや犯罪じゃない”的な考え。

カワイイ顔して意外とエグイ考えをするのよ。

「……………はい、結界張りましたので、好き勝手に喋っても大丈夫です。」

それでなんですけど、あの変な着物着ていたお姉さん。天ヶ崎千草はアーウエルンクスのこと……………名前はフェイトというらしいですが、フェイト・アーウエルンクスのことを本当にただの研修生と思っていたようです。

それと彼女がこんな暴挙に出た訳は、彼女の両親が20年前の大戦で亡くなったのが大きな要因みたいです。

実はフェイト・アーウエルンクスが所属している、コスモ・エン“ よう ”テレケイア誘拐犯”があの大戦引き起こした原因なんですけどねえ」

「……………おい、ネギ。」

確認するのも嫌なんだが、確認しておかなければならんことがある。

“ 何故お前がそれを知っている? ”

「彼女達の怪我治すとき、ついでにコッソリと記憶を読んでおきました」

「やっぱりかっ!？」

「ちなみに千草って人は関西呪術協会の構成員だけあって、関西呪術協会の内部情報についての記憶も一緒に読んじやいましたね。」

このことは関西呪術協会の人に言わないでくださいよ。いくらソ

ツチの情報が主目的でなかったとはいえ、結果的に“巨”の選手が阪 球団の内部情報盗んだ”ようなものですから、バレたら流石にマズイです」

「ネ、ネギ先生……………、何ということ……………」

「あ……………、だから結界張って内緒話にしたアルね」

うわ、それは確かにマズイわ。

木乃香のお父さんには絶対話せないわね。

「バレなきゃいいんですよ。バレなきゃ。」

僕の勘ですけど、多分アーウエルクス……………名字長いですね。フェイトでいいや。フェイトはここに攻めてくると思います。少なくとも僕はフェイトが攻めてくるという前提で物事を進めようと思います。

関西呪術協会の人も警戒してますから、今日のところは大丈夫だと思えますけどね。

それでなんですが、あんな戦闘に巻き込まれるのは怖いから麻帆良に帰りたいてっていう人はいますか？



いたら転移魔法で麻帆良まで送りますけど」

「私としてはネギ先生の物の考え方が怖いんですけど………  
まあ、いいや。」

ネギ先生個人としてはどうしたらいいと思うんですか？ ネギ先生お得意の大袈裟すぎる危機管理意識で考えた意見をまず聞きたいんですけど？」

「え？ 僕の考え方のどこが怖いんですか、長谷川さん？  
それに結局襲われたんだから、僕の考えがあってたんじゃ………」

「考え方があってたとしても、ネギ坊主の考え方は10歳の男の子の考え方じゃないからでござるよ………」

「私の感じるネギ先生の考え方って、  
“石橋を叩いて確認して強度がOKでも、その隣に更に頑丈な鉄橋を架ける”って感じなんですけど」

「え？ ソレって石橋叩く意味ないんじゃない？ 僕はそんな無駄なことしな………アレ？」

………まあ、いいです。僕の意見としましては、

？ このまま今すぐ転移魔法で麻帆良に帰る。

？ 明日の裏についての説明を受けてから麻帆良に帰る。

？ 予定通りに観光まで終わらせてから麻帆良に帰る。

の大まかな3通りの選択肢があると思います」

……そうね、そんなところね。

その3つだと、それぞれメリットデメリットがあるわね。

？のメリットは確実に安全なこと。

デメリットはせっかく京都に来たのに夕飯だけ食べて帰らなきゃいけないこと。

まあ、安全を考えたら間違いないけど、いくら何でもそれだと勿体無いわねえ。

？のメリットはこの旅行の一番の目的は達成できること。元々そのために来たんだしね。

デメリットは今日、それと明日の説明が終わるまでは危険があること。この本山から出なければ安全とはいわれているけど、ネギの考えでは本山も襲われるかもしれないみたいだし。

？のメリットは観光ね。せっかく京都に来たんだから、少しぐらいは観光してみたいわ。

デメリットは？？？の中では危険が一番あること。さすがに襲われる可能性があるのに観光なんかしている場合じゃないし。

簡単にまとめるとこんな感じかしら？

「……………何よ、皆して私の顔見つめて？」

「……………神楽坂、お前本当にバカレンジャーじゃなくなっただんな？」

「どっついう意味かしら、龍宮さん？」

「いや、だって……………、なあ？」

「（これでネギ先生に熱を上げていなければ、まともなクラスメイトが増えたのに……………）」

「……………まあ、明日菜さんは今まで勉強、というか脳みそを使うことをサボってましたからね。

人間の身体構造上、筋肉だろうが脳みそだろうが使わなければサ

「付いていくものですか」

「ネギ、あとで話があるから」

「うう……………、アスナが立派になって……………。  
ウチもこれで安心出来るわ」

「よかったですね、木乃香お嬢様」

何で木乃香が涙ぐんで喜ぶのよっ！？  
そんなに今までの私は酷かったわけ！？

……………確かに酷かったかもしれないわね。

「そ、それでネギ先生としてはどれが良いと思うのですか!?!?」

「え? ああ、はい。」

そうですね。??の組み合わせが良いかと思えます。

具体的に言うと、明日の関西呪術協会からの説明は予定通りに受けます。

せつかく京都に来たのですし、説明はコチラからお願いしたことですからね。

関西呪術協会の構成員に襲われたので、僕達が帰ると言ったとしても問題はないと思いますが、あまりアチラも良い気分はしないでしょう。

そして観光する予定の明後日の朝までに、関西呪術協会の人達がフェイト達を捕まえられなかった場合は観光を止めて麻帆良に帰り、捕まえることが出来た場合は予定通りに観光する、という感じですよ」

「……………ふむ、確かにそんなところでごぞるな」

「だな。せつかく京都まで来たんだから、このまま帰るのは勿体無い。かといって、あの連中が捕まっていないのに京都観光っていうのも不安だからな。

……………うん、私はネギ先生の意見で良いと思うぞ」

そうね。私もそれがいいと思うわ。

あの人達が捕まってくれば、それで安全になるんだし。

「……………反対意見はないようですね。じゃあ、これで行きましよう。今日はもう遅いので、明日の朝に詠春さんにそう伝えることにします。」

もし、それまでに気が変わって麻帆良に帰りたいたいという人がいたら、遠慮なく言ってくださいね」

「フン！ なら私は明日から京都観光に出るぞ！！！」

せっかく京都に来たのに観光も出来ずに帰るなんてなったら、わざわざ京都に来た意味がないからな！！！」

「うーん、まあエヴァさんなら大丈夫ですか。ちゃんと茶々丸さんも連れて行ってくださいよ。」

何かあったら携帯で僕を呼んでください。多分、僕が本山にいると念話は通じないでしょうから。」

……………それと観光に行くというなら、ちょっとエヴァさんにお願  
いがあるのですが……………」

「……………お前のお願なら聞いてやろう、と言いたところ  
だが、まず内容を話せ。」

というか、その前に何か企んでいるようなその笑顔を止めてくれ」

「え？ 別に僕はいつもこんな顔だと思いますけど？」

……………まあ、いいです。お願いというのは、天ヶ崎千草の記憶を  
読んだときに彼女が立てた今回の計画について読んだのですが、そ

れに対する対策です。

彼女を捕まえたとはいえ、フェイトがその計画を実行する可能性があるので、“念のため”にですが用意しておいた方がいいかな、と思ひまして。

お願いというのは、ある場所にある物を用意しておいて欲しいんですよ」

簡単なことです、お手は煩わせませんよ。と、ニコニコと笑いなからエヴァちゃんにお願いするネギ。

……………まーた何か企んでいるのね。

ネギの笑顔は好きだけど、このちよつと怖い感じのときの笑顔はちよつと嫌だわ。

第三十六話 京都編？ 地獄への扉（後書き）

千草のための“天国への扉”<sup>ヘブンス・ドア</sup>ならぬ“地獄への扉”<sup>ヘルス・ドア</sup>が開かれるよ  
うです。

記憶を読めるって便利ですね。

あと小太郎のフェイトへの好感度が上昇中。

しかし、フェイトは何故か小太郎を殴りたくなったようですw

そしてネギパーティーの中では“完全なる世界”<sup>コスモ・エンテレケイア</sup>は“よう”<sup>コスモ・エン  
テレケイア</sup>として認識されました。南無。



第三十七話 京都編？ 逆効果

瀬流彦

昨日の夜にいきなり学園長から連絡が来て、今日の朝から急な仕事があるということとで学園長室に来ただけど……………。

「……………現在の状況はこんなところじゃ。

スマンが今日一日この部屋に詰めてもらっぞい。もちろん休日手当ではちゃんと出すからの」

「わ、私は今日、彼との約束が……………」

「フオッフオッフオ、すまないのお。やはり西に関する事なら葛葉先生は外せないのじゃ。

それに君が剣の稽古をつけた刹那君も京都に行っているのじゃぞ。心配じゃないのかね？」

「……………うう……………」

「ぼ、僕もせつかく春休みなんで、娘と出かける約束がありました……………」

「フオツフオツフオ、明石教授の娘さんというと、ネギ君のクラスの明石裕奈君じゃったの。」

ネギ君に何かあったら娘さんも悲しむじゃろうなあ……………」

「……………“ネギ君に何かあったら”じゃなくて、絶対に“ネギ君が何かしたら”ですよねぇ」

……………まーたネギ先生が何か仕出かしたのか。

いや、別にネギ先生から仕出かしたわけじゃないらしいんだけどね。でも一度お払い受けた方がいいんじゃないかな、あの子？

麻帆良に来てからまだ2ヶ月ちよつとはずなのに、何でこつまで騒動に巻き込まれるのかな？

いや、わかってるよ。

別にネギ先生が悪いことしてるわけじゃないんだよ。

ネギ先生に秘密にしておくはずの魔法関係者のことがバレたときだって、あれはエヴァンジェリンがおんぶされてるうちに寝ちゃったせいで、ネギ先生が彼女を集合場所に送り届けに来たからバレちゃったんだ。

今一緒に京都に行っている生徒達への魔法バレだって、エヴァンジェリンが転移魔法で転移したところを目撃されて、記憶を消そうとして消せなかったからバレちゃったんだ。

……………アレ？ 両方ともエヴァンジェリンのせい？

ま、まあ、今回の京都旅行でも、最初は関西呪術協会のお家騒動に巻き込まれたのかと思ったら、実は魔法世界の指名手配犯が関わっているということだからね。

別にネギ先生から積極的に騒動を起こしてるわけじゃないし、ネギ先生自体は真面目な良い子なんだよ。

特に個性的な子が多い2-Aでちゃんと先生もやっていけてるし、万年学年最下位だった2-Aを学年トップにするという偉業まで達

成しているぐらいなんだ。

真面目で良い子だけでなく、大人顔負けの能力持っているんだ。

……………それでもあんまり関わりたくないなあ。

学園長みたく胃潰瘍で入院することになりかねないし、そもそもネギ先生なら1人でも大丈夫じゃない？

「というわけで、学園長。

僕も彼女との約束があ、「瀬流彦君、彼女いないじゃろ」……………  
……………そうですよ、その通りですよ」「

やっぱり無理だね、ハハハ……………。

ま、冗談だけど。

ネギ先生は大丈夫かもしれないけど、一緒にいる生徒達は大丈夫とは限らないからね。さすがにここで帰るわけにはいかないさ。

遠く離れた麻帆良から出来ることはそんなないだろうけど、それでも出来ることがあるならやらなきゃ……………。

「大丈夫じゃ。ネギ君ならシツカリやつてくれるだろうて。ワシらはもしものときに備えておくだけじゃ。」

それに……………ちゃんと胃薬はたくさん用意してある。持ち帰りもOKじゃ」

「「「……………「「「

……………やっぱり帰ったら駄目かな？

くそ、高畑先生さえ出張中じゃなければ……………。

宮崎のどか

身体が軽い。  
こんな幸せな気持ちで目覚めるなんて初めて。  
もう何も怖くない。

「……………のどか。  
いくらネギ先生と手を繋いで寝れたからといって、妙なフラグを  
立てるのはやめるです」

「フラグ？ 何のこと？」

「あれ？」

「……………すみませんです。何か時空を超えて電波が届いたと  
いうか……………」

変なゆえ？

どうかしたのかな？

それと身体が軽いのは本当だよ。

ネギ先生せんせいがせっかくだからということで、『マイティガード 咸卦治癒』を発動し  
た状態で手を繋いで寝てくれたから、本当に体の調子が良いの。

こんなにスッキリとして目が覚めたのは久しぶり。長谷川さんや  
桜咲さんが凄いつて言っていたのがよくわかった。

でも残念だったのは、ネギ先生せんせいの手が心地良くてあつという間に  
寝ちゃったこと。

布団に入ってネギ先生せんせいと手を繋げたときは、もう心臓がバクバク  
鳴って落ち着かなくなっちゃって、こんなんじゃ絶対眠れないと思  
ってたんだけど……………。

ネギ先生せんせいの手から伝わってきた温もりで落ち着いて、いつの間に  
か寝ちゃったの。

もう少しネギ先生せんせいの手を繋いでいたかったなあ。  
スツキリして目が覚めたら、ネギ先生せんせいは朝の運動しにいったらしくて布団にはいなかったし……………。

でも、まだこの手にはネギ先生せんせいの手の感触が残っている。  
木乃香さんやアスナさんが“弾力があるけど固くなくて感触がシツカリとわかる身体”、って言ってたのがわかる手の感触。  
私がネギ先生せんせいの手をギュッと握り締めたら、ネギ先生せんせいも私の手を握り返してくれた……………。

エへへ、ネギ先生せんせい……………。

ネギ先生せんせいと手を繋ぐなんて初めて。

初めて会った日にお姫様抱っこされたけど、あれは緊急事態だったし。

……………いいなあ、木乃香さんやアスナさん。毎日あんなことしてるなんて。

しかもアスナさんは手を繋ぐだけじゃなくて、ネギ先生せんせいを抱きしめながら寝ているらしい……………。

ネ、ネギ先生せんせいを抱きしめて……………。



うづうづ……、うらやましいけど、私には無理だよ。

手を繋いで寝るだけでもいっぱいだったのに、ネギ先生せんせいを抱きしめて寝るなんて、考えただけで恥ずかしくて死んじゃいそう。

「……のどか、もうすぐ朝食です。」

いつまでも“頬に手を当ててイヤンイヤン”としていないで、お風呂に入りに行きましょう」

「えー!? う、うん、そうだね」

や、やだ、私ったら……。

そうだね、朝食の前にお風呂に入って身支度を整えなきゃ。

髪の毛を触ってみるとちょっと寝癖がついてるし、ネギ先生せんせいに会う前に何とかしなきゃ。

……………あれ?

よくよく考えると、私が起きる前にネギ先生せんせいが起きてたんだから、私の寝顔とかもネギ先生せんせいに見られちゃってたってこと？

私、変な顔して寝たりしてないよね？

「それではエヴァさん、行ってらっしゃい。

何かあったら連絡してくださいよ。

……………それと昨夜お願いしたこと、よろしくお願いします」

「……………あのぐらいなら構わないがな。魔法が使える今の状態なら、大して手間ではないし。

でも正直、そこまで準備する必要はないと思うぞ」

「あくまで“念のため”ですよ。

無駄になつたら無駄になったで、それは平和だったということなんですからいいんです」

「そういう慎重すぎる性格を褒めればいいのか、それとも大袈裟すぎると思えばいいのか……………」。

……………まあ、今回の旅行ではネギの予想が尽く当たってたからな。最後までネギの直感を信じるのも良いだろう。

じゃあ、行ってくる。行くぞ、茶々丸」

「はい、マスター。

夕食は食べてから戻ることになると思いますので、マスターの分の夕食は結構です」

エヴァさんが京都観光に行った。

私達と違って、襲われたとしても対抗することが出来るらしいから大丈夫だとは思っただけど、それでも心配だな……………」。

だって、あの襲ってきた人って、過去に小さい女の子を誘拐した人なんだよね。

それでこの私たちが住んでいる現実世界とは違うところの、魔法世界ってところで指名手配されている。

エヴァさん本人の前で言ったら怒られるけど、エヴァさんはまるで絵本に出てくるようなお姫様みたいに小さくて可愛いから、あの誘拐犯さん達が狙うには絶好のターゲットなんじゃ……………」。

ネギ先生せんせいやくーふえの話では、エヴァさんも凄く強いらしいんだけど、それでも心配なものは心配だなあ。

「それでは僕はちょっと詠春さんと今後について話をしてきます。10時から予定通りに、関西呪術協会から見た裏の世界についての説明がありますので忘れないでくださいね」

…………… やつぱりネギ先生せんせいも、エヴァさんみたいに可愛らしい人が好きなのかな？

アルちゃんが見せてくれた、ネギ先生せんせいからの好感度ランキングでもエヴァさんが一番“恋愛”が高かったし、エヴァさんの家でもよくお話しているし。

…………… 何よりネギ先生せんせいのファーストキスがエヴァさんに奪われちゃったし。  
私わたしだって、ネギ先生せんせいの右頬にキスしたけど、さすがに唇になんか出来なかったよお……………。

ネギ先生せんせいの好みのタイプって誰なんだろう？

あ、そうだ！

「……………ね、ねえ、アルちゃん？  
ネギ先生せんせいが私達のことどう思っているかの好感度ランキング、見せてもらってもいいかな？」

「え？ 宮崎様、いきなり何ですか？」

「……………いいわね、それ。」

昨日のキスで、ネギが私達のことをどう思ったのか知りたいわ」

「あー、面白そうやなあ。」

バレンタインのときに1回見たつきりやったから、この1ヶ月でどんな風にウチらへの想いが変わったか見てみたいわ」

「……………エヴァンジェリンさんがいないのですが、いいのでしょうか？」

「むしろ好都合なのです。  
不意打ちでネギ先生の唇を奪うような人は脅威なのです」

「お前ら、少しは自重しろ……………」。

(……………くそ、何で私は昨日寝ちゃったんだよ。  
ネギ先生も可哀想に。年上の女の子に囲まれた状態で無理矢理唇を奪われたりして……………)」

「ごめんなさい、長谷川さん。

こんな方法でネギ先生の<sup>せんせー</sup>気持ちを知るなんて、本当は悪いことだ  
ってわかってます。

けど、それでもネギ先生の<sup>せんせー</sup>気持ちが知りたいんです！

「3月の初めに私が確認したときは、以前のものとそう違いはありませんでしたし……………まあ、問題ないですかね。」

昨日の皆さんからのキスのせいで、ネギお兄様が心の中では実は  
悩んだりしてるかもしれないし。

「ここにはいませんけど、エヴァンジェリン様の分もお出しします  
か。」

えーっと……………、はい、出ました。皆さんどうぞ」

マナ	夕映	楓	古菲	千雨	のどか	茶々丸	刹那	エヴァ	木乃香	明日菜	
5	4	6	6	5	5	6	7	7	4	5	友親
4	4	5	3	6	6	7	5	9	2	8	恋愛
1	1	0	1	3	2	2	3	5	2	2	愛色
4	5	4	5	6	6	6	7	2	8	9	計
0	0	0	0	0	7	0	0	8	0	0	
1	1	1	1	2	0	2	2	0	2	2	
4	4	5	5	0	2	1	2	3	3	4	
					0			2			

うう……。  
 ネ、ネギ先生の気持ちは誰に向いてるんだらう？

.....。

.....。

.....え？

「.....あれ？ 私への“色欲”が0点になってる？」

「刹那様への“色欲”なら、3月の初めに見たときには0点になってましたよ。

もう慣れてしまわれたんじゃないでしょうか？」

「.....それは喜んでいいのかな？ 女としての魅力がないと言われているも同然では？」

いや、ネギ先生は10歳なのだからしょうがないのか？」

「そうですね、ネギお兄様は10歳ですからね。

でも、私が3月の初めに確認したときより大分変わってますね。

.....っというか、あら？」



うん、刹那さんの“色欲”が0点。  
これはいいの。

……………これはいいんだけど。

「……………ちよっ！？ ちよっとこれはど「落ち着け！ ここは麻帆  
良じゃないから騒ぐな！ 素数でも数えて心を落ち着かせろっ！！」  
！……………「ごめんなさい。」

1、2、3、5、7……………」

「う、うん、ごめんな。千雨ちゃん。  
ウチもアスナみたいに叫びそうになっただわ……………」

「……………いや、私も大声出して悪かった。  
とりあえず順番に考えていくぞ。」

宮崎、フリーズすんな。再起動しろ  
……………それと神楽坂、“1”は素数じゃないぞ「

「……………ハッ!？」

ア、アレ？

いけない、何してたんだっけ？

……………そうそう、ネギ先生せんせいからの好感度ランキングを見て  
たんだよね。

「まずは一番簡単な“色欲”からだな。  
見事に全員が0点」

「それはそれで問題なんやけど、ネギ君が10歳ということ考えた  
らしょうがないなあ」

「うん、それはいいのよ。  
ネギはそういうことがわからないだけなんだから、前のときに判  
那さんに1点でもあった方がおかしいのよ」

「ネギ先生は“恥ずかしがられる”ということに慣れていなかったみたいですからね。

故郷の従姉のお姉さんはもちろん、アスナさんや木乃香さんはネギ先生に対して恥ずかしがられていなかったようですし」

「慣れてしまたらこんなものアルか」

「アーニヤお姉様は恥ずかしがられてましたけど、それは最初からでしたからね。

ネギお兄様にとって、あのアーニヤお姉様がデフォルトでしたし………」

うん。刹那さんだけを女の子として見てるわけじゃないことがわかった。

むしろ全員がそういう風に女の子として見られていない、というのはシヨックだけど、ネギ先生は10歳せんせいだからしょうがないよね。

それにキスのせいで、エヴァさんに対しての“色欲”が増えるなんてことはないみたい。

それは良かったんだけど……。

「あー…………、次は“友愛”、“親愛”、“愛情”か？  
全員増えてるといえば増えてるな」

「ふむ、見たかぎり“友愛”は拙者達、修行仲間が増えているでござるな」

「“親愛”、“愛情”は全員そこそこ増えているな。

まあ、元から関係者だった私や刹那、エヴァンジェリン以外の全員と、隠し事しないで付き合えるというのが良かったのかな？

いくら大人びているとはいえ、やはりネギ先生はまだ子供だ。秘密にしているということ、知らないうちにストレスが溜まってたんじゃないか？」

「そういえば、ネギが最近結構伸び伸びとしてる感じがするわ。

麻帆良に慣れてきたからだと思ってたけど、そういうこともあるのかもしれないわね」

「確かに学校でのネギ先生と魔法関係でのネギ先生は違う感じがしますね。

学校でのネギ先生はどこか、“教師”という役柄を演じているような気がしますし……………」

「……………だな。いくら修行とはいえ、考えてみりゃ10歳の子供には大変すぎるだろ。

私達に魔法バレしなくてもしばらく大丈夫だったかもしれないけ

ど、数カ月後にはネギ先生が参ってたかもしれないな。

そう考えたら私達に魔法バレしたのは、ネギ先生にとっては良かったんじゃないかな。

……………それで“恋愛”、……………なんだが……………」

そうなの。

……………何で“恋愛”が減ってるの？

前のときは確かに私への“恋愛”が4点あったはずなのに、今は2点しかない。

……………アスナさんや木乃香さん、エヴァさんも2点だし。

「な、何でなの！？ 何で前のときより下がってるのよ!？」

私は前のときは6点あったはずよ!!--!!」

「ウチは確か5点で、エヴァちゃんが一番高くて7点やったはずや。

そんでのどかは4点。

その“恋愛”の点数が高かったウチら4人が何で2点まで下がるとるん？

……………それに何でせつちゃんとか千雨ちゃんが3点って一番高いん？」

「ご、誤解です、木乃香お嬢様！

私はネギ先生と何もしておりません！！！！」

「あ……………あれじゃないか？ 昨日のキスが原因なんじゃないか？ それと私と桜咲は“何もしてない”から、点数の下がり方が少なかったんじゃないのか？」

え？ 昨日のキスが原因？

どういうこと？ キスしたおかげで“恋愛”が上がるっていうのならわかるけど、下がるってどういうこと？

「いや、ネギ先生が「キスは従姉に頬とか額にされたことならあるようなこと言ってただろ。そしてお前らが昨日キスした場所はその額と頬だったんだよな？」

お前らにキスされても従姉のお姉さんと同じように想われて、

「恋愛”が上がりずむしろ下がったんじゃないのか？」

「……………ああ、それはありえるかもな。」

刹那への“色欲”がなくなっただことから言われていたように、ネギ先生はソツチ方面がまだ理解出来ていない。だったらキスされたとしても、“恋愛”ではなく“親愛”の方が上がるかもしれん。そもそも欧米人にとって、キスや抱擁は挨拶の一種でもあるからな。

しかし、キスを唇にしたエヴァンジェリンも同様なのか？」

「な、何よそれ？ キスは逆効果だったの？」

……………だ、だったら一緒にお風呂に入るぐらいししないと……………」

「アスナさん、それこそ駄目なのでは？」

きつと従姉のお姉さんとお風呂に入ったことを思い出されますよ」

「うわ、何やそれ？ つまりスキンシップしたら“恋愛”がどんどん減ってくってことなんか？」

うっうっう……………、“恋愛”が減るのは嫌やけど、スキンシップ出  
来ないっていうのはもっと嫌やなあ」

「こ。こうなったら、のどか！

ハルナが描いていた漫画に載っていた、し、ししし、しし舌を絡ませるキ「落ち着けえっ！」「あぶっ！？」

スパーーーーーンッ！ と良い音がしてゆえが千雨さんに叩かれた。

っていつか、もしかして舌を絡ませるってディープでフレンチなキ、キキキ、キスのこと！？

そんなこと出来るわけないよぉっ！！！

「そこまですりゃ確かに効果はあるかもしれないが、10歳児にそんなことしようとすんな。

これでわかっただろう。ネギ先生はまだ子供なんだ。

お前らの基準で進めようとしても、逆効果になることだってあるんだ。

だからこれからはもう少し深く考えてから行動しろ」

「……………わかったわよ」

「そつやなあ。

ウチもそつやけど、特にアスナは最近ネギ君に依存してたからな



あ…………。

やっぱりネギ君のこともちゃんと考えんとアカンわ」

「エヴァにゃんがいなくて良かったアルね。

いたら絶対もつと凄い騒ぎになってたアル」

「確かにそうですね。

エヴァンジェリンさんもネギ先生のことを露骨に狙っているです

し、あの結果見てたらネギ先生に問い詰めに行きかねなかつたです」

うっう……………、ネギ先生せんせいにまだ好きな人が出来ていないってこと

がわかつたのはいいんだけど、これだと自信なくしちゃうなあ。

……………元から自信あるわけじゃないんだけど。

で、でも大丈夫！

まだ時間はあるんだし、この旅行を通してもつとネギ先生せんせいと仲良くなればいいんだから……！！

「しかし、千雨。

アスナやコノカ達以外の面々も“恋愛”の点数が下がってるのは

どういふことアルかね？」

「うーん、そうだなあ。

…………… “恋愛” が下がっただけと考えず、“友愛”、“親愛”、“愛情” に置き換わったと考えれば良いんじゃないか？

総合点で見ると極端に下がったりしてないだろ」

「ああ、なるほど。

そういつ考えもあるですね」

「“恋愛” が別の思いへと変わったんか。

女の子というよりも、家族や友達として強く想ってもらったと  
いうことかな？ それだったら悪い気はせえへんけど」

「（木乃香お嬢様の道のりは険しそうだなあ……………とつか、  
木乃香お嬢様はネギ先生の事は本気なのだろうか？）」

「……………というか、拙者への“恋愛”が0点ってどうしていいんですか？  
なるか？

拙者は完璧に“恋愛”対象外ということでご座るか？

……………何で皆目を逸らすのでござんる？

……………別に参戦する気はござらんが、ここまで意識されていない  
というのは癪でござんるな」

……………えーっと、……………ネギ先生は10歳せんせいなんだからしよ  
うがないんじゃないかな？

それか“仲間”として強く想われるようになった……………とか？

第三十七話 京都編？ 逆効果（後書き）

別にのどかがマミったりする予定はありませんのでご安心を。ただのネタです。…………… ホントにネタですよ。いや、ホントホント。

そしてネギは仙人への道を順調に歩んでいるようです。

せつちゃんとの同衾、惚れ薬、はじめてのチュウウなど、麻帆良に来てから心が乱れることがたくさんありましたが、それらさえも乗り越えてしまったのがまずかったです。

“色欲”も“恋愛”も昇華されて、“愛”<sup>アガペー</sup>へと到達しそうです。

それとのどかが原作の修学旅行時期に比べて、大分積極的というかハツチャケてる感じがします。

最近の原作のどかの影響を受けちゃったのか……………。というか最近の原作のどかつて変わりすぎですよねw

明日菜はいくらバカレンジャーを卒業したとはいえ、まだまだ勉強が足りません。

期末テストは範囲が決まっていたので大躍進出来ましたが、さすがに1ヶ月ぐらいで平均的な中学生レベルまで学力を戻すのは無理です。

……本当にマミったりしませんからね。  
大事なことなので3回言いました。

第三十八話 京都編？ 襲撃開始

フェイト・アーウェルンクス

「ホンマにお前の予想通りになったようやな。本山の守りは薄くな  
つとる。」

「やっぱり俺らが逃げてると思って、街中に人数散らしてるようや  
な」

「しょうがないよ。」

「残った僕達2人だけで本山に攻め入るなんて、普通の人なら考え  
もしないだろうからね」

「僕達は今、関西呪術協会本山の屋敷が見える位置まで接近してい  
る。周りが木だらけだから隠れる場所には困らない。」

「屋敷の敷地内には警備が少しいるみたいだが障害にならない程度  
だ。」

「僕がアーウェルンクスとわかっている以上、近衛詠春も生半可な  
追っ手では返り討ちに遭うとわかっているだろうからね。動かせる  
手練の全員を追っ手に回したようだ。」

「おかげで本山の守りは薄い。」

ま、逃げているはずの僕はこんな本山間近にいるわけだけど。確か日本ではこういふことを、“灯台下暗し”って言うんだっただけかな？

「……………小太郎君、体調は大丈夫かい？」

「んー、7割つてとこやな。」

まあ、夜には全快になるで。狗族の治癒力なめんなや」

「そうかい。」

日没は18時頃。……………攻め入るのは21時にしようか。

あちら側も夕食が終わって一息ついていいる頃だから、きつと気が緩んでいるだろう。

……………特にネギ・スプリングフィールド君」

「あー、そやな。警備担当とかはプロやからそんな油断はせえへんと思うけど、ネギは別にプロってわけやないからな。」

夕飯はどうせ一緒に来た姉ちゃん達と食うんやろつから、俺らを待ち構えてるなんてことはないやろ。

……たぶん」

それはそうだろう。

彼は関西呪術協会の人間ではなく客人のようなものだから、本山内部で積極的な防衛体勢をとるなんてことは出来ないだろう。

そんなことしたら、「関西呪術協会は信頼出来ない」と言っているようなものだ。

今の彼の立場ではそのようなことは出来ないだろう。麻帆良の一員として西にきているのだから、関西呪術協会というアウェイでは勝手なことはしないはずだ。

……きつとね。

「それよりどうやって千草姉ちゃん達を助けるんや？」

居場所は座敷牢やろうからわかるけど、気づかれないように千草姉ちゃん達を助け出すのは無理やで。どうすんのや？」

「大丈夫だよ。ちゃんと手は考えてある。

本山に潜り込んだら君は千草さん達の救出に向かってくれ。その際にはこの護符を肌身離さず持つておいてほしい」



「護符？」

「……………何か変わった護符やな。お前の手作りか？  
いったい何する気なんや？」

「なに、大したことじゃないよ」

「ちょっとばかり、ネギ君の真似をしてみるだけだから。」

……疲れたです。

学校の勉強よりも興味深い内容で純粋に楽しむことも出来ました  
が、さすがに朝からぶっ通しで行なわれた関西呪術協会から見た裏  
の世界についての説明は疲れたです。

大まかには麻帆良でネギ先生やエヴァさんから受けた説明と同じ  
でしたが、それでも細かいところは違いましたね。

さて、東西ドチラの道を選ぶかなんですが、やはり西洋魔術にな  
るですね。というか、麻帆良から離れてまで東洋呪術を学ぶ理由が  
ないと言ったところですか。

のどこかも同じく西洋魔術を選ぶようですし、離れ離れになること  
がなくて何よりなのです。

……まあ、のどかはネギ先生と離れたくないというのが  
一番なのでしょうが。

「ふいふ、やっぱり寮の大浴場みたいな南国的なお風呂もいいけど、  
こつこつ木で出来てる和風のお風呂も新鮮で良いわよねえ」

「アハハ。オジサン臭いでえ、アスナ」

「寮のお風呂も凄いけど、ここのお風呂も凄いよね」。

「昨日入ったときはホントにビックリしちゃった」

「さすがは関西呪術協会の本山といったところですか」

「……………いや、こんなところで関西呪術協会の本山であることを感心されても困るのですが」

「確かに良いお湯です。」

「アスナさんの言う通り、この木の芳しい香りもリラックス出来ていいですね。麻帆良は全体的に洋風建築が多いので、こういう和風の建物自体が新鮮です。」

「今日の夕食も美味しかったですし、麻帆良では体験出来ないことを体験出来ました。」

「……………これで京都観光も出来るのなら満点なのですが。」

「残念ながらそれは無理でござるよ、夕映殿」

「そりゃそうだろ。あの“ 幼女誘拐犯 ” がまだ捕まっていんだからな。

アイツラが京都から逃げたことが判明すれば観光も出来るけど、さすがに京都の街中に潜伏されてたら観光なんて暢気出来ないだろ」

「ま、明日の朝までに捕まるのを期待するんだな。

私としてもせっかく京都に来れたので、有名処の甘味を食べてみたいとは思っていたのだが。

………せっかく下調べもして来たというのに」

今日から観光に出ているエヴァさんがうらやましいです。

このまま京都観光出来ずに帰ることになりそうですね。

エヴァさんは夕食も何処かの料亭で食べてくるらしく、20時を過ぎた今でも戻ってきてません。

おかげでネギ先生が私達に付きっ切りになってくれたので、むしろ観光に出てくれてありがとうございます、という感じなのですが。

それにしても、ネギ先生には困ったです。

あそこまで恋愛に興味がないというか、恋愛を理解出来ていなかったとは思ってもいなかったです。

のどかのキスも逆効果になってしまったし、これからどうやってネギ先生を攻めればいいのか？

当初、のどかはこの旅行でネギ先生に告白するつもりだったらしいのですが、朝にアルちゃんから見せてもらった好感度ランキングを見る限り、時期尚早と言わざるをえないです。  
となると、やはりまだ待つしかないですね。

ネギ先生は10歳ですし、中学卒業までは丸一年あります。中学を卒業してからも魔法に関わっていけばネギ先生との関わりも無くならないでしょうから、まだ時間はたくさんあるのです。

焦らずにゆっくりとコトを進めていくほうがいいでしょう。

「ふっふっふ、今日は私がネギの隣で寝るもんね」

「むう、せつかく2日連続でジャンケンに勝てたのに、今日はお父様と一緒に寝なきゃいけないやなんて……………」。

せつちゃん。せつちゃんがウチの代わりにネギ君の隣に寝て、アスナが変なことせんように見張つといてな」

「お任せください、木乃香お嬢様。

……………それとせつかく里帰りなされたのですから、少しは親子の語らいを長となさった方がよろしいかと……………」

「お前らは麻帆良に帰ったらネギ先生といつでも寝れるだろう。旅行中ぐらい自重出来ないのか？」

「というか、その話聞いたら親父さん泣くぞ、近衛」

むう、のどかのライバルはアスナさん、木乃香さん、エヴァさんの3人。

残念ながらのどかは他の人より一歩出遅れている感があります。

家族として同じ部屋で暮らしているアスナさんと木乃香さん。同じ魔法使いとして関係を持っているエヴァさん。

対するのどかのネギ先生との関係は、まだ教師と生徒という関係でしかありません。それにその教師と生徒という関係は、アスナさん達も同じなのです。

このままではアスナさん達にリードを許し続けてしまうことになるですね。早く何とかしないと……。

やはりのどかがネギ先生の“特別”となるには、『バックティオー仮契約』バックティオーぐらいしない駄目なのかもしれません。

しかし、『バックティオー仮契約』するにはネギ先生と親密にならないといけな  
いという問題もあります。

……あれ？

ネギ先生と仲良くなるためには『バクティオー仮契約』が必要で、ネギ先生と『バクティオー仮契約』するにはネギ先生と仲良くならなければいけない？

駄目じゃないですか、それ。

お風呂から上がってネギ先生を探してみると、どうやらネギ先生はお茶を片手に夜桜を見ているようでした。

これはなかなか絵になる光景ですね。

外国人の子供が浴衣をピシッと着て、お茶を片手に夜桜を見上げている。

これでネギ先生の頭上に満月でも浮かんでいれば更に絵になったのでしょうか、残念ながら今日は三日月なのです。

「お帰りなさい、皆さん。夜になると一段と寒いですから、身体を冷やさないでくださいよ。」

残念ですが、このままですと明日は麻帆良に戻らなければいけなくなりそうです。

……… 新学期早々の修学旅行の行き先が京都でしたら、近いうちにまた来たのですがね。

さすがにいくら何でも、修学旅行の日まで「コスモ・エンテレケイア よう、よ誘拐犯」が京都に潜伏し続けているなんてことはないでしょうから

「あー、そういえば修学旅行は結局ハワイになったのよね」

「ハワイはハワイで面白そうアル。

京都ならいつでも来れるだろうから、夏休みにでもまた旅行に来ればいいアルよ」

「それもいいでござるな。

せっかくの旅行が「コスモ・エンテレケイア よう、よ誘拐犯」のせいで台無しになったゆえに、夏休みにでもまたこの面子で旅行に行きたいでござるな」

「アハハ、それもいいですね」

グツジョブです。くーふえさん、楓さん。

これで夏休みに再びネギ先生と旅行することが出来るです。



「木乃香さんは詠春さんのところに？」

「それと刹那さんは僕達と一緒にの部屋で寝るんですよね？」

「あ、はい。」

「いくら護衛とはいえ、さすがに久しぶりの親子水入らずの場面に立ち入る気はありません。」

「長がいらっしゃるなら私が護衛する必要もないでしょうし」

「そうですか。」

「それでは部屋に行きましょうか。皆さんがお風呂から上がったばかりなのに、いつまでも外にいるわけにもいきませんから」

「そうね、部屋に戻ってトランプでもして遊びましょう。」

「それと今日は私がネギの隣で寝るからね」

「……………あ、逆隣には私が寝ます。」

「本来なら、ジャンケンで勝った木乃香お嬢様が寝る予定だったのですけど……………」

「はいはい、どうぞ自由に」

……しかし、ネギ先生は隣に女性が寝ても全然気にしないですね。今もアスナさんに抱きしめられていますけど平気にしているです。

“10歳だから”といわれたらそれまでなのですが……。

それによく考えてみたら、刹那さんものどかのライバルになるのでしょうか？

今は0点になったといえ、ネギ先生が刹那さんに対して“色欲”が1点あったことは事実です。それに寮でも木乃香さんと一緒に、ネギ先生を挟んで川の字で寝ている関係です。

木乃香さんがネギ先生のこと好きなのは確実。

といっても、まだ“男女”としてではなくて“家族”や“姉弟”としての“好き”の方が大きそうですが、それでも恋愛感情を抱いていないというわけじゃないはず。それはキスの件からもわかります。

そして刹那さんは木乃香さんのことをとても大切に思っているです。

もし木乃香さんがネギ先生のことを本気で好きだということになれば、刹那さんは全力で木乃香さんのことを応援するでしょう。

そこで怖いのが、木乃香さんも刹那さんのことをとても大切に思っているということです。刹那さんもネギ先生のこと好きだった

としたら……。

というか、実際に刹那さんのネギ先生を見る目が満更ではなさそうなのが怖いです。

もし木乃香さんがネギ先生のこと为本気で好きで、刹那さんもネギ先生のが好きだということになったら、木乃香さんはいったいどういう反応をするでしょうか？

“刹那さんにネギ先生のことを諦めるようをお願いする”？

“刹那さんのことを考えて、木乃香さんがネギ先生のことを諦める”？

……………それとも、“ネギ先生を2人で分け合いっこする”？

木乃香さんの性格なら、“分け合いっこする”の可能性が一番高いのは私の気のせいなのでしょうか？

そうすれば木乃香さんは、ネギ先生と刹那さんの2人といつまでも一緒にいることが出来るのです。

木乃香さんは独占欲とかはあまりなさそうですし、“皆でいつまでも一緒にいれるならそれでええよ”みたいな考えに落ち着きそうなのです。

刹那さんも木乃香さんのお願ひなら、“分け合いっこ”を受け入れそうなのです。……………むしろ望むところ？

そ、そうだったら、木乃香さん&刹那さんタッグという強敵にのどか1人で立ち向かわなければいけないくなるです。

……………マズイです。ピンチです。勝率は極めて低いと言わざるをえないです。

……………よくよく考えれば、エヴァさんにも茶々丸さんという従者がいるのでした。

茶々丸さんがガイノイドとはいえ、ネギ先生はそんなこと気にしなさそうですし、最近の茶々丸さんは本当に人間のようになっけてきているです。

ネギ先生が来る前に比べたら、それこそ“アナタ誰？”と思うぐらいに……………。

……………こ、こうなったら、私かのどかについてネギ先生と一緒に……………って、何考えているですか、私は!?

私は別にネギ先生のことなんて……………。

「それでは何して遊びます？」

“ポーカー”？ “大富豪”？ “ダウト”？ “七並べ”？

くっ！ いつもニコニコと平然としているネギ先生の笑顔が今は憎いです。

私がどれだけネギ先生の鈍感さで苦労していると思っんですか！？

「昨日やったときはネギの1人勝ちだったわよね。」

「……………魔法なんて使ってないわよね？ 前に見せてくれた幻術とか？」

「いや、私も疑いを持ったので魔眼で監視してたが、ネギ先生が幻術を使っていたということにはなかった。」

「身体強化の魔法で視力を強化していたということもなかったはずだ、が……………正直言って、ネギ先生のことだから何かズルしていたと思っている。」

「……………結局“大富豪”でも平民以下にはなりませんでしたよね。」

「っていうか、“ダウト”で2を最後まで残しておいて、前の人でダウトコールするのやめにするアルよ。」

「それやられたら、簡単に勝たれて面白くないアル。」

「ハツハツハ、バレなきゃイカサマジヤナイデス……………あれ？」

「……………ネギ先生？」

？ おや、ネギ先生？

いきなり部屋の外の方を向いてどうしたのですか？

「……………っ！？」

『システイス・メアエ・バルテース  
契約執行』

時間無制限

ミニストラ・ネギイ  
ネギの従者

全員！！！！」

「ネギ先生、何をつ！？」

くうつ！？ ネ、ネギ先生の魔力が全身に！？

旅行前に何度かこの魔力供給を練習したことがありますけど、こ

のこそばゆい感じは慣れないです。

それ以前にいきなり何を!?

外に何か……………つて、障子の隙間から白い煙が!?

敵襲ですか!? まさか“ユスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”が!?

第三十八話 京都編？ 襲撃開始（後書き）

フェイト襲撃開始です。

さて、<sup>ネギ</sup>悪魔 VS “<sup>コスモ・エンテレケイア</sup>よう” “よ誘拐犯” の対決はいかに？

ちなみにネギはカードゲームのとき別にイカサマしていません。  
単純にカードをガンパイしていただけです。チートの身体能力マ  
ジパネエ。

それと修学旅行はハワイになりましたが、描写することはないと  
思います。

だって作者がハワイ行ったことないんだもん！！！！  
……………というか、パスポートすら作ったことないや。



第三十九話 京都編？ 本山壊滅

犬上小太郎

……………フェイトも無茶しやがんなあ。本山全体を石化させる煙で覆わせるなんて大胆なことしやがって。ネギの真似ってのはこのことかい。

これなら逃げ場もないし、本山にいた連中のほとんどを石に出来るやろうな。

というか、チラホラと石になってる奴らが見えとるし。

さて、暢気にしとる場合やあらへん。早う千草姉ちゃん達を助けてださんと。

本山の外にいる連中が異変に気づいて駆けつけるまで、長く見積もっても30分。どうせ異常があったことは本山の連中が連絡してるやろうし、それまでに2人をつれて逃げ出さんと。

お、ここが座敷牢や！

「助けに来たでっ！」

千草姉ちゃん、月詠！ 無事……………じゃあらへんな、全然」

2人とも座敷牢の中にちゃんといた。まだ処刑とかされてなくて何よりや。

でも生きてるのなら何とかなるはずやけど……………2人とも石になつとるから本当に無事なのかはわからんな。

さすがにフェイトだつて、千草姉ちゃん達だけを石にしないなんて器用なことは出来んだろうから仕方ないか。

詳しいことは石化治療してからじゃないとわからんが、パツと見た感じは怪我也治されてる。

まあええわ。2人を回収できたらこんな所に用はあらへん。

さつさと逃げ出さんとアカンけど……………千草姉ちゃん達が重いなあ。石になつてるからこれも仕方ないんやけど。

俺じゃこの石化治せんし、このまま担いでいくしかあらへん。

フェイトは陽動も兼ねて、遠距離からの魔法ではレジストしてそうな長や、まだ本山に残っているかもしれない腕利き連中を至近距離から石にしてくるみたいやけど、大丈夫やるか？

それとネギは俺の手でブン殴りたいから、出来れば残しておいて欲しいもんやで。

ま、それも千草姉ちゃん達を安全なところまで運んでからの話やな。

とりあえずフェイトとの合流地点まで急ぐか。

桜咲刹那

「全員無事ですね!？」

僕と刹那さんで木乃香さんのところにいきます。皆さんはこの部

屋から出ないでください！

龍宮さん達は明日菜さん達の護衛、それとエヴァさんと麻帆良に連絡を！

『来れ』！<sup>アテアット</sup> 龍宮さん、緊急事態ですので“白紙仮契約カード”<sup>これ</sup>で今だけでいいので契約してください！」

「お試し契約”か。………わかった、事態が事態だ。すまない、余計な手間をかせさせた。ネギ先生が私の周りに結界を張ってくれなければ私も石になっていたな」

「刹那さん、気を抑えて僕の魔力で身体強化してください。『咸卦法』が使えなければ気と魔力が反発します。

皆さんに供給する魔力で対石化耐性をエンチャントしていますので、この煙の中でも石になったりしません」

「わ、わかりました、<sup>シム・イアセ・バルス</sup>『契約執行』！」

まさかネギ先生の言った通り、本当に“<sup>コスモ・エンテレケイア</sup>よう、よ誘拐犯”が攻めてくるとは………。

外を見渡す限り、この石化させる煙が本山内に充満している。私達はネギ先生の魔力供給と結界で石になることは防げたが、本山の術者達は大多数が石化してしまっただろう。

………こんな大胆な手段で攻めてくるなんて。

それにしても『バクティオー仮契約』の機能というのは本当に便利そうだ。ネギ先生の服が浴衣から一瞬でいつもの戦闘用の服に変わった。こういうときは楽で良さそうだなあ。

私がネギ先生と交わしている“お試し契約”では、『バクティオー仮契約』の機能である“衣装の登録”がないから、私は風呂上りの浴衣のままだ。

それでもネギ先生が襲撃を警戒していたために、私もいつでも戦えるようにと下にサラシとスパッツをしていたので着替えなくても戦える。……………それでも動きづらいのは確かだが、今は着替える時間がない。

そんなことより木乃香お嬢様を助けに行かないと！

いくら長でもこの石化させる煙を自らと木乃香お嬢様2人分のレジストをしながら、“コスモ・エンテレケイアよう、よ誘拐犯”を相手にするのは難しいだろう。

あのフェイトがネギ先生やエヴァンジェリンさんと同等の力を持っていたとしたら尚更だ。早く援軍に行かないと。

ネギ先生が皆を守る結界を部屋の中心に張る。これで皆のことは一安心だ。

ここに置いていくのは心配だけど龍宮達がいるなら大丈夫だろうし、何よりこれから行くところの方が危険だ。

「気をつけてください、ネギ先生！」

「木乃香のことをよろしくお願いね！」

「はい、皆さんも気をつけて、勝手な行動をとらないように！」

龍宮さん、長瀬さん、古菲さん、明日菜さん達をよろしくお願  
い  
します！

行きますよ、刹那さん！」

「ネギ先生、長の部屋はコッチです！」

「了解でござる」

「アスナ達のことは任せるアルよ」

私達が泊まっていた部屋から出て、長の部屋まで急ぐ。  
時折、石になった本山の術者がチラホラと目に付く。この様子だ

と、無事な者はほとんどいないだろう。

くっ！ 木乃香お嬢様は絶対に攫わせない！

「コスモ・エンテレケイアよう、よ誘拐犯”なんかに攫わせて、何かの儀式の生贄になんか絶対にさせるもんか！

木乃香お嬢様……………このちゃんは私が守る！！！！

「次はドツチに！？」

「コチラです！

この角を曲がれば長の部屋が……………長っ！？」

「ネ、ネギ君、刹那君……………」

長の部屋まであと一歩といったところで長と廊下で出くわした。長も身体の半分近くが石化しており、その石化もどんどん広がっていつている。

長が1人でここに居られるということは、木乃香お嬢様は……………  
……………。

「も、申し訳ない、2人とも……。本山の守護結界をいささか過信していたようですな。」

平和な時代が長く続いたせいでしょうか。不意を食らってこの様です。

襲撃されるかもしれないことをネギ君から指摘されていたというのに……。情けない」

「長つ！ 木乃香お嬢様はっ!?!」

「アーウェルックスに連れ去られました。」

それほど上級ではないですが、彼は使い魔として悪魔を連れていきます。

それと他にも犬上小太郎が来ているはず。別行動で座敷牢の天ヶ崎千草達を助け出すようなことを言っていました。気をつけて……。

ネギ君なら、サウザントマスター“千の呪文の男”の息子である君なら何とか出来るかもしれませぬ。学園長には……。君のことだからきっと連絡済ですな。

すまない。木乃香を頼みます……。」

「長……。」



「……………?」

ピシピシ、と音を立てて、長が完全に石化してしまった。

不意をつかれたとはいえ、まさか長がこんなにあやすく破られるなんて……………。

ネギ先生が言った通り、あの少年が全力のエヴァンジェリンさんと同等クラスの力を持っているというのは本当らしい。

おのれ、コクモ・エンテレケイア“よう、よ誘拐犯”。

貴様らの思い通りなどさせるものか。木乃香お嬢様は絶対に助け出「パーーーンッ!!!」って、何っ!?

フェイト!? いつの間に私達の背後に!?

クッ! ネギ先生が気づいて迎撃してくれなければ、今ので終わっていた!

「……………今のは高畑・T・タカミチの『居合い拳』?」

そういえば君は高畑・T・タカミチと同じく、麻帆良で教師をしているんだっただね。その関係で『居合い拳』を教わったのかな？

『居合い拳』といい今の僕のことには気づいたといい、やはりどうやら君はただの魔法使いじゃないようだ」

「いや、タカミチが見せてくれたのを自己流で修行しただけだよ。

……………刹那さんは詠春さんを守ってください。石になってる状態で戦闘の巻き添えになったら、治せるものも治せなくなります」

そっだ。ここには石化された長がいる。

石化されているから当然動けないし、石になった身体は戦闘の余波でたやすく壊れてしまうかもしれない。石になってるだけなら後で治せるが、この状態で身体が壊れてしまつと“死”すらありえる。

長だけじゃない。

今の本山には石になった人達が他にも大勢いる以上、本山内で激しい戦闘は出来ない……………。

「それにしてもよく僕に気づいたね。

気配は完璧に殺していたと思っただけど……………」

「詠春さんから得られた情報が多すぎる。

君が悪魔を連れていたことだけならともかく、別行動の犬上小太郎君のことまで言っていたのは変だ。

どう考えても君が故意にバラしたとしか考えられない。

故意にバラしたとなると、君の行動がだいたいの予想出来る。

偽情報で混乱させようとしているか、………もしくは今のよう  
に情報を囷として不意打ちするか」

「………君が本当に10歳なのか疑問に思うね」

………それは私も常々疑問に思っているけど、その10歳らしくないネギ先生のおかげで助かった。

………「コスモ・エンテレケイア よう、よ誘拐犯」でもやっぱりそう思うんだな。

「………木乃香さんは君の悪魔が連れて逃げていて、君はその足止めか。

それに詠春さんに言ったことが正しいなら、犬上小太郎君が座敷牢の2人を回収するための時間稼ぎでもあるのかな」

「まあね。隠してもわかるだろうから言っけどね。

君もわかっているだろう。ここでは派手なことを出来ないということ。人質をとるようで卑怯だけど、君を甘く見る気はない」

「しかし、君だっていつまでもここにいるわけにはいかないだろう。既に麻帆良へは連絡済だ。それに本山の外に出て君達の捜索をしているはずの術者もこの事態に気づく」

「そんなことはわかってるよ。あくまで今の僕の目的は君の足止めだ。」

昨日のことといい今の反応といい、ハッキリ言って関西呪術協会の術者全員よりも君の方が警戒に値する」

「それはそれは。」

高く評価してくれてありがとう」

……駄目だ、動けない。

この状態では少しでもどちらかに動きがあれば、そこから戦闘が始まる。

戦闘が始まったら、私は長を担いで戦場から離れるしかない。

悔しいことに私はフェイトの眼中にないようだ。彼はネギ先生のみを見ている。

実際そうなのだろう。私はネギ先生との修行の際でも、ネギ先生

に全力を出させたことはない。

エヴァンジェリンさんと同等の力を持っているかもしれないフェイトにとって、私は塵に等しく警戒するにも値しないのだろう。

だがそれなら逆に、私が長を連れて逃げても追撃はされないはずだ。もし追撃されたとしても、ネギ先生が何とかしてくれるはず……。

それにうまくいけば、ネギ先生がフェイトを抑えてくれていろうちに私は木乃香お嬢様を連れ去ったという悪魔を追い、木乃香お嬢様を助け出すことも出来る。

今私がしなければならぬことを間違えるな。

私は一人じゃない。私にはネギ先生がいる。

ネギ先生との今までの修行のおかげで、お互いの動きや考えはだいたい把握出来ている。

だからネギ先生が次に取る行動は……。

タァーーンッ！ カキーンッ！

「なっ!？」

「刹那さん!」

「はいっ、ネギ先生!」

この銃声! 龍宮か!?

ネギ先生のことだから、電話線ならぬ念話線を部屋に置いてきた皆と繋げたまま行動していたと思っただけ、やはりその通りだったみたいだ。

龍宮が援軍なら頼もしい。

龍宮の放った銃弾は、フェイトが咄嗟に張った曼荼羅のような障壁に防がれてしまったが、それでもネギ先生しか見ていなかったフェイトにとっては不意打ちだったらしい。

おかげでフェイトに隙が出来た。

その隙について私は長を担いでこの場から離脱し、ネギ先生はフェイトに向かって突撃。

キュキュキュン!

そして『居合い拳』が放たれる独特の音。

対するフェイトは曼荼羅障壁を全開にしてネギ先生の『居合い拳』を受け止めようとするが、

パパパパンツ！

ネギ先生の『居合い拳』はその障壁をすり抜けてフェイトの身体を撃つ！

「……………クツ、馬鹿な？」

僕の障壁をすり抜けて？」

「『居合い拳 弐の拳』ってとこかな。剣けんで出来るなら拳けんでも出来るさ。僕相手に硬いだけの障壁なんか役に立たない！」

『エンシス・エクス・エンシス断罪の剣』！ 神鳴流奥義、『斬岩剣 弐の太刀』！」

詠唱魔法もモバイルスーツも使わないときの、ネギ先生得意の接近時での戦い方。

威力は小さいけど障壁をすり抜け、弾速が速くて数が撃てる『居合い拳 弐の拳』を左手で放って相手の体勢を崩し、攻撃力を重視

した右手の魔法の剣で大技を放つ。  
単純だが、障壁頼りの西洋魔術師には効果的な戦い方だ。

……………私も何度あの戦い方に苦しめられたことやら。  
神鳴流は対妖怪用の大きい野太刀を扱う分、ああいう小回りの効  
く相手は苦手だ。

ザンッ！

ネギ先生の剣がフェイトの身体を真つ二つにする……………が、  
あれは幻像？  
本体じゃないのか！？ いつの間に入れ替わっていた！？

「……………なるほど。これで君の力を少しは知ることが出来た。  
『居合い拳』に加えて『神鳴流』まで使うなんて、やはり君は危険  
だね。  
もう少し戦ってみたいところだけど、これで時間稼ぎも十分だし  
失礼させてもらうよ」

「待てっ！」



パシヤア！

真つ二つになったフェイトが水の塊となって地面に飛び散る。

……………くそつ、逃げられた！

確かに最初から時間稼ぎが目的だったらしいが……………。

「……………大丈夫かい、ネギ先生、刹那」

「大丈夫です。援護ありがとうございます、龍宮さん。  
刹那さん、詠春さんは？」

「……………無事です。  
相変わらず石になってますけど、肉体に欠損などはありません」

「それはよかったな。  
まさか念話線を結界と繋げていたとはな。説明する時間がなかったからしょうがないとはいえ、いきなり結界内にネギ先生の声が響いたときは驚いたよ。」

……さて、これからどうする？」

「決まっている！ 木乃香お嬢様を救い出す！」

「落ち着いてください、刹那さん。そんなに焦らなくても大丈夫です。」

奴らは木乃香さんを攫っていきましたが、そのまま木乃香さんを連れて雲隠れするという事はないはずです。

そうすると体勢を立て直した関西呪術協会と、理事の孫娘が旅行中に攫われた関東魔法協会の2つの組織から追われることになりました。そんな最終的にジリ貧になることはしないでしよう。

……まあ、天ヶ崎千草の記憶を読んだおかげで、だいたい奴らの次の行動は予想出来てます。木乃香さんを攫った理由も。

それに天ヶ崎千草と月詠の衣服に発信機を仕込んだ上に魔力マーカーキングもしておきましたので、居場所もだいたいわかります」

「……そ、そうなんですか」

「……よ、用意周到で何よりだ」

……ッ……ッ……ッコミたい。

フェイトと同じようにッコミたい。

もう気にしないでおくと決めたはずなのに、どうしても気になっ  
てしまう……………」。

「何にせよ、奴らを倒すだけでなく、木乃香さんも無事に救出する  
ということなら僕達3人だけでは手が足りません。

他の人達にも手伝ってもらいましょう」

「そうだな。

しかし、いくら奴らが逃げたからもう危険はないかもしれないと  
いっても、神楽坂達のような非戦闘員を彼女達だけで今の本山に放  
っておくのはマズイ。煙は術者がいなくなったせいかどんどん薄れ  
てきているが……………」。

古か楓のどちらか、いや……………古にはここに残ってもらっ  
て、念のために彼女達の護衛してもらった方がいいと思う」

「……………それは、確かに。

となると私達4人。それともうすぐ応援に来てくれるエヴァンジ  
エリンさんと茶々丸さんの6人で何とかしなければ……………」

敵は4人。

フェイト・アーウェルンクス、犬上小太郎、月詠、天ヶ崎千草。

……………これなら何とかなるか？

強敵のフェイトはネギ先生に抑えてもらい、犬上小太郎は楓。月詠は……私だな。自分の手で木乃香お嬢様を救い出したいとは思っけど、それよりもまずは木乃香お嬢様の救出が最優先だ。神鳴流の相手は私がした方がいいだろう。

天ヶ崎千草は龍宮に任せる。

式神使いの天ヶ崎千草はもしかしたら切り札となりうる式神を用意しているかもしれないが、龍宮なら簡単には負けないだろう。

エヴァンジェリンさん達もそちらに回ってくれば、誰か1人は手が空いて木乃香お嬢様を助け出すことが出来る！

それにしても、こんなことになるなら体面なんか気にしないで、ネギ先生と木乃香お嬢様に“お試し契約”をしてもらっておけばよかったな。

とはいえ、今更うだうだと考えている暇はない。まずは楓と合流して、それから奴らの追撃を……。

「え？ アハハ、やだなあ。」

他の人達って言ったじゃないですか」

……ネギ先生？

あの、ビーム・マグナムを取り出して何やってるんですか？

え？ 何で長に銃口を向けるんです？

え？ え！？ ええええつつつ！？

ちょ、ちょっと待ってください！？

第三十九話 京都編？ 本山壊滅（後書き）

おいッ！

どこ狙ってやがんだよ、敵は“コスモ・エンテレケイアようよ誘拐犯”だぞッ！！

おいッ！！

やめるオオ~~~~ッ！！！！

……以上、せつちゃんの心の叫びでした。

今回、オリジナル技が出ました。

『居合い拳 弐の拳』

そのまんまですね。単純ですが、普通になかなか厄介な技だと思います。

今月から週2更新に戻る……………かな？ 微妙です。

第四十話 京都編？ 追撃

近衛近右衛門

ぬ、ぬおおおおっ………………。  
今日はもう無事に終われると思っていたのに…………。  
瀬流彦君も葛葉先生も帰ってしまったぞい。

よりもよって、  
コスモ・エンテレケイア “完全なる世界” のせいで関西呪術協会の本山  
が壊滅じゃと？

しかも木乃香まで攫われてしまっている。

急いで応援の手配をしないといかな。

こんなことだったらタカミチの出張を何としても延期させておけばよかったの。

麻帆良から直接西洋魔術師を応援に向かわせるのは後々面倒なことになってしまいが、今はそんなことを言っている場合じゃない。  
それと本山以外の関西呪術協会支部の連中にこのことを伝えねばならん。

まったく、年寄りをこんな遅くまで働かせるものじゃないぞい。

「学園長、聞こえますか!？」

「む、ネギ君かの？」

聞こえとるよ。大変なことになってしもつたの。

何か状況に変化は？ あいにく応援が到着するのは早くても明日になつてからじゃぞ！」

「応援については了解しました。

今から“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”の追撃に入ります。

僕らが勝つにしろ負けるにしろ、明日には決着がついていると思います。もし明日になつても僕からの連絡がなかった場合、僕達が負けたと判断なさってください」

「……………相変わらずシベリアじゃのお。」

そういうことは考えたくないが、責任者としてはそう判断せざるをえないじゃろうな。気をつけるんじゃぞ」

「はい！ それとなんです……………」



「どこまでやっていいんですか？」

「……うわぁ……。」

このセリフ、本来なら「10歳の子供が調子に乗るんじゃない！」  
とでも叱らんと駄目じゃが、ネギ君が調子に乗るわけないし。わ  
かってて言ってるのが未恐ろしい……。

いや、未恐ろしいんじゃない、既に恐ろしいの……。  
というか、何でこの子はこんな状況でも冷静なんじゃろ？

「……程々にの。」

細かいところはネギ君を信じて任せるが、くれぐれも程々にの。  
もちろん君達の身の安全を最優先なのは当たり前じゃが、出来れ  
ば人死にや環境破壊は程々に抑えてくれるとありがたい」

「了解です！ それでは失礼します！」

……………ネギ君なら大丈夫じゃな。

というか、まだ無事に終わるとは限らないのに、木乃香やネギ君達の身の心配より後始末に対しての心配の方が大きいのは何故じゃろう？

いかんの。責任者としては最悪な事態になることも考えておかんといかんというのに。

だから、ネギ君が負けたときの……………ネギ君が、負け……………？

……………。

……………。

……………何でネギ君が負けるところを想像できないんじゃないじゃろ？

おかしい。あの子はまだ10歳のはずなのに。

…………… 応援の手配が終わったら、まずは勝ったときの後始末の準備をしておくかの。

とりあえず、手の空いている魔法先生道連れを呼び出さなければ……………。

### ネギ・スプリングフィールド

皆と手早くこれからについての打ち合わせをした後、まず僕がデルタプラスで先行して時間稼ぎをすることに。刹那さん達は着替えとかもありますしね。

それと本山に置いてきた明日菜さん達にもちよつとしたお願いをしておきました。

デルタプラスはさすが“巡航機”。速い速い。

瞬動やMM-D発動時ユニコーンガンダムの瞬間的な速度には負けるとはいえ、変形した状態での飛行は杖で飛ぶより数段速いです。

……あんまりフェイト達は本山から離れていないなあ。  
5分ぐらい前から移動してないし。

天ヶ崎千草にしておいた魔力マーキングは生きていたけど、さっきまでは衣服に仕込んでおいた発信機の反応がありませんでした。本山を壊滅させたフェイトの『石の息吹』ブチキ・ヘトラスで、発信機ごと天ヶ崎千草達も石になってたのかな？

となると、さっきから動いていないのは石化回復するためでしょう。

その結果として発信機の反応も生き返ったんだからコチラにしてもありがたい話です。

………あ、今度は魔力マーキングが消えた。フェイトに気づかれたか。

わかりにくいようにしていたとはいえ、さすがにフェイトは気づくか。

でも発信機はまだ生きてるもんね。

仕込んだ発信機は衣服の生地の中に挟みこめるぐらい薄い奴だから、いくらフェイトでも気づけないはずです。僕と違って電波を計測する魔法なんか開発しているわけないだろうし。

まあ、服を変えられると駄目だけど、今はそんなことしてる場合じゃないですからね。

文明の利器バンザイ。

おー、見えてきた見えてきた。

ちゃんとフェイト達4人全員いますね。それと木乃香さんは……  
……えーっと、バルバリシア………でしたっけ？ フェイトの  
使い魔に捕まってます。

口はテープで塞がれてるみたいですけど、身じろぎしているから  
意識はあるみたいですね。

っていうか、コラ！ スカルミリヨーネ！ ………だっけ？

木乃香さんをお姫様抱っこしてんじやない！ それと木乃香さん  
を持つならお尻じゃなくて、膝の裏で持て！！！！

とんだエロ悪魔ですね、カイナツツオ？ 風情が！

あ、フェイトが僕に気づいた。

ここまで接近すればわかりますか。スラスタ―音が静かな夜空に  
響き渡ってますし。

フェイトがルビカント？に僕の迎撃を命じたみたいですね。迎撃というより、時間稼ぎみたいなもんでしょうが。

天ヶ崎千草が猿の着ぐるみのような式神出して、カルコブリーナ？から木乃香さんを受け取りました。

よし、ファルファレルロ？みたいな人型の悪魔より、ファンシーな着ぐるみの方が木乃香さんも怖がらなくて済むでしょう。

そして木乃香さんを渡して自由になったドラギニヤッツォ？が、空を飛んで僕に向かって突撃してきます。

フン、無駄なことを。

まずは向かってきているグラツファイアカーネ？が持つてる鈍みたいな剣を、モビルスーツの羽根に取り付けているビームライフルで撃って真っ二つに折る。

そして初っ端から武器を失って驚いているリビッコ？の目前で変形を解除。それと同時にビームサーベルを左手に装備して、今度はチリアット？の身体自体を真っ二つにぶった斬る！

それで言い訳つくだろ！ 還つちまえ！

1秒も持たせられなかったアリキーノ？は地面に落ちる間もなく、風に溶けていくように消えていきました。

時間稼ぎが目的ならせめて12体は用意すべきだったのに、たった独りで僕に突っ込まれるとは、……… ああ、なんて可哀想なマラコーダ……… でしたっけ？

マレブランケの悪魔の名前のどれかだったのは覚えてるんですけど。

………ま、いいか。そんなことはどうでも。

さて、僕の目的は時間稼ぎ。刹那さん達が“サブフライトシステム空飛ぶゲタ”で追いついてくるまで、ちよっと時間がかかりますね。

まずは O H A N A S H I からしてみましようか。とりあえずモビルスーツを解除して、彼らの目の前に降り立ちます。

“ 和平の使者なら槍を持たない ” って言いますしね。それに加えて親しげに呼びかけ、話し合いの余地があることをアピールしましょうか。

「フェイト君っ！ あっそびっましょっ！」

「……………」

うわ！？ 心底嫌な顔されました！

“憎悪”とかじゃなくて、本気で“嫌悪”している顔ですよ。  
具体的に言うなら最近のアスナさんが学園長を見る目をしています。

フェイトの売りは、笑っているときでも無表情を貫き通すという  
感情表現の無さでしょう！

それがどうしてこうなった！？

誰なんですか！？

フェイトがここまで感情を表すようになってしまっほどの嫌がらせした人間は！？



……………イヤ、僕なんですけどね。  
少しやりすぎたか。

……………っていうか、何で僕がこんなにイラついているんだろ？  
僕ってこんな風に直接的に嫌がらせするような人間でしたっけ？

何か落ち着かないなあ。ちゃんと気で身体制御してるはずなのに。  
本当の意味での初めての殺し合いのせいで落ち着いていないの  
かな？

「冗談だからそこまで嫌な顔しないでよ」

「……………追ってくるとは思っていたけど、随分と早かったね。  
千草さん達から妙な魔力の反応があったからさっき消したけど、  
それを目印に追ってきたのか」

「まあね。」

“こんなこともあるつかと”と思って、いろいろと用意しておいて良かったよ」「

発信機のことには秘密。わざわざバラす必要ありませんからね。

木乃香さんが僕の姿を確認できてホッとしてますね。良かった良かった。

それとやっぱりさつさとフェイト達を潰しておけばよかったかな？ 木乃香さん達に不安を与えてしまったことに、今更ながら罪悪感が……………。

木乃香さんに声掛けて、少しでも安心させておきますか。

「安心してください、木乃香さん。  
怖いでしょうが、絶対に助け出しますのもう少し待っていてください。」

刹那さん達ももうすぐ来ますし、詠春さんや明日菜さん達も無事ですよ」「

「ん、んん！」

木乃香さんが安心したように頷いてくれました。

皆が無事だということもわかったのが大きいのでしょう。あとせつちゃんが来ることがわかったからでしょうね。

「さて、フェイト並びに天ヶ崎千草さん達一同に勧告します。降伏してください。

確かにフェイトによって本山にいた術者はほとんど石化させられて壊滅状態になってしまいましたが、腕利きの人達はフェイト達捜索のために元から本山から出ていましたので無事です。

その人達には既に連絡済ですので、1時間以内に援軍に駆けつけてくれるでしょう。

麻帆良にも連絡済ですので、明日になったらありったけの西洋魔術師が応援にやってきます」

「……………は？ 本山壊滅っ!？」

小太郎、新入り！ あんたら何やったんや!？」

あれ？ 天ヶ崎千草が驚いている？

……………ああ、そうか。

石化から回復したばかりで、詳しい事情はまだわかっていなかったのか。彼女達は昨日捕まってから一度も目を覚ましてなかったから、状況がわからなくて当然か。

月詠は何だか目の焦点が合っていないような感じがしてるし、まだ本調子じゃないんだろうなあ。

「えーっと、フェイトに小太郎君。  
天ヶ崎さん達に今までのことの説明してもいいよ。コチラとして  
も時間稼ぎになるから助かるし」

「時間稼ぎって……随分とハッキリ言うね。強さ云々よりも君は  
考え方が厄介すぎるな……」。

とはいえ説明しないわけにもいかないか。時間をかけるとネギ君  
の思い通りになるから簡単に説明するけど、

- ・ 本山の参道でネギ君達と相對したのは昨日のこと
- ・ ネギ君の魔法で千草さんと月詠さんは気を失って捕まった
- ・ 僕と小太郎君は逃げる事が出来た
- ・ 今日になって僕達が本山を襲撃、壊滅させた
- ・ そして千草さん達を連れてここまで逃げてきた

以上、わからないことは？」

「え？ ちょい待ち。……うん、昨日のことは覚えとる。

……よし、だいたい状況がわかったわ。……って、あんたら  
無茶しよんなあっ!？」

「状況がわかったのなら結構です。

改めて言いますが、降伏してください。1時間以内に援軍が……  
……お？」

キーーーーーン！ と “空飛ぶゲタ”<sup>サブフライトシステム</sup> の飛行音が聞こえます。  
ようやく刹那さん達が到着したようです。

「木乃香お嬢様あつ、御無事ですかっ!？」

「待たせたね、ネギ先生」

「どつやら戦闘はまだ始まっていないようじゃあるな」

「さあ、木乃香を助けるアルよ!」

「良いタイミングです、皆さん」

これでコッチは僕、刹那さん、龍宮さん、楓さん、古菲さんの5人。

数の上ではこちらが有利です。

「とまあ、援軍がこのように1時間以内に到着します。

あなた達に勝ち目はありませんので、どうか降伏してください」

「貴様らあつ！ 今すぐ木乃香お嬢「刹那さん！ 今は僕が話をしています！」……………も、申しわけありません」

「落ち着け、刹那。ここはネギ先生に任せるんだ。

今のお前よりはうまく進めてくれるさ」

「……………失礼。」

あなた達の勝ち目はないです。ですので降伏してください。

降伏していただけるなら、命だけは助けてもらえるように詠春さんへの口添えはします」

「何言ってるのや！

直訴に失敗した以上、降伏しても処刑されるだけやないか！」

「あ、あ……………。あんな、小太郎。

直訴に失敗したら処刑云々というのはあの坊やが間違ってるだけで、実際にそうなるとは……………」

「……でも千草さん。」

僕と小太郎君で本山を壊滅させてしまったよ」

「……あ。」

もう無理やな。今更降伏しても許してくれるとは思えへん」

「ですよー。」

これで降伏したら命だけは許してあげるなんて言っても信じてくれるわけないですよー。」

……天ヶ崎千草も可哀想に。

あのまま座敷牢にいたら、そこまで重罪にはならなかったのに……。

「となると千草さん。」

計画通りにお姫様の力を借りて何とかするしかないと思うけど？」

「……ク、こうなったら行くところまで行くしかないか。」

小太郎達は悪いけど、あの坊や達の足止めお願いな。ウチはあの場所までお嬢様を連れていくわ」

「（……………それでいいよ、千草さん。とりあえずこれで目的は達成か。まだ少し付き合って、ネギ君の力を詳しく調べるけどね）」

「交渉は決裂、ということでしょうか？」

「そういうことや。」

坊やがどんなに強くたって、あの場所まで行きさえすれば……………。召喚も1時間あれば充分やしな。

……………とはいえ、あの坊やは厄介やな。

ここは一つ、お嬢様のお力をお借りします。小太郎達がウチのお札さんを持ってきてくれて助かったわ。

……………お嬢様、失礼を。

オン キリ キリ ヴァジュラ ウー「猿飛佐助!？」ンブフオ  
ッ!？」

「ど、どうしたんや、千草姉ちゃん!？」

あ、呪文途中で止めちゃった。

どうやら不意打ちだったみたいですね。



というより、何で意味わかるの？ 20年以上前ですよ。  
天ヶ崎千草ってやっぱり結構年食ってるのかな。

考えてみれば、20年前の大戦で両親をなくしたのをキツカケでこんなことを仕出かしたというなら、20年前には既に物心がついていなきや駄目ですよ。

ということは、どんなに小さくても5歳以降、……普通に考えたら10歳くらい？

つまり天ヶ崎千草はもうアラサーということに。

……30歳あの服に露出度？ ……ハッ、ねえわ。

「ち、違うんや！

昔、ああいう風に漫画やアニメで真言を軽々しく扱うのに対しての抗議をしようっちゅー話が出たんや！ そのときのことを聞いたことあるから知ってるだけや！ 別にウチが見てたというワケやあらへん！

………そ、そんな生暖かい目で見んなあつー！…！

「………ア、アカン。

千草姉ちゃんとネギが言ってること全然わからん」

「ネ、ネギ先生。

「いったい何を言ってるんですか？」

「っていうか、それこそ何で外人の坊やが知ってるのやあつ!？」

「千草さん、落ち着いて。」

時間稼ぎを目論んでる彼の手だ。早く千草さんはあの場所へお姫  
「火遁の術とか使わないんですかあ？」「うっさいわっ!!!!!」  
……頼むからネギ君は黙れ」

「……ハアツ、ハアツ、ハアツ！」

……いや、落ち着け。落ち着くんや、ウチ」

やっべ、この人からかうの面白すぎだ。

打てば響く鐘のような人ですね、天ヶ崎千草って。

……あ、木乃香さんの魔力で鬼が大量に召喚された。

150体ぐらい召喚されましたけど、このメンバーなら楽勝です  
ね。

「……交渉決裂ですか。ま、いいです。」

実力で木乃香さんを取り戻すことにしましょう。

フェイトの相手は僕がします。楓さんは小太郎君。龍宮さんと古菲さんは鬼の相手をしてください」

「承知でござる」

「了解。」

弾代は全額学園長持ちだからな。気楽なもんだよ」

「わかったアル。

ネギ坊主との修行の成果、存分に見せ付けるアルよ」

「刹那さんは月詠さんの相手を。10秒で終わらしてください。その後は鬼の始末を手伝い、鬼の掃討完了次第に木乃香さんの奪還へ。僕はフェイトの相手で手一杯になるかもしれませんで、その場合でも僕に構わず木乃香さんを」

「はいっ！……って、10秒ですか！？」

さ、さすがにそれは無理っぽいのですが……」

「大丈夫です。今なら勝てます」

「な、舐めとんのか、坊や！」

その木乃香お嬢様の護衛が神鳴流だからといって、月詠ハンだつて同じ神鳴流や。たやすく勝てるなんて思うのか!？」

月詠ハン！　ここは月詠ハンの力をあの坊やに……………月詠ハン？　さっきからやけに静かやけど……………」

「い、いえ。……………あのー、小太郎はん。

……………ウチのメガネ持ってないですかー？」

「……………え?」

「メ、メガネ!？」

隠れ家にそんなもんあらへんかったぞ!? 座敷牢にも見当たんなかったし……………」

「……………いえ、ウチも隠れ家に用意した記憶はないから仕方ないんですけどー」

……………だから言ったでしょう。今なら勝てます、って。

月詠を治療したのは僕ですよ。治療のときにメガネを没収するなんて簡単なことです。

普段メガネかけてる人がいきなりメガネなくすと、目の焦点とか上手く合わなくなりますよね。

本当に原作知識って便利ですねえ。

原作知識さえあれば、月詠の無力化なんて簡単です。

ま、『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風』のせいで元からフレーム歪んじゃってますから、かけてても戦闘できなかつたでしょうけどね。このメガネ。

「探し物はコレですか？」

「……………それは、もしかして月詠のメガネ？  
ネギ先生が持ってらしたのですか？」

「えー、坊やがウチのメガネ持つとるんですかー？  
返してくだ「ミシイッ！ ミシミシミシイッ！ パリイーン  
ッ！」……………な、何の音ですー！？」

……………脆いなあ、このメガネ。身体強化してないのに簡単に握り  
つぶせましたよ。

せめて超強化プラスチックで作った方が良いんじゃないですかね。  
神鳴流みたく接近戦で戦うなら尚更です。

それと外れないようにゴーグルタイプにするとか……………。

「……………というわけで、もう一度言います、刹那さん。  
10秒で終わらしてください」

「わ、わかりました、ネギ先生」

「言っておきますが、情けは無用です。」

敵は倒せるときに倒してください。あなたが見逃した敵が木乃香さんを、あなた自身を殺すことになるかもしれないよ。」

「……………わかりましたから堪忍してください……………」

いや、別に刹那さんを怒ってるわけじゃないんですよ。  
だからそんな萎縮しないでくださいよ。

「天ヶ崎さんも行っていいですよ。というか行ってください。」

木乃香さんを戦闘に巻き込んでしまうわけにはいきませんからね。  
安全なところに避難してください。

木乃香さんはもうちょっと待っててくださいね。この人達をすぐ  
片付けてから後を追いますので。」

「……………ち、千草姉ちゃん、急ぎいっ!…!…」

「わ、わかったわ!」

あーあ、急いじゃって。

転んで木乃香さんを落とさないでくださいよ。

さて、それでは狐狩りならぬ、猿狩りの開始です。



第四十話 京都編？ 追撃（後書き）

………おかしい。なんか本気でネギが悪魔になってきた。  
せつちゃんにも怯えられてるし。

ただ普通に原作知識を活用してるだけのはずなのに、どうしてこ  
うなった！？ やってること自体はそんなに大袈裟なことじゃない  
のに！？

“月詠のメガネを没収”しておくなんて、別に大袈裟なことじゃ  
ないですよね！？

ちなみに、ネギの「猿飛佐助！？」発言についてわからない人は  
“まんが猿飛佐助”を調べてください。それと千草が鬼の召喚に使  
った呪文を。

ルビガンテの名前については“マレブランケ”ですね。FF4の  
四天王達の元ネタにもなってるやつです。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された + 『<sup>バクティオー</sup>仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」「という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？

コスモ・エンテレケイア “完全なる世界”：コスモ・エンテレケイア “よう、よ誘拐犯”

ルビガンテ：名前忘れられた new!

月詠：メガネ壊された new!

モバイルスーツ紹介（Wikiから抜粋＋個人的感想）

非変形タイプの百式改系列の量産機とは異なり、設計を（デルタ）計画案本来の可変タイプ（デルタガンダム）まで差し戻し、量産を前提に再設計した試作機。

系列で培われたTMS技術をフィードバックさせることにより、初志を実現し完成させた機体。

デルタガンダムと同様にウェイブライダー巡航形態への変形が可能となっている。

この巡航形態では単独での大気圏突入と1G重力下での飛行が可能。メインスラスターが背中にならないMSとしては珍しい設計で、未だ試作品ゆえに編成の組み込みづらい規格外の機体。

カッコいいとは思いますが、出番少ないですね。

これで全部一回はモビルスーツ使ったぞー。

それと今度の日曜はF1観戦しに鈴鹿まで行きますので、日曜日の更新はありません。その代わり月曜日に更新をします。

あと来週の木曜は出張に行くことになりましたので、これまた更新はありません。

第四十一話 京都編？ 猿狩り

近衛木乃香

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………！」

このお姉さんも大変やなあ。

ネギ君の魔法で酷い目に遭ったり石になったりして疲れてるんやろうに山道を全力で走るなんて。

ウチはお猿さんに抱っこされて、自分の足で走ってないから平気やけど。

せつちゃんとなぎ君早く来ないかなあ。

誘拐されたときは怖かったけど、さっきのネギ君達見てたら安心したわ。お父様やアスナ達も無事みたいやし。

ネギ君達なら、ちゃんとウチのこと助け出してくれるって信じられる。

……………むしろさっきのネギ君見てたら、このお姉さん達が可哀想に思えてきてしもった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………」。

お嬢様、何でそんな憐れむような目でウチを見られるんですか？

……………ウプッ！」

走りながら喋るのは辛そうやから止めた方がええと思うけど。

いくらネギ君が治療したとはいえ、一度はネギ君の魔法で瀕死になったのは変わりないんやから。

「こ、これから向かうところには、危な過ぎて今や誰も召喚出来ないという巨躯の大鬼が眠っています。

じゅ、18年ぐらい前に一度暴れたときは、お嬢様のお父上とあの坊やの父親のサウザンドマスターが封じたらしいです。

でもそれも……………お嬢様のお力をお借りすれば制御可能となります。その召喚に成功すれば応援部隊はもちろん、あの坊やだってもの数やありません……………ウプッ！」

……………別にわざわざウチに説明せんでもええのに。

顔色悪くなって吐きそうになってるやん。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………」

そうや、ウプツ！ あの力さえあればいよいよ東に巢食つ西洋魔術師達に一泡吹かせてやるんや！！！！

……………ウプツ！」

……………このお姉さんも本当に大変やなあ。

っていつか、お姉さんのこの状態でその召喚なんか出来るんやろか？

あ、森抜けたみたいや。

大きな池があつて、その真ん中に祭壇みたいのがある。  
そんでその祭壇のところに……………。

「オー、ヤット間抜ケガ来タミタイゼ、御主人」

「ん？ ようやく来たのか。」

随分と待たせおって……………」

エヴァちゃんとチャチャゼロちゃんがおった。

っていうか、他にも本山で見た人がたくさんおるな。何かビキビキと青筋立てて怒ってるけど。

あれ？ 本山の人達って石になったとちゃうん？

「……………え？ な、何で？ 応援が来るまで1時間って……………」

…？  
まだ30分以上は余裕があるはず……………」

「敵ノ言ウコト信ジテンジャネーヨ、コノ阿呆」

「いや、ネギが言うには“5分だろうと55分だろうと1時間以内”というこらしいぞ？」

「自分デモ信ジテナイコト八言ワナイホーガイイゼ、御主人」

「いや、そうなんだがなあ。

それにしても、今回の旅行ではネギの予想が本当に尽く当たるな。ネギの頼みでこの場所に用意しておいた転移陣を本当に使う羽目になるとは思わなかった。

ネギの魔力を使ったとはいえ、本山とここを何往復もして術者を運ぶのは面倒だったぞ。

（ネギの奴、あの女の記憶を読むときに“僕は嘘はつかない”という暗示もかけていたらしいからなあ。ネギの言葉を信じて1人でのこのこと来てみようがないか。

……………それでも一応嘘をついていないというのが嫌らしいが）

……………そういえばネギ君が昨日の夜、エヴァちゃんにそんなこと頼んでたなあ。

「彼女は最悪の場合、リヨウメンスクナノカミという鬼神を呼び出すつもりみたいでした。

“念のため”そのリヨウメンスクナノカミが封じられている祭壇へ直行出来る様に、祭壇近くに転移陣を用意しておいてください」

って。

だからウチらより先にここへ来てたんか。



記憶を読めるって本当に便利やねえ。

「……………ほ、本山の術者達は石になったはずじゃあ……………?」

「ネギのことを“治療術師”と言ったのはお前らだろう。

あんな石化、ネギの手に掛かれれば簡単に治せるらしいぞ」

「いやはや、ネギ君は凄いですね。まだ10歳にもなっていないと  
いうのだ。」

……………石化から回復してみたら、私に銃口を向けていたネギ君が  
いたときは驚きましたかね」

ザンツ! 「ウキヤツ!?!」

「ンンツ!?!」

ビ、ビックリしたあ。

ウチを抱っこしていたお猿さんが急に消えてもって、地面に落ち  
ると思ったら中空でキヤツチされた……………って、お父様や!。

良かった、無事やったんやなあ。

「お、長あつー！？」

「おや？ 何を驚いているんですか、天ヶ崎千草？  
先ほどネギ君が「詠春さんや明日菜さん達も無事ですよ」と、ち  
やんと言っていた筈ですが？」

あー、そういえば一字一句同じこと言ってたな。  
……………絶対ネギ君、わざと言ったんやろうなあ。

「ハハハ、木乃香。怖い思いをさせてしまいましたね。もう大丈夫  
ですよ。  
……………そして天ヶ崎千草。ウチの娘が随分お世話になった  
ようですねえ」

「ア、アハハハハ……………。  
……………終わった。ウチ終わってもうた」

「ああ、天ヶ崎千草。ネギからの伝言があつてな。

「狐狩りはまず狐が巣穴に逃げ込まないように、狐の巣穴を塞ぐことから始めます」

だそうです。

……まあ、相手が悪かったと思って諦める」

お姉さん終了のお知らせ。

……このお姉さんも心底大変やなあ。

「……………それにしても、何で私達までここに来なきゃいけないんだ

」

「しょうがないでしょ、千雨ちゃん。

あの広いお屋敷に私達だけにいるってのは不安だし」

「さすがにそれは怖いですよ」

「申しわけありません。

私ではネギお兄様のように皆様の護衛が出来るわけではないので………」

「アルちゃんは気にしないでいいですよ。

っていうか、いくら石化治癒魔法が入っていたとはいえ、ネギ先生のビーム・マグナムとやらを人様に向けてぶっ放す方が抵抗があったです」

「ハハハ。

お嬢様方のお手伝いに、関西呪術協会の長として感謝いたしますよ」

「オイ、御主人。全然暴レレネージャーカ。

今カラアノ坊主ドモニ混ジツテキテイイカ？」

「私だって転移魔法使っただけで出番が終わりそうなんだ。ワガママ言っな」

あ、アスナ達もおるんやね。

皆無事でよかったわあ。

これであとはせつちゃんやネギ君達が無事に戻ってきてくれれば  
終わりやね。

「あ、木乃香。  
ネギから“白紙仮契約カード”預かってるわよ。もうネギが従者の方にサインしてあるから、木乃香は主人の方にお願いな。  
そのうちネギが連絡してくるから、そのときにネギを召喚してだ  
ってさ」

おお、ウチもようやく出来るんか。  
しかもウチがネギ君のご主人様や。

フェイト・アーウェルンクス

………手強い。

それが僕のネギ君に抱いた感想だった。

「クツ、『万象貫く黒杭の円環』！」

「散弾ではなあっ……！」

硬い。あの4枚羽根の魔力装甲を突破するには『障壁突破 石の  
トラス 槍』クラスが必要みたいだ。

だけど、常に空中をそこそこ速い速度で飛び回っているから、地面から伸ばす『石の槍』が当てられない。かといって、中空から出す『石の槍』では威力が足りない。  
そしてもう一つ厄介なのはあの火力だ。

ビュオオー……！！！！  
ドウルルルルッ……！！！！

また胸の部分からのシャワー状の光線と、4枚羽根の先にあるそれぞれ腕に持たれたガトリングガンから大量の弾が放たれた。

これは僕の障壁なら充分耐えられる攻撃だ。………だけど、

「いいぞ、ベイバー！」

逃げる奴は“召喚された鬼”だ！！ 逃げない奴はよく訓練された“召喚された鬼”だ！！

ホント日本は地獄だぜ！ フウハハハハアーツ ……！！！！」

「又ワアーーーーッ！」

「た、助けて、オヤビーンっ！」

召喚された鬼にとっては致命的な攻撃だ。

一発一発の攻撃力は高くはないとはいえ、ああまで大量に浴びせられてしまうと、そこそ強い鬼でないと耐えることが出来ない。

鬼の数も150体はいたのが、もう30体ぐらいにまで減らされている。戦闘が始まってからまだ10分も経っていないのに。

何よりも厄介なのは彼の戦い方だ。

僕を相手にしつつ、流れ弾で確実に鬼を減らすように戦っている。僕自身相手には負けないように戦っているだけとしか思えない。

まずは鬼を掃討し、自分の仲間達に千草さんを追わせるつもりだろう。

マズイ。これ以上鬼を減らされたら、あっという間に押し切られて鬼が全滅する。そして彼の仲間達が千草さんの後を追うだろう。

幸いどれも召喚された中でも別格の力を持つ鬼がまだ残っている。

……あの弾幕の嵐を生き残ったんだから当然だけどね。

僕がネギ君さえ完璧に抑えれば、ネギ君の仲間相手でもリヨウメンスクナノカミ召喚までの時間稼ぎぐらいは出来る筈………なんだけど。

僕が接近戦で攻撃している間はネギ君もあの大火力は発揮出来ない。

だから僕がネギ君に接近戦を挑んで彼の注意を引きつけようとするんだけど、それも両腕に持った魔力剣2本を使った神鳴流で防がれてしまう。この防御が崩せない。

………というか、『式の太刀』が厄介すぎる。

僕にとってここでの戦いはあくまでオマケに過ぎないので、こんなところで万が一にも致命傷を負うわけにはいかない。

そのためにネギ君に届かせるための後一步を踏み込めないでいる。

しかも大火力は発揮できないとはいえ、

「ファンネルっ！！！」

「ええいつ！ またこの小つこいのが！？」

「ちょこまかと鬱陶し「隙アリいつ！！！」「グハアツ！？ や、やるやないかつ、神鳴流の嬢ちゃん！」

「いや、楽だね。この仕事」



「っていつか、ネギ坊主の豹変振りは突っ込まなくていいアルか？」

「え？ 銃を乱射するときってこのセリフを言わなきゃ駄目なんじゃないんですか？」

映画でこういうシーン見たんですけど……」

「ネ、ネギ先生えーっ！？」

子供が変な映画見ちゃ駄目ですよっ！！！！ っっていうかどんな映画なんですか、それはっ！？」

あの“ファンネル”と呼んでいるものが彼女達のフォローにまわり、着実に鬼達を減らしていく。

かといって僕が彼女達を襲おうかという素振りを少しでも見せると、ネギ君は僕に猛然と攻撃を仕掛けてくる。

……………マズイ、手詰まりだ。ネギ君を抑えきれない。

「強いなっ！ 糸目の姉ちゃん！」

「お主もなかなか見所あるでござる。  
まだ何か力を隠しているようでござるが、ネギ坊主が怖いので本  
気を出す前に倒させていたたくでござるよ」

「へっ！ 女に本気が出せるかよおっ！！！

（ってか、マジで変身する暇すら与えてくれんわ、この姉ちゃん）

小太郎君も完璧に抑えられてる。

月詠さん？ 開始2秒で落とされたよ。

しかもネギ君の手によつてね。

開始直後、ネギ君はいきなりあの魔力装甲を纏ったと思ったら、  
胸の部分からのシャワー状の光線と6つのガトリングガンを僕達に  
向かって発射した。

あれで鬼が30体は喰われたよ。月詠さんもそれでノックアウト。  
ちなみに今は『凍てつく氷枢<sup>ゲリドゥスカブルス</sup>』で氷の中に封じられている。ネギ  
君は氷系魔法まで使えるみたいだね。

そのときの桜咲刹那のしよぼくれた顔は同情に値したよ。  
気を取り直して鬼退治で鬱憤を晴らしているみたいだけど。

しかし参ったね。

ここまでワンサイドゲームになるとは思わなかった。

ここは一つ、仕切り直しするしかないか。このままではあと5分

も持たないだろう。

そうと決めたら空へ大きく跳んで、ネギ君から距離をとる。

「小太郎君！ 月詠さんを連れて離れるんだ！

ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト！」

「むっ！？ 大きい魔法が来ます！ 僕を中心に円陣防御を……！

『解除』！ ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

ネギ君が僕の意図に気づいたのか、魔力装甲を解除して仲間達を集合させる。小太郎君はその隙に離脱。

残った鬼がネギ君達に攻撃を仕掛けるが、ネギ君を中心とした円陣を組んだ彼の仲間達がそれを防ぐ。

魔力装甲を解除したのは、おそらく解除しなければ詠唱魔法が使えないということなのだろう。月詠さんを凍らせるときもそうだった。

死人を出すわけにもいかないけど、おそらくネギ君によって防がれるだろうから全力で行く。

……… 鬼も巻き添えになりそうだけど、還るだけだから気にしないでおこう。それに手加減できる状況じゃないし。

「おお 地の底に眠る死者の宮殿よ  
我らの下に姿を現せ」

「契約により我に従え高殿の王！  
来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！  
百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

ネギ君の詠唱が早い。僕より後に唱え始めたのに同時に詠唱が終  
わった。

しかも雷系最大呪文の『キラアキブル・アストラペー千の雷』？

『ホ・モノリキオカンハイドゥ冥府の石柱』はその特性上、巨岩を呼び出してから攻撃するこ  
とになるので『キラアキブル・アストラペー千の雷』より更に一呼吸攻撃が遅れる。  
間に合うか？

「『ホ・モノリキオカンハイドゥ冥府の石柱』！」

「左腕固定！ 『キラアキブル・アストラペー千の雷』！」  
「右腕固定！ 『エンシス・エクスエクエンス断罪の剣』！」

術式統合！  
『エンシス・フルゲラリース雷の剣』！！！！」

？  
『キリアキブル・アストラペー千の雷』を直接放たずに雷の剣へ変化させた？  
いったい何をする気だ？

「並びに神鳴流決戦奥義、『真・雷光剣』！ 相乗！！！！」

右腕の『キリアキブル・アストラペー千の雷』で作った剣に、気が注ぎ込まれていく。  
普通なら気と魔力は反発するのに、まるで『咸卦法』のように2  
つが融合していく。ネギ君は『咸卦法』まで使えるのか？

……あれはマズイ。とてつもなく嫌な予感がする。

緊急転移で離脱しよう。  
『ホ・モノリキオンハイドゥ冥府の石柱』は呼び出した。あとは放っておいても勝手に  
落ちてくれるから問題はない。

「『闇の咸卦技法 神鳴ノ剣』  
かみなりのつるぎ

龍宮マナ

圧巻。

まさにその一言に尽きる。

先ほどまで空に浮かんでいたいくつもの巨大な岩が、ネギ先生の  
一振りによって塵と消えた。

空に向かって放たれたから良かったものの、もし地上に向けて放  
たれたとしたら、想像したくないぐらいの破壊を生み出すだろう。

……… 10歳の身空でよくぞここまで。

何がこの子をこんなにも強くしたのだろうか？

「……………逃げられました。」

『かみなりのつるぎ神鳴ノ剣』が当たる前に転移魔法で逃げたようです」

「……………そうかい、残念だね」

「私達も鬼を全て片付けたアルよ」

「ネギ先生、あんな大技を放って疲れてるでしょうが、今すぐ木乃香お嬢様の奪還へ」

「大丈夫です。さっきエヴァさんからの念話がありまして、木乃香さんは無事に助け出されたそうです。  
このこと天ヶ崎千草がリョウメンスクナノカミ封印の祭壇へ来たらしいですよ」

それは何よりだ。

今回はネギ先生のおかげで楽が出来て良かったな。

「すまないでござる。」

犬上小太郎とやらには逃げられたでござるよ」

「問題ないですよ。どうせ天ヶ崎千草のところ、祭壇で待っていてあげばやってくるでしょうからね。」

「……皆さん大きな怪我はないですよね？」

「今から木乃香さんに僕を祭壇へ召喚してもらい、その後に僕が皆さんを召喚します。祭壇の状況を少し調べてから召喚しますので、2〜3分ぐらいそのまま休んでいてください。」

「フェイトが戻ってくることはないと思いますが、一応は油断しないでくださいよ。」

「はい、ネギ先生」

「了解。召喚する前に念話よろしく」

「では少しの間、待っていてください。」

「では木乃香さん、お願いします。……え？ 呪文？」

「エウオケム・テミニステル・コノカ 召喚 木乃香の従者 ネギ・スプリングフィールド』と唱えてくれれば。……いや『エーけむ・てーしようかん』じゃなくて『エウオケム・デー 召喚』です。」

「……え？ ……あの、エヴァさんとかアルちゃんここにいますよね？ ええ、はい。……はい、それではよろし

「……セリフの途中で消えちゃった。」

「この旅行で東西どちらを選ぶか決めるまでは教えられなかったとはいえ、こんなことになるなら近衛に呪文を教えておけばよかったな。」



あくまで結果論でしかないが。

それにしても、戦闘のときの魔法使いとしてのネギ先生と、2 - Aの生徒を相手にしているときの教師としてのネギ先生。

どちらも同じネギ先生なんだが、やはりどうもチグハグな感じだな。

「……………ネギ先生は凄いな」

「そっぴえは龍宮は別荘に来ても勉強会に参加するだけで、修行には参加してないから知らなかったのか。

……………私達もあそこまでの大技を見るのは初めてだけどな」

「……………本物の戦場をくぐり抜けてる真名に聞きたいアルけど、西洋魔術師って皆ネギ坊主みたいなの力？」

「いやいやいや！ それは違うぞ、古！ ………………つて、そうか。古はこちらに来てからそんなに経ってないし、近くにいるのがネギ先生だけだからな……………」。

私も今までいろんな強者を見てきたが、ネギ先生はその中でも5本の指……………いや、もしかしたら一番強いかもしれないな」

「やっぱりそうアルか。  
西洋魔術師が皆ネギ坊主みたいだったら自信なくすアルヨ」

普段からああいうバグキャラ見てたら、古に悪影響が出るんじゃないかなだろうか？

「ネギ先生のおかげで木乃香お嬢様が無事に助かったのはいいけど、それにしてもネギ先生には困ったものだ。」

何か最近、ネギ先生はワザとやってるんじゃないかと思えてきた

「……………」

「ネギ坊主はいつもワザとだと思っでござるよ。」

……………いや、言いたいことはわかるでござるが」

「私もわかる。」

しかし、こつという言い方はアレなんだが、ネギ先生に嘘をつく頭があるとは思えないな」

別にネギ先生の頭が悪いと思っでいるわけではない。  
むしろ天才と言っでいいだろう。……………アホの子でもある  
が。

……何とか、普通の人間ならば“嘘をつかなければ切り抜  
けられない状況”になったとしても、ネギ先生なら別に“嘘をつか  
なくてもその状況を切り抜けられる”のだろう。

つまりネギ先生は“嘘をつく必要がない”。

だからそれ故に、ネギ先生は“嘘をつくという発想がなくなった  
”のように思える。

前々から思っていたが、ネギ先生はアンバランスだ。

間違ったことをしているわけでもないし言っているわけでもない。  
だがそれでも何かが違うとしたか思えないことをする。

確か以前、何かの本で、

“天才と一般人とでトータルすれば能力量に差は無いが、天才の場  
合は一般人であれば誰でも出来ることが出来ない反面、一般人には  
困難なことをた易くこなしてしまう”

というような記述を読んだ記憶がある。

ネギ先生にも当てはまりそうだな。“好感度ランキング”なんか  
見てもそうだったし……。

“学園祭”に関係してくるので、障害になりうるネギ先生のこと  
は超が更に詳しく調査した。

メルディアナでも似たような感じだったらしいな。

メルディアナで生活していたときのことの調査でも、“チグハグ  
”や“アンバランス”のような言葉が報告書に多く載っていたよう

に感じられた。

……メルディアナの人達も可哀想に。

あの『神鳴ノ剣』かみなりのつるぎとやらを放ったとき、もしフェイトに逃げられていなかったとしたら、フェイトを殺していたことになるのをネギ先生は気づいているのだろうか？

気づいていなかった？ その場合、もしフェイトを殺していたとしたら、ネギ先生はどういう反応をとるのだろうか？

それとも気づいていた？ その場合、ネギ先生は“人を殺す”ということをどのように捉えているのだろうか？

……心配だな、あの子の将来が。

今はその天才性で何かコトが起きても凌いでいるが、もし自分の手に負えない状況に陥ったらどうするのだろうか？

『皆さん、聞こえますか？

今から皆さんを召喚しますけど、大丈夫ですか？』

「はい、全員大丈夫です」

ネギ先生からの念話か。  
フウ、もう少しでこの仕事も終わりだな。

そういえば超の奴、“学園祭”のときはどうするつもりだ？  
正直、私ではネギ先生に勝てないぞ。

一応今までの戦闘の映像は出来る限り撮影しておいたが、映像を見たとき超の反応が面白いことになりそうだな。

……………というより、もしかして“学園祭”の時には私がネギ先生の相手をしなければならぬのか？

……………。

……………。

……………超の仲間から抜けたら駄目かな？

第四十一話 京都編？ 猿狩り（後書き）

気分は『エクスカリバー約束された勝利の剣』！！！！  
魔法世界人は魔法世界にいれば良かったんだよ！

またオリジナル技が出ました。  
うん、中二病が撥られる。

…………… ルビあってますかね？ 『エンシス・フルグラリス雷の剣』  
“エンシス” “剣” はあっているはずですが、“雷の” “フルグラリス” が微妙です。  
いや、コレに近い感じの名前なのは確実なのですが……………。

『ヤクラーティオー・フルゴリスルゴリス雷の投擲』の“雷”とか、『ヨウイス・テンベスタース・フルカザエヌス雷の暴風』の“雷”とかいろいろありますよね。  
今回は『サギタ・マギカ魔法の射手 雷の一矢』の“雷”を使いましたが、ハッキリ言っただけです。いくら調べても、正しいのがわかりませんでした。

一番これが近いかな？ と思って使っただけなので、もし正しい使い方がわかる人がいたら教えてください。

あと千草終了のお知らせ。  
ヘブンス・ドアイ“天国への扉”には“記憶を読む”以外のもう一つの能力があり

ます。“記憶を書き込むことによって相手の行動・記憶を制御することが出来る”っていう能力が。

記憶を読めるのは便利ですけど、記憶を書き込めるのはもっと便利ですよ。ウン。

今回の旅行で原作知識からネギのしたことは

“石化治療魔法のマグナム弾を予め大量作成”

“月詠のメガネ没収・破壊”

“リヨウメンスクナノカミが封印されている大岩近くの祭壇に転移陣用意”

“天ヶ崎千草の記憶の読み込み・書き込み”

……………おかしいなあ。

一個一個は大袈裟なことじゃないのに、全部合わさると本気で悪魔の所業になったのは何ででしょう？

それとビーム・マグナムは“お試し契約”を結んでたりしていない人でも、引き金を引けば誰でも使えます。

あとフェイトは『石の槍』ド・リュウ・ストラムスを、京都でエヴァの腹をぶっ刺したときみたいに地面から出してる場面と、単行本25巻にてネギと戦っているときに中空から出してる場面があります。

地面から出さなくとも中空から出せるならそっちの方が使い勝手が良さそうですが、わざわざ地面から出してるとなると理由があると思われれます。

そのためこの作品では地面から出す方が威力が高い、という設定です。

そして拡散メガ粒子砲の擬音が困りました。

一応は

「ビュオオーーン!!!!」    〃    拡散メガ粒子砲

「ドウルルルルツ!!!!」    〃    ビーム・ガトリングガン

のつもりなのですが、DVDで何度聞いても言葉で表現しづらかつたです。

「ビュオオーーン!!!!」じゃなくて「ビュフォーーン!!!」?  
「?」それとも「ビュホオーーン!!!!」?    いや「デユフ  
オーーン!!!!」か?

.....書いてて更にわけがわからなくなってきた。orz

一応のオリジナル技解説。

これらはいくまでこの作品のオリジナルです。ご了承ください。



『居合い拳 弐の拳』

神鳴流の『弐の太刀』と『居合い拳』を組み合わせた技。障壁をすり抜けてボコれる。

こつ螺<sup>ネジ</sup>子りこむように打つべし！ 打つべし！ 打つべし！

『雷の剣』  
エンシス・フルグラリス

その名の通り、雷系魔法で構成された剣。

別に『千の雷』でなくても構成可能。  
キラキブル・アストラペー

構成魔法にもよるが、中級魔法の『白き雷』  
フルグラナイオー・アルヒカンスだけで構成しても、魔法の射手』を利用しているビームサーベルより威力は数段上。  
サキタ・マキガ

今回は『断罪の剣』と“術式統合”  
エンシス・エクセクエンズをして更に威力を上昇させているが、威力が下がっていいなら『断罪の剣』  
エンシス・エクセクエンズを使わずに“形状変

化”のみで可能。

今回の『雷の剣』  
エンシス・フルグラリスは気体に相転移どころか、物質の第4の状態である“プラズマ”に相転移させる威力を持つ、が………物理学的に正しいかは突っ込まないでください。いや、マジで。

『神鳴ノ剣』  
かみなりのつるぎ

『雷鳴剣』や『雷光剣』などの雷系神鳴流奥義と、『千の雷』  
キラキブル・アストラペーや

『雷の暴風』などの雷系西洋魔術を組み合わせた技。  
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス

気と魔法の相乗効果により、爆発的な威力を得られる。

ちなみに“第九話 あなたと合体したい”で

> 「未完成というか、もう少し別のものにも発展させられそうな感じなだけで。」

> 一応それ自体は完成しています」

とネギが言っていた、『闇の咸卦法』を別のものに発展させたものがこれら、『闇の咸卦技法』のこと。

一応は伏線張っていましたよ。エヴァの別荘での修行で完成済みです。

『闇の咸卦技法』

『闇の咸卦法』は『マギア・エレベア闇の魔法』と同じく、早い話がただのドーピング。

しかし『闇の咸卦技法』は“気”と“魔法”を融合させたものを“放出”する技法の総称。

“ダイの大冒険”で例えると、ドラゴニックオーラ“竜闘気”とドルオーラ“竜闘気砲呪文”の違い………のようなものですかね？

『ギガストラッシュ』の方が適当かもしれませんが、とりあえずそんな感じですよ。

最初は『闇の神鳴流』とかで考えていましたが、別に『神鳴流』に限定せず使えるだろうから『闇の咸卦技法』と相成りました。

第四十二話 京都編？ 虚空を駆ける

長谷川千雨

「ああ……………大きな火が点いたり消えたりしている。ハハッ、大きい……………大文字焼きか？  
違う、違うな。大文字焼きはもっとところ……………“大”って文字やもんな。

……………暑っ苦しいわ、こっ。……………出られないんやろか。おっい、出してくれへんか！ ねえ？」

「……………詠春さん。」

いくら木乃香さんを誘拐した一味の主犯といっても、少しやりすぎじゃないですか？」

「私ですかっ！？」

「いや、お前のせいだから。」

「確かにトドメを刺したのは近衛詠春かも知れないが、明らかにお前キが一番の原因だから」

ネギーン、とワケがわからないよ的な顔をするネギ先生。

「つか、あの天ヶ崎千草って人マジで大丈夫か？ 目が虚ろだぞ。捕まえたときはビキビキ青筋立てて睨んでいた関西呪術協会の人達も、何だかどんどん憐れみの表情になってきてるし……」。

「ま、そんなことはどうでもいいです。それよりフェイト達迎撃の準備をしましょうよ。彼女は終わったら『咸卦治癒マイティガード』で治しますから5。」

茶々丸さん、フェイト達の動きはどうですか？」

「先ほどとペースは変わりません。慎重にこちらに向かってきます。」

「このペースですと、接触まであと5分ほどです」

「了解です。」

「詠春さん、陣と召喚のお札の準備は？」

「陣は既に構築済みです。  
召喚のお札はこれになります。」

「……………しかし、魔力は大丈夫なのですか、ネギ君？」

「先ほどの空に向かって放った一撃はここからでも見えましたが、魔力を結構使ったのでは？ 本山でも生徒の皆さんにずっと魔力供給していたらしいですし……………」

「今までに消費したのは1割ちょっとです。別段問題ありません。  
それでは術者の皆さん、召喚をお願いします」

「……………え？ 1割？」

近衛の親父さんから渡された数枚のお札を持って、祭壇に続く橋の中心辺りに立つネギ先生。

ちなみに周りの湖はネギ先生の魔法によって凍らされていて、湖上に立つことが出来る状態になっている。

「……………凍った湖ってのは変な光景だな。」

北国のワカサギ釣りとかの光景をTVで見たことあるけど、まさか京都で同じものを見ることになるとは……………。

「コッコッオン キリ キリ ヴァジュラ ウーン ハッタ」「」

関西呪術協会の人達が呪文を唱えたとしたら、凍った湖の上に化け物達が大勢現れた。ネギ先生の魔力を使って呼び出したらしい。うわ、すげえ……。何体いるんだ？ 私達がいる祭壇の周りをグルッと囲むぐらい出てきたぞ。

ちなみに私達は祭壇の上において、その周りに龍宮や桜咲みみたいな私達の中でも戦闘出来る奴らがいる。そして一段下がったところに関西呪術協会の人達が30人ぐらいで囲んでいて、私達を守ってくれるらしい。

そこで化け物達が更にその周りの湖の上に出てきたわけだ。

残った敵はあと3人なんだろ。しかも1人は戦闘不能。要するに実質2人。

対するコッチは、ネギ先生や桜咲達で7人。関西呪術協会の人達が約30人。化け物が数百。

……………コッチが数百で向こうは2か。  
明らかにイジメレベルの戦いだよな、コレ。

「んー、500ちよつと、というところですか。」

鬼の皆さんの中で空を飛べない人達はその場所で壁役になってください。烏族みたいに空飛べたり遠距離武器持つてる人達は、今から来る人達を逃がさないようにしてくださいねー」

「鬼遣い荒いのお。」

さつきボコられて還ったばかりだったちゅーのに、また召喚するんか……………って、さつきワシらをボコった坊ちゃん達やないか？  
今度は坊ちゃんが召喚主かいな」

「うわあ、先ほど某はあの坊主に鴨撃ちにされたんだが……………」

「いや、あんた鴨やなくて烏やる」

「ワシなんか開始2秒で終わったで……………」

「あの坊ちゃん、絶対ワシらより鬼や」

「まー、喚ばれたからには命令には従うけどなー」

「っーかこの坊主。」

ワシら全部をたった1人で呼んだんか、凄いのお」

……………なんか、想像してたのより人間臭い化け物達だな。

「ネギ君、魔力の方は……………」

「大丈夫ですって。」

木乃香さん、お願いします！」

「わかったでー。」

『シム・イブセ・バルス ミニステル・コノカ  
契約執行 木乃香の従者 ネギ・スプリングフィールド』！」

「はい、それでは魔力を頂きますね。」

『マジックドレイン  
魔力吸収』開始。

……………。

……………。

…………… うん。もういいですよ、木乃香さん！

木乃香さんの魔力の半分ぐらい頂きました。僕にとっての20%ぐらいですね。

さっきの召喚でも少し使いましたが、これで魔力をほぼ回復出来ましたよ」

「…………… え？ じゃあ、この鬼の召喚に使ったのはネギ君の全魔力



の1割ぐらいなんですか？」

「そのぐらいですねえ」

「「「「「」」」」」」

関西呪術協会の人達、もう全員諦めた顔をしているぞ。私達が魔法のことを知った日に見た麻帆良の先生達の顔と一緒にだ。

ネギ先生は麻帆良でも京都でも変人ということなんだな、やっぱり。

「木乃香お嬢様、大丈夫ですか？」

「平気やよ、せつちゃん。」

ちよつと疲れた気がするけど大したことないわ。今日の夜、ネギ君と一緒に寝てくれればスッキリ元通りになるぐらいやね」

「ちよつと待って木乃香。今日はお父さんと寝るんでしょ!？」

「……………つて、刹那さんが場所を譲るのよね。本当は木乃香が隣で寝るはずだったんだから、それならいいか」

「えー、誘拐されて怖い目にあったんやから、せつちゃんも一緒に寝てほしいわー」

お前ら少し自重しろ。

「……………あ、ネギ先生。来ます」

「了解。この湖の周りに結界がありますので、僕達が待ち受けていることは気づかれていないはずですよ。

では、改めてこれからのことを言います。

関西呪術協会の方々には僕の生徒がいる祭壇の防衛、並びに天ヶ崎千草の確保をお願いします。

エヴァさんは、もしここに来るのがフェイト、小太郎、月詠の3人だったら、明日菜さん達を連れて本山に避難してください。

しかし、もしもフェイトが来ないで、小太郎、月詠の2人だけが来たのだったりしたら、本山に行かずここで待っていてください。

刹那さんは木乃香さんの護衛優先。

龍宮さん達は明日菜さん達の護衛を。

鬼の皆さんはさっきも言った通り、空を飛べない人達はその場所

で壁役。烏族みたいに空飛べたり遠距離武器持つてる人達は、今から来る人達を逃がさないように行動してください。

彼らを迎え撃つのは僕がします。以上です」

「……………別に本山に避難しなくてもいいと思うがな。ろくな戦闘にもならんだろう。」

確かにフェイトというのがここに来なかったとするなら、本山に避難させるのは逆に危険かもしれないが……………」

「オレニモ参加させテクレヨ」

「これ以上ネギ君のお世話になるのは関西呪術協会としても心苦しいのですが、一番犠牲を出さないのは確かにこのやり方なのでしょうね。」

（……………さも当然のようにネギ君が仕切っていますが口は出せませんね。

ネギ君がいなかったら私達は全滅していたのですから、今更私達が仕切るなんてのはもう無理です）」

あー、私達もここに来るようにしたのはそういうことか。

確かにもし私達が本山にいたままで、フェイトって奴がこれから本山にまた来て私達のことを人質にしたりしたら、今までのことが引っ繰り返るもんな。

それと近衛の親父さん。別に気にしないでいいと思うぞ。  
というか、気にしないほうがいいと思うぞ、ネギ先生のこととは。

私としても、確かにこんな戦闘が起きそうなところにいるのは不安だけど、ネギ先生が近くにいるならここにいても大丈夫だろうしな。

逆にネギ先生と離れてる方が不安になる。

「……………光が……………広がっていく」

でも、天ヶ崎<sup>この人</sup>千草の側にはこれ以上いたくねえよ。  
それこそ天ヶ崎<sup>この人</sup>千草を本山に運んでくれよ。虚空を見つめながら  
笑うなんて怖すぎなんだよ……………。

「着いたでっ！　って、何やこの鬼どもは！？」

「千草さんが護衛のためにまたお姫様の力で呼んだのかな？  
しかし湖が凍っているのは……………」

「小太郎！　新入り！　来たんか！？」

うえっ！？　天ヶ崎千草この人の声！？

天ヶ崎千草は私の目の前でブツブツ呟いて……………って、ネギ先生か。

そういえば昨日のパトカーのサイレン音もネギ先生が出してたんだっただな。

「音というのは所詮はただの空気の振動です。  
それだったら風魔法の応用をすれば、サイレン音や声真似なんか簡単ですよ」

とか言っつて、私達の声真似も実演してみせたし……………。

遂に“コスモ・エンテレケイアよ誘拐犯”が来たのか。

私らからは鬼が壁になつて邪魔して見えないけど。……………  
それつて要するに、奴らからも私達のことは見えないつてコトだよな。

「2人だけか!？」

月詠ハンはどうしたんや!？」

「ここにいるでー! ………………ネギのせいで凍つとるけど。

つつつか、背負つてるから背中が冷たいわ」

「こつ言つてはなんだけど、今の彼女じゃ足手まといだ。

だけど今の状態なら、ネギ君達にも無視されるぐらい無害の存在になつてるからね。月詠さんの安全のためにも今のままの方がいいだろつ」

ネギ先生は何やったんだーっ!？」

戦闘不能つてコトは聞いていたけど、凍つてるつて何なんだよっ

!？」

生きてんのか、それ!？」

「状況が良く掴めんけど、来たんならウチの近くで護衛をしてや！  
一番外の守りは鬼達に任せとけばええ！」

「おう！ 今いくで！」

「……………月詠は木乃香の姉ちゃんの近くに置いとくか？」

「いいんじゃないかな。それなら安全だろう。ネギ君もお姫様の近くでは無茶はしないはずだ。」

「急ぐつ、きつとネギ君ならあと数分もしないうちにやってくる」

「……………もういるよ。」

「ああ、もう！ 逃げろ！ お前ら敵だけど逃げろ！」

「近衛を誘拐したり幼女を誘拐したりする極悪犯らしいけど超逃げる！！！」

「敵とかそういう以前に、ここまできたら同情しか浮かばねーよ！」

「！！」

ネギ・スプリングフィールド

ギシッ、ギシッ、ギシッ……………。

んー、もうちょい右かな？

「しかしまいったわ。アイツラ強すぎや。

ネギだけでもアカンのに、あの姉ちゃん達も凄腕やで」

「うん。こうなったら、千草さんの召喚に賭けるしかないね。

(……………何かズルズルと付き合ってしまったているな。とりあえずネギ君が要注意ということがよくわかった。

頃合を見て失礼するでしょう)」

ギシッ、ギシッ、ギシッ……………。

……………背中が冷たいなあ。



2人とも早く来ーい。

「チクシヨウ。せめてネギの顔に一発でもいいから決めたいもんや」

「……………止めといた方がいいと思うけど」

ギシッ、ギシッ、ギシッ……………。

おー、来た来た。

というわけで、お空に向かって手を伸ばします。ただし、橋板を突き破りながら。

バキバキイッツッ!!!! ガシイッ!!!!

それと同時に僕の上にいる小太郎君とフェイトの足を掴みました。

「ん?」「え?」

両腕開放、  
『フルグラティオー・アルピカンス  
白き雷』  
！！！！！

バチバチバチバチバチイッツ！！！

「ンギヤアアツツ！？」 「ウワアアツツ！？」

フム、このように接触した状態ならば、フェイトの曼荼羅障壁も役に立たないでしょうねえ。

さすがに湖を全部凍らしたら水面も上がりました。おかげで橋までギリギリの高さで寝転ぶことが出来ましたよ。

明日菜さん達や術者の皆さんがいるところは防寒結界があるから寒くないでしょうけど、僕は背中が冷たいから橋の下から早く出ようっと。

メリメリッ、メリメリメリイッ！

と橋板を剥がしながら橋の上に出ると……………あれ？ 2人ともまだ生きて……………じゃなかった。2人ともまだ意識がある？

月詠さんは相変わらず凍ってますけど。

あれ〜？ いくらフェイトだろうと気絶するぐらいの強さで電気流したんだけどなあ？

「鬼や。絶対あの坊主は鬼や」

「おぼこい顔してよくもまあ……………」

「いや、あれが西洋にいる悪魔うちゅーもんなんじゃ？」

「西洋魔術つてのは、わびさびだけじゃなくて情けもないんかい」

「……………悪いな、狗の坊主と白髪の坊主。

ソッチの赤毛の坊主に喚ばれたからには今度は味方やないんや。

恨まんといてな」

うるさいなあ。

鬼さん達は壁になってるだけでいいから、騒がないでくださいよ。

「……………で？ 何でまだ意識あるの？」

結構強く流したから、いくらフェイトでも「ガアアアッ！」……………

…っと、小太郎君も元気あるねえ」

「ハアツ…………ハアツ…………！」  
フェイト！ 月詠を連れて逃げいっ！！！」

あれれ……？  
意識があるだけでなく、反撃まで？ しかも小太郎君が？

変だ。いくら何でもそれは変だ。  
フェイトだけならともかく、小太郎君までここまで無事なのは……  
……………あ、そっか。

「護符かな？」

「そつや！ お前が雷使うのは昨日でわかったからな！  
ちゃんと対雷専用の護符を用意しておいたんや！！ ……………つ  
て、この護符を突き破って俺らにダメージを？」

ええい、そんなことは今はええい！  
フェイト！ ここは俺が引き受けるからさっさと逃げろやっ！！  
！」

「クツ……………」。  
「すまない、小太郎君！」

あれ？ 何か僕の方が悪役じゃね？

これだと小太郎君がその身を張って味方を逃がすヒーローじゃん。

…………… まあ、フェイトは逃がしてもいいか。鬼さん達から弓矢とかでバンバン狙われてるけど。

ここで捕まえて関西呪術協会に引き渡したとしても、その後がどうなるかわかりませんからね。あまりにも原作と乖離したことは慎んだ方がいいでしょう。…………… いや、ホントホント。

原作みたいに逃げたと見せてまた襲ってきたとしても、そのときは別のことに利用させていただきましよう。

「こ、こっから先は通さへん!!!」

…………… そうやっ！ 千草姉ちゃんはどうしたんや!？」

「いや、フェイトにはもう逃げられちゃったよ。鬼の皆さんの追撃も簡単にかわされたみたいだしね。

天ヶ崎さんは…………… うん、もうすぐ会えるからそのときに確認しなよ。

フウ、さっきので終わると思っ込んでいた僕のミスか。

フルクグラティオー・アルピカンス  
『白き雷』

じゃなくて、『アエール・カプトウラエ戒めの風矢』とかで動きを止めればよかったか。  
………僕もまだまだ未熟だなあ」

油断大敵。いくら強くなったからといって、相手を甘く見ちゃ駄目ということですね。例え僕がどれだけ強くなるうとも、それで相手が弱くなるわけじゃないのですから。  
敵を侮っているつもりはなかったですけど、強くなったせいで僕の心にも驕りが生まれていたようですな。

やはりこれからは油断せずに、八工に核兵器を使うぐらいの覚悟で戦いに挑みましょう。

「……………っ！  
無視すんなや、ゴラアツ！！！」

ブオンツ！ バキイツ！

ま、これは油断じゃなくて余裕というものですが。  
僕の額に小太郎君の拳が叩き込まれましたけど、全然痛くないです。

「ぐあつ！ て、てめえ……………」

「あーあ、折れちゃったよ、大丈夫？

額で拳を受けるのはベアナックル時代には基本的な防御だったんだよ。肉弾戦やるならそのぐらい覚えておきなよ。

ま、いいや。とりあえずお休み。『フルグラニイオー・アルピカンス白き雷』」

バチバチバチバチバチイッツツツ！！！！

「ギャンツ！？」

君はつまらん……………じゃなかった。まだまだ修行が足りませんね。

気絶した小太郎君の拳を診察してみると、中手骨が真ん中の3本折れちゃってますね。

あー、痛そう。治しておきますか。

小太郎君は我流で修行していたみたいですから、どうしても基礎がちやんと育っていないんですよね。拳に体重乗せるのも上手いとはいえないですし。

才能はあるんだけど荒削りでもつたいないです。

さて、これでだいたいの終わりです。鬼さん達を喚んだはいいけど、あまり意味なかったかな？

いつまでも喚んだままはかわいそうだから、さっさと還してあげないといけませんね。

「終わりました、詠春さん。

大きいこと言っていたのに申しわけありません。フェイトを逃がしちゃいました。

鬼さん達もご苦労様です」

「……………いえ、ネギ君に怪我が無くて何よりです」

「……………一言でいいから言ってやりたいが、結果的にうまくいってるから何も言えん。

何でネギは基本的にアホなのに、応用的には頭が良いんだ……………」



アホってどういふことですか、エヴァさん？

「何や、もう終わりが」

「ワイら何もしてないんやけど」

「…………ぐ、結局あの白髪坊主を逃がしてしまった」

「やばいで、坊ちゃんに怒られるんやないか？」

「うわ、ご愁傷様や。」

ワイらは壁役って言われてたから平気やけどな」

人を悪魔みたいに言わないでくださいよ。

ちゃんと祭壇を大きなその身体で隠す役割をしてもらったし、元からフェイトを捕まえることなんか無理だってわかってましたから別に怒ったりしませんよ。

ズルズルと小太郎君を引き摺って祭壇のところへ。

これで小太郎君を引き渡したら僕達の役目は終わりですね。

いやあ、最初はどうなるかと思いましたが、無事に終わってよかったです。

早く本山に戻って明日菜さん達を安心させて上げましょう。

……ズ……

ん、魔力反応？ やっぱり原作通りにフェイトが来たのか？  
狙いは……僕か。うん、いらっしやうい。待ってたヨ。

第四十二話 京都編？ 虚空を駆ける（後書き）

ごめんなさい。

ここのネギが似てるのは球磨川じゃなくて、ジエイソンとかフレ  
デイとかのホラー系に似てるんです。

まあ、どちらも悪役ということには変わりはないので良しとしま  
すか。……………あれ？ 悪役？

それと、前話の感想で“もう終わった”のように感じられた人が  
多かったみたいですが……………、

本気であのぐらいで終わらせるとお思いですか？

まだ続きますヨ。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された＋<sup>バクティオ</sup>『仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」「という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？＋“心を連れていかれた

” new!

” <sup>コスモ・エンテレケイア</sup> “完全なる世界” : <sup>コスモ・エンテレケイア</sup> “よう” “よ誘拐犯”

ルビガンテ：名前忘れられた

月詠：メガネ壊された

第四十三話 京都編？ 爆誕

フェイト・アーウェルンクス

最初から最後までしてやられた。  
関西呪術協会の本山を壊滅させたとはいえ、結局はネギ君に全て引っ繰り返された。

今回の目的は全て果たしたし、偶然だけどネギ君が危険だということがよくわかった。

ネギ君は麻帆良で教師をしている。ネギ君は明らかに彼の復活に對する障害になりうる。

……いや、なりうるじゃなくて確実に。絶対になる。  
今の時点で気づけてよかったのが不幸中の幸いだ。

しかし、目的を果たしたというのに全然気が晴れない。  
むしろあそこまで良いようにやられてしまっただけで悔しい。悔しい。そうか、これが“悔しい”という気持ちか。

「……………月詠さん。」

悪いけど、ここで少し待っていてくれ」

返事も出来ない、凍らされたままの月詠さんに声をかける。  
今までの僕ならこんな無駄なことはしなかっただろうね。

……………気づかなかったけど、月詠さんを封印している氷に  
矢が結構突き刺さっている。月詠さんを背負って逃げたのは不味か  
ったかな？

まあ、そんなことはどうでもいい。いや、どうでもよくしちや駄  
目だけど。

しかし、このまま尻尾を巻いて逃げるなんてのは、いくら僕でも  
我慢できそうにもないんだよ。

小太郎君には逃がしてくれた借りがあるからね。せめてネギ君に  
一撃だけでもいれさせてもらおう。

人間を殺しちゃいけないことになっているけど、あのネギ君なら  
話は別だ。

確実に障害になる彼は、排除出来るならココで排除しておいた方  
がいい。少なくとも死んでも構わない攻撃をさせてもらおう。

水の転移魔法ゲイトを使い、祭壇近くに移動する。  
隠れて様子を伺ってみると、どうやらもう終わっているようだ。

小太郎君は………いた。ネギ君に襟首つかまれてズルズルと引き摺られている。

反応がないことから気絶しているみたいだね。

召喚されていた鬼達も徐々に消えていつているし、どうやらネギ君は終わったと判断したようだ。

………今ならいけるか？  
彼らは完全に油断している。今さら僕が戻ってくるなんて考えてもいないだろう。

転移魔法でネギ君に接近して『障壁突破ト・レイコス・ディエネリ母スネトラス 石の槍』で攻撃後、攻撃の成否に関わらずに直ちに転移魔法で撤退。これでいく。

小太郎君は………諦めるしかないね。ネギ君は複数の目的を持つたまま戦える相手じゃない。

仕掛けるなら今しかない。

術者の集団の中に入られたら、撤退出来るものも出来なくなる。

認めよう。君は僕が本気で殺意を抱くに値する。

……ズ……

転移完了。位置はネギ君の真後ろ。

しかしネギ君は左手を後ろ手にして、小太郎君の襟首を掴んで引き摺っている。そのためネギ君の左半身への攻撃は小太郎君に当たる可能性がある。

だから狙うは右半身中央部、肝臓付近！

しかし気づかれたのか、ネギ君が足を止めて反応している。まさかこの転移だけで気づかれるとは……。

「ト・テイコス・ディエルクサストー  
障壁突破……」

しかしもう遅い。

首だけで振り返ってこちらを見るけど、いくら何でもこれは避かせない。



「……………石の槍ドリュウ・ストラスっ!?!」

なっ!?! 僕の方にバックステップで踏み込んできた!?! 『ドリュウ石の槍ユ・ペトラス』を避けそうともせずに!?!

橋板から生み出された『石の槍ドリュウ・ストラス』はネギ君に向かって猛然と突き刺さろうと伸びた。

しかしネギ君は、左手に持っていた小太郎君を湖に投げ捨てると同時に、そのまま右から振り返りながらも僕の方に踏み込んできた。

相打ち覚悟か!?!?

ドスツツツ!!!

ネギ君の右腹を『石の槍ドリュウ・ストラス』が大きく決るが、それでもネギ君は止まらない。

そのまま振り返ったネギ君の左拳で魔力と気が急速に高まる。

転移が間に合わないっ!

「『閃華裂光拳』！！！」

メキメキメキイツ！！！！

迫り来るネギ君の左拳を咄嗟に両腕で防御するが突破され、僕の鳩尾にネギ君の拳が突き刺さった。

そして僕の身体が向こう岸まで吹っ飛ばされる。

咄嗟のパンチでこの威力！？ 障壁も力任せに突き破って！？

「クウツ！！！！」

……………吹っ飛ばされたけど、何とか木にぶつかりながらも止まれた。

両腕？ 駄目だ、折れてる。

アバラ？ わからない。グチャグチャになっていて感覚がない。

駄目だ、もう戦えない。やはり撤退するしかない。  
月詠さんを回収して早く撤退しよう。

でもこれで一矢報いた。

小太郎君、君の望み通りにネギ君へ一発いれてあげたよ。

……まるで人間みたいな感想を抱くんだな、僕は。

神楽坂明日菜

ドスツツツ!!!

そんな音がしてネギのお腹に大きな穴が開いたのが、消えていく  
鬼達の隙間から見えてしまった。

……………ウソ？

何で？ もう終わったんじゃないの？  
何で？ どうしてネギのお腹に大きな穴が開いているの？  
何で？ どうしてガトウさんみたいにネギのお腹からたくさん血  
が出ているの？

……………やだよ。

ナギやガトーさんもなくなったのに、……………ネギまでいなくな  
っちゃうなんてやだよ。

……………ナギ？ ガトーさん？

え？ ナギってネギのお父さんよね？  
ネギの持つてる雑誌で顔は見たことある。見たことはあるけど……  
……、何でその人が私の頭を撫でているの？

ガトーさん？ 誰この人？ 高畑先生みたいなスーツを着て、高畑先生みたいに煙草を吸っているおじさん。  
でも今着てるスーツは血で赤く染まって、今より若い高畑先生が煙草に火をつけている。

私はこんな人と麻帆良で会ったことないのに。

何なの、この光景？

何でこんなことを思い出してるの？

………思い出してる？

思い出すつてことは、この光景は実際に今までにあったこと。私  
が実際に体験してきたこと。  
でも私にはその記憶なんか無い。

……頭が痛い。  
目の前がチラつく。

チリン……………。

鈴の音がする。  
タカミチがくれたプレゼント。

……………タカミチ？

そうだ。私は高畑先生のことを小さいときは「タカミチ」と呼んでいたんだ。

小さいときにタカミチと一緒に麻帆良に来た。それでいいんちよと会って、木乃香と会って、クラスの皆と会って、ネギと会った。

だったら麻帆良に来る前は？

麻帆良に来る前は……………雪が降っていた。

雪が降っていて、タカミチと一緒に歩いていた。それでタカミチにこれからどうするのか聞いたら「日本へ行く」って言われた。

日本に行つてどうするの？と聞いたたら、タカミチはこう言ったんだ。

「幸せに暮らすのです、お姫様。  
全てを忘れて……………ね」

つて。

……………私は何を忘れたの？

思い出せ。私は何を忘れた？　そしてさっきは何を思い出した？

さっき思い出したのはナギのこと。

ナギは私を助けてくれて、しばらくの間一緒に旅をしていた。

けれどもいつの間にかいなくなつてしまった。

そしてガトーさんのこと。

ガトーさんは私を守ってくれて……………守ってくれて？  
守ってくれて、その後ガトーさんはどうなった？

思い出せ。思い出すな。

今なら思い出せる。今なら思い出してしまつ。

「……………ケホッ！」

「ネギ君っ!?!」「ネギッ!?!」

……………そうだ、今はそんなことをしている暇はないのよ。ネギを助けなきゃ。ネギはお腹からたくさん血が出ていて、口からたくさん血を吐いている。

ガトーさんみたいに血だらけになっているネギを助けなきゃ。ネギもナギやガトーさんみたいにいなくなっちゃったら……………いなくなっただけ?

「幸せになりな、嬢ちゃん。

あんたにはその権利がある」



.....。

.....。

..... 思い、出した。

全部.....全部思い出した。

全部思い出したけど、何でこんなときに思い出したの？

ガトーさんのときと同じだから？

ガトーさんみたくネギもいなくなっちゃうから？

やだ、ダメ。

そんなのやだ。そんなのダメ。

せっかく思い出したのに。せっかくわかったのに。

「……………ダメッ、ネギ！  
いなくなっちゃだっつっ！！！！」

「ん？ ああ、大丈夫ですよ、明日菜さん。  
腹に穴が開いたぐらいじゃ僕は死にませんから。……………ケホッ、  
ペッ」

「……………え？」

……………え？ 何で平気そうな顔して返事するの？  
………どう見たってガトーさんのときより重症だし、血も吐いて………  
あれ？ 最初は血がたくさんお腹から出ていて。血をたくさん口から吐いていたんだけど……………止まってる？

「……………って、あれ？ そういえば何で明日菜さん達がまだここに  
いるんですか？」

本山に連れて行ってくださるようお願いしたじゃないですか、エ  
ヴァさん」

「うえっ！？ ……………あ、ああ、スマン。

いや、あまりにも早く終わったので転移させる暇がなくてな」

「暇がなかったって……………」。

あ、明日菜さん達が僕の方を見たら駄目ですよ。女子中学生は見  
てはいけない状態になっていますから」

……………心底無事そうね。

あれ？ 私の今の叫びは無意味？

「ネ、ネギ君、大丈夫なんですか？」

「大丈夫といえれば大丈夫です。」

微弱な『咸卦治癒』マイティガードを発動させていましたからね。さすがにこのぐらいの怪我になると現状維持が精一杯ですが、それでも死んだりしませんよ。

それに怪我を完治させるためには、改めて全力全開の『咸卦治癒』マイティガードを発動しないと駄目ですけどね」

「……………そう、なんですか」

「と、いうわけで、僕は大丈夫ですので皆さん結界の中に入っていただきます。魔力と気を全開にしますので、ちよつと余波で周りが騒がしくなります。」

申しわけありませんが、出来れば関西呪術協会の人達は僕と明日菜さん達の間に入って、僕の姿が見えないようにしてください。あまり女子中学生に見せるものじゃありませんから。

さて、それでは……………、

ラス・テル・マ・スキル・マギステル

汝がためにユピテル王の恩寵あれ、『治癒』ケイラ！ 術式固定！

右手に“気”、左手に“魔法”！ “気”と“魔法”の合一、『

闇の咸卦法』！

術式兵装『咸卦治癒』マイティガード全開！！！！」

ネギの全身が光って唸り、突風が辺りに吹き荒れる。私達は境界内にいるから平気だけど。

…………… あ、結界の外にいた犬上って子が突風で飛ばされた。凍った湖の上をカーリングみたいに滑ってく。あーあー……………ええ？ 止まんないの？

ちよ、あ！ ああ！？ あああつつつ！？

ヒイツツツ！？

…………… 私は何も見てないし、聞いてもないもんね。

え、えと……………、ネギが無事で良かったわ。ウン。

記憶が戻ったことは…………… どうしよう？ 何か言いだせる雰囲気じゃないわよね。

本山に戻って落ち着いたら話しましょうか。

バキィッ！ ピシピシピシィッ！……！

え？ 何の音？

私達の後ろにある大岩の方から聞こえてきたような？ ……………っ  
て、大岩に何かヒビらしきものがっ！？

「お、長っ！

リヨウメンスクナノカミの封印がっ！？」

「何ですってっ！？」

まさかネギ君が発している魔力と気の余波だけで封印が解けると  
でも言うんですか！？」

え？ 今度はホントに何なのよ！？

それに結界の外がどんどん台風みたくなっていくんだけど！？  
というか、結界にもヒビがっ！？

「ネ、ネギ君！ ちょっと待って……いや、ここで止めたらネギ君の身体が……。」

「……と、とりあえず術者全員で結界を強化します！ 刹那君は木乃香とお嬢様方をもっと奥へ！」

「ば、馬鹿な！？ 何だこの馬鹿げた魔力と気の量は！？

まさか『闇マキア・エレベアの魔法』……いや、『闇の咸卦法』の暴走か！？」

「皆さん、下がってください！」

「ま、待って、せつちゃん！ ネギ君が……。」

ネ、ネギは大丈夫なの？ 『闇の咸卦法』の暴走って？  
確か前にエヴァちゃんが、暴走させてしまったら人外の闇の眷属になってしまふ可能性もあるって言ってたようにな……。

あっ！？ 刹那さんが私達を危ないからって祭壇の奥に追いやろうとする。

ど、どいてよ。ネギが……。

「オオオオオー……ツツツ……!!」

ボツツツ……!!

……え？

ネ、ネギの雄叫びと共に、赤いナニカが一瞬で立ち上ったんだけど……？

何アレ？ 術者の人達が壁になって赤いナニカの下は見えない。

「……お兄様？」

「……ネ、ネギ先生の髪の毛、かなあ？」

「……“怒髪天を衝く”……というものでしょうか？」

「ネ、ネギ先生は大丈夫なのか？ ……いや、ネギ先生のことだから終わったらどうせケロツとしているんだらうけど。」





今度は何っ！？ 何なの今の音っ！？  
何かが破けるような音がしたんだけど！？

「ネ、ネギ君っ！？  
膨れ上がった筋肉で服が！？」

「ちよつと待てえい！？  
何だその筋肉馬鹿ラカン以上の筋肉はっ！？」

「マスター！ マスターも後ろへ！」

「スゲエナ、ガキ。  
ソノ筋肉ヲ切り刻ミテエ」

筋肉馬鹿以上の筋肉っ！？ 筋肉馬鹿ってラカンのことよね！？  
詠春もエヴァちゃんも何を見てるのよっ！？ 本気で何が起きて  
るのよおっ！？

……あ、何だかネギの髪がどんどん高くなっていく。  
でも髪の毛が伸びてるんじゃないやなくて、根っこからどんどん高くな  
っていつているような？

「ガアアアアッ！……！」

ベキィッ！ズボッッ！……！

ドンッッ！……！ビシビシビシィッ！

一瞬、術者さん達の頭の上にネギの頭が見えそうになったけど、  
“ベキィッ！ズボッッ！……！”という音がしたと思ったたら急に  
ガクッと低くなって見えなくなった。

その後の“ドンッッ！……！”で祭壇全体が揺れた。

………何、地震？ 本当に何が起こってるのよ。

「………きっと足が橋板を突き破って、湖の上に立ったから低くな  
ったんでしょ？」

「…………凍ってる湖に亀裂が入ったアルよ」

「…………クツ、駄目だ。」

見えてしまう巨大な魔力が暴れすぎてて、魔眼が痛くなってきた」

「大丈夫か、龍宮？」

お嬢様、皆さん。もっと近寄ってください。この結界の内側に更に結界を張ります！

『四天結界独鈷鍊殻』！！！！」

「…………ネ、ネギ君は大丈夫なんか？」

多分私達の方が大丈夫じゃないと思うわよ、木乃香。

……………いろんな意味でね。

「け、結界が！？」

だ、駄目です。全員伏せなさい！！！！」



「お父様——っ!?!?」「長あ——っ!?!?」

「馬鹿刹那っ!

嘆くより結界を強化しろ! 死んだものに囚われるな!?!?!」

「いや、吹っ飛ばされたただだから、まだ死んでねーだろ。……  
多分」

「……あ、風が収まってきたです」

あ、本当だ。ようやく終わったのね。

っ!?!? そうだ、ネギは!?!? ネギはどうなった……え? ネギ?  
ギ?

「フウウウウ——……、無事に治すことができました。」

……あれ? 詠春さん達は? というか、明日菜さん達の背が  
低くなつてませんか?」

……そこにしたのはネギだった。  
確かにそこにいたのはネギのはずよ。……何か違うけど。

違っているのはまず身長。

私達は祭壇の一段高くなっているところに立っている。  
でもネギは足が橋板を突き破った状態で立っていることから、おそらく湖の上に立っている。

その状態でネギの顔が、私達の顔と同じぐらいの高さにある。

えと、私の身長が160cmぐらいで、湖からこの祭壇の高さまできつと1mぐらいはあるだろうから、ネギの身長は………最低でも250cm？

………おつきくなれて良かったわね、ネギ。  
早くもっと大きくなりたいです、って言ってたもんね。

あと髪の毛。

もうすっかり長くなっちゃって、何mも空に向かって筭みたく真っ直ぐ伸びている。

あとで切ってあげなきゃ駄目ね。

そして身体。身体というか筋肉。

エヴァちゃんが言っていたように、マッチョのラカン以上の筋肉になってる。

両手足が丸太のように太くなっているおかげで、上着の袖やズボンの裾が筋肉の増量に耐えられなくてビリビリと破けてしまっている。

そのせいで半袖短パン状態だわ。

服の右のお腹のところに大きな穴が開いている。これはフェイトによって空けられたからしょうがない。いや、しょうがなくてはなないけど。

ネギのお腹も傷一つなく見えるから、ちゃんと怪我は治せたようね。それは良かったわ。

…………でも筋肉で服がパツンパツンになってるけどね。

しかも背が伸びた分、穴の開いた部分が右のお腹辺りじゃなくて胸の辺りまで上がってるけどね。っていうか、腹筋スゴ。

…………ムキムキになれて良かったわね、ネギ。

毎日ちゃんと筋トレとか柔軟体操してたもんね。

いやあ、ネギが無事で本当に良かったわ。





第四十三話 京都編？ 爆誕（後書き）

ゴンさ……………じゃなかった。ネギさん爆誕。

多分こんなネタ使ったの自分が初めてだと思っんですよねー。多分こんなネタ予想していた人もいないと思っんですよねー。今回はかりは。

でもホラ、2人って似てるところあるじゃないですか。

父親探してたり、髪の毛伸びたり、周りから危ういと思われていたり、天才だったり、天然だったりとかいろいろと。

だから、このネタもよく考えたら別に変というわけじゃないと思っんですヨ。

……………わたし嘴広鴻はわたし嘴広鴻の道を通っ走ります。

これでネギは“悪魔”から“魔人”にランクアップしました。

「オレ魔人ネギさん。今後トモヨロシク」

何でネギがこんなことしたのかは、長くなったので次話で。

まあ、ぶつちやけて言えば「マキア・エレベア闇の魔法」による魔力容量の拡大」なんです。

あ、ちゃんと元に戻れますよ。

これからずっとネギさんモードでいるってわけじゃないですよ。

……ソッチの方が面白そうですねっ！……  
とはいえ、さすがに少し自重します。

そして明日菜がアスナになりました。  
重傷のネギを見て、ガトウの最後をフラッシュバックしたようです。

……本人以外は気づいていませんけどね。幸いというか何とかうか、記憶復活に伴う鬱モードは回避できたようです。  
まあ、ネギのインパクト強すぎたから、他の事なんかどうでも良くなりますよね。

それとフェイトが『閃華裂光拳』食らっちゃいました。しかも重傷です。

『過剰回復呪文』<sup>マホイミ</sup>のせいで治せないから、もう戦えないです。……あの身体では。

身体を取り替えたりすれば、もしかしたら復活出来るかも……？

ネギの原作知識は“32巻”<sup>セクストゥム</sup>まで。  
そして6が出てきたのは“34巻”<sup>セクストゥム</sup>。つまりネギは6のことを知りません。

……何が言いたいのか、わかりますね？

思いついちゃったんですよ。これらのネタ。

それと

「自重するんならこんなネタ書くな」

というツツコミは無視させて頂きます。

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された＋バクティオー『仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？＋心を連れていかれた

“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”：“コスモ・エンテレケイアようゝ”  
“コスモ・エンテレケイアよ誘拐犯”

ルビガンテ：名前忘れられた

月詠：メガネ壊された

フェイト：また秘密化？ new!

第四十四話 京都編？ 戦闘終了

ネギ・スプリングフィールド

フハハハハハ！

来た、来た。この感じですよ。力が満ちてきます！

僕の狙いは『闇の魔法』……いや、『闇の咸卦法』による魔力容量の拡大。

わざわざ痛い思いをしてまでフェイトの一撃を食らっただけのことはありません。さすがにあの怪我なら『闇の咸卦法』を全力全開にする言い訳になりますからね。

前世では修行と『闇の咸卦法』による影響で、魔力容量が倍ぐらいに増えました。

その後、再転生したときは神様が言っていた通り、魔力容量は増えたままで肉体は0からやり直しになったのです。それは肉体が『闇の咸卦法』による影響を受ける前に戻ったということも意味します。

要するに、もう一度『闇の咸卦法』による魔力容量の拡大が可能になったということなのです。

しかし、ただでさえ最初から子供にしたら大きすぎる魔力を持っていたのに、麻帆良に行く前に魔力容量の拡大をしたら、更に魔力容量がとんでもないことになります。

それだとさすがに不審に思われるでしょうし、何よりあれ以上向こうで無茶してネカネ姉さんに叱られるのは避けたかったです。

というわけで

「麻帆良に来てからすればいいじゃん！」

という結論に達したのです。

そのため麻帆良に来た最初は魔法関係者の皆さんに年齢不相応な実力を持っていることを見せ、尚且つ「ネギ君ならしょうがない」という雰囲気を蔓延させるなど、僕のことをとても良く理解してもらいました。

多分、これで更に魔力容量が増えても

「またネギ君か!？」

「あの子の担当は高畑先生でしょ！」

「いや、あの子を麻帆良に呼んだのは学園長らしいですよ」

「だったら学園長に投げましょうよ」

とかで終わらしてくれればいいよ。

……学園長はまた入院するかもしれないですけど。

そして『闇の咸卦法』を全力全開出来るチャンスが遂に来ました。それがこの京都旅行でのフェイトによる『石の槍』トリュ・ペトラスでの攻撃です。

フハハハ、わざわざご苦労さん、フェイト。

お礼に両腕とアバラ数本だけで勘弁してあげる。『閃華裂光拳』での怪我だから、もう治せないけどな！

まあ、エヴァさんがフェイトのことを“人形”とか言っていましたので、腕とか取り替えれば復帰できるんじゃないですかね？ 時間はかかるでしょうけど。

それに京都に来るのが時期的に原作より早まってしまいましたからね。それに伴ってヘルマン卿襲撃の時期なども変わってくるかもしれない。

そのためにフェイトがしばらく治療に時間を費やすようにしておきました。治療を諦めるにしても、身体を取り替えるにしても、一月ぐらいの時間は延ばせるでしょう。

別にフェイトが脱落しても僕的に問題ないですけどね！

……フム、治療もだいたい終わったかな。

ざっと魔力容量が更に倍になった感じです。以前の表現で現すなら魔力容量約20。木乃香さんやエヴァさんクラスの約4倍。一般



の人の約10倍の魔力容量ってところですね。

これが転生し直した特典。

『闇の咸卦法』による影響を繰り返すことで、魔力容量を増やすことができる。

つまり、転生する程強くなる!!!

..... いや、転生するのはこれで最後でいいですけどね。

いいか！ 再々転生させるなよ！ 絶対再々転生させるなよ！  
ネタ振りなんかじゃないからな!!! マジで3回目とかやめて  
くれよ!!!

「……………ネ、ネギ？」

大丈夫……………なの？」

「ん？ ああ、大丈夫ですよ、明日菜さん。

すっかり全開です。むしろ今までより調子がいいぐらいですね。

ところで何で皆さんの背が縮んで……………あれ？」

明日菜さん達が小さくなっているんじゃないかと、もしかして僕の視点が高くなっている？

って、おわっ！？ 何この身体は！？

ラカンさん以上のマッチョになってる！？ 『闇の咸卦法』の影響でこうなったの？

さすがにこれは予想GUYです。

「……………でも、これはこれでアリかな？」

大人の身体になるなんて、幻術以外では20年振りです。  
マジで前世は大人になる前に赤ん坊に戻りましたからね。

うわー、何か本当に久しぶりだ。もう子供の身体に慣れていたつもりでしたが、やはり背がおつきくなるのはいいですね。  
視点が高いと見える風景も違ってくるなあ。

「ちょ、ちよつと待て、ネギ!?  
お前は何を言っているんだ!?」

「本気ですか、お兄様!?」

「正気に戻りなさい、ネギっ!」

「いやいや! さすがにそれはないやろっ!」

「ネ、ネギ先生はそれで平気なんですか!?  
(え? ちよつと待って? 私は今度からあのネギ先生と修行後に  
一緒に寝るの?)」

「…………聞いたことがあります。  
日本人がカッコいいと思うような男性は、欧米人によると貧弱な  
ぽーやにしか見えないらしいです」

「わ、私もその話聞いたことあるな。  
そのせいでジャーズとかの日本男性アイドルは欧米人に人気  
がないとか……………」

「え？　もしかして……………あ、あの姿がネギ先生せんせいの理想の姿……………  
？」

「おい、そのことも確かに重要だが……………私達の後ろで頭が  
出始めているリョウメンスクナノカミはどうするんだ？」

「それと吹っ飛ばされた術者達を回収しなければならぬでござるな。  
拙者が回収を引き受けるので、ネギ坊主とリョウメンスクナノカ  
ミは皆に任せるでござる。ニンニン！」

「か、楓……………？　逃げるアルか！？」

いや、さすがにここまでマッチョなのは嫌ですけど。  
あ、それにちゃんと元に戻るみたいですよ。

でもせつかくここまでマツチヨになったのですから、この戦いはこのカツコのままで行きますか。

といっても、今はパワーはとても強いですが、膨れ上がった筋肉のせいでスピードが劇的に落ちちゃってます

要するに「おまえを殺すぞ、セル……………」!」のときのトランクス状態ですね。

でも、動けないスクナ相手なら楽勝です。というかカモです。

……………原作のカモ君じゃないですよ。

「ではリヨウメンスクナノカミは僕がやります。皆さんはここで待っていてください。刹那さんとエヴァさんは念のためにもう一度境界を張っておいてくださいね。

ハッ!

うを! 凄いジャンプ力。

1回のジャンプで、スクナ封印の大岩まで跳べました。100mぐらい?

別にまだ身体強化とかしてないんですけどね。

……………そういえば何でスクナの封印が解けそうになってるんだろ?

何かあったのかな？

ま、いいか。

とりあえず一発スクナの頭にブチかましましょう。

「ハアツ！！！！」

メメタアツツ！！！！

……………あれ？ この擬音だったらスクナ無事じゃね？

犬上小太郎

……うっく……。  
お、俺は……？

ドゴオオオオオンッッ！！！！

！？ な、何の音や！？  
それに俺は………そうやっ！？

ネ、ネギ！？ ネギはどこ行ったんや！？

ここは………座敷牢なんかじゃないな。というかスクナ封印の祭壇やん。時間も月の位置見る限りそんなに時間経ってないな。いつたいあれからどうなったんや？ それになんで俺は無事なんや？ 俺は確かネギに………。

くそっ、ネギの顔面に一発ぶち込めたのはええけど、遊ばれてただけや。結局魔法の1発で気絶させられたし。

それに手が治ってる？ 確かに骨が折れてたはずなのに？

ネギが治したんか？

……………要するに、ネギにとって俺は敵ですらないということなんか。

あ、祭壇の上に木乃香の姉ちゃん達がおるな。……………何か変な赤い柱も立っとるけど？

あそこにいけばネギの居場所もわかるやろ。

……………もうええ。

どうやらせつかく助かった命みたいやけど、ここまで舐められては男がすたるわ。

ネギには絶対かなわへんけど、こうなったら死んでも俺の覚悟をネギに見せたる。いくらブン殴られようが死ぬまで食らいついてやるで！



「おう、姉ちゃん達。ネギはどこや？」

「！？ お嬢様、私の後ろへ……………つて、犬上小太郎か、よく生きてたな？ ……………いや、本当に。」

「うん、よく無事だったな。良かったじゃないか」

「大丈夫なん？」

「氷の上をカーリングみたいに滑って、向こう岸に頭から激突してたけど？」

「頭がやけに痛いのはそのせいかいっ！？ ……………つて、スマンな。俺は別に大丈夫や。」

「それよりネギはどこや？ それと俺はもう木乃香の姉ちゃんを狙わんし、他の姉ちゃん達にも手出しせえへん。そもそも女を殴るんは趣味やないからな。」

「目的はネギだけや、誓ってもええ。だから邪魔せんといてくれ。俺はネギに一矢報いたいだけなんや」

「……………ネギ君ならそこにおるえ」

「は？ ……そこって……………何か赤い柱があるだけやん？」

「姉ちゃん達がネギを危ない目にあわせたくないのはわかるけど、」

俺よりネギの方が強いから大丈夫やで。……………悔しいけどな。

だから、ネギの居所を教えてください……………あれ？

「……………ネ、ネギ……………さん？」

「そつだよ、小太郎君」

何で俺はネギに“さん”付けしとるんや！？  
っていつか、マジでこのデカイのがネギかいつ！？ 赤い柱だと  
思ってたのはネギの髪の毛！？

え？ 何でマジでこうなっとるの？ 髪の毛がとんでもなく伸び  
てたり、筋肉ムキムキになってたり！？

「小太郎君は今、「僕に一矢報いたい」と言ったね。  
本当に出来ると思っっているのかい？」

「……………で、出来る出来ないやない！ やるんやっ！！！！  
例え死ぬことになったとしても、俺はこの生き方を変えたりせえ  
へん！！！！」

「……………フウ。わかった。  
こつちに来なよ。明日菜さん達を巻き込みたくない。」

こつちだ  
THIS WAY. FOLLOW ME

悠然と俺の死線を横切つて、姉ちゃん達からネギが離れていく。  
……………あの巨体なのに全然反応出来なかった。

いや、そりゃ姉ちゃん達を巻き込むのは俺としても嫌やけど……  
………やっぱり、ついていかなアカンかな？  
何かもう止めておきたい気が……………、俺馬鹿やから英語わからん  
しな。

……………何でそんな憐憫の目で見るんや、姉ちゃん達？

姉ちゃん達の目。育ちきつたせいで買われていくことのないペツ  
トシヨップの犬でもみるかのように憐憫の目やん。  
残酷な目や。「かわいそうだけど自主規制 にかげられて、明日の  
朝には他の犬の無理 になる運命なのね」ってかんじの！

……もしかしなくとも早まった？

「小太郎君。同年代の男の子の僕の経験からみて、今の君に足りないものがある」

「な、何なんや、それは！？」

「っていうか、“同年代の男の子”！？」

どう見たって今のネギ………さんは同年代の男の子見えへんって

！……！

………ま、まあ………それにまだガキの俺に足りないもんは確かにたくさんあるな。単純な力やったり経験やったり………。

「危機感だよ」

ボツツツ!!!

メキメキメキメキイツ!!!

「……………ガツハアツツツ!!!」

一瞬で間合いを詰められて、腹への蹴りで上空に吹っ飛ばされた  
!?

ぐっ、アバラは何ぼ……………折れていない!? 何でやつ!?  
確かに今、俺のアバラが折れる音が聞こえたはず!? 痛みもある。幻術なんかやあらへん。  
何がどうなってるんや!?

いや、そんなことはどうでもええ！

今は体勢を立て直さんと。空中で立て直しにくいけど、下で待ち受けてるネギに反撃を何とか！

大丈夫や。ネギは俺がもう戦えないと思って大振りの一撃を準備してる。ソレを避けて反撃を！

いけるで！！！ このタイミングなら確実に2発、いや3発！！！！  
ネギの顔面に渾身の拳をぶち込んで、ネギの攻撃前に回避できる  
！！！！

くらえネギ！！！！

まずはフェイトの分！！！！ 次は千草姉ちゃんの分！！！！ その  
次が月詠の分や！！！！

しかしおかしいな俺。フェイトのことは別に仲間とか思っておら  
へんかったのに。

いや、むしろいけ好かない奴とか思ってたのに、いつの間に俺の  
中で親友までランク上がって、なんでこんなムキになって仇討と  
してんだろ？

仇つつーかフェイトまだ死んでおらんけど（多分）。

ま、やっぱ一緒に死線くぐったのがデカイわ。命懸けで何かを共  
に行なう奴なんて、無条件で親友やしな。

なのにこのクソツたれのネギ！ そんな俺らの覚悟を足蹴にしや  
がって！

死ぬ気で戦って、殺される事すら覚悟している相手に手加減！？  
武士の情けもあらへんのか！！！！ この野郎！！！！

うおおおマジ増々むかつて来たわ！！  
俺の分も含めて4発入れる！！！！  
って俺すげえな。今人生で一番頭回転してるやる？

まだ身体が動かせない？ おそらく300文字以上考えてっけど  
！？

……あれ？ これって……アレじゃね？

時間がゆっくり……周りが凄いいスローになるって……死ぬ前  
の……。

……身体が、動かん？

な、何で動かせんのか！？

今の一撃がそんなに重かったんか？  
怪我はない。それなのに動けない？ いったい何がどうなったる  
んや！？

動け！ 動け動け動け動いてやっ！！！！  
今動かなきゃ何にもならないんや！ 今動かなきゃ、今やらなき  
やネギに一泡吹かせられないんや！

もうそんなのは嫌なんや……………だから、動いてやっ！！！

「君もしかしてまだ、自分が死なないとも思ってるんじゃないかい？」

皆……………悪い。  
失敗しくった……………。



……終わった。ようやく終わりました。……いろいろと。

え？ スクナの再封印が終了？ 術者全員の無事の確認も終わりました？

ならそろそろ撤収しましょうか。

「うーん、こんな感じでどうでしょう？」

天ヶ崎千草と犬上小太郎、そして木乃香や木乃香の友人のお嬢様方、それに目の前で身体を伸び縮みさせているいと試しているネギ君も連れてね。

あ、ちゃんと犬上小太郎は生きてましたよ。さすがにネギ君も木乃香達の前では、汚い花火を咲かせることはしませんからね。

「……いや、雰囲気は違うが本当にナギに似ているな。  
むしろナギより大人っぽいぞ」

「そうですね。ナギは大人になっても悪ガキのような雰囲気が抜けませんでした。ネギ君にはそれがありませんね」

「へえー、そんなんですか。」

「どうです、皆さん？ 大人になった僕は？」

「今の僕の肉体年齢は20歳くらいだと思えますけど。」

「……いや、本当に凄いですね。」

さっきのラカン以上のマッチョから一転して、確かにネギ君が大きくならたならこうなるであろう姿なんですけど、本当にナギに似ています。

あ、破けた服は転移魔法に手を突っ込んだと思えば、新しい服を取り出してました。転移魔法はネギ君の鞆に直結していたらしいです。

戦闘で服が駄目になることや幻術で大人になることを想定して、「こんなこともあるのか」と複数の衣服を用意してあったそうです。

「……“こんなこともあるのか」と言ったときは、何故かやけに嬉しそうでしたが。」

「ネギ君、ロボットアニメとか好きやからなあ。」

「そんなんですか、木乃香？」

「年齢相応のところもあるようで少し気が楽になりますね。」

大人になったネギ君の雰囲気はアリカ様に似てますが、アリカ様のような冷たい感じだけではなく、ナギのような人懐っこい感じもあります。

「ナギとアリカ様の良いところ取りといった感じですね。木乃香達も」

赤い顔して見惚れちゃっていますよ。」

……まだ木乃香に恋愛は早いと思うのですが。

「……いいんじゃないかしら？」

「う、うん……。ホンマにカツコエエよ、ネギ君」

「は、はい。その……見違えました。

普通のネギ先生は可愛い感じなのですが、大人のネギ先生はカツコいいです……って私は何を口走って!？」

（え？ ちょっと待って？ 私は今度からあのネギ先生と修行後に一緒に寝るの？ ……ゴクリ）」

「は、はわわわわ……」

「の、のどかシツカリするです。気持ちわかりますが、心を強く持ってください。

……でも、これは本当に……私は……」

「いや、これはマズイだろ。」

「うわぁ……………。子供が学校の先生やるなんて駄目だと思っていたけど、この顔で女子中の先生やる方が駄目だ。ネギ先生が子供で良かったわ。」

「この大人のネギ先生がウチの担任だったら、学校で昼ドラ並みの騒動が起きるぞ」

「せ……………戦闘も終わったので、“お試し契約”は破棄させてもらっぞ……………」

「……………」

「古、ボォーっとしてどうしたでござるか？ いや、気持ちはわかるでござるけど。」

「……………ネギ坊主は将来、拙者や真名より背が大きくなるでござるか。……………でもあの姿だとネギ“坊主”と呼ぶのは……………」

「……………やはり待てそうにないな。」

「ネギがああなるまであと10年。こうなったらネギを別荘に現実時間で150日間ほど監禁して……………」

「落ち着いてください、マスター」

「オレトシテハサツキノ筋肉ノ方ガ良カッタランダケドナア」

何か1人ほど危ないことを口走っているのがいましたが、ネギ君なら大丈夫でしょう。

それに、確かに木乃香達は大人のネギ君に夢中になっていますが、それはまるで何かを無理矢理にでも忘れようとしているようにしか見えません。無理ないですね。

しかし、大丈夫といえばネギ君は本当に大丈夫なんでしょうか？  
怪我自体はもうないようですが、『闇の咸卦法』とやらの影響は  
……………？

「ネギ君、これから本山に戻りますが、ネギ君の身体は本当に大丈夫ですか？

怪我は完治しているようですが、『マギア・エレベア闇の魔法』を暴走させると魔族化してしまうようなことを聞いたことがあります。

とても言いにくいことですが、本山にそのまま入ろうとして結界に反応するようなことは？」

「あ、大丈夫ですよ。魔族になったわけじゃありません。

身体が変化したときも、別に人外の怪物になったわけじゃなかったですからね」

「……………ソウデスネ」

「確かにちよつと変わりましたが、人間をやめたわけじゃないです。そうですねえ……。 “狐” が “白面金毛九尾の狐” に一足飛びにレベル……。 ランク？ いや、ステータジアップしたみたいな感じですよ。ホラ、 “白面金毛九尾の狐” も狐であることには変わりませんよ。」

「だから僕も人間のままですよ？」

ソッチの方がやばくないですか!？」

それに一足飛びどころか九足飛びしてますよね、それ!？」

それになんでまだ疑問系？」

「いや、肉体年齢を自由に操作できるってことは、もしかして不老と同じことではないかと思って……。」

「いつの間にやら人類の夢が叶っちゃったのかな？ まあ、あとで詳しく調べます」

「もうただの人間じゃなくて神クラスにいつてるんじゃないか？  
いわゆる一神教GODの神じゃなくて、多神教DEITYの神の方だが。」

「ネギなら神にだって勝てるだろ。……というか、一撃でスクナを倒しただろ。魔力と気を込めただけのパンチ1発で」

「え、いや？ ……どうなんでしよう？

戦ったことないから何ともいえません。スクナは確かにリヨウメ  
ンスクナノカミだから神様で鬼神ですけど、封印されていたから何  
とも……………。

……………でも神DEITYって宇宙空間でも生きてられるんですかね？

もし宇宙空間で生きられないなら、転移魔法で宇宙に転移させれ  
ば勝機があるか「さあつ、本山に帰りましょう！ お嬢様方をいつ  
までもこんなところに置いておくわけにはいきません！」……………？  
まあ、そうですね」

……………もうネギ君は喋らないでくれ、お願いだから。

やれやれ、それにしても後始末が大変そうです。

本山は一時的に壊滅近くまでいくわ、それを救ったのは見習い？  
西洋魔術師だったりするわ、リヨウメンスクナノカミが復活しそ  
うになるわ、関西呪術協会を救ってくれた見習い？西洋魔術師が大怪  
我するわ。

しかも下手人がウチの構成員と“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”。

東に対する落とし所が厄介になりそうです。

何しろ私達が助かったのはネギ君の、関東魔法協会から派遣され  
ていた西洋魔術師のおかげですからね。

そういつつもりで派遣されていたというワケではないのですが……。

とはいえ、ネギ君はあくまで関東魔法協会には修行のために所属しているだけで、いわばメルディアナ魔法学校からの留学生。

ですので東に貸しを作るのではなく、ネギ君個人に貸しを作る形にすれば少しはマシですね。それにあそこまでの大怪我したからには、私達の方からもメルディアナに伝えた方がいいでしょう

幸い私とナギの関係は世間が知っています。難しいでしょうが東西の間の話ではなく、“千の呪文の男”サウザンドマスターの息子と盟友の間の話に持つていければ何とか……。

あとここでネギ君個人に対し、個人相手とするなら過剰ともいえるような御礼をすれば、東としてもそれ以上は言い難くなるでしょう。

まさか留学生の手柄を取り上げるなんてことは出来ないでしょうからね。

お義父さんとも連絡をとってそのように取り計らいますか。これ以上東西の仲が悪くなるのはお義父さんとしても望むところではありませんでしょうし。

ネギ君を英雄のように祭り上げるのは不本意ですが、他に良い手がありません。

……………というかネギ君なら気にしなさそうですし。

しかし、ネギ君がああなってしまった責任はどうやって取れば……って、そうか。一時的とはいえ今のネギ君は東の所屬になって



いるから、ネギ君のことはお義父さんに丸投げすればいいのか。

確かにネギ君がああなった責任の一端はこちらにあります。それに對することは関東魔法協会との話し合いで決めることにしましょう。

さつきと言ってることが180°違うかもしれませんが、コレはコレ、ソレはソレ、ということだ……。

頑張ってください、お義父さん。

ネギ君のことはお義父さんにお任せします。

東に必要以上に貸しを作るのは好ましくありませんが、ネギ君がああなった責任をネギ君個人に対して取るのと、東に任せて東に貸しを作るのだったら、後者の方がまだマシです。

他の者も反対したりしないでしょう。……ここに一緒に来た、今でも信じられないものを見るような目でネギ君を見ている腕利きの術者達は特に。ウン。

もし反対する人がいたら、その人にネギ君との交渉役を任せることにしましょう。

……いや、本気で何であんな子になっただけ？

私はナギがまだ小さい頃、とはいつても今のネギ君よりも少し年上ですが、その頃からナギとの付き合いがあります。

当時のナギの年齢に合わない戦闘力に驚いたものですが、ネギ君はナギ以上ですね。

しかし、それこそネギ君に対する御礼はどうしましょうか？  
関東魔法協会から物言いが出ないようなものとなると……  
……  
……うーん？

「ネ、ネギ君！ そのな………魔力をネギ君に分けたから疲れたん  
よ。」

だから………その、『マイティガード咸卦治癒』で治療してくれへん？」

「ん？ ええ、構いませんよ。」

魔力を分けてもらったのもありますし、何より木乃香さんは誘拐  
されてお疲れでしょうからね」

「ホ、ホンマ？

それじゃあお願いするわ………って、ヒヤアッ！ お姫様抱っこ  
！？」

「嫌でした？

前に部活巡りの時にしたことありますし、やってみたかったんで  
すよね。じじいこの」

「ええよ！ バツチ来いや！

………そうや、せつちゃんも一緒に！ ウチは右腕で抱っこして、  
せつちゃんは左腕で抱っこ……！」

「うええっ！？ お、お嬢様！？」

「ちょ、ちよつと待って！

抜け駆けはズルイわよ、木乃香……！」

「早い者勝ちか！？ ならばネギの背中が貰った……！」

………いや、木乃香にはまだ早いですよね。

確かにそれならば御礼としては十分でしょうし、サウザンドマスター “千の呪文の男”  
の息子と盟友の間話にも持っていきやすいですが………。

まさか………そんな………ねえ？

第四十四話 京都編？ 戦闘終了（後書き）

僕は………<sup>スーパー</sup>超ネギです。

ネギの魔力容量が更に倍率ドン！

………お前どこの蟻の王だよ？

そもそも『<sup>マジックキャンセル</sup>完全魔法無効化』があるから食らわないことも出来ましたが、このような理由でわざと食らいました。

ちなみに不老にはなってません。また長くなるので、それに関しては次回以降で詳しい説明をば。

身体の変化方法は超野菜人式でもなくゴンさん式でもなくビスケ式でもなく、幽々白書の幻海と同じ方法です。………ホントだよ。

………3回目の転生どうしましょうかね？ とりあえず完結させてから考えますか。

そしてスクナ退場のお知らせ。マジで出番ネエっす。  
これで京都編での戦闘は終了です。

小太郎をブン殴ったときは、『マイティガード 咸卦治癒』は『マホイミ 過剰回復呪文』にならないぐらいで発動中でしたので、攻撃と同時に怪我が治つていきます。痛みとかは当然ありますが。  
もうこれマジ拷問です。

でも、あくまで男同士の対等の戦いの結果なので、ネギの被害者リストには入りません。

自主規制

とか 無理 は興味がない限り調べようとしなくてください。

元ネタのセリフより酷いのです。

ヒントとしては、サンデーやってた“ワイルドライフ”でそういう描写がありました。

### 【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された+『バクティオー 仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」「という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？＋心を連れていかれた

コスモ・エンテレケイア “完全なる世界”：コスモ・エンテレケイア “よう”、よ誘拐犯”

ルビガンテ：名前忘れられた

月詠：メガネ壊された

フェイト：また秘密 化？

リヨウメンスクナノカミ：出番無し

n e w !

第四十五話 京都編？ 京都旅行終了

長瀬楓

「皆さん、休めましたか？

もう安心していただいで大丈夫ですよ。フエイト・アーウェルンクス、月詠の2人は未だ逃亡中ですが、ネギ君の話では戦える状態ではないとのことですので。

天ヶ崎千草、犬上小太郎は捕縛済み。主犯の天ヶ崎千草にはそれなりの処罰があると思いますが……………」

「死刑ね」

「死刑やね」

「死刑だ」

「お前ら、ネギ先生が治療のために天ヶ崎千草にずっと付きっ切りだからってそこまで怒るな」

「……………天ヶ崎千草は心神喪失状態なので、もしかしたら病院行きになるかもしれません。  
というかネギ君が今してくれている治療が成功しなければ、介護人すら必要な感じですよ。」

犬上小太郎の方は年齢もありますし、ネギ君からの要望もありません。彼にもあまり大きな罰はないかもしれません。

ネギ君の要望で、これからひたすら表と裏両方の勉強三昧になりそうですかね。具体的に言うと“偏差値60ぐらいまで”がネギ君の要望です。

(……………“死刑”って、木乃香を麻帆良にやったのは失敗だったか？)「

まあ、天ヶ崎千草はあそこまでしたら、もう何も出来ないでござろうな。

犬上小太郎の方もあの性格を考えたら、普通の罰より勉強漬けのほうが効果的そうぞござる。拙者でもイヤでござるよ、そんなの。フェイトはかなりの怪我、月詠も新たなメガネが出来るまではどうせ戦えないだろうから、とりあえずこの旅行での危険は去ったという事でござる。

……………ネギ坊主はそれでも油断しないのでござるうけど。



「昨日の事件……終わったのは今日に入ってからですから、今日の事件とも言うべきかもしれないですが、事件のせいで皆さんお疲れでしょう。少しは寝れましたか？」

「もうすぐ食事の準備が出来ます。中途半端な時間ですが、朝食兼昼食として召し上がってください」

「……………ネギはまだなの？」

「私達には休めって言ってそれっきりだったけど？」

「ええ。ネギ君はまだ天ヶ崎千草の治療です。それと麻帆良に送る報告書作成と自分の身体の診断もしていましたね。」

「もうすぐ終わる頃だと思いますよ」

「ネギ君と一緒にいてくれば、こんな疲れは吹き飛ばんやけどなあ」

「木乃香さん達はいいじゃないですか。本山に戻るまでとはいえ、マイティガード『咸卦治癒』で少しは治療してもらえたのですから。」

「のどかや私はネギ先生に触れてすらいないのですよ」

「そっやけどなあ……………」

「それにしてもあのネギ君は反則やわ。ネギ君が大人になったらあんなになるんやなあ。」

「一度体験してもらえればわかると思うけど、あんまりネギ君にあの姿になってももらわない方がええかもしれんわ。なあ、せつちゃん」

「？」

「……………はい。抱っこされたと思ったら、次に気づいたときは本山にいました……………」

「うう……………、お姫様抱っこしてもらった木乃香さんは羨ましいけど、確かにあのネギ先生はカツ良すぎるよね。」

お姫様抱っこされたら、私だったら気絶しちゃいそう……………」

「……………」

大丈夫でござるか、古？ 時折思い出したようにポオーとするでござるな。

まあ、気持ちはわかるでござる。まさかネギ坊主があのように成長するとは……………。

それにしてもお姫様抱っこでござるか。

拙者が小さいときは、修行で疲れ果てた拙者を親があのように抱っこして家に連れて帰ってくれた覚えはあるが、大きくなってからはスツカリないでござるな。

麻帆良に来る前には親より大きくなっていただでござるし。

あのネギ坊主なら、拙者でもお姫様抱っこ出来そうでござるなあ……………。

「……………ま、まあ、あの肉体年齢を操作出来るようになったことを詳しく調べると言っていました」

ネギ君はおそらく大丈夫だろうとは言っていました。あれはネギ君の負担が大きいかもかもしれませんので、程々にしておいた方がよろしいでしょう」

「それはそうですね。とりあえずお前らもネギ先生が来てから聞けよ。」

それと観光は結局どうする？ さすがに今日これからってのはな。んだけど、もう安全みたいだし明日から観光に行くか？」

「良いでござるな。」

せつかく京都に来たのだから、少しは観光してみたいでござるよ」

「そのときは私達の方から案内兼護衛として数人出しましょう。このままお帰りになられたら私達の立つ瀬がなくなってしまう。」

まあ、それもネギ君が来てから話し合うとよろしいでしょう。…

……………おや、丁度ネギ君も来たようですし」

お、そつでござるな。

パタパタと軽い足音が聞こえるでござる。

……………足音がやけに軽すぎでござらんか？

「あ、みなさんここにいたん」ネギが小っちゃい!?!?」……………です  
ね」

いつも小さなネギ坊主が更に小っちゃくなってるでござる!?!?

……………身長90cmぐらいでござるな。あの肉体操作は大きくなるだけでなく、小さくなることも出来るのでござるか……………。

「……………ええ、今はまりよくの回ぶくをゆう先するために、3才ぐらいのからだになってます。

とりあえずぼくにしゃべらせてください。ジリジリとよってこないでください。手をワキヤワキヤとうねらせないでください。

……………コホン。天ヶ崎千草のちりようはおわかりました。心の方もひとまずは大丈夫でしょうが、もう術者としてはふつき出来ないと思います。

まほらへのほうこくもおわかりました。なんかほうこくを受けとった学園長が血をはいちゃいましたけど、ガンドルフィーニ先生たちがかわりにちゃんと引きついでくれました。

それとぼくのからだはもんだいなさそうです。むしろもっとべん

りになりましたので安心してください。

……それではちょっとからだを元にもどしてきムグウツ!？」

あ、逃げようとしたけどアスナ殿達に捕まったでござる。  
そんな姿でここに来るから……。

「ちょ、ちょっと待って！ 抱っこさせて!!!!」

「何コレ!? ネギ君が小っちゃいやん!?  
アスナ、次はウチに貸してえな!」

「ネ、ネギ先生が3歳のときはこんなに可愛かったのですか……」

「う、うわー、ネギ先生可愛いですう!」

「待てえっ! 私にも貸すんだ!!!!」

「ムウー!!?!? ムグウー!!ツ!?!」

「あれだけ滅茶苦茶やったネギ君を揉みくちやにするなんて、木乃香といいこの子達って怖いもの知らずだなあ……………」

ネギ坊主も大変でござるなあ。

……………おや、巫女殿。何でござるか？

食事の準備が出来た？ なら腹も空いたし、食事にするでござるよ。

「で、ネギ先生。

結局どうなんだ？ 大丈夫なのか？」

食事も終わり、お菓子とお茶で一服中。

あ、この金つば美味しいでござる。

ちなみにネギ坊主は食事前に元の10歳の姿に戻っているでござる。

何かあの姿を久しぶりに見る気がするのは気のせいでしょうか？

……きつと昨日のネギさんとネギ殿のインパクトが大きすぎたせいでござるな。

「ええ、大丈夫です。本質が変わって魔族になったというわけじゃありません。僕は今までと同じ、ネギ・スプリングフィールドのままですよ。」

「どうやら『マイティガード咸卦治癒』の力を最大限使うとき、細胞が活性化して肉体が変化するみたいです。ですがあくまで『マイティガード咸卦治癒』を利用して変化しているだけであつて、元の僕自体が変わつたわけではないようですね。」

変化の具合もいろいろと内容も変えられるみたいで、それぞれ特徴があるみたいです。

最初になつたマツチヨな身体だったら、パワーは極端に強いけどスピードが極端に落ちる。

次になつた20歳ぐらいの身体だったら、成長した分元の身体よりも平均的に強くなる。

さっきの3歳ぐらいの身体だったら、パラメータはかなり弱体化するけど省エネ、といった感じですよ。」

「へえ〜。凄いアルな。」

「……もしかして本気で不老になつたアルか？」

「いえ、そういうわけではありません。

肉体を変化するのに魔力と気を消費する上、変化する具合が大きければ大きいほど消費は激しくなります。それに変化を継続させるには常に魔力と気が必要です。

今は変化継続の消費量より自然回復量の方が多いので、肉体をずっと変化させていても問題ありません。しかし、何十年後かには回復よりも消費の方が多くなるでしょう。

そうなったら『マインテイガー咸卦治癒』が切れて元の年齢に戻りますので、結局は老いて死ぬことに変わりませぬね」

「なるほど、そういうことだったのか。

……………私のように闇の眷属になつたわけではないのか。

(逆に言えば、魔力と気があれば永遠に生きていけるということが。

……………その手段さえあれば、ネギは私と一緒に永遠を……………)」

それは何よりでござる。

さすがにネギ坊主が闇の眷属になつてしまつたら夢身が悪い。…

……………いくら元からあまり違いはないように感じられるとしても。

それに闇の眷属になつて暴走したら京都が壊滅するでござるしな。少し目にただけでござるが、あのリョウメンスクナノカミよりネギ坊主の方が明らかに強いでござる。

……………本気でネギ坊主が暴走しなくてよかつたでござるな。



「ええ、まあ。……別に闇の眷属になったとしても気にしませんけどね。エヴァさんみたいになるだけみたいですし。」

「あ、でもなるとしても大人になってからの方がありがたいですね。さすがにずっと子供の姿のままというのは……。」

「むぐ……、前半の言葉は嬉しいが後半の言葉は余計だな。」

（もしかして、ネギの協力さえあれば私の身体も成長できるかも？さすがにネギが大人になったら、相手するのは大人の身体の方がいいだろうし、麻帆良に帰ったら本格的に研究してみるか。）

『闇の咸卦法』で？ ……あれは無理だな。」

「ネ、ネギ先生はそれで平気なんですか！？」

「人間じゃなくなっただとしてもいいんですか！？」

「？ どうしたんですか、刹那さん？ 急にいきなり？」

「……まあ、別に平気ですよ。僕がどう変わろうと自分のことを“ネギ・スプリングフィールド”と認識出来るのならば、僕は何があっても“ネギ・スプリングフィールド”です。」

「とはいえ、肉体が変わると精神もそれに引っ張られるように変わってしまう気がするので、大人にならないうちはあまり年齢を変えたりしない方がいいかもしれません。」

「戦闘でやむを得ず、という場合は是非ありませんが、それ以外でしたら幻術もあります。だから今度から年齢を変える必要があったら幻術を使おうと思います。」

「……………まあ、いろいろあるみたいだけど、ネギが何ともなくて良かったわ。

（記憶戻ったことどうしましょ？

言い出す機会がないわね。やっぱり麻帆良に戻ってから一応タカミチと相談して……………って記憶封印したのはタカミチなのよね。

また封印されることはないとは思うけど、不安だからまずネギに話してから、ネギと一緒にタカミチや学園長に話すことにしましょうか。

……………不安だからネギに話すだけよ、ホントよ）」

「それなら一安心です。

お預かりしたネギ君が取り返しのつかないことになったら、いったいナギやお義父さんにどうお詫びすればいいのかと……………」

「ちっ、あの姿はお預けか。

しょうがない。10年後を楽しみに待つことにしよう」

いや、その方がいいでござるよ。

普段がネギ殿バージョンだったら、絶対に教師的にマズイことになるでござる。

しかも明日菜殿と木乃香殿は同室で一緒の布団で寝るという間柄。ヘタしたら襲われるでござるな。……………ネギ坊主が。

「それで明日の観光ですか？  
いいんじゃないでしょうか。もうフェイト達の危険はなさそうです。もちろん僕も一緒に行きますし、関西呪術協会からも数人出してくれるそうですからね。それなら大丈夫でしょう。  
とはいっても、個人行動は厳禁ですよ」

「……………フム、ではそのようにしましょうか。  
となると今日は時間が空いてますね。実はネギ君を案内したいところがあるのです。近くですから夕方までには戻れますので。  
その案内したいところというのは、ナギが京都に住んでいたときの家ですよ」

「……………ナギの、だと？  
いや、私にはネギが……………しかし、でも……………」

おや？ 顔が赤いのござるな、エヴァ殿。  
やっぱりまだネギ坊主の父君のことを忘れられないのござるかな？

桜咲刹那

「いいです。」

10年の間に草木が茂ってしまいましたが、中はキレイなものですよ」

天文台、なのかな？

3階建ての細長い建物。屋根が丸くなっていて、まるで天文台のようだった

家の中に入ってみると、壁一面本棚に本がギッシリと詰まっている。

梯子があるにはあるけど、もしかしてあれで本をとるのか？  
何か少し危険そうな感じが……。

「へえ、ウチの父って本読むんですか？

アンチヨコ読んで魔法唱えていたらしいし、そもそも魔法学校中退だから勉強とか嫌いなんだと思ってましたけど？」

「…………ア、アハハ、ナギは確かに若いころはヤンチャでしたが、大人になってからは少し落ち着きましたので……………」

「考えてみれば、京都に住んでいたってことは詠春さんのお世話になっていたということですね。」

ウチの父のことですから御迷惑お掛けしたんじゃないですか？」

「だからお前はナギのことをどう思っているのかと小一時間……………」

辛辣ですね、ネギ先生。

でも逆に言えば、父親だからこそ辛辣に言えるのでしょね。

物心ついたころには既にいなかったらしいから、どんな風に接したり表現したらいいかわからないのかな？

ネギ先生は他人への悪口は言わない。

ネギ先生がそういう風に他人を辛辣に言ったり悪口を言うのは、それこそ御自分の父親ぐらいのことに關してのことしか私は聞いたことはない。

私達が勉強会でいくらバカさ加減を發揮したとしても根気強く教えてくれたし……………って、今さらながら10歳の子供に勉強を教わる私達っていったい？

……いや、まあ。

ネギ先生だからしょうがないな。ウン。

「詠春さんから話を聞いたとき、もしかしたらフェイト達はここを目的にしていたのかとも思いましたが、そういうわけじゃないようですね。」

最近誰が入った形跡はありませんし、無くなっている物もないようです。」

「ふむ、そう言われればそうですね。……あと巻き込まれてしまった皆さんにも、色々話しておいた方がいいでしょう。」

「コスモ・エンテレケイア完全なる世界」が今だ暗躍していることがわかった以上、今後のことについては麻帆良に帰ってからお義父さんと相談していただく必要があります。」

お義父さんからの話では、ネギ君はもう大部分は理解しているようですが、念のためにナギや「コスモ・エンテレケイア完全なる世界」については当時の関係者であった私からも話すべきでしょうね。」

そう言って長が取り出したのは一葉の写真が入った写真立て。それにはネギ先生の父親や若い長達、「アラルプラ紅き翼」の人達が写っていた。以前、ネギ先生が以前見せてくれた「アラルプラ紅き翼」関連の雑誌では見たことない写真だな。おそらく仲間内で撮ったプライベートの写真なんだろう。

夜に長が言っていたけど、ネギ先生の父親であるナギ殿は確かにどこか悪ガキのような雰囲気を持っている。正直言って10歳のネギ先生の方が大人っぽい。

ましてや成長したネギ先生に至っては……いや、変な想像をするな、私。

「へえ、この写真は初めて見ました」

「20年前の写真です。ナギはこのとき15歳でした」

「（懐かしいわね）。あ、ゼクトも写ってるのね。私は結局ゼクトとはほとんど喋らなかつたけど）」

「ネギ君達も知つてのとおり、私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦つた戦友でした。」

「……………そして20年前に平和が戻つた時、彼は既に数々の活躍から英雄……………“千の呪文の男”サウザンドマスターと呼ばれていたのです」

「でもそれって元々は自称だつたんですよね？」

「え？……………ええ、そうです」

「しかも“千の呪文”とか言ってる割には、10種類も魔法を覚えていなかったんですよね？」

「……………その通りですが、今はあまり関係ないのでそのことについてはまた今度に。」

「(自業自得です、ナギ。恨むなら若いころの自分を恨んでください)」

「そ、そうだったんですか？」

「てつきり“千の呪文の男”<sup>サウザンドマスター</sup>というぐらいだから、ネギ先生みたいに数々の魔法を使いこなすことが出来る人だと思っていたのに……………」

「“千の呪文”というのはあくまでも自称だったのか。」

「……………ネギ先生なら実際に千種類ぐらい使えても不思議じゃないけど。」

「オホン。」

「以来、彼と私は無二の友であったと思います。しかし……………彼は10年前、突然姿を消す……………」。

「彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし、公式の記録では1993年死亡……………」。



それ以上のことは私にも……………。  
すいません、ネギ君」

「いえ、別に気になさらなくとも。  
もし本当に生きているのなら、そのうちひょっこり会えるかもしれませんし」

「何を言ってる、ネギ？  
奴は確かに10年前に死んだはずだ？」

「あれ？ エヴァさんに言ってませんでしたっけ？  
僕の知り合いに、6年前に父と会ったという人がいるんですよ。  
僕がいつも持つてるこの杖も、そのときに父から僕宛に贈られたものらしいですし」

「そんな……………。奴が……………。  
“千の呪文の男”サウザンドマスターが生きているだど？」

「でもその知り合いって、昼間っから酒飲んで管を巻いてるようなおじいちゃんですけどね。  
父が迷惑をかけたみたいで、子供だった僕にもよく愚痴を零してましたよ」

「はあっ!?! それじゃ駄目じゃないかっ!?!」

「いやあ、僕が直接会ったわけじゃないので何とも言えません」

「……………それ、もしかして酔っ払ったおじいさんが見た幻影なんじゃ?」

「あ、でも杖っていう証拠があるからなあ。」

「それでは鍵をお渡ししておきますので、いつでも好きなときに来てください」

「ありがとうございます。とはいっても、麻帆良・京都だと気軽に来れないですけどね。」

「……………転移魔法陣を家の中に……………イヤ、駄目だな。霊脈としては良いわけじゃないから、これだと陣の維持が大変だし……………」

フム、転移魔法陣を設置してくれたら、木乃香お嬢様もこれからは気軽に里帰りすることが出来るな。

幸い今回の一件で、木乃香お嬢様が実家に里帰りするための障害は全てなくなったので、これからは気軽に里帰りを出来るようになった。

昨日の夜……というより今日の夜明け前、興奮して眠れない木乃香お嬢様と私の2人で今後のことについての話をしたが、やはり木乃香お嬢様は西洋魔術師の道を選ばれることをお決めになったようだった。

木乃香お嬢様は西洋魔術を選ぶことにお決めになったけど、それでも木乃香お嬢様と長は親子なのだし、今回の事件で東西も融和の道を徐々に歩んでいくだろうから里帰りに問題はないだろう。

木乃香お嬢様は麻帆良や友人から離れたくないと仰られているし、それに……その、ネギ先生とも離れたくないらしい。

うん。木乃香お嬢様がネギ先生のことを本気になったみたいだ。

今まではネギ先生のごとは“弟”としての想いが一番強かったらしいけど、今回の旅行で頼りになるネギ先生を見てたら、その想いが少しずつ変わっていったらしい。

極めつけは大人になったネギ先生。あのネギ先生を見てから、“男性”としてのネギ先生意識してしまったみたいだ。

……確かにアレは反則ですよ。

エヴァンジェリンさんやアスナさん、宮崎さんといったライバルがいるが、こうなったからには木乃香お嬢様も引く気はないようだ。頑張ってください、木乃香お嬢様。私もお嬢様の恋を応援いたします。

「（せつちゃん、せつちゃん。今日のお風呂、何とかしてネギ君を大浴場じゃなくて内風呂の方に連れて来れんかなあ？）」

「（え？ それはさすがに無理だと思いますが……………」

「（ええ〜、ええやん。ウチとせつちゃんとネギ君の3人で一緒にお風呂入る）」

屋敷内には前に入ったような大浴場だけでなく、協会の者が入る小さな内風呂もある。普段はともかく、さすがに客人が来られたときは大浴場で協会の者も一緒に入るわけにはいかないからだ。

確かにその内風呂だったらネギ先生とゆっくり……………じゃなくて。

……………わ、私は一緒に入らなくとも結構です！

木乃香お嬢様とネギ先生のことには応援いたしますが、私は別にネ

ギ先生のごことは……………。

「（もう、満更でもないくせに）。せつちゃんだってネギ君のこと好きなんやろ？」

ええやん、それやったらいつまでもせつちゃんとも一緒にいれるやん。ライバルが多いんやから、ウチらは2人で協力してネギ君をゲットするんや」

「（そのようなことなさらなくとも、これからはずっとお傍におります！

……………それにネギ先生だって、私の本当のことを知ったら……………」

「（そんなことない！ ネギ君はせつちゃんに翼があることなんて気にするわけあらへん！！！！）」

…………… 木乃香お嬢様、ありがとうございます。

今後についての話をしたとき、私は木乃香お嬢様に今までズルズルと言えなかったことを全てを打ち明けた。

秘密をバラすのは怖かったけど、私の白い翼を見た木乃香お嬢様は「綺麗」と言ってくれた。一族の掟なんか気にすることはないとも言ってくれた。

これからもずっと一緒にいようって、このちゃんは言ってくれた。

そうですね、ネギ先生だったら気にしないでしょね。

木乃香お嬢様を守るといふ誓いも果たせし、神鳴流に拾われた私を育ててくれた近衛家への御恩も返すことが出来た。

だからこれからは、友達としてこのちゃんと昔みたいに……。

……そもそもネギ先生の方がイロイロとぶっ飛んでるし、確かに気にするわけないだろうなあ。

まあ、それらは追々と。

「（木乃香お嬢様、皆さんにいいですか？）」

「（……ええの？ 皆のことだから大丈夫だと思うけど、せつちやんが嫌なら無理しない方が……）」

「（大丈夫。ありがとう、このちゃん）」

………すいません、皆さん。聞いていただきたくてあります。私は皆さんに秘密にしていたことがあるのです」

「刹那君？」

「大丈夫です、長。これは私の願いです。皆さんにはこのことを知って欲しい」

バサアッ！

背中に翼を出す。

今までの私……………2学期までの私だったら、こんなことはしなかつただろう。

ネギ先生のおかげかな？

あの人は良くも悪くも他人を動かしてしまふ。ネギ先生との修行と勉強で私も変わることが出来た。

昔の私なら今の私のことを“軟弱”とでも思つかもしれないが、今の私は今の私のことが好きでいられる。

「……………これが、私の正体です。」

昨夜、ネギ先生が召喚した中に烏族という妖怪がいましたが、私はその烏族と人のハーフなのです。

この白い翼は烏族の中では禁忌とされており、いろいろとありま

して私は神鳴流にお世話になることとなりました」

「寝る前にも見せてくれたけど、やっぱりキレイなハネやなあ」

「……………立派になりましたね、刹那君」

「ふうーん、カッコイイじゃん」

「天使みたいですねー」

「鳥族というとカラスですか？」

「はあー、何か刹那さんに隠し事があるとは思っていましたが、  
こういうことだったんですか。」

……………翼ですかあ。便利そうですね。……………僕でも出来るかな？」

「へえー。」

……………ま、今さらだな。吸血鬼とかロボットとかネギ先生とかが  
既にいるんだし」

「……………長谷川、何故その中にネギ先生が同列で入っているんだ？」



「千雨さん、私は正確にはガイノイドです」

「私は間違っていないと思うアルけど？」

「むしろネギ坊主の方が人間離れしてるでござるな」

「というか、今のネギの発言に誰かツツコミいれる」

ありがとう、皆さん。皆さんみたいな友人を持てて私は嬉しいです。

それと私は絶対にツツコミません！！！！

誰か！ 他の方がネギ先生にツツコミをし……………え？ 何で『<sup>イレイカード</sup>感  
卦<sup>イレイカード</sup>治療』発動させてるんですか？

何でネギ先生の背中がうねり始めて、筋肉や骨が動いている音がするんですか？

「……………いけるな。ハアツ！」

メリメリメリメリッ！

そんな音がして、ネギ先生の背中から翼が生えてきた。

私のような鳥の翼ではなく、「ウモリのような肉と皮と骨で出来たような翼だけだ。

……………本当にやっちゃった。

「わあー、意外と出来るもんですね」

「……………」

「ちょっと飛んでみます。

杖や浮遊術で空を飛んだことはありますが、翼で空を飛ぶのは初めてですよ」

……………え？ ちょ！？

初めてなのにそんな勢いよく羽ばたくと……………。

ドカーーンッッッ!!!

あ、ネギ先生が飛ぶ方向を間違って家に入った。

「……………練習が必要ですね」

「「「「……………「「「「

……………うん、無理。

「……………実は他人にこの姿を見せたら、その人の前から姿を消さなければならぬという一族の掟がアルンデスヨ」

「せつちゃん!? 何を言ってるの!?!?」

「イエイエ、ヤハリ一族ノ掟ニハ従ワナイト。  
……………じゃ、そういうわけで！」

明日に向かって飛び去らさせていただきまゲツ！？

……………こ、このちゃん！ 飛ぼうとしてたウチにいきなり飛び掛  
るなんて危ないでしょ！！！！

「ずっと一緒にいてくれるって言ったやん！  
大丈夫や。ネギ君はまだ子供だから、（別の意味で）やって良い  
事と悪い事の区別がつかんだけや！ ウチとせつちゃんの2人でち  
ゃんと教えていけばええんやよ！！！！」

「いやいやいやいや！  
無理やって！ アレはどう頑張っても絶対無理やよ、このちゃん  
！……………」

「ハツハツハ、木乃香が不穏当なことを口走った気もするが……………。  
とりあえず逃がさんぞ、刹那」

「……………木乃香さんと刹那さんはやっぱりそうなんだー。  
ねえ、夕映？ 私達も一緒に……………」

「そ、それでいいのですか、のどか!？」

「……………いつそのこと、一度皆で同盟組んだ方がいいかもしれないわねえ。」

まずは皆でネギをちゃんとした男の子に育て上げてから……………」

確かにネギ先生のことは好きやけど、いくら何でもアレは無理や  
つて!!!

ああ、もう! 何でネギ先生は人の気持ちも知らずに……………。

ぎゃいぎゃいわいわい、と辺りが騒がしくなる。  
本当に、今までだったら考えられない私がいる。

良くも悪くもネギ先生のおかげで私は変わった。  
とりあえずそのことはネギ先生に感謝しよう。

「……む、腕も増やせるかな？」

だから私は何も聞いていないっ！！！！

第四十五話 京都編？ 京都旅行終了（後書き）

……………何かユピー混じった。

でも、幻海式を突き詰めたら遣伝子操作とかもきつと出来そうですよね？

とりあえず、これにて京都旅行編は終了です。

全15話。なかなか長かったですね。ネギさんネタを思いつかなかつたら12話ぐらいになってたかもしれませんか……………。

ま、いつか。

シヨタネギは文字打つのメンドイのもう出さないと思います。大人ネギとネギさんは出番あるかも？

……………特にネギさん。

それと別にネギは『靈光 動拳』を継承しているわけではありませんよ。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた

カモ：去勢された＋『バクテイオー仮契約』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた

バカレンジャー：勉強地獄

学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血（2度目）

e w !

n

さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という絶望

愛衣：幼児退行させられた

高音：露出狂の嫌疑かけられた

刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた

タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任

刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任

明日菜：失恋

関西呪術協会：変態集団疑惑＋吹っ飛ばされた

天ヶ崎千草：勝つても負けても“死”？＋心を連れていかれた

“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”：“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”

ルビガンテ：名前忘れられた

月詠：メガネ壊された

フェイト：また秘密化？

リヨウメンスクナノカミ：出番無し

ナギの家：半壊 new !



それと前話で触れた3回目のことですが、もちろんまだ未定です。感想で次回作のリクエストしていただきありがとうございます。それらも参考に、この作品が終わってから書きたいと思います。第三章を書くか別作品にするかはわかりませんが、さすがに2作品を同時に更新なんてことは自分には無理です。

感想でおっしゃられていた方もいるのですが、さすがに再々転生はつらいです。ネギが強すぎますねw

というか、ネギまで3回目自体がつらいですw

もしこの作品のネギをもう一度使うことになったとしても、別作品に力を失わせての再々転生か、ある程度弱体化しての使用となると思います。

考えたのは、“Fate”の第4次か第5次聖杯戦争にキャスターのサーヴァントとして召喚されるけど、世界の魔術基盤が違いうためにネギまの魔法が使えないとか。

それか“ペルソナ”シリーズにペルソナとして召喚されるとかです。あとはペルソナ3でファルロスポジ、ペルソナ4でクマポジシオンでハツチャケるとかw

もしくは“にじファン”ではなく“小説家になろう”で、まったくのオリジナル作品を、とも考えています。

というのも自分の文章は、読者の皆様がある程度“元ネタや元の作品がわかっている”のを前提で書いているように感じるのです。

二次創作で言うべきことではないと思うのですがw

何というか、説明が足りないというか、地の文が足りないんですよね。ネギまやネタの作品を知っていない方ではあまり楽しめないかな、と。

それでしたらいつそのことオリジナル作品を、文章力を上げるの  
目指して書くのでもいいかな、と思いました。

ゴチャゴチャしていないスッキリしたオリジナル作品。……………難  
しそうですね。

「『オリジナル作品を作る』『そのオリジナル作品を読者にわかり  
やすく書く』」

“両方”やらなくちゃいけないってのが、“物書き”のつらいと  
ころです。

覚悟は出来てますか？ 僕はまだ出来ていません」

何にせよ、この作品が完結してからになります。

第一章が始まったのは2月の下旬。第二章が始まったのは4月の  
下旬。

第二章は半年で約原作7巻まで……………となると、完結するまでに  
は最低でもあと半年以上はかかると思っていますので、次の作品につい  
てはゆっくりと考えることにします。

時間はまだたっぷりありますので。

……………というか、完結までマジで長いですね。

ラカンとの試合まではだいたい骨組み出来上がっていますが、そ  
れ以降はまだ何とも。原作次第ではどうなるかわかりません。

とりあえずはこの作品をお楽しみにお待ちください。

突発的に思いついた次回作ネタ  
最近アニメ化された“ペルソナ4”に転生した場合

【ペルソナ4編？】

影<sup>シャドウ</sup>ネギ「ぼ、僕は君じゃない！

君みたいに悪魔じゃないし、腹黒でもないんだ！……！」

ネギ「え？ 何でシャドウが僕を否定すんの？

ここはホラ。僕が嫌がること言って、

シャドウである君を否定させるところでしょ。

何で最初からシャドウの君が否定すんのさ？」

悠「あー（ネギだしなあ……………）」

陽介「あー（ネギだしなあ……………）」

千枝「あー（ネギ君だもんねえ……………）」

雪子「あー（ネギ君だからねえ……………）」

クマ「あー（ネギさんだからクマねえ……………）」

ネギ「納得すんな」

【ペルソナ4編？】

ネギ「そんな弱いこと言う君なんて、

……………僕じゃないっ！！！」

影<sup>シャドウ</sup>ネギ「そ、そうだよね！

だったら君みたいな悪魔から逃げて、

これからは清らかに生きていくよっ！！！！」

ネギ「え？ ……………あ、コラ！ 逃げんな！

僕のペルソナアーーッ！！！！」

悠「……………どうするっ？」

陽介「どうって……………逃がしてやるっぜ」

千枝「いくら何でも可哀想よね」

雪子「ネギ君と一つになるのはねえ……………」

クマ「シャドウの方が絶対良い子クマよ」

ネギ「皆も追ってよう……！」

## 第四十六話 夢

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

夢を見ている。昔の夢だ。

そう、ナギと初めて出会った頃の夢。

風邪を引いて具合が悪いときや、何か嫌なことがあったら良く見る夢。

前に見たのはいつだったか？ ネギが来てからは見なくなっていたというのに……………。

1557

「危なかったなー、ガキ」

そう言っつて、ナギは崖からウツカリ落ちた私を助けた。

……………別に助けられなくとも平気だったんだがな。

ホントにウツカリだったんだ！ 足場が崩れたのが悪かったんだ。

空も飛べるから別に助けなくても平気だったんだぞ！

…………… オホン！ 変な男だった。ダーク・エヴァンジェル “闇の福音”と恐れられている私を助けるなんて。

最初は私がダーク・エヴァンジェル “闇の福音” だということを知らないからだと思った。私のことをガキ呼ばわりしてたし、そもそも私は人前に出るときは幻術を使用して大人の姿になっているので、世間一般には“闇の福音”が本当は子供だということは知られていないはずだったからな。

私の異名の一つに“童姿の闇の魔王”というものがあるが、それは幻術を使い始める前の私につけられた異名だ。

そして幻術を覚えてからは、人前に姿を現すときは子供の姿のままのときもあつたし大人の姿のときもあつた。おそらくこのことから私の本当の姿が世間にはわからなくなっていったのだろう。

「お前は誰だ？ なぜ助けた？」

「さあな。

まあ食べよ、うまいぜ」

実際にナギは私のような子供がダーク・エヴァンジェル “闇の福音”とは知らなかったみたいだし、そもそも私も英雄であるはずのナギのことは知らなかった。

あの頃は拠点も持たずにずっと放浪していたから、世間の事情には疎かったしな。

だけど、私の正体を明かしても、ナギは相変わらず私への態度を変えなかった。

ダーク・エヴァンジェル

“闇の福音”を知らないわけでもない。怖がっているわけでもない。かといって甘く見ているわけでもなくて、ただ“それがどうした”という感じだった。

初めてだった。

私の正体を知っても私を恐れず、私を嫌悪せず、ただの見た目通りの子供のように扱う人間は。

(古本や脳味噌筋肉は除く。アレらは人という分類ではない)  
カテゴリー

ナギに興味が沸いて、少しの間ばかりナギの後について行ったが、それでも相変わらずナギの態度は変わらなかった。

そしていつしか私はナギのことが欲しくなっていた。

「もう一ヶ月になるぜ。」

俺について来たって何もイイこたねーぞ。どっか行けって」

「やだ。」

お前がうんと言っまで、たとえ逃げても地の果てまで追ってやるぞ」



私のモノにならないかと聞いても、ただあしらわれるだけだった。やはり“闇の福音”<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>が怖いのかと思ったし、“立派な魔法使い”<sup>マキステル・マキ</sup>であるナギが私のモノになりたくないと思うのは当然のことかもしれないと思った。

しかし、私のモノにならない理由は

「ガキに興味ない」

からだった。

……………そういう理由で断るか、普通？

まあ、ナギっぽいと言ったらナギっぽいのだろうが。それにあの頃には既に相手がいたんだろうな。

結局ナギの相手は誰なんだろう？

ネギは予想がついているらしいが、あくまで予想だということでは教えてはくれなかった。

「まあ、心配すんなって。お前が卒業する頃にはまた帰ってきてやるからさ。

光に生きてみる。そしたらその時お前の呪いも解いてやる」

「……………本当だな？」

待った。3年待った。

最初はそこそこ悪くはなかった。

学校というのは新鮮だったし、追われる心配がないというのはそれだけでも安心出来た。

部活も入ったりして日本の学生生活を満喫した。麻帆良のお気楽な女子中学生どもには呆れたが、それでも最初はあの騒がしさは気に入っていた。

けどそんな風にお気楽に過ごしていたのも、初めて中学校を卒業するまでだった。

卒業するまでに来るといったはずのナギは結局来ず、しかもナギが力任せに適当にかけた『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』のせいで再び中学一年生からやり直すハメになった。

それからの一年は、約束を守らずに遅れてやってきたナギにどう落とし前をつけてやるうかと思えながら過ごした。

次の一年になると、ナギに忘れられたんじゃないかと不安に思い、ナギが来てくれるのをひたすら待った。

そしてあるとき、ナギが死んだと突然聞かされた。

最初は何の冗談だと不機嫌になりながらも、ナギの情報が少しでも手に入ったことに喜んだ。

私を麻帆良に封印してから5年もの間、一度も顔を見せずに約束まですっぱかしたんだぞ。普通、少しは気になって様子を見にくる

とかしないか？

ナギみたいなバグキャラが死ぬわけないだろうし、生きてることがわかったならいつかは私に会いに来ると信じた。

けど、その後に入ってくる情報も全てナギが死んだことばかりだった。

………つそつき。

それからただ変わらぬ退屈な日々を過ごすだけだった。

授業を受けても結局は卒業出来ないし、ナギの馬鹿げた魔力でかけられた『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』は解くことも出来ない。

このまま麻帆良で警備員として飼育殺しのような生活がずっと続くのかと思った。

でもそんなとき、ナギの息子がいることを知り、しかもその息子が麻帆良に教師としてやってくることを知った。

ナギの血縁たるネギの血があれば『インフェルナス・スコラスティクス登校地獄』も解くことが出来るかもしれない。この知らせでようやく私にも希望が持てた。

相手は魔法学校を卒業したばかりのひよっこ魔法使い。そんな奴なら簡単に血をいただくことが出来る。

しかし、私も魔力を極限まで封じられていた。

満月の夜以外はただの人間で、満月の夜ですらかつての私の一割ミリステル・マギも力を発揮できない状態だったが、私には“魔法使いの従者”であ

る茶々丸がいた。

“魔法使いの従者”とは戦いのための道具。

我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となり、攻撃を受ければ呪文は完成できない。そこを盾となり、剣となって守護するのが  
ミステル  
ミステル  
従者。

いくらナギの息子とはいえ、ひよつこな上にパートナーすらおらず、実戦経験皆無な魔法使い。

そんな坊や相手だったら、封印されている私とはいえ茶々丸さえいれば恐れるに足らん。

とはいえ、学園からの妨害があるかもしれないので、生徒から血を集めて私の力も少しは取り戻すことにした。

それでも遅くとも、3年生になった頃には行動に移せるはずだった。本当はすぐにでも襲って封印を解きたいところだが、焦って元をなくしたらどうしようもないから我慢をした。

……………今から考えると、焦らなくて本当に良かったな。

封印されている私だったら、茶々丸がいようと絶対勝てないぞ、アレ。

しかも敵には容赦をしないネギのことだ。

私は最初の出会いが悪いものではなかったから良かったが、もしウチのクラスの誰かを襲っていたところを目撃でもされたりしてい

たら……。

あ、何か涙出てきた。夢の中なのに。

というか、封印がなかったとしても勝てたかどうか……。

まあ、麻帆良に来たばかりのネギならともかく、少なくとも今のネギには勝てんな。魔力容量が真祖わたしの4倍って何なんだ？ ネギは本当に人間なのか？

しかも魔力容量以上に戦闘技術がとんでもなさすぎる。『闇の咸卦法』といい『神鳴流』といい『居合い拳』といい『闇の咸卦技法』といい、アレは本当に10歳なのか？

…… 『烈破風陣拳』 コワイ。

ファンタズマゴリア  
“幻想空間” だろうと痛いものは痛いし、何より魔法使いとしてのネギの相手は精神的に疲れるんだよ！

何が「必殺技出来ました！。ちょっと相手してください」だよ！  
！！

.....話が逸れた。

まあ、ナギの息子ということで興味もいくらかあったから、しばらくの間あの坊やを見ていた。観察してわかったが、麻帆良にやってきたネギはナギの息子とは思えなかった。もちろん良い意味で。

10歳のはずなのに教師としても出来てたし、何より10歳のはずなのにナギより大人っぽい。後からよく見てみると、根っこはやはり子供だったがな。

魔力の制御も完璧だったし、襲撃計画を変更しなければならぬかとも思った。

そんなことをツラツラと考えていたら、ネギが私の家に何故かいた。

茶々丸が世話になったらしく、そのお礼ということだったがな。

「マグダウェルさんって、“僕のお母さん”だったりしますか？」

「ブフォッ！！！」

アレは紅茶吹いた。

いきなり何を言い出すんだ、このばーやは………と焦ったが、理由を聞いてみたらありえなくはない可能性だった。

私がネギの母親、要するにナギの妻か。

確かに私が生きてて麻帆良で平穩に暮らしているとすると、そういう突拍子もない考えに至るのもしょうがないかもしれんな。

………私が子供を産む、か。

この小さな身体では無理だろうから、やはり何とかして身体を成長させねば。

ネギだって子供は将来欲しいだろうし。

でも、ネギだったら明日にでも

「いやあ、何か不老になっちゃいましたよ」

とかひょっこり言っけきそうなんだよなあ。

私も少なくとも驚きはするだろうが、受け入れもするだろう。………だってネギだし。何やっても不思議じゃないし。

それなら子供は惜しいが、未来永劫2人きりでずっと過ごしていくのも悪くない。

.....また話が逸れた。

しかし、私の内心の葛藤を他所に、その後はトントン拍子に進んだ。

ネギのおかげで『インフェルヌス・スコラスティクス登校地獄』も解けることになり、それからネギと魔法について議論したり紅茶を飲みながら談話したりなどの友人付き合いをしている。.....今はまだな。

『闇の咸卦法』に驚かされたりいろいろあつたが、ネギと付き合いつつしていくうちに、いつの間にか私はネギが欲しくなっていた。

だってそうだろう。

今まで散々ナギに待たされたんだ。しかもいつの間にか子供を作っていたオマケ付きだ。

だったらその借りはナギの息子に返してもらってもいいじゃないか。

ネギはまだまだ子供だが、将来的にはイイ男に育つだろう。

イヤ、私がイイ男に育てる。

既に戦闘能力はナギよりも上だろうし、ナギと違って紳士的だしチャランポランじゃないし頭は良いし真面目だし.....って、ナギがネギに勝ってるトコなくないか？

まあ、いくら能力が高くても、男はそれだけではないからな。



ネギもナギのように大きな男に……でもネギがナギみたいな  
い加減な男に育っても困る。

……ウン、ネギはネギらしく育ってくれればいいんだ。

とはいえ、ネギが麻帆良で過ごしていくうちに、やはりネギに目  
をつけるガキ共がワラワラと沸いてきおった。

くっ、ネギに一番最初に目をつけたのは私………じゃないか、宮  
崎のどかが一番最初なのか？ しかし、その次は私だ。

だが、あいつらはあくまで表の世界の人間であって、魔法に関係  
ないのなら無視していいだろうと思っていた。

ネギが将来どういう道に歩むはわからんが、魔法使いであること  
を止めるとは思えんかったからな。パートナーは魔法関係者を選ん  
で当然だろう。それなら焦ることはないと思っていた。

………が、そいつ等に私のせいで魔法がばれてしまい、私が面倒  
を見るハメになってしまった。私としたことが、魔法を使えるよう  
になったことに浮かれすぎていた。

面倒を見るのは嫌だったが、ネギがあいつらの面倒を見て、その  
せいで仲が深まったとしたら洒落にならん。

………まあ、綾瀬達の才能はともかく、やる気と根性はあ  
るから教えてても苦にはならないがな。

そして先日の京都旅行。

木乃香の里帰りに護衛として付き合ったが、15年振りの麻帆良の外は新鮮だった。

やはり京都は素晴らしかった。神社仏閣巡りは出来たし、料亭の味も麻帆良では味わえない美味を堪能出来た。

また是非とも行きたいものだ。今度は紅葉の時期にでも行きたいな。

だが、そんなせつかくの京都旅行を無粋にも邪魔したのは、ナギの敵でもあった魔法世界全土に指名手配されている犯罪者集団。

「コスモ・エンテレケイア よう、よ誘拐犯”だった。

ま、そんな奴らもネギに蹴散らされたがな。見てたら可哀想に思うぐらいボコボコにされていた。

いくらネギが強いことを知らなかったとはいえ、随分と無謀をなことをしたものだ。

しかし、「コスモ・エンテレケイア よ誘拐犯”も伊達で魔法世界全土に指名手配されている犯罪者集団ではなかった。

決死の最後の1撃で、ネギに重傷を負わせたのだ。

……あつという間にネギは完全回復していたけどな。というか、ネギならその気になれば最後の攻撃も回避できたんだろうなあ。

食らっても平気だから、敵に攻撃するのを優先したんだろう。

相手のフェイトとかいう奴は、もう治らない怪我で両腕とアバラを数本折られている。もうテロリストとしては再起不能だろう。

“人形っぽい”とネギが言っていたから、もしかしたら身体を取り替えるなりして再びやってくるかもしれないが。

そんなこんなで無事に襲撃を撃退したのだが、ちょっとした副作用が起きた。

『マイティガード 咸卦治癒』で『闇の咸卦法』を暴走させたためか、無事に戻ったネギは肉体年齢を自由に操れるようになったのだ。

20歳ぐらいの大人のネギ。

ナギのように悪ガキのような雰囲気はなく、まさに“大人の男”という形容がピッタリなネギ。木乃香と刹那をお姫様抱っこしていたが、私も是非とも体験したかった。

ああ、早く実年齢も大人になってほしいものだ。やはり現実時間で150日間ほど私の別荘に監きゲフゲフンツ！

3歳ぐらいの小さなネギ。

あれもたまらん。10歳のネギでさえまだ子供特有の可愛さが残っているのに、幼児のネギはまた格別だった。

是非とも一緒に風呂に入ったり、抱き枕にして眠るなどして愛でたい。クラスの雪広あやかの気持ちが良いわかる気がした。

しかし、どうやらあの肉体年齢操作は今後控えるようだった。肉体に精神も引つ張られるらしく、まだ身体も精神も発達中の今では悪影響があるかもしれないということらしいな。

それならばしょうがない。ネギが大人になるまではお預けだ。大人になるまで外見を変える必要が会った場合、幻術を使うらしい。

……よし、年齢詐称薬を大量に用意しておくか！

フッフ、何としてもネギを立派なイケ男に育て上げ、そして私を選ばせてやろう。

ネギにふさわしいのもこの私だ。

他のやつらと違って魔法の話も出来るし、不老でいつまでも生きていけるし、何より足手まといにはならん。

ネギは英雄の息子なんて生まれのせいで、将来的に苦難の道歩むことになるだろう。私ならそんなネギを助けてやる事が出来る。

まあ、私の“闇の福音”ダイク・エヴァンジェルという立場がネギの障害になることもあるかもしれないが、そんな障害などモノともしないような男に育て上げる。

ネギなら出来るはずだ。………っていつか今でも出来るだろ。

いやー、数年後が本当に楽しみだなあ。

木乃香達は同盟を結ぶなんてアホなことを言っていたが、私にはそんな必要はない。私の実力でネギを勝ち取って見せよう。

実は後でネギと模擬戦をする約束もしてあるしな。

京都旅行での怪我は完治したが、問題がないかを模擬戦で確かめたいそうだ。

麻帆良の中でネギの相手になるのは私ぐらいだろうし、これはそれこそ木乃香達には出来んことだ。

こうやってネギを私に夢中にさせていく。せめてネギの麻帆良での修行が終わる前に、私を女と意識させなければな。

……まあ、ナギが生きているかもしれないということは気にかかるとはな。

しかしナギにはもう相手がいることだし、ナギの息子ということをし差し引いてもネギのことは欲しい。

というか、むしろナギとネギの両方とも欲しい。

ナギに抱きしめられながらネギに足のマッサージしてもらおうとか、ネギに髪を洗わせながらナギに体を洗わせるとかしてみたい。

ナギとネギ両方とも私の傍に侍らしたい。

こういうのを父子どげげフンツツ………少し  
下品だったな。

だから何にせよ、ネギを手に入れることには結局変わりはないのだ。

ま、木乃香達はネギの従者になるようだが、私は遠慮しておくことにしよう。………ネギを従者にするなら良いんだけどなあ。あく

までネギが下で私が上だ！

……戦闘能力的なことはともかく、精神的にのことがな。

「エヴァさん、模擬戦お願いします」

お、ネギか。アルちゃんもネギの肩に乗せて一緒に来ている。  
はて？ しばらくの間、アルちゃんは木乃香につけておくような  
ことを言っていたような………ム、だいたい今は夢の中だろ  
うに。

まあ、いいか。

たとえ夢の中だろうと、ネギのお願いなら聞いてやるわ。

「いやあ、京都旅行での『闇の咸卦法』暴走の影響ですかね？  
僕と使い魔の契約を結んでいるせいかな、アルちゃんがちょっと変  
わった能力が使えるようになったんですよ」

ほほお、アルちゃんに新しい能力か。模擬戦に連れてくるということからは、おそらく戦闘に関する能力なんだろうな。

フム、日頃からアルちゃんは戦闘の役に立てないことを気にやんでいたから、よかったじゃないか。

面白い。是非とも私に見せてみ……… って、おい？ 何でアルちゃんの身体が変形していくんだ？

「アルちゃんは身体を武器化できるようになったんですよ。 “武態” といまして。」

その威力は使う者の能力次第………」

ゴキゴキゴキゴキ！

メキヨメキヨメキヨメキヨ！

そんな音を立てて、アルちゃんの身体が変形していく。

肉が、骨が、間接がありえない方向に曲がっていき、ついには…

…… 剣に変わったアー！っ！？

っていつか体積も増えてないかっ！？ 明らかにオカシイだろコ

レっ！！？

「そしてエエーエーエー!!」

ボンッ!!!

ネギの背丈が急に伸びて大人の……いや、巨人の背丈へと変わり、それに伴って筋肉が膨れ上がった!

凄い魔力と気だ! 10mはネギと離れているのに、威圧感だけで押しつぶされてしまいそう!

というかお願い! 思い出させないで!!!

せっかくあのマツチヨなネギのことは記憶の底に封印していたのに!!!

「僕はアルちゃんのを最大限発揮する筋力を持ちます!!

僕達主従は1人と1匹でひとつ!!」

ちょっと待ってちょっと待ってちょっと待って!

コレおかしい! どこかおかしい! 絶対おかしい!

コレどこか絶対おかしいからっ!!!



お願いだから、夢なら覚めてくれえっ！……！

龍宮マナ

「……………神楽坂明日菜。同盟の件、組んでやるうではないか。何とかしてネギをマトモな大人に育て上げていこう」

「同盟組んでくれるのはいいけど……………顔色悪いわよ、エヴァちゃん。」

何かあったの？」

「何、夢見が悪かったただけだ……………。そうだ、アルちゃん。ネギは京都での一件で肉体に変化があったが、アルちゃんには何もないよな？」

使い魔のパスが繋がっているとはいえ、あのネギに引き摺られて

何か症状が出たりとか特殊能力が発現したりとかないよな？」

「え？ そういうことは特にありませんが」

「ならいい。」

「……もし何かあったなら、すぐ私に言っただぞ」

「は、はあ………？」

「いったいどんな夢を見たんだ、エヴァンジェリンは？」

「どういう夢なのかは興味はあるが、とんでもないのを想像させられそうだから聞くのは恐ろしいな。どうせネギ先生の夢なんだろうが………」

「というか、何で私までここにいるんだよ？」

「ネギ先生攻略会議なら当事者だけでやれよ」

「その通りだな。」

「刹那が無理矢理連れてくるから何かと思えば、ネギ先生についての話し合いとは………」

「……………2人とも、大人のネギ君見て顔赤くなってたくせに何言うてんの？」

「……………」

……………いや、いつものネギ先生とのギャップが凄かったものだからな。

思わず見惚れてしまったことは否定しないが、別に私はネギ先生を男として見ているわけじゃないぞ。長谷川だってそう……………  
…か、顔を見る限り、満更でもなさそうだな。

ネギ先生はモテるなあ。

改めて言うが私は違うぞ。

「とりあえず、さすがにこれ以上増えたらマズイと思うのよ」

「ネギ先生と特別な関係になるには、まず魔法関係者である必要がありませんからね。

私達が魔法バレしない限り、おそらくもう増えるということはないでしょう」

「ということで、魔法バレしてネギ君に近づく女の子を増やしたキツカケを作った人はバツゲームだな」

「バツゲーム？」

「……………木乃香さん、もしかしてエヴァさんが以前言っていた“マジで学園長に惚れさせる”って奴ですか？」

「……………あ、悪夢が。あの日の悪夢が。」

「いくら中身はさよちゃんだったとはいえ、ネギ先生せんせいじゃなくて学園長を好きになるなんて……………」

「……………あれは勘弁して欲しいアル」

「うわぁ……………。思い出しちまうから、あのことについて話すのはやめようぜ。」

「アレのおかげで余計に魔法に関わりたくなかったんだよなぁ……………」

「ニンニン！」

「心頭滅却すれば、あのようなことでも平気に……………ならんでござるな」

「ハハハ それは大変だったな。」

「刹那が以前言ってたやつか。惚れ薬を使って魔法の怖さを体験させるという悪夢の一時。」

……私がそんなことになったら自害するな。

「……ハルナには絶対秘密にしておかないといきませんね」

「だね。秘密にするのは悪いけど、いくらなんでもあの悪夢をもつ一度体験するのはイヤだよ。  
しかも今度は実際になんでしょう」

「つまり、同盟はこれ以上の新規参入を防ぐのを第一とするのだな？  
(……もしかして、私もバツゲームアリなのか?)」

「そうよ、エヴァちゃん。

後は、お互いのことを否定しないこと、ネギが誰か1人を選んだらスッパリ諦めること、みたいなルールを決めておきましょう。

それと“誰が選ばれるにしても、その女の子が困難な状況に陥った場合には、全員がその女の子を助ける”というのも入れましょうか。

他にも抜け駆けはナシとか襲うのはナシとか襲われるのはアリとか………」

「おい、“イリアス”混じってねーか？」

ネギ先生がヘレネー？

ヘラクレスとかソツチ系だろ、常識的に考えて。

…………… 10歳の子供をヘラクレスと形容するのもオカシイな。

ネギ先生と関わるようになってから、私の常識がドンドン崩れていく気がする。

「ちなみに同盟の中での同盟もあり。ウチとせつちゃんみたいにな」

「私とユエもですー」

「わ、私は……………そのですね……………」

「個人的葛藤は後で1人でね。」

今、京都の件のことで魔法先生達が会議をしてるんだけど、ネギが言うにはおそらくネギが正式に魔法先生になって、木乃香と刹那さんがネギ担当の魔法生徒になるんだって。

私とか本屋ちゃん達、それに古菲達には、魔法生徒となってネギと一緒にいるか、コクモ「よう、エンテレケイア」コクモ「よ誘拐犯」と関わるのが嫌ならネギから離れるかを選んでもらうんだって」

「その理由は？」

「ネギ先生は木乃香お嬢様の護衛兼魔法の先生とられます。治癒魔法ならやはりネギ先生ですからね。」

京都では“コスマ・エンテレケイアよう”ゝ“誘拐犯”を退けることが出来ましたが、もしかしたら木乃香お嬢様を狙って麻帆良までやってくるかもしれない。それにネギ先生御自身が狙われる可能性が高いです。

それに警戒するために、このような処置をとることになりました」

「ネギ君、女子寮の警備を自由にしていって言われたみたいだな。」

「やっべ。僕、何だかワクワクしてきましたよ」

「って言ってたで」

おい、ソレ大丈夫か？

ネギ先生のことだから、うちの女子寮を要塞にしそうだぞ。

「そんでなあ。」

……………ウチらネギ君の“ミニストラ・マギ魔法使いの従者”にしてもらおうと思ってるんよ。もちろん一緒に告白もする」

「ウチらってことは……や、やっぱり私もですよね、木乃香お嬢様？」

「もうすぐ、京都に一緒にいったのを集めて今後のことについての話があるみたいなのよ。そのときにね。」

でも、ネギのことだからいきなり女の子達に告白された上で、その中の誰か1人を選ぶなんてことは出来ないと思うけどね」

「そりゃそうだろうな。」

ネギ先生は10歳なんだし」

「うん。だからそのときは“お友達から始めましょう”で終わらせるつもり。」

私達がネギのことが好きということを伝えたら、ネギだってこれ以上女の子に期待させるような行動は意識してしなくなるでしょ。少なくとも私達に返事をするまでは。」

後は正々堂々、皆で女の勝負」

「千雨ちゃん達はまだ参加しないみたいやけど、もし参加するならルールは守つてな。」

参加しないなら、まあ……立会人ということだ」

「へいへい、参加する気はないけど立会人なら構わないよ。いきなり何人もの女の子に告白されるネギ先生も心配だしな。」



……それにしてもネギ先生と離れるかどうか決めなきゃいけないのか。でも、ネギ先生から離れただけで安全になるのか？  
魔法を習う気にはなれないが、“コスモ・エンテレケイア よう”よ誘拐犯”とやらが気になるんだよなあ……”

面倒見のいいことで。

長谷川も変わったものだ。ネギ先生が来るまではクラスに関わらないようにしていたのにな。

私も参加するつもりなんてないよ。見ていて面白そうだから、立会人という名の傍観者ではいさせてもらうがな。

それに勉強会は続けていきたいし、学園祭のためにネギ先生の手札を少しでも見させてもらおうか。……フッフ、今度のテストでは負けんぞ、刹那。

「古菲達も、告白するのか“ミニストラ・マキ魔法使いの従者”になるか。そもそもネギ先生から離れるかを今のうちに決めておいた方がいい。

言っておくが、ネギ先生から離れるなら別荘での修行には参加出来なくなるからな。

いきなりで悪いとは思うが、“コスモ・エンテレケイア よう”よ誘拐犯”の脅威がある以上、既に遊びの範囲を超えてしまったことは覚えておいてくれ。  
こちら側に来るなら、覚悟を決めてから来てくれ」

「了解でいけるよ」

「それは問題ないアルが……………告白、“魔法使いの従者”ミニストラ・マギ。ど、どうしよう。ネギ坊主のことは嫌いじゃないアルけど」

「別に私達と一緒に告白しなくてもいいわよ。

“魔法使いの従者”ミニストラ・マギだけでもいいし、それかネギ担当の魔法生徒になるだけでもいいんだし」

「ネギ先生に特に好きな人がいない場合、ネギ先生だったら全員断るか全員受け入れるかのどっちかになりそうだな。

でもお前らが断られても納得するわけないし、だったらお前ら全員と付き合うことになりそうだ。」

……………あの年でハーレムを築くことになるのかあ」

「そ、それはあくまで千雨さんの予想なのではないですか？」

「えー、ネギ君やったらそうなりそうやけどね。

それでもええんとちゃう？ 少なくともネギ君がウチら全員を受け入れることになってもウチはそれでええで」

「ま、ネギの考え次第でしょ。

とはいえ、ハーレムとまではいかなくても、私達全員がお友達から始めることになると思うけどね」

やれやれ、ネギ先生も大変だ。

まさか10歳の身空で人生の一大事になるとはな。

ま、複数の女の子から言い寄られるなんて、男冥利に尽きるだろう。

ありがたく受け取っておくんだな、ネギ先生。

「……………それにしても、よくエヴァンジェリンが同盟に参加する気になったんだな？」

「何、お前ら人間の寿命はたかだか100年。しかし私はいつまでも不老でいられる。」

どーせネギのことだから、そのうちひょっこりと

「いやあ、何か不老になっちゃいましたよ」

なんて言ってくるに決まってるぞ。

それならばお前らの力を借りてネギをマトモな人間に育て上げ、100年後からは私がネギを独り占めさせてもらうことにするよ」「

「……………そうか」

……………どうしよう。

エヴァンジェリンの言ってることは明らかにおかしすぎるのに、少し納得してしまった私がいる。確かにネギ先生だったら、そんなこといきなり言い出しても不思議ではない気がしてしまう。

イヤ、オカシイだろ。

そういうことを言い出しそうなネギ先生もオカシイが、ソレを当然と思っているエヴァンジェリンも、あり得そうと思ってしまうた私もオカシイだろ。

ネギ先生と関わるようになってから、本気で私の常識がドンドン崩れていく気がするな。

## 第四十六話 夢（後書き）

ヘルマン卿終了のお知らせ。  
飛んで火にいる夏の悪魔です。南無。

そして乙女達の告白決定。

『バクティオー仮契約』もする予定です。

エヴァ達やちうたんはまだしません。

特にエヴァ。アーティファクトが決まるまで、エヴァは『バクティオー仮契約』  
出来ないんだ。諦めてくれ。

それと茶々丸は学園祭編が終わってからですね。今回はマスター  
であるエヴァにならったということ。

実際は“学園結界”を落とそうとしているときに、『従者召喚』  
でネギに強制召喚されたらどうしようもないからですね。  
ウチのネギなら絶対やりません。

ちなみに嘴広鴻のジャンプで好きなら大敵キャラは“大魔王バー  
ン”、“戸愚呂（弟）”、“フリーザ”です。

『烈破風陣拳』

『ウエリス・テンベスターズ・フローレンス春の嵐』 + 『斬空掌』。

『闇の咸卦技法』の一つで、敵を切り刻む竜巻が発生する。  
元ネタは幽々白書の仙水の技です。

突発的に思いついた次回作ネタ  
最近アニメ化された“ペルソナ4”に転生した場合

【ペルソナ4編？】

陽介「しっかし、俺達るときとは随分シャドウの感じが違うな」

千枝「私達るときは“私が認めたくない私”だったのにな」

雪子「人前では抑圧された感情”だったっけ？”

クマ「どんな人でも心の奥底では“嫌な自分”がいるものクマよ」

悠「……………心の奥底じゃなくて、

表層部分が“嫌な自分”だった場合、シャドウってどうなるんだ？」

全員「……………え？……………」

ネギ「ホラ。「僕は貴方です」って言えばよ。  
さっさと僕の中に戻れよ、オラッ！」

影ネギツヤ下ウ「ヒック……………ヒック……………。  
ぼ……………僕は……………貴方……………」

ネギ「あ……………聞こえんな!!！」

### 【ペルソナ4編?】

ネギ「ぶへるばっ!?!?  
……………な、何すんのさ!?!」

悠「影ネギツヤ下ウ! 大丈夫かつ!?!」

陽介「助太刀するぜっ！」

千枝「君が本当のネギ君になるべきだよ！」

雪子「さあ！ 君の手であの悪魔をやっつけるのよ！」

クマ「君はネギさんの心の奥底に残った最後の良心なんだクマ！」

影<sup>良心</sup>ネギ「……………あ、ありがとう！ 皆っ！」

ネギ「え？ ……………ちよ、何それ!？」



## 第四十七話 将来設計

高畑・T・タカミチ

「やあ、京都では大変だったね。  
皆が無事に帰ってこられて何よりだよ」

「あれ？ おじいちゃんはやっぱ無理なんですか？」

「……………うん、そうみたいだよ」

ネギ君からの報告を受け取ったら吐血して、また入院したからねえ。

おかげで出張から急遽戻った僕が学園長の代わりに、今後のことについて皆と話し合うことになったんだよ。他の先生は皆して逃げちゃったし。

それにしても、まさか“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”が京都にいたとは……………。  
しかもアスナ君の記憶も戻ったらしいし、電話で聞いたときには

ビックリしたよ。

とりあえず皆が無事で良かった。

……まあ、アスナ君の記憶はね。

フツの女の子として幸せに暮らして欲しいという気持ちもあるけど、文字通り命懸けでアスナ君を守った師匠のことだけでも思い出して欲しいという気持ちの両方が今までにずっとあった。

だから記憶が戻ったと聞いても「ああ、そうなのか」で終わらしてしまっただけだ。

むしろアスナ君から「ガトーさんの墓参りをしたい」なんて電話で言われたからには、嬉しい気持ちの方が大きいぐらいだ。

師匠の墓は魔法世界にあるからすぐにといいわけにはいかないけど、それでもそうしてくれたら師匠も浮かばれる。

もちろん記憶が戻ったことによる障害なんかがあった場合は別だけど、再び記憶を消すなんてことはもうしたくない。

師匠は「幸せになる権利がある」といって記憶を消すように言ったけど、今のアスナ君なら記憶があったとしても幸せになれるだろう。

いや、もともと記憶を消さなくても幸せになれたんだろうな。

あれは僕達のエゴだったかもしれない……。

「さて、今後のことについてなんだけど、改めて確認をさせて欲しいし、何より京都での一件で少し事情が変わってしまった。それについても皆と話し合わなきゃいけないくなってね。

貴重の春休みの一日だけど、少し話をさせてくれ」

「コスモ・エンテレケイア よう、よ誘拐犯”のことですよね？」

……そうなんだけど、長谷川君と僕との間でニュアンスがちよつと違っていかないかい？

「まあね。コスモ・エンテレケイア “完全なる世界” が生き残っていた上に何かを企んでいると判明した以上、ちよつと予定を変えなくちゃいけなくなった。

そもそもネギ君が京都でやりすぎたというかなんというか……。過去にネギ君のお父さんのナギが彼らの企みを阻止して、今回の京都ではネギ君が彼らの企みを阻止したからねえ。

さすがにここまでいくと、ネギ君が彼らに狙われる可能性が否定出来ないんだ」

「そして木乃香お嬢様です。

阻止したとはいえ、もう狙われることがないとは限りません」

「うん。もう既に聞いているとは思っけど、今のところ決まっているのは

“ネギ君を正式に魔法先生扱いにし、  
木乃香君と刹那君をネギ君担当の魔法生徒とする”

ということだね。

ネギ君は麻帆良の中でもトップクラスに強いし、狙われる可能性  
がある木乃香君と同室。しかもネギ君自身が筆頭テロ対象者だ。言  
いはアレだけど、狙われる可能性がある子は一纏めにした方が守  
りやすい。

ネギ君の魔法先生としての主な仕事は“木乃香君達を守ること”。  
そして“木乃香君達を鍛えること”。幸いネギ君の教師としての修  
行は順調だから、魔法先生としての活動が増えても問題はないだろ  
う。

まあ、今までとあまり生活に変わりはないから安心してくれてい  
いよ。基本的に今までの修行に木乃香君を混ぜてくれればいいだけ  
だから。

コスモ・エンテレケイア  
後は“完全なる世界”に警戒してくれればいい。

それと長瀬君や古菲君には悪いが、もし“コスモ・エンテレケイア完全なる世界”にこれ  
以上関わりたくないのなら、別荘での修行も遠慮してもらってネギ  
君が来る前の生活に戻って欲しいんだけど……。

その顔を見るとその気は無さそうだね。それだと君達も木乃香君  
達と同じく、ネギ君担当の魔法生徒扱いにさせてもらっけどいいか  
な？

「あい。もちろんでいいよ」

「私も同じアル。  
友達を見捨てたりはしないネ」

「わかった。そのように手続きをしておくよ。」

それとエヴァから魔法を習っている夕映君と宮崎君も、ネギ君担当の魔法生徒になるか、それとも別の魔法先生から魔法を習「ネギ先生でお願いしますっ！！！」………わかったよ。宮崎君、最近性格が変わったね。

それと木乃香君と同室のアスナ君。君はどうする？ 予想はついているけど、改めて聞いておきたいんだ」

「もう忘れるのはイヤよ。ネギや木乃香達を見捨てるのもイヤ。  
それに私も自分の身を守るようになった方が良いと思うもの」

「そもそもアスナさんはタカミチの被保護者ですからね。  
木乃香さんや僕が狙われるなら、アスナさんだって狙われてもおかしくありません」

………そうだね。記憶が戻った以上、それしかないか。

京都ではアスナ君が“黄昏の巫女”だということはバレなかつたみたいだし、ネギ君もいるから大丈夫だとは思っけど、それでもこうなったからには魔法に関わらずにすむなんてことはもう無理か。ネギ君にはアスナ君から事情を話したみたいだけど、やはりアスナ君のことはネギ君に任せるしかないか。僕は出張に行かなきゃいけないし………ネギ君、僕より強いし。

それと他の子達にはアスナ君の詳しい事情はまだ話していないみたいだけど、いつ話すかはアスナ君達に任せよう。

……………そういえばネギ君も『マシクキャンセル完全魔法無効化』能力を持つてるけど、ネギ君の場合は“黄昏の御子”とでもなるのかな？

「……………私はどうしようかな？」

あれからいろいろ考えたんだが。魔法関連に関わりたくは無いです。という気持ちはあるけど、聞いた話を総合的に考えてみると“関わりを持たなかったら平気なのか？”という疑問が残る。

テロリストが私の都合を考えてくれるわきゃやねーし、魔法世界とやら全てを敵にまわしている“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”相手なら、麻帆良に住んでるというだけでも危険性がある。

それならいつそのこと積極的に身を守る手段を手に入れた方がいい。……………その前に、ネギ先生に“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”潰してきて”とかお願いすれば、それで全て終わる気が……………」

「いや、さすがにそれは時間がかかると思いますよ。片手間で出来ることじゃありません。」

“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”は魔法世界にいるでしょうし、僕にも麻帆良での修行がありますので……………」

時間がかかっていいなら出来るってことだよ、それ？  
でもネギ君なら本当に出来そうなのが怖い。

「とりあえずネギ先生の近くが一番安全そうだよな。」

“台風の目”的な意味で考えて。

……………むしろネギ先生の側から離れて、ネギ先生が何をしてるかわからなくなる方が逆に怖い。魔法を習うかどうかとかはまた今度決めます。別に今すぐ決めなきゃ駄目ってわけでもないでしょう」

「その場合の台風は“「ユスモ・エンテレケイアよう」よ誘拐犯”じゃなくてネギということね」

「ネギ君の周りが滅茶苦茶になるのを特等席で観覧することになりそうやね」

「でも一番安全なのは確かですね。」

……………精神的にはともかく、肉体的に限ったことですが」

「否定出来なさそうなのが一番怖いな。」

ああ、私は今まで通り傭兵扱いのままでもいい。自分の身ぐらい自分で守れるさ」

ネギ君、京都で本当に何をやった？

報告書に書かれていたこと以上のことしてるだろ、絶対……………。

「ではそれでいこうか。もちろん後になってやめたいと言っても問題ないから、その場合はいつでも言ってくれ。」

ネギ君、責任は重大だよ。彼女達を身体的にだけでなく精神的にも守るようにね。京都のときみたいに“自分が怪我しても彼女達は怪我してないからいいや”みたいな考えは慎むこと」

「わかってます。僕だつてわざわざ痛い思いをしたいとは思いません。

それに京都での戦いで魔力容量が更に大きくなりましたからね。あのような無様な目には二度となりませんよ」

……………また強くなったのか。

「この子ホントにどうしよう？」



「今の僕なら、ジャック・ラカンさんにだって勝てます！」

「イヤ、京都行く前から勝てたと思うが……………」

「少なくとも僕には絶対勝てるよね」

「というか、エヴァを含めた麻帆良の全戦力相手でもネギ君なら勝ちそうなんだけど……………」。

近衛木乃香

んふふ。これでウチもせっちゃんもネギ君の魔法生徒やー！。  
皆がネギ君と修行してるのはよく見てたけど、ようやくウチも参

加出来るんやね。

しかもウチが重点的に習うのは、ネギ君お得意の治癒魔法。  
手取り足取りネギ君に魔法を教えてもらえるかも……………。

とはいえ、京都のときみたく命がかかってるんだから、そんな甘いことばかりは言ってられないわ。せめて皆の足手まといにはならないように気をつけないとアカンな。

どうせお父様や実家の関係でこの魔法に関わらずにはいられないんやから、出来ることはやった方がええよねー。

「……………というわけで、ウチらはネギ君と『バクテイオー仮契約』をしたいんですけど問題ないですよね？」

「え？ “というわけ”って、何がというわけなんですか、木乃香さん？」

え？ だって“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”に狙われている以上、出来る限りのことはした方がええやん。

それにこれからはネギ君を中心に修行とかしていくし、“お試し契約”を使った相互主従になってお互いに召喚出来るようにとかし  
といった方がいろいろ便利やし……………。

「え？ いや、確かにネギ君と『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> してくれたら、君達にも強力なアーティファクトが入るかもしれない分、君達の安全にも繋がるんだけど………いいのかい？

それに“お試し契約”？ 何だい、それは？」

「そっといえばタカミ………高畑先生は、ネギが『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> を自分と自分の間でしていたこと知らないんだっけ？」

「聞いた話によると、生徒間での『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> は問題ないようですが、教師と生徒の間の『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> はどうなんでしょう？」

「ウルスラのグッドマンさんと麻帆<sup>ウチ</sup>良中の佐倉さんだっけ？ しかも同姓間での『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> みたいだしね。

わ、私達やネギ先生<sup>せんせい</sup>みたいな異性間の教師と生徒の間の『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> はしても大丈夫なんですか？」

「確かに『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> によるアーティファクトは魅力的ですが、僕のアーティファクトで“お試し契約”を既にしてあるのでそこまですることはないのでは？」

そもそも異性間の『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> は恋人とか夫婦とかそういう関係でするのが一般的です。『仮契約』<sup>バクテイオー</sup> したら僕とそういう関係にあるということに他人から見られてしまいますけど………」

バッチこいや！

お父様からもネギ君の“魔法使いの従者”になってもいいという許可はもぎと……貰ってるし、そもそもウチらの命がかかっているやねー。

「……………ネギ君はウチらと恋人になるのは嫌なん？

ウチはネギ君のこと好きやで」

「いや、それは光栄です……………ってというか、『仮契約』するって本気でソツチの意味での『仮契約』なんですか？」

「だ、駄目かしら？

私もネギのこと好きよ。だからそういう意味で『仮契約』して欲しいんだけど……………」

「言うておくが、私はしないぞー。

するのは神楽坂、近衛、桜咲、宮崎、綾瀬の5人か？ 長瀬達は どうするんだ？」

「え？ 長谷川さんまでスルー？

てつきり長谷川さんなら、僕が複数の女性と『仮契約』するなんて反対なされると思っていたのですが……………」

「イヤ、京都旅行でハッキリとわかった。ネギ先生の相手は1人じや無理だろ。というか、もう好きにしろよ。」

それにネギ先生がはつきり断らないってことは、どうせ心情的以外ではデメリットよりメリットの方が大きいってことなんだろう？

そこら辺の判断はネギ先生はシビアだからな」

「イヤ、それは確かにそうなんですけどね。木乃香さんとアスナさんは特に。」

2人とも僕がいなくとも狙われる可能性が高いのですから、『<sup>バク</sup>契約』によるアーティファクトと、“お試し契約”を併用した相互主従は強力な力になるとは思います。

それに刹那さんは木乃香さんの護衛で、木乃香さんから離れないでしょうし……………」。

でも僕はまだ修行中の身で、そもそも10歳にもなってないんですよ。それなのに人生のパートナーにもなるかもしれない人が最低5人って……………」。

しかも木乃香さんとアスナさんはしょうがないにしても、宮崎さん達は危険に巻き込まれるかもしれないんですよ」

「修行中の身がリョウメンスクナノカミを一撃で葬るなんてしないで、常識的に考えて。」

それとアホなこと言うな。のどか達はお前といることを覚悟して一歩踏み出したんだ。踏み出した者がより多くのリスクを負うのは当然だ。」

だが、それが何だ？ 安全圏で惰眠を貪る腐った豚よりよほどマシ。掴むに値するものはリスクの先にあるさ」

「僕は安全圏で惰眠を貪るのも好きですけど……」

「ネギの場合は“周りの腐った豚を皆殺して安全圏を確保してから惰眠を貪る狼”だろうが。

しかも安全圏は移動式。さきほど千雨がお前の近くを“台風の目”と言ったが、実には確かな表現だな。安全圏で惰眠を貪る腐った豚よりよほど質が悪い」

わかるわ、その例え。

ネギ君の場合、“とりあえず”という理由で自分の敵を殲滅しそ  
うやな。自分の敵にならなそうな人は放置するんやろうけど。

「……わ、私も『バックテイオー仮契約』お願いしようアルかな、なんて……」

「まあ、ネギ坊主が主君というのも悪くないでござるな」

「7人目!？」

「……タカミチ、魔法先生として一言」

「ぼ、僕に振るのかい!？」

……うーん、僕は『仮契約』バクティオー したくないからアレだけど、とりあえず麻帆良から『仮契約』バクティオー の相手に文句を言うという事はないね。

『仮契約』バクティオー は“個人と個人による神聖な儀式”という意識が強いから、それに対して組織が口を出すなんてことは出来ないよ。あくまで個人と個人の関係だから、役職云々という問題は通常は出ない。

とはいえ、表の世界でもその感覚でいられるのは困るね。表の世界の教師と生徒という関係はもう確立しちゃっているんだから……

……まあ、その辺の心配はネギ君だからしていないけど」

節度を守れば良いってことなんかな？

もともと一気に勝負を決めようなんて思ってなかったからええけど。ネギ君はそんなことしたら反発しそうやしね。

……でも、寮の部屋の中では今までよりくっついてもええよね？

「だから、この場合ならネギ君の気持ちの方が優先だと思うよ。

彼女達はむしろ君と『仮契約』バクティオー したい気持ちの方が強いみたいだから、是非もないみたいだけだ」

「……いや、まあ。

その、自惚れというわけじゃないですが、姉弟や家族として以外の……男女の関係としても皆さんに好かれているんだろうとは思

っていましたけど」

「や、やっぱりわかってたん？」

「それはまあ……………、京都旅行ではキスマでされたんですし、アレを姉弟や家族としてのスキンシップと言うには無理があるかと。

もちろん皆さんのことは好きですけど、僕はまだ恋愛とかよくわからなくて……………。そもそも皆さんは自分以外の人とも僕が『バクテイ仮契約』オしても平気なんですか？」

……………う、やっぱり焦りすぎたんかな？

そりゃあ、確かにウチとせつちゃんだけ見てくれたらそれに越したことはないんやけど、でもこれ以上このままだとネギ君のことが好きな子がどんどん増えてきそうなんやもん。

せめてここにいる皆だけにしてほしいんや。

「むしろウチとせつちゃんはいつまでも一緒にいたいから、2人でネギ君のお嫁さんになりたいなあ、って」

「そ、そこまで深く考えなくてもよろしいのではないですか、ネギ先生？」

テイ確かに人生の一大事でしょうけど、こういつてはなんですが『バク仮



契約』してようとしなかつと別れる人達は別れてしまいます。：

……刀子さんとか。

ネギ先生が私達のことを少しでも好きでいてくれるなら、これから『仮契約』バクテイオーを通してゆっくり私達の仲を深めていけたら良いかと

……………」

「形から入っていくのも悪くないわよ。

実際、木乃香のお母さんは見合い結婚みただけど幸せだったみたいだし、そもそも私達はネギのこともう好きになつてゐるしね」

「わ、私もネギ先生せんせいのことが好きです！

もし良かったら、せめてお友達からでも始めて頂けたら……………」

「そうです。ネギ先生は確かに10歳ですが、私達だつてまだ14歳です。

ですから結論を急がなくてもいいと思つのです」

「え、えと、……………それでしたらお友達からよろしくお願いします」

うんうん。

最初はお友達からでええんよ。それから少しずつ私達のことを女の子と見てくれればええんやから……………。

ネギ・スプリングフィールド

なんかトントン拍子に『バックタイオー仮契約』しちゃった。しかも7人同時に3年になってないのに7人って、明らかに原作よりハイペースですよね。

ドサクサに紛れて告白もされちゃったし、これからどうしよう？告白されるなんて前世も含めて20年生きてて初めてです。前世では原作みたいに、のどかさんを助けるような最初のキツカケがなかったの、のどかさんとは“目で目で見詰め合う”ような感じで終わっちゃいましたし。

……………ゴメンナサイ。嘘言いました。

告白されたのは前々世も含めて初めてです。告白されたのは40年以上生きてて初めてです。

……………本当にどうしよう？

ハーレムなんて関係、うまくやっていく自信ないですよ。元々は

ただの一般人の会社員だったんですから。

“恋愛は原作が終わってから”にしようなんて思っていました。皆さんから告白されたときに頭の中が真っ白になりました。それで思わずOKしてしまいましたけど、よくよく考えてみたら危険なのでは？

フェイトにはアスナさんのことは気づかれていませんけど、多分僕はフェイトの殺すリストのトップランカーを爆走中でしょう。そんな僕の側にいると皆さんが危険な目に遭ってしまうかも……。初志貫徹して“コスモ・エンテレケイアよう”よ誘拐犯”を絶滅させてからにすればよかったです。今となってはもう後の祭りです。

あ、マズイ。ヴィルさん……ヘルマン卿が次に来る。

原作みたいにヘルマンなんぞに皆さんの裸体を晒すわけにはいきませんし、見つけ次第に速攻で始末しなきゃ。

……そりゃ、いつかはこうなるかとは思ってましたよ、原作的に考えて。

でも、いきなり告白まで来るとは考えていませんでしたよ。そもそも何で皆で一斉に『バックティオー仮契約』と告白を？

もしかして全員で結託済み？

うわぁ、今考えると“恋愛は原作が終わってから”なんて思っていたのは、もしかしたらただ恋愛に自信がなかったために後回しにしていただけかもしれません。

マジで皆さんとこれからどんな風に付き合っていけばいいかわかりません。

長瀬………違った。楓さんはいいですよ。男女の関係ではなくて、本来の意味での主従の関係が強いみたいですから。………でもたまた目に開けて僕をジツと見詰めてるのは何でだろう？

まあ、もちろん別に焦らなくてもいいとは思いますがね。

原作と同様にまだ二次性徴が来ていないですから、それこそ大人の付き合いなんでまだ無理なわけですし。

皆さんが僕のこと好いていてくれたのはわかりますよ。エヴァさんは駄目親父のことがあるから、今回は『バクティオー仮契約』しなかつたみたいです。

………あれ？  
そういえばアーニヤやネカネ姉さんに何て言おう？ 原作みたいにアーニヤに怒られるのかなあ？ 原作みたいにネカネ姉さんに………

原作ではネカネ姉さんに

「彼女達が僕の“ミニストラ・マギ魔法使いの従者”だよ」

とか紹介してなくね？

もしかして、原作ではパートナー出来たことをネカネ姉さんにはまだ言っていないのか？

アーニヤには宮崎さんと綾………じゃなかった、のどかさんと夕映さんが言ってる怒られてたけど、何だかんだで有耶無耶になってましたよね。

僕の場合は何て説明すれば怒られなくてすむんでしょう？

ネカネ姉さんはこの前来た手紙でも「修行の期間中に素敵なパートナーが見つかることを祈ってるわ」とか言ってたから、

「ネカネ姉さんに言われた通り、ちゃんと素敵なパートナーを見つけたよ。」

しかも7人も「

とか言えばなんとか……ならないですよ。絶対泣かれますよね、というか気絶されますよね。

……ヤバイ。本気でどうやって説明しよう？

それに将来どうしよう？

へたしたらまだ増えますよね。可能性としては長谷川さんと茶々丸さん、もしかしたらエヴァさんも。……え？へたしたら10人？

アーニヤは……どうなんだろう？

でも原作と違って、早乙女さんや朝倉さん、佐々木さん達は僕のミニストラ・キ“魔法使いの従者”にはならないでしょうね。

原作みたいにカモ君じゃなくてアルちゃんですし、魔法バレするキツカケ作ったら“マジで学園長に惚れさせる”ってエヴァさんが前に脅してましたから、これ以上魔法バレは増えないはずですよ。

それに僕も皆さんでもう一杯一杯ですよ。

………罰ゲームの内容聞いた皆さんは慄き、学園長は「ワシが罰ゲーム？」と拗ねてましたけど。

まあ、そんなことはどうでもよろしい。

しかし、それでも最低7人。増えたら10人以上養わなきゃ駄目なんですよね。どうやって生活費稼ごう？

『マイティガード咸卦治癒』使つて医者に？ …… イヤ、『マイティガード咸卦治癒』は対象と接触しなきゃいけないから、皆さんに対する不義理に……。男相手に接触するのもやだし。

拳闘士にでもなるか？ …… イヤ、実力的に大丈夫かもしれないけども、それだと魔法世界に移住しなくちゃならない。何とかして地球でも出来る職業に……。

となると、『マイティガード咸卦治癒』を『闇の咸卦技法』に発展させるか？  
そうすれば接触しなくても対象を治療出来ますからね。

攻撃と違つて回復は出力調整難しいんですけどね。『マイティガード咸卦治癒』で他の人を治すのは、あくまで僕の身体を治す効果を副次的に利用しているだけですから。

でも、それしかないか……。

原作のネギはそこら辺のこと、どう考えていたんだろう？ ……  
…つて、考えてないですよ、10歳ですもんね。

マズイ、本気でどうしたらいいんだろう？ 原作でのどかさんに告られたネギが知恵熱出してぶっ倒れたり、いろいろと悩んだりしていました、当事者になると本気でどうしていいかわかりません。

……それとも誰か一人に選ぶ？

いや、ヘタレな自分では女性を振るなんてこと自体出来そうになりです。女性に泣かれるのは困る。どうしていいかわからなくなる。本気で困る。焦って頭の中が真っ白になる。

アスナさんがタカミチ相手に失恋したときもそうでした。夜、ベッドの中で僕を抱きしめてずっと泣いていたのに、僕は優しくあやすように背中を叩くしか出来ませんでした。

女性を姉や女子生徒として扱うやり方はわかるけど、男女間としての付き合い方なんかわかんないです。覚えてないです

こちらら20年間ずっと彼女無しだったんですよ。

こうなったからには、本気でさっさとコスモ・エンテレケイア“よう”コスモ・エンテレケイア“よ誘拐犯”潰しますか。原作みたいに皆さんを危険な目に遭わせるわけにはいきません。

ある程度は原作沿いに進めるとはいえ、原作知識が役に立たなくなるどころまでいったら、速攻で潰して後顧の憂いを立ちましよう。

とりあえずはヘルマン卿迎撃の準備を今のうちにおきましよう。コスモ・エンテレケイア“よう”コスモ・エンテレケイア“よ誘拐犯”対策の名目で、女子寮要塞化の許可は貰いましたからね。

ヴィルさんには大変お世話になりましたが、気絶したアスナさんを下着姿に着替えさせるようなエロ悪魔は許して置けません。

もしもそんなことしゃがりくさったら、ヴィルさんと同じように無間地獄に落ちてもらいましよう。となるとヘルマン召喚の方法を考えておかないといけませんね。

……って、随分と物騒な考えしてますね、自分。  
落ち着け、落ち着くんのだ。気による身体制御で心を落ち着けるんだ。

……って、そもそもヘルマン卿自体ちゃんと来るのかな？  
村の壊滅なんか起こってないし……ま、いつか。準備しておいて、来なかったら来なかったで別にいいし、来たら来たで殺ればいいか。

……フウ。

まあ、気長にやっていくしかないんですねえ？

あ、そうそう。皆さんのアーティファクトは原作通りでした。  
あえて言うなら、アスナさんの“エンシス・エクソルキザンス破魔の剣”が最初から大剣バー  
ジョンだったぐらいです。

記憶が戻ったせいなんですかね？ もう『咸卦法』も使いこなせていましたし。



## 第四十七話 将来設計（後書き）

ネギ、齢10歳にして人生の墓場へ片足を突っ込む、の巻。  
とはいえ元々タヘタレなネギですので、どうしていいかわからなく  
て混乱中です。

混乱する

気を使って沈静化

混乱に対する耐性強化

反応しないネギにいらつく乙女達

乙女達の攻勢激化

混乱する

気を使って沈静化

以下エンドレス

ネギが根本的な原因に気づくのが先か、業を煮やした乙女達に襲  
われるのが先か。ネギの方が先に無間地獄に落ちるようです。

とはいえ18禁にはしないから大丈夫ですよ。……………15禁にも  
しないですからね。

それと次の日曜日更新はちょっと無理そうです。来週の木曜日な  
らおそらく何とか更新出来ると思います。……………出来るといいな。  
もしかしたら次回は来週日曜日更新です。

今日も文化の日なのに出勤だったし、へたしたら来週の日曜まで  
休みないかも……………。

突発的に思いついた次回作ネタ

インフイニット・ストラトス  
【IS編?】

セシリア「どうも、お久しぶりですね。“IS殺し”さん？」

第「IS殺し」？ 何なんだ一夏、それは？」

一夏<sup>ネキ</sup>「いや、第2回モンド・グロツソのときに誘拐されかけたんだ  
けどね。

誘拐犯がISまで持ち出してきて困ったけど、

ISの絶対防御って“裏当て”が通るんだよね」

千冬「生身でISを返り討ちにするのはお前ぐらいだ、馬鹿者」

一夏<sup>ネギ</sup>「助かったんだからいいじゃない」

インフュニット・ストラトス

【IS編？】

第「それではあの女は何なんだ？

一夏のことを憎悪の目で見てたが？」

一夏<sup>ネギ</sup>「誘拐に使われたISはイギリスから強奪されたものだったんだよ。

イギリスに返還することになったけど、いろいろあって僕もイギリスに行つてね。

そのときに彼女に“どうやってIS殺しをしたのか？”って問い詰められてさ。

なんやかんやで彼女に対して実演することに……………」

千冬「いくらISを装着してよつとも、腹に“裏当て”をぶち込まれてはな……………」。

おかげでオルコットはめでたく“ロイン”に降格することになったよ「

篝「まあ、それならあの女の自業自と……………待て？

“IS『殺し』”とさっきから言ってるけど、本当にその通りじゃないよな？

誘拐犯って……………生きてるよな？「

一夏<sup>ネギ</sup>「……………もうすぐ授業の時間じゃないですか、織斑先生？「

千冬「……………ム、そうだな。篠ノ之、席に着け「

篝<sup>モツ</sup>「何この姉弟、怖い？「

と書いてても、“IS”はアニメをチラッと見ただけで小説は読んでません。

マジで一夏<sup>ネギ</sup>無双になりそうですし、ネギのままで理由もなく一夏以外の男なのにIS使えるってのは避けたいです……………あ、だったらISすればいいんじゃない？

それより“Fate/Zero”がマジパネエっす。特にバーサ

ーカー。あの戦闘シーンは何十回とループして見てしまいました。

第5話を見てから、マジで次回作は“Fate/Zero”にしようかと心が惹かれています。……………駄目だ。まずはこの作品を完結させなきゃいけないんだよ……………。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2195r/>

---

テンプレ通りに進めたい

2011年11月3日23時43分発行